僕の年代記

日野望美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の年代記

【Ｎコード】
Ｎ２９１８Ｓ

【作者名】
日野望美

【あらすじ】
愛しい彼女と無事婚約、めでたく企業の内定も貰った僕は、いきなり異世界に転生させられてしまった。地球側の手違い？　百年待て？　何だよ、それ！ともかくこの世界で鬱陶しいあれやこれやを解決して、もっとましな状態にしないと僕の希望は適わないらしいが……７月３０日、本編完結しました。

※ＮＴＲではないと作者は思っておりますが、微妙であるらしいの

で、御不快に思われましたらお許しください。

９月２４日、一応【更に先の話】も終わりました。

ややこしい僕の事情・1（前書き）

垂れ流し気味ですが、ともかく完了まで頑張ります。Ｒ１５は多分そのうち？　です。主人公の意向に関わらず無理やりにでもハーレム気味になるかも知れません。

ややこしい僕の事情・1

「なんだ！　これは！」

驚くなというほうが難しい。いきなり自分が赤ん坊になっていたら誰だってパニック状態になるだろう。この時の僕がまさにそうだった。

「まああ、可愛い」
「元気なお声で、本当にようございました」
「皇帝陛下もお喜びでございましょう」

明るいブラウンの髪に同じ色の瞳の女性が二人、代わる代わる僕を柔らかい布で拭き清めておむつをして、産着を着せた。それからベッドにいる女性に僕を見せる。プラチナブロンドで淡い茶色の瞳の気品のある顔立ちの女性だ。

「まあ、聖帝様と同じ黄金の髪に碧の瞳、おやまあ、泣き止みましたね、私が母ですよ。早く母上と呼んでおくれ」
「お名前は何と、おっしゃいますのか？」
「陛下がお定めになった名前がその緑の巻物に書いてあるはずです。見せておくれ」
「こちらで御座います」
「おお、男子ならグスタフと名付けよとのことですね。そなたはグスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲランと名乗るのですよ。我がテオレル帝国の皇太子として、健やかに立派に育っておくれ」

それだけ僕に言い渡すと『母上』は、満足そうな笑みを浮かべて、

安らかな寝息を立てて眠り始めた。お産で体力を消耗したようだ。
僕はすぐ隣の部屋に連れてこられた。乳母というのかそういう立場の女性が待ち構えていて、でっかい乳房を銜え込まされた。飲めるかよ！　と瞬間思ったが、完全に体は赤ん坊に変換されているらしく、ひどく乳がうまい。

「おお、産声も大きくていらっしゃるだけあって、よく飲んでくださいます」

デカパイのおばさんは自慢気だ。何と言うべきか僕はこの声があまり好きじゃないと感じていたら、突如変な言葉が無秩序に脳裏に飛び込んで来た。

（皇太子殿下の乳母になれて、本当に良かった。姫君ならどうしようかと思ったわ。この分なら殿下の御威光を借りて、ウチの亭主や息子たちの栄達も望めそうねえ）
（くっ、成り上がりの下品な家の出のくせに偶々皇后陛下のお産の時期に間に合うように、子を産んで乳母に納まるなんて、許せない。ここはうちの息子をお遊び相手にお召し頂けるように、各方面に付け届をぬかりなくしなくては）
（私の産んだ子が実は陛下の庶子で、殿下の兄にあたると早く認めていただかないと。それにしてもバカ亭主が邪魔だわ。赤ん坊の殿下より私の産んだ子の方が皇帝の位にふさわしいはずよ。だれか早く味方を見つけないと）

おいおい、陰謀渦巻く宮廷社会ってヤツの中で僕は生き続けなくちゃいけないのか？それにしても、説明がつかないのは各人の本音と思しき言葉が感じ取れたのは、なぜだ？　ひょっとして、僕ってエスパー？　どうやら僕と同じ部屋にいる三人の女たちの思念を同時に受け止めたらしい。どいつもこいつもロクな事を考えてないの

は確実なようだ。

悲しいかな赤ん坊の体力では、これ以上持たなかった。後はトロトロと心地よい眠りに入ってしまって、すっかり夢の中だ。白いもやが広がり、その中にズルッとした貫頭衣と言う感じの白い衣服を着た白髪白ひげのじいさんが、やけににこやかに話しかけてきた。

「いきなりで、驚いたかね。気の毒だが君の地球における寿命は尽きた。これは地球側の手違いだったのだが、そのおかげでこちらは理想とする魂を召喚できたよ」

「お爺さん、あなたこの世界の神様か何かですか？」

「そうだ。この世界ルンドの管理者だ」

「創造主ではないのか？」

「違う。創造主がいかなる存在か私も知らんのだよ」

「あなたは何処から来て、これからどうするんです？」

「気が付けば今の姿でここにいて、命の続く限りここでルンドの為に招くべき魂を探し求めているのみ」

「あなたは、人か？」

「人ではないだろう。餓えず乾かず眠らずと言う有様だから」

「ルンドで人が死ぬとどうなる？」

「霊格により千差万別だ。悪霊となるもの、人に生まれ変わるもの、精霊となるもの、無に帰すもの」

「僕が死んで、地球に生まれ変わる事は可能かな？」

「一般的にルンドでは事故死や突然死の場合、人間に生まれ変わるのは難しい。ああ、お前さんは特別コースだからルンドの不老不死の皇帝になって貰う」

「不老不死？　赤ん坊のまんまって事は無いよな？」

「肉体は二十代半ばの健康な状態まで成長したら、そこからは変化しない」

「なあ、僕は彼女にプロポーズして、ＯＫをもらったばかりだった

んだぞ……二度と彼女に会えないのか？」
「そうだな、ならば、その女の魂をルンドに迎え入れるとするか」
「ひょっとして、彼女の、美保の命を奪うのか？　それは嫌だ」
「それは無い。……ほおお、なかなかに優れた女子のようだ。ふむふむ。地球の祖霊たちの加護が厚く、幸せな家庭を築き、百歳の天寿を全うするな。そうなればなおのこと、美保の魂は強く優れたものとなろう。お前の皇后になって貰うのはそれからでよかろう。容姿はお前の好みに合わせてやろう。お前好みの絶世の美少女に転生するのだ」
「ええ？　それって百年待てって事か？」
「いかにも。お前は不老不死だし、皇帝になるのだし、良いではないか」
「星にも大宇宙にも寿命ってものがあるのが、僕の元居た世界では常識だぞ。不老不死って胡散臭いな……それに百年も待つのか……耐えられるだろうか？」
「不老不死は、並の人間では見当がつかんほど寿命が長いというほどの意味なのかも知らん。細かい事はわしも知らんよ。まあ、何はともあれ、いとしの美保ちゃんが転生してくるまでに、お前の治める帝国とこのルンドをより良い場所にするのだな。そうすれば美保ちゃんは、末永くお前と共にこのルンドを支えてくれよう」

　爺さんにお気楽な感じで「いとしの美保ちゃん」なんて勝手に言われると腹立たしい。しかも僕の死後、誰かと結婚して家庭を築くのだ。とても平気でいられない。確かに……美保には幸せになってほしいが……でも、悔しいし、腹立たしい。なぜ相手が僕じゃないんだ！　頑張って希望していた企業の内定だって貰ったんだ。秋には結婚の予定で、両家の親やら親戚やらの説得もほぼ済んでいた。それなのに……いや、ここは冷静になろう。もう僕には、ここで待つ以外の選択肢は用意されていない。だから聞いておくべき事が幾つかあるわけだ……

「さっき、周りの人間の思念が読めたみたいなんだが、あれは何だ？」

「地球でいうところのテレパシーだな。お前だけの特殊能力だ。ルンドの皇帝だけがお前の意識に直接語りかける力がある。だが、皇帝はお前のようにすべての人間の意識を読み取れるわけではない」

「他人の意識が大量に無差別に流れ込んできて、気が狂わないか？」

この問いは爺さんに大いに評価してもらえたようで、ブロックの仕方と、意識を読みたい人間への焦点の合わせ方を懇切丁寧に教えてくれた。

何ともまあありふれた話だが、僕は驚いたことに異世界に転生してしまったらしい。これまたありふれた剣と魔法のファンタジックな世界かと思ったのだが、いわゆる魔法が世界全体に行き渡っているという世界でもないようだ。色々奇妙な独自ルールが存在するが、それはまたおいおい説明できるだろう。

ややこしい僕の事情・2（前書き）

周りの人たちがかなりの曲者みたいです。

ややこしい僕の事情・2

転生と言うからには、元の世界ではどうだったかと言うと、これまたありふれた事に大学生だった。
井沢亮太、享年二十二歳、そう、僕は死んだのだ。

はっきり意識は無かったが、大学の正門の前で、運転手が急な発作を起こした大型トラックに潰されたのだ。即死だったらしい。
らしいと言うのは、後で探り出したがこの時は何の意識も無かったのだ。そして、次に目を覚ますと、このルンドと言う異世界の最大の国家・テオレル帝国の皇太子になっていたというわけだ。身分やら家柄やらあれこれうるさい国柄だが、生母が皇帝の正妻である皇后で、表向きは一応長男なので、生まれながらの皇太子となるのは確実らしい。どうやら庶子は国中の色々な所にいる模様で、腹違いの兄も姉も既に二けたの人数いるらしいが、後継者レースで僕は最初からぶっちぎりでトップに立っている状態なのだ。

察するに、跡目争いやら勢力争いやら女の嫉妬やら、色々ややこしい世界に放り込まれたのは確実で、爺さんの言う通りなら、僕は美保が天寿を全うしてルンドに転生してくれるまでの間に、彼女が幸せを感じるような良い場所にしなくちゃいけないのだ。それにしても……百年は長い。思わずため息が漏れた。
ともかく、体が育ち、話をして歩き回れるようにならないと。そのためには栄養を十分取り、十分眠る。赤ん坊の出来ることなど、たかが知れているのだ。

ルンドに生れ落ちて三日目、父親、もとい父上である皇帝陛下が僕の様子を見に来た。ああ、見に来たなんて言っちゃいけない。おいであそばす？　わからんが，敬語の使い分けに慣れないといけな

いのだろうな。

「おお、聖帝様と同じ黄金の髪と碧の瞳、うむ、体も健康そうだ。乳もよく飲むそうだな」

父上は御機嫌だった。

「爺さん、えっと、ルンドの管理者さん、聖帝ってどんな人？　皇帝の先祖なのかな？」

「特別サービスで質問に答えてやるが、後は自分で周りの人間の意識を読み取って、情報や知識を得る事にするのじゃな」

「えええっ、口きけないんじゃ質問できねえじゃんか」

「まあ我慢強く観察を続けるのじゃな」

「で、その聖帝って、どんな人？」

「君と同じ世界から来た転生者だよ」

「もと日本人？」

「いいや」

「寿命は？」

「百五十歳だったな。次世代を育て上げ、あちらの世界に再び転生を遂げたはずじゃ」

「はず？　頼りないなあ。転生者って、多いの？」

「君で一応二人目じゃな」

「一応って、なんだよ」

「まあ、詳細はそのうち、という事じゃ」

何か僕に明かせない不都合な事情でも有るんだろうか？　釈然としない。

「ってことは、不老不死って設定自体変じゃないか？」

「ある程度の功績をあげるなり、魂のレベルアップに成功するなりするとじゃな、向こうの世界に転生する事が可能になるんじゃ。ではな」

「おい、強制終了ってヤツかよ！」

それ以降爺さんが現れたのは、僕がこの国の実権を握った後の事だった。

目が覚めたら、また、内心よこしまな事ばっかり考えているオバサンたちにキャアキャア弄繰り回されている。そして泣くとあのデカパイの乳母の乳を飲まされる。何だか悔しいが、今は仕方がない。それにしてもこの乳母、ドロテアという名前らしいが、僕と似たり寄ったりの年頃の息子を『皇太子殿下のお遊び相手＆御学友』の一人に加えようと様々に宮廷内で夫ともども裏工作に励んでいるらしい。

（領地の上がりなんてたかが知れているから、ちょっと危ない橋を渡る必要もあるわねえ。麻薬や媚薬の類で御禁制の品物は確かに体には悪いでしょうけれど、それでも効果が絶大だから仕入れたらすぐに売れちゃうわよね。あの人も同じことを考えていたみたいねえ。フフフ）

あの人とはドロテアの亭主で平民から成り上がったネクセ伯爵ビョルンだ。

先代ネクセ伯爵の『庶子』で唯一の実子と言う事になっているが、大ウソらしい。

他のメイドや世話係の噂を総合すると、男色家で経済観念の無かった先代のネクセ伯爵に好きなだけ金と男娼を宛がい、引き換えに遺言状にビョルンが爵位と領地を相続できるように嘘の記載をさせたらしい。

『インチキ伯爵』とメイド達も呼んでいるようだから、公然の秘密ってやつなんだろう。

で、そんな奴の女房が僕の乳母？　どう言う選考基準なんだか訳がわかんない。ああ、そうか。ドロテアの思考を読んだら分かった。たんまり袖の下をしかるべき筋に掴ませた……よく有る話だな。

どうやらビョルンは後ろ暗い商いで随分と荒稼ぎしてきたらしい。確かに、そうでもしないと身分制度の厳しいこの国で成り上がる事は難しい。そうか、ビョルンの母親は木こりの娘で、旅の貴族に騙されて都までついて行き、妊娠したと分かった途端捨てられたんだな。

ドロテアはドロテアで強烈に上昇したい個人的な動機が有るようだ。ほう、いびられて？　ぶっ叩かれて？　飯抜きで？　泥棒呼ばわりされて、追い出された。ふーん。ああ、そうか。年老いた好色な王族と、金で買われたも同然の十代の幼な妻との間に生まれた娘だ。実の親父が死んだあと、親戚連中が財産を良いように毟り取って、まだ十代の母親とドロテアは邸を放り出されて以降、泥水稼業に身を沈めたようだ。

確かに悔しいだろうな。うーん……この国は酷い国だ。人権などという概念はかけらも存在しないようだ。

このインチキ伯爵夫妻は僕を更に成り上がるための、恰好の手蔓と考えている訳だ。

だが、それにしたって皇太子の乳母と言う立場と社会的な信用を最大限活用しようってか……あきれるが、その逞しさはちょっと見習った方がいいかもしれない。

ああ、だが、不法な薬物の商売か。

やっぱり、いただけない。こんなことを僕が考えているなんて、ドロテアは思ってもみないわけだ。

「まあ、御利発そうなお顔でいらっしゃいますねえ」

確かに利発だろうさ。一応大学生だったんだもんな。この業突く張りのオバサンと、どうやって過ごして行くか当分頭の痛い事だ。

ややこしい僕の事情・3（前書き）

乳母はけしからんですが、メイドは素敵な美少女です。

ややこしい僕の事情・3

ドロテアの頭の中は僕をどう利用してやろうかって事でいっぱいだ。僕に乳を含ませながら、誰に袖の下を掴ませるか、自分の邪魔になりそうな人間をどうやって宮中から追い出すか考えているのだ。生まれてすぐ僕の世話をしていた他の二人のオバサンを追い出すのにも成功した様で、僕の部屋の係は気が付くと若いメイド二人に変わっていた。

若い未婚のメイドは身分も、図々しさでもドロテアには適わない。自分が雇っている使用人でもないのに、二人のメイドを自分の小間使いか何かと勘違いしている傍若無人ぶりだ。

オバサン二人が追い落とされてから、時折亭主のビョルンが顔を出すようになった。そしてあれこれ夫婦で悪だぐみの相談をして、僕以外に人がいないとなると、怪しからん事に僕のために用意された部屋のベッドを勝手に使ってその……やるのだ。夫婦だからやるのは勝手だが、僕の部屋って言うのが腹が立つ。こっちを赤ん坊だと思って馬鹿にしている。盛り上がっていると、僕が泣いてみせても無視するし。最悪だ。

「まあ、皇太子殿下、御乳母様はどうなさったので？」

話しかけてきたのは二人のメイドのうち、年かさのユリエだ。まさか、将来僕が使う予定の部屋のベッドで、亭主と真昼間っからよろしくやっているなんて言えない。大体がまだ、初めての誕生日も迎えていないのだから、言葉の発音自体ひどく困難だ。

メイドの服は地球で言う所のビクトリア時代の黒いお仕着せと真っ白いエプロンというスタイルに似ているが、スカート丈がもう少し短い。膝と足首の中間といった感じだ。

そうそう、転生して半年以上たって分かったのだが、過去の皇帝だった転生者が英語圏の人間だったらしくて、帝国で統一的に採用されている度量衡は、長さに関しては地球のフィート・インチと同じシステムのようだ。少し発音が違って、フィートはフルトでインチはイルチと変化している。単数複数も同形だ。従って日本なら１６５センチって言いそうなユリエの身長は、こちら式の表現で５フルト５イルチとなる。

容積がガロン・クォートと同一システムなのかどうかは、僕にはまだわからない。

さて、ユリエは、宮中に上がるだけあって整った容姿だが、この国では極めて珍しい黒目黒髪だ。もう一人の僕の部屋担当のメイド・ナタリエも黒目黒髪だが、父上が「黒目黒髪の容姿端麗な少女を」と特に仰せになって、選ばれた。僕の前世が黒目黒髪だったはずだから、というのが理由らしい。

父上は僕の事を「黒目黒髪の異界の賢者が転生した」と認識している。僕の生きていた近代的な社会の構造や、一般庶民に過ぎない僕の立場などは知らないか、あるいは理解できないかのどちらかだ。この転生云々という話はトップ・シークレットというやつで、父上と僕だけの秘密なのだ。母上やドロテア、宰相にも知らされていない。女にだらしないチャラチャラした人だが、転生者に対する扱いは「皇帝と当事者のみの秘密」と言う帝国の建国以来の祖法を遵守しているのは、ちょっと偉いかもしれない。

そうは言っても、賢くて察しが良く、帝国のしきたりや祖法についてもわきまえている母上は、おおよその事情は知っているようだ。

あきれたのは乳母のドロテアだ。

「黒目黒髪なんて、蛮族の血を引いているのがあからさまな娘が皇太子殿下のお部屋付きになるなんて、どこのだれが裏工作したのかねえ」

黒目黒髪の人間は帝国の勢力が及ばない多島海の諸国に多い。帝国の、特に貴族階級の連中は習俗・言語・宗教が異なるこれらの国々を「野蛮で異端」と見ているのだ。乳母のドロテアもこの偏見を強烈に持っていて、何かと言うと「黒目黒髪の賤しい娘が」「野蛮人が」と言って、辛く当たる。だが、ユリエもナタリエも芯が強いし賢いし、頑張って持ちこたえるだろう。

浅はかなドロテアは気が付いていないが、二人は姉妹で、豪商レーゼイ家の娘たちなのだ。

レーゼイ家は幾度も帝国に対して多大な貢献を果たしてきた名門だが、あえて貴族になる事を拒んできた。当代当主のイエンス・レーゼイも爵位授与を幾度も断っている。その代り平民の代弁者として、常時単独で皇帝に面会を求める権利を持っている。レーゼイ家当主は歴代黒目黒髪だ。初代が多島海の大国・ミズホの王族で有った事を誇りにしているらしい。

「おしっこ、いきたい」

明瞭に発音出来たと思う。ドロテアには話をしたことが一度も無いから、ユリエが驚くのも無理はないか。

「まあまあ、皇太子殿下、おまるをお使いあそばしますか？」

僕はユリエに頷いた。本来排泄のしつけは乳母の仕事だが、この際、ユリエに頼むことにした。

「おまるは、あちらでございます。お連れいたしましょう」

いつも使うベビーベッドが置かれた部屋のすぐそばに、専用の部屋が有るのだ。おむつは安全ピンのようなもので留められていて、乳児の手ではうまく外せない。ドロテアに世話されるのが嫌だが、これまで我慢してきた。ユリエの方がよっぽど感じが良い。

「さあ、おむつもお外しいたしましたよ」

ユリエの優しい手でおまるに乗せてもらう。

「ありがとう」

ユリエは僕の言葉に目を丸くした。

「殿下は、本当はもう、お話になれますの？」

「うん。ちょっとだけ」

「御乳母様は御存知ないようですが」

「ドロテア、内緒。嫌い」

「さようでございますか。私の事は？」

「ユリエ、大好き」

「まあ、ありがとうございます」

これ以降、僕とユリエは秘密に会話を交わす仲になった。と言っても、おむつをされてちゃんと歩けないうちは、何ともしまらないが、数か月の我慢だと思えば希望も湧いた。

ややこしい僕の事情・3（後書き）

×皇太子さま
◎皇太子殿下、ですよね。やっぱり……

後から直しました。

ややこしい僕の事情・４（前書き）

乳母を追い出して、その後は？

ややこしい僕の事情・4

ドロテアと縁切りしたいが、いかんせん、乳児の肉体では意思疎通もままならない。それでも、母上や父上には折を見てチクッた。ドロテアが席を外すと「ドロテアさぼる、うそつき、きらい」とか「ドロテアいじわる、みんなをいじめる」とか「おっぱい、いりません」とか耳元でささやいた。あるいはドロテアに抱っこされるとドロテアが確認しにくいアングルの時は盛大に顰め面するとか、ある程度のデモンストレーションはやっておいた。

「皇太子殿下はドロテア殿がお気に召さないようだ」
「父君、母君の御膝の上ではご機嫌でいらっしゃるのにな」
「黒髪のメイド達はお気に入りのようだな。愛らしいお声でお話あそばすらしい」

上手い具合に噂になってきた。後は守り役を選んで、早くドロテアとバトンタッチさせるべく画策する。

幾人かの人間の脳裏に優れた若手の官僚として意識されている人物、イヴァル・ケニングに狙いを定めることにした。折角なら将来国政を担う有能な人物と早くなじんでおきたいし……

ドロテアは僕に嫌われているのを、ようやく自覚し始めたようで、デモンストレーションを始めてから、一か月以上たってから、あからさまな御機嫌取りを始めた。

「これは珍しい菓子でございますよ。甘くておいしゅうございましょう」だの、「綺麗な絵本でございましょう」だの、袖の下を掴ませる常習犯だけあって、僕にも色々物を差し出すのだ。だが、大半は笑っちゃうことにドロテアが毎日イビるユリエとナタリエの実家、レーゼイ家の系列店で仕入れた物だったりする。

僕が全然喜ばないとなると、今度は泣き落としに出た。鬱陶しい。うるさい。訳が分からん。普通の零歳児に泣き落としは無効だが、僕ならあるいは有効かと思ったようだ。

初めての誕生日当日、大規模な誕生会が開かれ、主だった貴族や官吏・軍人とその家族たちも招かれた。上手い具合にイヴァル・ケニングの親父さんで国璽尚書を務めるハーラル伯爵が僕の所にやってきたので、思い切りニコニコして抱っこをねだる。ハーラル伯爵は学者としても聞こえた人物で、イヴァルは次男にあたる。

「守り役にはイヴァルを、お願い」

僕の発音が一歳児にしては明瞭だし、はっきりした意思表示なので驚いたようだ。

「小官の一存では決めかねますが、何なら陛下の御裁可を仰ぎましょうか？」

非常に生真面目な調子で応じてくれている。

「お願い。父上にもお願いする」

「はっ、承りました」

周りの人間は大学者と一歳児の組み合わせを、不思議だと感じているらしい。その大学者が謹厳・荘重な調子で言葉を発し、皇帝の所に向かうので、何事かと思ったようだ。

「陛下、只今、皇太子殿下より御自身の守り役について御下問を賜りました。そして陛下の御裁可を御希望であられますのでお連れいたしました」

「おや、そうか。乳母はもう嫌なのだよな」

「はい」

「守り役になって欲しい人物がいるのかな？　ハーラル伯爵は重い職務が有る故、無理だ」

「イヴァルが、良いのです」
「おお、伯爵の二男か」

父上は膝を打った。すると周りの重臣たちも「確かに適任かも知れませんな」「温厚で忍耐強く、向いているかと」「殿下は人を見る目がお有りだ」などと言い始めた。その様子を見た父上は決心された。直ちにその場にイヴァルが呼ばれ、母上も立会いの下、「皇太子自身のたっての希望で」守り役に任命される事になった。

二男のため爵位や領地もこれと言って無いし、官吏としてもまだ若手のイヴァルはいきなりの抜擢で驚いたようだ。皇太子の守り役は将来の宰相への最短コースでも有り、普通は重臣達の査問会議の末に決定するからだ。大抵は皇太子が七歳ごろに決まるもので、歴代皇帝で最も早い場合でも四歳を過ぎてからだった。

「殿下、わたくしでは乳も差し上げられませんし、襁褓の取り換えは不手際でございますが」
「御食事を食べます。おむつは取れました」
確かにそういわれたって、イヴァルは独身だし、一歳児の面倒を見ろって言うのは戸惑うだろうな。
「そうなのだ。イヴァル、信じがたいかもしれんが、この子は前世の記憶を持つ特別な子だ。さほどお前を困らせはしないと思うぞ」
「そうなのよ、イヴァル。歩けない内からこの子はおむつが取れているの。それに勉強したいのですって」
「勉強を、おしえて、お願い」

それからは親子三人で拝み倒す形でイヴァルを説き伏せ、守り役を引き受けてもらった。
「今夜から、イヴァルと寝ます」
ちょっとばっかし気の毒かなとも思ったが、そうでも言わないとドロテアが出て行かない。「夜だけでもドロテアと一緒が良くない

？」と母上に尋ねられたが、「もう、嫌です」とはっきり拒否しておいた。その理由を尋ねられたら「ドロテアは嫌いです」とだけ答えておく。

一歳児の気まぐれで人生を台無しにされたら堪らないとイヴァルは思ったようなので、二人きりになったこの機会に思い切ってテレパシーで語りかけて納得してもらう事にした。守り役と言えば成人するまでの間、両親以上に身近な存在となる訳だし、イヴァルは有能な男なので、彼が生きている限りずっと世話になるはずだ。この際ネタばれしたって構わないだろう。

（ドロテアは職務怠慢だし、勝手に夫を僕の部屋に引き入れて怪しからん相談事を重ねていた。各方面に賄賂を配り、朋輩を陥れた。それにメイド達には尊大に振る舞うし、その権利も無いのに時には打擲するのだ。まだ独身の君に連日泊まり込みは迷惑だろうが、護衛騎士が正式に定まるまでの間、お願いできないだろうか？　宮中も近頃は規律が緩みがちで、不穏の輩が出入りするようだ。安全上、気がかりな点が多い。君の学識だけでなく、剣の腕前も期待しているのだよ。こうやって、直接思念に語りかけた人間は、君が初めてだ。僕のこの能力については周りの者に知られないようにしたい。お願いできるだろうか？）

「ははっ」

宮中の規律の緩みについては、イヴァルも感じていたらしい。賄賂の横行は苦々しく思っている様子だが、ドロテアの悪事についてはノーチェックだったみたいだ。

テレパシーで語りかけた僕の言葉は聞こえないし、見たところ、イヴァルは僕を抱っこして廊下を歩いて居るだけだから、様子を見た者がもしいたならばイヴァルの返事は相当奇妙に感じられただろう。

その晩から、僕は歴代の皇太子が使った豪華な寝室で眠ることに

なった。そして護衛騎士が決定するまでの約半年の間は、イヴァルと巨大なベッドで一緒に眠ったのだった。

更にその後はユリエと時折こっそり一緒に寝たりもしたのだが…それは僕の周囲のごく限られた人間しか知らない秘密だった。

妹のナタリエとはどういう訳か、ただの一度もそうしたチャンスが無かった。気が付くと、ナタリエはイヴァルと結婚してしまい、僕と別れる事になったのは、まったくの予想外の出来事だった。

ややこしい僕の事情・４（後書き）

御指摘頂いた点、加筆してみました。守り役は一番身近な存在である一人ですから、親より色々知っている方がまあ、普通だろうと思います。

複雑すぎる僕の家庭事情・1（前書き）

個人と公人としての立場がはっきりしない毎日は、それなりに鬱陶しい物なんじゃないかと思われます。

複雑すぎる僕の家庭事情・1

そもそもこの国の皇太子って時点で、通常の家庭生活とかプライバシーとか、ちゃんと存在するのか怪しい状況なんだが、六歳になっても僕はユリエに身の回りの世話をして貰っている。おかげでユリエはこの国の適齢期を完全に超えてしまったのが、僕としては悩みの種になっていた。

「ユリエ、ごめんね。僕のせいでお嫁に行きそびれて」
「よろしいのです。殿下はまだお小さいのですから、そのような事はお気になさらなくて」

いやいや、やっぱり、まずいだろう。僕はユリエに惚れ込んで居るけれど、十五歳の年齢差は有るし、身分制度の壁は厚い。皇后は個人の感情や事情は抜きに国家事業として決められるようなものだし、側妃は他国との同盟のための制度だからユリエを据える事は無理だ。不安定な愛人の立場には置きたくないし……

癪にはさわるが、男振りも人柄も良くて、できれば金持ちの貴族をユリエと結婚させるしかないかな……などと、近頃は考えている。ユリエが爵位持ちの貴族の夫人になったその後なら、公式愛人への道も開けるかもしれない。

「結婚したい人、いないの？」
「おりません。私、理想が高いですから。こちらで末永く働かせていただければ、それで十分幸せです」

いやあ……それで十分幸せって言いきられると、僕としては心が痛む。

何しろ妹のナタリエはイヴァルとの間に既に長男・長女を儲け、

エリート官僚の妻としてまずまずの幸せな暮らしを送っているのだから。宮廷をめぐる贈収賄には抜け目なく目配りをし、国家予算の無駄には容赦なく大なたを振るう辣腕家が、愛妻には猫なで声で「ナタリエちゃん」と呼びかけ、何でも言う事を聞いてしまう状態なのはあまり知られていないが、事実だ。

イヴァルが僕にあんまりきつい宿題や課題を与えると、僕は時々「ナタリエに、ちょっと話を聞いてもらわなくちゃ」と言ってやる。すると瞬間、イヴァルが半べそをかくのだ。面白い。見るからにイケメンの秀才面なので、時々苛めたくなる。って、僕はサドだったか？

「殿下！」

「イヴァルちゃんたら忙しいせいか、最近僕につらく当たるんだって、泣きつく事にしよう」

「ですが殿下なら、この位、お茶の子さいさい、軽くお出来になります」

文字の読み書きは二歳で完全クリア、三歳からは通常の貴族が書く程度の社交的な手紙や招待状ぐらいは楽にこなせるようになっていた。四歳からは高等文官採用試験の受験対策そこのけの高度な内容になってきた。それは、別に良いんだけどさあ……時々、非常につまらない糞暗記を要求するのだ。

「面白くも無い帝国法の大法典の書き取りなんかで、貴重な昼寝の時間を犠牲にできるか！」

「ですが、殿下、来月からは御前会議にも御出席あそばすのですから、法典の理解は必要不可欠です」

「書き取らなくても、暗記なら出来るって」

「一字一句、正しく覚えていらっしゃいませんと、執政官たちの論

議について行けないかと思いますが」
「じゃあさ、イヴァルちゃん、君が鬱陶しい会計報告その他もろもろのお仕事が済んでからで良いよ。多分明後日あたりかな？」
「はあ。そのつもりです」
「明後日に、試験してくれればいいよ。覚えていなかったら、言われた通り書き取りするから。ユリエと一緒にお茶飲んだり、昼寝しながら適当に斜め読みした方が、むしろ効率良く頭に入ると思うんだ」

（ちっ、美人なお姉さまとお昼寝？　生意気ですよ、殿下）

そうそう。本当はイヴァルは僕の守り役になってすぐ、しっとり系美人のユリエにモーションをかけたのに、何の反応もしてもらえなかったのだ。何せユリエったら僕一筋なんだもんな。そこでイヴァルは諦めたみたいで、可愛い系の妹・ナタリエに攻略対象を変更したら、あれよあれよという間に話が進んで結婚してしまう事になったのだ。そうした経緯が有るので、ユリエと一緒に風呂に入っちゃったり、添い寝してもらったりする僕が、時々妬ましくなるらしい。

そうは言っても、帝国に対する忠誠心に揺るぎは無いし、皇太子としての僕の資質を高く評価してはくれているのだが、それはそれ、これはこれ。まあ、男心も微妙に揺れるのだ。

（いかにも全部わかっている、ってお顔ですね。本当にわかっておられるから、実に始末が悪い。綺麗なお顔が悪魔に見えますよ、時折）

そうか？　そんなに苛めたつもりは無いんだがな。そうだ。こうした時は相談事を持ちかけよう。

「なあ、イヴァル、ユリエの嫁入り先、何処が良いんだろうなあ」
「姿形も見苦しくなく、頭もほどほどに良くて……何より人柄の良い男となりますと……」
「爵位持ちで、豊かで、人柄が良い男なんて、余りいないな。ま、ユリエを大切に出来るなら良いか」

（殿下は将来はユリエ殿を公式愛人になさりたいと、お考えかな？）

やっぱり、イヴァルはそう思うよな。実際そうなんだが。

公式愛人、これはこの帝国の独自の制度で、地球の絶対王政下での公妾に近いものだ。

実態は乱れまくりなんだが、建前上は一夫一婦制がこの国の婚姻制度の基本だ。

皇帝だけが例外で、正当なる後継者を得るために婚姻した相手を皇后とし、近隣諸国との同盟の証として側妃を迎える。通常は側妃は四人程度だ。側妃の産んだ皇帝の子供は絶対帝位にはつけない。母親の故国の王族となるか、帝国の貴族の一人となる。

正当な後継者を得た後は、皇帝にもそして皇后にも愛人を選ぶ自由が認められる。

その中で生活や活動にかかる費用が公費からの支出として認められるのが、公式愛人だ。公式愛人はこの国で出生した貴族階級に所属するもので、人柄・見識共に国政に参与する資格が有ると査問会で認められなければいけないのだ。相当なカリスマ性やら気品やらが無いと勤まらない。

歴代皇帝のなかで、公式愛人を持たなかった者は稀だ。逆に、歴代皇后で公式愛人を持った者はわずかに二人しかいなかった。だが、つい先日、母上は公式愛人の認定を申請したのだ。

複雑すぎる僕の家庭事情・2（前書き）

年齢その他、矛盾が有るでしょうか？　何か有りましたら、教えてやって下さい。

公式愛人が皇后にも認められているって、結構さばけてるじゃねえか！　って制度を知った時は思ったが、仮にも自分の母親である人が愛人を作るとなると、気分的にやはり引っかかる。

地球の歴史だとフランス王妃マリー・アントワネットの愛人がスウェーデン貴族のフェルゼンでは、国益上問題が多いと見なされたわけだが、一般的に女が愛人を作る事に対して、世間の目は厳しい。そのあたりはこの世界でも大差無い訳で、その意味でも、ずいぶんと思い切った決断だと思う。

誇り高い母上が御自分の言わば実質的伴侶としてふさわしいと見込んだ男なのだから、当然だが……まあ、その、愛人本人は査問会で恐らくは全会一致で認められることは確実だ。

血筋は建国以来の名門十二家の一つ、ベルワルド家の三男だからまずは文句は無いし、ワッデン戦役で目覚ましい働きをした後、高等文官登用試験に首席で合格し、三期連続執政官となって以降は現皇帝、つまり父上により史上最年少の三十歳で宰相に任じられたと言う華々しい経歴の持ち主だ。宰相は皇帝が指名し、皇帝以外何物にも罷免できない。執政官十二人で構成する御前会議を仕切り、意見が割れた時、最終決定を下すのは宰相の役目だ。人は彼を大宰相と呼び、恐れ敬う。

「公式愛人……なあ。僕はこれから大宰相をどう呼べばいいんだ？」

「別にこれまで通りでよろしいかと」

まあ、イヴァルにとっちゃ僕の戸惑いなんて、他人事だよな。実にそっけない答えだ。

大宰相・スコーネ侯爵エリク・ベルワルドは三十歳で宰相に任じられてから、今年で十二年目になる。十代のころは宮廷の様々な貴婦人たちと浮名を流したナンパ野郎だったらしいから、色事のスキルも高い訳だ。妾やらメイドやらとの間に子供が五人ほどいるが、正式な結婚をした事は無い。

「正妻を一度も迎えていないって、幾度か母上にアピールしてたよな。相当前から、計画していたみたいだ」

「両陛下と大宰相の間に幼いころからの取り決めが有った、などという噂も御座いますが」

「ふーん。すると知らなかったのは僕だけか。実に不愉快だ」

（幾ら殿下が神童でも、さすがに皇后陛下御自身のベッドサイドのお話など、お出来になりますまい。やはり、大宰相は皇后陛下にお子を産んでいただくおつもりでしょうねえ。そうなると……殿下は荒れるかな？　それはちょっと、厄介だ）

けっ。イヴァルめ、おかしな気の使い方をしやがって。

「親御様のお立場ではなさりにくいデリケートな話ですからねえ」

「ふん、まあ、いいさ。御立派な大宰相と母上に子が出来たって、法的にも何の不都合も無いんだからな。まあ、宮廷の婆さん連中がチクチクウジウジ言うだろうが、母上はお強いから、歯牙にもかけられまいよ」

「それでも、殿下のお気持ちに対しての御遠慮はお有りのようでして……このような書状を大宰相から受け取りました。殿下にお見せするようにとのことです」

大宰相が書いた正式な書状だ。べったり赤い封蝋に大宰相の封蝋指輪の印面が押されている。イヴァルも内容が何か知らないのか。

フムフム……エ？　ええ？

「どうなさいました？」

「読んでみろよ。こう来たか。嫌味だなあ。まあ、断るに断れないよな」

「書面では、大宰相の三女でいらっしゃるウルリカ嬢を殿下の側妃に差し上げたいと言う事ですね。なるほど、御生母は滅んだスコウホイ王国の王女でしたか」

　長女と次女はそれぞれ、メイドが生んだ娘で、確かもう、しかるべき貴族の夫人に納まっているはずだ。

「男を惑わす美声の持ち主だという高級娼婦のマリオンが、大宰相の妾に納まったっていう話は僕も知っていたよ。だが、そのマリオンがスコウホイ王家の生き残りだったとは、びっくりだ」

「スコウホイの民心の安定にもつながるし、大宰相は殿下をいわば紐付きにできる……そう、お考えなのでしょうかね」

「たぶん、そんなところだ」

　スコウホイ王国は六十年ほど前に帝国領に組み入れられたが、いまだ民心は安定していない。

　当時の国王は家臣たちが起こしたクーデターに恐れをなして、家財道具を持ってトンズラしただけなのだが、どういう訳か大半のスコウホイの民は「帝国が卑劣な罠で王を陥れ、拉致した」と信じている。まずまずの善政を敷き、租税の負担なども帝国領となってからの方が格段に楽なはずなのだが、誇り高いスコウホイの民はかつての王家を未だに神聖視している。

　祖国を捨てた最後のスコウホイ国王は帝国内の小さな邸で、思うさま酒と女にのめり込む気楽な暮らしを送り、亡くなったときは借財だらけになっていたようだ。クーデターを企てた家臣団は帝国がすっかり制圧した後であったし、スコウホイは男子にしか王位継承を認めない国柄だったから、愛人腹の娘しか残らなかったのは帝国

にとって幸いだった。

「ウルリカはスコウホイ公爵でもあられる殿下の御もとに有るのが、最もふさわしい娘」と大宰相の書状に有るように、形式上スコウホイは皇太子の直轄領であり、皇太子はスコウホイ公爵の爵位と称号もあわせ持つ。

「ですが、殿下、もう御一方側妃候補がおられるのです。いかがあそばしますか？」

ええ？　なんだそれ？

「皇帝陛下が御自身の公式愛人・グラーン侯爵夫人の長女セルマ嬢を『側妃扱い』で、殿下に娶わせたいとお考えのようです」

「と言う事は、よっぽど出来がいいのか？　あるいは絶世の美少女か？」

「絶世の美少女ではないにしても、醜くはないでしょう。年は殿下より五歳上です。ですが殿下が大人びておられるので、それは問題無いかと」

「五歳上って、十一歳か……女は成長が早いからなあ。僕はまだ、体のサイズが六歳児相応なんだぞ。ユリエみたいな大人ならともかく、精神年齢が低い女の子に見下ろされているのは不愉快だな」

「おやまあ、案外と下らない事を気になさるのですね、殿下も」

（十一歳の女の子を手懐ける事ぐらい、軽いと思いますがねえ。殿下もやっぱり子供なのかなあ）

チっ、イヴァルめ、人ごとだと思って勝手な事を……

「陛下はお急ぎではないようです。七歳になられるころまで、様子を御覧になるとの事ですので」

イヴァルが父上から聞いた話では、十一歳のセルマは無口で読書好きな文学少女らしい。実父、つまり侯爵夫人に納まったカレン・ゲーゼの最初の亭主はオーレ・トマソンと言い、有名な劇作家だった。侯爵夫人は大輪のバラになぞらえられる美女だが、オーレ・トマソンは醜い小男で顔には大きな傷が有った。まるで美女と野獣のような取り合わせだが、文学上の師匠でもある夫をカレンは尊敬し、病で亡くなるまで献身的に尽くしたらしい。夫を亡くしてからは貧しくひっそり暮らしていたが、狩場でけがをした微行中の父上を適切に介護した事から、運が開けたのだ。

「オーレ・トマソンとどの程度似ているのかな……」

文才豊かなのは良いとして、見た目はなるべく母親に似ていてほしい。

「何なら、御本人を垣間見なさったらいかがですか？」

何でも宮廷内の書庫に毎日通っているらしい。読書好きなのは本当なのだろう。

複雑すぎる僕の家庭事情・3（前書き）

まずはセルマを観察しに行きます。

複雑すぎる僕の家庭事情・3

皇帝とその家族の住まう宮殿は黄金宮と呼ばれ、文字通り金ぴかの無駄に豪勢な建物だ。もっとも、皇帝の権威づけとか外国使節に対するコケ脅かしとしては必要なのだろう。僕にはバロックだかゴシックだかさっぱりわからないのだが、帝政ロシアの宮殿とヴァチカン宮殿を足して二で割ったような感じかなあ。

ともかく豪勢だけど、住居としては甚だ不便だ。特に水回りが酷い。トイレはおまるのままで我慢しているが、風呂は僕が色々うるさく注文を出して、日本の風呂場に近いものを作り上げた。それまでは木の樽か大きな瓶に湯を入れてドブンとつかるだけだったのだ。

「おまるの中身を適当にぶちまけるのは、不衛生だよなあ」

街中でも、道路にぶちまける不届きものが多い。僕が即位したら、絶対やめさせたい困った習慣だ。

僕の住まいでは試みに生石灰を使って庭に掘った穴にぶちまけた排泄物を消毒させたら、うまくいき、土壌の改良剤にもなった。その糞尿処理のおかげで、黄金宮内の果樹園の収量も大幅に伸びるという嬉しいおまけも付いた。生石灰自体、ありふれた石灰石を比較的単純な構造の窯で焼けば得られるものなので、大いに有効だ。

この世界には公衆衛生って言う概念自体が存在しない。清潔な環境が疫病の蔓延を防ぐと言う事も、大半の人間が理解していない。その重要性を理解できている貴族なんて、皮肉な事に父上の公式愛人であるグラーン侯爵夫人ぐらいのものだ。

僕が実験的に導入させた生石灰の利用法に着目したグラーン侯爵夫人が、自分の領地で大々的に活用し始め、それが次第に帝国全土

に広がりつつある。彼女の影響力は強い。僕の力だけではこうも早く広がらなかっただろう。ちょっと癪に障るが事実だ。

侯爵夫人の主催するサロンは、様々なジャンルの学者や文化人が集う。そこに出入りできるものは、それだけで一流の文化人と見なされると言って過言ではない。

僕が直接侯爵夫人と会話をしたのは、ほんの二回ほどだ。

彼女が六回目の僕の誕生祝に顔を出した時、母上は良い顔をしなかったが、僕はまあ、無難に応対しておいた。その時たまたま、戦場での傷病兵の治癒率を上げるには寝床の清潔さが重要だという話をして、やけに盛り上がった。

「そうですか。きちんと洗って、日に干すか、できれば火熨斗を寝間着やシーツに当てるのですね？」

僕を真剣に見つめる侯爵夫人は、確かに美しかった。特に目が良い。父上がぞっこんなのも理解できた。母上も『黄金の百合』に例えられる美女だが、侯爵夫人は会話を生き生きと楽しむ事が出来る人で、それが多くの人を惹きつけるのだろう。母上は堂々とした貴婦人だが、肩肘を張った感じがどうしても付きまとう。

「そうです。それだけで実際悪臭やカビなども防げますが、寝ている患者の傷の治りも良くなりますし、褥瘡の発生率もうんと下がるかと思われます」

長い間、亡くなった亭主殿の介護をした実体験から、僕の言葉に合点がいったようだった。彼女は僕を肉体的には幼いが「賢者」だと評価してくれているらしい。

つい先ほど父上の居室ですれ違った時も、わざわざ向こうから足を止め、「我が娘をお気に召して頂けるかどうか、母親としましては心配です」などと話しかけてきた。僕に娘を気に入ってほしいと、本気で思っているようだ。だが、セルマという少女は母親の目から見ても、非社交的で口下手でおしゃれには関心が薄く、貴族の令嬢としては読書を好みすぎると言う事らしい。貴族社会では変人扱いされて浮いてしまうのではないかと、心配しているのだ。いや、もうすでに変人扱いらしいが。

大体がこの国では女子の識字率は男子の半分にも満たず、貴族階級でも女性は、季節のあいさつの手紙やパーティの招待状が書ける程度の学力で十分とされてしまう。いわゆる料理・裁縫・育児以外の技術とも無縁だ。四則演算ですら三桁以上はあやふやなのが普通だ。

薬学・生物学の範囲となると「魔女の知恵」とか言われてしまいそうだし、土木や工学となると関心を持つ女性自体少ない。貴族の夫人が関わってもどうにか奇異に見られずに済むのは、美術工芸のジャンルぐらいのものか……だが、侯爵夫人はあらゆる事柄を学ぶのに熱心だ。国政に参与する上でも重要だと感じているらしい。

直接接してみると分かるが、華やかな外見とは裏腹に侯爵夫人は知的好奇心が強く、元来が学究肌の人なのだ。

さて、そのセルマを密かに観察してやろうと、今日は書庫に出向いたわけだ。

イヴァルに付き添われて入った秘密の小部屋ののぞき窓から、書庫の閲覧者用のすべてのデスクが見渡せる。僕はセルマの読んでいる本が知りたくて、望遠鏡を使った。将来的には柳腰のほっそり系で、まずまずの美少女って感じの子だ。髪と目はこの国では多数派の茶褐色だ。

「何々……『恋愛論』、それから『アリサとアクセル』、『恋の病の治し方』……」

たしか『恋愛論』は異国の侯爵夫人か伯爵夫人か忘れたが、女性の立場から恋愛についてのあれこれをまとめた随筆だったと思う。『アリサとアクセル』は互いに聖職者同士の男女の往復書簡集だったか？　プラトニックラブの究極の形、みたいな内容だったかな。途中に信仰について、とか、魂について、とか結構堅苦しく論じていて、僕はさほど面白味は感じなかった。ただこの二人が実在の人物で、互いに死ぬまで手紙を交換し続けたって事実は興味深いとは思うが。『恋の病の治し方』は帝国の貴族であった男の性愛に関する実録らしいが、自分の絶倫ぶりを自慢しているような内容で、具体的には複数の女とベッドでどう楽しむかとか、どうすると性的な快感を強く得られるかとか言った話が延々と続く。十一歳の少女が読むにしては刺激的すぎるかもしれない。まあ、その三冊すべてをすでに読破した六歳児って言う時点で、僕もおかしな存在であるわけだが……

書庫の本は、稀観本・珍本といったものでない限り、爵位持ちの貴族やその家族なら借り出す事が出来る。入り口に座っている係の役人に申し出れば良いのだ。だが、セルマが実際に借りて行ったのは『ダンス入門』と『初歩の乗馬』だった。どちらも図版入りの実用書の類だ。先ほどの三冊は本棚に戻してしまった。興味はあっても借り出すのはためらわれた……そう見るべきだろうか？

僕のテレパシーの力はさほど強くはない。歳と共に増幅している実感は有るが、今の所は面と向かって至近距離で接しないと、相手の心理は読み取れない。観察しただけで、じれったく感じた所為だろう。セルマの心情なり感情なりを、もっと知りたくなった。

特に書庫を出て行く時、セルマがやけに大きなため息をついたのが、強く印象に残った。

「イヴァルはあの子をどう見る？」
「以前、メイドや庭番と話しているところを見ましたが、『姫様』と呼ばれるのを嫌がっているようでした。自分は元来平民だから……と言ってましたね。今は皆、お嬢様と呼ぶ事にしたようです。母親の立場にその……」
「釈然としないものを感じているのだな。相手は皇帝とはいえ、愛人だから……娘としては複雑か」
「はあ。仰せのとおりかと」

僕はますます、セルマという女の子に興味が湧いた。

「ぶしつけかと思いましたが、やはりこうなりました以上、自分自身で御報告申し上げるべきかと思いまして。それにこのウルリカを早くお目通りさせるべきかと」

軍人であった時代の大宰相は奇襲攻撃が得意だったとか聞くが、まったく……驚かされる。何しろ書庫から戻った途端、僕の所にやってきたのだから。どうやら黄金宮のいたる所に情報網を張り巡らせているようだ。

「その、僕の口から何と言って良いか……ハハハ」

「全く、左様でございますが、その、例の件は全会一致で認められましたので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします」

大方の予想通り、査問会は全員一致で大宰相を皇后の公式愛人に認定した。

人を恐れず何でもズバズバ言うはずの男が、妙に遠慮した照れくさそうな顔つきが何ともおかしい。最初はおかしかっただけだったが、段々腹が立ってきた。その……この男の脳裏に母上とどうやって夜を過ごそうかなどという妄想がチラつき出したからだ。チッ、母上をものにできそうなのがそんなにヤニ下がるぐらい、嬉しいか！

僕はわざとらしく咳払いをして見せた。

「あっ、これは御無礼を。これ、ウルリカ、皇太子殿下に御挨拶申し上げよ」

「はい。皇太子殿下、初めて御意を得ます。スコーネ侯爵エリク・ベルワルドが三女・ウルリカにございます。以後、何卒お見知りお

き下さいますよう、お願い申し上げます」

何というか、鈴を転がすようというのはこういう声を言うんだろうか、実に愛らしい声だ。そうか、大宰相はこの声を僕に聞かせたかったのだな。殆ど白に近いプラチナブロンドの髪に紫の瞳の愛らしい顔だちだ。何というか、好奇心いっぱいで僕の顔を見ている。ほう？　僕を気に入ってくれたようだ。それは重畳。

「ウルリカ殿はお幾つかな？　女性にお歳を伺うのは本来はマナー違反だろうが」

手紙にも肝心なその情報が抜け落ちていた。

「恐れ入ります。これは、当年とって五歳と相なります」

何でも母上も御贔屓の高名な星占い師が、僕との相性は最高だと請け合ったとか。当たるも八卦、当たらぬも八卦、僕は全く信じてないが、母上は気になさるのだ。

大人たちの思惑をよそに、どうやらウルリカ嬢はお茶を楽しみたい気分のようだ。

「昨日焼いたケーキをお出しするように」

ユリエと僕で楽しみ半分、気晴らし半分で焼いた小ぶりなケーキを出させた。

元来のこの国の菓子は、やたら甘くてしつこかったので、僕は自分で好みの物を半ば道楽で作ることも有る。上手くできるとレシピをまとめ上げ、厨房に詰めている菓子職人たちに作り方を教える。近頃は僕の作った試作品を食べ、レシピを見ただけで、おおよそ失敗なく再現できるようになった。

今日のケーキは地球で言う所のマドレーヌに近いもので、ナッツ入りとドライフルーツ入りの二種類だ。焼き型は貝殻型の他に花型の物も作らせてある。小ぶりな焼き菓子は、愛らしい女性たちの口

にふさわしいサイズだ。後は大宰相が好物のハーブとクリームチーズの小ぶりなサンドイッチが出た。ユリエが気を利かせてくれたらしい。

言わばイヴァルが司会役で、大宰相親子と四人でティータイムとなったのだが、話題は重い物だった。

「セルマ嬢はいかがでしたか？　殿下」
「父上がお勧めになるのですから、それなりの方なのでしょうね」
「御器量などは？」
「綺麗な人でしたよ」

（侯爵夫人がめったに人に会わせないから、よほど美しいか逆に醜いかと思ったのだが、どうやらそのどちらでも無さそうだ。十人並みの上といった所だろうか？　その程度ならウルリカの方を気に入って頂ける可能性は大きいかもしれないな）

何とまあ、大宰相ともあろう人が、これじゃあ妓楼の亭主かなんかみたいだ。そのウルリカちゃんは、ケーキの事で頭が一杯と言うのが何とも年相応で可愛い。

「こちらが気に入ったのだね。ほら、もう一つお食べなさい」
ナッツ入りの方を、もう一個ウルリカちゃんの皿に乗せてやる。
「ありがとう！」
「これ、ありがとうございます、であろうが」
「良いのですよ、心から言ってくれた言葉だと僕には伝わりましたから」
「とても美味しいお菓子で、驚きました」
「そう？　僕と僕に仕えてくれているメイドのユリエで工夫して作ったのだよ。よかったら、バスケットに詰めてあげよう。そうすればお家でも、食べられるね」

「はい。ありがとうございます」
「この菓子は、殿下のお手製でございましたか」
「僕がレシピを書き上げ、試作しました。内々では評判が良かったので、昨日、厨房のほうで多目に焼かせたと言う訳ですよ」
（はああ……妙な特技もお持ちなのだな。ウルリカはすっかり菓子に夢中だ）
「是非とも、そのレシピを頂けませんか？　我が邸の者たちにも作らせてみたいと思いますので」

ウルリカちゃんはきらきら眼で僕を見つめている。素直な尊敬の念が見て取れる。ははっ、可愛いな。

「殿下、とっても素敵なお菓子を頂戴したお礼に、一曲歌を歌わせてくださいい」
「ほう、それは良いな。伴奏は？」
「恐れながら私が、そこのスピネッタをお借り致します」
スピネッタというのは小型のピアノに見えなくもない鍵盤楽器だ。
「ほお、大宰相が。それはますます楽しみだ」
大宰相親子の息はぴったりだった。三曲短いわらべ歌や子守歌の類を歌ったが、ウルリカちゃんの透き通るような声と余技というにはあまりに見事なスピネッタ。いや、良い物を聞いた。

「あのう……」
本当にこの大宰相にしては珍しい。ここに来た肝心の目的の話を切り出しかねている。
「側妃の件ですか」
「はあ。さようでございます」
「そうですね……二つに一つでしょう」

（やはり、な。いや、そうおっしゃるとは思っていたが）

ここで、は？　とか聞き返さないのはさすが大宰相だ。

「双方の話を同時に受け入れるか、どちらも拒否するか。釣り合いから言っても、そうなりませんか？」

「確かにそれ以外、有り得ませんね。で、殿下御自身は今現在はどうお考えで？」

おいおい、イヴァル君、君の主は誰なのか、はきちがえていないかい？

まあ、いいさ。

すべての官僚はどうしたって、この大宰相閣下の支配下にあるのだから。僕はまだ、帝国の政治体制の中で、ただのお飾りに過ぎないのだ。

「ならば、ぜひ、我が娘も御もとにお置き下さいますようにお願い申し上げます」

「大宰相、親としてのあなたはどうなのです？　本当にそう願っておいでですか？」

「はい。英明なる殿下の御もとならば、複雑な出生の事情を抱えましたこの子も、無事に一生を送る事が出来ましょう」

いつもは鉄の意志と剛毅果断な気性に相応しい強い光を湛えているグレーの瞳が、今は珍しく潤んでいる。確かに、滅んだ王家の血筋を受けた愛らしい少女が幸せに生きて行くのは、なかなかに難しいのだろう。

「よろしいでしょう。僕なりに最善を尽くしてお引き受けすると約束しますよ」

何だか、自分で自分の首を絞めたような気がしないでもない。だが、この国の皇太子という立場にある以上、有力者と強いきずなを持つことが出来れば、やはり幸運なのだ。

「ウルリカ殿、また逢いましょうね」
「はい。お約束下さいますか？」
「ええ、今度はおひとりでも構いませんよ。でも、前もって予定を知らせてくださいね」
「はい。そういたします」
「いきなり押しかけまして、まことに、御無礼いたしました。不束者では御座いますが何卒、ウルリカをよろしくお願い申し上げます」

深々と礼をして、大宰相は娘の手を引いて去って行った。この日の大宰相は最後まで娘を思う親そのもので、僕は彼をちょっと見直したのだった。

複雑すぎる僕の家庭事情・4（後書き）

誤字脱字、設定上の矛盾、など御指摘大歓迎です～

複雑すぎる僕の家庭事情・5（前書き）

ええ、ちょっとＲ１５です。本当にちょっとですが……

「まあ、殿下、ずいぶんと凝っていらっしゃる」
「ああ。結構気が張ったからな」

僕は風呂でユリエに体を洗ってもらってから、ベッドでマッサージをしてもらっていた。それこそ、体の隅々までやってもらうのだ。帝国ではこうしたマッサージは一般的ではない。ユリエの実家レーゼイ家の出身地・ミズホでは、割合と普通なのだそうだ。ユリエは実家に伝わる秘儀を尽くして僕の疲れを癒してくれている。大人なら相当にそそられる状態なわけだ。六歳になってから僕も勃起するようになったが、さすがに吐精には至らない。初めての時、ユリエは真っ赤になったが、それ以降もちゃんと全部やってくれている。

まあ、こんな事を出来るのも、せいぜい後一年か。

概ねこの国の若い貴族や皇族は、身の回りの世話は同性の小姓なり従者なりにやらせるものだ。幼児期を脱すると乳母や、生まれた時からついてきたメイドに体を触らせる事はしない。まあ、子づくりをするために閨を共にする女に対するテンションというか、モチベーションというかが盛り下がってはまずいからだろう。

自分自身の功績で成り上がった場合は異性関係の自由度は高いが、何代も続く旧家・名家となると、当主には世継ぎの息子を得るべく最大限の努力が要求される。

皇族や大貴族にとって、正妻は愛情の対象と言うよりは、家を運営して行く上での共同経営者という意味合いが強い。確かにその両方の機能が一致した方が好ましいが、そんな実例は非常に稀だ。身分の高い家の正妻には優秀な跡継ぎを産むことのできる資質と高貴な血筋が要求される。だが、その結婚生活は優れた資質に見合わな

い、冷たい不幸なものである場合が多い。

父上が跡継ぎを得る義務を果たした途端に公式愛人のもとに走り、正妻の母上を放り出しているのも無理からぬ部分が有るが、母上にしてみれば良い面の皮と言う所なのだろう。息子の僕ばかりか宮廷内の様々な人間が、母上の「不機嫌」のとばっちりを受ける事も珍しくは無かった。だが、初恋の人である大宰相と公然と時間を共にできる仲となったのだから、これからは心身共に安定なさるだろう。

大宰相を母上の公式愛人とするにあたり、父上サイドからの強力な援護射撃が有った模様だが、それは一種の罪滅ぼしであると同時に、母上も「愛人との罪深い生活」に引きずり込む事で、自分のプライバシーを確保できるという思惑も働いているのは確かだろう。

ともかく世継ぎが出来れば、後は勝手にやるのは許容範囲なのだ。皇族の場合はメイドの産んだ子であっても貴族に列するし、皇帝や皇太子が父親ならよほどの虚弱児でもない限り爵位を賜るのが通例だ。ただ、領地領土も限りが有るのだから、考えなしに子を産ませれば国が乱れるもとにもなる。実際、過去にそう言う馬鹿な皇帝もいた。その時はまともだった皇太子を廷臣たちが担ぎ上げ、皇帝は早めに退位させられた。

愛人に城や邸を与えるほどの財力・権力を持たない貴族の場合、気に入ったメイドに体の「すべてのケア」をさせている場合も珍しくない。そこそこの身分の貴族にはメイドに産ませた子供が幾人かいるのが当たり前、と言うか普通だ。そうした子供は領地の親戚筋にでも養子に出してもらえれば良い方で、大方は限りなく使用人に近い扱いを受ける。ひどい場合は教育も受けさせなかったりするわけだ。幾度か庶子にも十分な教育は施すようにという法令は出されているが、はかばかしい効果は無い。

そうした庶子にとって、実力で評価される軍人や官僚の世界はかなり魅力的なのだろう。考えてみれば僕の知る限り、出来の良い軍人・官僚は貴族の庶子が圧倒的に多い。大宰相もそうした庶子の一人だ。何とも意外な事に、大宰相にとって自分が嫡出ではないというのは、密かなコンプレックスなのだ。だから皇族・大貴族の血を色濃く受け継ぎ両親とも六代遡っても嫡出子ばかりという母上の血筋が、彼にとっては魅力的らしい。

実に下らないと彼を嗤う事は簡単だが、彼ほどの人物でも下らぬ世俗の価値観からは自由ではいられない。そういう事だ。

さて、僕はどうするべきだろう。僕自身は身分なんて糞喰らえなのだが、この世界における僕の置かれた特殊な位置づけはおいそれとは変更できない。革命を起こすにしたって、様々な条件が必要だ。

僕は六歳で、皇太子。ユリエは二十一歳のメイド。それは不可避の大前提になっている。それでも、僕はユリエが好きだ。愛している。ああ、間違いない。前世の婚約者・美保と良く似た容姿だからと言うだけではない。このルンドという世界に生まれ落ちてから、ずっと陰ひなたなく僕のために尽くし、慈しんでくれた。或る意味、母上よりも強いきずなが存在する。

「無駄にココが固くなるけれど、何の役にも立たないし、悔しいなあ」

「まあ」

「僕の本当の願い、ユリエはわかっているよね？」

「いえ……でも、何事も殿下の仰せのままにさせていただきますが……」

「諸々の厄介ごとに片が付いたら、ユリエを僕の公式愛人にしたい」

「……まあ」

僕の気持ちを察してはいたようだが、公式愛人にしたいという希

望までは考え付かなかったらしい。

「迷惑で嫌だったら、今の事は忘れてくれて良いよ」

「そんな、そんな事はございません。でも、私は年が年ですし……」

「ユリエなら三十代でも四十代でも絶対綺麗だよ。寧ろ色っぽくなって、僕はメロメロになるかもしれない」

「でも……私は平民です」

確かに公式愛人は爵位持ちであるのが、前提条件の一つだ。現役の皇帝なら寵愛する平民女性に爵位を与えることぐらい容易いが、皇太子でしかもまだ六歳の僕に、そんな権限も権力も無い。

「じゃあさ、僕が顔も気立てもまずまずで、ユリエを大事にしてくれる爵位持ちの男を見つけたら、結婚しない？　何とか子爵夫人とか伯爵夫人とかになってくれれば、身分の問題は片付くよ。相手の男に財産が有れば、未亡人になっても気楽に出来るし……」

「でも、夫が生きている間の不倫は……」

「じゃあ、ハンサムだけど若くなくて、子供が居ない財産持ちを探そう」

「でも……それでは余りに……」

「得手勝手で、非道徳的で、許せない？」

「……本当に殿下がお望みなら、そのように致しますが」

「僕の初めてを、ユリエに貰って欲しい」

「それならば結婚などせずに、ずっとお傍におりましょう」

ユリエは無欲で、僕一筋に仕えてくれるだけに、申し訳ない気持ちになってくる。

「それは、確かにうれしい申し出だけど、ユリエの貴重な時間を更に五、六年は無駄に過ごさせてしまう事になる」

「毎日こうしてお仕えするのが、無駄などと思っておりません」
「無論、それはそうだ。でも、どうやら側妃を一度に二人迎える事になりそうだし、そうなればその妃連中の使用人やら何やら、ユリエも鬱陶しいだろう。そんなユリエを見ていなければならない僕も辛いだろうと思う。ユリエがどこかの貴族の夫人なら、もっとずっと自由がきく。正式な結婚で嫡出の子供も産んでおいた方が、長い人生を考えると安心じゃないか」

ユリエは、話している間もマッサージの手は休めない。やがてすべてが終わり、下着と寝間着を着つけてくれる。

「僕、本気だよ」
「殿下にお任せいたします」
「じゃあ、僕に任せて。本当はよその男にユリエの初めてを譲るのは癪だけど……」

感情が高ぶって、僕はユリエをベッドに引き入れて、キスをした。その後、互いに抱きしめあってと言うか……まあ、僕の気持ち的にはそうなんだが、現実には僕がユリエに抱きしめられた格好で、眠った。

「ユリエ、愛してる」
僕が初めてそう言うと、ユリエはフワリと笑った。
「存じております。私も心から殿下をお慕いしております」

その夜の夢の中で、僕はユリエと思うさま愛し合った。だが、目覚めた時、ユリエはいつもの様なきりっとした身支度を整えていて、朝食の支度が出来たことを伝えただけだった。でも、気のせいかいつもよりセクシーな微笑みを浮かべたように感じられた。

そんなこんなで、僕は側妃を迎える支度やら、ユリエに理想的な条件の婿を探すやらで、かなりあわただしい日々を過ごした。

セルマとは交換日記をすることにした。文学少女のツボにはまったようで、興味深い内容の文章を色々書いて来る。自然の観察描写がなかなかに細かい。だが、穿った見方をすると、小耳にはさむであろう政治的な色彩を帯びた話題はセルマなりに避けているようでもある。それでも、回数を重ねるごとに「差支えがありそうな話」も増えてきた。たとえば、こんな具合だ。

「殿下がお書きになっていた市中の微行先で召し上がった肉の串焼きのお話ですが、その美味しい味を想像いたしますと、私も是非そのうち頂いてみたいと思いました。幼いころの私は貧しい暮らしをしていましたから、食べる機会が全く無かったのです。いつも豆のポタージュかキャベツのシチューで、たまに骨付きのクズ肉を食べる事が出来れば上出来でした。それでも母が言うには、大半の農民はそうしたものすら毎日食べられる保証が無いそうです。その一方で今の私がいただく食事は、贅沢な料理が銀食器や高価な磁器に毎回盛り付けられて出てきます。でも、なぜでしょう。一つの鍋を囲んだ小さな貧しい住まいでの食事の方が美味しかったような気がするのです。かつて憧れた露店の串焼きは、今でも私には縁が有りません。露店に行って買い食いしたいと思っても、とても許してもらえません」

物質的な充足と精神的な満足は、必ずしも比例しない。僕の毎日の食事はユリエのお蔭で充実している。だが、セルマを迎えるころには、おそらくユリエは僕のもとを離れる事になるだろう。

複雑すぎる僕の家庭事情・5（後書き）

誤字脱字、設定の矛盾などの御指摘、大歓迎です

「森の魔女の娘が、なぜ側妃なのだ？　大宰相の姫君は紛れもないスコウホイの王統であられるから資格に疑問は無いが」

グラーン侯爵夫人は森の狩場で負傷した父上を看護したことから世に出たので、反対派は彼女を『森の魔女』などと呼ぶ。僕は時折黄金宮内の手ごろな樹に登り、気晴らしをするのだが、時にはこんな内緒話を耳にできる。だから、余計に木登りはくせになる。

「それは皇帝陛下の御寵愛を笠に着て『側妃扱い』とせよ、と言う事に過ぎないのではないか？」

「有りもしない由緒をでっち上げて、ただの平民の娘を皇太子殿下に押し付けようなど、魔女殿の手腕も大したものだ。横車の押しっぷりも色っぽいから、脂下がって魔女殿に従う腑抜けも多い。嘆かわしい限りだ」

木の下で話し込んでいる三人の門閥貴族は天晴れ憂国の士を気取っているが、その実、自らの不正をグラーン侯爵夫人にとっちめられたり、後ろ暗い儲け話を潰されて恨んでいたりというレベルの連中なのだ。三人で言いたい限りの陰口をきくと、気が済んだらしく、また宮殿内に戻って行った。

皆知らないが、由緒は有る。ただ、セルマの実父オーレ・トマソンが自分を追い出した故国に対して強烈な愛憎半ばする感情を抱いていて、自分の血統について世の人に知られる事を嫌っていたのだ。

オーレ・トマソンは元来、帝国とは通商協約を結んでいる都市国家・ミッケリの三元老を務めるサマロキ家の嫡子であったが、双子

の片割れであったらしい。双子は神聖視される国も有るが、ミッケリでは忌み嫌われている。サマロキ家のメイドが生まれてすぐに殺害するように命じられた双子のうちの体の小さな方を、密かに地下室に匿い、三歳まで育てたのがオーレであるそうだ。トマソンと言うのは元来はそのメイドの姓らしい。

四歳ごろからメイドの伝手で、遠く離れた帝国領内の商家に預けられたが、その商家が後に破産し、今度はどこかの貧農の所にやられたそうだ。体は小さいが、聡明で負けん気の強かったオーレは、貴族の息子とつまらぬ事で揉め、謝る謝らないの押し問答の末、貴族の子供に腰に帯びていた剣で顔面を切り付けられたらしい。それからは更なる災難を恐れてその農家を飛び出し、都にやってきて物乞いを始めたと言う。

ふとしたきっかけで教会の孤児院に引き取られて読み書きを覚え、印刷屋の見習いとなり、そこで小さな劇場の座付き脚本家と知り合い、更には脚本を書くようになった。そしてその芝居が次第に評判をとるようになった。劇作家オーレ・トマソン誕生の経緯は、彼の作品より劇的なわけだ。

現在、皮肉な事にサマロキ家は途絶える寸前だ。オーレの片割れのサマロキ家当主には子が無かった。近しい血縁者には未成年者が一人もおらず、もっとも近い血筋の者でも当主の又従兄弟か何からしい。商業国家ミッケリは帝国と異なり、女子にも相続権が有るし、女が才覚で商売を行い、町の政治に参加する事も珍しくない国柄だ。つまり、セルマは皮肉な事に現在の所、唯一のサマロキ家の正当なる相続人と言う事になる。

ミッケリの領土自体は吹けば飛ぶような狭苦しさだが、その制海権の及ぶ範囲は広大で、貿易により蓄えられた富は大きい。この世界で大きな影響力を持つ神聖教会の本山に多大な献金をし、神聖教会のトップである歴代の大聖猊下を多数輩出したミッケリだが、現

在の大聖猊下は何とサマロキ家出身なのだ。セルマから見ると大叔父にあたるとか。

短期間でここまで詳細に事情が知れたのは、大宰相の力だ。

事の発端はグラーン侯爵夫人が何と自分自身で亡夫が残した産着の袖の一部と懸け守りを持ちこみ、知る限りの事実関係を告げたからしいが……そんな限られた手がかりだけで、よくもまあ調べ上げたものだ。だから大宰相は恐ろしい。ちなみに大宰相は『灰色の悪龍』というありがたくないあだ名を付けられている。灰褐色の髪を振り乱しながらグレーの瞳で反対派を睨み付け、しばしば恫喝し、震え上がらせるからだ。

ちなみに魔女殿と悪龍殿の関係は、皆が信じているほど険悪では無い。互いの能力を認め合った好敵手、といった所か。

まあ、諸々の環境整備は二人に任せて、僕は側妃二人を迎える支度に努める事にした。そうこうする内に、ユリエの嫁入り先にふさわしい貴族の目星もついてきた。

一人は古い家柄のブレッケ子爵で糞まじめな男やもめだ。年齢は二十五歳だから、ユリエとは似合いの年頃だ。イヴァルの親父さんであるハーラル伯爵の兄の息子で、幼馴染であった亡き妻との間に二歳の息子がいる。ちなみにハーラル伯爵は正妻腹の二男で、学者として身を立て、兄と同格の貴族にまでなった。

そのハーラル伯爵の息子はイヴァルも兄も弟も全員正妻腹だ。どうやら血統的に正妻一筋の糞まじめな家らしい。多少面白味には欠けるが、妻となる女性にとっては悪くない資質だろう。

「その息子はわずか二歳ですから、ユリエ殿のお人柄なら十分に懐くでしょう」

イヴァルの言うように、確かにユリエなら立派に継子を育て上げるだろう。

もう一人はかつて父上の侍従を務めたドランメン伯爵だ。実年齢は五十で若くはないが、かつて帝国一の色男と言われただけあって、姿形は今も若々しい。子供は三人居るが全員母親の身分が低い庶子で、成人している。「女たちの間を渡り歩くのに疲れた」と言うぐらい、若い頃は遊び人で、父上の色事の師匠でもあったとか。

「平民と言えど建国以来の名家・レーゼイ家の令嬢で、お前に忠義を尽くしてくれた立派な女だ。結婚して生まれた息子は、当然ながら正当なる相続人となるだろう」

父上がそう請け合って下さるのだから、ユリエを粗略に扱う気遣いは無さそうだ。何でも家政をきっちり取り仕切り、安らぎを与えてくれそうな女性が望みらしい。浪費家で見栄っ張りの女には嫌気がさしているそうだ。僕の住まいが常に清潔で、隅々まで目が行き届いているのがユリエのおかげだと知って、大いに乗り気だと言う。

「後はユリエ本人に選んでもらうか」

男の方も、いつまでも待つわけにもいかないようだから、一か月の猶予を貰って考えさせる事にした。その間、ユリエなりに色々調べるかと思ったが、そんな様子は無かった。ユリエにその話を振っても、意識も話題もすぐに切り替えられてしまうので、どうする気なのか読み取れなかった。いや、本心はわかっている。いつまでも僕の側に居たいと考えてくれているのだ。

「どう、決めた？」

約束の期限の前夜に僕が尋ねると、ユリエははっきり「ハイ」と答えた。そして、口には出さなかったが、その理由がはっきり読み取れた。

（ブレッケ子爵は良い方だしお子様も可愛いけれど、殿下とのお約束を守るなら……お歳でもドランメン伯爵様の所にした方が気兼ねが無さそう。内々ではあるけれど皇帝陛下のお声がかりなのだし。その事で殿下に御迷惑をかけられないわ。ブレッケ子爵の方はナタリエの嫁ぎ先の親類なのだから、お断りしても、さほど角も立たないでしょう）

忠義者のユリエは、父上のお声がかりを軽視したと取られる事で、僕に不都合な状況が生じないかと言う事まで懸念してくれているのだ。だが、父上は適当に思いつきを口にしたに過ぎない。ドランメン伯爵の方を断ったって、グラーン侯爵夫人がセルマと僕の縁組を望んでいる今のタイミングならば実害は無いと僕は踏んでいる。

「ユリエ、どちらを断ったって、僕に迷惑なんて掛からないから……心配しなくていいんだからね」

（殿下は、やはり本当に私の事をよく御存知だわ……でも、やはりドランメン伯爵様にしておきましょう。私の淹れて差し上げたお茶を喜んで下さったし。結婚後も私の好きなようにさせて頂けるそうだし）

何とまあ、年季の入ったプレイボーイのドランメン伯爵は、僕との間の「公式愛人云々」と言う話を手際良くユリエから聞き出してしまったようだ。そして更に驚いた事にそれでも自分は構わない。自分の所は先代も先々代も六十歳かそこらで、心臓病で死んでいるから、自分もそうなるかもしれない。そうなれば全部ユリエの好き

にしてくれれば良い、とまで言ったらしい。ただし、こんな言葉を付け加えての上だが。

「ただ私の生きている間は、たとえお相手が殿下でも、目立たぬように細心の注意を払って欲しい」

確かに妻を寝取られたとあっては、プレイボーイの、いや貴族としての沽券に係わるからな。

「ですから、ドランメン伯爵様の所に参る事に致します。そして……もし、未亡人となりましたら、また、殿下にメイドとしてお仕えしたいです」

「公式愛人は、嫌かい？」

「その……昔の大女官長様みたいな感じが……」

「なるほど。確かに僕にとってはありがたいけれど、良いの？」

「はい」

大女官長と呼ばれたエマ・ヤイレは、二代の皇帝とその家族全員に大変信頼された偉大なメイドだ。

実は若いころに皇帝の愛を受け入れ、息子も生まれたらしいのだが、すぐに養子に出されたようだ。表向き皇帝とは、あくまでメイドと主人という一線を崩すことは終生無かったと言う。

その死に際して「朕は真の母ともいうべき存在を失った」とまで即位して間もない皇帝に言わしめ、国中が長く喪に服したと伝えられている。死後特別に公爵夫人の称号を賜り、その血縁者は死ぬまで税を免除されたと言う。更には神聖教会によって聖女に列福され、メイドや女の奉公人の守護聖人とされた。これは教会が庶民からも抜かりなく献金を集めるためのあざとい手段なのは見え見えだが……

「そうか。エマ・ヤイレか……ドランメン伯爵は、きっとユリエを大事にしてくれると僕は思う。結婚の支度はユリエが自分ですると、何でも地味にしてしまいそうだから、ナタリエに頼むよ。ナタリエ

は結婚してから、若い貴族の奥方連中の中に幾人か友人も出来たようだから、流行とかデザインとか諸々詳しそうだしね。大事な姉さんの嫁入り支度も抜かりなくできるだろう。ドランメン伯爵家は古い家柄だ。本人はさばけた気楽な人だが、使用人たちに、たかが嫁入り道具の事で軽く見られてはいけないからね。それに、余りに粗末だと僕の体面にも関わる。だから、鬱陶しいだろうけれど家格に見合ったものは持たせるから、そのつもりでね」

何とも、六歳児にしては可愛げのない発言だ。どう考えても二十六歳か三十六歳ぐらいの男の発想かな。

（殿下、ありがとうございます）

ユリエには僕がしっかりした支度をさせたいと願っている本当の理由が分かっているのだ。体面なんて、本当はどうだって良い。僕が出来る事は全部して、送り出したいのだ。そして、ユリエには、それなりに幸せな結婚生活を送ってもらわなければ困る。

「つきましては殿下、お願いがございます」

「何だい？」

すごくドキドキするなあ。ユリエが脳裏に思い浮かべているのは……青い海？　スイカ？　何だろう？

「今年の夏の休暇ですが、私の実家の海辺の別荘で御一緒にお過ごしになれませんか？」

「良いの？　じゃあ、海で泳げるかな？」

泳ぎ疲れたら、地球の浴衣とほとんど変わらないミズホ風の服を着て、涼しい部屋で蝉の声を聞きながらユリエの膝枕で昼寝がしたいものだ。

「ええ、是非、そういたしましょう」

ユリエと共に過ごす最後の夏休みになるかもしれない。楽しい想い出をたくさん作れるだろうか？

複雑すぎる僕の家庭事情・6（後書き）

誤字脱字、設定の矛盾などの御指摘、大歓迎です！

僕とユリエの夏休み・1（前書き）

夏休みの話は、更にもう一話続く予定です。

僕とユリエの夏休み・1

「海は良いなあ」

紺碧の大きな海、眩しい太陽、白い砂浜……

ぐちゃぐちゃチマチマした宮廷生活での鬱陶しさを、綺麗に忘れてしまえそうだ。

確かに忘れるわけには行かない立場だけれど、それでも夏の休暇の間ぐらい、許されるだろう。

僕は正式に許しをもらって、ユリエの実家・レーゼイ家が所有する白い浜辺に面した別荘に滞在している。

「馬を乗りついで丸一日がかりでしたが、お疲れは癒えましたか？」

浴衣そっくりの衣装を着て、僕とユリエは大きな日傘の中にいる。

「なんか尻がすりむけたけど、大丈夫だよ」

「まあ、それは大変ではないですか」

するとスイカを食べる支度が出来たと知らせる声がした。僕らは返事をして、縁側に腰掛けた。

「良い感じに冷えておりますよ、さあさあ、どうぞ」

当主のイエンス・レーゼイ自ら、切り分けて勧めてくれる。僕が前世で馴染んできたスイカと味も色合いもよく似ているが、形がフットボール型だ。そうそう、ミズホの文化は聞けば聞くほど地球の日本に似ている。

「私の名前は本当は冷泉家康と申します」

お公家さんと江戸幕府の創始者が一緒くたになった様な名前だ。

漢字もほぼ一緒らしい。

「家康さん、か。じゃあ……信長さんとか秀吉さんなんかも居るかな？」
「ええ、おりますとも。殿下はミズホに興味がお有りですか？」
「余り他人に言っていただくと差支えが有るのですが……僕は前世の記憶が多少ありまして、どうやらミズホとよく似た異世界の国に生きていたようなのです」
「異世界、ですか？」
「ええ。この世界の歴史や常識とは噛みあいませんので。僕が前世で知っていた家康という人物は偉大な武人で君主でした。姓は徳川でしたし」
「さようですか」
「そうしたくいちがいは、色々有るのですが、それでもミズホの物には安らぎを覚えます」
「安らぎですか。なるほど。そうした御事情で殿下はミズホ風の食べ物がお好みなのですね」
「風呂も、そしてこの帷子も好きです。でも、黄金宮だと何だかチグハグなんですよね」
「殿下は帝国風とミズホ風の良いとこどりをしたような建物は出来ないかと、お考えなのよ」
「ほおお、それは素晴らしいお考えですね」
「特に、風呂ですね。一応試作はしてみたんですが、まだまだなのです」
「昨夜は御部屋の側のヒノキ風呂をお使い頂きましたが、今日は是非傷や凝り・痛みにも効き目が有ります温泉にお入り下さい」

今年掘り当てたばかりだと言う、海辺の岩場を利用した露天風呂から眺める夕日は最高だった。当然、ユリエと一緒だ。実家の別荘のせいか、ユリエの表情も伸びやかだ。

レーゼイ家の権勢はこの海辺の界隈では大したもので、周囲の村

の人々はレーゼイ家が経営する水産物の加工場や塩田での仕事につき、定まった収入を得ている。滞在三日目からは、それらの仕事場にこっそり見学に行かせてもらった。確かに重労働ではあるが、きちんと昼食を食べさせ、日当を支払う。こんな僻地では帝国の行政機関の手も十分に及ばないのだが、村の人たちのための医師を雇い、希望するものに読み書きや計算を教える小さな塾の様な場所も有る。

「読み書きができて帳簿を付けられるようになると、都でも働けるようになりますからね」

教師役の男は、幾度も高等文官採用試験に落ちてあきらめた隣村の網元の息子らしい。レーゼイ家の分家筋らしく黒目黒髪だ。

「それにしても昨日から何なんでしょうね。岬の港から隣村にかけての一帯に近衛軍の兵士が一連隊、詰めているらしいんです。まさか皇帝陛下の新しい愛人がこのあたりの女、って事じゃないでしょうねえ。都からは遠すぎますし……何なんだろうなあ、ユリエさん、御存知ですか？」

「さあ、何でしょうねえ」

「それにしても可愛らしい坊ちゃんだ。お幾つですか？」

（髪は帽子に隠れてわからんが、碧の眼か。都の子かな）

教師役の男は異分子である僕が気になるらしい。ユリエが都で何をしているかについては、知らないようだ。

「六歳です」

「都でお世話になっている方の、坊ちゃんなんです」

それからはユリエがさりげなく話題をそらせてくれて、事なきを得た。別邸へ戻る道すがら、僕は愚痴った。

「だから父上に申しあげたのになあ。付けて下さるにしても、せいぜい百人程度で十分だと申し上げたのに、近衛三千人のうちの半数なんて、目だって困るよ、まったく」

「海賊騒ぎなども御座いましたから、陛下は御心配なのでしょう」
「それはそうなのだろうが、せめて私服に着替えるとか、考えてほしかったなあ」
「そうなりますと、今度は不穏な傭兵集団と思われて、村人が怯えるかもしれません」

以前、寄港した商船に気の荒い傭兵たちが乗っていて、村人たちに暴力行為を働いたらしい。追い出したのはレーゼイ家の者たちだと言う。

「レーゼイ家の人達はミズホ風の武器を使うんだよね？」
「ええ。片刃で少し反りの有りますカタナですね」
「ふむふむ。それと、何か体だけで出来る武術、有るんじゃないの？　前さ、ユリエが酔っぱらった馬鹿に宮廷で絡まれた時、相手の小指かなんか軽く捻って逃げ出さなかったっけ」
「まあ、お恥ずかしい」
「あれ、僕の知っているような武道なら、ぜひ教えてほしいんだけどな。休みは一か月きりだけど、何とか格好にならないもんだろうか？」

何とユリエの武術の師匠は、父親の家康さんらしい。夕食の折に、伝授を願い出たら、快く引き受けてくれることになった。刀の使い方は又の機会にするとして、まずは体術からだ。

「流派も色々と有りますが、私が使いますのは我が家の家伝に従った物でして。明心流と名付けられております」

それにしても、家康さんとユリエが披露してくれた型は美しかった。

着ている物が日本での道着と稽古袴に似ている所為だけではなく、

その動きも合気道に近い気がする。もっとも僕は前世で柔道と空手をちょっとかじった程度なのだから、詳しい事は分からないが……

休みの間、早朝は道場の雑巾がけから始まり、走り込み、朝食、海でひと泳ぎ、昼寝、午後の鍛錬、風呂、夕食……多少の自由時間とか間食とかが間に入るが、こんな感じのタイムスケジュールで過ごした。

「やっぱり白い米は美味いなあ」

「誠に殿下はミズホの方かと思うような事を、時折おっしゃる」

「ぜひ、実際のミズホを訪れてみたいものですが、難しいんだろうなあ……」

「今からですと風を待って、半年、更に順風でも一月近い航海が必要ですから」

「自分の目で見てみたいのですけれどね、ミズホを」

「んー、さすがにそれは……使節団を派遣なさる事は可能でしょうが」

大航海時代初期のエンリケ航海王子を真似て、パトロンになるならできるんだろうが、自分で行きたいのに人任せしかできないって、不便な立場だ。

「そういえば、帝国領内ではミズホからの船を見ませんね」

「帝国は神聖教会を国教に定め、ミズホで一般的な緩やかな多神教は認められませんので、皆厄介ごとを恐れて寄り付きません。我がレーゼイ家の場合、初代が個人的に開祖皇帝の功臣の一人と認められましたので、目こぼしされている格好ですね」

「それでも、ミズホの物産は意外と入っておりますけれど、どう言う経路を取っているのですか？」

魚に良く合う醤油の様なソイも、しょっつるの様なガルムも、ミ

ズホの物が一番うまい。
「ほぼ全てのミズホの船は、一旦ミッケリに入港致します。うちの商会の場合もミッケリに支店が御座いまして、そこで取引を済ませ、購入したものを帝国に運んでおります」
「帝国からは何を輸出しますか？」
「鉄ですね。銑鉄のインゴットです。ミズホで鍛造して武器類に加工して、また近隣の諸国に輸出します」

その銑鉄のインゴットを生み出すのがスコウホイに有るネードの鉄鉱山と帝国直営の製鉄所だ。

「大宰相様が始められた事業ですが、たいそう大きな商売になっておりますよ。あの方は目の付け所が鋭くていらっしゃる」
「そして、それを売りさばくのに必要なのがミッケリの港なのですね」
「そうです。その……殿下の側妃候補のお二人がスコウホイとミッケリにゆかりがお有りの方であられるのも、偶然とは思えません。それだけに……いや、出過ぎたことですな」

家康さんは僕と巨大な事業の権益との関連について、用心しないと思わぬ讒言などを食らって失脚しかねないと心配している。

「僕がぼろ儲けする、そう思われるかもしれませんね」
「殿下の御暮らしぶりが簡素であられるのは、実に賢明でいらっしゃると思います」
「家康殿、いや、師匠、僕がこれから進むべき道について教えていただけませんか？」
「いや、その、私は一介の商人に過ぎませんから……ですが」
「ですが？」
「多くの民を救うために財を吐き出されれば、より良い形になって

殿下の元に戻るものが御座いましょう」

どうやら、家康殿はいわゆる公共事業や慈善事業について考えているようだ。

「ミズホのことわざで言う所の『金は天下の回り物』と言う訳ですね」

「さようです、殿下。ミズホでは『流れるものは無理にとどめるなかれ』と申します。洪水を防ぐにつきましても、帝国ではひたすら大きな堤防を築きますが、ミズホでは違います。水を遊ばせる池を確保して、余分な水をそちらに逃すのです。あるいは大切なものは船に乗せ、水が引くのを待ちます」

「金の流れも無理やり自分の所に留めてはいけないのですね」

「ええ、左様でございます」

（ユリエも……いや、それこそ出すぎている……）

家康さんが脳裏から振り払った言葉が何であるのか、僕は気になった。

夕食が終わり、割り当てられた部屋に引き上げ、僕とユリエは縁側で涼んで夜の海を見ていた。

「潮騒か。この音、気分が休まるなあ」

「ですが嵐の時は実に恐ろしい音になります。あそこに見える岩場のあたりから、荒い波の時は大きな獣が吠えているような音が響いてきて、幼い時はいつも父にかじりついていました」

「そうか。ユリエはお父さん子だったんだね」

ゆっくり冷たい麦茶を飲んでから、眠ることにしたのだが……

僕はこの別荘では殆ど日本の和室と変わらない作りの部屋で、ユ

リエと隣同士に布団を敷いて寝ている。

「ねえ、ユリエ……手をつないで良い？」

「御一緒の布団がよろしゅうございますか？」

「ううん、良いよ。これで。だって、ユリエはもうすぐ嫁入りなんだし」

「殿下……」

それ以上の事を、僕は何も言えなかった。僕は本当は欲張りでさもしい奴だから。

僕とユリエの夏休み・2（前書き）

嵐の予感、ですねえ。

「そこで、その足を相手の出た足の側面に半歩入れて、その足を軸に回り込む」

僕は家康さんに自分でできるトレーニング法と基礎的な技について教えてもらっている。

「回り込みながら自分と相手の手、肘、肩を揃えて……そう、そう」

体格の近い組手役の少年と一緒に練習している。彼は家康さんの甥っ子の一人で、ユリエには従兄弟にあたるエイモンと言うか衛門と言う。

「そうそう。衛門はグスタフの手首を掴め、そうだ」

僕は師匠になってもらう家康さんに修行の間だけでも名前で呼んでくれと、頼んだ。衛門は十二歳だが小柄だ。しかし技の方は大したものだ。こんな初心者の稽古につきあわせて気の毒だが「将来は武術を教える立場」なので、初心者に対する指導法の勉強というわけだ。

「衛門、お前の姿勢が崩れてどうする。背筋はまっすぐが鉄則だぞ」

ひとしきり稽古が済むと、男三人で一風呂浴びる。それから朝食だ。

「今日は塩田の方で、色々有りまして、お目にかかるのは夕食の時でしょうな」

「そうですか。多忙な時期に、時間を割いていただいてありがとう。それはそうと、ここで出来る塩は、柔らかな良い味ですよね」

帝国領内で岩塩が採れる場所は殆ど存在しない。それだけに海水から採れる塩は貴重だ。特に専売制度を敷いているわけではないが、レーゼイ家は国内で塩の取引をほとんど独占している。だが、その

製法は塩田の粘土で作った防水層に細かい砂を敷き詰め、その砂の上に海水を撒いて太陽光線と風で水分を飛ばす事を、砂をかき混ぜながら繰り返し、濃い塩水を作るというやり方だ。そう、揚浜式っていうのかな。

「自然の地形を利用して潮の干満を使って、海水を取り込む方法は？」

「ああ、確かに。ミズホでは大規模にその方法がとられておりますが、このあたりでは条件が整いませんで」

そうか、入浜式は自然条件の縛りがきついか。干満の差でうまい具合に海水を取り込むんだからな。

そこで、僕が更に枝条架塩田について話すと、家康さんは興味を示してきた。そして、その話は朝食の間もずっと続いた。衛門の家は塩田の管理者なのだそうで、こちらも真剣に論議に加わる。

「すると、その、ホウキの様に枝などをまとめた棚の様なものをいくつも並べ、そこに海水を撒き、風をあてるのですな？」

「風の条件などを詰めないとはっきりは言えませんが、上手くいけばお悩みの日照時間が短い季節の塩づくりが、ずっと容易くなります。それを二度三度繰り返すことが出来れば、非常に濃い塩水が出来るでしょう」

問題はどうやって枝条架っていうか、枝を束ねた棚みたいな物に、均一に海水を撒くかだ。海水面から枝条架へ運び上げるためのポンプなんて無い世界だもんな……人力で担ぎ上げるのは、非効率的だし重労働になる。

「んー、そうだな……」

僕はミニチュアの塩田を作らせてほしいと申し出た。

「ほほう、雛形を作られるのですな。なるほど。うまくいけば、色々な事も見えてきましょうし、うまくいかなくても、さほどの損失も出ませんな」

話を聞いていたユリエは、僕の貧乏性に呆れていた。

「殿下、せっかくの休暇ですのに、都に居る時よりも忙しくなるではありませんか」

「殿下はいつも忙しくなさってお出でなのか？」

「ええ。学問はもうすでに並みの文官の方よりもお出来になるのです。毎回、御前会議にも御出席なさって、時には御意見も仰います」

「ほう！　殿下が恐れながら神童であられるというのは、この田舎でも皆が知っておりますが、御前会議で執政官相手に御意見を……これは驚きました」

「いや、単に頭の錆びついた祖父さん連中の思い違いや勘違いを、ちょっと訂正する程度ですよ」

「またまた、御謙遜を。側妃のお話が有って以来、殿下に謁見を求める者も多いと聞きますぞ」

「はあ。大半が利権目当ての腹黒い連中ばかりです。それでも、角を立てずに追い返すのは疲れます」

「本当にお忙しいのよ。お妃候補の姫君方とのお付き合いもお有りだし……殿下、どうか、休暇の間ぐらいごゆっくりなさって下さい」

「良いんだよ、ユリエ。海の側でしか出来ないことだし、前から塩田には興味が有ったし」

それに、うまくするとユリエにちょっと恩返しできるかもしれないし……とは、言わないが、そんなつもりも有るのだ。

僕は小さな潮だまりを加工して海水のタンクがわりにして、塩田のミニチュアを十日がかりで作り、家康師匠に披露した。海水を持ち上げるのはサイフォンの原理を応用した。

「満潮時にタンクに入り込んだ海水を逃さないように、この水位が

過ぎたら弁を閉じます。そして……この管から枝条架にこの小さな穴を空けたパイプを通して霧状にして撒きます」
「ふむふむ。そして、その海水を更に下段の枝条架に落とすのですな」
「はい。季節風の加減などは、よくわかりませんが、吹き飛ばされない範囲で強めの風が良く吹く場所が、理想ですね」
ミニチュアはうまく作動した。霧状にというほどには細かくないが、まあまあ均等にホウキ状の棚に海水を撒き、それを集めてさらに下の段のホウキ状の棚に落とす。更にもう一段。都合三段で海水を濃縮した。
「何と、わずかな時間で驚くほど濃縮されていますな」
「これなら、十分使い物になるのでは有りませんか」
「これ、衛門、使い物とはなんだ」
「あ、はあ……」
「ですが、殿下、これは本当に大した物ですな。うむ。この仕組みを我々が使いましても宜しいので？」
家康さんはアイデア料とかパテントとかを気にしているのだ。僕が銭金を要求するつもりがないのはわかっていても、ただで使うのをためらってくれたようだ。
「どうぞ。まだまだ、実用には色々な課題も多いでしょうし。干満差で海水を満たすタンクの設置場所や枝条架を設置するのにふさわしい場所や、その他もろもろ。でも、本当にお役に立つかな」
「ええ、十分に。冬も塩づくりが出来そうなのが特にありがたいですな」

本当に実用化を検討するらしい。塩づくりをこれまで担当してきた者や、村の物知りなどを呼び集め、説明会の様な事をして、更に議論を詰めた。そして、このアイデアはレーゼイ家の管轄する塩田だけの物として秘密にされる事になった。

「本当に、レーゼイ商会だけで独占してよろしいので？」
「ええ、構いません。でも、どこかで別の人が同じような事を考え付く可能性は有りますが」
「いやあ、当分は大丈夫でしょう」
塩の商売、特に製造はレーゼイ家の独占状態なのだ。確かに当分は大丈夫かな？

最後の三日間は、六歳の子供らしく、蝉取りをして、海で泳いで、スイカを食べて昼寝をして過ごした。武芸は僕の持ち込んだ枝条架式塩田の計画の所為で、お休みだ。都に戻ったら、十日に一度ぐらいはレーゼイ家から誰か武芸の指導に来て貰う事にした。

「ユリエ、あのねえ」
「何で御座いましょう？」
「いや、いいや……良くないか」
僕はためらっていた。だが、言うべきだろう。僕の得手勝手な気持ちは忘れてくれって。
「君の父上がおっしゃろうっとしていたことは、たぶん、こういう事なんだと思う」
「どういう事でしょうか？」
「流れるべきものは流れる。そして、交わるべきものはまた交わると……」

ユリエは結婚するのだ。おかしな付帯条件を僕につける権利は無い。結婚したくないらしいが、それでも夫となるドランメン伯爵は好感の持てる人物だと感じているらしい。ユリエが終生メイドで構わないと思っているのは良くわかっている。
でも、僕は……たかが身分の事でユリエを低く見る連中から守りたいのだ。
側妃候補たちが、いったいいつから現実に僕と実質的な婚姻関係

を結ぶようになるのか、あるいはいつの間にやら話が立ち消えになるのか不明確だ。大宰相や侯爵夫人が思う程確定した話ではないのではないかと僕は感じている。それに、僕自身の皇太子という立場だって、本当に揺るぎないもので有るのかどうか……六歳の『神童』の取り扱われ方は微妙だ。大人並みの責任まで要求される事も珍しくないのに、不都合だと子ども扱いされる。それでも大宰相の場合は『国益』『秩序』といった比較的明快な指針に従った行動だから、わかるのだが、問題は父上だ。憎まれているとは思わない。だが『息子として』愛されているとも思えない。母上は腹を痛めた所為か、それなりの情を感じるが……

父上の庶子は多い。それに父上の弟たちも皆健在だ。現在は僕が皇太子でいるからどうにかユリエの安全を保っているが、僕の立場が危うくなればユリエも危ない。

この国では『貴族の権利』『貴族の名誉』は尊重される。一旦貴族階級になれば、たとえ讒言や陰謀で追い落とされても、めったに殺害されることは無い。それが平民となると、権力者にとって不都合な存在ならいともたやすく排除され、消されてしまう。僕はその厳しい現実を間接的にではあるが、知っている。

僕が讒言で貶められ、反逆罪で牢屋に入れられたとしたら、僕のメイドで平民のユリエは敵対する勢力にどの様に残酷な扱いをされるかわからない。一旦貴族になれば、少なくとも闇から闇に葬る事は難しくなるのに……

かつての大女官長エマ・ヤイレの場合は、皇帝が表向き独身の彼女に、貴族としての最低の階級である女準男爵の称号を与えて守っていた。出来れば僕だってそうしたい。だけど、今の僕にそれは出来ない。僕は六歳の皇太子なのだから。権限も権力も持ち合わせていない。

海辺で過ごした休暇がもう終わるという前夜は、嵐になった。気

丈なユリエにしては珍しく震えていた。吠える様な激しい海鳴りが苦手だと言っていたが、まさに幼い子供に戻ってしまったかのようだった。

僕は……気持ちとしては、ユリエを抱きしめた。可能な限りしっかりと。

「大丈夫、もうすぐ終わるから」

大した根拠もなく、自信も無いくせに、そんな言葉を幾度も繰り返した。そして、大切な存在を守る力が自分には備わっていないのが悔しかった。悲しかった。

気が付くと、暴風の吠える様な音に合わせて、僕は泣いていた。

「殿下？」

僕が号泣すると、ユリエは震えるのを止め、僕をしっかり抱きしめてくれた。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・1（前書き）

公妾と呼ばれた立場の女性たちの事、調べ出すと興味深いですね。
何じゃそら！って事も色々あります。爽やかからは、ほど遠い話ばっかりですが。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・1

恐らくは父上の側近の中で、大宰相を内心は苦々しく思う連中が言いだした事だろう。僕が側妃を迎えるのは余りにも早い。あと十年後だって早いぐらいだと言う意見が宮中を席捲しはじめた。

「そもそも、側妃より御正妃が先だろうが」

確かにそれはそうだ。僕はそれでも一向に構わないのだが、大宰相は焦っていた。

「僕はまだ六歳ですよ。誕生日が過ぎてもまだ七歳。そんな子供に側妃が二人って、普通に考えればおかしいですよね？　やはり異常でしょう。普通なら学友とか、そんなものを決める年頃なのに……僕の方から御約束を反故にするつもりはサラサラ有りませんが、気長に相応しい時期を探るべきかもしれませんね」

爽やかな青春なんて無縁だ。

まあ、子供らしい子供じゃないから、ある程度仕方がないにしてもさ。

「いいえ、殿下はお体こそ確かに六歳のお子様ですが、大変な御知恵と御見識をお持ちですし……何より、御自身の果たされるべき責務について真摯にお考えでいらっしゃる。そうした殿下ならば我が娘を通じて、御縁を頂き、私も……何れは迎えます事になるでしょう新しき御代を支える力となりとうございます」

おいおい、父上はまだ健在。現役バリバリの三十五歳だぞ。大宰相の方が年上じゃないか。その言いぐさはまずいだろ。宮廷内の空気が微妙なこの時期に……下手すると僕が謀反人扱いされちゃうじゃないか。

「大宰相、父上はお健やかで、御代はまだまだ末永く続きましょう。僕は無力な子供に過ぎません。お願いですからそうした剣呑なお話はやめて下さい」

そして、父上のお考えで最終決定するのみだと大宰相に言い渡した。すると今度はグラーン侯爵夫人が、セルマを当初の予定通り来年側妃に迎えてくれと言いに来た。こちらも大宰相同様、父上の御裁可次第と伝える。

僕の皇太子という立場も微妙になってきた。原因ははっきりしている。母上の懐妊だ。それもどうやら大宰相の子ではなく、父上の子らしい。法の上では夫婦なのだし、僕という子どもの両親なのだから奇異でも何でもないのだが、これまでの経緯を考えれば青天の霹靂だった。一度冷えた仲がふとしたことから元に戻った、いや、かつてないアツアツな状態になったようだ。

大宰相もグラーン侯爵夫人も仰天している。そして、自らの延命工作のために僕を使おうという魂胆なわけで……いやあ、頭が痛い。

「ユリエ、お前は予定通りちゃんと嫁に行くんだよ」

ユリエは僕を案じて、そばを離れないと泣いて主張したが、やはりまずい。それこそ父上のお声がかりの話を蹴ってもらっては、ユリエにも僕にも何か有りそうな雲行きだ。最初に話を頂いた時とは情勢が違うのだ。

父上は僕が七歳になったら、周りに門閥貴族の子弟を侍従として配すると定められた。それは監視であると同時に、保護でもあるのだ。父上のお気持ちの中で、どちらの比重が重いのか、僕には読み切れない。父上は移り気な方だし。

すったもんだは有ったが、予定通りユリエはドランメン伯爵と結婚した。

僕の幼児期は完全に終わった。気が付けば、誕生日も過ぎていた。侍従となった少年や若者たちは皆素直だが、ユリエほど気が利くわけでも賢い訳でもない。身の回りの事は自然、自分自身で行うようになった。

「今度生まれるのが男子であったとしても、皇太子はお前なのだからな。そのつもりで身を処しなさい」

「お前はこの母の自慢の息子です。頭を高く上げ、堂々としていなさい」

意外な事に、いや、僕が疑心暗鬼に陥っていたのだろう。子供らしくない子供である僕を、父上も母上も思いの外親らしい温かい感情を持って、息子として受け入れて下さっている。どうやら僕の皇太子としてのポジションは当分そのままのようだ。僕は変わらず毎朝のご機嫌伺いを、父上にも母上にも続けた。お二人御一緒に朝食を召し上がる日が続くと、母上のお気持ちは穏やかだ。息子としては嬉しい事だ。

やがて弟のロルフが生まれた。プラチナブロンドの髪に淡い茶色の瞳の健康な子だ。顔はどう見ても父上そっくりだ。これほど似ていれば、血統に関する疑念を完全に払しょくできるだろう。大宰相には全く似ていない。だが母上の意識を探って、僕は愕然とした。何と母上自身、実際に生まれるまでどちらの子かハッキリ分からなかったらしい。その秘密を知った時、僕の胸の内は色々な意味でモヤモヤした。

それにしても分からないのは父上だ。皆が石を持って追い落とすようにグラーン侯爵夫人に対する讒言を繰り返し始めた中で、特に

庇うような行動もとらず、事態を放置していた、いや、そうとしか見えなかったが、そんな中でも侯爵夫人は父上の子を懐妊したのだ。

「雨の中、わざわざ夜中にやって来て、足元に身を投げて修道院に入りたいなどと言うので、ついな」

あの美しい人が身を投げ出して、泣いて訴えた。すると、父上は気持が動いて……子を作ったと言う事か。

侯爵夫人が父上の寵愛を取り戻したとなると、また様々な連中が彼女の周囲に集まり出した。公式愛人が男子を産んだとしても皇帝になるはずもないのだが、おべんちゃらを言う奴の中には、父上の寵愛さえ確かなら侯爵夫人が『国母』になるかもしれない、などと物騒な胡麻すりを言う者もいる。それを小耳にはさんだ母上の周囲の人間が、また騒ぐ。

「森の魔女の不敬は許し難いです。あのような者は火あぶりになさるべきでしょう」

庶子であっても皇帝の子を懐妊した女性を火あぶりにできるはずもない。大体、火あぶりなどという必要以上に残酷な処刑方法自体、昨今はめったに実行されていないのに……

父上は『火あぶり』発言をした母上に仕える女官をそのまま放置し、その一方で一日の半分近い時間をグラーン侯爵夫人と共に過ごすようになった。

一度はコケにされた形の大宰相は、出産後の母上のもとにマメに顔を出している。どうやら父上と顔を合わさないように細心の注意を払っているらしい。もっとも、僕の時もそうだったが、父上はめったに産後の母上を見舞わない。

「後は大宰相に任せよう」という父上の言葉をどう解釈するか、大宰相は激しく悩んでいたが、何のことは無い。父上は面倒事は有能

な大宰相に任せれば良いと思っているに過ぎない。そして、母上に対しては夫たる自分こそが正当な権力を有していると誇示したい…そんな多少子供っぽい独占欲が働いたに過ぎないのだ。

だが、気まぐれだろうと幼稚だろうと、皇帝の行動は大きな意味を持つ。僕は今回、それを嫌という程思い知らされた。

「何だか疲れたなあ」

ぼやいても、それを受け止めるユリエが居ない。僕は僕なりにけじめをつけた筈だった。ユリエはユリエの為すべき事をすれば、それで良い。そう思っているはずなのに、僕はやはりふっきれないのだ。

ユリエはドランメン伯爵の夫人として、夫と共に領地に居るはずだ。だが、何の情報も僕の方には入ってこない。イヴァルにそれとなくカマをかけてみたが、どうやらイヴァルも妻のナタリエも何一つ知らないようだった。実の妹であるナタリエも知らないなんて、おかしくは無いだろうか？　僕は心配になって、レーゼイ家の都の中の邸まで忍びで出向き、直接家康師匠に会って話を聞いてみた。

「妻となりました以上、ユリエもドランメン伯爵に従うべきなのだと思いますが、嫁いで以来音沙汰が無いのが一体いかなるわけか、私も気がかりです」

家康師匠は手の者をドランメン伯爵領に送り込むという。

「何かわかりましたら、委細漏らさずお知らせいたします」

そう請け合ってくれた師匠の言葉を聞けば、僕に出来る事など待つ以外、何も無い。

ドランメン伯爵領は、伯爵領としては最大規模で、幾度も国境線を争い歴史的な因縁を抱える隣国・ワッデン王国と国境を接する重要な軍事拠点でもある。

歴代のドランメン伯爵は優れた武人であると同時に、手堅く領地を治めてきた。当代の伯爵・スヴェンは遊び人ではあるが軍略に優れており、先のワッデン戦役でも全軍の補給経路をしっかり確保し、敵に分断される事は一度たりともなかった。

現在、ワッデンとの国境と設定されている大河の中州に、帝国とワッデン双方の商人が互いに物々交換的な交易を行う市が、十日に一度のペースで立つ。元来は闇市であったものが、帝国・ワッデン双方にとって都合の良い存在であるため、目こぼしされている。レーゼイ家の手のものは、ここで情報を集めたらしい。

僕がレーゼイ家を訪問して一月経った頃、家康師匠の使いがやって来た。

「国境より送られてきました書状です。しかるべき時期に皇帝陛下にもお知らせするべきかと思われます内容が含まれております」

レーゼイ家からの使いが持ってきた書状にはそう言う家康師匠の但し書きが添えられていた。更にこんな文章も添付されていた。

「ユリエお嬢様は、歴代ドランメン伯爵の居城・アウラ城で無事にお暮しのようです。同封いたします様な短い書状をアウラ城の門前で、直接お嬢様より頂戴いたしました。委細は折を見てお嬢様御本人より何らかの御説明が有るものと思われます」

どうやら直接、ユリエと面会した手の者が添えたメモのようだ。さて、肝心のユリエの書状だが、思いもよらない内容で、僕は驚いた。

「歴代当伯爵家の主が苦しめられてきた心臓病の発作を起こされて、旦那様はずっと寝込んでおられました。この半年間、医師や執事と協力してお世話した結果、昨日からお話をなさる様になりました。当分は発病の事も伏せておいてほしいと言うのが旦那様の御意向です。領地の事は執事や代官たちに助けられて、何とかやってきまし

たが、旦那様の意識が戻られたのでもう大丈夫だろうと思われます。ただ、ここはワッデン国境の要衝ですので、何か事がおこりました時に御自分が十分にお役にたてない恐れが有るのが、今の旦那様の一番のお悩みのようです」

そのあとは、僕の口からワッデンと帝国の国境の守りについていかがするべきか、早急に皇帝陛下に内密にお伺いを立ててほしい、と言った内容で締められていた。

僕は父上に二人きりの面会を求め、レーゼイ家から送られてきた状態のままで書状をお見せした。

「そうか。スヴェンの奴めがなあ。ぶっ叩いても死にそうに無い頑丈な男だと思ったのに……書状からすると、ユリエはそこそこ上手く領主夫人としてやっているようではないか。ふーむ。国境地帯の領主が病人というのは国防上宜しくないが、あまり動くとワッデンに気取られるからなあ。おお、そうだ。お前なら官僚連中ともツーカーの仲だろう。お前にこのことは預けよう。そうだなあ、お前、正妃をいっその事ワッデンから迎えないか？　そうすれば、戦がおこる可能性は極めて低くなるわけだし……うむ。正妃の件はこの父に任せよ。な？」

僕は頭が痛くなってきた。

登場人物のまとめ・1

＊グスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲラン
異世界・ルンドの最大国家テオレル帝国の生まれながらの皇太子。
金髪碧眼のチートな超絶美形。
ちょっとばかりテレパシーが使える。
前世は日本の大学生・井沢亮太。享年二十二歳。
死因は交通事故だった。
心配性で貧乏性なのは、前世の性格を受け継いだ所為らしい。

＊美保
井沢亮太の婚約者。相思相愛だった。

＊爺さん
異世界・ルンドの管理者だと言うが、人類ではないことは確か。

＊母上
テオレル帝国の皇后。名前はソフィーエ。
髪はプラチナブロンドで眼は淡い茶色。
気品ある美貌と思慮深い性格で周囲から尊敬されて来た。
皇帝である父上とは生まれながらの婚約者同士。
やり手の宰相・スコーネ侯爵を公式愛人とする。

＊父上
皇帝。首都トリアの中核部に存在する黄金宮の主。

名前はフレゼリク。
知力・体力・美貌に恵まれているが、気まぐれで飽きっぽい。
異性関係は乱れまくり。僕の関知しない庶子が多数存在する模様。
母上との夫婦関係は微妙で、部外者には理解しがたい関係。
僕が異世界の人間の転生者だと承知している数少ない人間。
僕に対する感情はかなりわかりにくい。
高く評価し、皇太子として大切に考えてくれてはいるらしい。

＊ロルフ
僕より七歳年下の弟。顔は父上にそっくり。
髪はプラチナブロンドで眼が淡い茶色なのは母上譲り。

＊ドロテア
僕の乳母。強欲で裏表が激しい。
夫は野心家で平民からなり上がったネクセ伯爵ビョルン。
悪事がばれて宮中から追放されたが……

＊ユリエ
ドランメン伯爵夫人。長らく僕のメイドだった。黒目黒髪。
姉の様な恋人の様な特別に大切な人。
かつては連日ドロテアにいびられていた。豪商レーゼイ家の長女。

＊ナタリエ
ユリエの妹。レーゼイ家の次女。黒目黒髪。
僕の守り役のイヴァル・ケニングの愛妻。
一男一女の母。夫には「ナタリエちゃん」と呼ばれている模様。

＊冷泉家康
ユリエとナタリエの父。
帝国ではイエンス・レーゼイと名乗っている。
ミズホの王族の血を引くレーゼイ家の末裔で有る事を誇りにしており、先祖伝来の暮らしぶりを大切にしている。
外国と手広い商いをし、帝国内のいくつかの物産の独占的な利権を握る豪商。
当然黒目黒髪。

＊イヴァル・ケニング
国璽尚書を務めるハーラル伯爵の二男で若手の有望官僚。
僕自身が守り役に抜擢した。
イケメンの秀才。
財政改革に辣腕を振るう。
新婚時代を過ぎても妻のナタリエとラブラブイチャイチャの家庭生活を送っている模様。
大宰相とはツーカーの仲だが、母上にも父上の愛人たちにも受けは良いらしい。

＊スコーネ侯爵エリク・ベルワルド
大宰相。名門ベルワルド家の三男。
十代のころ宮廷の様々な貴婦人たちと浮名を流す。
ワッデン戦役で目覚ましい働きをした後、高等文官登用試験に合格し、実力で執政官となる。
三期連続執政官となり、現皇帝により史上最年少の三十歳で宰相に任じられる。
宰相は皇帝が指名し、皇帝以外何物にも罷免できない。
執政官十二人で構成する御前会議を仕切り、意見が割れた時、最終

決定を下すのは主に宰相。
音楽家たちのパトロン。
僕が六歳になった頃から母である皇后の公式愛人となる。
実は努力の人であり、愛国者でもあるが、灰褐色の髪を振り乱しながらグレーの瞳で反対派を睨み付け、しばしば恫喝するために『灰色の悪龍』と言うあだ名をつけられている。

＊ウルリカ・ベルワルド・アブ・スコウホイ
僕の側妃候補の一人。皇后の愛人である大宰相のスコーネ侯爵エリク・ベルワルドの三女。小柄。美声。
実母の高級娼婦マリオンは滅ぼされたスコウホイ王国の王女。男を惑わす美声の持ち主とされた。
プラチナブロンドの髪に紫の瞳。

＊グラーン侯爵夫人・カレン・ケーゼ
父である皇帝の公式愛人。僕との関係は悪くない。大宰相とも世評ほど悪い関係では無い。
宮中の保守派の老人たちからは忌み嫌われており『森の魔女』と呼ばれている。
高名な劇作家オーレ・トマソンの未亡人。
文化人を集めるサロンを主催し、国政に強い影響力を持つ。

＊セルマ・トマソン
僕の側妃候補の一人。グラーン侯爵夫人の長女。
すらりとした柳腰。
知性的な文学少女。

おしゃれにあまり興味は無く、社交界も苦手らしい。
僕とは交換日記をやり取りする仲。
亡父オーレは都市国家・ミッケリの三元老を務めるサマロキ家の捨てられた双子の片割れであった。

これから更に加筆の予定です。パート2をつけるかもしれません。
衛門とかドランメン伯爵のスヴェンとか、まだ有りそうです。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・2

「大公殿下は皇太子殿下が本当にお好きなのですねえ」

ぼやいているのはロルフの乳母でどこかの子爵夫人だ。

ロルフは正妻である母上が生んだ皇子なので、自動的に公爵の位を得た。皇帝の嫡出子であるために並みの公爵と区別して『大公殿下』と呼ばれる。父上の弟たちは全員庶子なので、今現在、大公に該当するのはロルフだけだ。

乳を含ませ、おむつを替え、発熱も無く、特に虫刺されなども認められないのに泣き続ける身分だけは変に高い赤子を前にして、経験の浅い乳母は今日も途方に暮れていた。そこへ僕が通りかかりロルフを抱いてやると、すぐ泣き止んだのだ。

こうした場面にもう十回以上遭遇している。

乳母はホッとしてはいるものの、自分が抱いても泣き止まないロルフを恨めしく思うと同時に、僕の『お節介』をありがた迷惑に感じているらしい。

「赤子は心もとなくさみしいから泣く事も有るのです。その気持ちに添うてやる様なつもりで抱いてやってください。そうすれば、この子の気持ちも安らぐでしょう」

僕が毎回注意しても「気持ちに添う」と言う事が、この乳母には理解できないようだ。ユリエにはごく自然にできていたのに。資質の問題なのか心がけの問題なのか、良くわからない。僕が説教をするのも筋違いだし、困った。ともかくロルフを抱いたまま、母上のおいでになる部屋をめざす。そして母上にロルフをお渡しすると、人払いが命じられた。乳母はホッとした顔つきになって部屋を出た。やはり、職務に対する義務感というか心構えに問題が多い。ああも

露骨にホッとして見せるとは、乳母としては問題だろう。いや、あの程度が普通なのかもしれない。ユリエが献身的でありすぎ、逆に僕の乳母を罷免されたドロテアは酷すぎた。そう考えるべきかもしれない。

「あれは乳が豊かで健康で身分もふさわしいので決めた乳母ですが、ロルフとはどうやら相性が良くないようねえ。どうしたものでしょう」

母上は軽い気持ちから僕にこんな話をするが、僕の受け答え次第であの子爵夫人は罷免され、その一族は面目を失う。だからそれがなんだ、というのが母上の思考法だろうが、僕は誰の恨みにせよ買いたくない。

「ロルフはグスタフが好きねえ。前世でも兄弟だったとか友であったとか、何か有るのかしら？」

「さあ、どうなのでしょう。僕には特に何も感じられませんが」

何というのか、ロルフの思念はまっさらな感じだ。時折、僕を見て「うれしい」と感じてくれている感情の波だけが伝わる。

「よしよし……」

赤ん坊らしい柔らかな頬を僕が指先で軽く、ちょんちょんと突いてやると、笑い声を上げた。

「まあ、ロルフごきげんねえ」

僕は母上とロルフに別れを告げると、御前会議の行われる会議室に向かう。

今日の議題は外交問題だが、当然それに関連して僕の正妃・側妃をどうするかと言う話の流れになった。

父上が隣国ワッデンから僕の正妃を迎えるべきだと言うお考えを珍しくはっきり表明なさると、大宰相以下誰も反対しない。出来な

いのだろうが。国境地帯のドランメン伯爵領における領主の健康問題は誰も知らないようだ。

「恐れながら、殿下のお相手の王女は如何なる方であられましょうか？」

父上は外交官達から直接の報告を受け、内密に慎重に事を運んでおられるのだし、握っておられる情報の中には並みの貴族では知りようのないトップシークレットも含まれる。それでも、執政官たちには差支えの無い範囲で王女に関する情報が伝えられる。そうでなくては議論のしようも無いから、当然だろうが。

「ワッデン国王には二人の王女が居る。嫡出の六歳の長女と生まれたての庶子だ。六歳の第一王女アネッテは二人の兄に次ぐ第三位の王位継承権を有する。皆も知っての通り、ワッデンには歴史上幾人かの女王が存在した。そして、中にはかつて我が帝国の皇太子を夫に迎えたものもいたわけだ」

「おお。女傑とも魔女とも呼ばれた女王ですな？」

「三度結婚し、あまたの子をもうけ、五人の美しい娘たちをそれぞれ有力な国家の正妃とし、長らくルンド全土に平和をもたらすのに貢献したという女傑ですな」

「最初の夫君であった帝国の皇太子、のちにグスタフ三世陛下となられた方との御縁が円満に続いておりましたら、帝国の所領は大きく広がっておりましたでしょうな」

その、帝国の所領云々という言葉に父上は大きく頷かれた。

「アネッテの兄二人は極めて体が弱いらしい。季節が変わるたびに度々寝込むそうな。従って第一王女のアネッテが王位を継承する事も有り得ぬ話ではない」

「ならば御婚儀を整えられれば、皇太子殿下がワッデンの王配殿下も兼ねられる可能性も高いのですな」
「英明で忍耐強くあられる殿下の御資質、御器量ならばかつての三世陛下の様な事もございますまい」
「さよう。アネッテ王女と御円満に夫婦として添い遂げていただければ、それだけでも大変な国益となる可能性は大きいですな」
「このグスタフが即位すればグスタフ十一世と呼ばれる事となろうが、我が息子ながら実に将来楽しみだ。生きてその治世を見ることが適わぬのが、いささか悔しいぞ。上手くすれば帝国とワッデンの連合国の主となる事も夢ではあるまい」

父上のその言葉に、その場は妙に盛り上がったが……父上の死が前提の話で盛り上がる奇妙さ、危うさを皆忘れているようなのが、僕には奇異に感じられた。

「して、そのアネッテ第一王女はどの様な方でしょう?」
「性格までは良くわからぬが、王子たちより賢いと言う噂だ。少なくとも神童として名が通っているグスタフの妻になっても不似合ではないと言う事らしい」
父上が言うように僕の名がそれほど浸透しているかはいささか疑問だが、愚かな妻は確かに困る。

聞けば王女はなかなかに大変な境遇で育ったようだ。

王子二人とアネッテは現在の王の最初の正妃の産んだ子だが、生母の死後父王が迎えた二人目の王妃によって監禁されて育ったらしい。監禁はなんと四年に及んだようだ。
現在の王は善良ではあるが、大した人物ではないと言うのが帝国での一般的な評価だ。後妻の横暴を抑えられず、世継を含めた三人の子供らを守れなかったのだから、確かに不出来な王だ。

つい先月宮廷内でのクーデターが成功し、後妻とその協力者らは殺害され三人の子供らは救出された。

「邪な王妃の策謀を最初に探り当てたのはドランメン伯爵の功績だ。その後は我が帝国の近衛武官が密かに忠臣等の組織と接触を続け、このたびの粛清にも手を貸した。だが、先の戦役での敗北で、ワッデンの民の帝国に対する反感は強い。それ故、表向きは帝国の関与は存在しなかった事になっている」

参ったな。ドランメン伯爵がそんな手柄を立てていたとは。病で臥せっていなければ、今この場で面と向かって語し合う羽目になっていただろう。ちなみに今回の縁組はワッデン側からの申し入れだそうな。

「いわゆる忠臣らも一枚岩ではない。長男の王位継承を確実にしたい連中にとって、兄より賢いとされるアネッテ王女は目障りなのだろうよ」

父上がそこまで国際的な政治工作に御自身で手を染められたなんて、初めてではなかろうか。お話の趣旨は良く分かったし、執政官どもが言うように「ワッデンに恩を着せ、抑え込む良い機会」「王女にワッデンの王位継承権があるのは悪くない」のだろう。だが、僕は釈然としなかった。

皆、王女は人質であると受け止めており、僕にはその人質を「飼いならす」役目が期待されているのだ。

「皇太子殿下は女心の機微を良く御存知のようで、側妃候補のお二人も殿下に夢中だと言うではないですか」

「おう、その噂は私も聞きましたぞ」

「年配の御婦人方も皆、皇太子殿下は良くできた方だと褒める事しきりですからな」

「王女とはいっても普通の六歳の少女でしょうからな。殿下なら上手くおやりになれましょう」
「もう一度ワッデンと戦争をやるに事に比べたら、こういっては何ですが安いもので」
散会後、父上と二人きりで話した。これも珍しい事だ。
「父上、ワッデン戦役の傷跡は、今も大して癒えていないと言う事でしょうね」
「お前のじい様が始めた戦だが、本来ならばやらずに済んだ戦だったと思うのだよ。戦は良くないなあ。どうせ皇帝や皇太子は政略の具である事からは逃れようがないのだ。政略結婚で戦が防げ、人助けにもなるなら、良しとせよ。王女の身の回りにはどうやらろくな者がおらぬようだ。今も食事に事欠き、好きな絵も思うように描けぬ有様らしい」
「本来は王女の手元にあるべき金品を勝手に着服するとか、横流しする不届き者がいるのでしょうか？」
「ああ、そうよな。そうかもしれん」
「真実、食事にも事欠くなら、早めに帝国側に引き取った方が良いでしょうか？」
「おお、それが良い。それこそドランメン伯爵家に王女の世話を命じるか。王女が打ち捨てられたようにして住んでいる離宮から、馬車で半日かそこらの道のりらしいからな」
「……はい」
「ユリエが気がかりか」
「気にかけるべきではないでしょうが」
「ふむ」
父上は面白いものを見たという様な、ニヤッという感じの笑いを一瞬浮かべてから、こうおっしゃった。
「ドランメン伯爵夫人は僅かの内に、城内の使用人や領内の代官ど

もを心服させたと聞く。哀れな六歳の少女の面倒を見るぐらい、お手の物だろうと思うがな。どうだ?」

父上のおっしゃる通りだろう。ただ、僕の正妃となる少女をユリエに世話して貰うというのが、引っ掛かっただけだ。結局僕は父上の案に同意し、父上と僕の連名で早速ドランメン伯爵家に対して依頼状を送った。

十日ほどして、ユリエ、いやドランメン伯爵夫人から正式な返書が父上のもとに届いた。僕の所に居た時に公文書の取り扱いの手伝いなどもしていたのが、役に立ったのだろう。皇帝に対する返書としての体裁を整え、格式にふさわしい見事な筆跡の手紙を見ると、ユリエが名実ともに伯爵夫人となったのだと実感する。

「アネッテ王女の御希望で近隣の村に潜んでいた乳母と乳母の娘を当家に引き取りました。御身分格式にふさわしい御暮らしぶりは、おいおい御指導申し上げるとして、当面はお心を癒し、お体を労わることを第一にお過ごし頂けるように努めます」

そんな内容の他、王女のために用意した物品のリストや、都で用意して送ってほしい品物のリストもついていた。帝国での正式なディナーに用いる食器のセットや、宮中での典礼集、などというのはユリエがマナーを仕込んでくれるつもりなのだと思われたし、外国産の珍しい色合いを含んだ水彩絵の具のセットや絵筆などは王女の希望なのかもしれない。

僕はユリエに大いに感謝しながらも、ますます僕らの縁は遠ざかっているのだと思われて、悲しかった。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・２（後書き）

アネッテの設定を四月十九日に変更しました。

僕は他人の心が読める、いや、読める場合が多い、あるいは読める場合が有る、というべきだろうか。中にはひどく読み取りにくい人、読み取る事を僕がためらう人も居る。たとえば父上だ。

昨日の二人きりで話した折の、あの一瞬浮かんだ何とも言えないニヤッとした笑みを見て、僕は父上が思い浮かべられたであろう何かを読み取ることを拒否した。ユリエに関する何か重大な、そう僕にとっては重大で、父上にとってはどうでも良い事、そんな事であったのだろう。

「嫌な汗をかいたな」

今の今まで、木陰で眠っていたのだ。夢の中でユリエと夫たる男の姿を見たような気がする。時間が移り変わって、気が付くと顔の真上に日が射していた。汗をかいても当然か。

ん？なんだ？あれは？

（いやだ！　いやだ！　怖い！　何、この音、怖い！）

ひどく単純な波動だ。恐怖にまみれている。

幼い子供だろうか？

それとも人と波動の馴染みやすい生きもの、例えば、犬、猫の類か、家畜類か？

規則的な、それでいて重い地響きがする。川辺の道を黒い馬が血相を変えて暴走している。

いかん、背中に誰かがしがみついているではないか！

「サウリっ！　あの馬を止めろ！」

「はッ！」

僕は小石を拾うと、良くねらって馬の太腿にめがけて二個続けて投げつける。上手く命中したようだ。

（痛い、なに？　痛い！）

（とまれっ、痛いのが嫌なら止まれ、止まるんだ）

スピードが緩んだところで、僕の護衛騎士・サウリが横ざまから馬の手綱にしがみついた。更に騒ぎに気付いた皇室専用の厩の者たちが三人一斉に取りついて馬が止まった。

僕は丘を駆け下りて馬を宥め、右耳についた白い花飾りを取らせた。白い絹の造花に真珠を縫い付けてある。やはり原因はこれだ。僕は首筋を軽くたたいてやりながら、言い聞かせた。

（変な音は、止んだぞ、な、大丈夫だ）

（やんだ、やんだよ）

「殿下、馬が大人しくなりましたな」

「原因はこの花飾りだ」

サウリも厩の者たちも怪訝な顔だ。

「振ると音がするのだが、これは馬が嫌う音なのではないか？　馬が早く走ると音が激しくなる訳だな」

厩の者たちに渡すと、確かにそうです。なぜこんな仕掛けを、いったい誰が、という反応が返ってきた。

真っ青な顔で馬の背中にしがみついていたのは、見知った顔だった。

「セルマ殿、セルマ殿ではないか」

「あ、申し訳ございません」

「セルマ殿、この花飾りを馬の耳につけたのは誰です？」

「えっと……」

その瞬間、セルマの脳裏に一人の女の顔が浮かんだ。あれは、たしか、セルマの教師役の女だ。ヒステリックで小意地の悪い物言いをする女だとしか記憶にないが……

「サウリ、馬の轡を取ってくれ。ゆっくり侯爵夫人の住まいにお送りがてら、話を伺おう」

僕が鞍の前輪に跨り、セルマは僕の背中につかまらせた、セルマの方がまだしっかり頭一つは背が高いので、この方が収まりが良いのだ。体を密着させていると、テレパシーは良く働く。

「昨今宝石をあしらった、こうした飾りを馬に付けるのが宮中の流行だとか何とか言ったのは、誰です？」

「家庭教師です。私が馬に乗る時に『忘れてはなりません』といって、わざわざ馬丁に命じて付けさせたのです」

「この馬は元来、大人しい馬のようですね」

「ええ。メランは良い子のはずなのに、いきなり暴れ出して、驚きました」

なるほど、この黒い若い馬の名前はメランか。

「いつも、この川べりを走るのですか？」

「ええ。自分の住まいに近く、めったに人に会わないので……」

「いつもひとり？」

「いつもは……」

セルマの脳裏に一人の中年男の顔がちらりと浮かんだ。普段は馬に乗って付き従う役目の者らしい。

「ついてくるはずの、護衛も居ないのですね。こりゃあ、変だな……」

（誰かの仕業ね……私が邪魔な人？　母上が邪魔な人？　見当もつかない）

「サウリは侯爵夫人の所の灰色の髪の護衛役の男に、見覚えは有るか？」

「顔ははっきり記憶に無いですが、どちらかの手の甲に刀傷が有り、

酷いスコウホイ訛りが有りました」
　サウリは郷士の息子だ。幼いころスコウホイ出身の乳母に可愛がられて育ったらしい。
「スコウホイ出身の男かな？　偽名かも知れませんが、何と名乗ってました？」
「私には個人的な事は何も話したことが有りません。エゴン・ステノと名乗っていました」
「あなたの家庭教師役の、琥珀色の目で栗色の髪の女は、何という名です？」
「ハスキル夫人です。スザンナ・ハスキルです。元はどこかの男爵令嬢だったとか。最初にエゴンを連れてきたのはハスキル夫人です」
「雇い入れたのはあなたの母上でしょうから、お話を聞いた方がよさそうですね」
「どうか、あの」
「大げさにしないでほしい、ですか？」
「はい」
「でも、いったい誰が攻撃目標かわかりませんし、調べ無い訳には行かないでしょう」
（私ではなくて、母上を狙って？　ああ、そうなのかしら……）
「でもあの、私が……」
「あなたがしっかりしていれば、ですか？　あなたに落ち度が有るわけではない。それでもあなたは狙われたのです。理由は二つに一つでしょうね。あなたが僕の側妃候補だからなのか、あなたが侯爵夫人の娘さんだからか……いや、もう一つ考えるべきか」
「もう一つですか？」
「あなたの実の父上の御血筋の所為かもしれませんね」
（亡くなられた父上が？　何か大変な秘密でも背負ってたのかしら？）
「母上からは何も聞いておられない？」
「はい」

「ふうむ」

侯爵夫人は父上の子を身籠っている。噂ではつわりの時期らしいが、父上の前では露ほどもその気配を見せないらしい。大した克己心だ、忠誠心だと持ち上げるものも居れば、そうまでして寵愛を独り占めしたいかと呆れ、憎むものも居る。少なくとも体調不良なわけで、脇が甘くなっていたのかもしれない。娘に対する守りが薄かったのを狙われたのだろう。誰が狙ったのかは皆目不明だが。

「殿下……」

（お慕いしております。私は母上の様に想いを口にする事など出来ませんけれど）

その想いと共に一つの情景が僕の脳裏に飛び込んでくる。頭一つ分以上セルマより背が高くなった僕が、セルマを抱きしめている。ふむ。恋に恋する乙女と言う訳なのだろうが、それだけで片づけられないだろう。セルマを側妃とすると言う事は、その一生を引き受ける事だ。セルマの夢も幸せも全部、引き受ける事なんて出来るだろうか？　セルマだけではない。ウルリカも、そして僕の正妃になるであろうアネッテという王女も。

父上が時折すべてを放り出して、街に出かけられるお気持ちが痛いほど分かった。

「重い、な」

「あ、申し訳ございません」

寄りかかった体が重い、という意味にセルマは取ったようだ。まあ、それが普通だろうが。

「いや、良いのです。ですが、僕はまだ、子供ですからね。背負いきれないものが多すぎます」

（ああ、殿下は重い責任あるお立場で、大変でいらっしゃるのに、

私ったら……）

何か安請け合いするような言葉を吐くのもためらわれる。僕との仲は不確定で不確かだ。僕が約束を自分で破る事はしないが、国際的な情勢や父上のお考えの変化など、これから先の事は誰にもわからない。

僕の沈黙を、遠回しの拒絶と受け止めたのだろう。セルマがだんだん暗い気分に落ち込んで行くのが分かる。負の感情のスパイラルにはまり込んだようだ。

（ああ……あの可愛らしいウルリカ様がお気に召していらっしゃるのかもしれないわ。それに、今度は隣国の王位継承権のお有りの王女様が御正妃にお決まりになったそうだし……私なんて、殿下の御迷惑にしかならないのかもしれないわ）

そんな事は、僕は思っていない。

「あなたには、あなただけの良いところがお有りなのですよ、セルマ殿。もっと自信をお持ちなさい」

それは本当の事だ。だが、僕がセルマの夫となるかどうかは不確定だと言うだけの事だ。

「申し訳ありません」

「悪くないのに、謝るのはあなたの良くない癖だ。私とあなたの人生がどの程度交わって行くのか不確定だと言う事は、わかってますよね？」

「はい」

「正妃を迎える事になりそうだと言う事も、御存知ですね」

「はい」

「もし、あなたが僕の側妃となっても、あなた一人の僕でいて差し上げることは、今も、これからも、難しいでしょう。そして、それは僕が望んだわけでもあなたが望んだわけでもない。でも、あなたと一緒に生きることになれば、互いにとってより良い物であってほしい。そう願うだけです。今の僕に言える事は、この程度でしかないのです」

「ええ……」
あまりに悲しそうな声で、僕もちょっと言い過ぎただろうかと思った。
「ごめんなさい」
「殿下」
「ああ、もう、お宅の門だ」

すると驚いた事に、大量の宝石を縫い付けた豪奢なドレスを纏ったグラーン侯爵夫人自身が、門から転がり出るようにして我々を迎えた。
「まあ、殿下、ありがとうございます。本当にありがとうございます」
侯爵夫人は一種の興奮状態で、それ以外の言葉が出てこないみたいだった。それでも促されるままに僕が小さいが金のかかった建物の中を突っ切って客間に入ると、意外な先客がいた。大宰相だった。

「殿下！　ああ、セルマ殿も御無事で、良うございました」
「意外な所でお会いするな、何が有ったのだ？」

何と、大宰相の邸が襲撃を受けたのだという。
「ウルリカが自室の戸を空けました途端に、いきなり矢が三本撃ち込まれまして……」
（肝心な事を大宰相は僕に隠している……何をそんなに怯えているのだろう）
「脅迫文でもついていましたか？」
どうやら図星であった様だ。
「僕には見せられない、そういう事ですね？」
「で、殿下……」
その脅迫文の文面が大宰相の意識から読み取れた。そして強烈な良心の呵責、更に開き直りも……

（逆賊エリク・ベルワルドはスコウホイから手を引け……か）

「あなたは……あなたともあろう方が、ネードの鉄鉱山と製鉄所で」

スコウホイにあるネードの鉄鉱山と帝国直営の製鉄所の事業は、莫大な権益を生み出す。そもそもそれを始めたのはこの大宰相ではあったが、だが、だからと言って、不正行為を働いても構わないと言う事にはならない。権限を悪用して勝手に増産を命じ、帳簿類を改ざんして、無理に増産させた分を海外、主にミッケリで大々的に売り払い、相当な金額を取り込んでいたのだ。鉱山で罪なき民に強制労働を強いて、どうやら大規模な落盤事故まで発生したようだ。その事が今回の脅迫事件に絡んでいるらしい。

「で、殿下、どうか、どうかご内密に」

なぜ、悪事が僕にばれたか大宰相は訳が分からず、驚愕していた。

「気の迷いですか？　どういう訳です？」

そもそもこの大宰相は財政再建のための宮廷内の経費節減に熱心であったはずなのだ。ふと見るとグラーン侯爵夫人が顔を青くしている。そうか、ミッケリか。不正に増産させた銑鉄のインゴットをミッケリで売り払うにあたって、侯爵夫人も重要な役目を果たしたのだ。

この、無駄に豪華なグラーン侯爵夫人のドレスも、この邸も、資金の出どころは不正資金か……するとセルマの馬が暴走した件も脅迫と言うよりは、警告か？　不正から手を引けと……元来、大宰相も、侯爵夫人も馬鹿げた贅沢とは無縁であったはず。自分自身の優れた才能で世に立つ人であったはずなのに……

「申し訳、申し訳ございません」

大宰相はパニック状態だ。

「お許し下さい」

侯爵夫人は床に崩れ落ちるようにして，平伏した。

「原因は僕の両親ですね。わかりましたが……やはり許される事では有りません」

どうやって、落とし前をつけるべきか、困った問題だ。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・4

「兄さん、一番テーブルに黒ビール二杯と焼き牡蠣二十個、タラのコロッケ十個」
「おい、ステファン、俺もタラのコロッケ五個」
「兄さん、七番テーブルにタラのコロッケ五個追加」
「ステファン、三番テーブルのカニピラフ三皿上がったよ」
「姉さん、三番さんは一つが目玉焼き添えだよ」
「おっといけない。よし、上がったよ」

僕は近頃時折、下町の海鮮料理が名物の料理屋兼旅籠『大女亭』で働いている。僕はここではステファンというセカンドネームで通している。グスタフという名は皇太子か皇帝の物であるが、ステファンという名の男はあちこちにいるからだ。

ここに居る事は父上にだけこっそり打ち明けてあるが、僕の侍従も知らない。急用は父上に申し出よと命じてあるだけだ。ただ、僕付きの護衛騎士である二人と、父上がこの料理屋を見張らせている武官が五人、一階の飲み屋兼食堂と二階の宿泊用客室に目立たないように詰めている。

兄さんも姉さんも共に本当に血のつながった兄と姉なのだ。二人は父上が先代のここの女将スヴィ・アイロとの間にお作りになった庶子なのだった。スヴィは大柄な父上よりも背が高い大女だったそうだ。兄も姉もずっと亡き母親の残したこの店で働き、貴族社会とは無縁で生きてきたのだ。

「元はスコウホイ領内の海女で『どえらい儲け口』を探しに都にやってきた豪快な女だった」そうで「あんたみたいなひ弱でウジウジした奴が皇太子殿下なんて思わなかった」とか「騙された」とか言われながら何やら気が付くと深い仲になっていて、子供が一人なら

ず二人までできたらしい。即位後貴族に列すると言う話をなさると「あたしの目の黒いうちはお断り。子供二人ぐらい自分で食わせる」とはねのけられたそうだ。

「怪力の持ち主でビールの大樽を二個、軽く担ぎ上げるわ、酔っぱらった大の男二人をひょいひょい掴みあげて、店の外に放り出すわ、武勇伝は数知れずだ」そうな。古い客たちからも幾つもの逸話を聞かされた。

「決して美女ではなかったが、働き者で正直で気風のいい女だった」「ガサツなようでいて、その実気配りが細やかで、料理上手で綺麗好きだった」

気風の良い働き者の女将はある日突然倒れ、帰らぬ人となったそうだ。それから二年になるらしい。

ある日父上が突然「共に市中に行こう」と仰せになったのが、ここに来るようになったきっかけだ。店に着くなり父上がいきなり調理場に入られて「ヤン、アニタ、これが弟のグスタフ・ステファンだ」と僕を紹介なさったのには驚いた。

事情が良く飲み込めぬままに「お初にお目にかかります」と礼をすると、二人には「よせやい」「弟なんだから他人行儀な挨拶は無しだよ、無し」なんて言われてしまった。

兄のヤン・アイロは十八、姉のアニタ・アイロは十七、共に父上が十代の皇太子時代に生まれている。見るからに善良で働き者なのが良くわかる。

「親父さんたら良い加減だなあ。こういう事はさ、前もって知らせておいておくれよ」

「そうそう。こっちも心づもりってもんが有るのさ」

「御馳走ぐらい、用意したのにさ」

「そうだよ。ケーキの一つも作っておきたかったよ、まったく」

散々な言われ様だが、スケジュール管理もいい加減な父上らしい。僕がそこそこ料理が出来る事、シーツのかけ方、アイロンのかけ方も悪くない事を父上が紹介すると「じゃあさ、やってみな」といきなりアニタに連れられ二階の旅籠のベッドメーキングをやる事になった。ユリエの仕事を見てきたおかげで、ハウスキーピングは結構まともにやれるのだ。

「あれまあ。驚いた。ぴっしり皺ひとつなく、綺麗に仕上がってんじゃない。あんた皇太子で食いはぐれたら、旅籠で働きなよ」

「今度は俺と調理場の方、やってみてくれ」

ヤンにエプロンを借りて身に着けると、一人でやってきた旅の商人らしい男がビールと茹でた豆、ポタージュにオムレツを注文したのを僕がサーブし、オムレツまで焼いた。

「妙に美味いオムレツだった。帰り道にまた寄るぜ。釣りは坊主にやるよ」

釣り銭をやった坊主がこの国の皇太子とは、思ってもみなかったようだった。

「おうおう、上出来じゃんか。あんた、神童だって噂は聞いてたけどさ、何でもできるんだなあ」

宮中での褒め言葉と違って、何の裏も無いヤンの言葉は純粋に嬉しかった。

娘と息子二人が散々働いているのに、父上は勝手に手酌でワインを飲んでいた。

「親父さん、それ、家で一番高い酒じゃんか。客の分が無くなっちまったぞ」

「すまん、すまん、あとから代わりの酒を持たせる」

「この前みたいに宮中御用の封印付きは困る。俺らが盗みでもしたように誤解されたら事だぜ」

「わかった。レーゼイ商会の品物を回す」

そうなのだ。ワインの流通に関してもレーゼイ商会の力は大きい

のだった。
「いつぞやみたいに、地下室に入りきらない量ってのも困るよ」
「そうか、どうも適切な量がわからん。そうだ。この弟にどのぐらいの量が良いのか地下室を見せておいてくれれば、大丈夫だろう」
そういわれて、地下室に降り、ワインを頼むついでにチーズとハム、ベーコンも頼んでしまう事にする。
「良いのかい？　そんなどんぶり勘定」
「別に大丈夫ですよ。どこかの愛人の髪飾りかドレスになる分から資金を流用するだけで、まともな税金なんかは手を付けていませんから」
「その辺の事情が分かる七歳って、あんたほんとにすげえな」
こうして兄と姉のいわばテストに合格して以来、この店で働かせてもらう許可が出た訳で、僕も宮中でのあれやこれやが嫌になると、気晴らしにここにやってくる。何というのか……ここでの会話は本音で温かい。
だが、ここ三月ばかりは気晴らしのためでは無い。情報収集が目的だ。
ネードの鉄鉱山と製鉄所をめぐる大規模な不正について詳細な報告書を大宰相自身にまとめさせ、早急に父上に提出するよう命じた。今現在は父上の秘書官たちがその報告書を精査し、事実関係を調べ上げているはずだ。それとは別に、大宰相は侯爵夫人と協力して不正に強制労働をさせられたスコウホイの住民に正当な賃金の倍の金額をそれぞれ支払い、落盤事故の犠牲者の家族にはその家の年収にあたる金額の弔慰金と寡婦・孤児に対する生活資金を負担するようにさせた。
「これでまた不正が横行すれば、スコウホイは大変な事になります。

独立戦争が巻き起こるかもしれませんよ。事実、今回の警告をした連中は帝国領からの独立を志向しているようですから」

昨今の様子を見れば、父上に僕の言葉は重く受け止めていただけたのだろうと思う。

何しろセルマの乗馬中の騒ぎの一件から三日後に、大宰相と侯爵夫人のそれぞれの邸に警告文が送付されてきたと言う事も有ったから。文面は共に同じで「スコウホイから帝国は完全に撤退せよ」というものだ。そして最後に『スコウホイ解放同盟』とあった。だが、いまだにその同盟がどの程度の組織なのか、誰が指導者なのか、まるで情報が無い。

大宰相と侯爵夫人が結託して不正資金を取り込んだのは、皇帝である父上と皇后たる母上の気まぐれ、あるいは愛人に対する不誠実とも言えなくはない事を、僕は遠回しな表現を使ったが、両親にはっきり理解させた。父上は自覚していたようだが、母上は自分の言動が招いた結果に驚いていた。

「直接的に銭金で父上母上の気を引こうという訳では無いのでしょうが、目新しい事、気の利いた事を立て続けにやろうなどと企てると、相当金はかかるものです」

お二人ともそれなりに財政とか租税の負担率とか理解はしているが、庶民の金銭感覚を理解できていない。特に殆ど庶民の暮らしを見たことも聞いたことも無い母上は、その傾向が強かった。

「ともかくも有能で、民を思う清廉な人材を選りすぐられて、スコウホイに速やかに配されますように。そして、前任者はすべて退任させるべきです」

僕のこの提案は言いだした僕自身が驚くほど速やかに実行されたが……大宰相と侯爵夫人の罪状を明らかにする査問会は開かれなか

った。本来なら御前会議を開き、更には全官僚の意見も求め事態の収拾にあたるべきだが……両親はそれを拒否した。

後は侯爵夫人のサロンに集う自然科学系の学者たちを僕に紹介してもらい、鉱山と製鉄所の安全対策と環境汚染に対する対策に関して、調査研究をすすめさせた。既に鉱毒問題が深刻化しつつあったのだ。こちらも対策を急がねばならなかった。

「こうした有益な研究は、あなたの宝石だらけのドレスの何百倍も父上の御気持ちを引き付けますよ」と言ったのは事実で、別に嫌味のつもりは無かったが、侯爵夫人は不快であった様だ。まあ、妊娠中の女性は感情が不安定になりがちなものらしいから、仕方が有るまい。その話を父上にすると、笑われた。

「父親の女にさほど気を使う必要など有るまいが。お前は歴とした皇太子なのだし、アレからすれば自分の不都合な秘密を内緒にもしてもらっている義理も恩も有るはずなのだからな。機嫌がどうなろうと、真実ならば遠慮なく言ってやれば良いのだ」

「僕の弟か妹か知りませんが、ともかくも無事に生まれてほしいですから、侯爵夫人には安らかな気分で居てもらう必要が有ります」

今回の処置を僕が不満に思っている事と、侯爵夫人の胎内の子が僕にとっても血のつながる『家族』であることは同時に事実なのだ。僕は国を支える人々への重大な裏切り行為に加担したという罪悪感が有るが、良くも悪くも御育ちが良すぎる父上と母上には、そんな感覚はあまり無さそうだった。だからと言って、二人を責め立てても何の良い結果も生まないのも、また、はっきりしている。

そんな話の後、父上は僕を初めてこの『大女亭』に連れ出したのだった。最初は僕を気晴らしのために連れ出して下さったのかと思っていたが、ここはスコウホイ出身者が多く立ち寄る店であること

に後から気が付いた。特に『タラのコロッケ』はスコウホイの人々にとって、大変に懐かしい味であるらしく、常連も多い。その常連も大半が何らかの形でスコウホイとつながる人々のようだった。

「なんか近頃スコウホイに赴任してきた役人連中のお行儀が妙に良いそうだな」

「ああ。踏み倒しは無くなったし、訳の分かんねえ強制労働も無くなった」

「なんか見舞い金も出たって？」

「働き手が死んじまった家には、なんか食い扶持分の年金を寄越すってさ。嘘かと思ったら、ほんとらしい。何だか手のひらを返すようで薄気味悪いって、皆言ってるな」

「帝国のおえらい様の気まぐれで、御慈悲を賜ったんだろうよ。風向きが変われば、どうせまた似たような事がおこるさ」

そこで同じテーブルの人間が皆頷いた。

「ああ、幾度もそんなことが有ったもんな」

また、同じように頷く。

「人手が不足すれば、昔みたいに奴隷狩りなんぞおっぱじめるかもな」

「そうともさ。今度のネードの一件だって、張本人はピンシャンしてるんだろ？」

「賄賂をばら撒いて、首の皮をつなげたんだろうさ。ま、ありがちな事さね」

「悪龍を打ち取れるのは、宝剣を持った龍殺しだけさね」

「ちげえねえ」

「悪龍は魔女と手を組んでいるらしいしな」

「手だけか？　ちんちんかもかも、ってことはねえのか？」

「さあなあ。それはそれで物騒な話だ」

「魔女の産む子供の父親って、誰だと思う？」

「悪龍だったりしてな」

「けっ、地獄に落ちろってんだ」

ビールを飲んで盛り上がっている都とスコウホイを行き来する「担ぎ屋」だと思われる五人の男達の話に、僕もサウリも武官たちも聞き耳を立てていた。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・４（後書き）

護衛騎士の名前はサウリでした。訂正しました！

「侯爵夫人の胎内の子は、真実父上の御子だ。だが、それをああ街中でも噂されてしまうとは、困ったものだ」

すでに、宮中では面白半分に相当噂は広がっている。父上は苦笑いなさっていた。

「根も葉もないうわさでしょうか？」

「華やかな人達だから人目につきやすく、当人同士にそんな感情が無くても噂になるのだな。侯爵夫人の好みは、庇護欲をそそるタイプだと僕は見ている。大宰相は強すぎる。まあ、この頃はヨレヨレではあるがな」

『大女亭』を出て、黄金宮に戻り、自室へ戻る途中、僕とサウリはそんな話をした。書斎のドアを開けた途端、善良ではあるが役立たずの侍従の一人が「先ほどから大宰相閣下がお待ちです」と伝えた。

「どのぐらい待たせたのかな？」

「門に殿下がお入りになったと知らせが入ってすぐでしたから」

「ふうん、さほどは待たせていないか。お茶ぐらいはお出ししただろうな？」

「あ、はい」

（ふう、お出ししておいてよかったな。それにしてもどこに出かけられるか、侍従である我々には秘密でいらっしゃるなんて……そりゃあ、サウリは腕っ節が強いんだろうけどさ……）

「僕が微行につれて行くのは、腕が立ち、軽はずみな行動が少ない者だ。外国の言葉や習俗、あるいは法令や医学、農業、漁業などの専門分野に知識が有れば、なおの事良いがな」

（……高等文官試験にも武官採用の実技にも合格しない奴なんて、

ダメっておっしゃってるんだよな、たぶん）
「美味い茶を入れる事も、大事な特技の一つだよ。まあ、励みなさい」

ため息をついている、ちょっと間抜けな侍従は放っておいて、客間に入る。

「お待たせしました。何か有りましたか？」
「いえ、あの、その……」
近頃の大宰相は何やら一回り小さくなってしまったようだ。「悪龍がくたばりかけている」と反対派が面白がるぐらい、元気が無い。以前は堂々としていた言葉や振る舞いもオドオドしている。
（困った。だが、殿下に伺うのが一番確かではあるからなあ……困った）
「侯爵夫人の胎内の子の父親の件ですか？」
大宰相は、ビクッ、と一瞬して、頷いた。
「僕はちゃんと分かっておりますよ。あなたと侯爵夫人は巷の悪意ある噂のような関係ではないと。父上も笑っておられました」
「へ、陛下の御耳にまで達しておりますのか！　あの噂が……いやはや、困りました」
「侯爵夫人が噂の所為でヒステリックにお成りなので、父上はお困りらしいですが」
「皇后陛下は、いかがおっしゃってましたか？」
「はあ。『エリクが可愛そう』とおっしゃってました。『森の魔女はエリクのタイプではないの』ともね。僕は息子としてどういう顔をすれば良いのか、実に困りましたよ。ハハハ」
すると大宰相は脳裏に、母上に抱きしめられて「可愛そうなエリク」と言われている光景が浮かべた。何とまあ、だらしない顔だなあ。
「あなたを可愛そうなどと言うのは、母上だけでしょうがね」

僕はそれからワザとらしい咳ばらいをした。
「……あ、ど、どうも申し訳ございません」
僕の咳払いの意味合いを近頃は大宰相も理解しているのだろう。
妄想はスッと消えた。
優秀でエリート街道まっしぐらの人だったので、大宰相は「可愛そう」などと言われたことがどうやら無いらしい。場合によってはかえって頭にくる言葉だと思うが、大宰相にとって母上に「可愛そう」と言ってもらえるのは、よっぽど嬉しいみたいだ。ちょっと母上に教えておこうかな。ああ、まあ、いらんお世話か。

だが、こんなどうでも良いことで頭を使っている場合では無かったのだ。
「殿下、急ぎの書状が届きました」
こうした場合、秘密保持のためにも来客の前では「どこから」とは言わせないことにしている。侍従の意識からレーゼイ家からだと知れたので、聞く必要もないが。
「あ、御取込み中でいらっしゃるようですから、これにて失礼いたします」
「では、また、明日、お会いしましょう」
大宰相は深々と礼をして出て行ったが、出て行きながら（急ぎの書状とは何だ？）と不審に思っている。

「うむ。返事が必要みたいだ。使いの者をここへ呼んでもらおうか」
家康師匠の手紙の内容は驚くべきものだった。
「本日『スコウホイ解放同盟』の代表と名乗る男が、新型火薬の買い付けを申し入れてきました。総量が５００ポルトと桁外れに多いので何に使うのか尋ねますと、答えません。法律で１０ポルトを超えると使用目的を届け出なくてはならないと突っぱねると、店を出てゆきました。店の者に追跡させますと、トリア大聖堂にほど近い下町の料理屋らしき『大女亭』という店に入ったそうです」

５００ポルトと言えば２２６から7キログラムに相当する量だ。それは何のためだ？　発破でもかけるのか？

そしてさらにはその男の人相特徴がまとめられている。いかにも師匠らしく行き届いた事だ。

「プラチナブロンドの髪に紫の瞳？　右の手の甲に大きな刀傷？」

ええ？　ひょっとして、ひょっとするのか？

「馬引け、急げ、大至急だ！　サウリ、サウリッ！　父上にこの書状をお渡ししたら、すぐに出るぞ」

父上は僕の血相を変えた顔を見て、特に腕利きの四人を付けて下さった。

「くれぐれも人命第一にな」

「はいっ」

馬を飛ばして『大女亭』に戻り、兄さんに耳打ちする。

「目が紫で手の甲に傷の有る男っているかい？」

「二階の一番奥の部屋に居る。お前がわざわざ暗い道を戻って来て、いきなり聞くって、アイツ、やばいの？」

「たぶんね。とりあえず捕まえようと思うんだ」

僕とサウリはそうっと忍び寄った。窓の下と、裏口に二人づつ武官を配置している。耳を澄まして様子をうかがうと二人の男の声がする。一人はどこか聞き覚えが有る様な気がするのだが……

「御用商人の所で火薬など、お前は馬鹿か」

「だが、他に強力な火薬を仕入れられる店など無い。ミッケリにでも密航して買い付けないと無理だ」

「都の軟弱な商人など、脅して絞め上げればよかったろうに」

「いや、あの商人は大変な武術の心得が有った。逆にこちらが危なかった」

「ならば、ここも早急に引き払うか」

「そうだな。それが良い。宿のはらいを済ませてこよう」

ドアが開く、途端に僕は足元にスライディングして一人を転ばせ、首に跨り、剣を突きつけた。

（こ、こいつ、皇太子か！）

僕の顔を知っていると言う事だな？

たちまちいつも詰めている五人がなだれこんだ。無事に縄で縛り上げた。

もう一人が窓から飛び降りたが、そこにいた二人が取りつき更に二人が加わって、こちらも無事に捉えた。

「殿下、では、こいつは北の離宮の塔に放り込んでおきます」

「ああ。後から様子を見に行こう」

ホッとした途端、腹が鳴った。

「おい、弟よ、これを食え。何が有っても、食える時にはちゃんと食うんだぜ」

「ありがとう、兄さん」

ハムとチーズを挟んだ黒パンのサンドイッチに温かい蜂蜜入りミルクだ。僕とサウリは貪り食うと、礼もそこそこにまた、宮殿に戻る。

父上の居室に伺うと、まだ起きておられた。

「あの男から、聞き出せる事は聞き出す方がよろしいかと」

「罪人の取り調べなど、お前がせずとも良かろうが」

「ですが、何事か計画をしていたようですし、異変に気付かれれば、連中が身を隠し捜索は困難になります」

「それは、そうだな」

「ですから僕に取調べをお許しください」

「お前に任せっぱなしと言う訳にはいくまいよ」

北の離宮の塔に、秘密裏に皇室にとって不都合な人間を監禁し取り調べる牢獄が有る。通常の監獄とは違い、皇帝が直接その取扱いについて指示し、それが公にされる事は無い。これまでは皇族や貴族のうち謀反や皇位継承の争いの関係者が幽閉される事が多かった。そういうともっともらしいが、皇帝個人に関わる表ざたになると何というか、みっともない痴話げんかの類や恥ずかしい様な内輪もめの関係者を閉じ込めてしまう事ともしばしばだったようだ。言わばこの国の恥部だ。父上の代になってからは、それほど深刻な事例は幸いにして無かったそうだ。

「幾度か微行先で見かけた怪しからん奴らを懲らしめた程度で、本当に幽閉した者などいない」

父上の数多い愛人たちの所で怪しからぬふるまいに及んだり、無礼を働いたような男たちに、少々きつめの仕置きをした程度らしい。だが、今回は事情が違う。事の発端が皇帝皇后の愛人たちの不正で未遂とはいえ、本気で帝国を転覆しようとしたのだ。慎重な対処が必要だろう。

捕えた二人の男は互いに話を出来ないように、それぞれ石の壁と鉄の扉でしっかり防音した部屋にもうけられた独房に入れた。

尋問するにあたって、手錠と足枷を付け鉄格子の中にいる男に尋問するのは、僕と父上だけにした。焼き鏝だの鞭打ちだのは無しにさせている。僕には考えが有った。

「まずはあなたのお名前を教えてください」

男はじっと押し黙っている。

「あなたの髪の色ですが、最近まで灰色に染めてませんでしたか？」

(な、なぜそれに気づいたのだ？　恐ろしいガキだな)

「エゴン・ステノと言うのは本名ですか、やはり偽名ですか？　親

しい人は何とあなたを呼ぶのです？」
「どうせ殺すんなら、さっさとして頂きたい」
男の脳裏に浮かんだ名前はほんの一瞬で読み取れなかった。
「ちなみに、夕食は済みましたか？」
（ビールにタラのコロッケ、茹で豆、チーズ……食いはぐれたな）
ご丁寧に、腹まで鳴った。僕はこの男に親近感を覚えた。
「火薬は何に使う予定でしたか？」
（鉄鉱山と製鉄所を壊すのに使います、なんて答えられるかよ）
「スコウホイの民にとって、鉄鉱山と製鉄所はどんな存在でしたか？」
（もうけは全部そちらに持って行かれて、まともな賃金が払われた試しも無いのだ。ありがたいと思う者は居ないだろうさ）
「あなたの故郷はどんなところです？」
（鉱山の排水で畑は滅茶苦茶になった。川の魚は居なくなった。村ごと鉱山に殺されたようなものだ）
「あなたの御家族は、どうしています？」
「妹は死んだし、おふくろも長くなさそうだ」
この問いには、ちゃんと声を出して答えた。
「帝国の役人たちの所為ですか？」
「そうだ」

もう一人の赤毛の男も結果は同じようなものだった。ただ、紫の目の男が今回の主犯で、計画の立案者である事、赤毛の男は紫の目の男をクヌートと呼ぶ事はどうにかわかった。僕は看守に命じて、二人に皇族が普段口にするワインとハム・チーズ・茹で豆・スープ・パンを出させた。
都合三日、二人の男の所で尋問した。と言うよりは話を聞いて、脳裏に浮かぶものを読み取ったのだが、手荒なことは一切差し控えさせている。赤毛の男の仕事は都とスコウホイを行き来する商人で、親兄弟は死に絶え、妻子も無いようだった。「幼馴染に頼まれて片

棒を担いだ」のがはっきりしたので、放免にした。この男の交友関係もすべてリストアップできたから、監禁する必要性も無いのだ。

問題はクヌートだ。彼は髪を染めグラーン侯爵夫人の邸に入り込んでいた。あのヒステリックな家庭教師のスザンナ・ハスキルも母親がスコウホイ出身でクヌートとは親戚なのだ。

「こんな外部との連絡を完全に遮断した場所に閉じ込めておいて、鞭を食らわすわけでも、焼き鏝を当てるでもない。妙に上等な酒と食いもんをあてがって、何をたくらんでいるんだ？　最近じゃあ散歩やら入浴まで許して、まるでどこかの王様でも監禁しているような扱いだが。俺は何もしゃべらんぞ」

確かにクヌートの言葉は、サウリの言ったようにかなり強いスコウホイ訛りが有るが、聞きなれるとその訛りが彼の人柄の純朴さと善良さにふさわしく感じられる。

「しゃべらなくても、毎日観察するうちに分かる部分が有るのですよ」

テレパシーが使えるなんて言えるわけがない。おかしなものでクヌートという男は「変な小僧」である僕に段々親近感が湧いてきたらしい。

僕は鉱毒被害を知ってすぐに地元の人望厚い医者を探し出して援助し、鉱毒関連の病人を収容し治療するいわば病院を作らせたが、クヌートの老母はそこに引き取った。検閲を入れるが、息子との手紙のやり取りを自由に許している。どうやら老母の体調は次第に回復しているようだ。

「あなた、ウルリカ・ベルワルドとは、いとこですか？　父方の」

「分かっておいでなら、なぜわざわざ確かめるんです？」

塔に収容してそろそろ三か月になるか。クヌートの言葉遣いは近

頃は丁寧で穏やかだ。
「僕の調べ上げた通りなら、あなたは消え失せたと信じられていたスコウホイ王国の嫡流ですね。そうではありませんか？　クヌート・エゴン・ステノ・アブ・スコウホイ」
「ハハハ、参ったなあ」
「あなたが義憤に駆られて鉄鉱山と製鉄所の爆破を企てた、その動機は理解できました。だが、余りにもやり方が稚拙ですね。大体、火薬の入手経路もちゃんと調査していなかった。何をするにも、もっと慎重に計画的じゃないと、うまく行く物もいきませんよ」
「何が言いたい、小僧」
ひどく苛立っているという感じの唸り声だ。
「傷ついたスコウホイを立て直すには、もっと知恵が必要だって事ですよ」
「気に入らないやつだ」
だが、クヌートが言葉ほど僕を嫌ってはいないのは、はっきりしていた。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・５（後書き）

瞳が紫のウルリカの従兄弟はクヌートに名前を変更しました。採用した地名に近い人名じゃ頭ごちゃ付きますよね。すみません！

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・６（前書き）

瞬く間に、歳月は過ぎる？

侯爵夫人の息子が生まれた。つまり僕の異母弟だ。コリング伯爵マウリ・アブ・ランゲランと名付けられた。髪も目もこの国で一番多い褐色だが、顔は良く父上に似ている。

「確かに陛下のお子のようだが、髪も目もいかにも庶民の色合いなのは、母親のせいだ」

そんな陰口を利く老人連中は多い。

マウリが生まれた時の父上の態度は、そっけないほどあっさりしたものだった。あまりにあっさりしすぎていたから、侯爵夫人はどうなるのかと、ちょっと心配したが、杞憂であったようで、またすぐに身籠った。年子というわけだ。老人たちは「慎みが無い」だの「はしたない」だの勝手な事を言って難癖をつけている。

更に同じ年のうちに母上が大宰相の子を産んだ。アンホルト子爵ヨハン・ベルワルドだ。父親譲りの灰褐色の髪にグレーの瞳だが顔のつくりは、僕に似ている。まあ、僕の顔がどちらかと言えば母親似だから、不思議ではない。こちらは大宰相の嫡子扱いで、正式な相続人とされた。大宰相の嬉しそうな顔を見ると「おめでとう」と言ってやりたい反面、やはり僕の気持ちは複雑だ。

侯爵夫人も大宰相も失脚寸前まで行った後なので、派手な誕生祝いなどは行われなかった。片方づつ親が違う弟たちも将来は僕の臣下となるわけだが、どうなるやら。まあ、それぞれなりに幸せであってほしい。そう思うだけだった。と、いうのも、僕はスコウホイの対策をほぼ一手に任されて、忙しかったのだ。

こんなに忙しい七歳児って、そうそういないと思うな。

さて、スコウホイ王家のクヌートだが、宮中の一角に住まいを与

えた。

侯爵夫人の所に潜り込んでいた時は、老けて見えるように特殊メークをしていたらしい。更には背中も丸めてわざと年寄り臭く演出していたそうだ。赤毛の幼馴染は本当に老け顔であったらしいが。

素の顔はまだまだ少年の面影が濃い若者のそれだった。実年齢は僕の十二歳上だ。

「なんだ。まだ、二十歳にもなってないんですか」

「幾つに見えた？」

「三十五ぐらいかな」と僕が答えると、老け顔メイクの所為とはいえ、めげたらしいので、僕はあわてて「素顔になって、ひげをキチンと剃ると年相応に見えます」と言い添えた。

老母も呼び寄せた。だが、彼が隠れたスコウホイの王子であることは帝国でもごく限られた人間しか知らない。表向きは事情が有る外国の王族で皇室の縁者、と言ってある。生活費もそれ相応に支給している。侍従たちにも敬意を持って接するように厳命している。

自由の身になってから、クヌートは学問にはげんでいる。

蜂起のための計画の杜撰さを僕に指摘されたのが悔しかったようで、様々な分野の本を読み漁り、いくつかの学塾に通ってもいる。

だが、あの時、僕が彼を逃し、スコウホイで帝国に反旗を翻す決起集会が開かれ、大々的に『スコウホイ解放同盟』の結成をぶち上げたとしたら、今頃僕は戦場だったかもしれない。

立ち上がりかけていた『スコウホイ解放同盟』を徹底的に骨抜きにするため、様々な懐柔策を総動員した。僕なりに出来る事は全部やった。もっとも、僕の主義として、賄賂と色仕掛けは採用しなかった。確かに短期的には有効でも、後で組織の腐敗という深刻な病が巣食うのは目に見えている。実行したのは全てが長い目でみて有用だと思える策ばかりだ。

たとえばこんな具合だ。或る者は帝国の官吏に登用し、スコウホ

イから離れた場所に赴任させ、組織からの完全な分離を図ると同時に見聞を広めさせた。或る者には十分な補償金を給付し、農地の鉱毒からの回復を帝国の学者と共に研究させた。製鉄業のほかに環境関連の事業でもなるべく多くの人を雇い、帝国本土の約二割増しの賃金を払う事とした。

宮中にはこれらの扱いに不満を言う者もいたが、僕は執政官らを説き伏せ、最後はこう言って押し切った。

「泥沼の様な戦に巻き込まれる事を思えば、安いものではないか」

独立運動の芽を一時的にせよ摘むのだ。その自覚が有る以上、僕は悪役には徹しきれない。

スコウホイ特有の険しい山岳地帯の地の利を生かしたゲリラ戦に持ち込まれれば、大変な事になっていただろう。そうなれば攻撃対象は一般住民が住む集落・街になる。国土を荒廃させ、ただでさえ強かった帝国に対する反発が、今度は凄まじい恨みとなって人々の意識に刻み込まれる結果となっただろう。恐らく帝国軍は簡単には負けはしないが、勝利も実感できない泥沼の様な戦いに嫌気がさしてもやめられない、そんな状態になりかねなかったのだ。

近頃僕は、クヌートと一緒に庭で昼食をとる事が多い。サンドイッチに果物にチーズ、ワインといった程度の軽いものだ。気軽に本音で語りたいから、このような形を取っている。秘密を守る上でも好都合だ。

「そもそもスコウホイに対して、帝国は正当な権利を有していないと僕は解釈していますが、今の帝国では、それを公に口にできません。理解に苦しむ老人たちの差別意識も、世代交代が進めば緩和されるはずです。そうですね、あと十年すれば情勢はかなり変わっているでしょう。より良い形でスコウホイの人々を自治に参加させ、

その権利を大きくして行き、自治州を確立する。それからはジワジワと、独立へすすむも良し、自治州として帝国の枠内に留まるも良し、その運命は住民が決める、そんな形に持って行きたいのです」

「で、俺は帝国の紐付きの保護国の傀儡の王として使う、そういう訳か」

「そう言う解釈も可能ですが、それだけではありません。スコウホイの民にとって、民族自決の象徴とあなたがなりうる使命感とカリスマ性を持っているかどうかが、運命の分かれ目だと思います」

「俺が本当にその使命感を持ってスコウホイの民をまとめる王となってしまえば、帝国としては困るんじゃないのか？」

「長い目でみれば、それが一番ありがたいのです」

「なぜだ？」

「領土の運営のために、莫大な費用が掛かるんですよ。その割に儲かりませんから」

「帝国のメンツは、構わないのかな？」

「そうですね……名誉ある撤退をもくろんでいます。友好ムードのうちにね」

「領土が相当狭くなるが？」

「領土は大きければ統治は難しくなります。国防上も国内に治めにくく、民心の安定に気を使う地域が存在しない方が、むしろ好都合です」

「鉄鉱山は？」

「お詫びの印に、進呈、いや、もともとスコウホイのものですし、そのうち鉱脈も枯れますから」

「アハハ、参ったなあ。恐るべき神童が大人になったらどれほど恐ろしいか。独立させていただくにせよ、敵対などは考えないですよ。事情がわかった人間ならね」

「まあ、僕の案は、あなたが当初考えた『スコウホイ解放同盟』より、現実的だと自負しております」

「いやあ、認めますよ」

庭で昼食をとるのは、もう一つ目論見が有った。ああ、当の本人がやってきた。ウルリカだ。
「殿下！　クヌート様！　こちらにお出でしたの？」
「ええ。木陰が良い感じでしたのでね」
「今日は何かまた、お作りになりましたか？」
「はい。先日クヌート様がスモモのパイがお好きだと伺ったので、婆やと一緒に焼いてみましたの。一緒に良く合うハーブティーをお持ちしました」

ウルリカにまだ、意識は無いが、かなりクヌートを気にしている。クヌートは初めてウルリカを見た時、その美少女ぶりに圧倒されていたが、元来が従兄妹同士。親密な雰囲気を醸し出すのは早かった。僕はクヌートの老母をウルリカに見舞って欲しいと頼んだり、それとなく席を中座して二人の会話が自然に運ぶように気を付けている。

「クヌートの血筋については秘密にしておいて下さい。あなたの父上は立派な方だが、取り巻きに好もしくない人物もいます。ですから大宰相には、内密にね。この三人だけの秘密ですよ」
実は父上には御報告済みだ。それに僕のもくろみを指示して頂いている。
「三人だけ」の秘密は、僕が中座すると「二人の秘密」として機能し始める。その事を見越しての作戦なのだが、我ながらあざとい。

「俺とウルリカ殿をいっしょにさせようとお考えなのだな」
「ええ。嫌ではないでしょう？」
「あなたは良いのか？」
「僕の側妃なんぞになるより、あなたの正妻、将来的には正妃か、まあ、その方があの子も幸せでしょう」
「それだけではないな」

「ハハハ、おっしゃる通りです。相手が僕より、あなたの方が『スコウホイの王統の統一』というかなり魅力的なおまけが付きますからね。あの子の親父さんの思惑とは相当にずれますが」
「だが、殿下と同腹の跡取り息子も得た事だし、以前ほどはこだわらん、そういう事ですね」
「いやあ、あなたは反応が早い。一番冴えていたころの大宰相と良い勝負だ」
「ほう。そうですか。素直に喜ぶ事にしますよ」

別れ際に、僕はつい一言言ってしまった。

「ウルリカは母親の愛情を知らずに育ったようなのです。だから、あなたの母上とお話しするのが本当に嬉しいようですね」
「分かってますよ。だが、殿下。あなたは政治的な力学だけで動くのかと思えば……そうでもないんですな」
「政治を行う者としては、弱点でしょうね」
「ですが……悪くないですよ、その弱点も」

正直な話、一度離れた民心を穏やかに安定させるのは難事業だった。僕の後釜というか、スコウホイのまとめ役が機能するようになるまで、僕は頑張った。爺さんなら忙しくて多分倒れていただろう。

年月は瞬く間に移り変わる。
誕生日なんて祝っている場合ではないぐらい、この六年余りは大変な月日だった。だが、僕はその成果に満足している。

そんなある晴れた日、都で一番、いや帝国で一番大きなトリア大聖堂で高貴な列席者を集めた結婚式が行われた。馬鹿馬鹿しい贅沢さとは無縁だが、簡素な中にも格調の高さが有り、感動的な良い式だったと僕は思う。何より、花嫁が綺麗で可愛くて、少々年齢差は

あるものの花婿もその花嫁にお似合いで、何より二人が一緒に難しい問題に手を取りあって頑張ろうという決意の固さが感動的だった。

何にせよ、二人は愛し合っている。お膳立てした僕としては一つ肩の荷が下りた感じだ。

随分大変だったのだ。気が付けば、僕も十三歳になっていた。

「大宰相、そういつまでも泣きなさんな」

「殿下は、殿下は……酷い方です……まだ、十二の娘を私から引き離して……ウルリカー、私を置いてゆかないでくれー」

僕もそれは考えたのだが、まだ十二歳とはいえウルリカ自身が固い決意でクヌートに寄り添って生きて行きたいと決めたのだった。体の方もクヌートの母親に言わせれば「多少早いが、無理ではない」状態になったようだし、何より二人は互いを大切に思い、愛し合っている。この貴族社会で十二歳の花嫁は別段奇異な存在でも無い。

クヌートがスコウホイの王統で有る事が公表され、初代『スコウホイ公爵』に任じられたこのタイミングは、結婚式を行うのに相応しく思われた。

確かに大宰相は過去の経緯からスコウホイに行くことは難しい。だが、そのうち風向きは変わるだろう。こっそりつつましやかに娘の顔を見に行くぐらいは、許されるようになるのではないかと思うが……

「娘を困らせないように。そして母上や僕も困らせないように、ヨハンをしっかり教育してください」

幼いヨハンは乳母に付き添われて列席した。乳母は鬼瓦の様な顔立ちの女だ。大宰相はわざわざそうした容貌の女を選んだようだ。

理由ははっきりしている。母上にいささかでも疑念を持たれる事を恐れての事だ。確かに子供の乳母と「できてしまう」貴族も珍しくないからなあ……

大宰相はウルリカを溺愛していた。蝶よ花よ、とは、まさにああいう状態を指すのだろうと僕が思う程に。だが、娘には「浮ついた贅沢などではなく、民の暮らしを良くするためにもっと役立つ勉強でもさせてくだされば良かったのに」と言われてしまったし、事実その言葉はウルリカの立場に立てば、正しい。

その反省に立っているのか、男女の違いか分からないが、ヨハンは大宰相自ら厳しくしつけようとしているようだったし、事実そうなりつつあった。だが、僕は、このヨハンと大宰相の親子関係がどのようによじれ、後々困った問題につながって行くのかなどと、この時はまったく考え付かなかった。

だから、涙をふきふき娘との別れを嘆く大宰相を、単に微笑ましく見ていただけなのだが……

貴賓席を出られた父上から、お呼びの声がかかり、僕は大宰相の側を離れた。

「お前にこれを見せなくては、と思ってな」

ドランメン伯爵夫人、つまりユリエからの定期報告の書簡だった。

「いつも思うが、ユリエは実に大した女だ。先ごろは厄介な水利権争いを見事にさばいたようだぞ」

実質的な領主としての手際の見事さは、この都にも聞こえている。ユリエは家康師匠が武芸を仕込んだおかげもあって、胆力が有る。そして勘も鋭い。殺気立つ農民たちをなだめ、納得させるのは容易な事では無いのに、ユリエはそれをやってのけたのだ。

だが、噂に上った水利権の話は「皇帝陛下の御稜威により、つつがなく」運んだとしか触れられておらず、内容の大半はユリエが預かっている形の隣国ワッデンの第一王女アネッテに関する報告だった。

「心身ともに御健康を回復され」「医師の診断によれば、御結婚も可能」な状態に体がなったらしい。遠回しに月経が開始した事を伝えているのだろう。

「お前もそろそろ、人ごとにかまけている時期でもなくなってきた。そうは思わんか？」

「はあ」

気の無い返事を返しながら、僕はユリエが恨めしかった。

僕と魔女と悪龍の危ういバランス・６（後書き）

女性キャラの設定をいじりました。矛盾があるかな？
有りましたら、教えてやってください。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・1（前書き）

僕は大人になります。Ｒ１５です。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・1

当初、スコウホイ公爵の婚儀が済んだ後、すぐに出立するはずであったアネッテ王女の一行は「事情により」まだドランメン伯爵領内に留まっていた。

アネッテ王女が僕の前に姿を見せたのは、予定の約半年後だった。将来の正妃に相応しく、王女自身とも由緒の深いかつてのワッデン女王であった方がしばらく住んでいた建物に入ってもらう。古い建物だが十分に補修して、不自由は無いように配慮した。

ストロベリーブロンドの髪に青い瞳の僕と同い年の少女は、優雅な振る舞いと穏やかな話しぶりで最初は母上、次に父上の周辺のうるさい老人どもに「正妃にふさわしい」と見なされたようだった。この国ではブロンドの髪が高貴な身分に相応しく、瞳は碧か青が最も高貴だとされている。単に出現率の問題のように思うが、そう頑なに思い込んでいる老人は多い。

半年前ユリエから珍しく僕に直接送ってきた書状には、アネッテの健康に関する医師の所見が同封されていた。

「通常の貴婦人としての御生活を送られる分には、何ら差支えない状態まで回復されました」

「幼い頃の御苦労が心臓に重大な悪影響を及ぼしており、御出産はお命に係わると思われます」

そんな内容だ。

医師は出産しなければ、まずは通常の人の寿命まで生きられると見ている。跡継ぎを誰よりも期待される正妃の位置につく予定の少女にとって、大変なハンディだ。

ユリエの忠告を待つまでも無く、僕は「懐妊が生命の危険につな

がる」「出産は命と引き換え」である事を秘密にしている。ユリエはどうやら、この事実を僕一人に伝え、皇帝である父上にも内密にしたらしい。

確かにそうしなければ、彼女を打ち捨てていた冷淡な祖国ワッデンに送り返されるか、尼僧院にでも送り込まれてしまう危険性が高い。アネッテの体では過酷な状況には耐えられまい。

アネッテが子を産めないのは良くわかった。幸いユリエは乳母とも相談して、そうした性的な方面の教育は一切行わなかったようだ。僕の忍耐力さえ持てば、アネッテは穏やかに暮らせるだろう。

「御本人にお伝えするか否かは殿下の御判断にお任せいたします」

ユリエも乳母も、下駄を僕に預けたのだ。乳母をこっそり呼び出して確認した所、乳母自身はむしろ伝えない方が良いという考えのようだった。当分は、その方向で行く事になるか……

ユリエの手紙を見て以来、僕は連日ユリエの夢を見ていた。本人は音沙汰無しだが。

朝食は朝の鍛錬の後アネッテの住まいに立ち寄って食べ、昼は最近はセルマと彼女が奉仕活動を行っている孤児院で取る。僕は「お土産を持ってくる貴族のお兄ちゃん」だと思われている。菓子や文房具、絵本などを携え、時間が許せば子供らと鬼ごっこを一緒にしたりする。

「私の父の様に、孤児院で救われた事がきっかけで世に出る子もおりますでしょう。そうでなくとも、本来なら私はこの子らと同じような境遇で有ったはずです。今は神のお恵みでたまたま贅沢な暮らしをしておりますが、その、どこか居心地も悪いのです。私がそのような暮らしをするのは……筋違いだ、そう、思うのです」

グラーン侯爵夫人はマウリを産んだ後、父上との間に更に娘を二人もうけたので、セルマは余計に肩身が狭いのだろう。近頃は神聖教会の教えに救いを求め、熱心に教会に通い、孤児院で働き、まるで尼僧見習いのような暮らしを送っている。

「ウルリカ様はお元気でしょうか？　こんな事ならもっとお話をしておくのでした」

セルマは僕がウルリカを手放した事が、ショックであった様だ。だが、教会の教えに深く入り込みすぎた所為だろうか、肉欲を伴う愛を以前とは違って酷く罪悪視するようになっている。その為、余計に「愛人」である母親の生き方が許せないと感じるようだ。

「侯爵夫人はさっさと尼僧院に入るべきだった、そう言いたいのですか？」

僕はつい、きつい口調になった。

「いえ……わかりません」

「僕の背はあなたより高くなりました。さらに高くなるでしょう。かつてあなたが思い描いていたような『お姫様だっこ』だって、して差し上げられる。だが、あなたは近頃頑なな尼僧の様におなりだ」

「殿下……私の恥ずかしい妄想を……なぜ、御存知で」

「恥ずかしいですか？　僕は女の子らしい夢だと思ったのです」

僕は周りに子供らが居ないのを確かめてから、セルマを抱きしめた。

「で、殿下」

「あなたは僕に抱きしめられてキスされるのを、待っておられたはずだ」

「で、殿下……」

「嫌ですか？」

「い、いえ、あの」

セルマは混乱していた。
「ごめんなさい。実は……いや、やめておきましょう。明日は焼き菓子を多めに持ってきます。では」
最低だ。女の子をあんな風に困らせて。更には、僕はアネッテが子を産むわけに行かない事まで口走りそうになった。アネッテ本人も知らないことをセルマに言うなんて、とんでもない話だ。頭に血が上っていたのだ。一瞬だったが。
僕は近頃夢精するようになっていた。
その夢の中には必ずユリエが出てくる。そして一言こんな風に言うのだ。
「お約束を……」
その先は「忘れていません」なのか？　いや「守れません」なのか？
僕は、自分で自分が許せない気分だった。
午後の御前会議で執政官の些細な記憶違いをネチネチ指摘したのは間違いなく八つ当たりだった。父上が眉を上げて、僕を見た。そう。妙なものを見たという感じだった。会議の後、二人になった時に忠告めかして言われた。
「成らぬ我慢をするのは体に毒だぞ。お前がその気になれば相手をする女など、この黄金宮だけで二百人は堅いぞ。外で羽目を外すなら、それも良し。おぼこい正妃に遠慮が有るなら、馴染んだセルマでもよかろうが。正妃はややこしい儀式も有るが、側妃はそんな気遣いはいらん」
「はあ……」
完全に父上に見透かされたのが、恥ずかしかった。
「フフフ、神童のお前でもこの道ばかりは別、か。今もユリエが一

番か。ふむ。そうか。まあ、それも良い」
僕は、ろくに返事も出来なかった。

だが、その後、自分の住まいに戻って驚いた。

「お久しゅうございます」

喪服姿のユリエがそこには居た。黒いドレスに身を包み、大粒の黒真珠のイヤリングとネックレスを身に着け、黒いベールをかぶったその姿は、堂々たる貴婦人の姿そのものだった。腕に赤ん坊を抱えている。すやすや眠るその子の髪はスヴェンと同じ灰色だった。

「これは亡きドランメン伯爵スヴェン・ヤイレが遺児、ラウル・ヤイレでございます」
「ユリエ……」

僕はユリエを凝視したきり、一言も言葉を発する事が出来なかった。だって、僕はドランメン伯爵が亡くなった事も子が生まれた事も知らなかった。恐らく父上は御存知だったのに、わざと僕にはお知らせにならなかったのだろう。御前会議の後の話は、ユリエが戻った事を踏まえての事だったのではなかろうか？

「殿下？」
「ああ、お前の夢をこのところ良く見るなとは、思っていたのだ。父上と母上にはお会いしたのか」
「はい。午前中に御挨拶に伺いました。その折、ラウルの将来の叙爵と領地に関してお言葉を賜りました。その後は殿下が御不在と伺いましたので、先にアネッテ王女様の所にお伺いしました」
「この後、ユリエはどうするの？」
「両陛下からは、殿下のお住まいでお仕えするように仰せつかって

おりますが」
「息子はどうする？」
「乳母がおりますし、伯爵家の奉公人も十人ほどついてまいりました。実家には人手も十分御座いますし……ナタリエも力になってくれましょう」
「じゃあ、お願いするよ」
「もちろんで御座います。では、身支度など改めまして、御夕食の時からこちらに詰めさせていただきます」
「ユリエ！」
「はい、殿下」
「いや、良いんだ」

息子を抱えたユリエに「愛している」とは言えなかった。

夕食は『大女亭』に行くのでもなければ、一人で取ることが多かった。だから、この日も当然の事、一人だ。しかし侍従たちは居る。今夜は二人きりになりたかった。だから、ユリエに給仕もすべてさせるから侍従たちは引き取るようにと言いつけた。

（はーあ。お気に入りの伯爵夫人がお戻りになったから、僕らはお邪魔か）
（聖女エマ・ヤイレみたいな方らしいから、将来は公式愛人か大女官長か知らんが気をつかうなあ）
（殿下の御気分が安らぐなら、いいんじゃないの？　伯爵夫人は早速殿下の御子を身籠るのかもな）

侍従どもは皆、僕とユリエが男女の仲になるものだと思っているようだった。強烈な気恥ずかしさが襲ってくる。彼らに翌朝まで来るなと命じる口調は、自然怒りっぽくなった。侍従は部屋から追い出しても、警護の者は僕の住まいの周りを何重にも囲んでいる。

「警護の者など、壁か何かだと思えば良い」

父上は以前、そのようにおっしゃったが、とてもそんな感覚になれない。

ユリエは黒いドレスに白いエプロンという姿で、夕食を給仕した。以前のメイドの時とは違い、ドレスは黒でも貴婦人の格にふさわしい素材のものだった。黒髪は貴婦人らしく艶やかに結い上げられ、白いうなじが抜けるようだ。僕は思わず、生唾を飲み込んだ。ゴクリと言う音がやけに大きく感じられた。僕の表情は堅かったと思う。ユリエは自分からは何も話さない。だが、本気で僕に仕える気持ちである事。亡夫の死後は僕に仕える事は結婚当初からの条件であった事、僕の緊張を解し、疲れを癒したいと本気で思っているのは、よくわかった。そして亡夫との間に子を作った事を僕に済まなく思う反面、後悔はしていないのも伝わってきた。

同じ料理のはずなのに、なぜ、ユリエが給仕すると美味く感じるのか不思議だった。緊張のあまり、何ものどに通らないと食事前は感じていたのに、全てをキチンと平らげた。そして久しぶりの薫り高いまともな茶を、ゆっくり飲んで気を落ち着けた。

「御入浴は、いかがなさいますか？」
「どこまでなら、頼める？」
「殿下のお望みに従います」
「じゃあ、一緒に風呂に入って……寝床でも一緒だ」
「はい」
「本当に？」
「はい」
「僕は男女の事は初めてだよ。約束通り、面倒を見てくれるよね」

「はい」
「下手くそに決まっているけれど、良いよね？」
ハッとした様に僕を見つめ返した黒い瞳には、僕を気遣う思いだけが溢れていた。
「そのような事、お気になさいません様に」
「気にするなって？　なるに決まっているだろう！」
「お風呂を御用意してまいります」
静かな声でそう言うと、一礼して部屋を出る後姿の背筋がスッキリ伸びて、僕は悔しいが見惚れた。

「失礼いたします」
風呂場で見るユリエの裸は艶やかで、僕の物はこれ以上は無いほど固くなっていて、痛いほどだ。体中を丁寧に目の細かい絹の布に石鹸をつけて洗われると、背中の凝りが次第にほぐれて行く。
「ねえ。直接、ユリエの手で洗ってよ」
僕は破廉恥な願いを口にした。ユリエは静かに「はい」と返事をして、マッサージをするように優しい手つきで僕の体いっぱいに石鹸を泡立てて行く。一物の扱いもためらいが無かった。僕にはそのためらいの無さが酷く腹立たしく感じられて、泡を流し終わった後、凶暴な気持ちに駆られた。娼婦でも余りやらないと言う事を命じたのだ。
「死んだ亭主に仕込まれたか？　ん？」
当然ながら返事は無い。ただ、ユリエの物悲しい気分と僕を案じる気持ち、そして紛れもない愛情が感じ取れただけだった。
「畜生！」
ユリエはためらうことなく、すべてを飲み込もうとした。実際、大半を飲んだのだろう。
「馬鹿。口を濯いで来い……キスが出来ないだろうが……ちゃんと温まってからおいで。ベッドで待っている」

体が燃えるようだと思った。
気温は低い時期であるはずなのに、寒さを感じなかった。
ユリエは寝化粧を軽くしたらしい。薄く口紅を差し、うなじから僕が以前送った香水と同じものの香りがする。
「失礼いたします」
「本当だよ。まったく。僕を焦らして、酷いやつだ」
「申し訳ありません」

すると、一つの情景が浮かんだ。

「添い伏し役はユリエしかいないな」
「ええ。グスタフはユリエを皇后にでもしたいのでしょうが、さすがに無理ね」
「最初は子供を一人ぐらい産んだ若妻が一番だ」
「まあ、陛下、なんていう事を！」
添い伏し役とは、特に選ばれて皇子の初めての性交渉の相手を務める者だ。一種の教師役でもあるから、大抵は年上で出産経験も有る婦人から容姿端麗で温順な性格のものを選ぶ。父上と母上はそんな会話をした後、ユリエを嫁に行かせたのだ。跡取りを産んだ後、どうするかはユリエに任せると言って……

「ユリエの所為じゃないのは、わかっているよ。ちょっと拗ねたんだ……」

僕はユリエを寝かせると、キスをした。最初は唇だけ。それから段々深くなり、互いの舌が絡み合うころには、ユリエの絹の寝間着も下着もすっかり取り払われた。

「殿下、本当に初めてでいらっしゃるのですか？」
「初めてだよ」

「随分と手際が良くていらっしゃるから……」
「がっついているだけだ。余裕がないんだよ、僕は」
「わ、私も、余裕など御座いません」

ユリエの心臓は激しく鼓動していた。

「それ、ちょっとうれしいかも」
「ようございました」
「ユリエ」
「はい」
「愛している」

こうして、僕は無事に体も一人前の男になったのだった。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・2

思いの外、ユリエを疲れさせてしまったようだ。僕が目を覚ましても、ぐっすり寝込んでいた。長い旅路のすぐ後だったのに、そのあたりの配慮がどうやら欠けていた。

僕は自分で起き出して、卵料理とちょっとしたスープとパン、リンゴ、そんなものだが朝食を用意した。晩餐は無理だが軽い物程度なら作ることができる調理場を設けてある。『大女亭』に時折行くようになってからは特に、軽い夜食や朝食を自分で用意する事も珍しくない。侍従達は戸惑っていたが。

「まず、ほら、食べて」

寝間着にガウンをひっかけただけのしどけない姿で食事を出来る仲になれたのが嬉しかったりする。

ああ、そう言えば鍛練を済ませたら、アネッテの所に寄るんだった……

「お茶だけでもお淹れしましょう」

ユリエの淹れる茶はなぜうまいのか謎だが、やはりうまい。

「頂戴いたします」

まあ、美味しい。と言ってくれたのが社交辞令ではなく本音だったようで、僕は嬉しかった。

「朝の御仕度を」

ユリエはそう言ったが、これから鍛練に出るだけだから気楽な格好だ。自分でさっさと着てしまう。礼服で出席する御前会議は午後だ。朝寝坊の父上に合わせた体制になっている。

僕は逆にユリエの身支度の手伝いを申し出た。

「僕が小間使いの役をやるよ。ユリエもスカートを膨らませたシルクのドレスを身に着けないといけない身分になったのだし。自分でやるの大変だろ？」

「普段は省略しておりました。レースを多目に使った下着を穿くぐらいでして」

やっぱり化粧台のある部屋で一人で着た方が良いらしい。

「仕事をする気分に切り換えなければいけませんから」

そんな風に言われて、体よく追い出されてしまった。

「ユリエー」

僕は我がままを言った。子供のころみたいな幼稚なわがままだ。せめて髪の毛だけでも結う為にしっかりブラシをかけさせてもらう。何と言うか気分が和む。最後に大きな黒い真珠をあしらった飾り櫛を飾った。

「これって、僕が持たせたものだねえ」

「ええ。そうです」

僕が冠婚葬祭何れの場合も困らないように用意して、嫁入り道具に入れさせたものの一つだ。

「そのう……良い男だった？　伯爵は」

「良い夫でした。私の事情を知っていながら、受け止めてくれました。夫婦でいる間、自分なりに出来る事は精一杯致しましたから、後悔することも無いです」

「愛していたの？」

「殿下をお慕いする気持ちとはまた違いますが。互いの誠意が通じたと感じておりました。あれもまた愛であったのかもしれません」

「そうか。ユリエがより一層綺麗になったのは、伯爵のおかげだな。でも、僕は器量の小さい男だから、腹が立ったり悔しかったりするんだ。ちゃんとまだ受け止めきれない。もっと大人になると良いんだろうな。こんな僕だけど、見捨てないでくれ。ずっと……それこそ死が僕らを分かつまで、側に居て支えてほしい」

「そのつもりで、戻って参りました。置いていただけるのでしたら、命のある限りずっとお傍におります」

僕はその白い手を取って、押し頂き、恭しく口づけた。

「ありがとう。心から感謝するよ」
「お礼を申し上げるのは、私の方です」
「そうか。じゃあ、また夜に」

昼はセルマの所に寄らなくてはいけない。剣・馬・弓の鍛練で軽く汗を流し、着替えたらアネッテの所だ。

アネッテは絵が好きだ。見るのも描くのも好きらしい。絵の話をしながら、僕にとっては二回目の朝食を一緒に食べていた。そんなことは無論おくびにも出さない。アネッテの目下の悩みは、人物を描いてみたいが、手ごろなモデルが居ないという事らしい。

「ですから身近な人間で良いから、誰かをモデルになさったら？」
「モデルになって下さる方など居ません。もしかしていらしたとしても、御自分の顔を下手に描かれてその方が不快になる恐れもあります」

宮廷内に何の足ががりも無く、力のある後ろ盾も無いアネッテは、わずかなトラブルも避けるべきなのだ。
「僕がモデルになりましょうか？　ああ、それとも乳母の方が良いかな」
「乳母はじっと座っているのは嫌だとか、肖像画なんて身分の高い方だけの物だとか……ほんの練習なのに、言う事をきいてくれません」

ワッデンの人は頑固者が多いと聞く。裏表が少なく、言いだしたことは必ず実行する、とも。アネッテの乳母もそうした気質を受け継いでいるのだろうか……
「じゃあ、毎日、朝食後の茶でも楽しんでいる時間を使って、お好きなように僕をスケッチなされば良い。どうです？」
「かまいませんの？」

「ええ。あまりにも性格が悪そうな顔に仕上がったら、ショックですけど」
「あら、まあ、それは、どうしましょう」
「王女様がそんなおかしな具合にに描かれるはずが有りませんよ」
乳母は断固とした口調だった。ちょっと睨んだ視線は、僕が彼女を傷つけたら許さないと言っていた。

「まあ、あの、殿下、私、自信はございませんけれど、精いっぱいやってみたいのです」
「あなたの絵です。お好きなように描けばよいのです。僕は多少勝手な事を言いますが、お気になさらずに」
見せてもらった花や小鳥の絵はどれも生き生きしていて、愛らしかった。

いくつかの執務や決済をこなし、セルマと共に昼食を取り、孤児院で子供らに絵本を読み、菓子を渡してから、二人一緒に侯爵夫人の邸まで歩く。セルマは孤児院に仰々しい馬車で乗り付けるのを好まなかった。無論、護衛騎士はついている。歩きながら話すと秘密も漏れにくいのと、手ごろな運動になるのが良い。

「今年は捨て子が少し減ったようです」
「僕なりに手を尽くしているつもりですが、人々の元に救いの手が届いていないのでしょうね」
「教会の方々は……」

セルマは言いかけた言葉を飲み込んだ。教会の上層部の者たちは皆、豪奢な暮らしを営んでいる。立派な邸に住み、宝石で飾り立てた祭服をまとい、噂では父上や僕なんかより贅沢に飲み食いし……罰当たりな事もしでかしているらしい。

「この孤児院はもともと教会が設立はしたが、今や財源は帝国もちですものね。まあ、それは良いのですが」

特に破戒坊主のソフス・ネスがトリア大聖堂の大主教に納まってから、様々な不正行為が目につくようになった。帝国の財源から出た孤児院の運営資金を勝手に取り込んだ怪しからん孤児院長の首をすげかえる事はできたが、その不正を命じたと思われるネスには手を付けられずにいる。

これまでに二度、帝国から正式に神聖教会大本山の大聖猊下にネス大主教の更迭を願うかどうか、御前会議で議論したが、現在猊下は病の床に就いていて、側近どもが握りつぶす公算が強いと思われたし、正面切って神聖教会と事を構えるのをためらう者が執政官の半数を占めたので、今は次期尚早という事になっている。

ネスは紛れもない破壊坊主だが、変にカリスマ性が有り、説教の声は朗々と響く。教会だけが民の苦しみを見ており、手を差し伸べているという大ウソを、もっともらしく説教して、募金箱を回すと、多くの金額が集まるそうな。

「皇帝陛下は名君だがふしだら」

「皇太子殿下は神童だが、所詮は子供」

こんな風にネスは父上と僕を評し、宮廷内部にも深く食い込んでいる熱狂的な教会の信者を使って、何か怪しからん事を仕掛けてくる公算は強かった。特にネスの罷免が御前会議の議題になって以降は、宮中のあちらにもこちらにも怪しい人物が増えた。つい最近、僕が侍従を罷免したのも神聖教会がらみだ。

「ネスは危険人物です。大本山の猊下の病は、本当は毒を盛られたせいで、盛ったのはネスの子分だと言う風聞は、真実かも知れませんね」

当代の病床にある猊下はセルマから見ると父方の大叔父にあたる。

ミッケリの名門の出身だ。一方で、ネスは帝国の貧農の出身で、亡くなったとある大主教の寵童だったらしい。
十日ほど前『大女亭』で聞いた噂がどこまで本当か知らないが、根も葉も有る物の様に僕は聞いた。

「今の猊下は美女がお好きだが、後を継ぎそうなネス大主教様は綺麗な男の子が何よりお好きらしいぜ」

以前、何かの儀式ですれ違った時に僕に向けられた気色悪い目つきと、読み取れたおぞましい妄想からすると、恐らく事実だ。

「母の所を訪ねてくるミッケリの商人たちが、耳を疑うような噂をしていたようです。メイドや厩番の者たちが、面白半分という感じで話題にしていましたから」
「ミッケリの人たちは、ネスに批判的でしょうね。もしネスが噂通りに大聖猊下に納まったら、ミッケリからの献金は大幅に減るかな？」
「母は……そう見ているようでした」
「なるほど」
グラーン侯爵夫人と僕の見方は一致しているのか。
「じゃあ、あなたと私の弟であるマウリは、安全かな？」
「え？」
「ネスは人でなしで、かわいい男の子が大好きだそうですから。僕も薄気味悪い目つきで品定めされて、身の毛がよだちましたよ」
「そ……そう、ですか？」
僕が言いたい事、つまりネスが男児好きの変態だって言う事は、一応理解したようだ。
「ネスは父上がふしだらで、僕も似たり寄ったりの悪徳の道を転げ落ちている、とかなんとか最近もほざいたようですが、あなたはあんな奴を猊下として崇められますか？」

「わかりません。大聖猊下になった方は敬うべきだという考えが、私には染みついてますから」
「確かに神聖教会にも、献身的に人々のために尽くそうとする人もいるのは知ってます。でも、今の腐った教会にセルマ……あなたが入れ込んでも、その甲斐は無いのではありませんか？」
「そうかもしれません。聖職者の方々は高潔な方ばかりと言う訳では無いですから」
「でしょう？」
「でも、孤児院のような活動は、必要だと思っています。それに、本当に子どもの事を大切に思っておいでの聖職者の方もおいでになります。そう言う方々とは協力したいですし……」
「それは、僕もわかります」

二人は黙り込んで、道を並んで歩いた。ふと、セルマが揺らいだ。小石を踏んで、バランスを崩したのだ。
僕はとっさに抱きとめた。

「あ、ありがとうございます」
「あなたを守るのは僕の役目だと思ってます、セルマ」
「でも、でも、殿下はウルリカ様を手放してしまわれた」
「それはその、あの子が『殿下は大好きですが、クヌート様は愛してます』などというのです。あっけらかんとして、嫁に行ってしまいましたよ」
「それは、それはそうなのかもしれませんが……私の事も、いつかは手放してしまわれるのではないかと、不安なのです」
「ならば、手放しません。あなたさえよければ僕の子を産んでください」
僕はセルマを抱きしめ、髪を撫ぜながら聞いた。セルマは震えている。
「あ、あの。まだその」

「決心がつかないですか」
「あ、はい。私って、ダメですね……お傍にいても、何のお役にも立てませんし」
「そんな風に思わないで下さい。また、交換日記でも復活しますか？」
スコウホイのあれやこれやで忙しくて、交換日記は立ち消えになっていた。
「いいえ、今のままで十分です。こうして、お忙しい中でも逢いに来て下さるお気持ちが嬉しいのです」
「本当に嬉しいと思って下さっているようだ……ならば、ちゃんと逢いに来ますよ」
「あのう……」

セルマはユリエの事を気にかけているようだ。もう、噂が宮中を駆け抜けた、そういう事らしい。あいまいな言い方ではあるが、僕との関係を皆は察している。そういう事なのだろう。

「お住まいに伺っても、ドランメン伯爵夫人はお気を悪くなさらないでしょうか？」
「あれは、そんな女ではありません。あなたに十分な敬意を払い、きちんとお迎えできると僕は信じてます」
「御信頼が篤いんですのね。宮中の方々が『殿下の聖女エマ様が戻っていらした』と噂なさっているようなのも、当然なのでしょうね」
「ハハハ、うまい事を言いますね。何しろ僕のおむつを外したのはユリエですから。僕も後から気が付いたのですが、ユリエの嫁ぎ先は聖女エマ・ヤイレとゆかりが深いのです」
「まあ、そうなのですか」
「でも、僕はあなたの方が聖女に近いと思います。あなたを罪深い道に引きずり込んで良い物かどうか……」
「殿下」

「僕があなたに自由と平和を与えてあげられる間は、それを受け止めて下さるのも悪くない」

「殿下、殿下にとって、私は必要でしょうか？」

「あなたは僕の家族だ。そう思っています。あなたが一歩先に踏み出せば僕らの関係はまた大きく変化するでしょうが」

「変化した先が怖いのです。母を見ておりますと、毎日が戦いです。あのような暮らしが幸せとは……到底思えません」

震えるセルマの手から、グラーン侯爵夫人が「一刻も早く契りを交わして、殿下の最初の御子を産みなさい」と言い渡した事が読み取れた。皇帝や皇太子の場合、庶子であっても長子は特別な配慮が与えられる事が多い。セルマの身分を安定させるためには、それが最善だと言うのは侯爵夫人らしい。

侯爵夫人の考えを僕は否定できない。だが、セルマは震えている。まだ彼女の条件は整っていないのだと僕は感じている。だが、彼女が僕のもとを離れるのを望んでいないのも確かなようだった。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・３（前書き）

Ｒ１５です。たぶん。後半セルマの話になります。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・3

ユリエと体を寄せ合って眠る安らぎは幼いころの僕にとって幸せの源だった。今はこうして男女の仲になって、また違う種類の幸せが僕の全身を満たしているような気がする。再びユリエと過ごすようになって、僕の心身は安定した。

「ねえ、ユリエ、幸せかい？」
「ええ、怖いほどに」
「怖い、か。確かに、そうかな」
いつまで、この幸せな状態が続くのか、確かにわからないだけに怖い。
「殿下も、そうお感じですの？」
「ずっと欲しかったものを手に入れた所為かな」

奇妙な予感が有った。
狂おしい感情が沸き起こり、また口づける。誰にももう奪わせるものか。
また、燃え上がり、貪りあって、悦びを極めると、急速に気分は穏やかになった。

「ミホ、とはどなたですか？」
「え？」
「先ほど、ふと、そのお名前が……」

ミホ、美保……僕の前世の婚約者だ。百年たたないと巡り逢えないと言われた。ユリエは真実を知りたがっている。それにしたって、こんな時に、僕は別の女の名を口にしたのだ。ユリエに済まないと感じた。

「ユリエに以前打ち明けたよね。僕には前世のかなりはっきりした記憶が有るとも。前世で亡くなる少し前に婚姻の約束を交わした相手が、美保だ。僕が生まれてから百年後に、このルンドに現れるらしい」

「殿下が伝説の聖帝様と同じように不老不死でいらっしゃるなら、百歳になられてもお若いままなのでしょうね。そして美保様が聖なる皇后陛下となられるでしょうか。私はせいぜい生きましても八十歳ぐらいまででしょう。祖父母も、そのぐらいで亡くなりましたから。老人になれば、こうして御一緒に過ごす事もかないません。私の子や孫は、その美保様にお仕え出来ましょうか」

「ユリエ……」

「昨日午後、グラーン侯爵夫人がセルマ様の乳母を連れて直々に私を訪ねていらっしゃいました」

しばらく前から、僕にも、そしてユリエの方にもそれとなく接触は有った。だが、セルマとは相変わらず共に昼食を取り話をするだけの状態で、大した変化は無かったのだった。

一昨日御前会議の前に、僕は父上というか、父上と同席している侯爵夫人に呼ばれた。

「政略の絆としてのセルマの価値は、いったんは下がったように見えるやも知れまんが、ソフス・ネスの次を考えましたら、悪くはございませんよ」

「ネス大主教の次の大聖猊下ですか。ミッケリにはすでに動きが有るんですね？」

父上は興味が無さそうに中座なさると、あちらで侯爵夫人腹の幼い妹二人を相手に絵本を読んでやっていらっしゃる。自分の娘も、

ひいてはその婿となる僕の事も政治のパワーゲームの中で分析して使いこなそうとする侯爵夫人のやり方が御不快なのだろう。だが、侯爵夫人の判断は間違っては居ない事も認めておいでだ。

昼食は父上と侯爵夫人と幼い弟、妹たち、そしてセルマと僕で食べた。食事中、侯爵夫人はこう言い渡した。

「セルマ、星占いで良い日が決まったら殿下のお相手をなさい。最低でも三日ですよ。後は殿下にお任せで、宜しゅうございますわよね？」

「あ、はあ」

侯爵夫人がユリエに伝えたのは、父上に僕とセルマの事を申し出たので、ユリエにも含んでおいて欲しいとの事だったようだ。星の巡りが良いので、出来れば今夜にもと言う話だ。申し出たなどと言うが、あの昼食の時の様子を思い出すまでもなく、完全に侯爵夫人が全てを仕切っている格好だ。可愛そうに、セルマは戸惑っているだろう。だが、変に僕が拒否すると、セルマの立場は悪くなるのは目に見えている。

押し切られる形なのが、気に入らないが、受け入れるしか無さそうだ。

「以前から、私の使用人たちにも御心遣いいただき、昨日はまた結構な髪飾りをお持ちになりましたが、お断りしてミッケリより到来のワインだけを頂きました」

「ユリエは、どう思うの？」

「セルマ様は、殿下にとって大切な方ですから、私にとっても大切な方です。アネッテ様同様、真心を込めてお仕え致します」

「ユリエは、それで良い？」

「殿下の心身がお健やかであられますように、私のすべてでお仕えすると決めておりますので」

「ごめん」
「そのようにおっしゃるものではありません。朝のお茶の御仕度を致しましょう」

ユリエは僕が朝の鍛錬を行い、その後アネッテの所で朝食を取ることを想定して、お茶と消化の良い軽い物を心がけて出すようにしているのは明らかだった。

「セルマ様のお住まいに新たに別棟をお設けになったようです。御入浴についての侯爵夫人のお尋ねが御座いましたので、差し支えないようにお答えしておきました」
「ふーん。風呂に入れるようにするのだね」
「ええ」
「一緒に入ったりしないよ。セルマとは」

そう僕が言った時には、ユリエは寝室に居なかった。そして、薫り高い茶と共にうまいブリオッシュと瑞々しいベリーが運び込まれた。この茶を一緒に楽しみ終わったら、僕は当分はユリエとこんな具合に会えないかもしれない。侯爵夫人の思惑が良くわからないから。

「三日は……お別れでしょうか？」
「そう、なんだろうな」
「お休みを……願い出ております。息子の様子を見て参ります」
「そうか。わかった。でも、四日目には戻るよね？」
「……お望みでしたら、そのように」

貴族の新婚の夫婦は三日間床を共にする。それに準じるのだろうから、三日の休みと言うのだろう。
平凡な若い貴族なら、それ以降はずっと妻と同じ部屋で眠るのだ

ろうが……大貴族や皇族は夫の部屋は妻とは別であるのが普通だ。そして夜を共に過ごす女性が妻だけではないのが普通だ。

「並の人間には罪深い暮らしも、選ばれた方々には許されている」

こんな事をぬけぬけと言う聖職者がいたらしいが、嘘だろう。だが、僕は罪深くても、複数の女性たちの力を借りてやって行くしか無い立場にいる。

鍛練の後、訪れたアネッテの所では何も言われなかったが、そっと乳母に聞きただすと、アネッテに仕える者もセルマとのことを侯爵夫人が進めていると承知しているが、今夜とは知らなかった様だ。

「くれぐれも王女様には、御内密に願います」

「無論だ」

無心でスケッチするアネッテに、すまないとは思うが、やはりまだこうした事は伏せておくべきなのだと思う。ただ、あとから事実を知った時、傷つくのは目に見えているので、折を見て、僕自身の口から説明する必要が出てくるだろう。いつのことになるかは、はっきりしないが……

御前会議の後、父上に耳打ちされた。

「今夜はあれの所には寄らんよ。お前の母親に話もあるしな。年の割に世慣れぬ娘だが、そこがお前も悪くないと思っているのだろう？　ユリエは三日間宿下がりさせたぞ。だから、まあ、せいぜい可愛がってやれ」

ユリエの宿下がりは、父上の御命令か。

昼食をセルマのために設けられた別棟で二人きりで取り、その後、

侯爵夫人の邸内の小さな礼拝室に司祭を呼んで、僕とセルマ、他はセルマの乳母以外誰もいない中で礼拝を行った。結婚式替わりだろう。いつもよりずっと豪華な真っ白いドレスのセルマは、いかにも穢れない乙女と言う風情だった。

「御夕食まで、ごゆっくりお過ごしください」

そんな風に言われて、僕とセルマは二人きりにされた。目の前にはかなり大きなベッドと寝椅子が有るぐらいで、何も無い。

「今から何をどうしろ、と言うのでしょうね」

明るい内から励め、と言うのだろうか？

「母が強引にあれこれやりましたようで、申し訳ありません」

「別に僕は良いのですが……セルマ……震えていますね。僕が怖い？」

「いえ、あの、母に言われた事が、あまりに恥ずかしくて……困りました」

「何を言われたのです？」

「夜に備えて……」

セルマの声は震えっぱなしだ。僕はかわいそうになって、立ったままで抱きしめた。

侯爵夫人は、ずいぶんきつい口調で発破をかけたようだ。こんな具合だったらしい。

「殿下のお体に触れる事、あるいは触れて頂く事に、もっと平気におなりなさい。先日の昼食の時の様子を見ていると、どこの田舎の修道女見習いかと思う程慣れていなくて、先が思いやられます。殿下とお話もし、度々お食事なども御一緒させて頂いているのでしょうに、何という有様なの。お慕いしているなら、はっきりそうおっ

しゃい。キスして頂いたり、抱きしめていただいたら、お前でも嬉しいのでしょう？　何をためらっているのだか。ボヤボヤしていたら、殿下との御縁を結び損ねるのですよ」

「わが花嫁は閉じた園、封じた泉のようだ」

僕は聖典の一節を呟いて、臆病な乙女を怯えさせないように、そっとキスをした。先ほどの礼拝での誓いの儀式の折の恭しい口づけが、初めてであったらしい。これが二回目なわけだが、まだ体中が石の様に固い。僕はセルマを促して、一緒に優雅な猫足の寝椅子の上に並んで腰掛ける。

「あなたは御自分で思っているより、ずっと美しくて魅力的なんですよ」

「殿下……殿下はお優しいから……」

「僕は都合の悪い事は色々内緒にしていますが、めったに嘘はつきません。だから、信じて下さい。あなたは綺麗だ。セルマ」

「でも、殿下は以前おっしゃいました。綺麗でも嫌いな顔が有るし、不美人でも愛着がわく事も有る、と」

「じゃあ、こう言いなおしましょう。あなたを好きです。セルマ。愛しています」

「ウソ、うそです。愛していらっしゃるのは……」

ユリエの事を気にしているのだ。アネッテの事も。

「嘘だと思うのは、あなたの勝手だ。セルマ。でも、その嘘をあなたが生きている限り、ずっとつき通して見せましょう。それならば、許せますか？」

「ええ。上手に……上手に私をだまして下さい。時には、一番愛されているのは自分なのかもしれないと、勘違いしてしまう程に」

「最善を尽くします、セルマ」

それから、四方山話をしながら、僕はセルマの髪を撫で、背中を摩った。セルマは僕の胸にずっと顔を寄せていたが、当初堅かった体がようやく女性の柔らかい体だと実感できるようになったころには、夕食の時間がやってきた。昼食同様、二人きりで小さいが洒落たつくりの食堂で食べる。

「まあ、これは……」

「頑張れ、そういう事でしょうね」

夕食のメニューは魚の白子とカキの前菜、ヤツメウナギのスープに、鹿肉のソテー、オクラと豆とハーブのサラダ、ナッツケーキなどなど、精力増強に役立つとされたものばかりだ。味は悪くない。

最後に、給仕役のメイドがハーブ入りのリキュールを運んできたのには、二人で顔を見合わせて笑ってしまった。このリキュールは精力剤代わりに飲まれるようになって来たものだ。

「お風呂は何時頃がよろしゅうございましょうか？」

「別に、支度が出来たら、いつでもよいよ」

「はい。では、御仕度が整いましたら、お知らせいたします」

まだ、十一か二か、そんな少女が大真面目にそう言うので、奇妙な感じがする。あの少女と乳母以外はここにはいないようだ。ただし警護の者は建物を取り囲むようにして、配置されている。

風呂から上がって寝室で待っていたら、白い寝間着に髪は白いリボンで緩やかにまとめたセルマが、静々と言うよりはビクビクという感じで入ってきた。失礼いたしますと恭しく言って、僕の隣に並んで横たわった。

「また、石に戻ってしまいましたね、セルマ」
「……石、ですか？」
「ほら、カチカチだ。もっと力を抜きなさい」

何もしなくても、良いのだが、あの侯爵夫人は自分でシーツを調べ上げるかもしれない。そうなると叱られるのはセルマだ。

「確かに、怖いんでしょうね。僕は化け物ってわけじゃないんですが」
「す、すみません」
「セルマ、手を貸して」

僕はセルマの手を胸に触れさせた。

「僕だって、ドキドキしているのですよ」
「ほんとうですわね」
「でも、ほら、ここ。あなたは触れるのは初めてでしょうが……熱いでしょう？」

ガクガクと言う感じで、セルマは首を振って頷いた。
僕は体を抱き起し、出来うる限り優しい声でセルマの名前を呼び、そっと唇を合わせ舌を差し入れる。彼女の苦しみを和らげる努力は払ったが、白い体を組み敷きながら煩悶する顔を見て、沸き起こるのは憐みとは別の、もっと獣じみた衝動だった。

「ああ……苦しいのです」

苦しみを与えている当の本人である僕の手を、救い主の御手でもあるかのように震えながら握り締め、訴える彼女の言葉は、僕の良心を激しく痛めつけたが、同時に残忍な欲望をそそったのだった。

「我は我が園に入り、我が酒と我が乳を飲めり、と言う訳です。ご納得頂けましたか？」

翌朝、シーツを点検に来た侯爵夫人に僕はこういった。自分でも無意識な怒りが、心の奥深いところで強くなったようだった。僕はアネッテと朝食のため，出て行き、可愛そうなセルマは僕が全ての執務を終えて戻るまで、どうやらずっとベッドでまどろんでいたようだった。

二晩目は、ただ、抱きしめて眠り、本当の意味で愛し合えたのは三日目の晩に入ってからだった。そして、セルマの目の中には、これまで見た事が無かった女としての喜びと、同時に悲しみが見て取れるようになったのだった。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・4

イヴァル・ケニングがラナース子爵の位を賜った。
これまでの功績を思えば遅すぎるぐらいだが、大宰相の懐刀的な存在と見られていたので、スコウホイの汚職がらみで手間取ったのだ。
大宰相は着実にかつての地位と勢力を盛り返した。ある程度の時間も過ぎた事も有るが、一番大きいのは実の娘ウルリカが、嫁ぎ先で熱心に奉仕活動に励み、夫ともどもスコウホイの民に受け入れられた事が大きい。
質素な衣服で国内の各地を見舞い、美しい声で地元の人たちに親しまれている歌を歌って、皆の気持ちを和ませているらしい。

「誠にウルリカは親孝行よの」
「は、恐れ入ります」

父上は大宰相にはやはりチクチク言いたいようだ。子までなした母上との仲は認めているが、本来の夫としての権利意識が時折頭をもたげるからだろう。そのくせ大宰相の力量を高く評価もなさっている。そのあたりは微妙だ。父上は相変わらず異性関係は派手だが、大宰相は母上一筋だ。

「エリクの子供を、もう一人生む事になったわ」

あっけらかんとした口調で母上は仰ったが、母上にとっての父上と大宰相のバランスが僕には良くわからない。どうやら父上とグラーン侯爵夫人との仲が、以前ほどではないと見ておられるようだ。

「あの女もえげつないわねえ。娘の価値が下がらないうちにお前に

押し付けて売り抜けようなんて」
「きっかけは政略上の必要性だったでしょうが、いつのころからか僕にとっては家族の一人で守るべき人に変化していました。だからどうか、そんなおっしゃり方はなさらないで欲しいのです」
「私がどう言おうと、事実は事実。あの女だってそう思ったからこそ、今この時期に強引にでも事を勧めたのでしょうよ。グスタフもおかしな所でお人よしねえ」
「僕は馬鹿でもお人よしでも何でもよいのです。ですが、あまりセルマの事を……」
「分かりました。あの女は嫌いだけど娘の気立ては良いそうだから、黙っておきましょうよ」

僕は父上の息子であるロルフと大宰相の息子であるヨハン、二人の幼い弟たちの様子を見てから帰ろうとした。が、気になる人物をそこに見出した。弟たちの乳母は姉妹だとかで、互いの関係は良いらしい。姉の方はあの、赤ん坊のころのロルフが泣くのを止められずにいた未熟者だ。

「はい。またきっとお伺いいたします」
そう言って、乳母たちの控室と思しき部屋を出て廊下を歩き始めた男は真っ赤な髪の、いかつい体つきの男だった。髪の色は違うが……歩き方と言い、先ほどの声の調子と言い、怪しい。
「もしもし、お待ち下さい」
僕は幸い、鬱陶しいキラキラした礼服なんぞ脱ぎ捨てていたので、宮中の事情を良く知らない者にはどこかの平凡な貴族の息子にしか見えないだろう。
「これは，あなたの物ですか?」
僕は特に印も縫い取りも無い綿のハンカチを出して見せた。鍛練の時に使う物だ。話のきっかけをつかみ、至近距離でテレパシーを働かすための小道具だ。

「いや、私の物では無いですな」
（なんだ？　この小僧。だが場所が場所なだけに、ややこしい身分のガキかもしれん。早い所ドロテアに知らせなくちゃならんが。それにしたって、大宰相の坊ちゃん達と乳母たちがねえ。こんな薬にまで世話になるほどやりたいもんかねえ。そう上玉でもなかろうに。手頃って事か）
何やら、成人に達している大宰相の庶子たちと、母上腹の二人の弟付きの乳母たちが、怪しからぬ関係に有るらしい。何ともはや、ドロドロした話だ。
「おや？　失礼ですが、このような所に何かついておりますよ。背中です。ちょっとお待ちください……御無礼を致しました」
（なんだなんだ？　このガキは？　何を企んでいやがる）
恭しく頭を下げて、道を空ける。やはりこいつ、僕が思ったように元の僕の乳母のドロテアの亭主だ。髪の毛は染めたのかカツラか知らないが、本来の褐色とは違う。

ドロテアの亭主、そう、忘れもしない、ネクセ伯爵の身分称号をはく奪され、帝国を追放されたビョルンだ。どうも察するに相変わらずいかがわしい薬品類を取り扱って、生活しているらしい。しかも舞い戻って黄金宮に出入りしている。これは一大事だ。
僕は見当をつけて、通用門に出向き、顔見知りの衛兵に髪の色と年恰好を伝え、届け出ている現在の住まいと名前を知った。

「ミッケリの商人、ヤニス・モレノと名乗っているんだな？　大宰相が最初に黄金宮に出入り自由の鑑札を出してやったのか。うむ」
僕は近衛の連中と相談し、至急父上にお話しする。弟達の乳母や大宰相の庶子たちの事は触れないが。
「ほう、そんな奴が舞い戻っていたとはな。捕まえる前に、一応大宰相にも、伝えておけ」
そのような指示を貰った。だが、結果は、失敗だ。届け出のあっ

た住所の住まいはもぬけの空だった。
「いかがわしい薬物や、生活用具は残っていますが、逃げられたようです」
取引の帳簿類は、わざとらしく机の上に残されていた。多数の帝国貴族や皇族の名前が記載されている。どいつもこいつも僕が無駄飯食らいだと思っているような連中ばかりだった。どうやら一番大切な帳簿や記録は持って逃げた可能性が高そうだ。

「港を封鎖するんだ。入港は入国審査を受ければ認めるが、出航は停止させろ」

ともかく、港に出向いた。ミッケリの取引に関係が有りそうな荷物を中心にあらためると、相当な量の違法薬物が出てきた。
夕方になって大宰相が泡食って、港の検疫所に近い詰所に僕を訪ねてきた。

「大宰相の上の息子さんたちと、母上の所に仕えている弟たちの乳母たちも、このように違法薬物をかなり購入しています。あなたの所以外に侯爵夫人の所の執事の息子やら、父上の一番若い愛人やら、まあ、痛み分けでしょうが、これが外部に知れたら厄介ですよ。一度宮中に戻って、これからの対策を立てましょう」

父上の所に、僕と母上と大宰相、グラーン侯爵夫人が集まり、押収した名簿に名前の載っている使用人は北の塔に収容して取り調べる事に同意してもらった。

「大宰相の御子息達と……女優のテレサ嬢は、それぞれの住まいで軟禁の上取調べ、これでよろしいですか」
「別に北の塔で構わんぞ」

テレサ嬢の身の上に関して父上の口調は酷く冷淡だった。そして、大宰相の方をじっと御覧になった。御自分の愛人は北の塔に入れて構わないとおっしゃれば、大宰相が困惑すると見こされての事だろう。

「あ、あのう……」

「大宰相は、しっかり御子息を監督なさって下さい。処罰はまた全貌が明らかになってから……それでお許し頂けましょうか？」

僕は父上の顔を見つめた。すると父上は口角を上げた皮肉な感じの笑みを浮かべられた。

「ふん、まあ、良い。そもそもはお前の手柄だ。思うようにすれば良い。皆、グスタフに従うように」

夕食は執務室でごく簡単なものを食べ、イヴァルの指揮のもと経理・財務・帳簿に明るい官僚を集め、押収した帳簿と記録を分析整理した。北の塔に閉じ込めた連中は、暴力的な取り調べは控え、忍耐強く供述を引き出すように伝えた。テレサ嬢は町屋住まいなので、警護の問題も有り、北の塔のかつてクヌートが住んだ場所に収容する。

「皇太子殿下、あたしはあの薬が違法だなんて、これっぽちも知りませんでした。それにオジサマが本当に皇帝陛下だなんて知らなかったの。だからびっくり。子供が出来たって大丈夫、面倒は見るっておっしゃって、今まで御手当はちゃんと下さっていたから安心してたんですけど、これからあたし、どうなるんです？もう三月、月の物が無いんですの。あらごめんあそばせ」

僕と大差無い若さではないだろうか。二十一世紀の先進諸国なら確実に父上は犯罪者扱いだろう。美人だが、人を食ったような所が有る。本人が言うには、実の親の顔を知らないそうだ。月の物が無

いというのも嘘ではなさそうだった。すぐに侍医に診察させると「おめでた」だそうだ。だが、懐妊中に危険な薬物を飲むなんて……何事も無ければ良いが……

僕はセルマの住まいに寄って、大事件が起きたので当分は自分の住まいで眠る事になると伝えた。

「また、明日の昼食にでも、御一緒しましょう。急な変更が有れば、使いを寄越します」

そう伝え、警護の者には十分に気を付けるように言い置いた。そして侯爵夫人には、物騒だから場合によっては母屋の方でセルマを寝かせてほしいと伝えると、了承された。

アネッテの住まいには、近衛の兵士をいつもの倍、配置した。そして乳母におおよその事件の経過を伝え、くれぐれも用心するように伝えた。

すべてが終わり、ほっとして住まいに戻ると、争うような物音がする。びっくりして中に駆け込むと、ユリエが、一人の女に縄をかけた所だった。

「畜生！　黒髪の野蛮人め、昔の義理を忘れたか」

しわがれ気味だが、聞き覚えのある声だ。

「あなたに何一つお世話になった記憶は有りません。殿下のお住まいで、何をしようと企んでいたのですか？　毒でも仕込むつもりでしたか？　ならば、その瓶は何です？」

「ユリエ、大丈夫か」

「はい。ですが、この人はここに入り込んで何をしようとしたのでしょう？」

「さあな。ドロテア、相変わらずろくでもない暮らしぶりのようだな。はああ、お前、隠し扉の事を覚えていたのだな。だが、間取りが変わっていて驚いたか。何か隠していたのか？　この瓶はもらう

よ。毒なのかい？」
「いえ、毒と言う訳では……」

どうやら一種の媚薬らしいが、そんなものをなぜ持ち歩いて居たものか？　自分は亭主の命じるように水がめに薬物を仕込むつもりだったが、毒薬ではないはずだ。かつてこの部屋の奥の隠し戸棚に自分の隠し財産を置いていたのだが、今も有るのではないかと思い、取りに来た……そんな供述に嘘は無さそうだった。

薬物の専門家を呼び出し瓶の中身を調べさせたが「さほど珍しくも無い媚薬の類」で、効果のほども疑問だという検査結果だった。

駆け付けた近衛の士官にドロテアを引き渡し、北の塔に厳重に収容するように命じた。

ドロテアを引き渡すと、ユリエは呆けたような表情をしていた。
「大変だったね。御苦労さま」
「あ……おかえりなさいませ。御夕食は……」
「皆と仕事の合間にサンドイッチ程度、適当につまんできた。そう言うユリエは？」
「まだです」
「ユリエは昼には戻っていたの？」
「ええ。アネッテ様の乳母が長話をしていきましたが……」
「何か面倒な話？」
「その、殿下の添い伏し役をセルマ様と勘違いされておりまして……」
「僕との関係については、説明したの？」
「しそびれました」
「何だか疲れているみたいだね。息子はどうだった？」
「元気でした」
僕は恐縮するユリエを座らせて、パンケーキを焼き、簡単なスープとハムと果物類を出した。

「何かユリエ、変だな。微熱が無いか？」
「そうでしょうか？　別に体が不調とも思いませんが」
「まあ、さっきはドロテアを縛り上げたから、疲れたよね」
「はあ」
何というか、空気がしぼんだような感じの返事だ。ちょっと強引に一緒に風呂に入ってしまう。
「今夜は僕が洗うからね」
「そんな、恐れ多い」
「どうして、そんな風に言うの？　アネッテの乳母に何か言われた？」
「その、黄金宮は男女の関係が乱れていて嘆かわしいと……色々な方の噂をされまして……ワッデン王室の場合はまず御正妃と名実ともに夫婦になられてから、愛人の方が決まったりするそうです。添い伏しや側妃の習わしが、どうも馴染めないと申しておりました」
「それなのに、僕とユリエの関係をわかっていないの？」
「ええ。『貞淑な伯爵夫人』などと言われてしまうと、どう言えば良いのやら……年齢差が大きいので、私は殿下の乳母に近い存在だと考えておいでの様なのです」
「そうか。僕から、あの乳母に説明する。ユリエを立派な伯爵夫人だと思っているだけに、そんな風に思い込んでいるんだね。僕の子供がいつユリエに出来てもおかしくない様な仲だと言っておこう」
「はい。お願いいたします」
「ねえ、やっぱり、体調が変じゃないか？　月の物は、ちゃんと来ているか？　いや、来てないなあ」
「ああ……そうですね」
「明日，侍医を呼ぼう。朝の鍛練は休むよ」

大人しく、ただ互いに身を寄せ合って眠った。
ゆっくり朝食を取り、アネッテの所には寄れないと侍従に伝言を持って行かせ、侍医を呼んだ。

「御懐妊でございます」
「やはりそうか」
「いつ生まれましょうか？」
「さよう、伺ったお話と診断の結果から判断いたしますと、今年の末でございましょう」

三日後、ユリエは『病により宿下がり』した。医師によれば、疲労がたまっているので、数日安静を保つ方が望ましいと言われたのだ。滞在先は、レーゼイ家の本宅内の離れだ。無事に生まれれば僕の初めての子供と言う事になる。

「師匠、申し訳ありません」
謝る僕に、家康師匠はにこやかにこういった。
「そのようにおっしゃるものでは有りません。生まれてくるお子が、御気の毒では御座いませんか」

僕のユリエに対する想いに、何ら恥じるところは無いが、曲がった事が嫌いな師匠に申し訳ない様な気がしていたのだ。だが、子供自身には嫡出も庶出も本来は関係無い。ただ大人の勝手で子供を辛い目に合わせてしまうかもしれない。その意味で、僕はこの子に最初から負い目が有る。小さなラウル・ヤイレは、心配そうに眠っているユリエの顔を見つめている。ああ、この子にも、僕は負い目が有るのだ。

父上にユリエのお産は、テレサ嬢と同じころになりそうだと報告すると、ほろ苦い笑いを浮かべられた。
「孫と子が同じ時期にな……」
庶子の中には結婚して子がいる人も幾人かいるらしいが「身近で様子を見聞きすることになりそうな孫は、初めてだぞ」ともおっし

やった。

「それはそうと、父上の真実最初の御子は、どこにお出でですか？」

「それがなあ、わからんのだ。何しろ、最初の女は獰猛な獣の様な女だったのでな」

僕はその話を聞きたいような、聞くのがはばかられるような、微妙な気持ちで父上の顔を見た。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・４（後書き）

大宰相と皇后の息子はアンホルト子爵ヨハンです。間違えてました。訂正しました。ごめんなさい

悩める僕と黒いドレスのユリエ・5

僕の乳母であったドロテアとビョルンの夫婦がミッケリから来た商人を装っていたのは、何らかの意味合いが有りそうだ。悪事を働くにしてもミッケリは活動しやすい自由港だからかもしれないが。

「ドロテア、僕はお前に世話になったとはこれっぽちも思ってないよ。何しろお前は僕が赤ん坊だから何もわかりはしないと侮って、本来皇太子専用であるはずのベッドに昼間から亭主を引き込んで、怪しからんふるまいに連日及んでいたのだからなあ。あの屈辱は忘れていないよ」

「で、殿下は乳飲み子であられましたのに」

「乳飲み子でも、大半の事情を理解していたよ。お前が年中ろくでもない事ばかり考えていることも、朋輩を騙してして陥れ、黄金宮にいられないようにした事も全部、僕は理解していた。当然、お前なんかと身近に暮らすのは勘弁してほしかったよ。それはそうと、お前、亭主はどうした？」

（大主教様の手の者が近衛にいるって聞いたのに、どうなっているのかしら？）

近衛にもネスの手が及んでいるのか。考え得る事とは言え、こまったものだ。

近衛兵は総数七百人程度の一部隊が黄金宮に常駐する。都であるトリアの六か所の城門にもそれぞれ七百人程度の部隊が駐留する。月に一度各部隊で選抜を行い、優秀者を黄金宮に配置しているのだ。

僕はさっそく都の駐留部隊の百人隊長七人と、十人班長のうち優れた者を集めて、親睦も兼ねて昼食会を開いた。一人ひとり握手をしながら各人に言葉をかけ、その思考を探った。すると、危険人物

が三人見出された。何れもソフス・ネス大主教の崇拝者だ。　幸い三人とも十人班長で有ったので、昇進させ故郷の村に配属した。各村落の守備隊長に任じたのだ。左遷した事にはならないし、都から切り離せる。

「それぞれ、故郷の人々のために、粉骨砕身頑張って欲しい」
「帝国の安定にはより良い人物の赴任が必要不可欠」

　などなど、三人には言葉をかけておいた。事情を察知したものには見え透いているが、僕はそ知らぬ顔で、近衛内部の危険分子のふるい落としに務めた。
　この三人の場合、ネス大主教から北の塔でドロテア他数人の脱出を手引きして欲しいという依頼は受けていたもののお互いが内通者だと知らずにいた。しかも、通常なら互いに接触は無いはずのポジションにいた。三人とも僕や父上に対する忠誠心とのせめぎあいで悩んでおり、実行できずにいたのだ。おかげで北の塔の収容者は誰も脱獄に成功はしていないし、破壊工作も行われていない。

「ふうむ。彼らの忠誠心をネスがどのようにして揺るがせているのか、良く調べた方が良さそうだな」
「先日の飲み水に薬剤を混入した意図が良くわかりません。分析させた結果は毒では無いようですが」
「だが、何らかの怪しからん企みでは有るのだろうから、お前も気をつけろ」
「はい。どうぞ父上もお気を付けください」

　僕は師匠に勧められた強力な解毒効果の有る茶を、毎日飲むようになった。日本の煎茶とよく似た味で僕は好きなのだが、父上のお口には合わなかった様だ。お持ちした時も「多分の飲まないから持

って帰れ」とおっしゃって、普段通りの茶を召し上がっていたはずだ。だが、もっと強引にでもお勧めすれば良かった……

父上が倒れてしまわれたのだ。

「これは、我々の知らない未知の毒です。さよう、ミズホあたりの遠国のものでしょう」

侍医の言葉を受け、僕は家康師匠が邸に住まわせているミズホ国の医師を宮殿につれて行き、診断させた。その医師が言うには以前の媚薬は単独では大した効力も無いが、ある種の毒の効力を増大させるのだそうだ。これは……もう一度北の塔の連中を徹底的に締め上げなおす必要が有りそうだ。

「まあ、見た事も無い奇妙な衣装ですね。一応それでも絹みたいだけど」

「髪も目も黒くて、肌の色は案外と白いんですのね」

黄金宮の女たちがうるさく噂するミズホの医師は江戸時代の御典医という感じだ。だが、坊主頭ではない。髪は肩まで伸ばし、こちら風にリボンで一つにまとめている。言葉は前世の日本語と殆ど違いが無い。この帝国の言葉はヨーロッパの言語という感じなので、ずいぶんと響きが違う。それでまた、話すと、皆が聞いた事も無い言語だと言って騒ぎ、その言葉を何と僕が理解し話すと言うので、驚かれた。

「父の体は、この薬湯を飲ませれば回復するのですね?」

「意識ははっきりされるでしょうが、自由にお話をなさるのに半年はかかりましょう」

東洋的な煎薬と鍼治療で、意識は回復なさり、かろうじて口の開け閉めと瞬きが出来、右手だけが微かに動かせる程度までは回復された。僕は文字盤を作らせ、父上の意志を読み取るようにさせた。

先ず最初に指示棒をゆっくり動かす。右手が反応したところで、棒を止め、その文字で正しいか確認する。Ｉか。こうすればテレパシーが使えない時も父上の意志が読み取れる。

テレパシーは本人の無意識を読み取る場合も多いので、伝えようとした内容がそのままわかると言う訳では無かったりするのだ。今の父上はなぜか、真っ白い大氷原のイメージと、体を抱き留め温めた誰かの感触の記憶に浸っておられる。毒の所為で温度感覚が狂い、酷く寒く感じているはずだという医師の言葉が思い返された。

「Ｉの文字で始まる、物ですか？」

父上は口を曲げらる。

「では、Ｉで始まる人ですか？」

父上は二度続けて瞬きされた。イエスとかＯＫの意味で瞬きを二度することになっているのだ。

「イサク、ですか？」

違うらしい。イサクという父上の忠僕かと思ったのだが……

「では、イヴァル」

瞬きを二度続けてなさった。

「イヴァル・ケニングをお召しですね。国璽詔書補佐としての役目でしょうか？」

強い意志の感じられる視線を僕に向けられ、はっきり瞬きを二度された。

イヴァル・ケニングは高齢の父親になり替わり、近年は国璽詔書としての職務を実質的にこなしている。彼をお召しと言う事は、皇帝として公文書を発布すると言う事だ。さすがイヴァルだ。呼んだら茶を一杯を飲むほどの時間で、すぐやってきた。

「恐れながら、その勅書は既に大半が書きあがっておりますのですか？」

イヴァルのその問いに、父上は瞬きを二度された。
「後は御璽を押され、発布の日付を入れればよろしいのでしょうか？」
また、父上は瞬きを二度された。
「して、その勅書は、いずこに？」
父上は右手の人差し指にした指輪をじっと御覧になった。
「この指輪を、どうするのですか、父上」
僕は父上の手を握り、そっと尋ねる。すると、明確なヴィジョンが伝わった。その指輪を父上の書斎のデスクの板の右側側面の穴に押し当て、ぐるっと回転させると、薄い引出の様な部分を引き出せるようになる細工が施されているらしい。中には書状らしきものが納めてあるようだ。
「これは……僕が指輪を嵌めて、取り出せば良いですか？」
すると、父上はニヤッとされて、二度瞬きされた。僕がテレパシーをある程度使える事は、僕と父上だけの秘密事項なのだ。

指輪をお借りして、父上の書斎に入り、指輪の凸凹に合わせた穴に指輪を嵌めこんで秘密の薄い引出しを明けた。見せられたヴィジョン通りに、中から勅書の体裁を整えた書状が出てきた。
後は書状をイヴァルに渡す。イヴァルは内容を確認すると、勅書の発効に必要な執政官を招集した。勅書は執政官全員の承認のもと御璽が押され、日付が書き込まれたのだった。

「本日より、朕テオレル帝国百十代皇帝フレゼリク・アウグスト・ネルケ・ルドヴィク・アブ・ランゲランは唯一の正統なる後継者・皇太子グスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲランを摂政に任じ、皇帝としての全ての任務を摂政たる皇太子の輔弼のもとに行う事を決した」

こうして僕は思いもかけぬ事から、この国のほぼ全権を握る立場

に立った。
父上はもう、随分以前から僕に摂政の役目を与えようとお考えだったらしい。母上は「単に楽をなさりたかっただけだけよ」とおっしゃるが、それだけではないと僕は思う。それにしても、父上の脳裏に広がるあの、真っ白い風景はどこのものだろう？

連日、僕は執務をこなした後、父上の御嫌いな解毒作用の強いミズホの茶を、一緒に頂いてその日の御報告をする。毎日鍼を打ち、ミズホの茶を飲まれるようになって二月、父上は起き上がれないものの、お話はゆっくりとならお出来になるようになった。

「父上、今回のこの毒の一件は神聖教会を国教から外された事と関わりが有るでしょうか？」
父上は瞼を二度、つぶられた。まだ頷かれるのが苦しいらしいのだ。

グラーン侯爵夫人あたりは積極的に神聖教会の人事にも帝国が関与して行くことが、帝国の安全と安定に寄与すると考えているようだが、父上のお考えはかなり違う。
周囲に多い保守派の手前、お考えを口にされる事は稀だったが、宗教そのものに強い疑念をお持ちだ。そして、将来的にはミズホのような異教の国家との交易や、宗教色のない科学の研究を積極的に進めるべきだとお考えなのだ。当代の大聖猊下の病とネス大主教の暗躍、ミッケリを中心とした勢力の活動などから、教会の勢力は弱まり、今なら表立っての非難も受けないだろうという御判断で、神聖教会の教えを国教から外した。いや、正確に言えば国教などと言うものは特に定めない、と法令を改められただけにすぎない。

「表立っての教会批判も行いませんでしたのにね」
「それでも、ゆ、る、せ、ない、のだ、ぼうずらは」

父上の御声は、しわがれていて、とても小さい。若い僕でも耳を寄せて、ようやく聞き取れるぐらいだ。確かに教会が皇帝の心からの敬意と尊敬を勝ち得ていないと知った貴族たちは、献金なども熱心ではない。

「かなり、献金が減って、坊主どもの実入りが減ったのでしょうね」

父上は、また瞬きを二度された。

「きょうかいなど、く、だ、らん」

僕も本音ではそう思うが、それを口にする事は危険だ。父上は自分をこんな目に逢わせたのは、教会勢力だと信じておられるので、おっしゃる内容が以前より過激だ。

「ですが、宗教は厄介です」

「ぼうずの、あくぎょうを、あ、ば、け」

やはり、それが手っ取り早いだろうか。貴族にも関係者が多数存在しそうなので、これまでは足踏み状態だったのだが、これからは教会関係者をめぐる黒いうわさを積極的に捜査させる事にした。

軽微な税の取り込み、収賄、娼婦や男娼との破戒行為などなど、積極的に捜査し、結果を大々的に公開している。徐々にではあるが、人々の教会に対する感情は冷えたものになりつつある。しかし、肝心の父上に毒を盛った連中の行方も、ドロテアの亭主ビョルンの行方も不明のままだ。あの時、強引に捕まえておけば良かったのかもしれない。

そんな中、時間は過ぎ、ユリエは僕の初めての子を産んだ。黒目黒髪の元気な男児だ。名前をリョウタとした。そう、僕自身の前世の名前だ。

「ありがとう。ユリエ」

僕は素直に感謝の言葉を口にできた。僕の膝の上にはラウル・ヤ

イレがいる。僕は皮肉な巡り合わせのこの小さなラウルが、似たり寄ったりの年頃の弟たちよりも気がかりなのだ。最初はある種の贖罪の念から関心を持つようになったのだと思うが、今は弟たちより僕にとって近い存在だと感じる。

「リョウタ、かわいい」
「そうか。ラウル、お前の弟だ。仲良くしてやってくれ」
「あい」

ユリエの不在中は、不便でも住まいに別の女を入れることは無かった。侍従と僕自身で、何とかやっているが、どうも風呂に入っても、心身ともに心からくつろげるという感じにはなかなかならない。セルマとは、三日に一度程度のペースで夜を共に過ごしていたが、やがて僕の子を身籠った。

そうなるとアネッテにさすがに何も知らせないわけにも行かず、僕に息子が生まれた事、セルマが懐妊した事も僕自身の口から伝えた。

「子は、どうしたら授かるのでしょうか？」
「長年夫婦であっても、子が授からない者もおりますからねえ……何とも」
「あの、私も殿下のお子が欲しいのです」
「そうですか」
「いけませんか？」
「いや、その、乳母ともよく相談しましょう」

僕が困り切った表情を見せたので、失望したらしい。どうやらアネッテは仲睦まじい男女が寝床を共にすれば、子が授かる事も有る。そんなふうに思っているのだ。無論、彼女の心臓の事を案じた乳母

が正しい性的な知識を与えないように注意しているからだが。僕の表情を、僕がアネッテとの子供を望まないからだと受け止めたようなのだ。

「僕は、あなたを大切に思っていますよ」

「でも、私の生む子など欲しくないとお考えなのでしょう？」

「そうではありません。それは違いますよ、アネッテ」

僕は困り果てて、つい、産後のユリエの枕元で愚痴ってしまった。ユリエは確かに、事情を知る数少ない人間の一人だが……

「全く、どうすれば良いんだろうねえ。ごめん。他に相談できそうな人も居なくて……」

「乳母はどう言っておりますか？」

「心臓の事を、打ち明けるべきではないかと」

「ですが、そうなると、離縁して頂きたいとおっしゃるのではないでしょうか？」

「そうかな？」

「これは私の……勘なのですが。御自分が殿下のお役に立っているとお感じになれないと、そのようにおっしゃるような気がいたします。義理堅い方ですから」

「正妃として存在してくれるだけで、十分ワッデンとの絆の役目は果たしていると思うのにな」

「いっその事、御正妃候補から正式の儀式を上げられ御正妃になさいませ」

「だが、床入りその他諸々有るだろうが」

「……父に、御相談なさいませ。良い手が有るかと存じます」

家康師匠にどんな隠し技が有るのか、僕にはさっぱり見当がつかなかった。

悩める僕と黒いドレスのユリエ・5（後書き）

軍隊の人数、悩みました。古代ローマの編成と幾つかの国の近代化する以前の例をあれこれゴタマゼにしてみました。また変更するかもしれません。

嵐の前の静けさと僕・1（前書き）

Ｒ１５が二人分、ですかね

嵐の前の静けさと僕・1

後から思えば、摂政になり立ての十三歳から十六歳で外遊する直前までは、実に平和だった。

父上の御健康は回復するのに丸々二年はかかったが、それでも元通りになられて、本当に良かった。だが、執務は僕に任せきりで、御自分は「探し物」をなさるのだとおっしゃって、市中への微行の回数が増えた。それでも以前とは異なり、愛人は増えなかった。あの、北の塔に収容していたテレサ嬢が普段から摂取していた怪しげな媚薬類の所為か、出産時に親子ともども亡くなってしまった事が、何らか影響を与えているのかもしれない。だが、あの心に広がる白い荒野、大氷原はどこなのかは、教えて頂けていない。

セルマは僕の初めての娘ルイサを産んでから、ますます慈善事業にのめり込んでいった。僕の正式な側妃となり、皇太子の庶子であるルイサは女子爵なので、セルマが自由にできる毎月の手当はそれなりにまとまったものだ。だが、大半を慈善事業と敬愛する修道女が設立した修道女会のために費やしている。

僕は教会を信じない、いやそれどころか不快に思っているが、セルマの活動を妨げる気は無かった。セルマにとって、そうした活動が生きる希望となっていたからだ。

ユリエは元来が伯爵夫人であって、領地も有るし、資産も有るのだが、僕の側で暮らすことを選んでくれた。僕の住まいの側に小さいが使い勝手の良い小さな館を作り、そこで自分の生んだ二人の息子、ラウル・ヤイレとリョウタを育てる事にしたのだった。リョウタが父上と僕を呼ぶのを、羨ましそうに見つめるラウルが酷く不憫で、愛しいと感じた。

「周りに誰も居なかったら、僕を『父上』と呼んでも構わない」と

許す事にしたのだ。二人の「息子ら」と共に過ごす時間は心安らぐものだった。

アネッテとは僕が十四歳になってすぐ、正式な婚儀を挙げた。八頭立ての屋根無しの馬車に乗り、礼服を纏った僕とアネッテは都大路を埋め立てた人々の歓呼の声にこたえて、手を振りながらトリア大聖堂に向かった。真っ白い豪奢なドレスを纏い、祭壇への道を静々と進むアネッテの姿は庶民の思い描く皇太子妃にふさわしい美しさだった。

正妃との婚儀は教会の関係する儀式が多い。この際、怪しい人間についても調べるきっかけにしようと色々厳重に教会関係者について調べ上げたが、特には何も見つからなかった。最近は教会側も帝国には品行方正な聖職者を選んで赴任させるようになっていた。

北の塔の連中は大半は家財没収の上、都への立ち入りを禁じた。忌々しいドロテアは、ミッケリに帰化したミッケリ市民なので早急に釈放せよと言う要請がミッケリの政府から有り、帝国内の全資産没収と二度と帝国に立ち入らないことを条件に、釈放した。だが、この生ぬるい処置がとんでもない事件に結びついて行くとは、このころの僕も父上も帝国の貴族たちも全く考えていなかったのだ。

子供の問題は家康師匠と相談して決めた方法を取った。僕が男性用避妊薬と言うかそんな薬を飲むことにしたのだ。

「まだ殿下はお若いし、御寿命も並みの長さではいらっしゃらないようですから、数年間お胤が無い状態でも、差支えはございますまい」

庶子が二人既に授かっているし、父上のもとにはロルフをはじめ、弟たちもいるのだ。それで構わないと僕が言うと、精子の働きを停止させる薬の処方をしてくれた。

「飲み始められて、十日たちますと効果が完全なものになります。

元の状態にお体を戻すのは、飲むのを十日以上、おやめになれば宜しいのです」
味自体は苦くて独特の臭気も有るが、毎朝カップに一杯煎じて飲んでいる。

十四歳から十六歳にかけての僕の暮らしぶりは、こんな感じだった。
朝食は大抵ユリエや二人の息子らと共に食べる。昼は執務を行う連中と一緒に食べ、午後のお茶は父上の所で。夕食はそれぞれ泊まると決めた者と食べる。概ねセルマ・ルイサ母娘とアネッテ、そして自分の住まいでユリエたちと言う三か所を交代で回った。月の物が有る場合は飛ばして行くのだが、トータルで見ると三人ほぼ同じ日数を過ごす事になるように気を使っている。

「僕は三か所で手一杯ですよ。父上はマメですねえ」
本気で僕が感心すると、父上は自嘲的な笑みを漏らされた。
「無責任に、気が向かなければ放置しているからな。お前の様に全部を律儀に面倒を見ようとすると、確かに三人でも骨だろうさ」
どうやらこれまで放置されてきた庶子や、かつての愛人を訪ねておいでの様なのだ。中には悲惨な最期を迎えた人も居たようだ。庶子ももっと面倒を見ておけばと、後悔する様な事も有ったのだろう。僕には、父上が命の危険を感じた後、これまでの人生の総決算をつけようとしているように感じられた。
「最初の女性は、見つかりましたか？」
「無理だ。探しに行けるような場所では無かったしな」
また、父上の心にはあの大氷原が広がっている。

このころの僕の悩みの種はアネッテとの関係だった。無論仲睦まじくしては居るが、共寝を重ねるうちに、自分は子が産めないのではないかと言う疑念に駆られるようになったのだ。

「口さがないメイドや女官どもの言うことなど、気にかけてはいけません」
「でも、殿下と共寝させていただいておりますのに……」
「僕と一緒の時間をつまらない噂話で、台無しにしないで。ね？」
僕が口づけてやると、このころはもうすでに積極的に応じるようになって来ていた。僕の隠し事には気づかず、信じきったように委ねられるようになったまだ成熟しきらない肉体を、僕は丹念に愛撫する。せめてもの罪滅ぼしとでもいうように。心なしかささやかだった乳房が豊かになってきた様な気がする。

「僕を好きですか？　アネッテ」
「……ッアア、お、お慕いしております、殿下」
「あなたは僕の正妃だ。殿下と呼ばず、こういうときは名を呼びなさい、さあ」
「ぐ、グスタフさまあ」
「様もいりませんよ。ほら、ちゃんと呼びなさい」
「グスタフっ」
「ああ、良くできました。あなたは、本当に可愛い、アネッテ」
「あっ……っああ……」
「僕が欲しいの？」
アネッテは全身を羞恥で火照らせる。こんな初々しい反応が好もしい。
「お願い、お願いです」
ちゃんと何がどこに欲しいのか、アネッテがはっきり言うまで、僕は焦らす。結局は応じてやるのだが。

僕はアネッテを悩ませるような噂をする者を、黄金宮には置かない事にした。経費節減のための人員削減だと言う建前で、一応退職金ぐらいは払ったが。これだけで随分とアネッテの気分は和らいだようだった。後はユリエが厳しくしつけたメイドばかりを配置した。

それでほぼ一年は静かだったが今度は別の方角から火の手が上がった。

「庶子が二人出来たのだからグスタフに問題は無いはずよ。ならば妃に問題が有るのではないかしら?」

母上の爆弾発言で、僕の気遣いは吹き飛ばされた格好になった。

「まだ、実際の夫婦になって間が無いのです。気長に見てやって下さい。くれぐれも母上、アネッテには優しくしてやって下さい。ワッデンとの関係が悪化したら事ですから」

「ああ、それはそうねえ。……それにしても、困った物ね」

「僕の妻として仲睦まじく共に過ごしてくれれば、それだけでもワッデンとの争いの火種は減ります。子は出来るに越した事は無いですが、責め立てても出来る訳ではありませんから」

言いすぎかと思ったが、ワッデンとの絆をぶち壊しにする様な言動はくれぐれも慎んでくれと母上に再度言っておいた。すると……母上御自身は黙ったが、周りの老人どもが腹を立てた。

「皇后陛下のおっしゃったことは、至極妥当だ。それを注意なさる皇太子殿下の方がおかしい」

「皇太子殿下は愛らしい妃殿下に，骨抜きにされてお出でだ」

僕は気にしないが、アネッテが気にした。それだけではない。話題の中心が良きにつけ悪しきにつけアネッテばかりだと言うので、セルマがすねる。こちらはこちらで、なだめるのが骨なのだ。

だが、すねられっぱなしは困る。側妃の立場は微妙で、それなりに色々大変なんだと思うが……だが、セルマとの間には可愛いルイサがいるのだ。

「ねえ。僕が許せないの?」

「そんな、そんな事はございません」

「いや、やっぱりセルマは怒ってるじゃないか」

「そんな、とんでもございません」

「じゃあ、僕の顔を見てよ。ねえ……」
僕は必死だった。ここらが僕らの関係の大事な一つの節目かも知れない。そう直感していた。
「殿下……」
「僕がずっと前に言ったこと、覚えている？　君ひとりの僕で居てあげられる事は、今もこれからも難しい、そう言ったよね。でも、僕は君と一緒に生きて行くことにしたし、そうと決まれば互いの絆をより良いものにしたい。そう思っているんだよ。君はどうなの？」
「そうでした。確かに、そうおっしゃっていたのでした。でも……」
「でも、どうした？」
「あのころは、あのころは、何もわかっていなかったのです」
「ああ、そうだ。僕だってわかっていなかった。君をこれほど大切に思うようになるなんて、予想外だ」
「そうなのですか？」
「ああ。君は僕の心から大切に思う人になったのだよ」
「上手に私をだまして下さい、そうお願いしましたら……」
「最善を尽くすと、僕は言ったね。でも、もう、君をだませるとは思っていない。それでも、僕は君に共にいてほしい」
「本当ですか？」
「本当だとも」

近頃のセルマは昼間の淑やかで清楚な感じとは打って変わった成熟した「女」としての魅力、いや魔力と言っても良い様な力にあふれていた。

「そろそろ、邪魔なものを取ってしまうよ」
「は、恥ずかしいのです」
「もう、いい加減慣れなさい」
布の端を掴んで、するすると全てをすっかり取り払ってしまう。
僕はあえてゆっくりとその行為を行う。柔肌が次第に外気にさらさ

れるようになる心許なさにセルマは小さな悲鳴を上げる。
「綺麗だ、セルマ……」
僕は最初の夜の華奢な体を激痛に捩り、強引に割り広げられた箇所を赤く染めてかぼそく呻いていた姿と、どこまでも優しい曲線に囲まれた悦びを知り始めたばかりの、まだどこか恥じらいを含んだ昂ぶった目の前の白い体を重ねて見た。
小さな悲鳴を放った愛らしい唇から、まったく意味合いの違う別の声を絶え絶えに漏らすようになる頃には、互いにとりつくろわぬ姿を見せ合っている所為か、動きが積極的になってくる。セルマはいつもとは打って変わって、僕の体に積極的にしがみついてくる。僕は僕でたまらなくなり、セルマの熱くなった体に押しつぶさんばかりにのしかかって、二度三度と抉り抜く。その部分が激しい痙攣を生じ、唇を噛みしばったセルマの顔の相がが苦悶するかのように、反り返った。
「で、殿下っ……」
瞬間、腰を突き上げ、目をカッと見開いた。その目が閉じられた時には、セルマは完全に意識を飛ばしていた。凄まじいばかりの喜びの有様を見るのは、僕自身の深い満足にも繋がった。
それからは汗みずくになった体を互いに絡めあわせたまま、しばらく言葉も無かったが、呼吸が落ち着くと、僕はセルマと共に風呂に入る。こんな事が出来るようになったのは、セルマがルイサを産んで以降だ。

「一緒に風呂に入るのも、悪くないだろう?」
「ええ、でも、まだ恥ずかしくって」
「子までなした仲なのに、恥ずかしいのかい? ああ、ほらほらそんなに赤くなって」
「殿下」
「そろそろ、こんな時ぐらいは『殿下』と呼ぶのはやめなさい。グスタフ、と呼ぶんだよ」

「ですが……」
僕がセルマを抱き込み、感じやすい部分を一度に二か所悪戯したせいか、声に悩ましげな喘ぎが混じる。
「グスタフ、だよ。様も無しだからね」
セルマは僕に自分から両手を絡めると、僕の耳元で「グスタフ」と呟いた。
胸の奥に熱いものがこみあげてきて、思わず僕は唇を重ねた。
考えてみれば、僕は一緒に風呂に入るのはユリエだけだと、頑なに思っていた時期が有った。そうしたこだわりが僕の方でも無くなって以降、セルマとの距離は縮んだのだった。さすがに、マッサージするように僕を洗い上げるのはユリエだけだが。

「では、行くね」

僕は眠っているセルマの額に口づけて、自分の住まいに戻ったのであったが、その後、セルマが泣いているなんて、僕は随分後まで気が付かずに居たのだった。

自分の住まいに戻ると、朝食の時刻まで寝なおすのだ。ユリエは自分の住まいの方に子供らを連れて行って、そこで眠っているはずだ。一人で眠るのは寂しいといえば寂しいが、気楽では有った。
いつも目を覚ますころには美味い朝食の準備がちゃんとできていて、ユリエや息子たちと会話を交わしながら食事を楽しみ、頭をスッキリと切り替えるのだった。

そしてユリエに悩み事として相談するのは、避妊薬の事も含めて主にアネッテに関わることで、セルマが話題になった事は全く無かったのだった。

嵐の前の静けさと僕・2（前書き）

父の脳裏に広がる景色の秘密

嵐の前の静けさと僕・2

「兄上……」
「兄上！」
「殿下」

三人の弟たちは、良く一緒にいる。僕より六歳下の大公殿下と呼ばれているロルフ八歳と、グラーン侯爵夫人腹のコリング伯爵マウリ七歳、そして大宰相と母上の子であるアンホルト子爵ヨハン七歳だ。

不祥事の後ロルフとヨハンの乳母は解任され守り役が付けられたが、マウリの乳母は健在だ。この乳母はグラーン侯爵夫人を崇拝し、皇后である母上の事が感情的に嫌いらしい。まあ、そうなるもともとの原因は母上の目下の者に対する心配りが欠けていた事が原因なのだろうが、その感情をマウリに吹き込んでいるのは問題だろう。

三人とも僕から見れば弟なのだが、皇帝である父上の血を引かないヨハンがいつも遠慮がちであるのと、ロルフが他の二人に対して高圧的であるのが気になる。それでも良く一緒にいるのは、兄弟であると同時に数少ない同性の遊び相手でもあるからだろうか？

今日もそれぞれの供を振り切って、中庭の人目につきにくい花園で群れていたのだろうが……

「何か喧嘩でもしていたのかな？　兄弟はやはり仲良くなくてはいけない。特にお前たちの様な特別な身分に生まれついてしまったものは、些細な争いが国の乱れを呼ぶのだ。よくよく心しなさい」
「けんかなどしておりません。ただ」
「ただ、何だロルフ」
「これらが分をわきまえぬ無礼な言葉を吐きましたので、少し懲ら

しめました」
「大公殿下は、先生からの宿題をさぼっておられるのに、僕やヨハンが勉強不足だなどとお門違いな事をおっしゃるのです。本当の事を申し上げただけなのに、僕の頬をお打ちになり、ヨハンを足蹴になさいました」
「それはロルフが良くないな」
「ですが兄上、こやつら、特にこのマウリは無礼です」
「無礼であっても、事実無根の言いがかりと言う訳では無いのだろう？　それに人の顔を打つのはいけないな。僕は自分の侍従でも女官でも、あるいは平民でも一度も打った事は無いぞ。身分を笠に着て、暴力を振るうなど、人として最低だと心得なさい」
「でも、兄上！」
「ロルフは揉めるぐらいなら二人と遊ぶのをやめて、勉強や武芸に励みなさい。それに無礼な口を利いたのはマウリなのだろう？　なぜ、ヨハンまで蹴るのだ。ヨハン、おいで、蹴られたのはどこだ。ここか。痣になっているではないか。痛むか？」
「大丈夫です」
「ヨハン。ロルフが滅茶苦茶な事を言っているのに、我慢する必要は無いのだぞ」
「そうなんです。大公殿下は横暴で滅茶苦茶なんです」
「マウリ、お前もそう思うならロルフの真似はしないように。目下の者には思いやり深くなければいけない。それにマウリ、同じ注意をするにしても、人を怒らせない言い方を考えなさい」
僕はヨハンを背負った。マウリは乳母が引き取ったので、ロルフの手を引いて母上の所に行った。
「母上、ロルフの目下の者に対する態度はいささか問題です。僕の控えなのですから、もっとしっかりしてもらわないと」
控え、とは世継のサブというほどの意味で、嫡出の二男は皇太子の「控え」と見なされるものなのだ。
「そうは言うけど、グスタフ、この子は学問も武芸もからきし駄目

よ。全くもう、誰に似たのかしら。お前の控えなんて絶対勤まらないわ。ヨハンの方が年下でも出来が良いけれど……皇族では無いからねえ」

弟たちのおかしな関係の元凶は、母上なのだった。

「僕が規格外で、おかしな存在なのです。ロルフだとて、心を入れ替えればもっとご期待に添えるようになりましょう。母上……ロルフなりに辛いのだと思います。弱い立場の者に八つ当たりというのは頂けませんが」

そこへ大宰相がやってきた。いや、殆ど最近は母上と夫婦の様な暮らしぶりらしいから、戻ったというべきか。僕はなるべく感情を込めないで事実のみを、大宰相に伝えた。すると大宰相は声を荒げた。

「これ、ヨハン！　お前は皇族ではないのだ。臣下としての身の程をわきまえて、日々過ごさねばならん」

「大宰相、それではあまりに……」

「そうよ、エリク、悪いのはロルフなのよ。八つ当たりして弟を蹴るなんて、ロルフが怠け者なのが元々の原因でしょうに。おいで、湿布を張ってあげるわ」

その母上に大宰相は何も言えず、母上の後をついて行く。

ロルフは嫌悪感をあらわにして、震えている。

「け、穢れた庶子のくせに」

「ロルフ！」

「だって、兄上、そうではありませんか」

「そうではない。それは違うぞ、ロルフ。僕にだって庶子が二人いるが、穢れているなどと思った事も無い」

守り役は事なかれ主義の気の弱そうな男だ、これではロルフの教育など十分に出来そうにない。

僕はロルフを父上の所に連れて行った。
「ロルフを『大女亭』につれて行き、兄上姉上に厳しく鍛えていただくのはいかがでしょうか？」
「ほう、それは良いかもしれん。それこそ、ビンタだろうと何だろうと必要とあらばくらわせて一向に構わんと言っておいてくれ。だが……ロルフだけが行けば、商売に差し支えるだろうな……グスタフが付き添ってやるのか？」
「はい。そのつもりでおりますが」
「父親と母親の役目であるのに、面倒をかけてすまぬ。お前も忙しいのにな。気立ても良いし、働き者で真面目に生きているあの二人を見てまだ『庶子が穢れている』などというと許せぬがな」
ロルフは「許せぬ」という父上の言葉を聞いて、驚いていた。

久しぶりに訪ねる『大女亭』は相変わらず繁盛していた。

「よお、誰かと思えば、ステファンじゃねえか。久しぶりだな。親父さんの邸に戻ってたのか」
この店で僕は経営者のヤンとアニタの腹違いの、本妻が産んだ弟で少しばかり良い家の跡取りと言う事になっている。途中までは本当の事だが。
「はい。ちょっと家でごたごた有りまして。でもここの店が懐かしくて、たまりませんでしたよ」
「そうだろう、そうだろう。おや、今日はちっこいのがいるな。弟か？」
「はい。母親も同じ弟ですが。やっぱり似てますかね」
「似てるこたあ似てるが、ステファンの方がやっぱり良い男だな」
客の遠慮無い会話に、ロルフはまたしょげている。
（こんな卑しい身分の男にも、僕は兄上に随分劣って見えるのか）
「ここの兄さん姉さんを少しは見習ってほしいと思って、連れてき

たのです。何分、ふつつかな弟なので御迷惑をおかけしなように、今日は僕が監督役です」

「ふーん、掃除でもやらせんのか？」

「そうですね。厨房は無理ですから、まずは、そこからですかね」

僕が丁寧に便所の掃除をするのを見て、ロルフは目を丸くしていた。夕方になってくると客が増える。便所もきちんと手入れをしておかなくてはまずいのだ。

「明日からは、お前がやるのだ。手を抜くと悪臭がはびこり、大変な事になるのだぞ。ここの兄上も姉上も、真っ直ぐな良い方だ。貴族としてお暮しになる道を選ばれなかったが、立派な方たちだ。ここでお前が何かを感じ取って、もっと自分の果たすべき役割について真剣に考えてほしいと父上も僕も願っている」

どこまでロルフに言いたいことが伝わったかどうかわからないが、僕ら三人が夕食時の厨房と店で働く間、二階の廊下と階段の掃除をするように言っておいた。

「チョッと隅に拭き残しが有るには有ったが、初めてならこんなもんか。まあ、最初っから満点だったステファンは例外なんだな。アイロンがけにベッドメーキングも完ぺきだったし。まあ、あれだねえ、何でも上手くできすぎちうステファンと比べちゃあ可愛そうだよね」

アニタ姉さんの言葉に、ロルフは無言で頷いた。姉さんも僕とロルフを比べてしまっているが……

「ステファンから話聞いたよ。まあ、なんだ、色々面白くないことも有るんだろうけどさ、八つ当たりは良くない。それに、当の本人にどうにもできやしなことで責めるのは、卑怯ってもんさ」

ヤン兄さんは明るい調子ではあるが、言うべきことは言うべきだと思っているようだった。

「卑怯？」

「だって、そうだろう？　髪の色やら眼の色で高貴だの下賤だの言われても、どうにもできやしないんじゃないかい？」
「はい。確かに、どうにもなりません」
「目が茶色だから、碧い眼のステファンより価値が無いなんて言われても、納得できないだろう？　でも、ステファンより学問をさぼっているからいけないとか、掃除が出来ないからいけないとか言われたんなら、頑張ればなんとかなりそうな気がしないかい？」
「はあ。確かに」
「まあいいやね。説教はそのぐらいにしておいて、そのパンケーキ、食べなよ。このリンゴもいけるぜ。ステファンは自覚ないみたいだけど、ロルフも辛いよな。いっつも比べられちゃうんだろ？」
　ロルフはコクリと頷いた。
「よしよし、そういうわけだから、ステファン。お前、この子にオムレツ焼いてやれ。あれ、うまいからさ」
　僕はヤン兄さんに言われた通り、オムレツを焼いた。
「どうだ、うまいか？」
　ヤン兄さんが頭を撫でると、ロルフは嬉しそうな顔で頷く。
「はい。美味しいです」
「何だよ、ヤン、それ焼いたのステファンじゃないか」
「ちげえねえ」

　それ以降、ロルフは度々『大女亭』に通って手伝いをするようになった。それと同時に宮中でつまらないトラブルを起こすことも無くなっていったのだった。

　ただ、悔やまれるのは、僕は父親の違う弟、つまり大宰相の跡取りであるアンホルト子爵ヨハン・ベルワルドの方がもっと厄介なトラブルに巻き込まれているのを、完全に見落としていた事だ。ヨハンの卑屈さが、そのトラブルに由来するのだとも気が付かなかったのだ。ただロルフが二人の弟たちをいじめなくなった事に安心して

しまったのだった。
　ヨハンに関しては、父親が異なり、大宰相が跡取りと定めた以上、教育に関しても大宰相の意向が大切だとなまじっか遠慮したのが災いした。ヨハンの家庭教師についた男は教会の聖職者だった。ロルフの教師は父上や僕の考えで宗教色の少ないアカデミーの学者をつけたのだったが。グラーン侯爵夫人腹の・コリング伯爵マウリの教師も聖職者ではあったが、問題は無いようであった。
　ヨハンは家庭教師についた男の手引きで、大宰相が気が付いたときにはすでに、とんでもない事になってしまっていたのだった。そして、そのことが僕の身の上にも大いに関わってくるのだったが、何も知らない間は平和に暮らしていた。

「クヌート様からのお手紙です」
　ユリエから渡されたスコウホイ公爵となったクヌートからの手紙は、教会の坊主たちに反発するスコウホイの民と新たな動きについて伝えてきた。
「宗教革命……か」
　かつての地球で言えば、ルター辺りに相当する人物の出現なのかも知れなかった。
「教会が出している罪の償いを可能にするという『御札』など、タダの資金集めのまやかしに過ぎないと、はっきり公衆の面前で言い切る聖職者が出て来たようだ。教会の教えなどより、自己の良心を重んじるとも」
　僕は手紙をユリエに見せた。
「これは、大きな動きにつながるやも知れませんね」
「そうだな。そのスコウホイの聖職者は公開質問状を教会の扉に張り付けた行為を、当人はどうやら純粋な神学上の疑問を提示しただけだと認識しているようだが」
「騒乱罪で処罰なさるのですか？」
「いや、それは理屈が通らないだろう。だが、これはとんでもない

ことになるぞ」

僕はその手紙を大至急、父上にもお見せした。そしてその聖職者が不当に教会により弾圧、抹殺されそうならば、保護するようにクヌートに指示する手紙を出すことを認めていただく。

「お前は摂政なのだから、思ったようにやって構わんのだぞ」

「ですが、これは恐らく帝国全体、近隣の諸国も巻き込んだ大論争の前触れとなる様な気がするのです。ですから、父上にも腹をくくって頂かねばと思いまして」

「帝国に嫌気がさしたら、全部放り出してしまうのも、いっそ気楽で良いがな。まあ、お前はそんなことは出来んだろうが……」

「父上……」

父上の脳裏には、また、あの真っ白い風景が広がっていた。

「父上が思い浮かべられる大氷原は、一体どこで、そこで何が有ったのですか？」

「ワッデンとの長い戦の折、北の果てで遭難したことが有ってな」

「半年ばかり行方知れずになられた、と老人たちが言っている折の話ですか？」

「そうだ」

十三歳で初陣を飾った父上は、ワッデン側の最北端の軍港を破壊し、長らく機能不全に陥れる事に成功したものの、撤退の時点で地吹雪に巻き込まれ、はぐれてしまわれたと言う。

「その時命を救ったのが、不思議な女だ。人間のくせに狼なのか、狼のくせに人間の姿を時折取るのか、よくわからんが……そのものが……つまりその、最初の女なのだよ。教会の連中なら魔物と呼ぶような存在だな」

「最初の女性がそんな人であるなら、確かに会いに行けそうもないですね」

「会いたいがな。無理だろうな。今の若さを失った体では、会う前に凍え死ぬであろうし」

「お子は、できたのですか？」
「ああ。出来た筈だ。子が出来るまで解放しないと、最初に言い渡されたのだから……あれは、魔物と言うよりは、異教の神というべき存在だったのだろうな。美しかったぞ」
「北の果ての異教の民が奉じているという、白く美しい狼、ですか？」
「たぶん、そうだと思う。だから、教会の教えが唯一絶対などと、正直言って全く思えないのだ」
「狼と共にある時は、お幸せでしたか？」
「ああ。安らぎが有り、素朴な幸せに満たされていた。帝国に戻りたくなかったが、縁切りされてしまったのだ。女に振られたのは、あの時が最初で最後だがな」
老人たちの話では、行方不明から半年して、突如父上は帝国軍の陣営に姿を現されたのだそうだ。温かそうな毛皮の寝袋に包まれていて、父上は眠っておいでだったとか。
「皆に記憶が無いとおっしゃっていたのは、教会との軋轢を恐れての事でしたか？」
「いや、記憶が封じられていたのだ。あの毒薬騒ぎで、すべてを鮮明に思いだせるようになったのだよ」

生ける異教の神、そして、教会の騒ぎ。
まだ、この段階では、僕にとって切羽詰まった問題では無いと思っていたが、そうでもなかったのだった。

嵐の前の静けさと僕・3（前書き）

僕の弟が犠牲に……直接表記は避けましたが、性的な犯罪行為についてです。

「大本山へ、ですか？　いや、ヨハンは大宰相、あなたの跡継ぎだから僕がどうこう言う立場には無いですが、なぜまた急に？」
「急でもなく、随分以前から話はございました。本人も希望しておりましたので」
　何と大宰相はヨハンを神聖教会大本山の神学校に留学させるのだと言う。
「失礼ですが、学問と言うなら、最近は帝国、それもこの都であるトリアが一番盛んだと言っても良い状況です。我が国では自由な論議も出版の自由も許されておりますから、皆のびのびと研究に励んでいます。自由な気風に引かれて、外国からも多くの優れた学者が集まっていますよ」
「はあ、ですが大本山から見れば異端、あるいは邪教と見なされるようなものも御座いますから」
「僕がミズホの飲食物や武術を好んだり、父上が異教の音楽を嗜まれたりするのは、怪しからんですか？」
「そ、そのような事は思ってもおりません」
　慌てて大宰相は否定したが、そう言う意見を口にする保守派と大宰相は、親密なのだ。大宰相は愛人関係に過ぎない母上との仲を「祝福された縁」であると言い切って擁護したネスの配下の聖職者たちに、大いなる「借り」が有ると感じているのだった。教会との間が親密とは言っても、現在の大聖の支持母体である親ミッケリ派に属するグラーン侯爵夫人とは大きく事情が異なる。親ミッケリ派は「ネスが大聖猊下のお命を狙い、毒を使った」と信じている者が大半らしい。セルマの敬愛する修道女なども、ハッキリ口にこそしな

いが、ネスの暗躍が有ったと確信しているらしい。
帝国の超保守派の老人は「百年ぶりの帝国出身の猊下」が登場することを熱望しており、ネスはそうした老人達の機嫌取りが上手いようだ。父上に言わせれば「あざとく見え透いた機嫌取り」なのだそうだが。ネスは帝国の貧農の息子で、当時の教会の有力者の寵童となって、出世の糸口を掴んだとも言われている。

「ならば、神聖教会の教えを国教から外したのが、怪しからんですか？」
「国の発展、と言う事を考えますと、御聖断であったかと」
顔を見た限りでは、まんざら嘘を言っているわけでも無さそうだった。
「ではなぜ？」
「その、外交においても複数の国家間の釣り合いと言う点は無視できませんし……先進的なのは宜しいでしょうが、その、過激だとか急進的だとか諸外国に受け止められるのは、好ましくは無いかと……」

どうやら、大宰相は自分の息子を神聖教会に送り込むことで、疎遠になった教会を国教としている国々との外交関係を修復するのに役立てようとしているようだ。

「スコウホイで民衆を巻き込んだ反教会の動きは、大本山を焦らせているでしょうね」
「罪の償いを可能にする『御札』を批判した聖職者を帝国が保護した……そう、大本山は受け止めております」
そう言い切るからには、大宰相は最近、大本山側の人物と接触したのだろう。
「僕はスコウホイの大本山に対する怒りの感情は、当然と考えています。ソフス・ネスはろくでもない破戒坊主ですし」

大宰相はネスが金に汚い事は知っていたが、怪しからん性癖については殆ど何も関知していなかったのだ。ネス本人が寵童上がりであると言う噂を、知らない訳でもなかろうに……

「ですが、そのネス大主教が新たな大聖猊下になるのは、ほぼ決定事項の様に私は聞いております。確かに悪い噂も有るようですが、事実と言う訳では無さそうでして」

「いや、僕は単なる噂だと思ってない。実際、胸糞悪いものをネスから感じたし。十分に調査をすべきだと思う。あんな男の側に送り込めば、ヨハンが危険にさらされるんじゃないのかな？」

大宰相には僕の微妙なテレパシー能力について何も話していない。だから、ネスの奴が帝国にいたころ、僕を見て、あれこれ胸糞悪い事を思い浮かべていた……なんて、言う訳にもいかない。

「殿下がそこまでおっしゃるからには、しかるべき根拠がお有りでしょう。確かに慎重で有るべきですな。しっかり調べることにいたします」

僕は大宰相の実務的な手腕を高く評価していたし、おためごかしの適当な返事をするような人ではないと信じているので、安心したのだったが、こと、家庭問題となると、厄介な要素を考えに入れるべきだった。

そう。母上だ。

何とその日のうちに母上が、ヨハンを送り出してしまっていたらしい。しかも早舟で。後から聞いた話では、こんな言いぐさであったようだ。

「あら、新しく大聖猊下となられる方から直々の御使者がいらして招聘状を頂いたのよ。旅の準備はすっかりできていたし、御即位の式典には間に合わせたいってお話だったし、何より元々はエリクだって大賛成だったでしょうに、グスタフに何か言われたからって、それほど気にする事かしら？　何しろグスタフは父親に似ちゃって、

罰当たりな異教徒の様な所が有るのよ。新たに猊下になる方が、怪しからん事をなさる筈が無いわ」

まだ、虫の息とはいえ現・大聖は生存していると僕は聞いている。母上の色々と無神経な言葉は、宮中にかなりの数存在する親ミッケリ派を激怒させるだろう。そんな事より、ヨハンは大宰相の後継者だ。いかに母上が産みの母で皇后とはいえ、最終確認を大宰相に取らず送り出したというのは、どう考えてもまずい。

そもそもいくらヨハンが帝国の大宰相の息子で、僕の弟だからと言って、わざわざ使者まで立てて、せっつくなんて、胡散臭いとは思うのだが……母上の神聖教会に対する感覚は僕や父上とは大きく違うのだろう。子供の父親である大宰相の認証より「次期猊下のお招き」の方が重大だと、本気で思っていたようなのだ。呆れた事に母上は神聖教会の坊主どもが文字通りの聖職者で、「立派な方ばかり」と本気で信じていたのだった。

僕は母上の怒りを買ってやめさせられた使用人たちを、追跡調査した。どうやら教会の連中の行動に関して目撃したことを母上に報告したら、「聖職にある方に不敬である」という理由で怒りを買い、やめさせられた者が五人ほどいた。いずれもヨハンの身近に仕えていた者たちだ。

「おかわいそうに。ヨハン様は明らかにあの穢れた糞坊主に、酷い目に逢わされていらしたに違いないのです。秘跡を授けるとかなんとか言って、糞坊主はヨハン様の寝室に入り込んで、ずいぶん長い間出てこない事がございました。シーツに血が付いていた事もありまして、私は許される限りの遠回しな言い方ですが、坊主に向かって言ってやった事も有ったんですよ。幼いお子様が出血なさる秘跡って、一体なんですかとね」

一番はっきり、一番きつい調子で坊主を非難したのはスコウホイ出身の老女だ。生まれてから「ヨハン様が毒牙にかけられた直後」まで仕えていたらしい。彼女は真実を母上に語ったところ、母上の怒りを買い、大宰相邸を追い出されたのだった。

宮中の庭師を止めさせられた男はこう証言した。

「ヨハン様は、あのネスの野郎に呼び出されると、何もかも諦めたと言うか、お子様にしてはくらーい、そう、陰惨と言ったらいいんでしょうか。貧しい家の子が売られて行く時だって、ああまで陰気な顔つきにはならんと思うんですけどね。そんな顔つきになられます。その……ネスの野郎のナニはデカいのかして、一度などはあずまやで、貧血を起こされて倒れられたんですよ。ズボンは血が付いてましたし。幾度か悲鳴を上げられて『助けて兄上』とおっしゃった事も御座いましたっけ。でも、俺が、皇太子殿下にお話しようとしますと『お願いだから、言わないで』とおっしゃったんです。その……御自分が穢れたとお感じになったんでしょうな。『兄上に軽蔑されたくない』ともおっしゃいましたから……でも、申し上げた方が良かったんでしょうね。俺はヨハン様がお気の毒で、糞坊主の与える『秘跡』の中身について、皇后さまにお話ししたんですが、信じていただけなくて……職を失ったってわけです」

僕は自分の迂闊さが、許せなかった。今となっては後の祭りだが。

五人の話は時期はバラバラだったが、ネスの与える『秘跡』なるものの胡散臭さと罪深さに関しては、同じ意見だった。どうやらヨハンは家庭教師となった坊主の手引きで、ネスの毒牙にかけられたようだ。そして、ネスはヨハンに強く執着しているらしい。

僕は同性愛だろうと異性愛だろうと、相手の気持ちを無視して強引に事に及ぶのは全部アウトだと思っている。しかもヨハンの場合は、完全に性的虐待の被害者だ。母上の妄信の所為で真実を打ち明けられなかったのだ。だって、本当の事を言った使用人は、皆、仕事を辞めさせられたし……僕も気が付いてやれなかった。

僕は調査結果を大宰相に見せた。

「どうやらネスの奴、怪しからん性的虐待を『秘跡』と称し、『婚姻より神聖』な『神の恵みを与える秘儀』とか言ってたようです。どうやら皆の話を総合すると、もう五歳ごろにはハッキリ兆候が表れていたようです。僕は……悔しいですよ。大宰相はヨハンを寵童として、奴に差し出したんですか？」

大宰相はショックを受けたようだった。顔が蒼白だった。そして僕に、事実を母上に説明する手助けをしてほしいと頼んだのだった。

「母上が事実を知らせてくれた者たちを、追い出したりなさるから、事態がここまで悪化したんですよ。それとも母上は奴の『秘跡』とやらが素晴らしい事だとでもお考えで？　ヨハンを大聖猊下の寵童に差し上げると、御自身の罪が全て許されるとでも思ってらっしゃいますか？」

母上は調査結果を突きつけられて、半狂乱になった。僕は責めるのを止めた。僕も無罪ではないのだ。

「どうやらネス自身も教会の坊主の寵童になった事がきっかけで、成り上がったようですからねえ。奴はヨハンを『愛している』とかうそぶいたらしいですが……他にも寵童はいるのに、遠く離れた帝国から無理してわざわざ連れ出す程、執着しているのです。下手すると、自分の様に高位の聖職者にして、いずれは大聖猊下に据える、なんて考えているかもしれないのですが……それをどう考えますか？　僕は不信心者ですから、すぐにでもヨハンを取り返したいです」

母上は「ヨハン、ごめんなさい、ごめんなんさい」と幾度も繰り返している。もはや冷静に話を出来る状態ではなった。

大宰相は蒼白になりながらも、冷静な声で言った。
「陛下に……事実経過を御報告し、どうするか決めましょう」

僕と大宰相の話を聞いた父は「新・大聖猊下の最愛の寵童ならば、帝国の貴族なんかより将来有望かも知れんぞ。大宰相は他にも息子がいる事でもあるし、あきらめるか」と、冗談めかして言った。

「それが事実であっても、やはり僕はあの子を連れ帰りたいです」
「そのネス大聖猊下の即位式は近いうちに行われると聞いているが、そうでもないという噂も有る。色々大本山は揉めている真っ最中らしい。仮に即位式が行われたとして、式典をぶち壊し、ネスの悪行を明らかにしたら……グスタフ、お前でも無事ではいられまい」
そうなのだった。僕が大宰相と母上を納得させる証拠固めに時間を取られている間に、事態はより好ましくない方向に変化していた。

「皇帝として言わせてもらおう。グスタフは摂政だ。摂政たるグスタフが国を空けるなら、それ相応の理由も事情も無くてはならん。弟を苦しい状況から救ってやりたいという気持は分かるが……両親が半ば納得して自分たちの息子を大本山に送り出してしまったのだ。それが誤りであったと分かった時点で、先ずは親自身が子供を取り返す為の努力をするべきだろう」
危険が一杯の中に、僕を送り出す事など出来ない。僕は……自分の跡取りで、摂政で、国家運営に不可欠な存在だが、大宰相の息子のことは私事にすぎない。それが父上のお考えであり、立場なのだった。

「父上、グラーン侯爵夫人の力を借りることは、できないでしょうか」
「さあなあ。あれは、案外、グスタフとは馬が合うようだな。大本山の裏側を引っ掻き回すような、うまい方法が見つかれば、あるい

は大宰相の跡取りも連れ出せるようになるかもしれんな」

そう。父上は必ずヨハンを「大宰相の跡取り」、そう呼ぶのだ。母上と大宰相に対する屈折した感情の表れだろう。

それ以降、グラーン侯爵夫人の力添えのおかげも有ったのか、ミッケリ出身の猊下は生死の境をさまよいながらも三年近くも粘ったようで、ネスの即位式は何と、僕が十六歳になっても行なわれていない状態だった。その間のヨハンの動向は殆ど何もわからなかった。ただ、生きていると言う事以外は。　大宰相と母上は、めっきり老け込んだ。自分たちの所為で、息子が辛い毎日を送っているのは確かだったからだ。僕も侯爵夫人の伝手や、家康師匠の商売仲間の縁を頼りにヨハンを連れだせないか色々探ったが、すべて不発に終わった。幾度か救出を待つように励ますメッセージも送ったが、果たして届いたのかどうかも不明だった。どうやらネスは身近にヨハンを置いているようだった。

「殿下、今度こそ本当にネスが即位する様です」

僕が十六歳になってすぐのある日、あたふたという感じで、大宰相は自分あての密書を僕に見せにやって来た。大宰相も独自のルートを使って粘り強く工作を続けた結果、ネスの侍僧の一人から情報の提供を受けられるようになったのだという。

文中には、今度こそ確実にミッケリ出身の猊下が亡くなった事、ネスの反対派は切り崩され即位の脅威にはなりえない事、そしてヨハンは……ネスと起居を共にしている事が書かれていた。

「ヨハンは……完全に寵童にされてしまったようですな」

「大宰相は、取り返すことをあきらめたのですか？」

「あれからの手紙も何もありませんから……あれ自身が良ければ現状を受け入れますが……」

「そんな、そんな馬鹿な話は無いと僕は思います。ヨハンは犠牲者です」

僕の顔を見た大宰相は、ひどく悲しそうだった。

「……正式に、帝国からのどなたかの即位式への御出席を要請する使いが来るかと思いますが……どういたしましょうか？」

「ネスの希望は？」

「先ず第一に摂政殿下の御来臨を希望しています。その……ヨハンの希望なのかもしれないのですが」

僕が送ったメッセージが届いているなら、やはり僕自身が助けに行きたい。そう思うが……どうしたものだろう。

嵐の前の静けさと僕・3（後書き）

いよいよ、次は嵐の予定です。

僕の外遊、あるいは漂流・1（前書き）

帝国から外に出ます。遠出の予定です。

僕の外遊、あるいは漂流・1

「お前が行くと言うなら、認めざるを得んか……だが、できる限りの用心はするのだぞ。相手は先の大聖に毒を盛ったとされる卑怯なやつだ。用心しすぎると言う事は有るまいよ」

父上は、僕の大本山行きに反対だった。大宰相が出向いて息子に会えば良いのではないかとも言った。それならば事は荒立たないだろうが、ヨハンは戻れないだろう。

「まさかとは思うが……大宰相の息子は身代わりで、ネスの目当てはグスタフ、お前自身だと言う話もある。その噂、知っているか？」

「うっかり僕をそうした対象として見ている奴の妄想を覗いてしまいまして、吐き気を催した事が有ります」

「そうか。許せんな」

「ええ。許せません」

ヨハンを『愛している』訳でもないのなら、ますます許せない。ふざけた奴だ。

ユリエは僕に着いて行くと決めていた。男の身なりで供の中に入れろと言う。

「今回の戴冠式は、きっと何事か怪しからぬ出来事が有ると思われてなりません」

ユリエは解毒のためのミズホ式のやり方に熟達していたし、教会の連中が恐らくは知らない体術や縄抜けなども巧みだった。

「女しか出入りできない修道女のための場所にも、私なら出入りできます」

「でも、男しか出入りできない場所の方が多いよ」

「そこはばれないように、上手くやります」
心強い反面、危険にさらす格好になりそうで、僕は当初は反対だった。ユリエは大抵の事は、僕の命令に従順に従うが、僕が危険にさらされそうな事情が有る場合は、決して引き下がらない。主張が受け入れられるまで粘るのは明らかだった。しかも父親の家康師匠も、ユリエを供の中に入れるように強く勧めた。そこで僕もついに折れ、渋々提案を受け入れたのだった。

セルマはリョウタとラウル・ヤイレを預かると請け合った。自分の腹を痛めたルイサは彼らの『妹』になるわけだ。三人の仲は母親同士の思慮深さも有って極めて良好で、幼いルイサは『お兄様たち』が大好きだった。
父上との男女の仲は今はもう途絶えた形のセルマの母・グラーン侯爵夫人は、強固な城砦を思わせる女子修道院を作った。彼女の隠居所であり、社会奉仕を行う司令塔でもあり、彼女の庇護を願う人々を守る基地でもあった。その修道院内部の住居に、セルマは子供たちと共にしばらく移り住む事にしたのだ。
「セルマと三人のお子様方の安全は、私が請け合います」
グラーン侯爵夫人は力強い調子で請け合った。かつて森の魔女と言われた美女は、百戦錬磨の政治家に変化していて、体型の方もドッシリ落ち着いた。それでも、同年輩の女性よりはるかに美しいが。
どうやら侯爵夫人は、リョウタとラウル・ヤイレを「将来、非常に楽しみな方々」と高く評価してくれているようなのだった。正妻の息子である僕との続き柄を考えると、奇妙と言えば奇妙だが、侯爵夫人のブレーンには軍事や外交の専門家まで居るので、母上の所よりずっと心強いのだった。

僕の供はずっと護衛の任についているサウリを中心に少数精鋭主義で決めた。そして全員に解毒の心得と縄抜けをトレーニングさせた。これが後に思いがけない効果を上げた。

ミッケリまでは船で、そこから先は騎馬で大本山に入った。
即位式の会場で、各国の来賓中第一席の扱いで僕の席は設けられた。つまり、ネスの玉座から一番近いわけだ。来賓の供は二人までで、帯剣はしないという習わしのため、僕も供のサウリと男装したユリエも、見た目上は剣を持たない格好で、薄手で高性能のボディアーマーを着こんでいた。金属探知機が有るでもなく、あからさまな身体検査も無いのだ。小さな刃物を仕込むことぐらいは出来た。

式典の開始が厳かに告げられると、十二人の従者によって担がれた豪華なというか装飾過多の輿に乗ったネスの奴が会場の大聖堂に入場する。同時に美しいボーイソプラノの歌声が響き、僕はその声の持ち主に目が行った。
なんとヨハンだ。
歌詞の内容は神の恩寵を伝える大天使の祝福だった。その祝福の言葉が終わるとあとを追いかけるように二人の少年の声が入り、更に荘重な調子の男声合唱団が入る。
ネスの奴が輿を降りて、玉座に登る頃は再びヨハンの独唱部分で、玉座の前で姿勢を正して立った瞬間、大合唱となる。音楽を使って随分と劇的な演出をしているわけだ。
奴が手で合図すると、楽曲が止み、ネスの奴の説教が始まった。
「唯一絶対の正しき御教えの司、正しき教会の導き手として、あまたの殉教者の崇高なる魂と我が魂を一つにし、『汝も完全たれ』と言う真の神の御言葉に応えるべく、心から祈り、すべてをささげます」

ケッ、やけに声の調子は荘重で、もっともらしい。
いきなり、ドヤドヤと言う足音が響き、弓がネスめがけて二、三十本も放たれた。怒号と悲鳴が響き、来賓たちは身構え、あるいは会場から我先に逃げ出そうとしている。団子状態だ。

「兄上、こっちです」
ヨハンが合唱隊のボックス席から抜け出して来たのだった。
「何がどうなっているんだ、ヨハン」
「ミッケリの連中ですが、そう長くはもたない。説明は後で。まず逃げましょう」

ヨハンの後について、僕とユリエとサウリは迷路状の巨大回廊を駆け下り、地下らしき階層に出て、石造りの倉庫か武器庫のような場所を抜けると、厩に出た。そこで勝手に馬を失敬する。どれも駿馬ぞろいだ。後は一路、ミッケリまで飛ばし、無事にユリエの父親である家康師匠が経営している商会の支店に到着したのだったが……

「なあ、ヨハン、何が一体どうなったんだ？　ミッケリ派はネス派を制圧しようとしているのか？」
「前の猊下が、毒殺されたって事は御存知ですか？」
「ああ。噂だけな。教会内部の事は派閥によって言う事が違ったりするんで、外部の僕らには、何が本当か実は良くわからなかったりする」
「毒を盛られて、かなり長い間持ちこたえたんですが、意識がどの程度回復していらしたかは、僕は知りません。ただ、わかっているのはミッケリ派がネスに報復しようとしていた事と、スコウホイの連中の中には過激な連中がいて武力行使をもくろんでいた事、ミッケリに住んでいるスコウホイ出身の商人がその両方の仲立ちをした事、かな」
「ネス派の制圧までは、無理か？」
「僕はネスが大嫌いだけど、心服している奴もいるし、難しい様な気がする……」
「それにしたって、どうやって反ネス派の情報を仕入れていたんだ？」
「ネスの思いつきで僕が放り込まれた合唱団が、実はミッケリ派の

巣窟だったんです。ネスの周りはおべんちゃらを言う奴ばっかりだから、案外詰めが甘いんですよ。合唱団の音楽監督が実は昔、弟を酷い目にあわされたって人で、ネスに対する復讐の機会を狙っていたんですね。特に少年合唱団のメンバーは多かれ少なかれ、僕と似たり寄ったりの境遇の連中で、みんなネスの手を逃れて、故郷に戻りたがってました」

身を寄せた支店の責任者は、かつて六歳の夏を一緒に過ごしたユリエの従兄弟の衛門だった。随分オッサン臭くなっていて、ユリエに言われるまで僕は気が付かなかったのだが。だが、なんだか知っている人だと思うと心強い。

衛門とも話し合ったが、ネス派の完全制圧は恐らく無理だと言う事のようだ。ネスは怪我をしたようだが、どうやら助かったらしい。腹心の修道院長が管理する修道院に逃げ込んだと言う。僕が残してきてしまった連中は「何か有ったら、ミッケリに戻り、帝国の大使館公邸で待て」という指示通り、戻ったようだ。大本山との通路は閉鎖されていなかった。ネス派も反ネス派も、通路の封鎖が自力で出来る状態じゃ無いらしい。

「各国の賓客や使節たちの動向は?」

「皆、ミッケリまで戻り、自国の大使館や商館に入って様子見ですね。事態を本国に報告しているって所でしょう」

「僕は……兄上と僕はさっさとミッケリを出た方が良いんじゃないかと思います」

「そりゃあ、またなぜ?」

「ミッケリの商人も一枚岩じゃなくて、誰がネスと通じているのかわからないけれど、通じている奴がいるのは確かです。そいつらにここを感づかれたら、厄介かな。兄上がミズホの商人と特別な関係だっていうのは、大本山では結構知られた話みたいなんで……」

「なるほど。ヨハン様のおっしゃる事も一理有りますな。ミズホの商品を扱う商会など、そう多くないですし、ミズホの血を受けた商人がいる店となると、ここぐらいですからねえ。ネスが生きているなら、大本山の内部を完全に掌握しなおすかもしれない。そうなれば、ここは危ないでしょう」

ミッケリと大本山は、馬で半日程度の距離だ。うかうかしておられないかもしれない。

「なあ、衛門、ミッケリを脱出できそうな手立てはないか？」

ミッケリでは珍しいという、強い風が町中を吹き荒れている。船は欠航が多いだろう。困った。

「風向きから言ってトリアへの直行便はまず無理ですが、スコウホイ公爵領内の北の果ての港・ラナに向かう船なら今夜すぐに出ます。ラナは、スコウホイ公爵がお住まいのサルテンまで馬でも三日ががりの距離で、不便な所ですが、大本山に反発している住民ばかりで、ネスの手下が活動している気遣いはまず無いです。お供の方全員は無理ですが、あと五、六人なら乗せてもらえるでしょう。ただ……」

「ただ？」

「今の時期は特に流氷が怖いんです。船長は名人ですが、事故が皆無だったと言う訳じゃ有りません。船長の所為と言うより、氷の魔物の所為なんですけどね」

「氷の魔物？」

「ええ。北の果ての白い狼です。何でも探し物をしているとかで、人間の乗る船を流氷を使って止めてしまうんです。狼の機嫌が良ければ、船は無事ですが、機嫌を損ねると沈められるそうです」

「何を探しているんだ？」

「人間の世界にいるはずの兄弟だとか。私は見た事は無いですが、真っ白い狼で、人間の言葉を話すそうです。極北の地に住む連中が生き神様として拝んでいる、そりゃあ綺麗な狼らしいですよ」

白い狼の噂がミッケリで有名になったのは、ここ二、三年の事なのだそうだ。

以前聞かせて頂いた父上のお話からすると、白い狼の探している兄弟は、僕かも知れない。その話をして有るのはユリエだけだ。ユリエも僕と同じ事を思ったのだろう。

「白い狼は兄弟を探して、どうしようと言うのかしら?」

「大切な伝言が有る……らしいよ。噂だけどさ」

衛門自身が白い狼を見た訳でも無いから、どうしても不確かな話になる。

「狼に遭遇して、怒らせないためにはどうすれば良いの?」

「真面目に正直に受け答えすれば良いらしい。嘘を言うとすぐにバレるんだそうだ。魔物呼ばわりして攻撃すると、船が流氷で壊されてしまって沈むそうだ」

衛門は「船長は腕も良いし正直者だから心配してませんが、一番心配なのは、殿下とヨハン様が荒波に耐えられるかどうかです」と言った。吠える様な海鳴りと凄まじい荒波が続く一帯を抜ける必要が有るらしい。

「別に悪い事ばっかりでもないんですけどね。荒波と海鳴りは『ラナの護り』なんていう言い方もするんですよ。ミッケリ辺りで一般的な軍船では、絶対に乗り越えられないんです。つまり、攻め込まれないって訳でして」

ミッケリと帝国の首都トリアの間の定期航路は乗船人員も多い。この海域は今日の様な大風が吹くことは稀で、温和な気候だから風以外の動力を必要としており、両舷の櫂を人力によってこぐ地球で言う所のガレー船に近いタイプが主流だ。従来はどこの国でも罪人

や奴隷を漕ぎ手としてきたが、僕が摂政になってから、帝国に於いては漕ぎ手は原則自由民で給金を払う事にした。更には漕ぎ手一人一人に積載スペースを割り当てて、個人的な交易を行う事を許した。確か地球でそんな制度が有ったはずだ、と思いだしたのだ。

この事で、トリアの経済は活性化したし、漕ぎ手を志願したものが「一山あてて」新たな資本家に育つという現象も出てきた。

「ですが、ラナ周辺の海域は大きく事情が違います」

衛門の話からすると、極北に近い海域では、逆風も利用できるタイプの幾つもの三角帆を張った船が主流であるようだ。ミッケリやトリア周辺の船乗りには複雑な帆の操作は出来ないと言う。強固な竜骨と流氷対策用に強化した船底が不可欠だそうだ。乗員はせいぜい五、六人で後は荷物を運ぶという具合の船が主流らしい。酷い船酔いを覚悟するから乗せてもらう事になった船を見ると、地球で言えばナンセンが探検に使ったフラム号程度の船という感じを受けた。僕ら四人を乗せるために「もうけをフイ」にさせる恰好なので、船賃は相場の五倍払った。うまく運んでくれたら、ラナで必ず何らかの褒美を出す事を、僕は請け合った。

「うちの旦那様にとって大切な方たちだ。帝国の御身分ある方たちだから、くれぐれも宜しくな」

衛門の言葉で、白髪で白ひげの船長は察しを付けたらしい。

「どこの誰だってかまやしねえよ。イエンス・レーゼイにとって大切って言うなら、このハルドル様にとって身内同然て事さね」

ハルドル船長は家康師匠に大変な恩を受けたのだそうな。口調は粗野だが、気分は良い男のようだ。

「船員は俺を含めて五人だ。一人、ラナで暮らす病気のお袋さんの様子が心配で、乗せてくれって言う奴がいる。そのお袋さんは俺のハトコだから、嘘言ってるわけでもねえと思うぜ。おい、エギル、挨拶しな」

船員五人は屈強な男たちだったが、正直者で腹は綺麗な連中に思われた。エギルという灰色の髪と眼の気弱そうな少年が何かをしでかすとも、思えなかった。

ラナは帝国でも最北限のエリアの不凍港だ。かつて父上が初陣で攻撃したワッデンの最北端の軍港バナクも貴重な不凍港で、ラナとは山脈を隔てて巨大な半島の反対側にあると言う位置関係になる。父上は陸路からバナクを攻略されたわけだ。どうやら荒れ狂う波を超える帝国の皇族・貴族は、僕達四人が初めてになりそうだった。

僕の外遊、あるいは漂流・1（後書き）

今回はヨハンですから、大公じゃないです。すみません。直しました。

僕の外遊、あるいは漂流・2

「ううっ、ぎ、ぎぼじばるい、ううう」
「ほれっ、振り落とされんなよ」

スタビライザーなんてついてない、ちょっと大型の漁船程度の船だ。話には聞いていたが凄まじい揺れで、僕ら一行四人は吐きっぱなしだ。空は真っ暗じゃなければ、微かに鉛色になる程度で一日中暗い。家康師匠の心配りで僕は非常に防寒効果の高い毛皮のコートを着ているが、それでも寒い。風が強いせいで体感温度がよけいに低いのだろう。コートに覆われていない部分は、どこもかしこも寒さでちぎれてしまいそうだ。

「おおう、ウサギが飛んでるぜ、気をつけろ」

三角の波のてっぺんが白い飛沫を飛ばして、数限りないウサギが広い原っぱを飛び回っているような、そんな波の状態になったら、突風の前触れなんだそうだ。何とも有りがたくないウサギだ。メインマストが不気味な音を立ててきしむ。船底に叩きつける様な波の音がして、船の速度が急に上がって、凄い衝撃が船体全体に走った。僕らは船べりに体を半ば縛りつけていたが、甲板を歩いて居た屈強な男たちが、豆粒か何かの様にはじけ飛んだ。

「うっ、痛えな。頭をぶつけちまった」
「もう少しで、冷たい海に放り出されるとこだったぜ」
「お、おい、ありゃあ、なんだ！」

船の行く手を塞いだのは小山の様な巨大な氷の塊だった。

「ひょっとして、ひょっとするのか？」
「ひょっとするぞ」

吹きすさぶ烈風の中で震えあがりながら聞いたのは、遠吠えだ。犬かと思ったが、犬のはずがない。

「狼だ、白い狼だ！」
「で、出たー」

真っ白い狼がいきなり船に飛び移った。続いて二匹の灰色狼までやって来たのだ。狭い甲板は、いっぱいいっぱいだ。海を渡って船に乗り移る狼が並みの狼の訳は無い。三頭とも銀色の不思議な光り方をする眼をしている。体も、僕の知っている普通の狼より一回りは大きいようだ。やっぱり噂の狼なんだろうと思っていたら、いきなり脳裏に言葉が飛び込んできた。テレパシーか。白い狼の思念だ。

（おい、兄弟。やっと見つけた）
（やっぱり、君は僕の兄さん？）
（失礼な。姉さんだ）
（あ……そうなのか）
（弟、あれはお前のつがいか？　あの女知ってるな、事情を）
（つがいって、よくわからんが，僕の子供を産んだ女だ）
（ふーん、生意気にコブつきか。若い男はあれでも一応弟らしいが、血の匂いがお前と随分違う。変な奴もいるな。あの灰色の髪の男だ。アイツには何も言うなよ。ラナに行くんだな？）
（そのつもりだ）
（大事な話があるが、今日は伝えるのを止めておく。ラナで会おう。船は進めてやるから、安心しな）

狼三匹は、去った。いつの間にかかき消すように大きな氷山も見

えなくなった。

「狼たち、黙ってましたね」

「ユリエには聞こえなかったか？　直接心のうちに話しかけてきたのだったが」

「残念ながら、まったく分かりませんでした。狼は……御兄弟でしたか？」

「白い狼が姉さんだと名乗ったよ」

僕らは三日三晩嵐に揺られていたわけだが、その後は嘘のように揺れが収まり、大した風も無いのに潮の流れが速まり、船は一路ラナの方角を目指した。

「俺も随分長い間ここらの海を見てきたが、こんな奇妙奇天烈な事は初めてだぜ。あの狼、あんたの何なんだ？　まさかとは思うが……」

「まさかかも知れないが、内密に頼む」

「この年まで生きてきても、まだまだ、世の中訳の分からん事が多いんだなあ」

静かになった晩から、まともに飲み食いが出来るようになった。と言っても、せいぜい乾パンに干し肉にリンゴ、そして茶だが……これでもこの船では良い食事の方らしい。翌日も丸一日船の上で過ごし、夜にはラナに到着という予定だったが、着岸を目前にして、僕ら四人だけが体がしびれてしまった。

「お、おい、お前さんたち、どうなっちまったんだ」

「し、しびれ薬……だ」

「誰かに仕込まれたって言うのか」

僕が微かに首を振ると、ハルドル船長は驚いたようだった。

「犯人なんて、あの灰色の髪の小僧っ子しか考えられねえや」
「あいつ、俺らの手伝いをするとかなんとか言って、茶を淹れたりしてたもんな」
「俺が声をかけた時、妙にオドオドしていたことが有って、気に入らなかったんだよな」
ハルドル船長は自分の船でおかしな事をやる者が居たのが、許せないようだった。
「あのガキをふんじばって来い」
「いけね、船長！」
「あいつ！」

救命用の小さなボートが、無断で持ち出されていた。素人でも着岸出来そうだと目星が立つ海域に来たら、さっさと逃げ出したようだ。
着岸したら、いきなり兵士が踏み込んできて、僕ら四人は縄を打たれて囚人護送用の馬車に突っ込まれてしまった。体がしびれて、思うように動けない。ハルドル船長たちは、急いで海に逃げ出した。

「こいつらは謀反人だ。急ぎサルテンまで連行しろ」

そう号令をかけた十人隊長らしき男は、何の疑問も感じていないようだった。皇太子がこんなところに居るはずがないと思っているように見える。
サルテンには今の城主であるクヌートも関知しない様な、古い地下牢や土牢が残っているはずだ。そのどこかに閉じ込められてしまったら、厄介だ。すると、兵たちが悲鳴を上げた。いきなり矢が降ってきたのだ。極北の地に住む民の使う矢だ。

（弟、どうした？　こんな奴らにやられるとは）
（うっかり、しびれ薬を飲まされた）

（間抜けな奴だ）
（確かに、悔しいがその通りだ）
（おい、弟、こいつらはお前のしもべではないのか）
（そうなんだが、僕らの顔を知らないんだ）
（主の匂いもわからん、愚かな人間どもだな。誰かお前の顔を知っているまともな奴は居ないのか？）
（サルテンの城主は、クヌートと言って僕の友だ）
（じゃあ、そいつを呼んでやろう）
ウヲーーーン、ウヲーーーン
白い狼、いや姉さんが合図すると百頭ほどの狼が一斉に吠えた。
その声に合わせて、武装した北の民が雄たけびを上げる。兵士たちは、震えあがった。

「サルテンの城主、クヌートを呼べ」
姉さんが命じると、兵士たちが体を震わせながらも口々に言う。
「無理だ、サルテンなんて、どんなに急いだって三日がかりだ、うそじゃないぞ」
「そ、そうだ。本当に無理なんだ」
「お前らが押し込めたのは、黄金の髪・碧の眼のグスタフだぞ。なぜ押し込める」
すると兵士たちが騒ぎ始めた。
「黄金の髪で目が碧のグスタフって」
「せ、摂政殿下か？」
「おい、金色の髪だったか？」
「分からん、フードで隠れてたからな」
「目は碧だったぞ」
「お、おい、誰か摂政殿下に拝謁したことのある奴、居ないのか？」
「ラナの守備隊長が自慢してたぞ、拝謁したことが有るって」
「呼んで来い、早く」

しばらくして、馬でその隊長らしき男が駆けつけて、護送用馬車の中の僕らの顔を確かめた。

「おおおっ、こ、皇太子殿下、一体どうした事でしょうか。なぜ縄など打って」

隊長は周りの皆を叱りつけた。急いでラナで一番まともな馬車が用意され、僕らはラナの守備隊本部に入った。狼たちは遠巻きについてくる。

縄をほどかれてすぐ、ユリエの持っていた薬を皆飲んで、しびれは完全にとれた。

「僕を謀反人呼ばわりした十人隊長らしき男は、どこだ」

「そ、それが……」

兵士たちが騒ぎ始めた所で、逃げ出したらしい。

「おい、弟、そやつ、つかまえたぞ。受け取れ」

良く響く声に、驚いて外に出ると、銀色の瞳で銀色の髪・白い毛皮の極北の民の服を着た少女が、僕らをいきなり犯罪者扱いした十人隊長を皮ひもで縛り上げて連れてきた。

「姉さん？」

「おうよ。この格好は初めてだったな。お前だけに大事な話が有る。人払いってやつを頼むぞ」

「で、殿下この少女は……」

ラナの守備隊長は北の『蛮族』のなりをした美少女に、目を白黒させている。

「姉上だ」

「そ、そうなのですか？」

守備隊長は訳が分からないと言う表情で、革ひもで後ろ手に縛られた十人隊長を引き立てながら、ユリエ・ヨハン・サウリを促して隣の部屋に行った。

「姉さん、姉さんの名前を教えてよ」
「名前なぞどうでも良いと思うが、無いとお前が困るならモナと呼べ。ミナの娘モナだ」
「ミナとおっしゃるのが、お母さん、ですね？　お元気なんですか？」
「子を産んだら、十五回目の夏が過ぎるころには、死ぬのが我が種族では当たり前なのだ」
「そうなのですか……」
「生きているのに飽き飽きしてきたら、子を産むことになっているのだからな、お前が悲しむ事でもない」
「ですが、父が……フレゼリクが、とても会いたがっていたようなのです」
「ミナは会う気は無かった。そんな事はまあ、良い。先ずは大事な話だ」
父上の思い出が『そんな事』で片づけられてしまったが、大事な事の中身が、さっぱり見当がつかない。

「夜空にはためく光を見る事三十回以上の日数走り続けた場所に有る聖なる湖で、白い大鳥から聞いた。ミズホの霊山の聖なる石が輝きはじめたそうだ。人の世にいる白き狼の弟であるグスタフしか触れる事を許されていない石だ。お前が聖なる獣であり聖なる人であり、真の神と言葉を交わせる唯一の存在だからだ。お前は霊山に登り、聖なる石に触れながら、人の世でお前がこれからどう過ごすか、真の神に答えなければならない。その事はこの世界・ルンドの運命にも大きく関わる事なのだ」
「僕はミズホに行って、霊山に登らねばいけないのですね？」

家康師匠の持っている交易船に乗れば、一月程度でミズホに着くだろう。
「最も穢れを帯びない、最も清らかな道筋をたどらねばならん。人の使う船は、あまり向かない乗り物だ」
モナが言うには、狼たちと一緒に聖なる湖に行き、そこからは白い大鳥に乗って霊山に向かう事になるらしい。そこまで、僕一人で赴く必要が有るようだ。
「僕一人で、霊山に向かう必要が有るんですよね？」
「お前のつがいなら、連れて行けるぞ……子を産んだつがいは二人か。そのつがい自身がお前について行きたいと強く思わなければ、大鳥は背に乗せてはくれないだろうがな」
「つがいの身に、何か変化が起こりますか？」
「お前の変化は必然だが、つがいは変化を望まなければ、変化しない」
「大きな変化を望めば？」
「つがいの魂の力によりけりだが、余りに大きな変化を無理に望むと人ではなくなるかもしれん。それ以上はわからん」
「僕は絶対、行かなくちゃいけないんですよね」
「聖なる石はお前を呼んでいる。応えるのが、お前の務めだ」
「いつ出かけますか？」
「今すぐ、でも構わんが、つがいがどうするか聞いておかねばならんだろうし、人には狼には必要無い支度なども有るのではないか？ひ弱な匂いの……ヨハン……とか言う弟も親の所に送り返さねばならんだろう」
「ヨハンは、ひ弱ですか？」
「北の大地は受け入れないだろう。帝国であれを待つ者が居るはずだ。早く戻してやれ」
「サルテンのクヌートをここに呼んで、間違いのないように手筈を整えたら、行きます。でも、どうやって行けば良いのですか？」
「聖なる湖までは姉が送って行くと、さっきも言ったはずだ。支度

が出来たら、夜空にはためく光に向かって『ミナの娘モナ、グスタフはここだ』と三度叫べ。すぐに来てやろう」

夜空にはためく光とはオーロラの事のようだ。

僕はクヌートの到着を待った。ヨハンを安全に確実にトリアの両親のもとに送る手はずを整えるためだ。

守備隊の宿舎は、質素な宿だったが、十分に暖かく快適だった。

「ユリエはどうする？　こうやって屋根のあるまともな建物で過ごす事など当分は出来なさそうな厳しい道のりの様なんだが……」

「ついて行く事をモナ様は認めて下さったそうですから、ついて行きます」

「当分食べるものが生肉とか生魚の冷たいのばっかりになるし、風呂だって無理だ。一日中暗くて、時折オーロラがはためくだけの白い大平原をミズホへ向けてひたすら進むことになるだろうが、耐えられるかな？」

「そのような場所でも極北の民は生きてきたのでしょうし、殿下のお傍に居る事が出来るのですもの。大丈夫です」

赤々と燃える暖炉の火の前に、大きな毛皮を敷いて、僕たちは寄り添っていた。考えてみれば、ユリエはもう三十を超えたのだったが、そうは見えない。寧ろ昔より艶やかな美しさが増したように思う。

「どうなさいました？」

「ユリエって、昔よりもっときれいになったなって、思っていた所だ」

「まあ……それはそうと、しびれ薬を仕込んだ少年は大本山の手の者だったのでしょうか？」

「その可能性は高いな。僕がレーゼイ商会を頼ってミッケリを離れるとしたら、このルートも有りえると言う事で、あらかじめ準備し

ていたんだろうな」
「ネスの派閥ですよね、やはり」
「だと、思うけどな。坊主はどの派閥だろうとあまり信用できないと思っているよ」
「クヌート様なら、ヨハン様を守ってくださいそうですね」
「うん。信用できる。ねえ、ユリエ」
「はい？」
「僕がきれいだって言ったのに、軽く流したね」
「あ、すみません」
「言われ慣れてるからな」
「ああ、申し訳ございません」
「本当に、そう思うの？」
「ええ。少しは」

僕らは顔を見合わせ、クスクス笑いながら、ごく自然に互いを抱きしめあった。

僕の外遊、あるいは漂流・3

「いやあ……そのような事が本当に有るのですか」

三日がかりでやってきたクヌートは、モナが僕の実の姉で皇帝の娘なのだと聞いて、本当に驚いていた。

「ですが殿下、伺ったような御事情なら、姉上は随分殿下より御年が上ですよね」

「そういえば、そうだな」

「グスタフ、いらぬことはそうしゃべらんでもよいわ」

急に目の前に姉さんが立っていて、驚いた。僕よりクヌートは仰天したみたいで、ワッ、と声を放って椅子に座ったままのけ反って倒れそうになった。

「無礼な奴。我らの種族では百歳より若ければ若いのじゃ」

寿命は自分で決めるのだと言う。

「では、モナ様、千年生きようとすれば、生きられるのですか？」

「出来ようが、知り合いが皆死に絶えればつまらんからのう。母のミナも祖母のマナも曾祖母のニナも、皆二、三百年で死ぬことにしたのだ」

「死を怖いとは、思わない？」

「なぜ怖いのだ？　むくろと毛皮以外、何も無い状態になるだけだ」

酷くシンプルな、それだけに妙に説得力の有る言葉だ。大切な存在、親しい存在の孫・曾孫・玄孫ぐらいまでは愛着がそれなりにあ

るが、余り先になると、どうでもよくなってくる物らしい。

「死ぬ前に、大事な事だけは子に伝えるのだ」

最低限伝えるだけで、十五年程度かかる。そういう事らしい。

興味深そうに聞いていたクヌートは、モナに質問した。

「人間が信仰してる神は存在するんですか？」

「お前らの世界で力が有る『教会』を始めた奴は、神を見て、神を知っただろうが、伝え方が下手くそだったのだろう。神がいつも人の形の訳が無かろう。それは人の勝手な願いに過ぎん」

「神は本当は人の形では無いのですか？」

「そうさ。人に言いたいことが有れば人になり、狼に言いたいことが有れば狼になる。牛にも馬にも鳥にもなるぞ。この世界を真に作り出した源、そうした存在なのだろうと思うが、本当の所は誰にもわからん。人間に分かるはずがない。悩むだけ無駄だ」

「無駄ですか」

「そんな下らんことをする暇が有るのなら、食い物の心配をする方が先だ。人の群れは大きいが、飢えているものの数が多すぎる。狼の群れは小さいが、飢えているものなどほとんどおらん。おらん様にするのが、頭の役目だ」

「モナ様は、人ですか？　狼ですか？」

「たぶん狼だ」

「たぶん、ですか」

クヌートはそのアバウトさに、驚いている。

「だって、考えてもわからんからな。灰色の兄弟たちはずっと狼の形だし、グスタフはずっと人の形だ。どっちも兄弟で、近しいものだ」

やはり、船で見た狼たちは兄弟なのだ。父親が狼だと、ずっと狼なのだそうだ。

「人の兄弟は僕だけ？」

「人は穢れが多いからな。穢れの少ない、強い魂の男が見つからないとつがう事が出来ない。母のミナも色々探したが、フレゼリク以外、見つからなかった。清らかだったフレゼリクが穢れの波動を生じ始めたので、人の群れに戻したのだ」

モナの解説は分かりにくかったが、穢れの波動と言うのは執着心とか嫉妬とか独占欲とか、そんなもののように思われた。狼には存在しない複雑な穢れた感情は、負担であり、厄介な存在、そう認識されているらしい。ならば、僕だって相当に穢れているはずだが。

「僕だって、相当穢れているよね」

「ああ。穢れている。だが、お前は浄化の力も有る。それにお前は弟で有って、つがいではない。だから群れの中に入れて行けるのだ。沢山人の言葉で話したので、疲れた。用意が出来たら呼べ」

また、モナは急にいなくなってしまった。

「何というか、型破りな姉上ですな」

「噂をすると、また、ぬっとあらわれるから別の話ね」

クヌートはモナの話と僕のミズホ行きの話をしたいようであったが、先ずはここに来て貰ったそもそもの用事から片づける。クヌート本人がヨハンについてトリアまで行き、確実に大宰相と母上に渡すと請け合ってくれて、よかった。更にはグラーン侯爵夫人とも会って僕が謀反人扱いされた件を知らせ、セルマと子供らそれぞれに

手紙を渡して貰う事、父上宛の手紙も直接御本人にお渡しする事を依頼した。

「皇帝陛下は、モナ様にお会いになりたいでしょうな」
「父上の方がモナに都合を合わせるなら、案外すぐに会えると思うよ」

モナにとって父上は親なのだ。群れに入れるわけでもないのだし、つがいとは条件も違うだろう。

ユリエは、何を支度したらよいのか、戸惑っていた。女ならではの月の物の事も、どうすれば良いのか密かに悩んでいたらしいのだが……モナはこんな風に言いきった。

「この北の大地では、人間も冬の間は月の物が無い。心配無用だぞ」

そういえば、聞いたことが有った。地球の極北の地に住む人たちの場合、冬の間は女性の月経は止まり男性の性的欲求も止まると。極度の低温と太陽光線の不足が、そんな現象を引き起こすのだろうか？　ともかくもユリエの悩みごとの最大の物は解消されたようだった。

「身一つで良いのだ」

そう言い切られてしまえば、着替え一枚いらない事になる。だが極度の低温の中、着替えのために衣服を完全に脱ぐことも出来ないから、文字通り身一つで良いらしいのだ。

「お前が本当にグスタフと共に来る覚悟が有るか、否か、ただ、それだけが問題なのだ」

「その点は、大丈夫です」

結局、支度とはいっても荷造りは何もなく、ユリエはクヌートに託す手紙を書き上げただけだった。

僕らはソリに乗って移動するのだ。極北の民が使う犬ソリと同じ構造だが、もっと大きいのと、引くのが狼三頭で、操縦も狼自身がする、というのが違う。僕とユリエは体を並べて寝そべった。その上をモナがまっ白い毛皮で覆い、皮ひもでグルグル巻いた。僕らは暖かい毛皮の中で、殆ど芋虫状態だが、不快ではない。繭の中に居る幼虫の様な気分だ。

「ミナの毛皮だ。しばらく借りてきた。お前らは寒さに弱いから。使い終わったら、また、返す」

死んだ母親の遺骸を包んでいた毛皮なのだ。何か霊的な力でもあるようで、毛皮一枚なのに、外の寒さが嘘のように暖かい。暗い繭のような中で大半横たわっているだけなので、時間の感覚が次第に無くなって来る。耳には凄まじい風の音と狼たちの息遣いが聞こえるばかりだ。

幾度かソリが止まった時は、干し肉を渡された。ゆっくり噛んで飲み下せと言われた。モナが作ってくれたものらしい。何というか軽い漢方薬風味のジャーキー、そんな感じのものだ。水分補給は雪を舐める程度で、その為か排泄衝動も起きない。

「狼の兄弟たちは新鮮な生肉を食べるが、お前らには無理だろう」

確かに、難しそうだった。特に生の臓物は貴重で有るようだが、飲み下せる自信が無かった。それでも一度だけ、モナが細かく切って、海水で洗ったものを口に放り込んだことが有った。

「難しいかもしれんが、飲み下せ。さもないと、聖なる湖につくこ

ろには足が萎えてしまうぞ」
そう、脅されて食べたのだったが、洗ったせいか鮮度抜群のレバ刺しという感じで、旨かった。
「普通に美味いよこれ」
僕が言うと、モナは頷いた。
「貴重品だから分けてやったのだ。本当は血も飲み干せると良いのだが、無理だよな？」

唸り声を上げて、顔中血まみれで貪り食っている狼たちを見ると、さすがに無理だと思った。獲物はどうやらかなり大型の草食獣であったらしいが、もとの形はそこにはもうなかった。

そうやって狼たちがエネルギー補給を済ませると、また僕らは毛皮で覆われたそりに寝そべる。そしてまた、白い大平原を突き進んで行くのだ。一人でこの状態だと、気分的にきつかっただろうが、隣がユリエなので、安らかな落ち着いた気分で居られた。
「まるで母親の胎内に逆戻りしたような気分です」
そんな風に言ったユリエの言葉に、僕も賛成だ。
以前の説明通りなら、一月ほど、走り続けたと言う事だろうか。急に雪の少ない森の中に出た。
「ここなら、コケモモの類や、魚ぐらいあるぞ。火も使える。毛皮の交易で手に入れたミズホの服なら有るしな」
モナが僕らに使う事を許した丸太小屋は、毛皮の交易のための物らしい。木の皮で屋根を葺いてあり、煮炊きをし、暖房の役目も果たす炉があった。僕らのためにわざわざ、鉄なべも一個用意されていた。
「お前らの好きな、ぐたぐた柔らかい食い物も、これが有れば出来るのだろう？」
モナは汁物とか、煮物は嫌いなのだ。なじみが無いらしい。肉は新鮮な生が最高に美味いので、調理など保存のために干し肉を作る

時ぐらいしか、しないものらしい。後は、魚を串刺しにして焼くぐらいだとか。小屋の使い方を僕らに教えた後は、モナは狼の姿に戻った。

「美味そうな獣を腹いっぱい食う」予定らしい。冬眠から目覚めて活動し始めた森の小動物が、かなりいると言う。狼の兄弟たちと一緒にじゃれているモナは楽しそうだ。

狼の姿のモナは僕とはスムーズに意思疎通が出来るが、それ以外の人間とだと「ひどく疲れる」らしい。出来ない訳では無いが、込み入った話はしにくくなる。どうしても必要最低限のメッセージ程度になりがちだ。

ユリエは丸太小屋を綺麗に整頓し、限られた食材でなかなかに美味い食事を用意した。僕はモナに貸してもらった釣竿で、魚を釣りに神聖な湖に毎日出かける。ミズホからの大鳥の到来を待っているのだ。人を背中に乗せると言うのだから、相当な巨体だろう。

鍋に煮えたスープと、魚、焼いた芋や山菜の類、そんな食事をゆっくり食べ、炉の火を見つめながら、身を寄せ合って語り合い、眠る。とても安らかな時間だった。ソリで極寒の大平原を飲まず食わずの状態で突き進んだ時の疲れも、徐々に癒された。

「何だか、いつまでもこんな具合に二人で静かに暮らすのも悪くないなと思うよ」

「でも、帝国の皆様は御無事のお戻りを待っておられるでしょう」

「子供らは大丈夫だろうか」

「モナ様が『大事無い』と請け合われたのですから、きっと大丈夫でしょう。セルマ様は注意深い方ですし、侯爵夫人は頼りになる方ですから、万が一怪しからんはかりごとが有りましても、守って下さるでしょう、陛下は殿下と殿下のお子達が大切でいらっしゃるのですし、及ばずながら私の父も精一杯勤めましょう」

確かにそうだ。だが、母上はあまり頼りにならない。それはまあ、自業自得と言うものだが、アネッテは正妻なのに大事な話から外されている格好で、気の毒に思う。そうだ。僕はこの世界で、色々な人と深くかかわってきたのだ。何も無かった事には出来ない。僕は……ただ、好いた女と二人きりで静かに暮らしていたかっただけなのだが、そうもいかない境遇なわけで、今度は何がどうなるのかさっぱりわからない。

前世で事故に逢わなかったら、平凡だが心穏やかな毎日を送る事が出来たのだろう。何の因果で、このルンドに生まれ変わる羽目になった物やら。神様の勝手だか不手際だか知らないが、恨んでばかりもいられない。実際悪い事ばかりでもなかったし。それなりに充実した忙しい毎日を送ってきた。

「つかの間の休暇みたいなものかもしれないな。だから、普段考えない様な事まで考えたよ」

「前世の事を思い返されましたか？」

「うん。気楽な一般庶民だったからね」

「百年後に御光臨あそばす皇后となられる方の事が、今度はわかるかもしれませんね」

「そんなに先の事なんて、わかったとしても、まるで人ごとだな」

「私の寿命は尽きているでしょうね。お妃様方も、私よりは皆様お若いですが……御存命とは思えません。でも、殿下がおさみしくなくお幸せになれるとわかっておりましたら、安心して死ねるような……」

ああそうだ。ユリエは自分で言っていた。八十歳かそこらで亡くなるだろうと。僕は置いて行かれる。そうしたら、会えないのだ。

「いやだ、ユリエ、そんな話をするな」

「私の子や孫が、お仕え致しますように、私は出来る限りのことを致します」

「子や孫は、別の人間だ。ユリエの代わりになんかならない。僕も

モナみたいに自分の寿命を決められるようにならないだろうか？
そうしたら、すぐにユリエの後を追える」
「殿下……」

数日して、モナが人の姿で久しぶりに現れた。

「おい、夜明け方に大鳥が湖についたぞ。話をしに行こう」
僕とユリエは、モナの後について湖に向かった。まだ、夜は明けたばかりで、様々な鳥の羽音がする。その中に、一際大きな音がして、僕は驚いた。
「あれは……」
「白い大鳥の羽音だ。ほら、見てみろグスタフ」

モナが指差す湖面に、真っ白い鳥がいた。鶴のような頭と長い首で、白鳥を思わせる体だ。周りの鳥たちが胡麻か芥子粒のように見える。
「デカいなあ」
僕の声に、白い大鳥が反応した。
耳をつんざくような、高い鳴き声を発した。そして驚いた事に、大鳥はいきなり高く飛び立って、凄い羽音を立てながら、僕の顔をじっと見下ろしたのだ。

（これは珍しい。人の子のくせに狼の兄弟など、いるものかと思っていたが、真にいるのだな）

鳥の思念が伝わってきた。

モナが人の姿のままで、狼の遠吠えを上げた。兄弟二匹を呼んだらしい。すぐさま灰色の二匹がやってきた。兄弟が傍にいる状態だと、モナの能力が増大するらしいのだ。

「グスタフよ。鳥と人と狼の仲立ちはなかなかに面倒だ。お前が直接鳥に触れれば、お前と鳥の意志は十分通うが、触れていないと難しい。大体において、鳥は気が小さいからな。この大鳥はお前を乗せたものかどうか、まだ決意がつかんようだ」

「気が小さい」と決めつけられて、大鳥は気を悪くしたようだが（狼は物知らずだから）怒るのを止めたらしい。どうやら僕が大鳥の気分を読み解いたのに気付いたようだ。人の形なのに、おかしなやつだと思ったらしいが、嫌悪感は無く、興味を持ってくれたようだ。

「僕は乗せてやるべき存在かどうか、値踏みされている最中だな」

「そうだ。おい、大鳥、もったいぶらんと役目を果たしたらどうなんだ」

（狼が、偉そうに。我は神の鳥ぞ。狼や人のしもべではない。だが、御山のお告げの人間はこいつらしいから、乗せてやらんでもないが、その前に話をせんとな）

大きな羽音がして、一瞬、叩きつけられるような突風が吹いたか

と思うと、大鳥が地面に立っていた。
「グスタフ、こいつに触れてみろ」
「わかった。神の鳥さん、触らせてください」

僕はすんなり伸びた首の付け根のあたりに触れた。頭に近い部分の方が、何となく会話をしやすい気がしたのだ。極上の羽毛布団みたいな手触りで、温かい。大鳥の方は僕に触られても不快ではない様子だ。

（お前、触れずに我の思いを読んだか）
（人の子のくせに狼の兄弟なので、僕は珍しいみたいですね）
（近い距離なら読み取れるのだな）
（やっと、ですけどね。僕の連れは乗せていただけますか？）
（そのミズホの巫女のような女か。ためしに我に触れさせてみよ）
僕の隣にユリエを呼んで、大鳥に触れさせた。
（どう？）
（ミズホの巫女と気配は似ているが、神力は無いな。ただ、魂の波動が美しい女だ。お前に対する善き想いで満ちている。我との意思疎通は無理だろうが、乗せてやろう）
「良かった、ユリエ、乗せてもらえそうだよ」
「まあ、ありがとうございます。よろしくお願い致します」
（義理堅い女のようだな。ミズホに戻る前に、声をかけよう。湖で十分うまい魚を食って、力を蓄えねばお前らを乗せてミズホの御山には向かえない。では、羽ばたくから、お前も女も離れろ）
「ユリエ、今から、羽ばたくから離れろって」

僕はユリエの手を引いて離れると、またすごい風が一瞬起きた。気が付くと大鳥は湖方向に飛んでいた。

「グスタフ、良かったじゃないか。二人とも乗せてもらえそうだな」

「うん。少し安心したな。良かったね。ユリエ」
「はい。ここで置いて行かれたら、どうすれば良いのか途方に暮れてしまう所でした」
「その時は、兄弟たちと一緒にラナまで送ってやるつもりだったよ」
「モナ様、ありがとうございます」

モナが本当にそう思っていたのは確かなようだった。ユリエにもそれは十分伝わったのだろう。深々と礼をした。モナは照れたような顔つきになって、頭をかいた。
「おう、それはそうとグスタフ、鳥の奴、たらふく魚を食うと言っていたから、その間は釣りを止めておけ。アイツ、自分の眷属の鳥以外の者が魚をとると、不機嫌になるかもしれん。そうなると面倒だ」
「不機嫌になると、暴れる？」
「大きな翼で、風を巻き起こして、何でもぶっ倒すらしい。何はともあれ、これから世話になる相手だ。気は使った方が良かろう」
「なら、湖よりだいぶ遠いらしいけれど、ここから見えるし、海の方に行ってみようか」
「海の魚を取るのか？」
「魚は無理でも、貝とか海藻とか何か食ったり使ったりできそうな物も有るかもしれない」
「貝って、外側が固い殻で、中にぐにゃぐにゃした物が有る妙な生き物だな？」

モナは牡蠣を岩場で取っている人間を見たことが有り、その匂いが不味そうだと感じたらしい。
「貝も色々な色や形が有るんだ。食べられないものもあるけれど、旨いのも有るよ」

兄弟狼が一度に吠えた。海を見ている。
「血の匂いがする。人の血だ。弱っているなかなり」
「まあ、大変。怪我したんでしょうか？　難破でもしたのかしら？」

「危ない、たちの悪い人間てことは無いだろうか？」
僕は、ついそんなふうに口走った。見知らぬ誰かの生死より、自分たちの平和が大切だという本音のせいかもしれない。
「一人だ。特に邪悪な波動は感じないぞ」
モナの言葉に続けて、兄弟狼が小さく幾度か吠えた。会話でもしているようだ。僕には理解できないが。
「どうやらお前らに縁が有る者らしい。助けに行こう」
「はい、わかりました」
ユリエはケガの手当に役立ちそうな膏薬やら布やら真水やらを手早く、蓋付きの籠に入れた。狼兄弟の背に乗れと言われて、乗るというよりしがみついた。海まではかなりの距離が有る。丸太小屋は森のはずれの、かなり高い台地状の場所に立っているのだ。灌木の茂みを抜けて、海風が吹きつける草地を抜け、更には緩やかな坂という感じの岩場を抜け、ようやく小さな入り江の小さな砂浜についた。

「ミズホの者かな」
「おそらく、さようでしょうね」

ミナやユリエが言うように服装はミズホの物らしい。年のころは二十代といった感じの男だ。肩からかなりの血を流している。心臓マッサージの真似事をしていると、口から水を吹き出し、意識を取り戻した。ユリエが傷口を清め、血止めを塗り、包帯をする。男は狼兄弟を見て固まっていたが、ミナや僕とユリエの様子を見て大丈夫だと思ったらしく、また、意識を失った。体が冷え切っている。

「小屋に運んで、温めてやらなくちゃ」
「グスタフが先に行って、火を十分におこせ」

それももっともだと思い、もう一度、兄弟狼の弟の方らしいが、

その背を借りて小屋に戻ると急いで火をおこし、湯を沸かすようにする。寝床を整えたら、モナとユリエに付き添われて、兄狼の背に乗せられたけが人が到着した。

体が暖まると、怪我人の意識が戻った。重湯を作って飲ませると、ようやく声が出るようになったようだ。

「肩の傷は刀傷のようだけど、誰かに襲われたの？」

「さようでございます。お助けいただき、ありがとうございました」

僕が金髪碧眼の『異様人』なのにミズホの言葉をまともに話すので、驚いているようだ。ユリエを『雛にも稀な艶やかな美女』だと思ったようだ。チョッと気に入らない。自分の身分姓名を打ち明けたものか悩んでいる。

「訳ありなら別に無理に話さなくてよいよ。でも、呼び名ぐらい教えてほしい。偽名でも良いからさ」

「事情により官・姓名のほどは御容赦願います。かりそめに三郎とお呼びください」

（なあ、グスタフ、ワダホウキノカミヒロユキガケニンイトウショウザブロウってなんだ？）

モナは意識に飛び込んできた知らない言葉に戸惑っている。

（和田伯耆守弘之っていったかな。ミズホの偉い人で、そんな人がいるんだよ。ケニンっていうのは家来って事だ。この人は和田さんの家来で、伊藤ショウザブロウって言うみたいだ）

「こちらは我が主・グスタフ様、私はユリエと申します。傷に良い薬湯をこしらえました。お召し上がりください」

（和田さんは、ミズホの国の交易の責任者なんだ。帝国から体に悪い変な薬を買って、持ち込もうとする奴らと戦っている最中なんだと思うよ）

（なぜ、そんな薬をわざわざ買うのだ？）

（体には悪いけれど、使うと物凄く良い気分になれるらしいよ。使いすぎると頭も体も壊れる毒薬なんだ）
（変な物を欲しがるのだな）
（そうだよね。でも、結構いるんだよ。欲しがる困った人間が）
（穢れた波動の人間が欲しがるのだよな）
（そうだろうと思う）

三郎さんは、ここがミズホ本国とどう言う位置関係の場所なのか気にしている。上司に定期報告を入れる日が近いらしい。

どうやらミッケリ発帝国経由で輸入される荷物をどこかで漁船か何かに詰め替えて、ミズホ国内に持ち込む密輸組織が有るらしい。その積み替えをする中継基地の一つを突き止めたけれど、帰り道の小舟でばれて、乱闘になって、その最中に嵐に巻き込まれてしまった。どうやらこんな事情みたいだ。

三郎さんは僕がすっかり事情を読み取ってしまったとは、露ほども知らないわけで、ちょっとばっかり気が咎める。

（なあ、大鳥はこの人までは乗せてくれないよな）
（案外、あっさり乗せるかもしれんぞ。兄弟が言うには、お前と縁が有る男らしいから）

三郎さんの所為で、ユリエといちゃつけないのが僕としては非常に不満だが、仕方がない。だが、僕の顔にそんな気分が現れていたようで、恐縮した口調でこんな風に言われた。

「その、ユリエ殿は主様のお子をお産みになったと伺いました。拙者のようなものが紛れ込んで、御迷惑をおかけいたしまして、まことに申し訳ございません」

ユリエの事は「ユリエ殿」、僕は「主様」と呼ぶ事にしたらしい。ユリエは僕の邸の奥向きの女中で、僕の「御手が付いた」と解釈したようだ。僕らがこんな人跡未踏の地にいる理由については、悪人

たちに国を追われたのではないかと推量しているみたいだ。モナと狼たちは、三郎さんの理解を超えた存在らしい。

ともかくも大鳥に相談する事にした。湖のほとりに行って、呼んでみる。

「おおい！　神の鳥さん、頼みが有る」

三回、ミズホの言葉で可能な限りの大声を出した。

（なんだ、お前か。もう一人余分に乗せろと言うのだろう？）

（知っていたのか）

（様子を空から確かめたからな）

（で、どうかな？）

（別にかまわんぞ。だが、傷がふさがってからだ。人の血は穢れを呼ぶからな）

さらに大鳥は湖の反対側の岸辺の大岩の影の泉の水で傷を洗うと早く治る、と教えてくれた。

三郎さんのおかげで、僕とユリエはお行儀良く飯を食べ、静かに眠った。都合三日、泉の水で傷を洗い、安静にしたら、結構深い刀傷だったのに、血がうまい具合に止まったみたいだ。

「三郎さんが戻りたい場所から、大鳥が言う『御山』は遠いの？」

「さよう、馬で丸一日ほどでしょうか。御山の霊鳥とか大鳥の話は聞いたことは有りましたが、半ばおとぎ話のようなものと思うておりましたので、まことにその背に乗ってミズホに戻るとは、驚きです」

「ふーん、ミズホの都は更に遠いの？」

「はい。あのう、お二方はミズホでの御逗留先は？」

「全然決まってない。不法入国で牢屋行きだったりするかな？」

ミズホは外国人の入国には非常に厳しい。原則的には立ち入り禁止なのだ。

「霊鳥と意志を通わせるような方を、牢に入れたりしましたら、神罰が当たりましょうな……」

（伯耆守様にお話して、信じていただけようかな。突拍子もない話と言われようし……さりとて、まことに牢にこの方々を繋いだりしたら、神罰が下りそうではあるし、困った……いやあ、困った）

本当に、三郎さんが悩むほど困った事なんだろうか？

「大鳥様と一緒におりましたら、皆さまに、グスタフ様を御身分にふさわしく扱って頂けましょうか？」

「恐れ入りますが、ユリエ殿、グスタフ様はいずれの御領主様におわしますか？」

「我が主は御山の特別な御神託を承りに赴くのですが……」

「特別な御神託ですか」

「この世界の運命に関わる大切な御神託だそうで、そこであの霊鳥と約定がお有りですから、御身分柄有りえない様な大変な旅路を重ねて、ここへ御渡りになりました」

「で、いかなる御身分であられますのか？」

「いかがいたしますか？」

ユリエは身分を隠した方が良いのではないかと思ったようだ。

「良いよ、別に隠さなくたって」

「テオレル帝国は御存知でしょうか？」

「西の大国で、勢い有る国と聞いております。優れた皇帝陛下と神童であられる摂政殿下の善政で、民の暮らし向きも他国より随分豊かだとか」

「グスタフ様は、その……神童であられる摂政殿下御本人でいらっしゃいます」

「こ、これは、驚きました。ミズホの言葉が巧みであられるのも、神童でおわしますからでしょうか？」

「いやあ、ユリエに習っただけさ」

「まあ。私は何もお教えしておりません」
「このユリエの親父さんは、ミズホの名門の血を受けている」
「何れの御家で？」
「冷泉家、だよ。冷泉家康さんの名前は貿易に関わる者なら知ってるだろ？　ユリエはそこの長女だ」
「ははーっ」

あれ？　冷泉家の方が神通力が有るみたいだ。なるほど、和田さんは冷泉家の家来筋から出た家柄なんだな。だから、三郎さんからしたらユリエは高貴な姫君様って事になるのか？
この分なら、どうにかなりそうだと僕は感じた。

僕の外遊、あるいは漂流・5

（別にお前らが食い扶持分ぐらい魚を取ったって構わんぞ）

そう大鳥が許したので、僕は普段通り魚を湖で取った。だが、三郎さんが悪者たちの動向を気にしているようなので、日に一度は海にも様子を見に下りて行った。ついでに貝類を集めて、煮たり焼いたりして食べた。冷たい海の貝は色合いは地味だが、なかなかいける。いわゆるホッキガイに近い感じの二枚貝が、特に美味かった。ツブ貝に近い感じの巻貝も悪くない。

「これで、うまい酒でもあればなあ」

僕がぼやくと、三郎さんが大いに頷いた。美味い魚・貝・山菜・ベリー類・イモ類、そんなものを食べて、体の調子は整った。大鳥も「たらふく食った」らしい。

（そろそろ出かけるぞ）

大鳥にそう言い渡されて、僕らは小屋を片づけた。別に汚く使ったわけではないが、持ち主のモナは貝の匂いも嫌いらしいのだ。ともかく掃除をして整頓して、小屋を後にする。モナと狼兄弟にお別れを言う時は、ちょっとばかり涙腺が緩んだみたいだった。

「何だ、おい、グスタフ、泣いているのか！」

人型のモナにわざわざ大声で言われてしまった。

「うん。そうらしいね」

「そうらしいね、って、素直なんだかそうでもないのか、お前は変な奴だ。だが良い奴だよ」

「また、いつか会えるかな」

「帝国に戻ってから、夜空にはためく光に向かって三度、教えたよ

うに叫べばよい」
「夏は太陽が沈まないんだろう？　じゃあ、はためく光が見られないね」
「それはそうだな。夏は鬱陶しい羽虫が出てきたりするので、苦手だ。夏の間だけ羽虫が少ない、うんと北に逃げているかもしれん。出来れば冬が良い。一日中はためく光が見えたりするからな」
「わかった。真冬は無理にしても、夏は止めておくよ」

モナは再会を疑っていないと言う様子で、案外あっさりしていた。

「おう、気を付けて行けよ」
「うん。姉さんもね」

僕の方がウェットと言うか、ぐずぐずしていた。ユリエは先行きを心配している。三郎さんは上司とどうやって連絡を取るか、で頭が一杯らしい。

モナに貰った皮ひもで、僕ら三人が体を固定すると、大鳥は空に飛び立った。眼下では僕らに向かって大きく手を振るモナの周りを、兄弟狼がぐるぐる回って遠吠えする、と言う事を繰り返していたが、その姿もすぐに見えなくなってしまった。

いざ乗ると、乗り心地は悪くなかったが、目を明けてはいられない。かろうじて風の当たらない方向から覗き見ると、前方に山々を抱えた大きな島が見える。あれがおそらくミズホだろう。

「いやあ、こうやって見ると、ミズホは美しいですなあ」
飛行機なんて乗った事も無い三郎さんからすると、非常に斬新なアングルなのだろう。僕の知っている富士山をさらに整った形にした山が、そそり立っている。成層火山とかコニーデ式火山というタイプだろう。
「あの御山は火を噴かないんですか？」

三郎さんに尋ねると、いつの頃かわからないほど大昔に火を噴いたことが有ったらしい、と言うような超アバウトな答えが返ってきた。噴火はおとぎ話のようなものと受け止められているようだ。

（ここ一、二年の内に火は噴くが、いつ噴くかはお前次第だな）
（僕しだい？）
僕に火山の噴火の時期を自由にする力なんて、無いはずだが
（ミズホの連中にも怪しからぬ者がおる。お前は大丈夫だが、連れには気を配れ。お前の子を孕んだからな）
（そ、そうなのか？）
（労われよ）
（親子三人、無事に帝国に戻れるかな？）
（胎内の子にも生じる意味と役目が有るようだ。一時別れたとしても、大事無かろう）
（一時、別れるのか？）
（お前次第かな）

また僕次第と言われて、面食らう。僕の意志で、一時別れるのだろうか？
すると、いきなり降下し始めた。凄い風圧だ。全力でしがみつく。大きな水音がした。デカイ水柱が立つ。

「おおおっ、湖の上ですな？」
「三郎さん、知っている湖？」
「御山のふもとの『碧の湖』です。そういえば、この湖の色は主様のお目の色とそっくりですな」
ここは神域で、一般人が足を踏み入れる事は禁じられているそうだ。管轄している神職の人は、都のミカドの妹にあたる人らしい。
「誰か、参りましたよ」

ユリエの言葉に、岸辺に目をやると人を乗せた馬が十騎ほど、爆走してくる。土煙が立たないのは、丈の低い草地のせいらしい。

（あの連中、危なくない？）

（神域に相応しくない、穢れた波動の者が混じり込んでいる。もう少し待て。巫女が来るだろう。そうしたら、岸辺につけてやろうよ）

（三郎さんの話に出た、ミカドの妹って人かな？）

（そうであったかな。人の世の仕組みは知らんが、神力の有る女だ。お前よりずっと弱いがな。巫女が来るまで疲れたから、寝る）

そういうと大鳥は眠り始めた。三郎さんは岸辺の人間と接触したいのだろう。湖の真ん中で停止状態になったので、あわてているみたいだ。

「三郎さん、あわてなくても大丈夫です。もうすぐ神力の有る巫女が来るそうですよ。その人が来たら岸辺につけてくれるって話ですから。大鳥は疲れたから、ちょっと寝るそうです」

「主様は、この霊鳥と意志を通わせることがお出来になるので？」

「うん。人の世の仕組みはわからないそうだよ。巫女って人はミカドの妹君にあたる人かな？」

「さよう、強い神力をお持ちの清らかなお方と世に名高い姫宮様であられます。珠宮聡子内親王殿下とおっしゃいます」

「タマノミヤサトコ？　内親王って事は、今のミカドの娘さん？　妹さんじゃないの？」

「先のミカドのただおひとりの姫宮さまで、ただいまのミカドは珠宮様の御兄君であられます。御幼少の頃より斎の宮のお役目についておいでです」

うやうやしい調子から、ミズホのロイヤルファミリーの有力メンバーらしいと知れた。僕の『神力』はその人より強いらしい。

「そのお方がおいでになれば、三郎殿もどなたかと連絡をお取りになる事が出来そうですね」

「さようでございますな。あの侍衆あたりにお願いできそうです」

「この大鳥が言うには、穢れた波動の者が混じっているそうだ。だから姫宮様が到着するまで側に寄らないと判断した様なんだよ。三郎さんも用心した方が、良いかもね」
「穢れた波動ですか」
「悪い事を考えている奴が、混ざってるんだよ。気を付けないと。そうそう、それと、ユリエのお腹に僕の子が出来たって。大事にしなくちゃね」
「ま……本当ですの？」
「大鳥が教えてくれたよ」
「そ、それは、おめでとうございます」
「ああ、ありがとう」
何だか照れる。やることをやっていたから、できたわけだから……。ユリエも心なしか顔が赤い。
「それにしても、穢れた波動の輩は、何を企んでいるのでしょうな？」
そっか。三郎さんは仕事がらみで、真剣に気になるわな。
「汚職とか、横領とか、密貿易とか？　秘密を知った者は始末しようとか？国は違っても、役職に有る者が絡む犯罪って、そのあたりが多いんじゃないの？」
「なるほど。この神域が禁足地で有る事を逆手にとって、御禁制の品でも隠しているとか、御山の権威を悪用して、不当な利益を得ているとか……」
「ミズホの国情や、政治の仕組みを知らないから、僕も何とも言えないけどな」
「ならば姫宮の御到着まで、卒爾ながらこの三郎が、ミズホの国情について御説明申し上げましょう」
三郎さんの解説は、面白かった。政治システムは殆ど徳川の幕藩体制下のそれと同じだが、宗教のシステムが、同時代の琉球のものの方にかなり似ているのが興味深い。

「ふううん。ミヤコのミカドとムサシの大将軍か。大将軍が世俗的な政治権力は掌握しているけれど、形式上はミカドに任命されたって恰好を取ってるんだな？」
「さようでございます」
「で、斎の宮は神の声を聴く一番偉い巫女さん、なんだね？」
「さようでございます」
「血筋に関係なく、強い神力が有る人間なんか、いないの？」
「おるのかもしれませぬが、ミカドの御血筋が斎の宮として国中の巫女の上に立たれるのはこの国の決まりで、大神との約定と言う事になっております」
「斎の宮は、一生独身？」
「斎の宮の位についておいでの間は、清らかな身を保っておられます。位を別の方にお譲りになった後は、ミカドのお許しが頂ければ御結婚も可能でしょうが、釣り合う御身分御家柄の男子は稀ですので、やはり独り身を通されることが多いですかな」

話を聞くと、僕の知っている平安時代以降の未婚の内親王に女院の院号を宣下するやり方とそっくりだ。ミズホの一般庶民は斎の宮様とか珠宮様って呼ぶらしい。

十名ほどの男たちがバタバタ騒いでいるのは取りあえず無視していたら、そのうち真っ白い着物に赤い袴の女の子たちに取り囲まれた輿がしずしずとやってきた。木部は白木で白い布で幕をたらし、トップ部分に銀色の鳥の形の飾りがついている。おみこしみたいな格好だ。担いでいるのは十六人の白装束の男たちだ。

輿が停止して、女の子たちがあたふた走り回って緋毛氈なんか広げてる。レッドカーペットって感覚かな？

（なあ、そろそろじゃないの？　起きたら？）

僕が軽くポンと叩くと、大鳥は羽を大きく広げた。すると岸辺で

どよめく声が起きた。
（おう、巫女が来たなあ。アイツの神力はさほどでもないが、我と意志疎通はできる。あれがお前の想いを読み取る事は出来ないが、お前があれに意志を伝える事は出来るはずだ）
　輿が静かに降ろされた。中から女の人が降りたみたいだ。
（さてと、行くぞ。羽根を動かすと巫女の家来どもがうるさいから、このまま行く）
　大鳥は滑るように水面を移動した。ちょうど良い感じに砂地が有って、僕らはそこで地面に降りた。
　緋毛氈の上に立っている少女の顔を見て、ちょっと驚いた。少し前のユリエにそっくりだ。来ている着物は五つ衣だか打掛だか、そんなちょっと長ったらしい物を羽織って、長い赤い袴を穿いている。非常に歩きにくそうだ。
（これが巫女だ。巫女、これがグスタフ。御山の光る石に触れ神の声を聴く唯一の者だ。鄭重に扱え。黒い鳥が来たら、グスタフ一人を乗せろ）
（黒い鳥って、何さ？）
（黒い大ガラスだ。我よりも御山の回りの瘴気に強い。奴はミズホから外に出ないのだ。巫女の邸の神域なら、奴もそのうちやってくる。巫女の邸で美味い物でも食わせてもらって待っていろ。じゃあな）
（これで、お別れかな？　これから、どこに行くの？）
（秋まであの湖だ。お前は長生きだから、また会える。そうさな餞別に一枚羽をやろう）
　大鳥は羽根を一枚嘴で引き抜いて、僕に差し出した。僕から渡せるものは、特に思いつかなかった。
（ありがとう）
（では、行く。巫女よ、これらの面倒をしっかり見るのだぞ）
（はい。承知いたしました）

静々と湖の中央に戻ると、ドーン、というような水を叩くような音をさせて、大鳥は一気に高く舞い上がった。
「きっとまた会おうな！」
僕が叫ぶと、大鳥は高い声で一声鳴いた。

「遠き西の国の御身分ある方と大鳥様より承りましたが、ミズホの言葉はお分かりになるようですね」
「はあ。ちゃんとはわかってないでしょうが、簡単な事なら」
「御無礼いたしました。このミズホの斎の宮をあいつとめます珠宮聡子にございます」
「テオレル帝国のグスタフと言います。グスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲランです。こちらはユリエです。ユリエは冷泉家康の長女で、僕が生まれてすぐからずっと仕えてくれています。そのう……懐妊中なので、余り無理はさせたくないのですが、そのあたり、よろしくお願いいたします。ええっと、こちらは、途中で知り合った……三郎さん、あんた……ああいい、僕がこっそり説明しよう」

（この人は和田伯耆守さんの家来で伊藤正三郎って人ですが、どうやら密輸にかかわる大事な捜査をしていた時に、襲撃されたようなんです。さっき、大鳥が僕に教えたんですが、あの、馬に乗ってきた十人の中に悪者がいるみたいで、身分は伏せた方が良いかな）
（和田伯耆守と言えば、幕府の重臣。ただいまは外事奉行であったかと思います。内密に私の方から和田伯耆守の邸に使いを遣わしましょう）
何でも、身近に使っている腰元かなんかに和田伯耆守の親戚の子がいるらしい。その子に言いつければ、秘密が漏れないだろうって話だった。先に騎馬でやってきた十人は幕府から、このあたりの防備のために派遣されているメンバーの一部らしい。宮様の直接の家

来ってわけじゃないんだな。

僕と宮様がテレパシーでかなり長い立ち話をした後、ユリエは宮様の輿に一緒に乗せて貰う事になった。

「グスタフ様のお子ならば、大切に致さねば神罰が当たりますから」とか何とか言われて、乗せられたって感じかな。

僕は螺鈿細工の鞍しか置いてなかった『神馬』だって言う真っ白い馬に乗せてもらう。

「御神馬がお乗せするのだから、この方はやはり特別な方だ」とかなんとか言われたところを見ると、相当気位の高い難しい馬なんだろうか？　僕の事は気に入ってくれたらしい。三郎さんはその他大勢の誰かさんの馬を借りたようだ。

何はともあれ、僕らは宮様と一緒に、宮様のお邸というか御所というかを目指した。

僕の外遊、あるいは漂流・5（後書き）

珠宮さんの設定、ぶれてました。すみません

僕の外遊、あるいは漂流・6

宮様の邸は白木主体の書院造りプラス数寄屋造り、って感じの建物だ。

庭がちょっと残念な桂離宮とか？

いやあ、そもそも庭の出来不出来なんて、あんまりよくわからないけれど、真っ白い玉砂利が主体。池は無い。つくばいが有って、そこから綺麗な水が湧いているのは悪くないけれど、花も木も殆ど無い。

冬は寒そうだ。今は春先なんだろうが、それでも結構冷える。ユリエのお産がどうなるかわからないが、大変かもしれない。この邸では出産は血の穢れだから、アウトらしい。どこかに移されるんだろうなあ。心配だ。

大鳥が「巫女の邸で美味い物でも食わせてもらって待っていろ」と言ったが、その黒い大ガラスは姿を現さない。今日で三日になる。僕とユリエは同室だが、三郎さんはもう邸にいないようだ。連日精進料理プラス川魚みたいな献立を一人当たり五つの御膳でドーッと出される。美味しい事は美味しいんだが、大抵冷たいか冷えた物ばかりだ。それぞれが量が少ないのに食器が多くて面倒くさい。

「別に一汁三菜でも十分なんで、温かいものは温かい状態で食べたいなあ」

「ご不自由は御座いませんか」と聞かれて、つい正直に言ったら、今度は目の前で女官さんが三人ぐらいつきっきりで、火鉢を持ちこんで毒見済みの汁を温めたり、魚のしあげの火を通したり……これはこれで面倒だ。

思い切り行儀悪く座って、好きなように突っついて食べようかと

も思ったが、人目が有るとついパフォーマンスに走る。この世界に転生してから身についた性癖だが、視線にこもった感情が読みとれると、どうしたって、期待に過度に応えちゃうものなのだ。

（まああ。涼やかな挙措動作でいらっしゃる）
（まあッ、完璧な箸使いでいらっしゃるわ。ミズホの高貴な方々でも、これほどの方は珍しいのでは）
（まあ、お椀の蓋を流れる様な動作でお取りになった）

無視すればいいのに、無視できない。
あーあ、湖の側の丸太小屋が懐かしい。
ユリエは髪を後ろに下ろして、小袖&打掛みたいな恰好をしている。神職じゃ無い上流家庭のミセスの格好らしい。女官達にはお方様と呼ばれている。僕は小袖と羽織袴にしている。小袖だけで裾がはだけちゃうと、未婚の女の子が多い手前、具合が悪いからだ。月代を剃るのは勘弁してもらって、トリアにいたミズホの医師みたいに髪を紐で束ねた。

運動は朝、ちょっと鍛練をする程度だ。一日中、好きな時に入って良い温泉が有るのが気に入っている。天然温泉、源泉かけ流しの岩風呂って感じだ。客用らしくて、誰も女性陣は利用しない。「はしたない」らしいからユリエとの混浴は諦めているが、ちょっぴり残念だ。
今日は木刀の素振り千回と、組み手の型をさらった。こういう武術は完全にミズホ式だ。汗を流した後は、水をしっかり飲んで、それから露天風呂に入る。朝食はそのあとだ。玉砂利の庭の向こうには『碧の湖』と『御山』が見える。なかなかに良い景色だが、噴火が近いんだっけ。するとここはどうなるのかな？

（大鳥が山の瘴気とか、いってたな。もうすでに有毒ガスを吹き上

げている場所が有るって事だろうか）

急にすごい突風が吹きつけて、玉砂利が飛んだ。僕は思わず湯にもぐった。

巨大な羽音がして、真っ黒い鳥が降りてきた。デカいカラスだ。足が、三本？　おいおい、冗談抜きでヤタガラスなのか？　ううんと、タケツヌミノミコト？

一声、いかにもカラスらしい声で鳴くと、僕をじっと見ている。

（我はいかにもヤタガラスだ。外つ国の者だと聞いていたが、ミズホの者でもめったに知らぬ我が真名を知るとは、やはりお前は真の神力の持ち主のようだ）

（いやあ、たまたまのあてずっぽうだって。あんた、人型になるのかな？　タケツヌミノミコトさんなら）

（今はお前を乗せるために、体を大きくしているから、当分無理だ）

（ひょっとして、今から御山に行くの？　朝飯がまだなんだが）

（我も腹ごしらえをしてからにする。お前も飯を済ませろ）

（わかった。食べ終わったら、ここにこれば良いのかな？）

（ああ。そうしろ）

僕らが滞在している中書院に戻ると、女官達が大騒ぎしていた。

「黒い御神鳥が御渡りじゃ！」

「朝餉の後、御出立というぞ」

「はよういたせ、はよう」

別に朝なんて、簡単でいいのに、やっぱりお膳が三つは出てくる。

「ああ、僕そのおかゆと、小魚と若布かなんかで十分ですよ。ヤタガラスは急ぐみたいだし」

「まああ、申し訳ございません」

女官の偉いオバサンが、妙に恐縮するけれど、おかゆが暖かけれ

ば、十分いける。それでも僕が食べているうちに、食後のお茶と果物・お菓子が出てきた。
「おっ、このかち栗かな美味いね。紅白饅頭もいける」
「こちらは、縁起物でございます。本日の御山での御首尾が、万事滞りなく運びますように、皆祈念いたしております」
腹ごしらえの済んだヤタガラスと僕は、白い玉砂利の庭から、皆の見送りと声援を受けて飛び立った。体はあの、モナに貰った皮ひもで固定した。
火山性のガスが立ち込めるエリアを抜けて、更にはドンドン岩場だらけの場所を抜けて、そそり立つ大岩の上に来て、ヤタガラスは止まった。
(ここから先は、我も行けぬ。お前一人で行くのだ)
(化け物でも隠れていないかな?)
(この世界で最も厳重な神域だ。それは有り得ぬ)
おいおい、本当か? そう思う程真っ白い靄と言うか霧というか、そんなものが立ち込め、先がほとんど見えないのだ。呼吸は普通に出来る事から、毒ガスが充満している訳では無いようだが。
「おい! 元・井沢亮太のグスタフ、こっちだ」
「おっ、その声はルンドの管理者さんか!」
「そうじゃよ。久しぶりだが、まだ、完全に起きている状態の君に姿をさらせる程、君のパワーは強くは無いのでなあ、声だけじゃ。大体まだ、君は皇太子じゃしな」
「皇帝になると、目の前にあんたが姿を見せるのか?」
「そうじゃ。君の力も一層強くなっておろうしな」
「こんなところに呼び出して、何をどうしようって言うんだ?」
「もとの世界に残してきた家族と、愛しの美保ちゃんのその後を見

せてやろう。それから今後どうしたいか、決めるのじゃな」
「ルンドでは僕が生まれて十六年たつが、地球の時間はどうなんだ？　ずれたりしてないのか？」
「意識的に地球に合わせておるよ。ルンドの方が小さな世界で、調節をしないと地球よりずっと時が早く流れるからな。さあ、こちらじゃよ。この光っている石が問題の『聖なる石』と言われるものじゃ」
　声に促されるままに進むと、台座のような平らな石の上にブリリアントカットを施したダイヤみたいな形の石が嵌まり込んでいる。
「これに触るの？」
「そうじゃ。見たいものを見ればよい。地球でもルンドでも好きなように見る事が出来るぞ」
　僕は両手で石に触れた。痛みも何もなかったが、脳裏に閃光が広がった。そして……僕の生まれ育った地球の家が見えた。仏壇の前に、誰かが居る。幼い子供達がパタパタ歩いている。
「これこれ、仏壇のある所は静かに歩きなさい」
　幼い子供二人をたしなめる父親らしき声……あれ？　弟の浩次だ。すっかり三十過ぎのオヤジになっている。そこへ父と母と、弟の妻らしき人、学校時代の友人たち……それからなじみの和尚さん。ああ、僕の命日に皆で集まったのか。
　僕が死んで十六年目にやる十七回忌の法要らしい。
「もう亮太は成仏できたじゃろう。後は二十三回忌じゃな。婚約者じゃったあの人は、今はどうしていなさる？」
　和尚は相変わらずおしゃべりだ。だが、僕も美保のその後が気にはなる。
「ああ、亮太の三回忌までは出てもらったけれど、その後結婚され

たからねえ」
「この子達とたまたま、美保さんの子供の幼稚園が一緒で、びっくりしたよ」
「へえ。浩次、話でもした？」
「いやあ、挨拶だけ」
「えっと、それって、佳代ちゃんのママ？」
弟の妻らしき人が、弟に聞いている。
「ああ。そうだ」
「佳代ちゃんママが、亡くなられたお兄さんのもと婚約者なんて…
…びっくり」

その後、美保の噂が幾つか出たが、あくまで噂という感じだった。
美保は……幸せか？

急に画面が切り替わった。美保だ。幼稚園児らしき女の子が走り回り、ベビーカーの中に男の子がいる。そして……妊娠中らしい。マタニティーウェアらしきものを着て、公園のベンチにすわっている。ベンチの隣に男が座っている。夫だろう。僕の全然知らない男だ。

「美保、誰だ、そいつ、なあ！　美保！」

僕は声を荒げてしまった。美保に聞こえるとも思えないのに。
夫が席を立ち、娘の所に歩いて行く。
美保は……僕の声を聴いたのだろうか？　後ろをいきなり振り向いて「亮太？」と呟いた。

「そうだ、僕だ、僕だよ。美保！」
「ああ、今日は亮太の命日だものね。あのね。あの人、私の職場の同僚だった人なの。亮太みたいにハンサムでもないし、お給料もそ

れほど多くは無いけれど、一生懸命なの。私ね、自分でも気が付いていなかったんだけど、亮太の赤ちゃんを妊娠してたんだよ。でも、ショックで流産しちゃった。結婚も、お母さんになるのももう、あきらめていたのに。あの人がね、一生懸命支えてくれたの。つい、ほだされちゃってね……三回忌に伺った時に、亮太の御両親から『結婚しなさい』って勧められて……決めたの。ごめんね。亮太は、天国に居るのかな？　それともどこかの国に生まれ変わったかな……あの人ね、私が亮太に初めてを上げちゃったし、流産したし、亮太を忘れられないしって言ってもね、それでもいいって、そう言ったの。何か、馬鹿だよね。だから、ごめん。そういう訳で、私はあの人の奥さんだから。怒らないでね。亮太なら、きっと、どこでもモテモテだよね。生まれ変わったら……今度こそ亮太のお嫁さんになれるかなあ……」

美保はポロポロ涙をこぼした。僕も一緒に涙をこぼした。美保が辛く苦しい時に、僕は何一つ助けてやれなかったのだ。それが、とても悔しかった。

「亮太を忘れる事なんて、できないけれど、でも……あの人を大切にしたいの」

「分かった。わかったよ、美保。それでいいんだ。きっと」

次の瞬間、セルマがリョウタとルイサとラウル・ヤイレに絵本を読んでやっている光景を見た。

「父上はお元気かなあ」

リョウタがつぶやくと、ルイサとラウル・ヤイレがだいじょうぶ、と言いながら、身を寄せる。するとセルマが、読み終えた絵本を閉じて、子供らにおやつを出してやるのだった。

「大丈夫よ。あの方はお強いのですから」

そして、次の瞬間、アネッテが僕の肖像画に色を塗っている様子

が見え、更に父上が『大女亭』で酔ってヤンとアニタが閉口している所、ヨハンと母上と大宰相が一緒に食事をしている所、ロルフが勉強している所、それをマウリがからかって、けんかになった所を次々フラッシュのような場面切り替えで見た。

僕に、美保を責める資格は無い。それぞれの暮らし、それぞれの家族が出来上がっているのだ。

「今度のユリエの子は……どうなるのだ？」

ミズホで生まれるらしい。それからは……どうなるだろう？

「お前は百歳になった時、どうするかの？　美保ちゃんを、呼び寄せるかな？」

管理者に尋ねられた。

「美保があちらでの天寿を全うして、家族との関係が終わり、どこかに生まれ変わる必要が有るんでしたら、ぜひ僕のそばに生まれてきてほしいです」

「そうか。じゃあ、お前がルンドに転生して百年目に出会う事になろうよ」

「ユリエのこれから生まれる子が心配ですが、大丈夫でしょうか？」

「今度の子は、ミズホと縁が深い。望む者が居れば、しばらくその手に委ねるのも、悪くなかろう」

「望むって？」

「恐らく養い子にしたいと望まれるじゃろう。その方が、子供にも、父であるお前にも良いはずだ」

雲をつかむような話だと思った。

「この山の噴火については、どうなのです？」

「今年か、遅くとも来年には噴火する必要が有るが……いつから始めるかは、お前に任せよう」
「もし噴火したとして、どの辺りまで被害が及ぶのです？」
「今、禁足地になっている範囲のおよそ二倍の面積だ」
「記録とか、残ってません？　前の噴火の」
「お前がいまいる邸の書庫の一番古い方の記録に，かなり詳しい事が出ているはずだ」
「ありがとう」
「お前の力は、前より強くなったからのう、呼び掛けたら、すぐに応えよう」
「あなたは、やっぱり、神じゃないのですか？」
「普通の人間にとっては、神同然かもしれんが、最初に言ったように管理者にすぎん。お前の姉が神について言ったことは、正しいぞ」
「形は決まってないんですね」
「そういう事だ」

管理者さんのパワー切れだとかで、会話はそれ以上は余り続けられないらしかった。噴火の被害の及ぶ範囲について詳細に知りたければ、僕が寝ている間に夢の中で尋ねれば、教えて貰えるそうだ。良かった。

「じゃあ、皆を救ってやれよ、ではな」
「わかった。可能な限り、被害を小さく留めるように、対策を講じてみるよ」

話を終えて、元の場所に戻ると、ヤタガラスはまだ、律儀にそこで僕を待っていてくれた。

「あんたは、前回の噴火の事、何か知ってる？」
「御山が火を噴いた時の事か。もうすぐらしいな。多少はわかるぞ」

「前回と大体、同じくらいの範囲なのかな。禁足地のおよそ二倍の広さの範囲の被害が大きいらしい。他にも多少遠方でも農作物とか、水とかに影響が有ったんじゃないかなって、思ったんだが」
「おうおう、そう言う事なら、我が社の記録も役立ちそうだな。よしよし。戻ったら、人型になって、手伝ってやろうよ」
「人型になれるの？」
「何やら、力が満ちてきたようだ」
「じゃあ、頼むよ」

僕はヤタガラスに乗って、もとの邸の庭に降り立ったのだった。

僕の役目と御山・1

僕が背中から降りるとヤタガラスは急に金色の光を放って縮み、気が付くと愛らしい七歳ぐらいの子供の姿になっていた。黒髪を総角に結った平安時代の貴族の子供みたいな格好だ。着物が黒づくめで、紐や飾りだけが金色だ。ただの黒だと最初思った眼は金色の光を宿していて、その目を見ると「ああ、ヤタガラスなんだ」とわかる。

「茶ぐらい、飲ませろ」

そう言うので女官さんが大騒ぎして、菓子やら果物やら取り揃えて、お茶の支度をした。行きに僕に出したかち栗や饅頭のほか、ミカンやら煎り豆やら煎餅・干し柿・干しイモなんかも出た。更には続いてヤタガラスと僕用の昼食も出た。

すると小さな体なのに凄い勢いで、全部平らげてしまったのだ。

僕は女官に頼んで、ヤタガラスが食べている間に書庫に入れるように手筈を整えて貰う。

御満悦のヤタガラスは、腹をポンポンと叩いて、座敷の真中で大の字になった。

「あー、食った食った。良い心持だ」と言うが早いが、小さな体に似合わないデカいイビキをかきはじめた。疲れたのだろう。僕はユリエと一緒に書庫係の女官さん達の後について、先に書庫で下調べを始めることにした。

「噴火に関わりにありそうな記録類を、まず全部あたってみたいんですよ」

すると、係の三人の女官さんたちはコマネズミのようにせわしく

動き回り、読書用の机の上に小山のように記録類を盛り上げた。一応、年代順にまとめて並べてくれたようだ。

僕は、書く方は金釘流で酷いものだが、読む方はまあまあだ。毛筆の崩し字はちょっと苦手だが、読めないって程じゃない。ユリエにとってもミズホの言葉は第二の母国語というべきもので、全く不自由しない。しかも僕と違って書く方も見事だ。

「噴火」とか「御山」とか「霊山」とか出てくる記録にはとりあえず、全部付箋をつける。大半付箋が付くと、さすがに疲れる。

「ユリエ、疲れたら休みなさいよ。普通の体じゃないのだから」

「はい」

返事はするが、僕が休まないと休まない。こうした時、ユリエの生真面目さは困りものだ。

すると、目を覚ましたらしいヤタガラスが、書庫に入って来た。

「お前はグスタフの言うように、休め。後は我がやる故」

見た目はちびっこだが、言葉に迫力というか威厳が有る。ユリエは素直に従った。

「なんか、関係ありそうなものだけでも、相当な量だね」

「ふうむ。古い記録だから古い事がわかる、わけでもなさそうだの。ここの記録は大半が前回の噴火以降のものだからのう。うむ。神域に奉仕する者たちや、周りの旧家の古い記録などをあたる必要が有りそうじゃ」

どうやら、前回の噴火で失われた記録が多そうだ。

「ねえ、むしろこの方が詳しくないか？」

土地の古老や旧家に取材して噴火に関する記録をまとめ上げたマメな好事家がいたようだ。その人物がまとめ上げた記録が一冊の本

の形になっている。僕はその『扶桑霊山変異次第』という本をヤタガラスに渡す。
「正式なこの邸の日記より、よほど詳しいようじゃな。地図や絵図面もついておるのか。ほおお……」
可愛いちびっこの姿のくせに、ヤタガラスの口調はオッサン臭い。
女官のお姉さんに聞くと『扶桑霊山変異次第』の筆者は邸に比較的近い場所の大地主だか郷士だか、そんな家の先代の当主だそうだ。
「当代の伊藤総衛門様は、その本をまとめました先代の御嫡男ですが、先代に劣らぬ学者です」
「ねえ、三郎さんっていうか伊藤正三郎さんて、関係あるの？」
「あの御仁は総衛門様の従兄弟でいらっしゃるようです」
「へえ、そうなのか」
ちびっこ神様は、もうやる気満々みたいだ。
「行くぞ、グスタフ、その総衛門の家に行こう」
「ユリエは？」
「あれの腹の子は、大切な子だ。この邸でゆっくり昼を食べさせて休ませておけ。ここ一月ぐらいは、特に気を付けた方が良いぞ。な、女官の方でもよくよく気をつけよ。わかったか？」
何でもヤタガラスは一度人型になると、大きな体にはなかなか戻れないそうだ。小さな、というかノーマルサイズのカラスになって馬に乗った僕の肩につかまり、一緒に伊藤さんの家に向かう。先触れの一騎が疾走する。僕はゆっくり五騎の侍たちと進んだ。
（悪者が二人、供に紛れ込んでいるが、今日は特に怪しからんことはしないであろう）
（あの半分白髪の男と、背の小さい小太りの男？）
（邪悪な波動が読み取れるであろう？）

（焦点を合わせないと、考えている事までは読み取れないけれどね。従兄弟の正三郎さんの仕事の邪魔にならないかな？　ちょっと心配だ）

（んー、そうよな。先に総衛門に悪者が来るゆえ、従兄弟の話はくれぐれも内密にと、注意しておくか。では、またな）

ヤタガラスはいきなり、僕の肩から飛び立った。

僕は白髪の男の方に意識を合わせてみる。ふーん。外事奉行のポジションを狙っている大名が、三郎さんの仕える和田伯耆守の追い落としを企てているみたいだ。事実無根の汚職とか横領とか、そんな事件をでっち上げる予定らしい。小太りの男は不法薬剤を扱うムサシの豪商から、わいろを貰って色々情報を垂れ流しているようだ。どうやら神域に不法薬剤の倉庫を作らせたのはこいつのアイデアらしい。

どっちにしたって、ろくなもんじゃない。

それにしても、あの光る石に触ったせいか、他人の思念・思考を読み取る力が増大したようだ。それに邪悪な波動を感じても、以前ほど疲労を感じない。

（グスタフよ！）

（ああ、ヤタガラス、何？）

（総衛門に聞いたところでは、昨夜、あの従兄弟が滞在していた部屋が曲者に襲われたそうな。返り討ちにしたそうじゃが、深手を負った曲者は仲間が運び去ったようじゃ。我は部屋に残された血痕をたどって、曲者を突き止める。御山の話はお前が聞いておけ）

（了解。ああ、正三郎さんはどうしたの？）

（昨夜のうちに、早馬でムサシに向かったそうじゃ）

（大丈夫かな？）

（それも、ついでに見てこようかの。では、明日にでも会おうぞ）

伊藤さんの邸から移動するヤタガラスとも、スムーズに思念が通う。当事者同士は秘密が守れるし、スピーディーだし、これからこうした連絡方法をもっと活用する事を考えよう。それにしても、残った血痕から犯人を突き止めるって、ＤＮＡ鑑定よりすごいや。

ふと見ると、半分白髪の悪者その一が、馬を寄せてきて、僕に尋ねた。

「卒爾ながら……黒き御神鳥は、いずこにおいでになりましたのか？」

「なんかね、用事を思い出したみたいだよ。伊藤総衛門さんの話は僕が聞いておけって」

「さようで……」

伊藤さんちに乱入した連中はオッサンが雇った腕っ節の強い浪人らしい。直接襲撃命令も下したみたいだ。小太り男の裏の顔は承知しているが、内心軽蔑しているようで、共同作戦は今の所、心配しなくて良さそうだ。オッサンは自分の悪事がばれたんじゃないかと、ちょっと気にしている。でもまさか、ばれるなんて有りえないとも思い直したようだが……こいつ、宮様の警護のメンバーの中で序列が上の方なんだな。早いところクビにしないと、宮様やユリエが危ないんじゃなかろうか？

そうこうするうちに、かなり大きな田舎屋が見えてきた。屋根は茅葺みたいだが、途中で見た農家の軽く十倍はありそうだ。周りを綺麗なお茶の生垣で取り囲んでいる。帝国にはお茶は生えていない。輸入してもいいなあ。まあ、生えてくれる保証は無いけれど、冬でもツバキの花がきれいに咲く比較的温暖な場所なら、大丈夫かもしれない。

今はミッケリの商人がお茶の取引で暴利を貪っている格好だから。帝国に戻ったら、家康師匠に相談だな。

馬をおりて、供の人が案内を乞う。

「誰かおらぬか。斎の宮御所より参った」

なーんか、えらそうだなあ。まあ、そう言うもんか。中からモンペみたいな袴に袖なしの羽織を羽織った白髪のがっしりした男性が出てきた。

「いらせられませ。当家の主、総衛門にございます」

「僕は宮様の御厄介になっているグスタフです。今日は御山の事を色々教えて下さい」

僕は人払いを命じて、総衛門さんの書斎で差し向かいになって話を聞いた。

「ヤタガラスは今ちょうど、昨夜お宅に入った曲者の行方を追っているようです」

「離れていても、あなた様と御神鳥は意志を通わせる事がお出来になると伺いましたが、まさにそのようですな。正三郎めの命を救って頂きましたとか、真にありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ正三郎さんにはお世話になりました。早馬なら今日中にはムサシですか？大丈夫か心配ですけどね」

気になって、ヤタガラスの気配を追ってみたら、大きな武家屋敷が見えた。曲者が匿われている場所のようだ。ヤタガラスはデカい門の上に止まって様子を見ているのだ。その意識が僕に流れてきた。

門の前で立派な籠が止まった。陸尺というか駕籠かき役が前三人後ろに三人、何処かの大名クラスだろう。屋根に蒔絵であしらわれている家紋は……重ね井桁だ。

「すみません。重ね井桁の紋所の大名って、誰かごぞんじですか？六人で担ぐような駕籠に乗る人物です。ヤタガラスがその大名の

邸を探ろうとしているようなんですよ」
「井口讃岐守様、でしょうかな。噂ですが……和田伯耆守様とは因縁がお有りだとかで」
「仲悪いんですか？」
「さよう。最初は些細なもめ事程度だったようですが、今では犬猿の仲ともっぱらの噂ですな」

（グスタフ、我の見ているものが感じられるか）
（うん。今駕籠から、屋敷の主人らしき人が降りたね。その人が伊藤さんの家を襲撃させたのかな？）
（いや、ちがうな。こやつ、井口讃岐守というのか。総衛門の事も正三郎の事もしらぬようだ。ただ、和田伯耆守とは反りが合わんのは確かなようだが……特に邪悪な意図は無さそうだ）

「ヤタガラスが、井口讃岐守本人はあなたの事も正三郎さんの事も知らないって、今、教えてくれました。和田伯耆守と反りは合わないが、邪悪な意図は感じられないそうです」

僕の解説に、総衛門さんはびっくりした顔をしていたが、嘘ではないと信じてくれたらしい。

「もうすぐ、ヤタガラスも戻るでしょう。それまで、御山の話を伺わせてください」

僕が宮様の邸というか御所の書庫から持ち出したのと同じ本を、もう一冊貰った。伊藤さんの家には、あと二十冊ばかり残っているらしい。

「先代、つまり亡くなりました父が、御山の小さな異変から、火を噴く可能性について思い至りまして、大事になる前に早くから用心

すべきだと考え、このような本をまとめたのです」
先代さんは、地質学の分野に特に興味がある人だったようだ。宮様の御所の温泉を掘り当てたのも、先代さんだと言う。
一枚の詳細なこの地方の地図を見せてもらった。あの『扶桑霊山変異次第』をまとめるに当たり、各地の地層に含まれる溶岩の分布についてのデーターを記録してあるのだ。
「なるほど、千年前の大噴火の名残と思われる溶岩の分布をたどれば……」
「さよう。御山が再び火を噴きました場合の、危険な場所の目安がたてられると言う訳です」

そうは言うが、幾つもの調査地点の状況を丁寧に地図上に書き込んだわけで、相当大変な調査だったと思われる。何とまあ、この調査を先代の総衛門さんは一人でやったそうだから。確かにざっと地図で見た所は、溶岩の分布範囲は禁足地の二倍程度の面積のエリアになるようだ。

「幕府の手も借りるとか、できませんかね。そうすれば、もっと調査地の範囲も広げられますし、それぞれの場所での調査もしっかりできますから」
「さよう。私も代官様を通じ、幕府に献策をしましたことも御座いましたが、どうなりましたことやら」
総衛門さんが提出した、御山の噴火についての調査に関する意見書は、どうやら握りつぶされたか無視されたかしたらしい。
「いつ吹くのやらわからぬ御山の火のために、幕府が直接援助など難しいのでしょうなあ」
「ですが、もうすぐですよ大噴火は」
「ヤタガラス様に伺いましたが、今年中か遅くとも来年ですか」
「ええ。そうです」

いつから噴火させるかについて、あの管理者のじいさんは僕に任せるといったのだが……

そうこうするうちに、日が暮れてきた。いきなり、ドサッと音がして、ヤタガラスが飛び込んできた。そして、急に人型になった。

「ムサシまでの往復、御苦労さん」

「往復、縮地法を使って飛んだが、さすがに疲れた」

そう言うと再び、高いびきで僕と総衛門さんの脇で眠り始めたのだった。

僕の役目と御山・2

グーすか寝ている人型のヤタガラスを僕は馬に抱えて乗り、のんびり宮様の御所に戻った。総衛門さんの家にはこれから度々、立ちよる事になろう。

戻ってから報告も兼ねて、御簾越しにチョッと離れて宮様とも随分長話をした。というよりはテレパシーで情報交換だったのだが。書庫に連れて行ってくれた年かさの女官は、壁と一体化したみたいに黙っていたが、僕らが見た目の上では言葉を全く交わさないので、戸惑っていた。

「グスタフ様とは言葉ではなく、念のやり取りでお話するのです」

そういう宮様の説明を理解できないながら、受け入れようとはしているようだった。

三郎さんは無事に伯耆守に会って、報告が出来たようだ。そして僕の身分を知って、驚いていたらしい。

（それにしても、井口讃岐守がどのように違法な薬の密輸などという悪事に関係しているのでしょうね）
（ヤタガラスの見た所では、井口讃岐守自身は事件について何も知らないようでした）
（では家臣どもが何事か邪な事を企んでいるのやもしれませんね）
僕は今日、供についた悪者の手先二人の事を報告しておいた。
（そうですねえ。表向きはもっと、上の役職に推薦する事にして、この御所から追い出します）
（なるほどね、宮様、やりますね）

（なるべく、貿易などと縁のなさそうな場所に送り込みますわ）

ほほほっ、という笑い方が、実に楽しそうだった。

それからは、ヤタガラスがあちこち眷属の烏たちの力も借りて、情報を収集した。その膨大な情報を僕と相談して整理して、簡潔にまとめ上げた。更にそのまとめを持って、ムサシの城で行われていた老中たちの合議の席に直接乗り込み、『八咫烏の神託』として老中たちの脳に強い波動をぶつけ、悪人どもの悪事を認識させたのだ。不法薬剤の取引で儲けていたのは井口讃岐守の所に出入りしていた御用商人で、その商人と讃岐守の家来が手を組んで、不正な利益を貪っていたと言う。

讃岐守は監督不行き届きで、謹慎だか何だかちょっとお咎めをうけたみたいだ。

僕は外国の人間だし、客分にすぎないので、途中から不正な貿易に関してはタッチしないようになったが、三郎さんから聞かされたことによると、一味の主なものは捕まえて、牢に入れたらしい。

「主犯に船で逃げ出されてしまったのは、悔しいです」

計画を練り上げ、実行の命令を出した人物は讃岐守の屋敷に出入りしていた商人な訳だが、不法な薬剤の大半はミッケリで仕入れられたもので、帝国を経由してミズホにもたらされていたのだ。

それにしても……遠く離れたミズホでビョルンの奴、あの僕の乳母だったドロテアの亭主だが、あいつの名前を聞くとは思わなかった。

「帝国に戻ったら、きっちり締め上げて、調べなければいけないですね」

事情を知ったユリエも怒っていた。ユリエの実家レーゼイ家が築いてきたミズホと帝国間の交易ルートを、『穢された』と感じたのだろう。特別な早舟で、帝国のレーゼイ家にユリエは手紙を送った。

月を重ねるごとにユリエのお腹は、大きくなってきている。お産はミズホで行う事になりそうだ。

それにしても、火山の噴火が始まったら、この御所は完全に危険エリア内部だ。更には御所の御用を勤める人達の住まいや、付属の農園も全部アウトになる。何かもっと、被害が抑えられる方法は無い物だろうか？

寝ている間に、夢の中であの『管理者』の爺さんと連日、相談して条件を詰める。

僕の帰国は噴火対策とユリエのお産の目途が立ってからになるだろう。

宮様は僕らの滞在中都に行って、　お兄さんにあたるミカドと周辺の有力な人物に僕についての好意的な分析と見解を伝えてくれたようだ。どこで話がどうなったか細かい事は知らないが、僕が噴火対策のために帰国を遅らせている事、ユリエの出産が近づいている事、今回の大がかりな密貿易の一件の主犯は帝国方面に逃げた事等々を考慮した結果、僕と僕の生まれてくる予定の子をミカドの身内扱いにする事に決まったらしい。

戻ってからその話をしてくれた宮様のご機嫌は麗しかったから、悪い話じゃなさそうだった。

供について行った三郎さんからも話を聞いたが、外国人がミカドの身内扱いになるのはミズホ始まって以来の『珍事』らしい。この国では黒目黒髪ではない人類は『異様人』として、差別や忌避の対

象なのだから、確かに凄いだろう。

「グスタフ様は大国の皇太子であられるそうですし、ヤタガラス様や霊鳥様、さらには御山の神様とまで、自在にお話がお出来になる絶大なる神通力をお持ちなのですから、当然かもしれませんが」

そんな風に三郎さんと言うか正三郎からは言われた。「さん」付きはやめてくれって言われたので、本名の呼び捨てに落ち着いた。

ちなみに正三郎は僕の口添えも有って、宮様直属の護衛担当の責任者になった。身分は和田家の家臣から幕府の直参に昇格して、旧主・和田伯耆守とは現在は上司と部下の関係になったのだが、業務内容は密輸の取り締まりメインから、宮様の護衛役兼幕府との連絡役に変化した。

「グスタフ様には何ごとに寄らず御相談申し上げ、お役に立てることは何なりと致すようにと、宮様からも伯耆守様からも命じられております」

噴火の対策には幕府も相当、本腰を入れて動いてくれた。老中達の意識に色々働きかけてくれたヤタガラスのおかげだが。

「グスタフ様の仰せに従わぬと、神罰が降り注ぐとヤタガラス様がお告げでおっしゃいましたから、従わぬわけには参りません」

「幕府の財政も近年は逼迫しておりまして、お考えの通りにすぐには動けませぬが、出来うる限りの事はさせていただきます」

噴火対策のために総衛門さんの家で会合を開いた時にやってきた幕府の重役達に、そんな風にぼやき半分で言われた。ヤタガラスは相当きつく脅したらしい。だが、何の対策もせず噴火が有れば、多くの死傷者が発生するし、噴火以降予想される農業・漁業への深刻

な影響についても備えなくてはいけなかった。

溶岩流が到達しそうなエリアからはすべての人家を撤去した。馬や牛の放牧に限って、当分は許可したが、噴火の兆候が見られたらすぐに避難できる手筈を整えた場合に限っている。

集落ごとの集団移転も進めた。幸い宮様が御料地としてお持ちの土地を「百年間、無料で貸し出す」事にして下さった。噴火が完全に収まって、しばらくしてから再びもとの集落に戻る事も出来る。

「でも、噴火の後の土地は開墾も大変でしょう」

「元の土地に戻るのが難しければ、後のミカドや幕府が最も良き方法を真剣に考えるように遺言します」

何でも宮様はその遺言状を、神力のこもった特別な紙に書き残し、ミカドと幕府側に同じものを提出するそうだ。宮様の歳で遺言とは気の早い話だが、身分有る人で独立して一家の主の立場であるならば珍しくは無いらしい。

その紙に書かれた約定を破ると、関わる者全員に神罰が当たるそうだ。『誓紙』というものらしい。

なんか似たようないわれの紙が、地球にも有ったよな。もっと神仏混淆ぽかったけれどね。誓紙って言葉自体は、起請文っていう程度の意味だったかと思うけど。

「その『誓紙』はヤタガラス様の神力が籠っておりますのよ」

実際、ヤタガラスを祭神とした神社だけで作っている特別な透かしの入った紙を使っているらしいが、僕にはその神力って程のパワーは感じられなかった。後でヤタガラス自身に聞いてみた所、僕自身が神力になれっこになっている所為だろうと言われた。普通の人間に触れられる程度の微弱なものに対して、センサーが鈍いって

事らしい。
凄いのは、今回の密貿易をめぐる一件でヤタガラスの実在と神力を疑う者が朝廷や幕府に居なくなった。おかげで、書かれた内容の実効性がうーんとアップしたって点だ。ヤタガラス様様だな。全く。

集落の移転が無事に済んで宮様の御所の移築が完了した時点で、僕は噴火の開始を夢であの爺さんに申し出た。そして、夜明けとともに、噴火が始まったのだった。溶岩流は前回の噴火とほぼ同じエリアに納まりそうだし、降灰も予想の範囲内だ。これで強い風でも吹き荒れて、灰が飛び散ると厄介だが、不思議な事に大きな噴火や大量の降灰が有る日は、ほとんど無風だった。そして雨により発生する泥流も予想コースの範囲内に収まってくれた。水蒸気爆発も幾度か起きた模様だが、人が周辺に居なかったので、被害は無かった。

僕とユリエが初めてミズホに来てから、ほぼ十か月が過ぎていた。ユリエは都と御山の中間地点にある宮様の別邸にこもっていた。もうすぐお産が始まりそうだと、ヤタガラスが教えてくれた。噴火が少し落ち着いてから、宮様の許しを得て、僕はユリエと生まれたての息子を見舞った。今回もユリエは男の子を産んだのだ。ミズホの人と同じ黒目黒髪だ。

名前は宮様の御発案で、男なら僕の前世の名前の亮太から一字と宮家の一員としての字を合わせて、亮仁とつけることになっていた。

「宮様のご養子にして頂くなら、娘でも宜しかったのに、私は娘に縁がないみたいですね」
「そう言うなよ。元気な良い子じゃないか」

帝国で留守番をしているリョウタに非常に良く似ている。だが、宮様とユリエの顔が似ている所為か、宮様の実子と言ってもおかし

くない様な顔つきでもある。ついてくれている女官達は「まあまあ、愛らしい」「お美しいお子様」などと騒いだ。母親がユリエだから当然と言えば、当然だ。

だが、僕は養子の件はまだ承諾していない。幾度か頼まれたが、やはり嫌だ。だって僕の子なのだから。

「やっぱり、帝国に連れて帰りたいけれど当分は無理かなあ」

「幼い子には長い船旅は難しいでしょう」

ユリエが言うには、宮様は僕となら結婚したいと思っていたのではないかという。そんな感じを僕は持った事が無かったが……僕と会うときはバリアを張っていたのだろうか？

「帝国に御正妃も御側妃もお子様方もおいでだと申し上げると、お諦めになったようでしたが」

「好意は感じたけれど、男女の情などという感じはまるでしなかったよ」

「清らかに御育ちのまだ、お若い姫君でいらっしゃいます。確かに男女の情と言う風情はお分かりではないでしょうけれど……」

言われてみれば、かつてのセルマやウルリカから感じたような感覚は確かに有ったかな。だが、それがいきなり結婚なんて言われても僕も困る。

「お諦めになる代わりに、この子をお手元で育てたいとお考えなのでしょう」

「ユリエは、それでいいの？」

宮様は、自分は生涯夫を見つけることも難しい身の上だから、せめて後を頼むのは心から可愛いと思えそうな子にしたい。僕とユリ

エの子を自分が親代わりで育て、いずれは宮家を継がせることが出来たら非常に嬉しい。自分の願いを受け入れてほしい。そんな風にユリエに頼み込んでいたようだ。

「その子をミズホに残してくれ」

ヤタガラスがいきなり部屋に入ってきた。

「この子はテオレル帝国の皇族だ。僕の息子だし、この子の兄や姉もいるのだぞ」

「長旅に耐えられるようになったら、グスタフの国で一時、学問を修めさせれば良かろう。この子は皇位を継ぐ立場には無いと聞くぞ。ならばミズホの宮家の当主となっても悪くは無かろうが」

「帝国に戻れば、ミズホの宮家よりよほど大きな所領を僕はこの子に与えてもやれるぞ」

「それはそうかもしれんが……この子はミズホとの縁が強い。グスタフの血を受け継ぐ者は、帝国でもミズホでも大いに盛んに増えなければならないのだ」

「ヤタガラス様はこの子をお守り下さいますか？」

「無論だ。我が友の子で、斎の宮の養い子なら出来うる限りの加護を与えるぞ」

「殿下……」

母親のユリエが養子を受け入れてもよい様な気持ちでいるようだ。僕は、どうも嫌だが。

僕が嫌がっていると言う事をヤタガラスから聞かされたのだろう。

「亮仁殿をこの宮家の跡取りにしたいのですが、なりませんか？」

「自分の血を分けた息子を、めったに会いにも来られない遠い国に

残したいとは思いませんよ。食うに困る身の上と言う訳じゃないですし、国に戻れば帝国の皇族にふさわしい待遇をしますし」
「ですから、それはそれ。ミズホではこの宮家の跡取りと言う事にしたいのです」

ユリエに良く似た顔の宮様にうるうるした眼で訴えられると、僕も断れなかった。それにユリエの言う通り、当分は長旅など無理な赤ん坊なのだし、ヤタガラスは約束を守るだろう。

「わかりました。宮様にお預けしましょう」

帝国の言葉を学ばせる事、十二歳過ぎたら必ず帝国で学問をさせる事、最終的に正式の養子になるかどうかは本人が二十歳を過ぎてから決めさせる事、この三つの条件を飲んでもらって、養子ではなく猶子としてもらう事にした。つまり「異姓の養い子」扱いだ。

「じゃが、ミズホでは帝国式の長たらしい姓名など誰にもわからんがな」
確かにヤタガラスの言う通りだが、一応抵抗してみた。
「帝国式の名前もきっちり決めておくさ」
長たらしい名前は避けて、僕の正式の名前から一部を取ってカールとしたのは、僕なりの精一杯の妥協だ。

登場人物のまとめ・2

帝国の外の人の分も含みます。まだ、追加するかもしれません。

＊僕
グスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲラン
異世界・ルンドの最大国家テオレル帝国の生まれながらの皇太子。
即位すればグスタフ十一世と呼ばれる事になるはず。
金髪碧眼のチートな超絶美形。
テレパシー能力増強中。
前世は日本の大学生・井沢亮太。享年二十二歳。
死因は交通事故だった。
ミズホで前世の婚約者と家族の現状を知る。更に息子も一人増えた。

＊美保
井沢亮太の婚約者。相思相愛だった。
亮太の死後、職場の同僚と結婚。娘と息子を産んだ模様。
僕が垣間見た時点では第三子を妊娠中。

＊爺さん
異世界・ルンドの管理者。ミズホで僕の今後について、意思を確認した。

＊ユリエ
ドランメン伯爵夫人。病床にあった夫に代わり国境地帯の重要拠点である所領をよく治めた。
長らく僕のメイドだった。黒目黒髪。

姉の様な恋人の様な特別に大切な人。豪商レーゼイ家の長女。
夫と死別後、遺児・ラウル・ヤイレをつれて再び僕に仕える。
僕との間に亮太と亮仁、二人の息子と、次女・碧子を産んだ。
実は武術の腕前もなかなかのもの。

＊セルマ・トマソン
僕の側妃。グラーン侯爵夫人の長女。僕の長女ルイサを産んだ。
読書家で用心深い。奉仕活動に熱心に取り組む。
僕の長い不在中、子供らを良く守った。
おしゃれにあまり興味は無く、社交界も苦手。
亡父オーレは都市国家・ミッケリの三元老を務めるサマロキ家の捨てられた双子の片割れであった。

＊母上
テオレル帝国の皇后。名前はソフィーエ。
髪はプラチナブロンドで眼は淡い茶色。
目下の者に対する思いやりと配慮が不足気味。
皇帝である父上とは生まれながらの婚約者同士。
やり手の宰相・スコーネ侯爵を公式愛人とする。

＊父上
皇帝。首都トリアの中核部に存在する黄金宮の主。
名前はフレゼリク。
知力・体力・美貌に恵まれているが、気まぐれで飽きっぽい。
僕の関知しない庶子が多数存在する模様。
母上との夫婦関係は微妙で、部外者には理解しがたい関係。
僕が異世界の人間の転生者だと承知している数少ない人間。
僕を高く評価し、深く信頼している。

＊ロルフ
僕より七歳年下の弟。顔は父上にそっくり。
髪はプラチナブロンドで眼が淡い茶色なのは母上譲り。

＊マウリ
コリング伯爵マウリ・アブ・ランゲラン
僕の異母弟。母親は父上の公式愛人・グラーン侯爵夫人・カレン・ケーゼ

＊ヨハン・ベルワルド
アンホルト子爵。僕の異父弟。父親である大宰相の嫡子扱いで正式な相続人。
父親譲りの灰褐色の髪にグレーの瞳だが顔のつくりは、僕に似ている。
神聖教会大本山の大聖・ソフス・ネスの寵童役を勤めさせられた過去が有る。

＊ヤン・アイロ
父上と『大女亭』の女将だったスヴィ・アイロの間の息子。僕の兄さん
皇帝の庶子であることは秘密事項。亡き母の創業した『大女亭』を年子の妹アニタと共に運営中。

＊アニタ・アイロ

僕の姉さん。年子の兄ヤンと一緒に母の残した『大女亭』で毎日忙しく働く。

＊アネッテ
僕の正妃。因縁の多い隣国ワッデンの嫡出の第一王女。現ワッデン国王の妹。
身柄の保護と妃としての教育にユリエが深くかかわった。
ストロベリーブロンドの髪に青い瞳。
僕と同い年。
継母に幼少時監禁され虐待された事が、心臓に重大な影響を残した模様。
医師から妊娠出産には生命の危険が伴うと診断されたが、本人はその診断結果を知らない。
絵を描くのが趣味。

＊モナ
父上の初めての子供。僕の異母姉。極北の民が崇める存在。強いテレパシー能力の持ち主。
人型を時々とる狼であるらしい。ずっと狼の姿の異父兄弟と行動を共にしている。

＊クヌート
クヌート・エゴン・ステノ・アブ・スコウホイが本名らしい。
かつてのスコウホイ王国の嫡流の血筋。現・スコウホイ公爵。領民に慕われている模様。
帝国でテロ活動を行っていた過去は僕が封印させた。
知恵も勇気も有るが、詰めが甘い傾向が有る。
かつて僕の側妃候補だった従妹で妻のウルリカ共々、プラチナブロンドの髪に紫の瞳。

その髪と瞳の色はスコウホイ王国の王族にふさわしい色、とされている。

＊大鳥
白い巨大な鳥。霊鳥。僕とユリエをミズホに運んだ。
北の荒野を越えた先の森林地帯の聖なる湖とミズホの間を行き来して暮らしているらしい。

＊ヤタガラス
稀に大きなカラスの姿をとる。ミズホでは一般に黒い御神鳥として知られる。
愛らしい七歳ぐらいの男児の姿か、普通の大きさのカラスの姿で居る事が多い。

僕の帰国

僕の滞在中、幾度かミズホと帝国の間を手紙が行き来した。今回の噴火がどうにかおさまり、ユリエの体は産後の経過も順調で、無事に回復した。

「もう私も若くはございませんからどうなる事かと心配でしたが、思いの外万事順調でした」

考えてみたら、ミズホで僕は十七歳の誕生日を迎えたがユリエは僕より十五歳年上なのだ。三十代前半のお産は、まだ未熟な医療技術しか存在しないこの世界では、十分ハイリスクな高齢出産なのだった。だが、もともと武芸の修行などもきっちりして、体を鍛えてあったお蔭だろうか、通常のこの世界の三十代の女性より若々しい。二十代前半でも十分通ると思う。

「ユリエはいつ見ても綺麗だよ。僕との歳の差が一体いくつだったのか忘れてしまう」

「御年十七でいらっしゃる殿下より、私は十五歳も年上のおばばで御座います」

「そんな。ねえ、気に障った？　ねえ？　ゴメン。ユリエが怒るなんて。女盛りで、前よりも綺麗になったみたいだって言いたかっただけなのに」

「まあ、殿下……」

ユリエはクスクス笑っている。

「十五歳離れておりましても、まだまだ、私も殿下のお役に立てましょうか？」

「うん。もちろん。でも、亮仁は、やっぱり預けて行くの？」

ユリエ自身の親戚にあたる冷泉家の女性が上手い具合にユリエのお産とほぼ同じころに子供を産んで、亮仁の乳母役を引き受けてくれたのだが……僕はやはり気は進まない。

「私が残ると言う事も考えました……」
「とんでもない。帝国で皆、待っているのだぞ」
「皆様がお待ちなのは、殿下だけですから」
「そんな事は無いって。ラウル・ヤイレもリョウタも母親の帰りを待ちくたびれているよ」
「ならば、二人だけミズホに呼ぶと言う手も御座いますよね」
「そんな事、思いもしなかったよ」
「でも、殿下はおひとりでもお早くお戻りになりませんと」
「ユリエが傍にいないと、僕は嫌だ」
「アネッテ様の手前……帝国に戻りにくいのです。それにセルマ様のお気持ちを思うと申し訳なくて……」

ユリエが言うには、一年以上僕を自分が独り占めした格好になって気が引けるので、一年は離れて他の二人とバランスを取った方が良いと言うのだ。ユリエは男女の情愛より、僕の皇太子としての立場や宮廷内での人間関係を重視する。それはある意味正しいのだろうが、僕は恨めしい。

「ユリエにもう一人、僕の子を産んでほしいぐらいなのにな」
「それはいけません」
「でも、もう、体は回復したのだろう？」

一緒に帰らないとか、もう一年ミズホにいるとか何とか言われて、ちょっと頭に血が上ったせいもあるし、久しぶりに寝床を共した所為も有っただろう。その夜の行為が思いもかけない結果になるとは……

更に一月ほど過ぎて全ての用事が一応片付き、当然ユリエも一緒に船に乗るように手筈を整えていたら、ヤタガラスに言われて驚いた。

「グスタフ、また一人子が宿ったぞ。今度は姫だ」
その言葉にミズホで世話になった皆がすぐに反応した。
「さような長旅は無理です！」
宮様にも、宮様付きの女官達にも強く止められてしまった。

そんなこんなで、ユリエは胎内の子を無事に産み、子らの養育・処遇その他をキチンと定めるまで、ミズホを動かない事になった。
そして帝国からは早くもどれと、矢のような催促なので、僕は仕方なく一人で船に乗ることになった。無論、身分にふさわしい供ぞろえはミズホ側からつけては貰って、その中に正三郎もいるのだが……

「殿下、必ず戻りますから。そのようなお顔をなさいますな」
「ユリエは平気なんだよね」
「殿下の御子をお二人もお預かりするのですから、しっかりいたしませんと」

しょんぼりする僕に、ヤタガラスが言った。

「二人の子が、このミズホにあまたの子孫を残すはずだ。そしてグスタフの国に良き縁をもたらす。嘆くな。これをやるから、さびしくなったら覗くが良いぞ」

貰ったのは丸い金属製の鏡だ。神棚にでも置いてありそうな感じの古風な意匠だ。だが、僕の手のひらよりも小さい。僕が念を込めて覗けば、たちどころにその鏡に見たいものが映ると言う代物らし

い。

「夢でなら、鏡が無くても見ることが出来ようが、思いついた時いつでも見られるならば、グスタフも少し安心じゃろう？」

鏡には思念を増幅する力が有って、ヤタガラスに帝国から連絡をすぐにとりたいときなんかも、使えるらしい。僕が皇位について力が強まれば、鏡が無くても大丈夫になるらしいが……

「姫の名前はお決め下さいましたか？」

「じゃあ、噴火後も相変わらずきれいな湖にちなんで、碧子としよう。僕の眼の色でもあるしね。帝国式の名はエリカにする」

僕の決めた名前はユリエに気に入って貰えたようで、良かった。

ミズホ側の見送りは盛大だった。ミヤコからも幕府からも見送りの使いが港まで来た。そうした人たちの手前、あまり湿っぽい顔も出来なかった。僕は後ろ髪をひかれる思いだったが、ユリエは至ってにこやかに僕を見送った。沖に出ると潮の流れが速くなる。

海が夕日に赤く染まるころ、僕は未練がましく鏡を取り出してユリエの顔が見たいと願った。すると……

「……殿下……グスタフ様……」

ああ、ユリエは一人になると、泣いていた。すると悲しいくせに、嬉しくもなった。勝手なものだ。

翌朝取り出すと、まだ眠っている亮仁に向かって、何かつぶやいている。

「長いまつ毛が父上に似ておいでだこと。お小さいころの父上も、とてもお可愛らしかったのよ」

こんな風にして、僕は約五十日の船旅の間、暇さえあれば鏡を覗き込んでいた。正三郎との話は、余りはずまなかった。祖国に帰る

と言うのに、僕の表情は随分陰気であったらしい。心配そうに語りかけてくる事が幾度か有ったが、船酔いの所為にして、自分に割り当てられた船室内に籠っていることも多かった。

途中、ずいぶん波の荒い場所も有ったが、モナと初めて遭遇した北の海ほどではなかったから、さほど大して酔いもしなかったのだが……

寄港した南の島で、珍しい果物などにも出くわしたが、余り食欲は湧かなかった。ただ、昔、ユリエと一緒に滞在したレーゼイ家の別荘近くで拾ったのと、同じ貝ガラを見つけた。淡いピンク色の二枚貝と真っ白い巻貝だ。

「主様、たくさん集めておいでですな」
「うん。留守をしている子供らへの土産だ」

ユリエが幾つも愛らしい小物類や、ミズホの独楽や竹とんぼなどの玩具類を用意はしてくれた。だが、この貝殻は僕からの土産だ。

正三郎は一緒になって貝を集めてくれた。欠けたり割れたりしていない、形の整った物がかなり集まった。

「私は子と言う者がおりませんが、やはり可愛いのでしょうな」
「うん。そうだな。重い責任も感じるものではあるが」
「殿下は私より随分お若いはずなのに、ずっと大人でいらっしゃる」
「前世の記憶が有るからな」
「さようで」
「ああ」

僕がまた黙り込んでしまうと、正三郎はその場を去った。
美穂は……無事に三人目の子を産んだだろうか？

気にはなったのだが、鏡をのぞき込もうと言う気には全くならない。異世界の情景まで見られるものかどうか、分からなかったからでもあるが。

「父上はいつお戻りになるのかな」
「きっと、もうすぐだよ」
「お土産、何かしら？」

ラウル・ヤイレとリョウタとルイサは、床に座り込んで三人で絵を描いていたらしい。どうやらアネッテに貰った物のようだ。子供らは「御正妃様は可愛らしくて優しい方」と受け止めているようだった。セルマとこの頃は交流しているらしい。アネッテは正妃ではあっても子も無く、頼りになる身内も居ないのだ。その点セルマは頼りになる母親がいて、恵まれているかもしれない。

その夜、久しぶりにアネッテとセルマの事が気になった。ユリエは今度の長い旅で、二人も子が出来てしまったことを気にしていた。責任は僕の方にあるはずなのに。正妃と側妃を差し置いて、何と無礼な……そんな風に受け止める向きが宮中に相当な人数発生するのではないかと考えたようだ。

「アネッテ様のお気持ちを満たして差し上げて下さい」
まだ若く、と言ったって歳は一応僕と同じだが、複雑な人間関係の中での身の処し方が上手いとは言えないアネッテの事を心配していた。セルマはユリエの見るところでは「用心深くしっかりした方」だし、母親があの女傑といっても良いようなグラーン侯爵夫人だから、大丈夫らしい。

「おい、港だ！　トリアの港だ！」

興奮して一人の水夫が指す方向には、確かに見覚えのあるトリアの港の灯台が見えた。

僕が摂政になってから港を整備し、大型の外国船を係留できる岸壁も増設した。おそらくルンド全体で最大の港だろう。商品の取引額でミッケリ港を抜くのも時間の問題と言われる程、繁盛するようになった。ミズホの船員達も、トリアの名は良く認識している。

港から一艘の小舟が近づいてくる。水先案内人と帝国の入国管理官・検疫官を乗せているのだ。

こうした職員は僕が設立した商船学校で系統的な教育を受け、所定の実務経験を積んでから就労しているのだが、まだ三期の卒業生しかいない。それでもこの制度は国際的に認められつつあった。やってきたのは一番ベテランの第一期卒業生の面々だ。実は前世の知識をフル活用して、僕自身が海事法の概略などを学校で講義したことが有ったのだ。まあ、僕は単に皇太子というだけでなく、彼らには師匠筋でもあるわけだ。

「おい、君たち久しぶりだね」

すると彼らは一瞬沈黙してから、次に口々に「おかえりなさい」だの、「御無事で何より」だの半ば興奮状態で話し始めたが「まずは、仕事をしたまえ」と僕にたしなめられると、静かになりキビキビ仕事を始めた。

「ミズホの服装でいらっしゃるので、最初はどなた様かと思ってしまいました」

「それにしても、そうした衣装もまた、お似合いですなあ」

「この供ぞろえの皆はミズホで僕のために揃えてくれた面々なんだ。いいって断ったんだが、身分に相応しい行列を押し立てて都に戻るべきだって、あちらの王族の方々に言われたのさ」

「では、殿下、ミズホ式の行列で、トリアにお戻りになりますか？皆、珍しがって喜びましょうね」
「そうだね。折角だからそうするよ。僕の馬と、一応警護の近衛の連中の手配を頼もう」
「皇帝陛下と大宰相閣下への御報告は？」
「それは所定の手続きで」
「はい」

岸壁についたのは早朝だったが、港に降り立ち、ゆっくり港の休憩用の宿舎で昼食を食べて警護の手筈が整うのを待つと、ミズホの連中と一緒に僕は行列を組んで黄金宮を目指した。
先駆けが黄金宮の近衛兵である他は、ほとんどそのまま大名行列だ。

大名行列は紙吹雪や花を撒くトリアの人たちの熱狂的な歓呼の中を進んだ。
土下座する人々を見慣れているミズホの連中はいささか面食らったようだが、厳かに堂々と振る舞ったのは天晴れだ。
僕の馬の轡を取った正三郎は女性たちの黄色い声に、魂消ていた。

「帝国の言葉はよくわかりませんが、御婦人方がしきりにお名前を呼んでいるようですな」
「うん。そうだなあ」
「主様は、どこでも御婦人方に人気がお有りですなあ」
「まあ、みてくれが良い方が飾り物としても良いだろうよ」
「またまた……お人の悪い」
「フフフ、それは時々言われるよ」
「帝国の御家来衆が皆、主様に心服しているのはようわかります。実に凄い方だと改めて感じ入りました」

言葉は通じなくても、見るべきところはちゃんと見ていると言う所か。

この日の行列は、後々までも語り草となった。

そしてトリアから始まったミズホ・ブームは、様々なミズホの文化が帝国に影響を与え、取り入れられるきっかけとなった。そしてその影響は周辺の国々にも次第におよび、ミズホの産品は様々な国々で高く評価される人気商品となって行くのだ。そしてそれが、帝国とミズホのより良い強固な絆へと変化していったのは、言うまでもない。

何より僕が嬉しかったのは、黒目黒髪の人間を『野蛮人』などと言う者が、帝国ではほぼ皆無になった事だ。

だが、このとき僕の頭を一番悩ませていたのは、その夜を誰とどのように過ごすべきか、という事だった。

「どちらに行っても、角が立つだろうしなあ……はー」

「どうなさいました？」

「今夜は、どの妃と過ごすか、それともいっそ一人で寝るか、悩んでいる所さ」

「はああ、さようで」

「子のいない正妃の面目をたてるべきか、三人の子を守ってくれた側妃の所にするか、悩むなあ」

「色々本当に、大変ですなあ」

「うむ。困った」

「では、今宵は男だけで酒盛りでもして、お休みになったらいかがですか？」

そうするか……

あちらを立てればこちらが立たず。

僕はユリエと二人きりで過ごしたあの森の丸太小屋を、懐かしく思い返していた。

僕の家族の問題・1

「こうやって一緒に朝食を取るのも久しぶりだね」
「長い旅路の後ですから、それに昨夜はミズホの人たちも一緒に男の方ばかりで酒盛りであったとか」
「うん。飲んだことは飲んだけどね、そんなに無茶はしないよ。それにアネッテの顔をちゃんと見ていなかったのだし、寝坊するわけには行かないだろう」

昨夜の宴会は近衛連隊の詰所を会場にして、色々な種類の酒の大樽を持ちこませ、酒に合いそうなものなら何でもという感じで料理もバイキング形式で食べ放題にした。無論無礼講だ。自然酒が回ってくると、飲めや歌えやの陽気などんちゃん騒ぎになった。皆それぞれ知っている歌を勝手に歌い、それに合わせてまた勝手に踊るのだ。

「殿下も是非、一曲」

そんな風に言われて、僕も一曲歌った。皆、調子っぱずれの歌も楽しそうに歌い、盛り上がっている。更に、とある百人隊長が横笛を持ちだして故郷の歌を演奏し始めると、それに合わせて歌う者がどんどん増えたが、一番座が盛り上がったのは、正三郎が日の丸を描いた扇を広げ、身振り手振りをつけて踊り始めた時だ。妙に様になっていて、皆やんやの大喝采だった。

僕も調子に乗って、ミズホの言葉で「正三郎、天晴れじゃ」と声をかけると、近衛の連中がよく意味も分からず「アッパレ！　アッパレ」と繰り返した。更に座は盛り上がり、乱痴気騒ぎという様相になった。

さすがに僕は途中で抜けて、ゆっくり風呂に入り自室で大人しく

寝たのだったが。

「アッパレとはどのような意味なのですか？」

アネッテは黄金宮の流行語になった異国の言葉に、興味が湧いたようだ。

「見事だ、とか素晴らしい、とか褒める言葉だよ。可愛いとか、綺麗という時は使わないな」

「では、この花はアッパレ、などとは言わないのですか？」

「この花は冬の厳しい寒さに耐え抜いて花開いた。アッパレだ。というのならおかしくはないが、この花はアッパレだ、とか、このドレスはアッパレなどとは言わない。理由は知らないけどね」

「では、ドランメン伯爵夫人は厳しい旅を耐え抜き、お子もまた産んで、アッパレ、ですね」

「ああ、その話。僕が自分でしなくちゃいけないと思ったのに。誰かから聞いたの？」

「乳母が噂を聞きつけてきただけですが」

「一人は男の子だ。そして、今腹の中に女の子がいるらしい」

僕はミズホのヤタガラスの話をチョッとしておいた。

「まあ、そのような不思議な鳥が殿下をお助けしたのですか」

「ああ。ミズホを離れられないらしいので、アネッテに紹介出来なくて、残念だけどね」

「……セルマ殿の所には、三人の愛らしいお子達がおいでだし……私も……」

やはりアネッテも、自分の子供が欲しいのだ。だが、どうしたものか。意識を探ると、どうやらアネッテは見当違いの噂を信じてしまっている事がわかった。

「元の敵国であるワッデンの血を引く御子など、殿下はいらぬとお

考えだ」……そんな……僕はそんな風に考えた事など全くないのに。

昼食は子供らと一緒に食べた。

セルマは子供らを親身に世話したのがよくわかった。

息子二人の穏やかな落ち着いた雰囲気はセルマとの暮らしの中で身に着けたものだろう。産みの母の無償の愛情とはまた違う、互いの信頼関係と微妙な緊張関係が息子たちを大きく成長させていた。

二人とも母親代わりのセルマ、そして妹であるルイサの好意を得たいと強く意識しているのが興味深い。

おしゃまなルイサは母親よりも、むしろ祖母のグラーン侯爵夫人に性格が似ているようだ。

「私はラウル様もお兄様も大好きだけれど、お嫁に行くのはラウル様の所なの」

するとラウル・ヤイレは嬉しそうな顔になり、リョウタはむくれる。面白い。

「そうか。お兄様も僕の子だから結婚はできないからね。ラウルとルイサが大きくなっても互いに結婚したいと思っているなら、それでも良いのだよ。ラウルは頑張らねばいかんな」

「はい。学問も武術も頑張ります」

どうやら次代のドランメン伯爵夫人は、ルイサになる可能性が高いようだ。

リョウタにはミズホで弟が生まれ、もうすぐ妹も生まれることを教える。

「では、母上は妹が生まれて船に乗れるようになるまで、ずっとお戻りにならないのですか？」

「弟も妹も親代わりの方に預けて、早めに戻ってきてくれるよ」

「でも、そうすると弟と妹が可愛そうです」

幼いなりに、自分より小さいものを気遣っているのだ。

「そうか。そうかもしれんな」

「こちらにはセルマ母上も御正妃様もいらっしゃるし、父上もお帰りになったから大丈夫です」
「よしよし。えらいぞ、そのうちラウルと一緒に母上に手紙を書いてあげなさい」
「はい」

僕は心からセルマに感謝した。そして子供らが三人で仲良く遊んでいるすきに、抱きしめてキスをする。セルマの瞳は、熱い感情をうかがわせた。僕を慕ってくれているだけではなく、女として男の僕を求めていた。
「子供らは乳母たちに任せて、久しぶりに散歩でも、どう？」
僕の不在中、セルマはあの城砦のような女子修道院に子供らを引き連れて籠っていたのだから、黄金宮の庭の散策は久しぶりのはずなのだ。

「幾度かアネッテ様に御訪問頂きました。子供らにも細やかにお気遣い下さいまして、私も午後のお茶を御一緒させていただきました。愛らしい真っ直ぐな方でいらっしゃいますね。思いやり深くていらして、まことに御正妃にふさわしい方だと感じ入りました」
「セルマ、君が賢明な人なのは、僕だって良く承知している。深く信頼しているから子供たちを任せたんだが……折角二人きりなんだから、別の話をしよう」

セルマは六歳だった僕に言われた「あなた一人の僕でいて差し上げることは、今も、これからも、難しいでしょう」と言う言葉を常に強く意識している。ある種の呪縛にまでなっているのだ。もう十年以上の月日が経つのに……可愛そうな事をした。

「二人きりでいるときは、僕はセルマだけのものだよ」
するとセルマはぎゅうっと僕にしがみついた。その一途さがいじ

らしかった。
「グスタフ様を、心からお慕いしております」
そう言うと堰を切ったように涙があふれ出る。僕も力を込めてかき抱き、唇を重ねて互いの舌を絡ませる。僕をこれほど一途に求める美しい人を、僕はあの旅の間、殆ど想わなかった。それどころか、ずっとユリエと二人きりでいたい、などと思っていた。留守番役として、子供らの養育者としてしか意識しなかったのだ。僕は僕自身の罪深さを自覚すると同時に、女としてのセルマを開放したい。そうも感じた。セルマは神聖教会の教えに帰依するあまり、肉欲の愛を罪深いと意識しがちなのだ。これほど感じやすく魅惑的な体を、罪深いものと恥じているのだ。
「子供らが寝静まった頃、君のベッドに潜り込むつもりだ。そのつもりでいてくれ」
夕食はアネッテと食べるべきだろう。今後の話もあるし。だがそんな話は、今ここでしなくても良いと感じた。セルマと二人きりの時は「セルマだけのもの」で居てやりたくなった。
午後の執務と御前会議、この日は僕の摂政職への復帰が皆に承認された。
「自分で皇帝としての執務すべてこなすのはそろそろ限界だぞ。お前が摂政職に戻ってくれないと死んでしまいそうだ」
父上がそのようにおっしゃると、爺さんたちが頷いた。
「我々も同感です。そろそろ殿下に御前会議に近く加えるべき若手を御推薦頂くべきでしょうなあ」
「諸君も優秀だと目をかけている若手がいるだろう。僕が知らないものもいるだろうから、教えてくれると助かる」
僕の問いかけに、幾人かの名前が出たがすべてチェック済みのメンバーだった。

「皆が筆頭に挙げたイヴァルを、さっそく候補生扱いで次回から参加させよう」

僕の守り役として政界に繋がりを持つようになったイヴァルだが、今はラナース子爵の位も持ち、功績もそれなりに有って、御前会議のメンバー全員が相応しい人物として名を上げた。イヴァルが御前会議の正式メンバーとなれば、すぐに爵位も引き上げられるだろう。

「ラナース子爵と言えば、義理の姉にあたるドランメン伯爵夫人はミズホで殿下のお子をお産みになったそうですな」

その話を皆が始めた所、父上がこうおっしゃった。

「ミズホでの王族としての身分が既に保証されているのは結構な事ではあるが、帝国の皇太子にして摂政たるグスタフの子としての身分称号も当然必要だ」

ミズホへの答礼使に皇帝の意志を伝えさせるべきだと決定した。亮仁にはしかるべき帝国の爵位と称号が与えられるだろう。

御前会議の後は父上のお話を伺う。僕はモナの話をした。父上が一番知りたい話だからだ。

「そうか。狼の兄弟たちと行動を共にしているのか。だがどうやれば連絡が取れようかな」

「ええ。夜空にはためく光に『ミナの娘モナ、グスタフはここだ』と三度叫べばいつでも会いに来てくれるそうです」

「ミナはもう亡くなっているのだな」

「ええ。そもそも人との間に子をもうけるのは、一種の死支度のようなものらしいです」

「人との間の子を産んで十五年程で亡くなるのか……そうか……お前のような出来の良い皇太子では無かったからな。そのような秘密、これまで何一つ知らなんだ」

父上の微笑みは、ひどく寂しげだった。

「人の命は、普通は限り有るものだからな、やはり悔いの残らぬよ

うにしたいものよ。お前の寿命は普通の人間とは違うようだが、周りの人間、たとえばアネッテもそうだ。寿命は限られている。少しでも長くと願うのもわからぬでは無いが、思うようにさせてやるという選択肢も有ると思うがな」

「父上……」

「お前の留守中、アネッテの乳母より訴えが有ってな。侍医の見立てでは、以前よりあれの体がずいぶん回復したそうな。乳母が言うにはアネッテがひどく子を欲しがっておるらしい。グスタフ、わざわざ避妊までしておったのか」

「はい。出産は難しいと言う診断結果でしたので。それに、以前の状況ではアネッテに子が産めないと知れれば、あれに冷たかった祖国のワッデンに送り返せ、と御前会議で言われかねない状況でした」

「今はすっかり政治的な情勢は落ち着いた。乳母は、子を産むにしろ諦めさせるにしろ、アネッテ自身に選ばせてやって欲しい、そう訴えてな。夫たるグスタフが戻るまで、結論を待つように申し聞かせたのだ」

そこで、その場に乳母を呼び出して、父上と共に考えを聞いた。

夕食をアネッテと共にしながら、改めて侍医の診察を受けて僕とアネッテで話し合って結論を出そうと言う事に決めた。だが、僕が避妊までしていた事は、打ち明けなかったが。アネッテは僕と夜を過ごしたいと感じていたのはわかっていたが、解禁は侍医の明日の診察結果を聞いてからが良いだろうし、セルマとの約束も有る。気の毒には思ったがアネッテの部屋を出て、自室に戻った。

自室で鏡を覗き込むと、宮様と語り合うユリエの姿が見えた。こうして見ると二人は姉妹に見える。僕がいなくてもそれなりに充実した毎日を送るだけの才覚も力も、ユリエには十分備わっているのだ。だが、それでも以前垣間見たように、時には僕を思って泣くのだと思いたい。

ユリエに言われた様に、アネッテとセルマの気持を落ち着けなければいけないだろう。特にアネッテの方は子をどうするのか、はっきり決めなくてはならないし。賢いユリエは恐らく一番良い時期に自分の判断で僕の所に戻る。そう信じている。

ともかく風呂に入り気分を入れ替えた。そして限られた人数の護衛と共に「こっそり」セルマのもとに向かった。

ベッドにそっと滑り込んだ僕を、セルマは眠らずに待っていた。無言のまま僕に体を摺り寄せる。

「待たせた？」

「時間は大して長くないのでしょう。でも、いつお出でになるか、そればかり考えていました」

セルマらしい。僕が長く待たせたと言わないし、自分が僕を思って待っていたという気持ちもちゃんと伝えている。

「待っていてくれたのなら、こうしてやって来た甲斐も有るね」

「お寒くはございませんか？」

「セルマが温めてくれるから、気にならない」

「まあ、殿下」

「僕の名前を呼んで……セルマ、ねえ」

「グスタフ様」

セルマに名を呼ばれると、体温が一気に上昇した。互いの手を繋ぎ口づける。初めて結ばれた夜の事を思い出す。あの夜は緊張して石のように固く感じられた体が、今はしっとりと潤っている。

「セルマ、もう一人子を産むかい？」

ふと、そんな言葉が口をついて出た。セルマが息子を産むのも悪くない。ふと、そう思ったのだ。

「ええ。私にもまた子をお授け下さい」

「フフフ、まるで僕が子宝をもたらす聖人様か何かみたな言い方だね」

「だって、その通りですもの。どんな聖人様より私には大切な方で

すから」
「随分と、不埒でふしだらな聖人様だな」
「でも、一番大切な方ですから」

訥々とした、だが、熱を帯びたセルマの言葉は僕の気持ちを緩やかに熱くした。その夜、僕は間違いなく息子が出来たような気がした。気がしただけだが。だが、夢の中であのヤタガラスが「息子ができた」と請け合ったような気がした。

僕の家族の問題・2

「やはり微妙なのか？　子を産めるかどうかは」
「はあ。母子ともにお元気で無事の御出産がかなり難しいのは事実です」
（絶対無理と言う訳でも無いだろうが、無謀な賭けのようなものだな）というこの侍医の思い浮かべた言葉を僕は読み取った。
「ですが、私が子を産まなかったとして、一体何年ほど生きるのでしょうか？」
アネッテは、自分の寿命は通常の人間より相当短いと予想しているようだ。
「それは……神の領域でございまして、我々医師などにはわかりかねます。まあ、この国の人間の寿命は大方六十歳かそこらでございましょう。長命な方で八十歳、九十歳という場合もございますが、珍しいです」

そう答えながら、侍医が思い浮かべたアネッテの寿命は（四十歳まで持つだろうか）と言うものだった。

「殿下は特別な方で、不老不死であられるのではないかと伺いました。ですが、私は人並みの寿命が残されているかどうかも怪しい身の上です。それならば、たとえ予定より十年、二十年生きたとしても、殿下の長い御一生からすれば私が御一緒できる時間など、瞬きする間のような短い儚い物でしょう。でも子を産み、その子がまた孫を増やし、となれば、ゆかりの血筋の者が百年後も二百年後も残るかも知れません」
「僕が不老不死なんて、胡散臭い話だよ」

（だが皇太子殿下が格別に御壮健であられるのは、間違いのない話

だ。伝説の開祖様と御姿も似ておられる様だから、不老不死という噂も根拠のない話ではなさそうだがな）などと考えながら、侍医は僕を見ている。どうやら、いかなる病の兆候も僕には見いだせないらしい。人以外の特殊な力を持ち合わせた連中、モナとか白い大鳥とか、ヤタガラスとかは、皆僕を不老不死の存在とみなしていた。そして、まだ未熟な存在だとも。あの僕をこのルンドという世界に転生させた爺さんは、はっきり不老不死と言っていた。だが、僕には実感がまるで無いが。

侍医を下がらせた後、僕とアネッテは長椅子に身を寄せ合って座った。

「僕はアネッテを、無謀な賭けで失いたくはない」

「ですが、女の体は子を産める時期というのが限られているのでございましょう？」

「それはそうだ。月の物が有るうちだな」

「あの廃屋のような離宮から拾い上げていただいてからこれまで、殿下のおかげをもちましてここまで生きてまいりました」

「互いが六歳の歳に、アネッテを僕の正妃にと決められたのは父上だ」

僕の言葉にアネッテは傷ついたらしい。

「た、確かに……私は……」

体の良い人質、という言葉をアネッテは飲み込んだのだ。当時の父上や老臣たちの認識ではアネッテは紛れもなく『人質』だったが、僕がアネッテを正妃として処遇し、毎日朝食を共にする事でその認識を改めさせることができたと思う。それに、ワッデンとの戦は当分無いだろう。アネッテの二人の兄はワッデンの王位をめぐる争いに必死で、戦をする余裕など無いのだから。いや、兄たちはそれぞれ体も弱く気力も乏しいらしいから、本人たちより取り巻きの家臣

たちが激しい派閥抗争を繰り返している、そう見るべきか。

「アネッテが僕の側で健やかに穏やかに暮らしてくれる、そんな日々が長く続くこと自体に大きな意味が有ると僕は思っているのだ。無理に子を作る必要など無い」

「でも、伯爵夫人も、セルマ殿も……」

「アネッテは正妃だ。僕が皇帝になれば、皇后になる人なのだよ」

アネッテは大きなため息をついた。それから思いがけない事を言った。

「殿下の御不在中に、ウルリカ様が小さな姫君を連れておいでになりました。まだ、本当に赤ちゃんですが。アンニカ姫とおっしゃるそうです。銀色の髪と紫の瞳のとても愛らしい御子でした。何でも、殿下の姉上にあたるモナ様という方が『グスタフの側で生きるべき子だ』とおっしゃったそうで……」

アネッテの意識を探ると、そのアンニカという赤ん坊を自分が手元に引き取って世話をしたい。そんな事を考えている。本当は自分で僕の子供を産みたいが、僕が承知しないと思ったようだ。アネッテの寂しさは紛れるかもしれないが、ウルリカはどう考えているのだろう？

「モナが？　で、そのアンニカと言う子とウルリカはどこに？」

「大宰相の邸にまだ滞在中かもしれません」

スコウホイの厳しい冬を避けて、初めてのお産のために里がえりしていたらしい。クヌートからそんな話は全然聞いていなかったが。いや、前回会った時はまだ、子が出来たかどうかもわからなかった頃であったのかもしれない。ともかくもスコウホイ公爵家に初めて

子が生まれた、そういう訳だ。

僕は自分の部屋に戻って、ヤタガラスから貰った鏡でモナにためしに呼びかけてみた。するとモナがちゃんと鏡に映ったではないか。真っ白い狼の姿だ。兄弟と狩りの最中らしい。獲物を待ち伏せしているようだ。

（グスタフよ。その丸い光る板は何だ？）
（モナ、僕の姿が見えるの？）
（普通に見るのとは違う。頭の中で思い浮かべる状態だ。何というかこの姿でも話しやすいぞ）
（ミズホの黒い神の鳥が別れる時にくれたものだよ。ねえ、アンニカという赤ん坊は、僕の手元で育てるべきなの？）
（人の世の細かい事はしらんが、グスタフと相性が良い魂だ。今、ルンドにいる人の中では、一番合う。育ったら嫁というのかな、つがいにしろ）
（そ、そうなのか？　だが、もうすでに嫁は居るぞ）
（ユリエか。あの魂は善いな。つがいなのに姉のようだ）
（ユリエは大切だが、嫁というか妃がいるんだ。アネッテという）
（アネッテ？　ああ、別のつがいか。ふううん、なる程な。寿命が……短そうだ。うん。短い）
（アネッテが僕の子を産みたがって居るけれど、産んだら死ぬかもしれないと医者が言うんだ）
（産ませてやれ。どのみち長生きできん）
（モナ！）
（短い寿命は伸ばせんが、子が無事に産まれるようにする加護なら与えてやれる。産めばその子はアネッテというその嫁のゆかりの地を、良く治めるだろう）
（僕とアネッテの子がワッデンを治めるようになるのか？）
（場所は知らんが、そうなる）

獲物が来た！　とモナの意識というか言葉が最後で、画像は途切れた。

そこで、今度はヤタガラスに呼びかけた。するとモナと殆ど同じことを言う。

「その銀色の髪の赤子、妃の養い子とせよ。互いにとり良い縁だ。妃の寿命は子を産んでも生まなくても短い。願いをかなえてやれ。我も子が無事に産まれるように加護を与えることは出来る。だが、妃の寿命は伸ばせん。幼い時に強烈な怨念に纏いつかれて、寿命を食いつぶされたのだ。食いつぶされた分を補うのは我程度の力では無理だ」

「強烈な怨念？」

「妃の先祖が背負いこんだものだ。ずっとその血縁にとりついている。だが妃の背負った悪縁自体はお前と出会って払われた。妃とお前の子は怨念を寄せ付けん」

「妃の、アネッテの産む子は男か？」

「ああ、息子だ。寿命は普通だが、子孫は栄える」

「アネッテが子を産まなければ、どうなる？」

「お前自身が戦をする事になる。あまたの人が死ぬ」

相手がヤタガラスだと鏡に向かってミズホの言葉で語りかける。誰もいない部屋で鏡を使い、来客でもない限り侍従にも出入りをさせない。だが、このときは本当に客が来た。それも一番会いたかった相手だ。

「殿下！　御無事のお帰り、おめでとうございました」

領地からわざわざ駆けつけてきてくれたと言うスコウホイ公爵・クヌートだった。

「ああ、よかった。実は頼みが有るのだ」

クヌート自身がモナから『言付け』を貰ったのは、里帰り出産のウルリカがアンニカを産んですぐの事らしい。ラナの近海で僕ら四人にしびれ薬を仕込んだらしい灰色の髪のエギルという少年を、無事に捕まえたのだと言う。ちなみにミッケリからラナまで僕らを運んでくれたハルドル船長には、無事に褒美の金を渡せたらしい。その一連の処置のためにラナまでクヌートが出かけた際に、モナと遭遇したという。

「エギルという少年は小物でしょうが自分で取り調べるより、殿下に御引渡しした方が話が早そうだと思い至りまして」

クヌートは僕の特殊能力をまんざら知らないでもない。何しろ北の塔にかつて収監されていたのだから。

早速僕も立ち会ってエギルの取り調べを始めた。確かにエギルは手先に過ぎなかったが、彼の所属していた違法薬物を扱う密輸犯のグループに関して、興味深い事が幾つかはっきりしてきた。

「それにしても殿下、ミズホでもご活躍でしたか。違法薬物の取引グループもミズホのルートを分断されて、活動資金が滞り、帝国から一時撤退して主な商売はワッデンでというのですから。それにしても……先程おっしゃっていた『頼み』とは？」

エギルたち下っ端は仕事が無くなり、ミッケリとミズホのルートが復活するか、ワッデンでの売り上げが大きく伸びるかするまで、故郷に引っ込んで待つように命じられたようなのだ。

「その件だが、一緒に食事をしながら話を聞いてもらおうかな。調べもひと段落ついた事だから」

僕はクヌートに、秘密にしておいてほしいと念押ししてから、ア

ネッテの事情とモナやヤタガラスに相談した結果について教えた。

「そのような手段でモナ様と意志疎通が可能なのですか。なるほど。アンニカを殿下の所におあづけしろとはモナ様に伺っていましたが、嫁ですか。ああ、殿下の御寿命が非常に長い、あるいは不老不死であられるなら、そうした措置も必要ですかな」

「初めての子なのに、済まないね」

「モナ様がおっしゃるには、里帰り出産は、土地との縁を弱め、祖霊の祝福を受けにくくするとか。アンニカはたまたま殿下との相性が良いので、お手元にお引き取り頂ければ健やかに育つが、そうでなければ病んで幼いうちに亡くなるとの事でした。我々夫婦には更に息子と娘が一人づつ授かるそうです。そしてお産はスコウホイ領内で行えとも言われました。我々夫婦は祖霊との縁を殿下につないでいただいたおかげで、円満に健康に暮らせるらしいです」

もう少し詳しい話を聞きたかったので、食事の後、クヌートを同席させて再び鏡を使ってモナとコンタクトを取った。今度は人型になっていたし、クヌートも居るので言葉で語りかけた。

「クヌートはアンニカを僕に預けるつもりみたいだ。そうしないと病んで死ぬとは、なぜなのだ?」

「クヌートと嫁はスコウホイの土地の祖霊に元々好まれている者同士だが、より強く力ある神霊に霊は従う。力あるグスタフ自身が念を込めてクヌートと嫁の縁結びをしたから、夫婦仲はなおの事円満なのだ。嫁はもともとは、グスタフのつがいになるはずであったのだろう?」

「あー、まあ。そういう話ではあったが」

「だから、祖霊は夫婦の最初の子はグスタフの物だと決めたのだろう。どのみちクヌートの子供は、スコウホイを長く離れ無い方が無事だ。だが、グスタフの側で生きるなら、故郷にいるよりも更に強

く守られる。どこまで守られるかは、グスタフ次第だが」
「僕次第？」
「ああ。グスタフが愛しいと思えば思う程、守りの力は高まる」
「モナ様、アンニカは幸せになりますか？」
「おう、クヌートか。グスタフ次第だな。ともかくアネッテと言うグスタフの嫁との相性は良いから、預けろ。早い方が良い。クヌートの嫁の実家というのか？　気が澱んでいて良くない場所だ」
「なぜ、気が澱むのだ？」
「嫁の親、灰色の髪の父親の所為だが……むう。人型で居るのはそろそろ無理だ。また、な！」

大宰相に何か問題が有る。そう、モナは言ったのだ。
「大宰相に、何の問題が有るのでしょうな？」
話を聞いたクヌートも、心配そうだ。ヤタガラスを呼んでみたが、今度は眠っていた。

クヌートは『早い方が良い』というモナの言葉を気にした。僕も気になったので、翌日から取り急ぎアンニカをアネッテの住まいに引き取るべく、手配させた。だが、アンニカが将来の僕の妻となる可能性については、触れないことにした。

「それにしても、スコウホイ公爵夫妻がこの子を私に委ねて下さるなんて驚きましたけど、嬉しかったです」
「あの夫婦はモナの不思議な力をよく承知しているからな」
「モナ様やヤタガラス様に、私もお会いしたいものです」

そこで、鏡で呼びかけたが、モナは映らなかった。ヤタガラスは「その妃の気はどうも馴染まん。子を産まねば無理だ。悪く思うなよグスタフ」と言い置いて、映らなくなった。
ヤタガラスの言葉はミズホのものなので、アネッテには意味は分

からなかったはずだ。

「あのう……お二方ともどうされたのでしょう？」

「気まぐれな連中だから、気にするな」

だが、アネッテは当然のことながら、自分が話をする事を拒まれたと感じたようだ。実際拒まれたのだろうが、アネッテの人柄の所為では無いだろう。ヤタガラスの言うように、気が馴染まないのだ。以前話に出た強力な怨念と関わりが有るのだろうと、僕は感じた。

僕の家族の問題・3

僕はヨハンと昼食を共にした。二人きりで話す必要が有ると感じたのだ。大宰相の跡取りでウルリカとは腹違いの、僕とは父親違いの弟であるヨハンなら、色々気づく事も多いだろうし、あの長い旅の途中、スコウホイで別れて以降の事も聞いておきたかった。

「気が澱んで良くない。灰色の髪の父親の所為、ですか。モナ様のおっしゃる事に心当たりが有ります。父はあの腐りきった教会の連中に良いように利用されているのです。恐れながら、それは皇后でもある母上の所為なのですが……」

ヨハンが言うには、母上はいまだに神聖教会の坊主連中が悪行を働くとは信じないらしい。ヨハンが戻ってからでも相当の金額の寄付をしたそうだ。息子の災難を悪い夢か何かだと思い込んでいるようだと言う。現実を見ようとしないそうだ。困った事にその母上自身より、同居人で今や実質的な『夫』である大宰相の妄信ぶりは、息子のヨハンから見て耐え難いらしい。神聖教会の主流派であるネスの子分どもに良いように利用されているのに、それが帝国と教会大本山との有益な関係に繋がると思い込んでいるようだ。

その思い込みぶりが、ヨハンからすると常軌を逸していると感じられると言う。

「思い込みなんでしょうか？　偏った教育の成果でしょうか？　どうにかしないと帝国全体に悪い影響が及ぶと心配しておりました。兄上が御無事でお戻りになって、本当に良かったです。あの父の妄信をどうにかしてやってください」

教会は大きな組織なので、多彩な人材がおり、グラーン侯爵夫人

が親しい修道女などは貧しい庶民のための医療奉仕や教育のために積極的な活動を続けている。また山奥や洞窟などに引きこもり、厳しい瞑想生活を送るグループも有る。

「よりによって腐りきったネス派と親しくしなくても良いのに、困ったものです」

あの腐りきった破戒坊主のネスは今の所は大聖なのだから、残念ながら教会の主流派と言う訳なのだ。スコウホイで始まったような『新たな教会』を設立しようという動きも、幾つかの国や地域で同時並行的に興ってはいるが、いずれも一地方の弱小教団で、資金も人員も桁違いに豊富な神聖教会大本山には、全く太刀打ちできない。

僕は考えあぐねてヨハンの目の前で鏡を使い、モナを呼び出してみた。人型だったが、顔を顰めていた。

「そのお前の弟は、すぐに住まいを移した方が良い。穢れてしまうぞ。父親も母親もひどく気が澱んでいる。うっ、これ以上話が出来ん」

どうやら、僕が思った以上に事態は深刻なようだった。

僕は御前会議の後、大宰相に話をした。本人の希望も有って、ヨハンを僕の住まいに引き取りたいと申し出たのだ。

「それは、また、なぜですか？」

「ヨハンにとって、ソフス・ネスは思い出したくもないおぞましい存在です。それを母上は理解せず、大宰相も母上にならう。それではヨハンは安らげないですから」

「殿下、そのう……ヨハンはまことに猊下の寵童だったので？」

「自分の意志に反して、そういう立場に立たされたのです。僕自身、

ヨハンと同様の被害に遭った犠牲者を多数、大本山で見ました。ネスを大聖猊下などと言うが、先代を毒殺し悪辣な手段で位を手に入れた犯罪者、吐き気を催す破戒坊主で、汚らわしい存在なのだと理解して頂きたい」

「で、殿下、お言葉が過ぎますぞ」

「なぜです？　僕はネスのあの穢れきった魂の波動だけで、吐き気を催しました。ヨハンはまともな神経の持ち主だから、さぞ苦しかったでしょう。母上は……まあ、ああいう見識の無い、ものの見えない所がお有りの方だか、賢明な大宰相までが右に倣う事は無いでしょうに」

僕は大宰相の瞳の感じが、何処かおかしいと感じた。いや、操られているような……真っ黒い気配が胸元から感じられる。メダル？　随分と禍々しい気配だ。僕は無言でそのメダルらしきものを毟り取り、靴のかかとで踏みつけて砕いた。

「な、何をなさいます！」

「何だ、この真黒な気配の塊は」

「ネス猊下から賜ったメダルですぞ」

「そんな穢れた物は、捨てろ！」

僕が初めて見せた乱暴な態度に、大宰相は驚いている。僕はミズホの言葉で叫び正三郎を呼んだ。そして、大宰相の服を脱がせて、風呂に入れて洗うように言いつける。正三郎だけでは難しそうなので、僕のもとに正三郎と共に残ることを志望したミズホの侍をさらに二人呼び寄せ、手伝わせる。

「この方を、風呂で清めればよろしいので？」

「そうだ。おかしな瘴気を纏っているからすっかり浄めるのだ」

更に侍従に命じて、大宰相に合いそうな大きさの衣服を大至急父上の所から頂いてくるように言いつける。僕の服では大宰相の体には幅が恐らく足りない。父上には取り急ぎ簡単な手紙を書いて、ゆったりめの服を頂くようにお願いする。父上は「後から何がどうなったのか」僕自身が説明することを条件に、御自分が微行の際に使われるものらしい服を下さった。皇帝の服よりははるかに質素だが、一応貴族には見える。

大宰相は言葉の通じない男三人に、風呂場に突っ込まれ、あっけにとられていた様だが、途中からは抵抗を止めたそうだ。

「よしよし、服は自分で着るだろう」

僕の出してやった服を、自分で着た大宰相は、訳が分からないと言う表情だった。

「殿下、なぜミズホの者たちにこのような事をお命じになったので？」

「ネスの影響がいささかも及んでいない人間に、あなたを洗わせた方が効果が高いからです。よかった。大分マシになったようだ」

「マシ、とは？」

「ネスの所から貰ったとかいう禍々しいメダルの帯びていた邪悪な気配が、かなり薄れました。あれは一体何なんですか？　ひょっとして母上も似たような物をお持ちなのかな？」

大宰相の記憶は混濁している。かつての切れ者ぶりは、どうしてしまったのだろう。メダルを受け取った時の記憶が、ちゃんと残ってはいないようだ。単に『大聖猊下より賜ったメダル』としか認識していなかった。

「皇后陛下のメダルまで、あのように粉砕なさるので？」

「そうしなければ、ヨハンは心が安らがないですし、あなたの孫のアンニカにも悪影響が及ぶ。危険です」

「危険？　大聖猊下からの頂きものが？」

「だから、その大聖の位に居座っているネスは、人さらいで毒殺犯で悪辣な破戒坊主なのですよ」

大宰相は僕の出した茶を飲みながら、ポツリポツリと語りはじめた。母上の希望で、大宰相の邸に小さな礼拝堂を設けたのだそうだ。時期的には僕の不在中にあたるらしい。その礼拝堂に言わば専属の形で毎日顔を出す司祭がいて、そいつがネスの腹心の一人らしい。その腐れ坊主の説教を母上も大宰相も『ありがたく』聞いているようだ。困ったものだ。

「洗礼をアンニカに授ける儀式をする予定でしたが、ウルリカが『父親であるクヌート様に無断でそんな事は出来ません』と強く主張したので、結局行いませんでした」

「良かった。行わなくて。無垢な赤子に禍々しい穢れた呪いをかけられる所でした」

「そうなのですか？」

「あなたの邸の礼拝堂も問題だが、一番の問題は母上だな。多少手荒な手を使うかもしれないが、結局は皆のためになるのです。僕のすることに、当分口を出さないで下さいよ」

僕は正三郎たちに言いつけ、大宰相を一歩も部屋から出さないようにした。まあ、監禁状態と言って良い。僕は急ぎ父上のもとに向かい、汚染の源であるネスの子分の捕縛と、母上の監禁を許可してもらう。

「ソフィーエも自慢の息子のお前に監禁されるなどとは、思ってもみなかっただろうよ」

父上は悪戯をする子供のような楽しそうな表情を浮かべた。先ほど頂いた服は大宰相に着せたと、事情を説明すると、ますます面白そうになさった。

ネスの子分は近衛たちに連行させ北の塔に放り込んだが、問題は

母上だ。僕自身が母上に面会してあて身技で気絶させてから、あの胸糞悪いメダルをしていたので、取り上げて砕いた。それから大きな布袋をかぶせ、密かに父上のお住まいの一角に運ばせた。かつて訳ありの女性たちを人知れず連れ込んだりするのに、皇帝が使ってきた場所だと言う。皇帝が秘密の愛人と楽しむ隠れ家の役目も果たしてようだ。

「ククク、歴代皇后で、あの場所に連れ込まれた者など居るまい」

父上は久しぶりに夫の権利を主張してみようか、という御気分らしい。もうすっかり夫婦別れした状態だったわけだが、焼けぼっくいに火がつこうがどうなろうが僕はまるで構わない。ともかくも大宰相と居ると周囲を巻き込んで母上が暴走するので、食い止める必要が有った。

母上は大宰相の息子をヨハンの下にもう一人生んだのだったが、ふとした病で赤ん坊の内に亡くなってしまったのだ。その子供の死が余計に教会への妄信を助長する引き金になったらしい。子供の死を嘆く母上に大宰相も強い事を言えず、ズルズル引きずられる形でネスの企みに嵌ってしまったのだ。

「ふうむ。腹を痛めた子の死がなあ。ソフィーエも殊勝な所が有るではないか。やった事は愚かだが」

「できれば母上のお気持ちが荒れることなく、しばらくは大宰相と顔を合わさないでいて下さるとありがたいのです」

「なら、腕によりをかけてお前の母親の機嫌取りをしてやろう。ククク、エリクに恨まれるかな？」

「本来皇后は皇帝の正妻なのですから、父上が母上と仲睦まじくなられたとしても、愛人に過ぎない大宰相が恨むのは筋違いかと」

「おやおや、グスタフ、本気か？　ククク」

大宰相に恨まれるとは僕も思ったが、子としての感情論は抜きにしても、しばらくは母上に会わないでいてほしいのだった。大宰相は惚れた弱みか、身分上の引け目の所為か、暴走しがちな母上を上手く制御できないのだ。その点、父上は手慣れたものだ。女に対する経験値の違いだけではないと思う。やはり本来の夫として妻の愚行を戒める力は十分にお持ちなのだ。

大宰相の邸にいた、ネス派の影響を強く受けている使用人は皆クビにした。代わりにウルリカの口利きで、スコウホイ出身者をまとめて雇い入れさせた。ウルリカは大宰相の邸を出て、夫のクヌートの邸に居る。アネッテの所でアンニカの養育の件で相談する際に、ついでに大宰相の話もするのだ。

「大宰相も娘の君の口利きなら、不承不承うけいれるかな」
「父に文句は言わせません。ネスの勢力を邸内から一掃しないとヨハンが困るんですもの」

僕の見るところ、ウルリカは立派な貴婦人になったと感じる。かつては依存していた父である大宰相の事も客観的に見る事が出来るし、実務も危なげなくこなせる。実務能力の高さは大宰相譲りなのだろうが。

使用人の入れ替えが済んだ時点で、大宰相を自由にした。軟禁状態の間、表向きは『病で御前会議にも出席できない』という事になっていたのだ。問題の礼拝堂はがらんどうだし、母上は父上のお手元だ。

「殿下、お怨み申し上げますぞ」
「なぜ？　母上の事なら詫びる必要は無いと思っているよ。あなたが母上の暴走を押さえられなかったのが、今回の一件の大きな原因だからな」

「……ですが」
「ヨハンとウルリカは、僕に全面的に協力してくれた。というのも、それが結局父であるあなたのためでもあるからだ。あのままなら、あなたはネスに良いように使われていただろう」
大宰相も理性では事態を理解できたのだ。あのおかしなメダルの呪縛から完全に開放もされたし。だが、『妻』の母上を元の夫の方に取り返されてしまったのは、どうにも辛いようだ。
「別に、母上がメダルの呪縛から完全に解放された後で、あなたと母上がどうなろうと、僕の関知するところではないのですがね」
「殿下はやはり皇后陛下は皇帝陛下と共にあるべきと、お考えでしょうね」
「僕の立場はそうですが。まあ、ヨハンという息子もいるのですから……ね」
大宰相はこの件以来、ますます老人臭くなった。表情も暗い。何やら歩くときの背中まで丸くなったような気がする。逆に息子で僕の弟でもあるヨハンは、無事に父親の邸に戻り、明るい表情で元気に過ごすことが出来ているようだ。
ヨハンのすぐ上の兄で、僕と父も母も同じ弟のロルフは、母上の手元を完全に離れて独立した。その事もヨハンの気分を楽にしたのだろう。
母親べったりのロルフより、苦難をともした父親違いの弟・ヨハンの方が、僕にとって本当の弟という気がする。
「あなたの跡取りは将来有望だと思いますよ」
僕がヨハンを褒めると大宰相は素直に嬉しいらしいが、母上の事を思い返すと恨みがましい気分になるらしい。
それにしてもさっぱりわからないのは父上と母上の関係だ。

「なかなかに新鮮」だと父上は楽しそうだし、母上は相変わらずお綺麗だ。女は魔物なのかもしれないと自分の母親を見て実感すると言うのは、息子としては複雑な感慨があるが。

「アネッテはどんな皇后になるんだろうねえ」

「私は公式愛人なんて作りません」

アンニカを抱っこしながら、アネッテはそんな事を言うのだった。

「別に帝国の法では、皇后の公式愛人は認められている」

アネッテはハッとしてから、気まずそうな表情になった。母上を攻撃する意図は無かったのだろう。

「ああ……その……殿下の事だけを想っていたいのです」

どうやら、それも本当らしい。僕は夫としてどうこたえるべきか、まだ結論を出していなかった。

僕の家族の問題・3（後書き）

ロルフの名前間違えてました。

僕の家族の問題・4

「甘く罪深い生活などと言うが、糞坊主どもよりよほどまともな生活だと思わんか？」

父上は御機嫌が良い。母上とよりを戻したおかげだろう。何やら近頃は新婚時代のやり直しのような雰囲気すら漂っている。母上がネス派の連中と御自分から距離を取るようになったのはともかくも良かった。

一方で大宰相は引退したいと言い出した。僕は辞表を一旦預かる形にして、領地でゆっくり療養するように勧めた。母上の噂を身近で見聞きすること自体が、大宰相には辛いのだと思われたからだ。領地の館は庶子を二人産んだ女性が管理をしていると聞く。ウルリカに聞いた所では家庭的な穏やかな性格の女性らしい。

「摂政殿下はもはや大宰相の力を必要となさっておられない」

「大宰相は勢いが衰えたな。昨今はめっきり老け込んだ」

「まあ皇后陛下との御縁が切れたのが、よほど堪えたのだろうよ」

御前会議のメンバーたちの勝手な言い草だが、あながち的外れでも無い。ヨハンには大宰相の抜けた穴を早く補える人材に育ってほしいが、まだしばらくかかりそうだ。

ミズホの連中の大半は船で戻ることになった。正三郎と他五人ばかりが僕の住まいに滞在している。帝国の言葉や学問・技術を修め、将来はミズホに居る亮仁や碧子のために働き、帝国側との連絡業務なども行うようになるはずだ。僕はユリエと子供らに向けて長い手紙を書いた。ユリエには早く戻ってきてほしいが、以前言っていたようにある程度の時間が経たないと帰らないのだろう。

セルマは懐妊したが、注意深く隠している。アネッテを刺激したくないと言う僕の気持ちに配慮してくれたのだろう。せいぜい数か月しか隠せないだろうが。アネッテはアンニカを大切に扱い、自分の気持ちもおかげで多少は落ち着いたようだが、それでも自分自身の子を産みたいらしい。

「アンニカは可愛いですねえ。養い子でもこんなに可愛いのですから、血を分けた子ならどんなにかと、つい思ってしまいます」

「クヌートとウルリカからの預かり物なのだ。大切にせねばな。アンニカは本当に良い子だから可愛いのだよ。実の子でも反りが合わなかったり、思うに任せない事など、世の中に掃いて捨てるほどある。さほどこだわらなくても良いではないか」

「それはそうかも知れませんが……一人でもよいから、私も血を分けた子が欲しいとつい思ってしまいます。父君が殿下なのですから、きっと良い子でしょうし」

結局は僕はアネッテが子を産む事に同意した。というよりむしろ、アネッテが子を産まなければ『戦をする事になる。あまたの人が死ぬ』というヤタガラスの言葉が気になったせいだ。幾度聞きなおしても、ヤタガラスの予言は覆らなかったのだ。モナに聞き返しても、同じ答えが出た。

更には御前会議で、ワッデン国王もその弟も共に健康状態が不安だと言う話題が出るようにもなっていた。

「皇太子妃殿下はワッデンの王位継承権をお持ちですからな。兄上方にお子様はお出でにならんようですし、これは将来、ひょっとするとひょっといたしますぞ」

「妃殿下はお若いが御夫君のお力を借りれば、良き女王陛下ともなられましょう」

「さよう。我らが皇太子殿下なら定めし御立派な王配殿下となられ

ましょう」
「妃殿下が王子をお産みになれば、なお結構ですけどなあ」
「さよう。そうなればごく自然に、ワッデン王家の血筋は帝室と平和に和合を遂げることになるのですからな。連合王国、と言う事も夢では無くなります」
「古のワッデンの女王はグスタフ三世陛下の御即位前の御正妃でしたが、些細な事から離縁なさったと言われておりますな。ですが、ただいまの皇太子殿下御夫妻は御仲も睦まじい。楽しみになってきましたぞ」
父上もその様子を御覧になってこんな風におっしゃった。
「そろそろ潮時と言う事だろう。アネッテが子を欲しがっているのだから、願いをかなえてやれ。生まれる前から皆に期待され祝福された子なのだ。きっとお前にも助けになろう」
僕がアネッテの願いを受け入れると伝えると、アネッテは涙をこぼした。
「それほどに待ち遠しかったのかい？」
「ええ。でも、今は嬉しくてなりません」
「お産は女の戦ともいう。それだけ命がけと言う事なのだろう」
「覚悟はできております」
「僕は……アネッテが我慢強すぎるのが、むしろ心配なんだが……」
痛いとか苦しいとか辛いとか、アネッテはめったに口にしない。御立派だ、毅然としておいでだと褒める者もいたが、苦痛を訴えると、余計に虐待がひどくなった幼時の辛い経験が影を落としているのだろう。僕が直接口に出してその話題に触れた事は無い。だが、アネッテの脳裏に浮かぶ幼時体験は、悲惨だった。それらを読み解くにつれ、ワッデン王家に取りついた怨念のすさまじさに驚かされた。古い時代の恨みらしいが、幾人もの人間の恨みを吸い込んで肥

大化し、ワッデンの王城で生き続けているようだ。確かに、アネッテは僕の所に嫁いだお蔭で今現在どうにか無事なのだ。

そして、アネッテの願いどおり子供が出来た。だが、母体がどの程度持ちこたえるのか、心配でならなかった。

「お産は無事に済む」とモナもヤタガラスも請け合った。

そうなのだ。お産は無事に済むが……アネッテの寿命は短い。そう言う事だった。

そうこうするうちに、先に妊娠したセルマが健康な息子を産んだ。ミゲルと名付けた。セルマに取っては二人目の子供で、僕にとっては亮太・ルイサ・亮仁・碧子に次いで、四人目の子供と言う事になる。だが、僕はまだ一度も碧子の姿も見ていないのだ。元気に生まれたようだが……

ミゲルの誕生を知っても、自分も出産を控えているせいだろう。アネッテに焦りのような感情は今回は見られなかった。僕としては、やれやれだ。僕なりにアネッテの気持ちが穏やかであり続けるように、務めた。毎朝の朝食は欠かさなかったし、夕食も可能な限り共に食べた。その甲斐あって、無事に月が満ち、僕にとって初めての嫡子となるフレゼリク・レオポルドが元気に産まれたのだった。そして、入れ違いのように、アネッテの長兄であるワッデン国王が病死した。まだ産後の床上げも済まないうちの葬儀で有ったので、僕だけが出席した。

僕が葬儀に行くべきかどうかで、御前会議は揉めた。元首の葬儀は弔問外交などという言葉も有るように、重要な儀礼だ。宮中の老人たちの中には格下で近年は国威の振るわないワッデンに皇族、それも皇太子が行く必要は無いと言う者も多かった。

「礼を尽くせば、いささかぎくしゃくしていたワッデンとの関係改

善に大いに役立つと思われる」
僕の発言は、半数以上のメンバーの支持を得た。だが半数は格下云々にこだわっていた。結局は父上の「グスタフに任せる」の一言で、僕に一任となった。

僕は凄腕の供を二十名ほど揃えて、馬で一路ワッデンに急いだ。中には正三郎ほかミズホの者も混ざっている。彼らは誰もが帝国では知られていないタイプの武術の達人なのだ。
葬儀の二日前はユリエが領主代行を務めるドランメン伯爵家の城に一泊した。ユリエの嫁ぎ先だと思うと感無量だった。留守の間も、やり手の執事と僕が手助けのために遣わした代官が連携して、しっかり領地は運営されているように見えた。皆、ユリエを奥方様と呼んで敬っている。

「ラウル・ヤイレをそのうちここに来させなくてはならんな」
そんな話をすると、執事は喜んだ。そしてドランメン伯爵家と、メイドや奉公人の守護聖人である聖女エマ・ヤイレの関わりについて正確な事を教えてくれた。エマ・ヤイレが仕えた皇帝との間に密かに儲けた男子が、ドランメン伯爵家の初代だそうだ。ユリエが最も尊敬する人物の子孫の家に嫁入りしたのも、何かの因縁かもしれない。そんな気がした。

ドランメン伯爵領から河を渡ると、対岸はもうワッデン王国だ。亡くなった国王は在位年数も短く年齢も若く、さして知られていない人物であるせいも有って、外国からの賓客は国王の葬儀としては随分少なかった。僕の供ぞろえでは人数が少なすぎるかと、少し心配もしたが、他の国はせいぜい大使が十人以下の供ぞろえで来ているので、十分すぎるほどだ。
僕らの宿泊場所はワッデンの宮殿の一角にある迎賓館だった。す

ると葬儀に参列する大使たちが、皆、僕に挨拶にやってきた。

「高名な帝国の摂政殿下に拝謁の栄を賜り、まことに光栄でございます。この傾きかけた国の国葬など何ほどのことが有ろうかと、正直想うておりましたが、殿下の御正妃はこの国の王女であられましたな。先ごろは御無事に男子御出産と伺いました。このような折に何では御座いますが、おめでとうございます」

まあ、外交辞令込みでこんな具合の口上を述べるものが多かったが、中にはもっと突っ込んだ話を持ちかける国も有った。

「ミズホの王族の御一員となられたそうですな」

「極北の民が崇める白い狼とは深い因縁がお有りだそうですな」

そうした話の場合は肯定も否定もしないとか、内密に願いますとか、教会の手前あまり公にしたくないのですとか、適当に受け流し、細かい話はしなかった。

『傾きかけた国』というのが外交団の面々の一致した見解のようだが、ちょっと見ただけで街中にはストリートチルドレンにホームレスがどっさり、そんな感じだ。歴史のある国だけあって、それなりに由緒ありげな建物は多いが、商店の活気は乏しいし、ちょっと見た限り商品のバラエティーも乏しい。

正三郎たちが聞き込んできた所では、税の取り立てなども恣意的で出鱈目らしい。有力者の思いつきで急に課税対象が増えたり、税率が跳ね上がったりするらしいのだ。

「ワッデンの金貨は混ぜ物が多く、価値が乏しいようです。帝国の金貨・銀貨は皆喜んで受け取ります」

自国の通貨の信頼度が低い、そう言う事だ。他国で出稼ぎをして

いる家族の仕送りだけが頼り、そんな家族も多いらしい。
「ワッデンの女は乳母やメイドとして働く者が多いそうですな。そうした女たちは真面目にこつこつ働いて、国元に送金する様です。何やらそういう連中をまとめて手配する組合が有ると聞きました」
「男の出稼ぎはせいぜいが一時的な用心棒か工事などの手伝い程度ですが、女の出稼ぎは有力な貴族や富裕な商人の家庭で家族同然に信頼されているものも少なくないとか。容色を売りにした身売りとは違うので、誇りを持って真面目に働くようです」
そういえば、そうだ。ワッデン出身の乳母に育てられた帝国の貴族は多いようだし、黄金宮のメイドは幾つかの派閥に分かれるらしいが、ワッデン出身者の派閥は大きいはずだ。
「そうした女たちは聖女エマ・ヤイレの加護を信じており、かつてのエマの職場であった黄金宮はあこがれの職場だそうですぞ」
なるほど、それは知らなかった。ユリエがメイド達に非常に尊敬されているのは、その聖女の末裔と結婚した事も関係しているのかもしれない。
「様々な国に出稼ぎに行っている女たちのつながりを武器にして、先ほど話に出ました組合は相当な力を持っているようです」
「なまじの貴族などより、よほどワッデンの政にあたえる影響も強いと聞きました」

少々多目の酒代を持たせて、街中で情報を集めるように申し渡しておいたおかげで、面白い話を聞くことができた。僕らだけではなく、他の国の使節団も似たような事はやっている様子だが、僕の供は全員胆力が有り、気働きの出来る人物ばかりだ。情報の集め方も無理をしない範囲で、ちゃんと有益なものに着目してすくい上げてくる能力も高い。

「黄金宮でのメイドの生活環境や雇用条件を改善すると、かなりのワッデンの民を味方にできる訳か」

「おお、そうですな。そうなります」
「メイドや乳母の雇用条件を明確に法で定められるのも良いかもしれませんな」
「帝国での働き口は条件が良いとなれば、そうした女たちも多く集まり、帝国の評判も上がりましょう」
「そうだな。帰国したら、さっそく法制化に取り組むことにしよう」

それにしても、この国の男たちの目つきは何処か投げやりで、殺伐としている。街の商店などで働くのもほとんどが女だ。男たちは昼間からカード賭博などに入れ込んだり、物乞いをしたりするものが目に付いた。恐らく国内にまともな職場が無いせいだろう。

僕らが迎賓館に到着して三日目で、ようやく各国の使節団が揃い、葬儀となった。王宮内の斎場で行われた一連の儀式は、教会などで行う帝国での一般的な葬儀が豪華になっただけ、という印象しか受けなかったが、弔問客の席次は興味深かった。亡くなった国王の妹の夫である僕が一番格上の座席で有ったのは、帝国の大きさ・歴史から言っても当然だが、他の客の序列が面白い。第二席はミッケリであった。神聖教会の枢機卿より上の扱いと言う事は、今のワッデン王宮はソフス・ネスとは距離を置いている、そういう事だろうか？

そうした目で見てみると、はっきり『親ネス派』宣言をした国は、本来の序列より下に配置されているように見える。

「新国王は亡き国王よりさらにひ弱だと聞いておりましたが、その噂は正しそうですな」

葬儀の後、そんな噂話をする連中もいた。僕はワッデン側の監視が気になって否定も肯定もしなかったが、アネッテとよく似たその顔は確かに青白く、不健康だと言う印象を受けた。

迎賓館で帝国に戻る支度をはじめていると、ワッデンの新国王から「折り入って話がしたい」とのことで、夕食を共にすることにな

った。

「妹君やお生まれになったお子様の御様子など、伺わせていただきたいとの主の意向でございます」

使いの男は忠義な爺やという感じの白髪の老人で、印象は悪くない。邪な思念も感じられないので、招きに応じた。さて、何が飛び出すだろうか？

僕の家族の問題・5

「すると、その生まれたての姫は兄上である先の陛下のお子か、あなたの御子か判然としない、そういう事ですね」
「恥ずかしながら……そうなります」
アネッテに良く似た顔の新王は面目無さげにうつむいた。この顔を見ると他人とは思えない。まあ、義理の兄なわけではあるが。
「そしてその姫を僕の嫡子フレゼリク・レオポルドと娶わせたい、そういう事ですか？」
「はい」

僕は考え込んだ。別にこちらにとって悪い話ではない。当事者二人は赤ん坊同士だが同じ年なのだし。
新王が言うには、先の王つまり兄の正妃は夫からの暴力に悩まされており、庇ったことから思いがけぬことに自分と男女の仲になった。その後、彼女が懐妊し夫の死の直後に女児が生まれた。まだ名前も決まってないらしい。
それにしてもワッデンの王室は代々家庭内に深刻な問題が多いようだ。新王にはまだ妃も居ないのだから、子供が居てはまずい訳だ。

僕は自室であの鏡を取り出したが、モナは反応せず、ヤタガラスは建物から出て開けた場所でもう一度呼べと言う返事を寄越した。ヤタガラスが言うには、瘴気が酷いそうだ。
言われた様に城外に出た。城の裏手は巨大な河岸段丘が何段にも続いている。城は一番近い河の水面から二百メートルは持ち上がった位置になるだろうか。

「ここならどうだ、話が出来そうか？」
「ああ、月の光で随分ましになった。それにしてもあの城は酷い瘴

気だ。おい、グスタフ、お前の体からも妙な気配が僅かだがするぞ……穢れた水を使った物を飲み食いしたな」
「この国の王と先ほど一緒に食事をした」
「それがいかん」
「昨夜は、そこまでひどくなかったのか？」
「昨夜は庭で鏡を出したのだろう？　それに穢れた水の気配はお前の体からはしなかったぞ」
「王が使う水が、穢れているのだな？」
「そうだろうな」

その後モナも呼ぶと、今度は「臭いぞ」と不機嫌ながらも応答してくれた。狼の姿だった。

（変なものを食ったな。穢れた水を使い、邪な人間が用意したようだ。ううむ。王が使う水を清めろ。お前の息子がここに住む時に、苦労するからな）
（どうやって？）
（紋章入りの井戸のふたを開けて、朝日をあてるのだ。しばらくすると黒い塊が見いだせるだろう。それを掴むことが出来るのは、グスタフだけだ。他の者は魔力が強くて触れられまいよ）

僕は迎賓館に戻ると、あの忠義者の爺さんを呼んだ。

「僕の言う事を信じてくれるかな？」
「はい」
「突拍子もない事だと思うんだけど、それでも？」
「はい。陛下は幼いころの御苦労がたたって、おからだが弱っていたとはいえ、かなり回復されていたのですが、即位なさってから目に見えて体調を崩されておいでの様に感じます。毒味の者はおりますが、強い魔力を帯びた毒など思いもよりませんからなあ。なるほ

ど、王族の方専用の井戸ですか」

翌朝、爺さんの案内で問題の井戸に行った。王が居住する建物のすぐ外だ。ワッデン王家の紋章が彫刻された大理石の蓋を取ると大きな岩が見えた。その岩の割れ目から水が豊富に湧き出、そこから傾斜をつけた樋が伸びている。その先は王の食事を作る調理場と浴室、王族の衣類用の洗濯場に分かれているらしい。

蓋を取った水面に朝日を当てて、僕と爺やと僕の供の者たち五人ほどがじっと見つめていると、急に真っ黒い球体が見えてきた。

「で、殿下！」
「うむ。あれだなあ」

水面と地表の高低差は僕の身長程だろう。水面の縁の岩場に比較的簡単に降りられそうだ。それでも皆が心配するので、腰に命綱を取り付けて降りた。水面にもやっと浮かぶ小さなメロン程度の大きさの黒い球は、触れても重さも何も感じない。奇妙なヒンヤリした感覚が有るだけで、果たして掴む事ができたのかどうかも心許ない。だが、僕の手に乗せる事は出来た。

「縄を引いて、僕を引き上げてくれ」
僕が玉を抱えて井戸の外に出ると、皆は呻きだした。咳き込む者もいる。
「な、何でしょうか、この黒い物は」
「魔力を帯びた強い毒らしい。日の光で分解できるそうだ」

僕は一番日当たりの強い庭の通路の敷石に、球を置いた。すると……

ジュン！

一瞬大きな音と共に、煙が立ち上り、球が消えた。

「後はなるべくこの水に触れた可能性のあるものでも人でも、毎日朝日にあてると良いそうです。部屋にも出来る限り朝日を入れてください。それでこの宮殿の瘴気はかなり弱まるそうです」

爺やは米つきバッタのように幾度も礼をしたが、僕らは腹も減っていたし、挨拶もそこそこに、この宮殿の食事は物騒なので、街の料理屋で食べる事にした。

「殿下、この街で一番流行っている旅籠兼料理屋らしいです」

正三郎の案内でやってきた店は、旨そうな食べ物の匂いで満ちていた。

「おや、帝国の御家来衆じゃないですか。うちなんかで朝食を？」

「ああ、女将さん。訳有って、ここで食べさせてほしいんだ」

正三郎は金貨をそっと握らせた。こうした心づけも差し出すタイミングで受け取ったり拒否されたり色々だが、なかなかにさりげない。特別扱いなのだろう。ごった返す一階の席ではなく、二階の静かな小部屋に通された。

「いきなり押しかけてすまないね」

僕が言うと、白髪交じりの栗色の髪の小柄な女将は眉を持ち上げた。誰かに似た顔だ。誰だったろうか？

「もしや……」

（帝国の摂政殿下かい？　黄金を紡いだような髪に綺麗な碧の瞳、いい男だねえ。あの子が手紙で書いていたより、ずっといい男じゃないか）

「もしや、だけど、よろしく頼むよ」

僕がにこやかに言うと、女将さんは一礼した。

「ただの野菜スープとオムレツとパンですが、取り急ぎお持ちいたしましょう」
きびきびとした身のこなしで、下に降りて行った。

「女将の妹は黄金宮で働いているそうです。どなたかの乳母として御奉公に上がったそうで」
「ああ、そうか。アネッテの乳母だ」
「ほう、妃殿下の御乳母様ですか」
僕が妹にあたるらしいアネッテの乳母の話を振ると、昔の事を教えてくれた。僕がアネッテの夫だと察している様子だ。
「いやねえ、離宮とはいっても廃墟ですよ。屋根があるってだけのね。そんな所にお小さい方をほったらかしなんですよ。妹がどうにか食べ物を工面してお持ちしなければお命だってねえ……でもまあ、ドランメン伯爵家の方たちがお助け下さったとか」

あの乳母はアネッテの生母の実家の伝手でアネッテの世話をするようになったようだ。
「と言う事は、女将さんの実家はアネッテの母上とは縁が深いのかな？」
「さようでございます。殿下」
「ああ、良いよ、そんな風に言わなくても」
「はあ。ですが……」
このワッデンは帝国よりずっと身分の差別がきついようだ。
「大したことない腐れ男爵だの馬鹿子爵だのでも、ふんぞり返ってますから」
「ふーん。その割には王女のアネッテの扱いが酷かったんだな」
「ええ。王家の方々の御事情は複雑みたいでして……その、悪霊かなんかの祟りじゃないかって、噂は昔から有りますけどね」

あの玉は悪霊そのものでも無さそうだったが、禍々しいものでは

あった。女将が部屋を出た後、鏡を出してモナを呼んだ。今度は臭くなかったようで、出てきた。

「毒は取りのけたが、毒のもとがまだ居座っているな」
「毒のもと？」
「ああ。幽霊、亡霊、そんなものだ。グスタフに似ている存在の名残だな」
「僕に、似ている？」
「ああ。グスタフにしか姿は見えず、声も聞こえないだろうが、言う事を聞いてやれば、完全に無に帰す」

朝食を済ませて、再び井戸に戻ると、僕の目にぼんやりかすんだような少年の姿が浮かんで見えた。日本人だと思う。黒目黒髪で黒い詰襟の学生服姿だ。

「あんた、俺が見えるの？」
「ああ、見えるよ」
「わけわかんねえ場所に、召喚されちまったらしい。交通事故で死んだのかどうなのかわかんないうちに、ここに来てたんだ。この国を守れとか、訳がわかんねえや。ヤバそうだから部屋から抜け出したら、ここに嵌っちまってた。抜け出せないんだ」
「手を貸そう」
僕が手を差し伸べると、少年は井戸から出ることが出来た。
「うわあ、明るいじゃんか。今まで真っ暗だったんだぜ、うっとうしい。日本に早く戻りたい。たとえ幽霊でもさ」
「ああ、戻れるといいな」
「俺、水沢豊、あんた名前は？　あんたも元々は日本人だろう？」
「井沢亮太だよ」
「じゃあな、井沢さん、あんたも戻れると良いな」
その言葉を聞くと、見る間に少年の姿は陽の光に溶けるようにし

て消えた。

後から聞いたところでは、誰にも水沢豊なる少年の亡霊らしきものは見えなかったという。あの白髪の爺やに聞くと、ワッデン王家の始まりのころに、異界から神により召喚された者が居たらしい。だがその者は神の命に逆らい逃亡を図ったので、この地に魂ごと封印されたという。

「神、とは神聖教会が言う所の神か？」

「どうやら、違うようです。神聖教会が出来るよりも前の話のようです。まだ、ルンドに魔法やら魔術やらが御座いました古い古い時代だとか」

「ワッデンにはそんな術を使う者がいるのか？」

「もう、いないのではありますまいか？　教会の異端審問は、そりゃあ厳しい物でしたから」

古い古い時代とは言うが、学生服はさほど古い時代の服装ではない。地球とルンド、この世界と元居た世界の時間的なブレはどうなっているのだろう？　僕は水沢豊の魂を開放したことになるのだろうか？　モナは完全に無に帰す、と言ったが……まるで謎だ。

再び王と夕食を取った。今度はあの旅籠兼料理屋の二階で、ざっくばらんなものだ。井戸の一件を大いに感謝してくれたようだった。生気の無かった王の表情が明るくなったように感じる。

「王位についてから、ずっと頭痛が有り安眠できなかったのですが、先ほどからその頭痛が無くなりました」

「安眠できると良いですね」

僕は王にアネッテに手紙を書いてやってほしいと頼んだ。

「そうですね。互いにとって唯一の肉親ですから、手紙ぐらいは書

くべきでしょう」
　それからまだ名前の無い姫の名付け親になってほしいと頼まれた。王の中では、フレゼリク・レオポルドとの結婚は確定事項らしい。
「そうですね。サスキアとしましょう。このワッデンが栄えた時代の女王であったと思いますが」
「サスキア女王の王配はレオポルドという方でした」
「おや、そうでしたか」
「あまたの子に恵まれ、今現在のこの国の貴族の大半は何らかの形でお二人の血を受けているのです」

　悪くない名前を選んだようだ。温かい雰囲気の夕食後、王の私室に招かれ、僕と王はそこで赤ん坊のフレゼリク・レオポルドとサスキア姫の婚約を正式に決めた。同一の内容を記した公文書を作り、一部はワッデンに、もう一部は帝国に保存するのだ。双方の乳母や守り役同士の交流は僕の帰国後すぐにも開始し、成長の過程を見て幼いうちから本人同士の交流を心がけるようにする、という事になった。

　この交流が、僕の意図以上に良い成果を上げてくれる事になったのだが、その話はまた後日になるだろう。

僕の家族の問題・6

「どうかお戻りになる前にサスキア本人にお会い頂けませんか」

新王にお願い目線でそう申し込まれると、僕は断れなかった。うん。アネッテに顔が似すぎているからなあ。断ること自体に罪悪感を覚えてしまうのだ。僕の方が肉体年齢的には五歳程下なはずだが、庇護欲をそそる。ああ、別にびーえるの気は無いけどね、僕には。

サスキアは幸い王宮内に居なかった。先王の王妃というかサスキアの母親の実家はワッデン貴族の中では一番格が高い方の公爵家のようだ。その公爵家の邸の別棟に母子で住んでいる状態だと言う。お産が有って、夫の葬儀にも出られなかったわけだ。

母親の方は産後の状態が思わしくないらしい。僕も新王と共に見舞ったが、何というか生命力が乏しいと言う感じだ。サスキアには微妙に邪気がまとわりついているので、ミズホから持ち帰った小さな守り刀を枕元に置くようにしてもらった。僕の力が今より乏しかった時に、ヤタガラスがくれたものだ。想い出の品で、まあ記念品だが、今の僕には必要と言う訳でも無いので、息子の将来の嫁にやることにしたのだ。

「見たことも無い様な意匠の美しい刀ですね」

「ミズホの清らかな海で取れた貝を使った細工物です。細工自体にも浄化の力が有ります」

ミズホで取れた貝類の真珠層を漆地にはめ込んだ螺鈿細工だ。帝国では最近急速に螺鈿細工の人気が出てきたが、北の二つの不凍港以外にこれといった港の無いワッデンでは、外国産の装飾品の類は超貴重品なのだろう。螺鈿細工もまるで知られていないようだ。

サスキア本人はアネッテと同じストロベリーブロンドの髪と青い

瞳の可愛い赤ん坊だったが、気になったのはチラッと姿を見せた三歳ぐらいの女の子だ。顔のつくりは基本的にサスキアに似ている。僕を見る目が物問いたげだった。

「王の初恋の方との間の忘れ形見の姫君なのです」

今度はベッドで寝ている王妃が説明してくれた。だが、新王とは親子の名乗りはしていないらしい。その方が本人が安全だと言う配慮だろう。なんでもこの公爵家の庶子で王妃の腹違いの姉にあたる人と、即位前の新王は恋仲であったそうな。本人同士は結婚するつもりだったが、周囲の思惑があって引き裂かれてしまい、姉は失意の内に出産しその後自殺したのだと言う。当時子供のいなかった王妃は憐れんで、姉の子を手元に引き取ったらしい。どうやら新王がその事実を知った時期と、先王から王妃が暴行を度々受けた時期が重なるようだ。きっかけは先王の嫉妬であったのだろう。

「名前はコルネリアと申します」

難しい立場の姫君なわけだ。王位につく前の王と庶出の貴族女性の娘だから、嫡子・庶子の区別に病的にうるさいワッデンでの立場は永遠に日陰の身と言う事になる。だが、王の実子なわけで……

「私が養い、そのうちどこかの貴族の養女の格で、人柄の良い地方の領主あたりにでも嫁がせようかと言う心積りでした」

だが王妃が引き取った時点と、事情が大きく変化してしまったわけだ。コルネリア姫の配偶者探しはワッデン国内では難しい。そう王も考えているようだった。

「将来的には我が帝国の者との婚姻も、視野に入れておいでなのですね？」

「はあ。お許しいただければ……いずれは」

「いらっしゃい、コルネリア」
僕がドアの隙間から覗き込もうとしていたらしい気配に気が付いて声をかけると、すごい勢いで飛び込んできて、僕に抱きついた。
「お父様、お父様ですよね」
そういって足元にかじりついている。王妃と王は狼狽して、引きはがそうとしたので僕は制止した。そして愛らしい幼女を膝の上に抱き上げ、顔をみつめた。まっすぐ見返す瞳が僕の瞳と同じ碧だ。
「僕がお父様なら、嬉しい？」
そう問いかけると、こくりと頷いた。
「そうか。ならば僕がお父様になるよ。そういう事ですから、僕がこの子を帝国に連れ帰りましょう。この子の将来の夫になれそうな者の心当たりも幾人か有りますし」
僕の頭に真っ先に浮かんだのはヨハンだが他の弟でも、ユリエの産んだリョウタでも、少し年下だがセルマの産んだミゲルでも構わない訳だ。
「そ、それは有りがたいお話ですがまことに……よろしいので？」
僕が頷くと、小さなコルネリアが「よろしいのです。王様」と言った。王様と言われて、複雑な表情が王の顔に浮かぶ。そりゃあ、そうだろうな。
「僕の方はもう、決定で良いですよ。ですが、ワッデンを離れる前に一度、実の父親に関して事実を話してやってください。出来れば王御自身で」
王は頷いた。何だか泣き出しそうな顔にも見えた。親子の永遠の別れかも知れないからなあ。当然か。

帰りはワッデン王家の紋章入りの馬車でゆっくり帝国に戻る事になった。幼いコルネリアを疲れさせないためだ。後にはもう一台、コルネリアの乳母と小間使い役の乳母の娘を乗せた馬車が続く。供の者は皆馬だが、馬車に速度を合わせている。
最初の宿はユリエの領地・ドランメン伯爵家の城だ。早馬を出し

てもらい、トリアには帰国の途中であると言う知らせを入れる。コルネリアは社交的な性格らしくて、すぐに執事ともおしゃべりをするようになった。

「お小さい方がおいでになりますと、城の中も活気づく感じです」
「あの子の婿は誰が良いか、考え中だよ」
「将来、楽しみな事ですなあ」

やり手の執事の目から見て、コルネリアを帝国の皇室のメンバーの一人として迎え入れるのは悪くない考えだと感じられたようだ。僕のとっさの思いつきも高めに評価してもらえたようで、少し安心だ。

翌日から、またのんびりペースの旅だが、こまめに小休止を入れるせいも有って、途中で黄金宮からの迎えの一行と合流した。もっとも揺れの少ない最新型の馬車を持ってきたのだ。そこから多目の心づけを御者にあたえて、ワッデンからの馬車二台を戻らせた。

後はひたすら家路を急ぐわけだが、馬車の中で話をしたり、迎えの一団が持ってきた絵本を読んでやったりした後は、コルネリアは僕に体を摺り寄せて眠る。ワッデンの馬車では揺れが大きかったので、コルネリアもぐっすりとは眠れなかったのだ。

ワッデン国王は自分が実父だとコルネリアに打ち明けたようだが、コルネリアの中では国王はあくまで「王様」で、僕の方が「お父様」になっているらしい。どうしてなのか聞いてみると、眼の色の所為らしい。

「お父様とコルネリアの眼の色はおんなじです」

髪の色も僕よりは薄いが一応金髪だし。確かに僕自身の庶子でも通りそうな外見ではあるのだ。

だが、そう考えるとアネッテが育てている赤子のアンニカが将来の僕の妻って……色々な意味で犯罪的な感じがしてくる。　この小さい子よりさらに幼いのだから。しかもそれを育てているのが、現在の妻で……。

時の流れと共に事態は変化し、また事情も変わるとわかってはいるのだが。

五十年後をつい思い浮かべる。この幼いコルネリアが年老いて、僕の子を産んでくれた女たちは皆亡くなっている可能性も高い。そんな中で僕だけが二十代前半の状態……何だかとんでもなく嫌な状態なのだが。だが、時間が徐々に過ぎて行く中で、僕なりに折り合いをつけて行くのだろうか。恐らく、モナとヤタガラスは今と同じ姿だろう。そう考えると、どうにか耐えられそうな気もしてきた。

何より、美保の転生はどうなるんだ？

それまで、やはり僕は来る事をやって置かねばならないのだと、思い返す。

無事帰り着いて今回の次第を御前会議で報告すると、赤ん坊同士の気の早い婚約に驚かれたが、反対意見は無かった。一方でコルネリアは僕の「隠し子」と認定されたのか、話題には上らなかった。僕も説明しなかったが。

「そのサスキア王女は現在のところ、唯一の未成年の王族であられるのですから、王位継承にも大いに関わるお立場になりましょう」

「殿下は名付け親となられて、将来は舅となられる、賢明な御判断と思いますぞ」

「あくまであちらから持ち出した話というのも、悪くないですな」

「殿下のお人柄に接して、若い王はこれまでのイザコザやら何やらへのこだわりを捨てたのでしょうかな」

「妃殿下との御仲が睦まじい事がワッデン側の信頼感を醸成したのでしょう」

父上には水沢豊という存在と、ワッデン王家の悲劇との関連について御報告した。

「ふーん。そのユタカ・ミズサワが前世のお前と同じ世界の住人とすると、時間や歴史はどうなるのだ？」

「そもそも僕の前世の記憶にある世界は、今の帝国に良く似た時代からおよそ三百年後のものです」

「そうか。以前お前が言っていた『選挙』で政を行う者を定めるという国が多い世界だったな」

「はい。選挙も良い事ばかりではありませんで」

政権担当者がコロコロ変化しキチンと責任を取る者が居ない状態や、衆議を尽くす事を優先するあまり、緊急事態に応じきれ無かったりする事もしばしばだと説明する。

「ふうむ。そのような政治ではよほど数多くの知者が存在しないと上手く機能しないのではないか？」

「確かにそうかも知れません。皇帝や王が治める国なら、一握りの賢い側近が居れば大きな間違いは避けられましょうしね」

ひとしきり二十一世紀の議会政治について説明を終えると、今度は赤ん坊同士の婚約についての話になる。

「悪くない決断だが、実現には色々と気配りが必要だろうな。双方の乳母や守り役同士の交流まで取り決めたのは、お前らしくて手堅いやり方だ。普通そこまで気は回らんぞ」

「はあ。どうも苦労性なもので」

「褒めているのだ」

今回もモナの助けをかなり借りた話をすると、是非ともモナ本人に会いたいとお感じになったようだ。以前父上の目の前で鏡に呼び

かけてもコンタクトは取れなかったのだが、この日も無理だった。

「なぜモナが出てこないのか、僕には理由がわからないのです」

「会いたくないのかもしれんな」

父上は御自分が『穢れている』所為だろうとお考えのようだった。それに関しては、僕も否定はできない。良くわからないがモナのような霊性の強い存在が嫌うような嫉妬とか独占欲とか言った心理の働きを、父上は抑制なさらないからだ。僕はそうした面も含めて、父上という方を人間臭くて好きなのだが。

「どうなのでしょう。穢れている……とモナは言いますが、モナには理解しがたい感情の動きと言うだけのような気がするのですけれどね」

「だが、お前の様に清めの力も、未来を見通す力も無ければ穢れたままなのだろうよ……エリクはどうしているだろうなあ」

「大宰相は随分とこの国のために働いてくれましたからね」

父上が感情的に色々と鬱屈した思いを持っておいでなのはわかるが、大宰相エリク・ベルワルドはやはりすぐれた人物で、我が帝国の繁栄を築いた一番の功労者だと思う。父上もそれはちゃんと認めておいでなのだ。だから『穢れている』事からの連想が大宰相へとつながるのだろう。

「エリク程の男がソフィーエとややこしい仲になってから、しくじりが増えたなあ。お前の母も罪な女だ」

「はあ。ですが……ヨハンという息子を得る事が出来たのは、大宰相にとってはやはり大きな喜びだったのでしょう」

「お前からすれば、ヨハン・ベルワルドも弟か」

「将来の帝国を支える大切な人材でもあります」

「それはそうと、お前、幼い女の子を連れ帰ったそうではないか。お前の事を『お父様』と呼ぶらしいが、まことに隠し子なのか？」
「いえ、ワッデンの新国王が初恋の女性との間に儲けた子です」
「ふうむ。難しそうな立場の子だなあ」
「ヨハンの嫁にどうかと、ふっとひらめいたのです」
「ほお、そうか。ひらめいたのか。ならばそうなるべき運を背負った子供なのだろうよ」
「近い内に大宰相を見舞おうと思います。あの子を連れて行くのも良いのでは無いかと思うのですが」
「お前の思うようにすれば良いのではないか」
「母上は……どうおっしゃるでしょうか」
「お前が決めた事なら、文句は言わせんよ」

なぜだろう。あのわがままで横暴な所も有る母上が、この父上の言葉には不承不承でも従うのだ。大宰相は優れた人物なのに、なぜか母上には振り回されっぱなしだったが。

「そうですか」
「ああ」
「ありがとうございます」

夕食はアネッテの所でもセルマの所でも取らない場合は、僕とヨハンで食べることが多かったのだが、この所はコルネリアを同席させて食べている。大宰相の黄金宮そばの邸は、今の所、召使たちが留守を守っている。ヨハンは僕の所で勉学と武術の修行に励ませているのだ。ミズホ式の武術もこの頃は熱心に修行しているようだ。僕の所が恐らく一番、教会と無縁で暮らせる場所なので、ヨハンも心身ともに落ち着いているのだろう。

「兄上、あのおチビちゃんが僕の将来の嫁候補ですか？」

「嫌なら無理にすすめないよ」
「いや、嫌じゃないです。ちょっと変な子だとは思いますが」
「変かい？」
「僕をジーっと見つめるんですよ。何かあの子なりに色々考えているのかもしれません」
「昨日は抱っこしてやっていたね」
「ええ。お兄様と僕を呼ぶので、旦那様だよって冗談半分に言ったら、本当にそう呼ばれて照れました」

やはり本当にヨハンがコルネリアの『旦那様』になりそうだ。

二十二歳の僕と過ぎ行く日々・1

僕は満二十二歳になった。地球では井沢亮太の二十三回忌が行われるはずだ。

アネッテは二十歳で亡くなった。二年たっても、最後の情景は僕の中で薄れる事は無いようだった。

「フレゼリクと……アンニカを……宜しく……お願い……い、た、し、ま、す」

最後の言葉は振り絞るようだった。奇妙な気分だ。本来なら僕はとっくの昔に死んでいるはずなのに、なのにこうして生きている。だがアネッテは亡くなった。何だか不公平で理不尽だと言う気がする。

アネッテが息を引き取った夜、鏡に呼びかけたが誰も反応しなかった。幾日かしてヤタガラスと話した折にはアネッテの魂がどうなったのか聞いてみた。

「さあ、わからん。普通に子孫の誰かを守るとか、生まれ変わるとかだろうかな」

気のなさそうな返事だった。子孫を守る、と言うのは一番普通であるらしい。生まれ変わるのは力のある特別なもので、僕の様に異世界に生まれる者は何か特殊な力を持っている者なのだそうな。

「息子が気がかりで、まだあたりに漂っていそうだ」

そう聞かされてアネッテが亡くなって以降も、僕はアネッテが住んでいた場所で朝食を取る事にしている。必ずフレゼリク・レオポ

ルドと一緒だ。フレゼリク・レオポルドはごく幼い内に母と死に別れた訳で、不憫でならない。近頃は片言で懸命に僕に話そうとする。アネッテはこんな可愛い様子を見る事も無かったのだ。

今はユリエの妹で伯爵夫人になったナタリエが中心になって育てている。ナタリエの夫イヴァル・ケニングは大宰相の弟子とでも言うべき人間だが、今や更に昇進して従来のラナース子爵領に近隣の領地を加えて賜り、ハーマル伯爵となった。

アネッテの乳母は国元に戻る事を希望したので、フレゼリク・レオポルドの婚約者で従妹にあたるサスキア王女に仕えるように推薦したら、そのままワッデン国王に認められたようだ。

世話役のナタリエは育児のベテランではあるし、フレゼリク・レオポルドがワッデンの次期女王の王配となる可能性が極めて高い事を良く承知していて、細やかに配慮している。アネッテの乳母はワッデンに戻ったが、乳母子は帝国で結婚して引き続き仕えているし、メイドから庭師・御者に至るまでサスキア王女に仕えている者の縁者で固めている。

「ただ、料理人は帝国の者とミズホの者にしております」

ワッデンの料理は良く言えば素朴、悪く言えば単純なのだ。食材も限られている。フレゼリク・レオポルドが将来ワッデンに赴く際は、料理人たちを連れて行く予定だ。恐らく彼らはワッデンの料理を変える大きなきっかけを与えることになるだろう。

アンニカは悩んだ末に、クヌートとウルリカの所に返した。まだ幼いのだし、せっかく立派な親が健在なのだ。歪な家庭環境に置く必要も有るまいと思っての事だったが……返してしまうと、思いの外寂しかった。

アンニカも僕を恋しく思ってくれたようで、三日に一度のペースで午後のお茶を一緒に楽しむ。その時はクヌートかウルリカが付き添ってくる。だが、二人がスコウホイに戻るとなるとアンニカとも

当分お別れかも知れない。
　最近は朝食を終えると、あとは執務やら御前会議やらで夕方まで忙しい。昼食も官僚たちとの打ち合わせを兼ねている場合が大半だ。そんな中でもアンニカとのお茶は貴重な時間だったのだが……

　ユリエはこの五年ほどの間、ずっとミズホに居る。手紙のやり取りは有るが、事務的であったり儀礼的であったり、僕の事なんてどうでも良いのかもしれない。そんな気すらしてくる。御前会議の後、ミズホから届いた手紙も大半子供の事だけしか書いていなかった。確かに、それも知りたい事ではあるが、ユリエ自身の事は殆ど何も触れていない。ずっと、こんな調子なのだ。
「セルマ様とも仲睦まじくお過ごしくださいね」とかなんとか……そのセルマは確かに良く僕を支えてくれるが、やはりユリエの気持ちがどうなってしまったのか、気になって堪らない。

「あのまま生きていれば、僕も四十四歳なんだなあ」
「この夏は前世での家族全員の姿を一度で見られる最後の機会だぞ、恐らく」

　相変わらず僕の七歳児の姿のままのヤタガラスに改めて言われると、再びミズホの御山に行くべきだろうかと言う気がしてくる。ユリエは「清らかな巫女」のような暮らしぶりだそうで、あちらで別の男と良い仲になっている、などと言う事は一切無いらしい。
「ミズホであまたの人に必要とされているから、忙しいのじゃ」
　ヤタガラスはそんな風に言う。帝国で習い覚えたさまざまの事をミズホの人々に伝授しているのだそうな。僕が迎えにでも行かない限り、戻らないのかもしれない。
　地球での二十三回忌に合わせてミズホに行けば、ユリエは二人の子を連れて帝国に戻るだろうと聞けば、行かない訳にも行かない気がしてきた。

「ミズホにお越しになる前には、御不在中の手配について定めておいて頂きたいものです」

イヴァルに釘を刺された。再びミズホを訪れたいが、なかなかそうも行かない。父上はもうほとんど執務には関わっておられない。御前会議に御出席は願って、御意見は承るが、実務は殆ど僕と官僚たちでこなしている。大宰相の抜けた穴は大きいのだ。まだ次世代は十分に育っていない。

弟たちは六歳年下の大公殿下と呼ばれているロルフ、そして七歳下のコリング伯爵マウリとヨハン・ベルワルド、皆しっかりしてきた。三人の中ではヨハンの出来が一番良い。苦労もしたし、彼だけが皇族では無い訳だが、努力家の上に僕との間の信頼関係も一番強い。幼かったコルネリアはすんなりとヨハンの妻に納まりそうだ。まだ七歳かそこらだが、年より随分としっかりしている。

ヨハンを独立させるにあたってコルネリア自身にどうするか選ばせたのだが「旦那様と御一緒に暮らそうと思います」と、はっきり言い切った。ヨハンも嬉しそうであるし、それで良いのだろう。

田舎に引っ込んだ大宰相の所を、ヨハンとコルネリアはこまめに訪問する事にしているようだ。

「父がこのチビの嫁を可愛がりまして、会いに行くと表情が明るくなります」

そんな様子を聞くと、僕も嬉しい。大宰相は精神的なショックから立ち直りつつあるのだろう。僕が依頼した回顧録も執筆を初めてくれているようだ。

大宰相とは一時期夫婦同然だった母上の方は、昨年あたりから寝込みがちだ。ロルフは毎日母上を見舞うが、ヨハンと僕はあまり立

ち寄らない。ヨハンは教会の事と言い大宰相との関係と言い母上が許せない気分なのだろうし、僕は僕で母上と話すと、つい過去の過失に言及して怒らせるような気がするので、気が重い。

父上はお元気だが、女性関係を完全に清算なさりつつあるようだ。僕の良く知らない庶子たちの将来の事も、色々配慮しておやりになる必要も有るのだろう。二十日に一度程度の頻度で『大女亭』に御一緒する。ちなみにもう三十代半ばのヤンとアニタだが、相変わらず忙しそうに働いている。ヤンは妻に逃げられてしまい、アニタは夫を病で亡くした。ヤンには息子オレグが、アニタには娘ヴェラがいる。共に十歳で良く働く。

「一応、文字ぐらい読めないとまずいと思って、昼間はステファンに聞いた塾に通わせてるんだけどさ、さっぱりだよ。それでも帳簿ぐらいは付けられるようにならないと、商売は任せられないって言うと、二人とも頑張るんだけどね」

アニタが言うと、ヤンも同意する。

「全然学問には向いてないみたいだね、この子らは」

しかしオレグもヴェラもどうやらこの商売は、好きでたまらないらしい。父上は『おじいちゃん』僕は『叔父ちゃん』と呼ばれているが、事実そうに違いない。父上は最初ガックりしていたが、最近はおじいちゃん呼ばわりにも慣れたようだ。

「おじいちゃんも叔父ちゃんもお上品なお邸暮らしで、色々大変なんだ」とは言っているようだが、ヤンもアニタも細かな事は大人になってから教えると決めているらしい。

僕はアネッテに先立たれてしまいユリエはミズホに行きっぱなしの状態だし、父上は母上とよりを戻したのは良いが今度は母上が寝込んでいる、愛人も会いたい人に限って皆亡くなっている、そんな状態なのでヤンとアニタに言わせると「男女の縁が今一つなのは、親父さん譲り」と言う事になるらしい。

その夜セルマは、僕の気持ちが亡くなったアネッテとミズホにいるユリエの間を行き来しているだけのようだ……とそんな恨み言を言った。珍しい事だ。セルマの想いにちゃんと応えなければいけないとは思っていたが、このところ特にどこか上滑りだったのは確かだった。

「そんなに御心配なら、ミズホでもどこでも行っておしまいになれば宜しいのですわ」

ベッドの中でくるりと僕に背を向けて、そんな風につぶやいたのだ。

「近いうちに、本当に行く事になるだろう」

「ああ、どうしましょう、本当ですの？」

またこちらに、くるりと向き直ったその顔は不安げで、その瞳は濡れていた。僕の子を産んでから深い情のこもった眼差しを向ける事が時々あったが、この瞬間、僕はセルマに本当に愛されているのだと強く感じた。

「本当だが、今度はすぐに戻るよ」

「一か月、いえ、三か月、半年……もっとでしょうか？」

「一か月とちょっと。二か月にはならないよ」

「伯爵夫人のお子様方は、大きくなられたでしょうね」

「リョウタとラウル・ヤイレの養育にセルマが良く尽くしてくれているので、ユリエも感謝しているようだよ」

あの二人にとって、セルマは本音で話が出来る相手になっているようだ。ユリエと離れ離れで居た時間が長すぎるのだから、当然かもしれない。

「何だか自分の腹を痛めた息子たちのような気分で居ますの。伯爵夫人はお気を悪くなさるでしょうか？」
「まさか。さっき届いた手紙にも『セルマ様と仲睦まじくお過ごしくださいね』と書いてよこしているよ」
「そうなのですか？」

セルマの不安は当然なのだ。五年以上離れていても、僕は一日たりともユリエを忘れた事が無い。だから、ユリエが戻ればどうなるのか不安だろう。更に懸命に面倒を見て情の移った二人の息子らが、実母の帰還と共に遠い存在になるのではないか、そんな心配も有るだろう。

「今年は僕にとって特別な年なんだ。ミズホの御山に登って異世界の様子を見て来たい。かつて僕が暮らしていた世界のね」
「前世ではリョウタというお名前でいらっしゃった、そう以前伺いました」
「ああ。別の世界のミズホに似ている国に暮らしていた。黒い目黒い髪の人間が多い国で、僕も前世では黒目黒髪だった……前世の家族が僕を弔う最後の儀式をこの夏にするはずなのだ。その様子を見て置くべきだ……そんな気がするのだよ」
「前世の御家族が懐かしいですか」
「うん。それなりに幸せであったし」
「前世ではお幾つで亡くなられたのですか？」
「二十二歳だ」

セルマは納得してくれた。

イヴァルに言われた様に、不在中の手配をしっかりしなくては。そして、なるべく早くミズホとの往復が可能な船を用意しなくてはなるまい。

二十二歳の僕と過ぎ行く日々・2

イヴァルに言われた僕の留守中の手配に少々手間取ったが、よほどの非常事態でも無い限りは大丈夫なはずだ。いざとなったら父上もクヌートも頑張ってくれるだろう。　僕のミズホとの行き来の安全性に関してはモナもヤタガラスも請け合ってくれた。

「正三郎も懐かしいだろう」
「はい。この靄がかかった景色の美しさは、ミズホならではのものですね」

米が基本的な穀物のミズホは帝国より湿潤で、っていうか、湿気が多いわけで、僕がかつて住んでいた日本に気候も酷似している。僕らは南西部の九州に良く似た形の島に上陸する伝統的なルートは取らず、ムサシに一番近い出来たばかりの貿易港にいきなり入った。この方が御山にうんと近く、日程のロスも少ないからだ。
それにしたって、海上からもはっきり確認できる城はかなりデカそうだ。名前は豊島城と言い、一度も火事にあわずにいるらしい。五層五階だと言う白亜の天守閣が眼に鮮やかだ。

僕らは上陸して、本陣らしき場所に宿泊した。翌日には幕府から役人が来るわけだが、今は筆頭老中となったらしい和田伯耆守本人がやってきた。
「御山まで御先導させて頂きます」
噴火で地形も多少変化し、街道の改修工事なども大変だったらしい。そうは言ってもいきなり目的地に直行とはいかず、豊島城内のあいさつ回りに一日取られた。豊島城の主で幕府のトップに立つ大樹公に拝謁が適って、供についていた正三郎は感激しまくっていた。僕は気の弱そうな線の細いオッサンだと言う印象しかないが。とも

かくもこの大樹公の御台所がユリエのまたいとこだか何だかで、僕は身内扱いらしい。その御台所にも御簾越しにだが、対面して御挨拶した。

前世では正座も胡坐も苦手だった。椅子に掛けるか、体育座りか、いっそ寝転ぶかで暮らしていたのだが、今は典礼だのマナーだのは得意分野だ。御食事だの御茶菓子だの頂いてもパーフェクトな作法で通せる。これで帝国の評価も僕の評価も何割方か上昇するのだから、お安い御用だ。それでも全部終わると、疲れた。泊めてもらった別殿で、つい、大の字になって伸びをしたのも仕方のない事だ。そして夢を見た。ユリエに膝枕をして貰った六歳の夏の思い出だろう。

「明日はユリエ様と御対面になれますぞ」

部屋に入ってきた正三郎に言われて、我に返った。

「ええっっと、寝所に侍る女は無用だと申し伝えました。それで、宜しいのですよね」

「ああ、無論だ。僕は今まで話もしたことも無い女と寝るなんて、嫌だよ。ああ、正三郎は好きにしてくれればいいさ」

「私だって、明日は許婚に会いますので」

正三郎の許婚は御山のふもとの大地主・伊藤総衛門の娘だったはずだ。今はユリエの所で小間使い役をしている。

「で、どうするの？　帝国に連れて行く？」

「はい。そのつもりで。相手側の親の許しは得ております」

「じゃあもう、一緒に旅もするんだから、いっそ婚儀を執り行おう。うん、それが良い」

翌日、ユリエと久しぶりに会った時、僕はいきなり恨み言の一つも言い出しかねない気分だったが、言わずに済んだ。正三郎の婚儀の事で気分が紛れた、と言うのも有るが、やはり亮仁・カールと碧子・エリカの姿を見ると胸がいっぱいで、恨み言よりも感謝の気持

ちが大きくなった。
「カールでし。ちちうえ」
「エリカでしゅ。ちちうえ」
五歳と四歳、二人とも黒目黒髪のかわいい子だ。僕は二人を左右の腕で一度にギュッと抱きしめた。よくもまあ、ここまで元気に育ってくれた。だが、唯一気になるのは、帝国の言葉だと妙な訛りが出る事だ。
「帝国に参りまして、言葉なども五、六年学ばせてからミズホに戻そうと思うのですが」
ユリエも訛りが気になるようだ。
「今度こそ、ユリエには戻ってもらうからね」
アネッテ亡き後、黄金宮が寂しくて堪らないと話すと「奥向きの取り仕切りはナタリエがセルマ様の御協力を願えば十分出来ましょう」などと冷たい事を言う。すると言わないで置こうと思った言葉が、口をついて出る。
「ずっと留守番をしているラウル・ヤイレと亮太はどうでもよいのか？」
「そ、そんな事は。でも、セルマ様を御信頼申し上げておりますので、心配はしておりません」
「酷いな、ユリエ、冷たすぎる。ずっと待っていた僕の気持ちなんて、迷惑なだけか？」
僕は二人の子供の前では有ったが、強引に抱きしめた。そうしないと正確なユリエの気持ちと考えが読み取れそうにない。乳母たちが気を聞かせて、子供らを連れて出て行った。
久しぶりに、本当に久しぶりのキスの応酬。次第にユリエの感情があらわになる。ああ、そうか。ユリエは……僕を独り占めできないことが、辛くなったのか。アネッテに申し訳なく思う気持ちと死を悼む気持ち、セルマを認める気持ちと感謝と奥深く秘めた嫉妬、

将来正妃になるかも知れないアンニカに対する否定的な感情、美保の降臨を望む気持ちと恨む気持ち……幾つもの辛い気持ちを抱え込んで苦しいのだ。

「何もかも捨てて、あの森の奥の丸太小屋に二人きりで隠れて住みたいな」

亮仁・カールはそうした二人きりの秘められた記憶の記念とも言える子供なのだ。

「……もう、戻れません」

「確かに、僕たちの間に横たわる課題は多い。それでも僕の気持ちは……いや、あの頃より強いぐらいだ」

「でも、私は……若くないのです」

ユリエは自分がもうすでに、このミズホではとうの昔に「御褥すべり」を申し出る年齢である事も気になっているのだ。三十を過ぎたら夜の相手役は一切断るなんて、僕は認められない。体の加減が悪い訳では無い。僕に、若くない、年を取った、と思われるのが耐えられないらしい。若ければ良いと言うものでもないのに。

ユリエの気持が落ち着くのを待って、その夜はただ寄り添って眠るだけにしたが……

「置いて行かれる立場の僕だって、寂しいし、不安なのだ……」

ユリエは幼いころの僕を慰めてくれた時のように、優しく背中をさすってくれた。あのころはそれだけで満たされた思いになれたのに。今は……そうはいかないのだった。

「御山でまた、美保様の御様子がわかるでしょうか？」

「僕が姿を垣間見るだけで、あちらとこちらの世界は遠く隔たっている。その事を再認識するだけのような気もするんだが……」

「でも、お待ちになってますでしょう？」

「どうなのかなあ。まだ八十年近くあるのだから……わからない」

ユリエに置いて行かれたら、生きていても仕方がない様な気もしないでもない。ぼそっと、そんな事を呟くと、怒られてしまった。
「いけません。帝国のためにも、そして子供たちのためにも、その子や孫のためにも、どうか幾久しくお健やかにいて下さいませんと」
「じゃあ、当分は頑張るよ。でもユリエが傍で励ましてくれないと、僕、頑張れそうにないや」
「まあ……」
「もう、抱いてはいけないなんて言わないでほしいな。ユリエは魅力的なんだから」
「気を使って下さらなくても」
「じゃあ、いきなり抱くよ。欲望の赴くままに」
「まあ」
「ふふふ、無理だけどね。子供らもいるから」

その夜は互いに寝間着越しに抱きしめあっただけで、僕は夜明けと共に正三郎を連れ、和田伯耆守一行と一緒に御山を目指した。ヤタガラスとはもとの宮様の邸の跡地で落ち合う事になっていた。

「久しぶりだね、ヤタガラス。毎日のように話しているから、そういうのも変な気がするけど」
「だが、この大きさになるのは前にグスタフを乗せて以来だ」
かつて宮様の邸の庭であった辺りは、完全に溶岩に覆われていた。ひび割れた隙間から、小さな野の花が顔を見せているばかりで、殺風景な眺めだ。供の連中は陣幕を張り巡らした中で、僕の帰りを待っている。僕はいつもの鏡と腰の刀、水を入れた竹筒以外は何も持たないで、大型化したヤタガラスに乗った。今回は火山性のガスはほとんど感じられ無かった。

「噴火はしたが、大岩のあたりの様子はあまり変わりがない」
以前は存在しなかった噴火口が大岩とは反対側の斜面の頂上近く

に出来て、そこから噴火したのだと言う。前回同様ヤタガラスは大岩で僕を下ろして待つらしい。

見覚えのある靄の中を抜けると、あの管理者の爺さんに声をかけられた。

「おお、来たか。この『聖なる石』もそろそろパワー切れじゃ。次はグスタフが治める国のどこかに新しい『聖なる石』が出現しようよ」

確かに台座のような平らな石に乗ったブリリアントカットを施したダイヤみたいな形の石の輝きは、前回より明らかに鈍っているようだった。

「次は、一体いつ？」

「お前が皇帝になってからだな」

父上と死に別れてからか……あまりうれしくない話だ。

「家族も気になるが、美保はどうなったのかな」

「んー、美保ちゃんは、微妙かも知れんな」

僕は輝きの鈍くなった光る石に両手で触れた。ああ、また、僕の地球での家だ。前回走り回っていた甥や姪が……小学生ぐらいにはなったようだった。弟は完全にビール腹の中年オヤジだった。奥さんも老けた。

「今回で亮太一人のための法要はおしまいだな」

「そうねえ。きっと極楽に往生するか、良い所に生まれ変わったかしたんじゃないかしらねえ」

そんな話をする両親は髪に白いものが相当混じっている。もう、完全に老人の顔だ。

和尚がやってきて、次回からはもう、祖父母たちと合同の法事にするかと言う話をしている。

「二十七回忌は省略で、三十三回忌は合同で良かろう。弔いあげじゃから、ちょっと料理でもおごるか？」

「そうしましょうねえ」
どうも……両親、特に父の影が薄く感じられる。もしかしたら三十三回忌は両親揃った姿を見ることは適わないのではないかと思われた。その前に、和尚が持たないかもしれない。
美保の姿は念じても、はっきりとは確認できなかった。ワゴンタイプの赤い車を運転していて、後ろから少年少女という感じの話し声が聞こえる、そんな情景がちらっと見えただけだ。自分の子供をどこかに送り迎えでもする様子だろうか？
そこで映像は途切れた。

「僕の、地球の両親の寿命は三十三回忌まで、持たないのか？」
「まあ、そんなところじゃろう」
「美保は元気なんだろうか？　車を運転していたが」
「自分の今の暮らしを守るのに手一杯、そんなところじゃ」
「僕の事なんて、綺麗さっぱり忘れちゃった、そんな感じか？」
「さあ、なあ、わしにもわからん……だが、姿を見たと言う事は縁は途切れておらん、そういう事だ」

十年後の再会を約して、僕と爺さんは別れた。次の再会の場所が不明だが。
ヤタガラスの背に乗り、山を下り、皆の待つ場所まで戻る。ヤタガラスも七歳児の姿に戻って、僕の馬で一緒に宮様の今のお邸に向かった。宮様にごねられるとユリエと子供らを連れ帰りにくいから、ちゃんと話をしなくてはいけない。会うのは嬉しいが、ちょっと気が重いのも本当だった。

二十二歳の僕と過ぎ行く日々・3

久しぶりの宮様、というか珠宮聡子内親王殿下は以前の美少女から美女って感じに変化していた。一生独身かもって聞いていたが、本当にそうなりそうで、今も巫女としての役目を変わらずつとめている清らかな御暮らしぶりらしい。

「新しい邸の風呂はもっと湯量が豊富になりました」

宮様の邸に一泊お世話になることになった。立て直した場所で掘り当てた温泉を大きな露天風呂に引き込んだみたいだ。ユリエがアイデアを出したと言う『打たせ湯』なんかも作ってあって楽しいが、やっぱりデカい湯船に満ちた乳白色の湯と夕焼けで赤く染まる御山、これが最高だ。絶景の独り占めっていうのも悪くないが、ユリエと一緒の方がやっぱり楽しいだろうな。宮様の手前、そんな話は出来ないが。

食事も御一緒した。宮様が御簾なしで顔を晒す男って原則として親族だけらしいが、僕は親族扱いだ。まあ、確かに互いにテレパシーで会話できる数少ない相手ではあるし、神霊の存在を身近に感じているから、彼らに嫌われるような『不埒な行い』に及ぶ恐れは、まず無い訳だが……

夕飯の後、琴の演奏なんてしてくれて大サービスだ。

するとヤタガラスがやってきた。正直助かった。妙な雰囲気になりかけだったと思う。僕がっていうより宮様が。変な流し目モードだったし。まあねえ……年頃の女性に『生涯恋愛禁止』ってきついんだろうと思う。ミズホの巫女は神の花嫁、と言う訳でも無いわけで、清らかじゃないと神力が落ちると信じられているからにすぎない訳で……はっきり言って、神力と関係あるかどうかはわからない訳だし。

ともかくもヤタガラスが乱入して、僕の膝の上に乗っかって、勝手にお菓子をパクつき始めたから、雰囲気が大きく変わった。おかげで僕も宮様を傷つける言葉を一言も吐かなくてすんだ。

「我が助けてやって、良かったろう？」

「アハハ、やっぱりそうか」

「誰も傷つかん方が良いからのう」

「そういやあさ、ヤタガラスって彼女とか奥さんとかいるの？」

「つがいは生き別れた後、どうなったのか良くわからん。ずいぶん昔じゃから。それからは独り身だ」

「ええ？　七歳児の格好のくせに？　良くわからんなあ」

「この幼いおのこの姿は、楽じゃし、人が嫌わないし、菓子やら飯やら食う時に具合が良いから、この形を取っているだけじゃ」

「髭オヤジじゃあ、好物のお菓子が出ないって事？」

「うむ。酒になるなあ。酒も悪くないが、やはり菓子の方が好きじゃ」

「つがい、って相手は鳥なの？　人なの？　やっぱり神なの？」

「おそらく鳥の形の神霊じゃなあ。美しい心地良い波動だった……」

ヤタガラスの説明によれば、若いころって、いつなのか皆目不明だが相当な大昔みたいだ。で、その若いころに「力の続く限り飛び続ければどこまで行けるか」という酔狂を起こして、実行したらしい。

「見たことも無い花が咲き、実が実る森が有った。その森で一際大きな木に止まると、そこで一羽のそれはそれは美しい鳥を見つけたんじゃ。輝くような不思議な羽の色でのう。碧かと思えば深い蒼にも時には黄金色にも見える。腹のあたりはこれまた驚くように鮮やかな紅じゃ。長い尾羽が飛ぶたびにヒラヒラ舞うようじゃ。本当に、綺麗じゃった」

ヤタガラスはその美しい鳥に幾日もついて回り、ついにつがいになったそうだ。

「言葉を交わすとか？」

「鳥じゃもの。言葉というのではないなあ。グスタフは生まれてこの方ずっと人型じゃから、わからんかのう……ともかくも、ひどく心地良かったんじゃ互いに。そして離れることなど考えてもおらなんだ」

「それがまたなんで、離ればなれに？」

「突如、山が火を噴いた。地が揺れて、森が燃えた。大風がおこり、我は巻き込まれてしまった」

丸木舟に乗っていた若い男に救われたらしい。魚とりの最中だったようだが、何か感じたらしい若者はけがの手当てをして、魚をつぶしたものや貴重な真水まで分け与えたらしい。そして、ミズホの一角の若者が住む漁村にたどりつき、以来、その男の子孫を守護する事にしたそうだ。

「と、言う事は、その男はミカドの御先祖？」

「んー、そうじゃな。今このミズホに住む人間は全部、あの男の子孫じゃ」

「ヤタガラスはどこで生まれたんだい？」

「人のつけた名前は知らんが、島だ。あまり大きくは無い」

「どっちの方向なの、ミズホから見て」

「南じゃろう。渡り鳥がそういっておったから。じゃが、ずいぶん前に海に沈んでしまった」

火山の火口が有る小島であったらしい。だから火山性のガスにヤタガラスは強いらしいのだ。

「つがいには、その後、会ってないの？」

「色々な鳥たちや、人間どもの噂話を聞いてはおるのだが、誰もあの不思議な色の鳥を見たことが無いようじゃった。昔は西の大陸も

行ったものじゃが、あの教会とやらが出来てから面倒でのう」
「ああ、ひょっとして、帝国で言う人に化ける鳥型の悪魔って、ヤタガラスの事だったのかな？」
「さあなあ。帝国の事は良く知らん。寒すぎて、乾きすぎて、つがいがおらんことははっきりしておるから、行くのを止めたのじゃ」
つがいと暮らした森は暖かく、もっと湿気が多い空気であったらしい。熱帯、ないしは亜熱帯のジャングルであったのかもしれない。そんな気がする。つがいとの間に子供ができたかどうかだが、不明だそうだ。

「むつみあって幸せだった故……子が出来たとしてもおかしく無いが、な」

宮様との「交渉」はうまくいった。ヤタガラスが同席してくれたおかげだ。普通なら随分ごねられただろう。何しろ宮様は亮仁を跡取りにする気なのだし。まあ、僕も亮仁本人が希望すれば反対する気はないが、僕の子供たちなのだから帝国の皇室の一員としておかしくない程度の事は仕込んでおきたい。言葉にせよ学問にせよ。
ともかくも揉める事なく、ユリエと二人の子供を帝国に連れ帰る事が出来る目途が立って、ホッとした。

「ありがとう、ヤタガラス、助かったよ」
「じゃあ、礼を期待しても良いかの？」
「ああ、出来る事なら、何でもさせてもらうが」
「我も今度は帝国に連れて行け」
「本当か？　白い大鳥も言っていたが『ヤタガラスはミズホから出ない』のではなかったのか？」
「グスタフといつも鏡越しなのも、面倒でな」
「だが、帝国は空気が乾いて冬はミズホより寒いぞ」
「お前の邸はデカいのだろう？　人型ならば寝泊り出来よう？」

「ああ。それは大丈夫だ。食べ物も口に合いそうなものを用意できるよ」
「お前の側は、気が落ち着いて心地良いのじゃ。当分ミズホには戻らんだろうな」
亮仁や碧子が戻るときに、一緒に戻る、そのぐらいの心づもりのようだ。
ヤタガラスが僕について帝国に行くと聞いて、ずっとヤタガラスを祀ってきた社の人達は嘆いたが、宝物の鏡越しに問いかけにはすぐ応えると言う条件で、不承不承納得してもらったようだ。ミズホ・帝国間の海域を行き来する船乗りにとってヤタガラスは航海と商売繁盛の神、と言う事になっているようで、帝国行きの船に乗り込んだ僕らは普通以上に大歓迎された。
「この船もヤタガラス様の御加護が頂けるなんて、もう願ったりかなったりです」
船長はホクホク顔だった。
これまで僕の命令で航行している船が沈没したり海賊に襲われたりしなかったのは、ヤタガラスのおかげだったみたいだ。ミッケリの違法薬物を扱う連中の船は立て続けに沈んでいるらしいので、不思議には思っていたのだが、そんな事情が有ったのだ。ヤタガラスとしては「穢れた物はミズホに持ち込ませ無いのが一番面倒がなくて良い」という考えだったらしい。
「これまで食いしん坊のガキンチョだと勘違いしていて、ごめんな」
「何気に無礼じゃぞ」
「いやいや、とんでもない。ヤタガラス様は僕の大切な守り神様で

す」
「それも、鬱陶しいぞ。グスタフだとて我と同様に不老で恐らく不死なんじゃろうに」
「モナもそういうんだが、僕って不老不死なのか、やっぱり」
「モナとはお前の姉じゃな。白い大鳥から聞いたが」
「うん。人じゃなくて狼だって自分じゃ言ってるけどな」
「姉も、不老不死なんじゃろう？」
「自分で死ぬ時期を決める事が出来るって」
「そうなのか」
僕はモナのような存在が人型の子供を産む時期と死期について、以前モナから聞いたように話をした。
「我やグスタフは、消滅することが許されておらんのじゃろう」
「誰に？」
「この世を作り出した真の神に」
だから、たとえ死のうとしても助かってしまうだろうと言うのがヤタガラスの意見だ。
僕はあの『ルンドの管理者』の話をする。
「神ではないと言うのじゃから、違うのだろう」
ヤタガラスは素直に物事をとらえる。だがその方が真実に辿り着きやすいのだろう。
「グスタフ、ユリエと寝たいか？」
「え？　あ、まあ、その」
「なら、呼んで来てやろう。我は亮仁や碧子と寝る」

船内の部屋割りで僕はヤタガラスと同室、ユリエは子供たちと同室だ。前回の帰り道よりも一層沢山の土産類を船に積み込んだ。ユリエは僕と一緒に帝国に戻る事に関して色々ウダウダ言ったが、ずいぶん前から土産物をあれこれ準備していたのだ。素直じゃないという見方も出来るが、やはり内心では帝国に戻りたい気持ちは強かったのだ。僕との関係をどう落ち着けるかについて、色々悩んだり

するのだろうが。だが、僕は待つつもりも遠慮するつもりもない。だって、ユリエの寿命は限りがある。愛し合う形が多少は変化するにしても、気持ちを抑えたりする気は無い。だから、ヤタガラスの直截な問いに否定は出来なかった。

ヤタガラスに追い出された格好のユリエは船室の戸をノックできずにいた。僕は自分から戸を開けて、ユリエを迎え入れる。ユリエは寝間着として着ているミズホ式の白い絹の小袖一枚で、寒そうだ。

「ヤタガラスに追い出されちゃったか」
「ええ」
「いきなりユリエと寝たいかって聞かれて、とっさに嘘を言えなかったんでね」
「まあ……そうでしたか」
「夜は冷えるからおいでよ。その、嫌なら本当に寝るだけにするから。実際、そうしてるだろ、この所」
「はい」
ユリエの手を取るとかなり冷えている。僕はとっさにユリエをお姫様抱っこで抱え上げベッドに入れた。
「ま、まあ」
「昔から、こうしたかったんだけどね、そう言えば初めてだったか」
「昔からですか？」
「うん。おむつしてた頃からね」
「そ、そうなのですか」

ここから先がどうなるかはユリエ次第だ。あの頃とユリエは同じ大きさなのに、今の僕はこうしてユリエの体を抱き込む事が出来る。ユリエがおばあちゃんになっちゃったら、体が小さくなってしまうのだろうか？　そしてその時も、僕の体は今のまま、そうなんだろうか？

「早く大きくなって、ユリエを守れるようになりたいって思っていたよ」

キスをしたい気持ちを抑えるつもりは無い。だって、キスをするとユリエの本当の気持が感じ取れるから。僕が本当にユリエに愛されているのだと確信できるから。

「愛しているよ、ユリエ」

返事の代わりに、ユリエは情熱的なキスを返した。

登場人物のまとめ・3（前書き）

次世代の人を中心にまとめました。

登場人物のまとめ・3

＊僕
グスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲラン
異世界・ルンドの最大国家テオレル帝国の生まれながらの皇太子。
即位すればグスタフ十一世と呼ばれる事になるはず。
金髪碧眼のチートな超絶美形。
テレパシー能力以外も色々増強中。
前世は日本の大学生・井沢亮太。享年二十二歳。

＊美保
井沢亮太の婚約者。相思相愛だった。僕との縁は切れておらず、僕が百歳の年にルンドに転生するらしい。

＊爺さん
異世界・ルンドの管理者。ミズホで僕の今後について、意思を確認した。

＊モナ
父上の初めての子供。僕の異母姉。極北の民が崇める存在。強いテレパシー能力の持ち主。
人型を時々とる狼であるらしい。ずっと狼の姿の異父兄弟と行動を共にしている。

＊ヤタガラス

稀に大きなカラスの姿をとる。ミズホでは一般に黒い御神鳥として知られる。僕について帝国にやってきた。
愛らしい七歳ぐらいの男児の姿か、普通の大きさのカラスの姿で居る事が多い。生き別れた美しいつがいがいたらしい。

＊アネッテ
僕と同じ歳。ストロベリーブロンドの髪に青い瞳。六歳で婚約し、十四歳で結婚。正妃だったが二十歳で死亡。世子フレゼリク・レオポルドの生母。隣国ワッデンの王女だった。

＊ユリエ
僕より十五歳年上。僕にとって初めての女性で、姉の様な恋人の様な特別な存在。ドランメン伯爵夫人。長らく僕のメイドだった。黒目黒髪。ミズホの名家の血を引く。亡き夫との間に嫡子ラウル・ヤイレを産んで以降、再び十三歳になった僕に仕えはじめた。亮太・亮仁・碧子の生母。

＊セルマ
僕より五歳年上。父上の公式愛人グラーン侯爵夫人の長女。亡き実父オーレ・トマソンは高名な劇作家でミッケリの名家の血を引いていた。髪も目も茶褐色。ルイサとミゲルの生母。

＊亮太
僕にとって初めての子供。黒目黒髪。生母はユリエ。僕が十四歳の時に出生。

＊ルイサ
僕の長女。髪も目も褐色。生母はセルマ。亮太の半年ほど後に出生。

＊亮仁
ミズホで生まれた僕の二男。黒目黒髪。僕が十七歳の年に出生。将来はミズホの王族として暮らす予定だが……

＊碧子
ミズホで生まれた僕の次女。黒目黒髪。僕が十八歳の年に出生。

＊ミゲル
僕の三男。褐色の髪と目。生母はセルマ。僕が十九歳の年に出生。

＊フレゼリク・レオポルド
僕の四男であるが、唯一の嫡子。生母はアネッテ。僕が十九歳の年に、ミゲルより半年ほど遅れて出生。隣国ワッデンの王女・サスキアとは赤ん坊のころからの婚約者同士。

＊クヌート
僕の十二歳年上。スコウホイ公爵。プラチナブロンドの髪に紫の瞳。僕とモナの関係について知っている数少ない人間の一人。

＊ウルリカ
僕の一歳下。クヌートとはいとこ同士。大宰相の庶子。かつて僕の側妃候補だった。プラチナブロンドの髪に紫の瞳。

＊アンニカ
クヌートとウルリカの長女。出会った頃はプラチナブロンドの髪に紫の瞳の愛らしい赤子であった。一時期僕の正妃・アネッテの養い子だったが、アネッテの死後、両親のもとに戻る。将来の僕の妃らしい。

＊ヤン・アイロ
僕の十一歳年上の異母兄。息子のオレグは僕より十二歳下。

＊アニタ・ヤイロ
僕の十歳年上の異母姉。娘のヴェラは従兄弟のオレグと同い年。

＊ロルフ
僕の六歳下の弟。生母が皇后のため大公と呼ばれる。顔は父上そっくり。髪はプラチナブロンドで眼が淡い茶色。母上に溺愛されていた。

＊マウリ
僕の七歳年下の異母弟。コリング伯爵。生母はグラーン侯爵夫人。

＊ヨハン

僕の七歳年下の異父弟。アンホルト子爵。父である大宰相エリク・ベルワルドの相続人。母上の教会勢力に対する妄信の所為で大聖・ソフス・ネスのもとに拉致され、寵童役を勤めさせられた辛い過去が有る。ワッデン王の庶子・コルネリアと結婚の予定で既に同居中。三人の弟たちの中では一番優秀で、将来が期待できる。

＊母上
僕より二十四歳年上。テオレル帝国の皇后。名前はソフィーエ。髪はプラチナブロンドで眼は淡い茶色。
父上とよりを戻してから、病気がち。

＊父上
僕より二十九歳年上。皇帝。首都トリアの中核部に存在する黄金宮の主。名前はフレゼリク。
知力・体力・美貌に恵まれているが、気まぐれで飽きっぽい。
僕の関知しない庶子が多数存在する模様。政務は殆ど僕に任せきり。

＊スコーネ侯爵エリク・ベルワルド
僕より三十六歳年上。大宰相。名門ベルワルド家の三男。灰褐色の髪でグレーの瞳。長らく帝国の政治を取り仕切ってきた実力者だったが、母上との縁が切れてから田舎に引きこもる。現在は僕が依頼した回顧録の執筆と、ヨハンの成長が心の支えらしい。

＊イヴァル・ケニング
国璽尚書を務めたハーラル伯爵の二男で有望な官僚。大宰相の弟子

的な存在。
昇進して従来のラナース子爵からハーマル伯爵となった。
かつて僕自身が守り役に抜擢した。愛妻ナタリエはユリエの妹。

＊ナタリエ
ユリエの妹。イヴァルの妻。一男一女の母。
嫡子フレゼリク・レオポルドの養育の責任者。ワッデン王宮とのやり取りの窓口役。

僕と新たな出会い・1

熱帯のジャングルかと思う場所で、鳥が木から木へ飛び移っている。長い尾羽をはためかせた不思議な色合いの鳥だ。碧色かと思えは濃紺にも見え、光の加減で金色にも赤にも見える。一声高い声で鳴いたと思うと姿が消え、あとには漆黒の闇が……

「夢か」

傍らのユリエは僕に背中を向けて、深く眠っているようだ。緩やかにまとめた髪はまだ黒々と艶やかだが、何かの拍子に白髪が見つかる。気のせいか近頃、背中が一回り小さくなったようにも感じるのだ。

僕は三十歳になった。確かに二十二、三歳を境に、僕の肉体は老化を停止した。一方でユリエとセルマは並みの女より今も遥かに若々しいが、それでもさすがに二十代には見えない。どうしても僕よりかなり年上に見えてしまう。多少小じわが有ろうが、シミが有ろうが、白髪が出ようが、それも僕と共に生きてきた歴史の一部だと思うから、目にしても僕は嫌になったりしないのに、二人とも年を取る事を恐れているようだった。二十代前半のままと言う僕の状態の方が明らかに異常であるのに……

「醜くなって行く体を御覧に入れるのは、何やら気が引けます」

ユリエはこの頃そんな風に言う。今年ユリエが亡きドランメン伯爵との間に儲けたラウル・ヤイレは、セルマの産んだルイサと結婚し、伯爵家の受け継いできた称号の一つヌーク子爵を名乗ることになった。

「ルイサ殿がドランメン伯爵夫人を名乗るべきですのに……気が引けます」

いやでも世代交代が近い事を意識させられるのだろう。

そのルイサは早々と懐妊した。平成の日本なら中三か高一という年頃だが、この国の貴族社会ではこの位で最初の子を産む婦人も珍しくは無い。そうなると、ルイサの母親であるセルマも、自分が若くないと強く意識するようになったみたいだ。

「ルイサが子を産めば、お祖母ちゃまなのですわ、私も。まあ、どうしましょう」

「僕だってお祖父ちゃまだろうが」

「でも、誰が見てもグスタフ様にもうすぐ孫が生まれるとは、思いませんわ。お若いままなのですもの」

そんなこんなで、セルマも僕と交わる事に気恥ずかしさを覚えるようになったと言うのだ。僕は困惑している。ユリエともこの頃は手を握るだけ、添い寝するだけの夜が続いているし……

ミズホから戻って以来、僕はユリエとセルマの所にきっかり同じ日数通っている。イヴァルには「公平で一番すっきりしてますな」と言われ、正三郎には「律儀でいらっしゃる」と言われている。

ずっと僕はユリエだけを好きでいたかったが、ユリエが許してくれなかったし、セルマも今では大切な妻だ。二人とも満足ではないだろうが、少なくとも公平だ。だからこれ以外の方法は僕には思いつかなかった。子供たちを不幸せな状態にはしたくないし、これが皆が平和に過ごせる一番の方法だと思ったのだ。

ユリエは自分がまた妊娠して勢力バランスを崩すのを恐れ、僕に

避妊してほしいと望んだので、僕はずっとあの避妊薬を飲み続けている。だが、最近はその必要も無い夜が多い。

正直言って、体は二十代前半のままの僕には、今の状態は辛い。若い公式愛人を作れだの、新たな側妃を迎えろだの、ユリエもセルマも口にした事が有るが、気を使う存在を不用意に増やすのは勘弁してほしい。かつての父上の様に市井の女性と行きずりの関係を持つと言うのも、あるいは娼婦を抱くと言うのも、どうも気がすすまない。父上には「気軽に楽しめば良いではないか」と言われるが……

どうやら近頃はユリエとセルマは共同で、スコウホイのアンニカを正妃に迎えるようにあれこれ画策しているらしい。確かにアンニカは僕と「魂の相性が良い」特別な存在ではある様なのだが、自分の子供の年頃で月の物が始まったばかりというような娘を後添いに迎えると言うのは、ちょっとばかり抵抗が有る。

子供同士の結婚で、しかも双方の血を引く孫が生まれることが確実になって、ユリエとセルマは互いのかつての恩讐を乗り越え、姉妹のような関係になっていた。そして二人の息ぴったりの連携で、アンニカを正妃に迎える話が、僕の知らないうちにどんどん進んで行く。もう少し後でも良いのでは無いかと思うのだが、案外早くアンニカと挙式と言う事になるのかもしれない。

「近頃のグスタフ様は、若々しさの上に何か光り輝くようなものが感じられて、四十も半ばを過ぎでしまったような私では、夜のお相手を致しますのは気が引けるのです」

この頃ユリエはそんな風に言って風呂も一緒に入らない。着衣のまま僕の体を洗ってくれたりはするのだが。元々僕と一緒に入浴する事に抵抗が有ったセルマに至っては、浴室に入っても来ない。

「アンニカ様をお早くお迎えあそばせ。お式が終わりましたら、私は亮仁と碧子をミズホに送りに参ります」

昨夜、とうとうユリエにそう言い渡されてしまった。

僕とベッドを共にした朝でも、ユリエは折り目正しく早起きし、甲斐甲斐しく僕の身支度を手伝う。以前より早起きが辛いのではないかと感じられたし、長かったユリエの不在期間は自分一人で身支度もやっていたのだ。ゆっくり寝ていれば良いと言った事も有るが、ひどく悲しそうな顔をされてしまったので、今はユリエの好きなようにさせている。

ユリエが部屋を去った後、僕はあの夢を思い返していた。あれは……

「おい、グスタフ、お前、我がつがいの夢を見たのか？」

「ああ、あれはヤタガラスのつがいだったのか」

ヤタガラスはミズホに戻らず、ずっと僕の側にいる。ユリエなりセルマなり、夜を過ごした相手と別れた後、こんな風にやってくる事にしているようだ。無遠慮に見えるヤタガラスなりの『礼儀』と言うものらしい。ヤタガラスも僕と全く同じ夢を見たのだと言う。何らかの重大事を知らせる夢に相違ないとヤタガラスは言うのだが、僕にはまるで心当たりが無い。

朝食は必ずフレゼリク・レオポルドと一緒に食べ、昼食は官僚たちと、夕食は大抵父上と一緒だ。母上はもういけないみたいだし、父上も僕が三十三歳になるころにはいなくなってしまわれるのだ。親孝行というより、僕が父上との限られた時間を大事にしたいと言う気持ちからだった。この頃は、時折宮中で暮らす孫達をお呼びになる。全員僕の子供だ。

皇族として遇されている弟たちはそろそろ結婚する。まだ誰も子供はいない。父親違いの弟ヨハン・ベルワルドとワッデン王の庶子であるコルネリアは、早めに結婚させた。

ヨハンが十四歳、コルネリア七歳の年であったから結婚の実態も生じようが無かったが、貴族社会では結婚も有り得る年齢には到達していた。互いに複雑な背景を背負っており、ふさわしい境遇の配偶者はおいそれとは見つからない。幸い相性は悪くなさそうだから、早く話を決めてしまう方が良さそうだと思った。

それでも一応、結婚前に二人を呼んで本人たちの意向は確かめた。ヨハンはすぐに僕の提案を受け入れたし、コルネリアはずっと変わらずヨハンの妻になる気でいた。

「だって、兄上、後五年もすればコルネリアは凄い美人になるでしょうからね。どこかの男に目をつけられるまで放っておく必要は無いと思うのです」

「私はヨハン様の妻になります」

今年そのコルネリアも十三歳になった。かつてヨハンの言ったように、大変な美しさだ。

「綺麗になったなあ」

夫婦揃って僕を訪ねて来たヨハンとコルネリアは、いかにも幸せな新婚の夫婦という感じだった。午後のお茶の時間を共にしたのだが、僕は久しぶりに会ったコルネリアの美しさを褒めずにおれなかった。すると冗談半分にヨハンに言われた。

「僕が先に年を取って死んでしまったら、兄上はコルネリアの面倒も見て下さいますか？」

「面倒を見るって……食うに困らないようになら無論するさ」
「兄上、どう面倒を見るのか一瞬悩まれましたね？」
「兄をからかって面白いか」
「いいえ、そんな。でも、まじめな話、僕が死んだあと兄上が面倒を見て下さるなら、安心ですけどね」
「何を、縁起でもないことを」
「兄上は……本当にお歳をお取りにならないようですね。僕と同じ年と言っても通りそうです」
「まさか、それはないだろう」
「いえ、本当ですわ」
コルネリアにまで、そう断定されてしまった。

ヨハン夫婦が立ち去ると、また不意に、ヤタガラスがやってきた。

「なあ、グスタフ、今夜は街へ出よう」
「そんな事言うのは初めてだな。『大女亭』の食べ物が急に気になったのか？」
「ああ、そう言えばそんな屋号だったか。あのお前の兄と姉がやっている店に、何かが来るはずなのだ」
「何が来るんだ？」
「我のつがいと我の気配をわずかにだが纏った、何かがだ」
「気配を纏った何か？」
「うむ。我との間に子が出来て、その者が鳥か人かあるいは獣かわからぬが、何かと気を交わらせ孫が出来、それがさらにひ孫、やしゃごと続いた、そうとしか思えぬのだ」
「つまり、ヤタガラスの子孫にあたる何者かでもあるんだな？」
「そうだ。そうに違いないと思う」

人型のヤタガラスを連れて久しぶりに訪ねた『大女亭』は相も変らぬ繁盛ぶりだ。父上が宮殿内で夕食を取るようになったから、こ

こ二年ばかりは無沙汰気味であった。ヤンもアニタも四十を超えて良いオジサンオバサンになっていたのは予想の範囲内だったが、今年十八歳だと言うヤンの息子・オレグとアニタの娘ヴェラが夫婦になっていたのは驚いた。

「こいつら、気が付くと子供こしらえてやがって」

なんとまあ、騒々しい調理場の台の上に籠が有って、その中に赤ん坊が寝かされていた。二人目の子だそうな。

「こりゃあ、娘で、息子の方は犬と一緒に二階で寝てるよ」

何て事も無さそうにヤンは言うが、幼児の面倒を見る犬なんて、珍しいのではなかろうか。僕も一度だけ見た記憶が有るが、まっ白い大きなむく犬だった。

「犬やら狼やらと相性が良いのは、血筋じゃな」

ヤタガラスは変な納得のし方をしている。

「それにしてもさ、ステファン、あんた本当に老けないんだね。へエエ、こりゃ驚いた」

アニタに言われて、改めて僕は老化しない、イヤできない体なんだと改めて意識した。

「そっちのチビちゃんも、本当はすんごい年寄りなんだろ?」

「あんまり大昔に生まれたんで、自分の年が幾つかよくわかんないんだって」

「前、聞いたように、この子、ミズホの商売繁盛の守り神さんなのかい」

「そうらしいよ。ミズホと帝国を行き来する船乗り達は、『船の守り神』だって言ってる」

するとヤタガラスが緊張した声で、言った。

「グスタフ、耳をすませろ……何だろう?」

微かに奇妙な音がする。僕とヤタガラスで、外に様子を見に行く事にした。三人の護衛の者も一緒だ。

「あ、あっちだな」

風に乗って聞こえる小さな音と言うより、はっきり『声』だと思われる。泣き声のようだ。それも人の。

「グスタフ、あれだ。あの小屋だ」

確かに『大女亭』で使う炭やら、燃料やらを仕舞い込んだ小屋から、その啜り泣きが聞こえてくる。

「誰だ。どうしてここで泣いてるんだ？」

僕が小屋の中に灯りを突きつけて見たのは、女の子だった。ぼろ布をまとい、ガリガリに痩せ、足には足枷らしきものが付いたままだ。年のころは十歳よりは上らしいが、わからない。帝国の言葉はまるでわからないようだった。何か怯えてしゃべっているが、仕方がない。僕は女の子の手を掴んだ。

（僕はひどい事をするつもりは無い。君みたいな子供に足枷をするなんて、どこの悪者なんだろう？　逃げ出してきたのかい？）

女の子は僕の言葉が直接脳裏に伝わって、驚いたようだった。が、僕が手を握っていてやると、握り返してきて、意思を伝えた。

（ここがどこか、怖いやつらがどこのだれか、わからない。私はチャスカ……）

そこで気を失ってしまった。僕は女の子を抱きかかえながら、意識を探った。ヤタガラスも探ったらしい。

「つがいの鳥は、先祖なんじゃな、この子の」

この子の意識の中で、あの鳥は神の鳥で遠い先祖だと意識されていた。後は、いきなりさらわれてひどい目に逢わされた恐怖の記憶ばかりが表に浮かび、深い所まで読み取るのは落ち着いてからになりそうだ。

「じゃあ、この子があんたの子孫か」

「そうなんじゃと思う。それにしても、全然わからん言葉じゃのう。ミズホでも帝国でもなし、その近隣のいくつかの国の言葉を思い浮かべてもさっぱりわからん。聞いたことがない言葉じゃな」

「訳の分からん言葉を話すが、あんたの子孫だろうな。チャスカって言うのが名前かな」

「恐らくそうじゃ。グスタフ、この子を助けてやってくれ」

まあ、ともかく今はこの子を介抱するしかない。他の事はこの子が体力を回復してからだろう。

僕と新たな出会い・2

僕は辻馬車を呼んで、この子を自分の住まいに運ぶ事にした。どうやらこの子は黒目黒髪の人間を見慣れて育ったらしいからだ。それにユリエとヤタガラスは相性が良い。セルマは『異教の神』に対して変に構えているのだ。

「ヤタガラス、先に戻って体の弱り切ったこの子の介抱が出来るように支度をさせておいてくれ」

「おう。先にユリエに寝床やら着替えやら、そうじゃ、食い物も頼もう」

「そうだな。気が付いた事は何でも伝えた方が良いだろう。どうやら、穀物の粥が良いみたいだ。甘い物や果物も良いかもしれん」

「承知した。では、先に行ってくる」

ヤタガラスはカラスの姿になって、馬車の窓から黄金宮へ飛んだ。それにしても、この女の子の国はどこにあるのだろう？　あの鳥は……いや、待てよ。昔、テレビの番組で見たような。どこの鳥だっけ。ルンドと地球の地理的条件はぴったり一緒でもないが、かなり共通する部分が有るから、上手く思い出せれば参考になりそうだ。

ちなみに我がテオレル帝国は地球で言うベルギー・オランダ・ドイツからベラルーシ・ウクライナ辺りにかけての大半のエリアを占めている。だが、バルト海とボスニア湾に該当する部分は凍てついた荒れ地になっているので、北方はかなり様相が違う。隣国ワッデンの領土はスカンジナビア半島からロシアのサンクトペテルブルグ周辺までといった所だ。ワッデンより東のロシアに該当する広大で寒冷な土地を統一した国家は出現していない。様々な遊牧民や狩猟民のグループが昔ながらの暮らしを続け、ところどころに各国の逃

亡者が開拓した村が点在しているといった状態だ。
アジアはアラビア半島やインドシナ半島の形が違ったり、日本列島に該当するミズホの領地が割り増しになっていたり、といった所か。アフリカに該当する大陸の南半分は、謎の領域だ。
そんな状態だがアメリカとオーストラリアに該当する大陸がルンドに存在するのかどうか……僕は知らない。少なくとも帝国では噂になっても居ないようだ。

「ああ、そうか」

あの鳥は確か中南米のジャングルにいると言う鳥に似ていたのだ。ならば、この世界にも南北アメリカ大陸に相当する土地が有りそうだ。そういえば、このルンドでジャガイモ・トマト・カボチャ・トウモロコシを見ていない。タバコも存在しない。チョコレートもココアも無い。帝国で良く食べられる野菜はカブやキャベツ、幾つかの豆と豆のスプラウト類、人参、玉ねぎと言う所か。飲み物は酒でなければ茶だ。最近はコーヒーも入ってきたが。
新しい大陸に行けば、ポテトチップスやポップコーンやパンプキンパイを食べられるようになる。トマトケチャップも製造可能になる。そういう可能性が高い。まあそれは置いておいて……この子がなぜこうも虐待された状態で見つかったのか？　この子の故郷で何が起こりつつあるのか？

もう一度慎重にこの子の意識をさぐる。すると、そこには神聖教会の紋章を記した白旗と、ミッケリの赤い旗を掲げて武装した一団の様子が見えた。何かを叫びながら、銃を乱射している。村に火を放っている。そして、村人を縛り上げ、船積みしている。村人たちは白い貫頭衣といった体裁の衣服を着ている。この子も同様に船積みされ、暗い船倉につめ込まれ……何日か航海するうち、亡くなった者は海に捨てられたようだ。奴隷市場、恐らくはミッケリ領内の

大規模なものだろうが、そこで買い手が付いたものはいなくなり、売れ残ったらしいこの子は、また、船倉に逆戻り。そう言う事らしい。

僕が摂政になってから、奴隷の売買は一切帝国領内で認めていない。だからって奴隷が存在しないと言う程、僕も馬鹿じゃないが、闇組織の人身売買の実態はまるでつかんでいない。この子はそうした連中に売る予定であったのかもしれない。子供を買い取り、性的な奴隷として育成する組織が存在すると言う噂は以前から有るのだ。……だが、その組織の構成員らしき男は、この子を買い取らなかった様だ。痩せて肌の色つやが悪いとでも言ったか？　船長は不機嫌になり、この子をひどく打ち据え、船倉に放り込んだ。売れ残りの奴隷の所為か見張りも殆ど無く、力を振り絞って船べりに出て、海面を見ていたら、荷を積んだはしけがすぐそばを通過したので、そこへめがけて飛び降りた。そして、はしけが着岸してから、見知らぬ街に降り立ち、この小屋に辿り着いた。なるほどね。

辻馬車は黄金宮の正門前で止まった。僕は近衛兵を呼んで、馬車のまま僕の住まいまで行かせるように先導させる。辻馬車の御者が多めのチップに喜んで戻って行った頃、僕はチャスカという子を客用寝室のベッドに寝かせて、様子を見ていた。ヤタガラスも一緒だ。

やがて女の子が目を開けた。僕はユリエに薄い粥を持ってこさせた。ひどい空腹であるのは確かだからだ。最初はユリエの差し出す一さじごとに様子を見ている感じだったが、やがて器ごとくれと言うような身振りを示した。そして、瞬く間に一杯平らげた。僕は女の子の手を握った。

（何日食べていなかった？　食べさせるものは十分有るんだが、空っぽのお腹に急に詰め込むと体に良くないんだ。ゆっくり戻さないとね）

（三日だと思う。一日二回、水が飲める決まりだった。六回水を飲

んだけれど、その間、何も食べていない）

「この子は丸三日、水以外与えられていなかった様だ」
「まあ、随分ひどい扱いを受けたのですね」
「断食から回復する時のための薬が有ったね、あれを煎じてやってくれ」
「子供用に、少し甘味を加えましょう」
「ああ、そうしてやってくれ」

（あの女の人は髪が黒くて目も黒いが、手枷も足枷も無いし、立派な服を着てこちらの言葉を話しているのは、なぜ？）
少女は髪と眼の色を理由に、見知らぬ異国で蔑まれたと感じているらしかった。
（この国では髪や目の色で人を差別しないよ。あの人は僕の子供のころから世話をしてくれた人で、大切な家族だ）
（とてもきれいで優しそうな人だ。あなたは髪も目も黒くないのに優しくしてくれた。なぜ？）
（この大切な友達に頼まれたからだが、子供に手枷や足枷をしたりするのは間違っているからだ。この国では人を売ったり買ったりするのも許されていない）
（大切な友達？）
（ああ。きっとこうして同じように話が出来る。ちょっと彼に代わろう）

僕は後をヤタガラスに任せて、近衛兵の詰所に急いだ。そして急ぎ港に向かい、あの子を積んでいた船を見つけると船長以下乗組員をひっとらえ、まだ残っていた奴隷三名を解放した。三名は全員女で、やせ細っていた。手枷足枷を外し、彼女たちはセルマの母、グラーン侯爵夫人が援助している女子修道女会の診療所に連れて行った。三人のうち一人はミッケリの言葉がつかえたので、良かった。

ミッケリ出身の修道女たちもかなりいるからだ。

「なぜ、奴隷を積んでいたとバレたか知りたいか」

僕は取り調べを始めた。後ろ手に縛られハゲで両腕に入れ墨をいれた船長は、がくがくと首を振った。

「言う訳にはいかないな。おい、お前、名前は？　年は、生まれはどこだ」

僕は男の意識から読み取った名前と生年月日と出身地を、調書に書き取った。男は驚愕したようだ。男が一言も話していない内容が、正確に書き出されていたからだろう。

「な、なぜ……」

僕は無視して、男に問いかけた。どこであの奴隷達を仕入れたか、どこで取引をしてきたか、幾ら儲けたか、組織のボスは誰か、組織の仕組みは、どうやって組織と連絡を取るのか、上納金はどうやって納めるのかなどなど、あらかた意識の中から読み取ってしまった。

「ギドン・タリ、スコウホイ領内ラナ生まれ、四十歳、独身、貴様をネードの鉄鉱山送りとしよう。生まれ故郷に近い場所で服役させるのは、慈悲ってもんだ。そもそも違法薬物と奴隷の売買は、帝国領内では禁止だって承知していただろう？」

「お、おい。いきなりなんだ、勝手に決めやがって。俺はおえらい役人にも伝手が有るんだぜ」

「お前の仲間の公爵の息子と、伯爵の弟は明日早速召し捕る。それとも他の伝手でも有るのか？」

「え……召し捕るって、あんた、何者だ」

「三年たったら解放されるかも知れないから、まあ、まじめに働くんだな。奴隷と違って、安いが日当ぐらいは出るぞ。船その他は没収だ。国有財産として有意義に使うから心配無用だ。いい船だが、どこで作らせた」

ミッケリの或る造船所の名前を、ギドンという男の意識から僕は読み取った。こうして、その夜の内にある程度かたをつけて、僕は再び黄金宮に戻った。

一味から取り上げた鍵で手枷・足枷を外すと、チャスカの表情がパッと明るくなった。

「これは何だ？」

「ああ、我とグスタフがいなくても意思疎通が有る程度出来るように、考えてみたんじゃ」

簡単な絵文字のようなものが墨で紙に書き出して有る。

「この湯気が立っているのが、食事か。これがのどが渇いた、トイレ、どこかが痛い、痒い、気持ち悪い、熱が有る、ヤタガラスを呼ぶ、僕を呼ぶ……ふうむ。あとは着替えたい。シーツをかえたい、なんかはいいのか？」

「ああ、まあ、付け足すか？」

「あ、ごめん、ヤタガラスを呼ぶ方が早いか」

「そうじゃな、我はお前のような仕事が有るわけじゃなし」

「自分の子孫に呼ばれたら、文字通り飛んでくるよな」

「そうそう、そうじゃな」

ヤタガラスと僕の会話は普段、ミズホの言葉だ。つまり平成の日本語と大差無い言葉なので、僕には全然抵抗がない。ユリエは流暢に話すが、セルマはさっぱりだ。黄金宮の大半の人間は帝国の共通語以外、それぞれの出身地の言葉ぐらいしか話さない。ヤタガラスは帝国に来てほぼ一年で、日常会話はマスターした。だが、ミズホ独特の文化や概念を上手く説明できなかったり、帝国の政治の仕組みの細かな所まではわからなかったりする。神様としては、今一つのレベルかも知れないが、恐らくモナも似たようなものじゃないかと思う。

最初は鳥になったり子供の姿になったりするヤタガラスを『悪魔』だと言って忌避した連中もいたが、僕や子供たちの態度を見て次第に受け止め方が変化している。

「帝国には現在、『国教』など存在しない。皇室の冠婚葬祭が神聖教会の典礼を取り入れたのは、時代の流れに乗っただけの事で、別に開祖様以来の祖法でも何でもない」

僕は御前会議でも、そう主張している。友好関係を結んだミズホが独自の多神教の国家であることは、帝国の貴族たちも承知していたので、信仰の自由を認める僕の考えは不承不承かも知れないが、受け入れられた。それにヨハンの様に積極的に教会が嫌いと言う貴族も近頃は存在する。

信仰の自由は、学問の自由につながり、そのおかげで帝国の都・トリアは繁盛しているのだが……それを認めない超保守派は、まだ多少生き残っている。

チャスカを引き取ってすぐ、僕は各方面から未知の大陸に関する情報を集めさせた。それらの報告とミッケリと神聖教会の動向、そして帝国の取るべき対策について御前会議を開いた。父上は終始、発言なさらなかった。

「ミッケリは新たに見出された土地に、入植者を送る試みを開始する様ですな。まだ正式な認証は得られておりませんが、すでに素案は固まったようです」

「大量の金銀財宝が未開の土地の王のもとには有るとかで、神聖教会ではミッケリと組み、蛮族の王は征伐し、無知蒙昧の民を神聖教会の教えにより教化するという基本方針がまとまったようです」

「我が帝国もその土地に進出すべきです。小国ミッケリごときに利益を独占されてはなりません」

「ミッケリは小国ですが、交易に関しては大した勢力を張っておりますからな。厄介です」
「神聖教会がミッケリとこれ以上結びつくと、頭が痛いですな」
「あの腐れネスも、ミッケリとの絆を弱める役には立っていたのですが、もうすぐ死にそうですからなあ」
「ネスは軟禁状態とも言いますぞ」
「次の大聖は若いそうですな」
「ネスの寵童上がりです。元はミッケリの孤児だったとか。狡猾で抜け目がない男とのうわさですな」

（なあ、グスタフ、蛮族は征伐するとは、教会の教えに従わぬものは問答無用で攻め滅ぼすと言う事か）
ヤタガラスの表情は険悪だった。当然だと思うが。
（そうだろう）

「征伐など、とんでもない話だ！　いかん、いかんぞ！」
ヤタガラスは珍しく帝国の言葉で叫んだ。

「ヤタガラス殿は何故ならんと仰せで。ミズホの方でしょうに。そもそもこの御前会議に同席なさる資格がお有りかどうかも疑問だが」
「人として、どうなのじゃ、お前らが知らなんだだけで、それなりの歴史も有り法も有る国じゃぞ。鉄砲を知らず、鉄を知らぬようじゃが、お前らの知らん様々な薬草の知識や医術の知識は有るのじゃ。そんな国の民を勝手にさらって奴隷にするような連中と、同じ事を帝国もするのか！」
「そんな事は、僕が許さないよ、ヤタガラス」
「そうじゃろうな。後はグスタフに任せる」

ヤタガラスはカラスの姿になって、パッと飛んで行った。恐らく腹が立ってならなかったのだ。

「ヤタガラスの妻となった神霊は、我々が未知の大陸と呼ぶ土地の祖霊ともいうべき存在なのだ。長い間、ヤタガラスは生き別れた妻の気配を探していたが、先日ようやく見つけた。僕が今保護している未知の言葉を話す少女は、ヤタガラスと妻との間にできた子の末裔であるのだ。その未知の大陸の王国の民は全員があの、ヤタガラスにとって自らの大切な子孫なのだ。そうした存在が傷つけられると知れば、怒るのも当然だろう。友である僕を信じて、あの程度でおさめてくれたがな」

それから僕は不思議な夢とヤタガラスから聞いた話を、かいつまんで皆に語った。

「まるで、おとぎ話のようですな……ですが、考えてみれば不老の殿下も鳥に変じる少年の姿の異国の神も、恐れながらおとぎ話のような存在でいらっしゃる。そうですか。殿下が真実をお話し下さったのだと言う事は十分わかりました」

「ヤタガラス殿はそれほどに大昔から生きておいででしたか。自分の末裔はやはり大切なのでしょうな」

「殿下が摂政となられてから、この帝国はさらに豊かになりました。あの教会が何を言おうとも、私は殿下についてまいりますぞ」

「教会が『不老の悪魔』と呼ぶ僕でも、皆ついてきてくれるんだね？」

全員が即座に僕に従うと表明した。皆の忠誠心はどうやら大丈夫なようだ。

「神聖教会なぞ糞くらえだ、なあ、グスタフ」

父上の最後の言葉で、御前会議のメンバーの動向は決定した。

僕と新たな出会い・3

ルンドと地球の大きな違いの一つが、シナイ半島に相当する土地が島になっている事だ。紅海の水が真っ直ぐ地中海に繋がる。スエズ湾もアカバ湾も湾ではなく、海峡だ。おかげでアフリカに相当する大陸の沿岸部を回ることなく、帝国側から真っ直ぐミズホの海域に繋がる大海に出ることが可能だ。だが、逆にそのことが災いして、アフリカに相当する大陸の南半分は未知の状態で放置されたままな訳だ。ルンド的な大航海時代はこれからかもしれない。

ヤタガラスは自分の末裔であるらしきチャスカに対して、父性的ともいえる愛情を示している。ユリエとチャスカの意思疎通もヤタガラスの助けを借りて少しづつだが、スムーズになってきた。それは良いのだが……御前会議から戻ると、チャスカが黒いひざ下丈のメイド服を着て、真っ白いレースの三角巾をかぶっているのに驚いた。黄金宮では見習いメイドは三角巾で、一人前になると丸い帽子を銀のピンで留めつけるようになる。

「私が黄金宮に上がった最初の年に着ておりました衣装です」
「似合うな。ああ、身分証をちゃんと渡してやったのだな」

メイドやメイド見習いは、首から担当部署を示す身分証を下げているのが決まりだ。別に部屋から出なければ身分証は必要無いが、食べ物や燃料を受けとりに外部の部署に出たり、共同洗濯場を使ったりする時に必ず提示しなくてはならない。幾つかの護衛や歩哨が立つポイントを通過する際も必要だ。

父上の部屋の者の身分証は深紅の地に皇帝の冠が図案化されたマークがついている。僕の部屋所属の身分証は同じ地色に摂政位を示す皇国の軍事・司法・行政権を示す三個の宝石をつけた笏を図案化

したデザインだ。他の皇族は深紅の地色だが、爵位に応じた星の模様がついている。大公のロルフは三個、他の者は二個だ。

表向きの決まりでは、父上の部屋のメイドと僕の部屋のメイドと大公であるロルフのメイドが共同の洗濯場で鉢合わせした場合、最優先されるのは父上のメイドのはずだが、実際は僕の所のメイドが最優先、次はロルフの所となる。不思議に思ってかつてユリエの師匠役も勤めた老メイド長に尋ねた所、こんな答えがかえって来た。

「皇帝陛下のメイドは数が多うございますし、陛下御自身の大切な御品は陛下専用の洗濯場でお取扱いいたします。一方、摂政殿下のメイドは常に五人以下で御用をこなしておりますし、急ぐべき御事情が有る場合がほとんどです。大公殿下には十名のメイドがおりますし、国政に関わるお忙しいお立場ではないですから」

何でも、僕が静かな環境で効率よく物事が運営されていないと、自分で何でもやってしまいそうになるので、有能な者を五名選りすぐり配属しているらしい。

「摂政殿下の御部屋に配属するものは、一人一人が並みの貴族の邸の取り仕切りなら楽々こなせる水準に達したものばかりです」

その言葉を聞いて、僕はこの老女の判断にますます敬意を表したのだった。

メイド長の補佐役を暫定的にユリエの妹ナタリエがこなしているが、しっかりした後継者はまだ、育っていないのが実情だ。考えてみれば、現在僕の所に配属されているものはユリエ以外は夫がいて子がいて孫もいる者ばかりだ。男の侍従は常時三人ばかりいるが、皆経験不足なので古参のメイド達に教育される立場だ。生まれた家の格式と僕の部屋での序列は、まったく別個だと僕が常々言っているので、大貴族の息子でも僕の所で三年ほど修行すると、見違える

ように気働きが出来るようになり、良い結果に結びつくようだ。

僕の部屋を取り仕切り妃同然と見なされているユリエが、自分の服をチャスカに与えた意味は大きい。これで宮中で表だってチャスカをいびったりするメイドや女官は出ないはずだ。もっとも、陰で何をやるかわからん連中は宮殿内にもいるので、用心は常に必要だが。恐らくヤタガラスの父性的愛情が大きな守りとなるだろう。

チャスカの手を取って、意識の疎通を計ると、興味深い事がわかった。

（この国の王の中の王の宮に仕える役目、うれしい）

どうやら故郷の国において神聖視されている『王の中の王』の住まいは生ける神の神殿のような素晴らしい場所と考えられていて、そこに村や町で選抜された少女が奉仕ないしは奉公に上がる制度が有ったらしい。

（チャスカは王の中の王の宮に近づいてはいけない、と父に言われた）
（なぜ、いけないと？）
（聖痕を宿していると知られたら、神の供物にされると言われた）
（聖痕？　それは何？）
（私の背中に二つ有る、碧の痣）
（どんな意味が有るのかな）
（私にはわからない。父は神官や巫女に知られたら大変だと言っていた）
（僕に、その聖痕を見せてくれる？）

チャスカは真っ赤になって、頷いた。上質の生成りの絹を思わせ

る肌、黒々とした大きな瞳と長いまつ毛、少し口角が上がりくっきりとした小さな唇は花びらを連想させる。可愛いなあ……自分でも思ってみなかったような種類の感情が、いきなり湧き出てきた感じで、ちょっと戸惑った。今の『可愛いなあ』は肉欲を伴っていなかっただろうか？

僕はユリエとヤタガラスを呼び、チャスカの上半身を裸にした。あばら骨がむき出しで痛々しいほどのまだ幼い体の背中に、確かに奇妙な痣が二個ある。左右対称に肩甲骨のすぐ下に、緑色いや碧色というべき一種の金属的な光を宿したホクロというのか何というのか、良く見るとそれぞれが三日月形なのだ。

チャスカが微かに身震いした。どうやらチャスカの国の文化では少女であっても男に肌身を晒すのは、その者が自分の主であるか将来の夫で有る場合しか許されない、極めて異例の事で、肌を人目にさらすこと自体、相当に『恥ずかしい』らしい。可愛そうに、僕に言われたから、じっと我慢しているのだ。

「もういいから、ユリエ、元通り着つけてやって」

ユリエはチャスカを隣室に連れて行った。

「なあ、ヤタガラス、あの痣の色、あんたのつがいの羽の色か？」

「色だけではない。あの小さな点にだけ、強いつがいの気配を感じた」

「やはり、そうか。チャスカの父親は、あの痣の意味を承知していた。そしてそれが神官たちに知れると、チャスカの身が危ない、そういう事かな」

「御家騒動のようなものがチャスカの国の王の所でも、有るのやもしれん」

「神の供物って、言葉を感じたんだが、人間を生贄にするのかな」

「どうも頻繁に人間を生贄にする国らしいぞ。日照りでも大雨でも、不作でも豊作でも」

ふーむ。ますます僕の知っている中南米のいくつかの文明に似ている気もする。

「捧げる神はどんな神なんだろうな」

「太陽の神と大地の神、水の神が多いようだ。生贄になる人間は清らかな存在が選ばれるらしい。チャスカの母は生贄に選ばれたが、清らかな時期に大干ばつも水害も無かった故、村に戻された者らしい」

「清らかな時期って、子供って事か？」

「んー、良くわからんが十四歳を過ぎると清らかではないらしいな」

チャスカの聖痕が帯びた気配は、恐らくその国の『王の中の王』の気配と同じものでは無いかと言うのがヤタガラスの意見だった。ヤタガラスのつがいが今も神聖な存在として、国の人々に強く意識されているならば、有り得る話だ。

「チャスカは『王の中の王』の隠れた血縁か、重大な障害、あるいは正統性を揺るがす存在、そんな所かな」

「恐らく、そうじゃろう。どうやら神官どもが政に大きく関わる国柄のようじゃ。千年ばかり前のミズホも巫女が大きな力を持っておったから、似ておるかの」

「チャスカの故郷の神官にもこっちのソフス・ネスみたいな、私利私欲まみれの奴がいるかもな」

「力のある悪い神官が、チャスカを見つけたら殺すだろう、父親の言葉はそんな意味じゃろうか？」

「僕もそう思う」

それから数日して、ミッケリの軍艦三隻と武装商船一隻が未知の大陸を目指す事に決まった、そう言う情報がもたらされると、ヤタ

ガラスは短い手紙を残して、いきなり黄金宮を出て行った。

「こっそり船を沈めてくる。心配無用」

ミッケリは神聖教会の影響力の強い土地柄だ。迂闊な事をするとヤタガラスは『悪魔』として傷つけられるのではないかと心配だったが、出て行ってちょうど一月目に、無事に黄金宮に戻ってきた。

「おい。この一月音沙汰なしで、心配したぞ」

「すまん。夜も昼もカラスの姿で、色々やっておったんじゃ」

セルマの実父オーレの実家にあたるサロマキ家で、たまたま見つけた空き家状態の伝書鳩用の小屋を根城にして、ミッケリの情報を探ったらしい。店の看板や樹に止まってじっと耳を澄ますと、重要なニュースを色々拾う事が出来たようだ。ミッケリではかつてのガレー船から帆船へと主力が切り替わりつつあり、どの商会も帆船の操船知識を持つ者は高額で召し抱えるので、各地から船乗りが集まって来ていたと言う。また、海になれた傭兵も大量に雇用されていたようだ。

それらは皆、未知の大陸を武力で制圧するための準備だろう。

「じゃが、船が全部沈めば、どうにもならぬよ」

ヤタガラスは、新造の軍艦二隻と改装した軍艦と商船各一隻をシロアリの力を借りて、沈没させることにしたのだと言う。まだ船が造船所にある内から防腐防カビ加工をした塗装面の目立たぬ部分をこっそりはがし、継ぎ目には錆びた金属片や釘を突っ込むと言う事を根気よくやったらしいが、進水式を終え海に浮かべた後も、まだ様々な機器の取り付けが残っている。その段階で集中的に、人目に

触れにくい床下の構造材にシロアリを仕込んだらしい。そしてシロアリが活性化するように特殊な作用のあるキノコも一緒に突っ込んだと言う。更には構造材にそのキノコの汁を塗りつけたりもしたらしい。

「シロアリどもが昼となく夜となく、船の構造材を食い散らかしてくれれば良いのじゃからな」

真夜中に大きな音を立てて四隻ともバラバラに壊れたのを無事確認して、ヤタガラスは戻ってきたそうだ。

「我がやったと言う証拠はなかろう」

そうヤタガラスは言ったが、造船場に現れる黒いカラスを不審に思った者が恐らくいたのだ。一月も立たないうちに『不老の悪魔』が『異教の邪神』に船を沈めさせたのではないか、そんな噂がミッケリや神聖教会の大本山で飛び交うようになったらしい。だが、証拠は恐らく見いだせなかったのだろう。シロアリを使った手口も恐らくはバレてはいない。まあ、僕が命じた訳じゃないし。

御前会議でもミッケリの沈没船の話題が出た。

「神聖教会の坊主が『不老の悪魔』が怪しき光を発して船を焼いたとか、世迷言を言っておりますぞ」

シロアリでぐずぐずになった構造材がバラバラになった夜は、激しい暴風雨で、雷も鳴ったらしい。だからそんな風に言うんだろうか。

「ざまあみろですな。大金を投じた新造戦艦二隻も、他の二隻もバラバラだそうですから。当分ミッケリの三元老は資金を工面する気にもなりますまい」

「ミッケリや教会の呪われた連中に対して神の鉄槌が下されたとか、邪な企みを真の神が打ち砕いたとは言わないんだね」

僕がニヤニヤして言うと、御前会議のメンバー達は手を打った。

「おお、そうですな。そうなのかもしれませんなあ」

「ならばこれからはミッケリで商売をしても、色々とケチがつくかも知れませんな」

ただでさえガレー船から帆船への切り換えで帝国に後れを取った感じの有ったミッケリは、ますます帝国に引き離される事になった。単に四隻の船がおかしな沈み方をした、それだけではない。その後のミッケリの連中の事態の収拾の仕方に誠意が見られなかった、人を呼び寄せておいて、あるいは使っておいて、びた一文払わなかった、そういう評判が船大工や船乗り・傭兵、あるいは各種の職人、貿易商の組合・ギルドに広がってしまったのだ。

「商売するなら、これからは帝国だな」

「おうよ。トリアが一番だ」

珍しく『大女亭』に行くとおっしゃった父上のお伴をして、名物の黒ビールとタラのコロッケを味わった。店は以前にもまして大繁盛している。近頃はミッケリに見切りをつけて移住してきた商人なども、良い客であるらしい。

「不老の悪魔殿下に乾杯！」

「乾杯！」

その声を聴いて、父上はお笑いになった。

「お前はますます有名になったな」

「僕が船を沈めた訳じゃ無いんですけどね」

「それはそうと、お前、あの新しいメイド、どうする気だ？」

「折を見て船団を仕立て、生まれ故郷に送ってやりたいと思いますが」

「ほう？　そうなのか？」

父上は面白い物でも見たと言う顔つきをなさった。
「てっきり、ユリエの後釜に据えるのかと思ったのだがな」
「……ち、父上」
「まともなものを食うようになって、付くべきところに肉が付いて来たではないか。月の物は始まったか？」
「さあ、存じませんが」
「そうか、お前が知らぬのか、ハハハ」

父上は声を立ててお笑いになった。僕は……憮然とした表情だっただろうと思うが……

僕と新たな出会い・4

ミズホから届いたミカドの親書は予想もしていなかった内容だった。宮様が寂しさのあまり気鬱の病にかかってしまったので、亮仁と碧子を早く戻してほしいと言う催促だった。

亮仁は正式に養子になるのだろうが、なぜ碧子までと思った。ユリエに事情を聴くと、ミカドには碧子と年の近い皇子が三人いて、ミヤコに行った折にその内の誰かと娶わせたいと言う御言葉を頂いたそうだ。僕の承認を受けてからでないと、正式な返事は出来ないが母親としては結構な御縁かと思う、そう答えたらしい。

「で、碧子は、どうなの？」

すっかり帝国になじんだ碧子は、変な訛りも取れた。だが食べ物はいつまでたってもミズホの物が一番好きみたいだ。こういう事はいくら幼くても、本人の意志を尊重してやりたい。

「ミズホに戻ります。そして保仁様のところにお嫁に行きたいです」

「保仁様って、以前碧子が文通していると言ったお相手かな？」

「そうです。もともとは母上と保仁様の母君のお手紙のやり取りでしたが、保仁様が桜を描いたお絵かきを送って下さったので、私もお返しに帝国の花の絵をお送りしたのが始まりです」

保仁様の母君はユリエのまたいとこか何かだ。元は女官であったが、ミカドの御寵愛を受けて保仁様を産んだらしい。何というか、経歴的にも似通っていると、母親同士も親近感が有りマメに文通をしているようだ。ミズホと帝国の距離は遠いから、どうしても情報は一月以上は遅れた物にはなるのだが、それでも互いの宮廷の様子が良くわかるわけだ。

「なら、僕からは碧子が、その保仁様と仲睦まじい夫婦になれるよ

うに、ミカドにお手紙を書かなくちゃいけないな」
「はい。お願いいたします」

それにしても……碧子の「ミズホに戻ります」発言は、少しショックだった。「行きます」じゃなくて「戻ります」って、帝国はやはり碧子には「母国」では無いのだった。しょげている僕にヤタガラスが言った。

「碧子は生まれた時からミズホとの縁が強いんじゃ。また、グスタフはミズホに行く事も有ろうよ」
「そうだなあ。有るかもしれないけれど、そうそう行けないだろう。それはそうと、ヤタガラスはどうするんだ。最初の予定通り戻るのか？」
「ミズホの者たちは、我がいなくても何とかやって行こうよ。チャスカに出会ったのじゃから、当分こちらに残る必要が有ろうよ。それとも何か、グスタフが面倒をしっかり見るのか？」
「え？　今だって見てるだろう？」
「いや、その、妻というか妃というか、そういう者にする気は無いのか？」
「正妃になるのはヤタガラスも知っての通り、アンニカでほぼ決まりだ。今更取りやめって訳にはいかない」
「側妃とか公式愛人とかはどうなんじゃ？」
「それぞれ条件が有る。側妃の場合は特定の国との親交・友好に寄与すると思われる貴族や皇族の娘だし、公式愛人は未亡人か離婚した成人女性だ」
「うーむ。じゃあ、ユリエの後釜はどうなんじゃ？」
「お、おい。後釜って、どういう意味だ。子供らを送ってミズホに行くにせよ、ユリエにはすぐに戻ってもらうつもりだ」
「ユリエがチャスカに服をやったろう。あれはユリエ本人がそうした事も考えているからじゃないのか？」

「僕は、そこまで考えてなかったな。まあ、聞いてみるよユリエ自身に」
「それはそうするべきじゃな」

夜、二人きりになった時ユリエが言った。

「チャスカに月の物が参りました」
「ユリエに任せておけば、安心だな。チャスカの言葉も随分まともになってきたし……」

僕はどう切り出したものか悩んだ。言葉で聞くのは難しい。僕は無言でユリエを抱きしめた。抱きしめて感情の奥まで探るべきだろう。子供の単純な思考や感情は読み取りやすいのだが、成長するにつれ、心の内部に様々なものが積もるせいか、厚ぼったい日記帳を読み返すような感じで丁寧に探って行かないと、知りたい事柄を見落とす。ましてや僕よりも年上で複雑な思考と感情を持ち合わせているユリエの場合、間違いなく読み取るのは難しい。でも、できる限り読み取りたいと思った。

「今度はミズホに行っても、用事が済んだらすぐに戻るんだよ。子供らは成長して親の手元を離れてしまうものだろうけれど、僕はユリエを一番必要としているんだ。その事を忘れないでくれ」

するとユリエの感情は大きく膨れ上がり、幾つかの異なる感情が渦巻き始めた。

僕の言葉をそのまま肯定する気持ち。僕の愛情を信じる気持ちといずれ薄れると言うあきらめの気持ち。年老いて行く自分の体と変化しない僕の若すぎる体がうまく調和しないと言う違和感。自分は死すべき存在で、若い世代に僕を委ねるべきだと言う責任感。誰かに僕を取られたくないと言う独占欲。僕を残して何れはこの世を去る

のだと言う諦念。それから……不意に湧き起ってきた悲しい気分……

正直な話、チャスカの気持がどうであるのかは大して気にならない。あの子はまだ本当に子供だし、それほどの深い絆も無いし、そこまでの義務も感じていない。ユリエが悲しまず、苦しまない方法が見つかれば、それに越した事は無いのだが。

「ミズホに……参ります。亮仁と碧子の母親ですから、私が共に行くべきでしょう。グスタフ様はミッケリや大本山との事も、それに皇后陛下の御容態も色々心配ですし、今は帝国を離れられるわけに参りますまい」

「長い留守番は嫌だよ」

「でも、儀式や……それこそ碧子の婚姻の儀式までとなりますと、かなりの時間がかかりますねえ……セルマ様が御自分は若くないから気が引けるなどとおっしゃいます。私はそのセルマ様より十歳年上なのですから、こうして臥所を御一緒させていただくのもそろそろ切り上げ時かも知れません」

「セルマはセルマ、ユリエはユリエだよ」

「御不自由をおかけしないためにも、若い女子が必要だと思いますが、グスタフ様の御心に適いそうな者が居らず苦慮しておりました。その、セルマ様やヤタガラス様とも相談したのですが、チャスカをそのうち閨にお召しになったらいかがでしょう？」

「ヤタガラスにもそんな事を言われたが、あの子をそんな対象として考えた事は無いよ。無事に国に返してやろうと思うだけだ」

「ですが、あの子を『可愛い』とはお感じになっているのでしょう？　あの子はグスタフ様を生涯かけてお仕えする方と思い定めたようですし、あの子になら私も腹が立ちません」

「セルマが……女子修道院に住まいを移したいなどと言ったんだよ。母親の侯爵夫人のお節介の所為だと思ったんだがな」

「侯爵夫人は皇帝陛下のためにお好みに合いそうな若い女子を幾人

かお引き合わせしたと、聞いております」
「鹿の園か……」
「何ですか？　それは？」
僕はルイ十五世の愛人ポンパドゥール夫人が王のために開いたと言う、娼館・鹿の園の話をした。
「どこも事情は似たようなものなのかねえ。だからってユリエがマネする必要なんて無いのに」
「私は既に、三人の御子を産ませていただきましたし、年も年なのです。侯爵夫人程の事は出来ませんが、やはり引き際と言うものが御座いますから」
ユリエは引き際にこだわっている。未練がましくない名誉ある撤退……か。
「避妊薬なんて飲むのをやめておけば良かった。ユリエが懐妊したら、事情も変わっただろうに」
「孫より年下の子を産むなど、体裁が悪すぎます」
「そうか？　僕は全く気にならないが」
「私は、イヤです」
本当にイヤみたいだ。
「ユリエに嫌われた。泣きたい気分だ」
自然に僕の目から涙がこぼれてきた。
「まあ……泣いてくださいますの？」
「だってそうだろう。この世界に生まれてこの方、一番長い間一緒に眠っていた相手に、もうだめだなんて言われて、平気でいられるもんか」

その日以降、僕とユリエの間でその話題が出る事は無かった。

「亮仁ともっと、話をしておけば良かったと今頃になって思います」
亮太がしみじみと僕に言った。僕も同じような事を思っていた。
亮仁は大人しく、口数も少ない。碧子は訛りが取れたが、会話の量

が不足気味だったせいか亮仁はところどころ訛ったままだった。それでも学問の方は抜群の素養を示した。黄金宮の図書室の蔵書は大半読破したらしい。意外であったのは嫡子のフレゼリク・レオポルドとは絵を描くと言う共通の趣味が有り、二人が一緒に庭の花をスケッチしていたり、亮仁が水墨画をフレゼリク・レオポルドに教えたりと、仲が良かった。

「兄上に描いていただいた僕の肖像画をサスキア王女に送ったら、とっても喜んでくれたみたいです」

フレゼリク・レオポルドが兄上というのは亮仁の事で、他は「亮太兄上」「ミゲル殿」という感じで、ちょっとよそよそしい関係なのだった。セルマの産んだミゲルとは数か月違いでしかないし、兄とは言い難いのだろう。そのミゲルは亮太にべったりで、何をするのも一緒だ。

亮太と亮仁は面差しも似ているし、共にユリエの産んだ子であるのに性格は随分と違い、それぞれ腹違いの弟との縁の方が強く、孫全員を父上が夕食に招かれる折ぐらいしか接触も無かった。

幾度かミズホとの間の手紙のやり取りが有り、ユリエは亮仁と碧子を連れてミズホに旅立つことになった。ユリエは「チャスカには言い含めてあります」などと言ったが、何をどう言い含めたか、知りたくも無い。ただ、はっきりしているのはユリエの留守は半年以上になりそうだと言う事だ。

「やせ我慢など体に悪い」

そんな風に父上には笑われるし、ヤタガラスにはユリエの言う通りにしろと言われる。当のチャスカは懸命に仕事をしているのは確かで、他の年配のメイド達も娘の面倒を見ているような感じで色々と教えてやっているようだった。

そうそう切り替えなんぞ、簡単にできるのものではない。だが、父上がおっしゃる所のやせ我慢が祟ったのか、僕はイライラしている事が多くなった。そんなある日、母上の容体が急変した。

「ああ、ごめんなさい陛下、許してね、エリク……」

僕は母上の手を取って、意識を読んだ。

うわごとを言う母上の脳裏には、父上と大宰相の姿が明滅して交互に現れているのだ。

父上は幼い時から夫として意識して育ち、身分も容貌も自分にふさわしい相手として納得できる存在であったらしい。そして父上に愛人がいるのは当然だとも思っている一方で、不愉快でもあり、グラーン侯爵夫人は許し難い存在で……大宰相は幼いころから自分に対して庇護的な立場を取ってくれる頼りがいのある存在で、信頼できる相手なのだった。大宰相と母上は十歳ほども年の差が有る。母上が子供のころ、すでに大宰相は名の有る武人で優れた官僚であった。大宰相を何か頼めば必ずその約束を果たしてくれる誠実な相手として、強く母上は意識していた。一方で父上はとらえどころの無い、本音の読めない相手であったのだ。

母上の中で、父上と大宰相は共に必要な大切な存在であったと言う事だろう。だが、皇后として至らなかったと言う気持ちよりも、大宰相を振り回して苦労を掛けたと言う気持ちの方が若干強そうだった。

「大宰相を呼んでも構いませんか、父上」

僕の顔を父上は凝視したが、頷いた。

「ソフィーエにはエリクが必要だったのだ。夫は不誠実であったからな」

御自分の事を不誠実とおっしゃり、苦い笑みを浮かべられた。

大宰相は手紙を送っても、父上の手前遠慮しているのか母上を見舞おうとはしなかった。大宰相自身が風邪をひいたので、皆にうつすと迷惑がかかるとか何とか言う言い訳の手紙が来たが、メイド同士のネットワークを通じて手に入った情報では、さほど加減も悪くなさそうだ。意を決して、僕は大宰相を迎えに行った。

「お忙しい中、このような田舎までわざわざ……」

挨拶から始める大宰相を押しとどめ、有無を言わせず一番揺れの少ない皇族用の馬車に乗せてしまう。医師も同行させたし、普段の面倒を見ているメイドも一緒だ。

「私もその昔は押しが強かったですが、殿下はそれ以上ですかな」

「そうだな『灰色の悪龍』より『不老の悪魔』はエゲツ無いかもしれん」

かつての大宰相のあだ名を僕が引き合いに出すと、大宰相は声を立てて愉快そうに笑った。

「母上が……意識もはっきりしない中で、父上とあなたの名をかわるがわる呼んでいるのだ。どうやら、母上はあなたに詫びたいらしい。あなたを振り回し、あなたの人生を狂わせたとも感じているようだ。息子としては、その気持ちを受け入れてもらいたいと願っている」

「お小さいころの皇后陛下……ソフィーエ様は、まことに愛らしくていらした。あの方に『ありがとう、エリク』と言って頂くと、天にも昇る心地でしたぞ。そのお言葉が聞きたくて、あれこれいたしましたが……かえってご迷惑をおかけした事も御座いましたなあ」

大宰相の表情は穏やかだった。

僕と新たな出会い・5

僕は久しぶりに大宰相とゆっくり話をした。

「回顧録の執筆は随分はかどっているように聞いているが、その後、調子はどうかな」

「胸を張っておのれの仕事だと言えるような事柄について書くのは、簡単ですが……不始末やら、失策について反省しながら書くのは、しんどいものが有りますな」

「ならば……書きやすい年までで、後は後世の者に評価を任せると言う事でも構わないのではないか」

「兄上、僕が父の手助けを致しましょう」

ヨハンが思いがけない事を申し出た。

「二人の考えは、かなり違う部分も有るのではないかと思うが、大丈夫だろうか？」

「さよう、ヨハンも私もそれぞれ意見が違います。互いの記憶なり日記なりつきあわせて、事実関係のみ書き記すにとどめましょう。それぞれの評価は後世に任せましょう」

「だが、当事者としての意見なり感想なり、有るだろう？」

「では、ヨハンの見解も書き添えると言う事にしましょうか。両論併記という奴ですな」

「ああ、それだって全然構わないさ」

過去の記録がともかくも残ればよいのだから、当事者の大宰相のやりやすい形で十分だと思う。

ヨハンの邸で夕食を食べたわけだが、その際、やはりスコウホイのアンニカの話が出た。

「殿下は歳をお取りにならない稀有な方ですから、娘のウルリカよ

り孫の方がふさわしかったのでしょうな」
「父としては兄上の正妃に自分の孫を迎えていただけるのならば、大変に嬉しいようです」
「クヌートとの約束も有るし、ヤタガラスに言わせると魂の相性が良いそうだから、次の正妃はアンニカで決まりだよ」
「ありがとうございます、殿下。ですが、今、殿下は御不自由なさっているように陛下からチラッと伺いましたが……」
父上も話題にお困りになったからって、そんな事を大宰相に話される必要も無かろうに……
「うむ。ユリエがいないとね、色々不便だ」
「父上、余りそのような話は……」
「おお、嫁も居るのに無神経だったな」
「兄上に、失礼ですよ」
「良いんだ、ヨハン。確かに不便なんだ。だからって気心の知れない者を、僕の部屋に入れたくないしな」
コルネリアが珍しく、口を開いた。
「ユリエ殿がしつけておられた、異国の女の子はいかがなのですか？　確かにまだ、言葉などはおぼつかない感じも致しましたが、大層愛らしい子ではないですか」
「ほう、そのような年若い者が殿下の御部屋に？」
大宰相は興味津々だ。
「ええ。あのヤタガラスさまの御縁に繋がる血筋なのだそうです」
「ああ、僕も見たよ、その子なら。昔のユリエ殿にどことなく面差しが似ているような気もしたな」
ヨハンもいらぬ事を言う。
「ドランメン伯爵夫人が認めたのなら、将来有望と言う事でしょうかな？」
「そういえば、お父様、その子はユリエ殿が黄金宮に上がられたばかりのころの衣装を頂いたのですって。うちの邸の者たちが噂していました」

「あの子は生まれ育った村の者たちと一緒に、ミッケリの武装した連中に無理やり船に詰め込まれて、奴隷にされてしまったのだが、たまたま逃げ出して、僕が保護した。それだけなんだよ」
「ミッケリが『未知の大陸』を発見して、そこで得られる財物を教会に献上すると言う話は聞きましたが、そうした有無を言わさぬやり方ですか」
大宰相はあまりこの件に関して、知らなかった様だ。
「我々やミッケリの人間にとっては『未知の大陸』であっても、向こうにしてみれば独自の歴史も文化も宗教も存在するのだ。それを勝手に破壊して良いと言う事にはならないと僕は思うよ」
「教会の連中は、自分達と違う宗教は認めませんからね」
「異教徒の国・ミズホの王族扱いとなった僕なんて、教会からしたら『悪魔』なんだろうよ」
「教会のような了見の狭い考え方は、おかしいと思います」
コルネリアは教会に毒されていないようで、良かった。
「あの子、チャスカはその『未知の大陸』の王家の血筋の者かもしれないのだ」
「ほほう、ならば殿下、その子を側妃となさって、『未知の大陸』への進出の足掛かりとなさいますか？　ミッケリを排除する良い手立てとなるかもしれませんな。ふうむ」
大宰相は、どうしても教会以外の宗教の国は『進出』して構わないと考えがちだ。体の弱った老人とあまり議論もしたくなかったので、適当に切り上げたが……チャスカがミッケリの勢力を排除する手立てになりうると言うのは正しいのだろう。
考え込んだまま馬車に揺られて黄金宮の住まいに戻ると、他のメイドの姿は見えず、かなり夜遅いのにチャスカが一人で出迎えた。父上に言われた事や、ユリエの言葉を気にしている所為か、めっきり娘らしくなったと思う。確かに、同じ年頃のかつてのユリエと体

の大きさは同じぐらいなのだろう。だがユリエが十代のころ、僕は幼児だった。今の僕の身長は6フルト4イルチ、地球の日本式で言うなら1メートル93センチだろうか、そんなところだ。だから、容易に抱き込めてしまえる……って、何考えてるんだか。

「ユリエに何か言いつけられたのか？」
「はい。でんかのお、おせなかを、おながしして、おからだを、お、おふきして、おめしかえの、お、おてつだいをせよと」
「いや、良いよ、自分でやるから」
「……そいぶし、も、ごようめいが、ありしだい……いつでも、う、うけたまわる、ように、もうしつかって……おります」
「なあ、チャスカ、意味わかっているのか？」
「はい」
「ユリエに聞いたか？」
「ゆりえさま、にも、みなさま、にも、う、うかがいました」
「困ったなあ。まあいい。僕が自分でするから、部屋に戻りなさい」
「はい……」
「戻りなさい」
「はい」

困ったものだ。ユリエが旅立った翌日から、僕が風呂に入るとチャスカが付いてくるようになった。困った事に僕の体も反応するようになってきた。この押し問答を繰り返すようになって、今夜で十回目だ。セルマの所に三度ばかり逃げ込んだが、セルマにまでチャスカを抱けば良いと言われてしまう始末だ。確かにユリエはセルマに相談したって言ったものなあ……あーあ。

げっ、何だ？　透け透けのベビードール？！
僕が風呂に入っている間に着替えた。いや、着替えさせられたのだろう。

こんなの、このルンドでも有ったのか！　知らなかったなあ……って、問題だろうが。

「お、おい、チャスカ、その恰好は何だ」

「これが……でんかも、おすきなはず、と、えりしゃさん、と、みるらさん、と、ふるりあさん、と、さはるさんが、おしえてくれました」

エリシャ・ミルラ・フルリア・サハル……全員亭主持ちで、孫までいるおばちゃんのメイドたちだ。四人がかりで、チャスカに色々吹き込んだらしい。それにしても過激な衣装だな……

「み、みぐるしい、ですか？」

「いや、可愛いが、そんな恰好、他の男に見せるなよ」

「おつかえする、でんか、にしか、おみせ、しません」

「チャスカ、自分の部屋に戻って寝なさい」

むき出しの肩に僕のガウンをかけてやり、廊下を隔てたチャスカの部屋まで一緒に向かう。

「ん？　鍵がかかっているな。誰がかけたんだ……」

「で、でんかの、おへやで、ごいっしょ、する、からって……たぶん、えりしゃさんが……」

僕は、つい、ため息をついた。思いっきり読まれているなあ。

「分かった。じゃあ、おいで」

「あ、あのう……」

「何だ？」

「わ、た、し、ゆかで、ねます。ご、めい、わ、く、ですから」

何でそんな風に言うのか、手を握ってみるとはっきり分かった。僕がチャスカを保護して宮殿に置いているが、好みのタイプではないのだろうから、一緒に寝るのは迷惑だし、不快だろうと感じたよ

うなのだ。

「体が冷えて風邪をひく。まず僕の部屋に戻ろう」

僕の部屋に戻ると、自分でハーブ入りの茶を淹れた。穏やかな眠気を呼ぶ香りだ。チャスカにも飲ませ自分も飲むと同じベッドに入ったが、背中を向けて眠ってしまう事にした。

「パカヤカシック！」
「イリャ！」
「ティクシ・イリャ！」

多くの人間が、口々にそんな言葉を叫んでいる。見た事も無い山、見た事も無い海、一体どこなんだろうか？　長く続く海岸線だ。遠くにかなり高い山々が連なっているのが見える。僕、うん、僕だと思うんだが、赤と黄色と紫の派手な色合いのマントを羽織ってデカい金色の冠をかぶって、ジャラジャラ重たい金の胸飾りをしてる。隣に似たような色合いのマントを羽織ったチャスカが立ってる。チャスカは重そうな翡翠のネックレスや腕輪をドッサリしているようだ。

「ママ！」
「パチャ・ママ！」

目が覚めると、陽が射していた。パチャ・ママという言葉だけ意味が分かった様な気がする。地球では後に聖母マリアと同一視された大地の女神だ。

僕はそっとベッドを抜け出し、冷たい水を一杯飲んだ。すると、

誰かがドアをノックした。僕が開けると、侍従が息を切らして立っていた。

「大変です、殿下、皇后陛下が、皇后陛下の御容態が」

「急変したのか」

「はい」

「エリシャ！　ミルラ！　急いで来てくれ」

僕は年かさのメイド二人を呼んだ。侍従は引き取り、チャスカはベビードール姿でベッドから飛び出した。目を覚まして異常事態の発生に驚いたらしい。駆けつけた二人に、勝手にチャスカの部屋に鍵をかけないように命じながら、服を着替えはじめる。僕が不在の時間が長くなりそうなので、手紙や来客の取次などについて話を詰めておく。

これで当分、メイド達のお節介は止むだろう。

大宰相は宮殿に近いヨハンの邸に滞在しているので、母上の容体が急変したと至急知らせた。ヨハン夫婦に付き添われて、大宰相もすぐにやってきた。

医師は「手を尽くした」そうだが、為すすべが無かったらしい。ずっと高い熱が引かず、母上は呼吸するのも苦しそうだった。そのうち、僕の子供らも含めて母上の血縁にあたる者の大半が集まった。セルマはすぐに来たが、侯爵夫人は最初は遠慮していた。

「来て頂け」

僕がセルマに特に言って、やはり来てもらう事にした。確かに侯爵夫人とは腐れ縁だろうが、互いの孫はこだわりなく交流しているのだから、その方が良いと言う気がしたのだ。母上の意識がハッキリしていたなら、非常にイヤがっただろうが……

グラーン侯爵夫人は泣いていた。涙が止まらないようだった。

「お前が本気で泣くとはな、ソフィーエも驚くだろうよ」
父上の口調は皮肉っぽかったが、穏やかな表情をなさっていた。
「恐れながら、皇帝陛下の宮廷は『黄金の百合』と『咲き誇る薔薇』に彩られておりましたからなあ……あのころを思うと懐かしい気分になります」
「エリクも主役の一人であっただろう」
「憎まれ役では有りましたが、陛下のおぼしめしにより充実した日々を送らせていただきました……それにしても、お苦しそうですな……もう少し楽にして差し上げる方法はございませんのかなあ……」
母上の苦しそうな様子を目にしていると、大宰相も静かな気持ちで見送る心境になれないだろう。

「グスタフの力を我の力と合わせると、少し母上の苦しさが和らげられるがの」

ヤタガラスがそんな事を言った。父上が試せとおっしゃるので、言われるままに右手で母上の手を取る。左手をヤタガラスに繋ぎ、目をつぶって母上が穏やかに寝ておられる様子を思い描いた。
おおっ、と言うどよめきを耳にして僕が目を開けると、母上の呼吸は穏やかになり、熱も引いたのだった。

「ああ、グスタフ、父上は？　おいでかしら？」
母上の声は、とても小さかった。僕は場所を父上と交代する。
「ソフィーエ、エリクもいるのだぞ」
その言葉を聞くと、母上は父上がお座りの側の右手はそのままで、震える左手を伸ばし、消えそうな声でエリク、と呼んだ。大宰相は左手をしっかり握った。

「私は……至らぬ、妻でした」

「それはお互い様だ、ソフィーエ、お前はグスタフとロルフを産んでくれた。感謝しているよ」
「エリク……あなたには、迷惑ばかり掛けたわ」
「いいえ、飛んでも有りません。良かれと思っての事ではありましたが、私の勝手でいたしました事で、かえって御迷惑をおかけしました。申しわけ御座いませんでした。幸せな時間を頂きましたし、ヨハンという跡継ぎも生んで下さいました。ありがとうございます」
「良かった、本当に……良かったわ」
それが母上の最後の言葉となった。二日間眠り続けた後、母上は息を引き取った。

僕と新たな出会い・6

母上の葬儀は一年で最も寒い時期に行われた。神聖教会の典礼で行われはしたが、参列者の顔ぶれは様々だった。これまでならミズホの弔問客やミッケリの新教会のメンバーが参加するなど、有り得なかった。

ユリエは急遽戻ってきた。だが亮仁と碧子は儀式のための潔斎期間に入っており、葬儀への出席は死の穢れを帯びるので取りやめるべきだと言われて諦めたようだ。

ユリエとナタリエが姉妹で連携し、煩雑な儀式も多くの弔問客の取りさばきも、すべて滞り無くスムーズに済ませる事が出来た。

慌ただしい毎日に、嘆く暇も無かったが、ひと月たつとさすがに落ち着いた。

「ユリエが戻ってくれて、本当に助かった」

「お役に立てて、ようございました」

「もう、ずっと一緒にいてくれるよね」

「……申し訳ありませんが、ミズホに立ち戻ってやるべきことが御座いますので」

「亮仁を養子にやるんじゃないか。十分だろうが」

「まだ、亮仁の婚姻の話をキチンと決めておりません。碧子の新居の準備なども有ります。それに、宮様が……」

「そんなに宮様が大切か。僕よりも」

「そんな、そんな事は有りません。でも、グスタフ様はお強い方ですが、宮様は御心が弱っておられて……宮様には頼れるものがおいでになりません。まだまだ亮仁では支えられませんから」

「帰ってきたと思ったら、また行ってしまうなんて、ユリエは残酷だな」

ユリエに対して決して好意的では無かった母上の葬儀に、わざわざ戻ってきたのは僕のためなんだと言う事は理屈では分かっている。でも、僕はひたすら恨めしかった。

「私がグスタフ様にして差し上げられる事は、もうほとんど何も御座いませんから……必要とされる場所に参ります」

「違う、それは違うよ。僕ほどユリエが必要な人間はいないはずだ」

「……チャスカを、お抱きになってませんのね」

「誰にもユリエの代わりは務まらないよ」

「私は私、チャスカはチャスカですわ。御遠慮がお有りですか？　たとえばスコウホイ公爵に……」

「そんな事は考えなかった」

「いつまでも御不自由をおかけするのは申し訳ありませんし、やはりあの子を閨にお召しくださいませ」

「それこそクヌートとウルリカがどう思うか。考えたほうがよさそうだ」

自分の部屋に戻ろうとするユリエを押しとどめ、僕は久しぶりに強引ではあったが追いすがる形で抱いた。昔とは違う。僕が本気を出せば、ユリエの力では抗えない。

「酷い方……」

「ユリエが悪いんだ。体は正直なのに」

「おっしゃらないで」

「互いにどうすれば燃え上がるか、知り尽くした間柄じゃないか」

「ですから……もう……終わりにいたしませんと」

「そんなに名誉ある撤退を望んでいるの？　まだこんなに若々しく瑞々しいのに？」

「ええ。やせ我慢だとお思いでしょうが……醜くなった姿をお目にかけたくありません」

「今なら、間に合うから？」
「ええ。恐らく、ギリギリですわ。私はグスタフ様より十五歳も上なのですよ」
もう一度強引に抱けば、何か大切な物が壊れそうだった。
「……いつ、ミズホに立つの？」
「十日後には、失礼したいと思います」
「今度戻っても、僕とは寝ない……そう決めたんだな」

ついさっき僕の腕の中で激しく反応した時とは、まるで違う固い決意が感じ取れる。僕が更に強引に事に及ぶ事は可能でも、そのせいで僕とユリエの間の大切な絆が損なわれるのは、もっと耐え難い気がしてきた。

「じゃあ、あと九日、いや、出発するまで一緒にベッドで寝てくれ。寝るだけでいいよ。こんな強引な事は、もうしないから。そして、一緒に夕食を取ってくれ。頼む」
「ええ、わかりました。そのようにさせていただきます」

自分から僕に体を摺り寄せてきた。これほど互いの肌は馴染むのに、別れ話とは……

「お小さいころは、私が良く抱っこしてさし上げましたのに、今はこんなに立派な殿御ぶりでいらっしゃる」
「ユリエはずっと、変わらず綺麗なのにな」
「いえ、ずいぶん変わりました。髪には白髪も混じっておりますし、これからはもっと……。だって、私はグスタフ様より皇后陛下に近い年頃なのですもの、当然ですね」
そうだ。改めてそう言われてしまうと、確かにそうなのだった。
母上は生んでくださった恩は有るけれど、一番僕の面倒を見てくれたのはユリエだった。

「ユリエに……孝行しないといけないか……」
「何だかそれでは、物凄く年を取った様な気がしてしまいます」
「そうか。言葉は難しいな……大好きで、大切で、独り占めしたいって事なんだと思うんだけどな」
僕は、ユリエに沢山キスをした。体中、すみからすみまで。最後に互いの舌と舌を絡ませるような熱っぽい接吻をして、まぶたにキスを落としてから言った。
「おやすみ」
ユリエはいきなり、ストンと眠りに入り込んだようだった。その顔をしばらく見つめるうちに、僕も深い眠りに入った。

「この子を、可愛がってやってください。でも、私の次にですよ」

ユリエがメイド見習いの服装で出てきたので、これは夢なんだとはっきり分かる。この子、というのは同じ格好のチャスカだった。僕が頷くと、ユリエは僕を抱きしめて、まぶたにキスをしたのだった。いつの間にか僕は幼い子供に戻っていた。ああ、夢の中だからな、と僕は夢を見ながら納得したのだった。そして、はっきり意識が戻ると、現実の朝になっていた。

それから十日、ユリエは僕と寝床と夕食を共にした後、ミズホへ旅立った。
「手紙を差し上げますから、泣いてはいけませんよ」
港で船に乗り込む間際のその言葉は、幼いころの僕に向けて言った調子そのものだった。僕は無言で頷くと、ぎゅっと抱きしめた。ユリエの旅が安全で、ミズホでも元気でいられるようにと願いを込めた。

ユリエが立ち去っても、まだこだわりも有ったし、母上の死から間もない所為も有って、一月ほど僕は一人寝を通していた。夕食は

毎晩父上と一緒だったし、朝食はフレゼリク・レオポルドと食べ、昼食は官僚連中と一緒だ。葬儀で滞った事務処理も有ったし、葬儀に参列した他国の王族や大貴族らに対する答礼の手配も、まだ少々残っていた。

風呂に入ると、さっさと寝てしまうので、チャスカとはあまり顔も合わせなかった。ようやくすべての外交的な答礼に関するあれやこれやが片付いた頃、住まいに戻ると、ドアの前で倒れているチャスカを見つけて驚いた。熱が高い。他のメイドは通いで、住んでいるのはチャスカだけだ。あとは僕の居室スペースを挟んで反対側に二人の侍従が交代で詰めている。一人に暖炉の火を興させ、急いで医者を呼んでこさせた。

「過労状態であったところに、風邪を引いたと思われます」

どうやら僕が父上の所で夕食を終えた後、更に父上と話し合ったり、母上の遺品の整理に立ち会ったり色々有って、住まいに戻るのが遅かったせいらしい。僕が戻ったら、帽子や外套を受け取って、風呂場に入り込まないにしても着替えを用意したりしなくてはと、律儀に待っていたようなのだ。僕はそんなことはすっかり全部自分一人でやってしまうつもりでいたので、チャスカがそこまで気にしているとは思っていなかった。

「ヤタガラスは？」

「ショウザブロウ殿の所かと。ミズホ風の朝餉が出してもらえると、そうおっしゃっておられました」

意外な事に、正三郎は妻と一緒に帝国に残った。まだなにやら帝国でやりたい事でもあるようだ。僕は住まいと食い扶持を与えて本人の好きにさせているので、ミズホに戻るより自由なのかもしれない。

「この子は、ここで寝かせますので？」
「この子の部屋は寒いからな。明日になったら客用の寝室に移すが、今夜はこれでいいよ」
「殿下はどちらでお休みに？」
「この長椅子でいいさ」
「それでは余りに……」
「いや、いい」
そういうと侍従たちは下がった。

翌日、メイド達に言いつけて、客用寝室にチャスカを寝かせた。そして戻ってきたヤタガラスに介護を頼む。ヤタガラスはチャスカの不調に気付かす、正三郎のところに行っていたことを済まながっていた。

「それにしても、あれじゃのう、せっかくの折に、何も無かったのか」
「せっかくの折とは？」
「抱き上げて寝かせたり、着替えさせたり、口移しで薬でも飲ませるとか」
「馬鹿か、何を考えているんだ」
「バ、馬鹿とはなんだ、グスタフが放っているのがそもそも良くないのだぞ」
「だからって、なんでいきなり口移しだ。『吸い飲み』って道具がちゃんとあるから、寝たままの病人にも水や薬を飲ませることは出来るよ」
「何じゃあ、艶消しだな」
「何か？　僕を色キチガイにしたいのか？　熱のある幼い子を餌食にしろって言うのか？」
「いや、そうではない」
「そういう言い方に聞こえるよ」

「チャスカは待っているんじゃ、グスタフが自分を見てくれる日を」

チャスカの熱は二日ほどですっかり引いた。僕はその後もずっと、いつも通りの日程をこなし続けた。

そんなある日の御前会議の後、一旦僕は住まいに戻った。誰の出迎えも無かったので、そのまま書斎に入ろうとしたら、話し声が聞こえる。チャスカだ。

「わたしは、でんかをおしたいしてますが、でんかはわたしをなんともおもっておられません」
「そうかな。お前はグスタフの子を産むぞ」
「そうですか、うれしいです」
「だがその前に一度、故郷に戻った方が良い。うむ、グスタフと共に祖霊の祝福を受けよ」
「おい、モナ、それは本当か？」

僕はモナに貰った鏡を書斎の机に飾っているのだが、僕の呼びかけ以外、誰にも反応し無かった鏡をチャスカは使っているようだ。

「おお、グスタフか。このチビは、すごいやつだ。見た事も無い色の不思議な鳥の加護を受けている。波動が美しいなあ。早く、このチビの祖霊の地に赴き、一緒に祝福を受けよ。きっと良い事が有る」
「モナ、子供がどうのこうのって、本当か？」
「本当だ。まだ授からんだろうが……ん？　交わっておらんのか、まだ」
「ああ」
「なら、交われ。チビはお前が好きだぞ」
「そんな事を言うがなあ」
「交われば、チビとの絆が強まり、グスタフもチビの祖霊の加護を

受ける。良い事ではないか。ではな、うんと可愛がってやれ」

モナは例によって、言いたい事を勝手に言い散らかすと、姿を消した。

チャスカは僕の書斎を掃除していて、机に乗せた鏡も艶出しの布で拭いていたらしい。いつもは鏡は触らなかったが、今日は気が向いてふと拭いたそうだ。

「すると、でんかのあねうえさまが、おすがたをうつされました」

「ふーん、モナが僕の姉だと名乗ったか」

「はい。おおきなけもののかごをうけておいでだと、うかがいました」

「モナに向かって言った事は、本当か？」

「そのう……でんかをおしたいしている、ということですか？」

「ああ。親を思うような気持ではないのか？　僕はお前の父親であってもおかしくない様な年だぞ」

「ちがいます。ちちはたいせつですが、おしたいするのはでんかだけ、です」

夢見がちな黒い瞳を僕に向けるその顔を、これまでになく愛らしく感じたのは確かだった。

僕と新たな出会い・6（後書き）

誤字三か所訂正しましたが、見逃しが有ると思います。
教えていただけたら、大変ありがたいです

僕と未知の大陸・1

「祖霊の祝福を受けるためにって、抵抗が有るよ」
「理由はどうあれ、モナも賛成なんじゃろ、さっさと事を運べばよかろうが」
「さっさって、なあ……」
ヤタガラスに僕の葛藤なんてわかるはずもないか。それでも、抵抗してみる。
「僕のいた世界では男女の付き合いは『お友達から』と言うのが常識だった」
「じゃあ、お友達づきあいでも何でもすればよかろう」
「面倒だ」
「ではいきなりでも何でも」
「いきなりじゃあ、あんな子供を壊すじゃないか。娼館でも行くよ……つか、何で毎日、こんなバカな話をするんだ。もういい。僕は忙しいから、チャスカがおかしな事に巻き込まれないように気を付けておいてくれよ。ミッケリ辺りの奴隷の取引に手を出している連中だって、街中はうろうろしてるから、黄金宮から外に出すなよ」

街で恐ろしい目に逢ったせいだろう。チャスカが外に出たがる事は無かったし、先輩メイドも、皆チャスカに買い出しなどをさせないように気はつけている。だから、特に問題は無いだろうと思っていたのだが、予想外の事態が起きた。その夜、僕が戻ると、チャスカが行方不明で皆が大騒ぎしていた。ヤタガラスも途方にくれていた。

「ヤタガラス、落ち着いてチャスカの気配を探れ」
僕がヤタガラスに手を添えて集中を促すと、ヤタガラスが金切り声を上げた。

「港だ！　港の船に積み込まれるぞ、急げ！」

僕は肩にカラスの姿を取ったヤタガラスを乗せて、馬を走らせた。後に近衛兵三十騎余りが続く。港で気配を突き止めたヤタガラスは、船積み直前の荷物を集めた倉庫の屋根に止まって高く鳴いた。

「あの建物に一斉に突っ込め」

僕の号令で、一斉にみんなで倉庫に突っ込むと、見るからにならず者と言う感じの男たち五人が、椅子に縛りつけたチャスカを鞭で打っていた。僕はその光景を目にした途端、頭が沸騰して、鞭を握っていた男を突き飛ばしで鼻を殴り、腕を折ってやった。僕にしては珍しい反応だと、自分でも思った。

「どうしたんだ、いったい？」

僕はチャスカを抱きしめると、意識を探った。

（碧の胸飾り、神殿の宝物を、あんな男が持っているなんて許せない。取り返さないと、神殿に戻さないと）

気を失った男の服をはだけると、巨大な翡翠細工のペンダントが出てきた。それを外し、チャスカに見せると、ほっと安心した様に気を失った。

五人の男たちはそれぞれ凶悪犯用の独房に放り込み、男たちが乗ってきた船の乗組員も全員牢に入れた。

「全員、ミッケリからやってきた者たちです」

「五人は特に厳しく調べろ。焼き鏝でも何でも使って構わん。あの翡翠のペンダントをどのように手に入れたか、必ず聞き出せ」

僕はチャスカを抱えて黄金宮に戻った。どうやら僕が腕を折った

男は、黄金宮に『極上』だと言うふれこみのリキュール類を納めていたらしい。房事に抜群の効果を発揮すると言う代物だが、買っていたのは父上の所の年かさのメイドだった。元来は父上が御入用で毎年購入なさっていたが、この十年はお使いになっていないと言う。

「金銭の管理も任せきりだったからなあ」

そのメイドは若いころに二、三度閨に召された事も有るらしいが、それきりであったし、子も出来なかった。身寄りも死に絶えてしまったので、父上のお住まいの側に部屋を頂いて住んでいると言う訳のようだった。父上がもう不要だとおっしゃった品物を仕入れ続け、勝手に横流しして売りさばいていたのだ。父上の個人的な費用の管理を長く任されていたので、相当な金額をため込んでいた。

「お前は怒るだろうが、ため込んだ金だけは持たせてやろうと思う。穴埋めは皇帝の歳費から良いように補っておいてくれ」

「御希望の通りに、致します」

僕がそういうと、父上は明らかにホッとなさった御様子だった。そして珍しくチャスカとの事に関する話も、なさらなかった。

さて、チャスカだが、なぜ無茶をしたのか聞いてみた所、あの胸飾りをなじみのメイドに自慢している男に黄金宮内で遭遇して、男のねぐらだけでも確かめようとつい、追跡してしまったらしい。

「なぜ、ヤタガラスを呼ばなかった？」

「おるすでしたから」

それにしても食い意地の張った頼りない守り神様だ。

何でも正三郎の女房がミズホ式の団子をこしらえるので、ヤタガ

ラスはそれが目当てで、出かけた後だったらしい。正三郎が以前自慢していたが、妻の料理は美味いらしい。そこで、食べ物目当てでチャスカの側を離れてしまうヤタガラスへの対策を施すことにした。ユリエがもう自分は使わないと言った僕の住まいに隣接した建物を、正三郎夫妻の住まいに充てることにしたのだ。そうすれば、ヤタガラスは黄金宮からあまり外に出ないで済むだろう。正三郎は黄金宮内の図書館に通いやすいし、妻はフレゼリク・レオポルドの所でナタリエの手伝いをしているので、互いに好都合のはずだ。

「あの翡翠細工、我がつがいの気が籠っておる。チャスカが身に着けた方が良いじゃろう」

まあ、嘘でも無さそうなので、ヤタガラスもいる前であの胸飾りを取り寄せ、チャスカを呼び、首からかけさせた。すると、驚いた。一瞬胸飾りが光ったと思うと今までただの丸い翡翠の大玉と見えていた所に、絵文字のようなものが浮かび上がったのだ。その絵文字に手をふれると、僕の脳裏にいつぞやの夢で見た光景が鮮明に浮かんだ。

「パカヤカシック！」
「イリャ！」
「ティクシ・イリャ！」

そうだ、あの光景だ。あの言葉は僕に向けて人々が叫んでいる言葉だ。

「ヨハンを呼べ」

ヨハンは当然の事ながら教会を非常に嫌っているが、教会に籍を置いている学者連中との付き合いは続いている。それも異端の学僧と呼ばれるような連中ばかりだ。教会の権力に関わりあうことを嫌

い、真実を見出そうとすると、どうしても『異端』呼ばわりされるものだと言うヨハンの話はもっともだと思われた。ヨハンと付き合いのある学僧の中に『語学の天才』と呼ばれる人物がいて、未知の大陸の言葉について近頃熱心に研究していると言う事を教えてくれたからだ。

ヨハンが触っても、胸飾りは何の反応もしない。それがチャスカが首に下げた時だけ、あの絵文字が金色に浮き上がるのだ。

「神殿の宝物ですか」

「チャスカが暮らしていた土地では、年に一度、この胸飾りは村々を回るらしい。村人は皆、供物をささげて迎えるようだ」

「そんな国でも、神殿の神官とかいうような聖職者連中が、上手い汁を吸ってるんでしょうかね」

「チャスカはそんな話はしないが、人間なんて文化が違ってもやることは似ているからな。有り得るんじゃないか？」

「で、その胸飾りに見覚えがあったと言うのはわかりましたが、何で光ったり絵文字が出ちゃったりするんでしょうね。兄上はこんな土地にも特別の因縁がお有りになるようだが、教会の連中が悪魔呼ばわりしたくなる気分はわからんでもないなあ」

「そうか？」

「知れば知るほど兄上は異教の神そのもの、みたいな存在でいらっしゃるのですから。教会が『悪魔』と呼ぶのは異教の神も含まれますからね。兄上もヤタガラスも教会の価値体系では悪魔で間違いないでしょう。で、僕は悪魔の弟ですから、教会嫌いなのも当然ですね」

「ネスはもうすぐ死ぬみたいじゃないか。後釜はお前と大差ない年頃の若者らしいな」

「僕はネスから逃げる方策が有りましたし、実際兄上が来て下さいましたが、ニコロの奴はとことん環境に順応するしか方法が無かっ

たんでしょうよ。あいつもネスなんて死ねば良いと思っているのは確かですが、枢機卿なんかになっちゃうと、上手い具合に手持ちの駒として活用してるんでしょうね。僕と違って野心家だったし」

「ニコロ・ネスタ枢機卿は氷の美貌の持ち主とかで、女の信者に人気みたいだな」

「ニコロは必要なら、誰にでも愛想を振りまきますが女は嫌いです。母親がひどい女だったみたいでね。大好物は兄上みたいな美中年ですから、気を付けて下さい。って言うか、兄上ならあのニコロをたぶらかせるかな？」

「おいおい、僕はそっちの経験はまるで無いぞ」

「ハハハ、兄上は正々堂々と勝負なさるのがお似合いです。帝国の摂政殿下ですからな。でも、ウインクの一つもしてやると、ニコロの受けは良いかもしれませんと言う事ですよ」

「ネスタ枢機卿の話は置いておいて、お前の友人の外国の言葉に詳しい学者だ」

「エガス・モタ修道士ですか。最近は奇妙な言葉の解明に情熱を注ぎ込んでいるようですが……って、その言葉なんでしょうか、この絵文字は」

「そうじゃないかと思うのだ。僕がこれから言う言葉を書き取って、意味をそのエガス・モタに聞いてみてほしい。どうもチャスカが話していた言葉では無いようなのだ」

僕は「パカヤカシック」「イリャ」「ティクシ・イリャ」という三つの言葉を書き取らせた。そして至急の密書としてヨハンから、ミッケリ領内にいると言うエガス・モタ修道士に送らせた。そして十日と経たないうちに返書が届いたようだ。

「兄上、あの出不精のエガスが自分自身で兄上にお目にかかってお話したいそうです」

聞けばエガス・モタは名家の出らしいが、現在は最も戒律の厳しい修道士会に所属し、農作業と学問で明け暮れていると聞く。その修道士会に所属している理由は信仰の追及などではなく、教会の権力闘争から距離を置き、好きな研究に没頭するためらしい。驚いた事に、その返事を聞いてすぐ翌日にヨハンに伴われて、本人が僕の所に面会にやってきた。修道士は戒律により、深いフードを目深にかぶり異性に顔を見せないようにしなければならない。モタ修道士も僕の部屋に入って初めて、フードを取った。

「おお、あなたは……戴冠式の日に合唱団の音楽監督をやっていた方か」

「はい、さようでございます」

弟がネスの寵童に無理やりされてしまって、復讐の機会を狙っていたと言う人物だ。

「弟さんは、どうなさった?」

「おかげをもちまして、無事に脱出し、還俗して今は結婚しました。来年には子も産まれます。ネスは苦しみながら死ぬようですし、私などが復讐など企てるまでも有りませんでした」

互いの弟がともかくもまともな生活を出来ている現状を喜び合ってから、本題に入った。

「この絵文字ですが、この部分は数字です。同じ形が三個並んでいますね。数字の表記もいろいろなやり方が有るようですが、この絵文字一個が数字の1を意味するのははっきり分かっております」

1が立て続けに三個、百十一では無いのか?

「そしてこの部分。大きい、ないしは偉大を意味する文字で、その文字はこの、王ないしは支配者・指導者を意味する文字を飾ってい

ます。そのう、殿下、殿下の所に身を寄せていると言うその少女は、この絵文字は読めませんでしたか？」

「絵文字は神の秘儀を伝えるもので、普通の民衆には読めないそうだ」

「なるほど……」

「僕が伝えた三つの言葉の意味は、何だか分かったかな？」

「未知の大陸の西の端の方の言葉らしいです。虐待されていたので修道士会で見かねて引き取った少年が教えてくれましたが、パカヤカシックは偉大な指導者、イリャは光、ティクシ・イリャは始まりの光で、始原の光であるとされる創造神のようです」

なるほど……何だか神様めいた存在に関する言葉なんだなあ。

「ですが殿下、私が知りたいのは、なぜ殿下がその言葉を特に気になさったのか、です」

「夢なんだよ。幾度か見た奇妙な夢の中で聞いた言葉だ」

だが、それが僕のこれからと、どう関わって行くものだろう？

僕と未知の大陸・2

「殿下、チャスカ殿を監禁したミッケリの連中ですが、どうやら未知の大陸で手に入れた金銀財宝を商売の元手にしたようです」
「どうやって手に入れたのだ？」
「どうやら神域らしき泉から財宝を纏ったむくろが幾つも見つかり、勝手に引きはがしてきたようです」
「で、あの胸飾りは？」
「鉄砲を欲しがった土地の有力者に、凄い宝石を持ってきたら新品の銃をやると持ちかけたら、どこからか持って来たと言います」

取り調べた者の話では、どうやら未知の大陸の東端には、ミッケリ商人が出入りするようになった港が有るらしい。当初は軍船を押し立てて、制圧する予定だったが、ヤタガラスの活躍でフイになった。今はあまり大きくない帆船単独で海を行き来する投機的な商人なり貿易商なりが各地からやってきてそれなりの賑わいを見せているらしい。

「製鉄技術も持たず、ネジの構造も知らぬ連中に銃の複製など出来ようはずもないから、弾切れになったら、連中にとって銃はただの鉄の棒だろう、などと申しておりましたぞ」

僕も直々にあの腕を折った男を尋問した。今は腕に添え木を当てて吊っている状態だ。僕がどこのだれか知って、何やら諦めがついたのか、思いの外さっぱりした表情だ。

「可愛がっていらっしゃるあの子を痛めつけたおいらの手を折ってしまわれたのも、致し方の無い事でさ」
変な納得の仕方をしている。変でもないのか。ともかくもこの男

の中のわだかまりは失せたようで、僕の尋問に素直に応える。
「素直だな」
「へい。帝国の摂政殿下は人の心を読む異教の神のような方だと有名ですからね。嘘言っても始まらんでしょう。ですから、何でもお尋ね下せえ。全部すっかりお話いたしやすよ」
あの胸飾りの由来などは、やはりこの男は全く知らなかった。鉄砲を欲しがった土地の有力者が神殿の物を買収して持ち出させた、と言う経緯ではあるようだが、それ以上は何もわからない。
「財宝を纏ったむくろが見つかる場所とは、どんな所だ」
「海辺からちょっと入っただけのところなんですがね、冷たいきれいな水が満々と満たされている泉が有りまして、一種の神域かなんからしいです。俺たちの仲間が涼みがてら飛び込んで、冗談半分に底の方にもぐったら、何か腕輪らしきものを見たんでさ。引き上げたら、人の骨も一緒だった、てわけで。後で聞いた所じゃあ、雨の少ない年には水の神への供物として、村で一番きれいな若い娘を着飾らせて足に重りを結わえ付け、泉に放り込むんですと。そう言う放り込まれた女の子のむくろだったんでしょうよ。かなりの数の金の腕輪や銀の飾り、翡翠の首飾りなんかが出てきましたぜ。むくろはいらねえから、また泉に戻しましたがね。お宝は頂いたってわけで」
「何体分、引きはがして持ってきたのだ?」
「良くわかりませんが、百じゃきかねえだろうなあ。生きている人間に銃をぶっ放したり、村を焼打ちにしたりした連中よりは、あっしらの方がマシでしょう?」
「盗人には違いないな。褒めた話ではない。で、なぜあの子を鞭で打っていた?」
「身分証で皇太子殿下付きと知れたもんですからね、うまい具合に忍び込む方法を聞き出そうとしたんでさ。後貴重品の仕舞い場所とか。ですが、全然口を割らないんでね、焦れてました」
「それで鞭打ちって、酷かないか?」

「異教徒の原住民みたいだから、まあ、奴隷と大差ないだろうと思って仕置きって感じですが、殿下が大切に扱ってらっしゃる子だと知って、まずい事をやったもんだと思ってます」
「帝国では奴隷の取引は許してないし、存在も許していない」
「へいへい。すみません」

ミッケリでは黒目黒髪の人間は異教徒で、未開の民と言う偏見が強いのを忘れていた。

取り調べの帰りに、ヨハンの邸に立ち寄った。エガス・モタ修道士にもっと未知の大陸についての話を聞きたいと思ったからだ。

「良い所にお出で下さいました。先日お話いたしました修道士会で引き取ったあの大陸出身の少年が本日到着いたしましたので、彼から話をお聞きください」

ヤガーと名乗るその少年は修道士見習いの身分だが、実質はエガス・モタ修道士の秘書というか助手のような役目を果たしているらしい。

「ヤガーはテパネカと言う国の貴族の息子なのです。その為、いくつかの国の絵文字が読めるようです。語学に関して天才的な勘を持っておりますし、数学や天文学にも才能が有る様なので、できましたら帝国で自由に学問をさせようかと考えまして呼び寄せました」

ヤガー少年は十六歳であるらしい。小柄だが姿勢が良く、黒目黒髪で象牙を思わせる肌の色で貴族的な顔立ちだ。非常にきれいな発音でこちらの言葉を話すので驚いた。

「モタ先生に見せて頂いた絵文字の写しは、一部がつじつまが合い

ません。ここ、そしてここですが……」
「ああ、そうだな、今度殿下にお願いして、はっきり確かめた方が良さそうだ」
「私が考えた形が正しいと致しますと、この文章はこう読めます。『１１１番目の偉大な王、王の中の王、始原の光を頭に頂く真の指導者により、美しき碧の鳥の寿ぎは蘇る。鳥の力を秘めし者と偉大な王の血が永久に結ばれし時、大いなる祝福がスーユに満ちる』……スーユとは王国を構成する行政単位の意味にも、単に国と言うほどの意味にも使われる言葉なので、どちらかはっきりしませんが」
「始原の光を頭に頂くとは、どう言う意味なんだろうか？」
僕が尋ねると、少年は黒い瞳を伏せて考えながらこういった。
「幾つかのあの大陸の国々で、世界の始まりの光に関する伝説が有ります。その光の名残が黄金であるとされ、始原の光を頭に頂くとは、輝くような金髪……恐れながら殿下のような御髪の色の偉大な人物を指すのかもしれません。殿下が御即位なされば百十一代目の皇帝陛下とならられるのだと存じておりますが……」
ヤガー少年の説明によると、この絵文字は少年の故郷より南西の方角にあったワルパという古い王国の形式で、その地はいまは四つの王国を統一した帝国ともいうべき国家の領土なのだと言う。アイリュ帝国と言うらしいが、その国の今の皇帝は広大な領土を十分に掌握できておらず、各地で小さな反乱や武力蜂起が絶えないらしい。どうやら古い歴史を持つ四つの王国の貴族階級の生き残りたちから見ると、アイリュの皇帝は簒奪者であり成り上がり者で有ると見なされ、正当な統治者ではないと言う事らしい。
「その理由の一つに、ワルパの祖霊・碧の鳥ケツァールの祝福が得られていない事が上げられます」

だが、チャスカはどうやら大陸の東端の地域にいたようなのだが、なぜ、ケツァールの聖痕を宿しているのか、あるいはあの胸飾りがなぜ光るのかが腑に落ちないと問うと、ヤガーは明快に答えてくれた。

「ワルパの民には古くからこのような言い伝えが有ります。ワルパの王家にケツァールの祝福を受けた娘が生まれる。その娘は翡翠の胸飾りをつけ西の海より１１１番目の偉大な王を導き、共に大地を総べると。その言い伝えを恐れたアイリュの皇帝は、ワルパの王族・大貴族を強制的に故郷の西の海に近い豊かな土地から、はるか遠い東の海のほとりのやせ地に移住させたのです」

一度はあの翡翠の胸飾りをアイリュの皇帝は取り上げたのだそうだが、余りに不祥事が続き、ワルパに戻せと言う神託が下された所為もあって、再びワルパの民の手に戻ったのだと言う。

「その次第は随分とテパネカでも話題になりました。私の祖父が現役の神官を務めていた時分の話ですが」

少年は僕の方を幾度か見ながら、色々と考えているようだった。

「ヤガー君としては、僕はその当事者だと思うのかい？」
「そのチャスカという方にお目にかかりませんと、何とも言えませんが」
「会っただけで、わかるものなのか？」
「私は、テパネカの神殿に伝えられた人相と手相の鑑定法を心得ております。殿下の御顔立ちはまさにその当事者であられても不思議は無いかと思われます」
「じゃあ手相も見てくれるかい？」

少年は机の上に僕が拡げた両手を注意深く観察していたが、結果が出たらしい。

「殿下が大変に御長命なのは間違いありません。お亡くなりになる寿命が全く読み取れない手相は、初めて拝見しました。心身ともに御健康でいらっしゃいます。男女を問わず多くの者が殿下を慕って集まり、お力を貸すでしょう。これまでになく大きな国が出来るのかも、いや、これまでとは違う形の国が出来るのかもしれません。その指導をなさるのが殿下です。あまたの御子が授かりましょうが、お子同士の争いは生じますまい。殿下ほどの御身分の方には珍しい事ですね。兄弟姉妹の方々とも、御円満でしょう。特に姉君のお力は大きいようです」

その一部始終を見聞きしていたヨハンとエガス・モタは、自分の手を改めて見ていた。

「私の手は、どうなのかなあ」

「以前一度見てもらった時に、金には縁が無いが好きな事をやって一生を送れるとは言われましたなあ」

翌日、午後にヨハン・モタ修道士・ヤガー少年の三人を僕の住まいに招待してチャスカに引き合わせ、翡翠の胸飾りの現物も見せた。モタ修道士は親か夫か主人が同席しないと「女性との面会は禁じられています」との事だったので、午後のお茶の時間を共に過ごすことにしたのだ。ヤガー少年はチャスカの話す謎の言葉も、流暢に話した。チャスカは故郷の言葉で久しぶりに会話して、大いに喜んでいた。

「チャスカ殿が古のワルパ王国の王族の末裔で有る事はほぼ確実で

す。アイリュの皇帝が東の海のほとりに移住させたのは、ケツァールの加護を強く受けていると思われる五十家族の人々だけです。残りの大半の民は今も先祖伝来の土地でアイリュ帝国の総督の支配のもと、虐げられて暮らしているはずです」

それから、ヤガー少年は出された茶も飲まずに、考え込んでいた。そしてチャスカに一言二言話すと、こういった。

「チャスカ殿に、ケツァールのつがいの黒い霊鳥について何か御存知ないかお尋ねいたしましたところ、殿下が良く御存知だとおっしゃいましたが、如何なるわけでございましょうか？」

「その霊鳥がミズホのヤタガラスを指すなら、僕の友で、今は黄金宮に住んでいる。呼んでこようか？」

「失礼ながら、殿下はその霊鳥と意志を交わす事がお出来になりますので？」

「会えば分るさ」

僕の言葉が終わるや否や、ヤタガラスが部屋に入ってきた。

「グスタフ、今日は珍客がおいでのようではないか」

ツカツカと入って来たヤタガラスを「ミズホの霊鳥・ヤタガラスだ」と僕が紹介すると、ヤガー少年は驚いていた。驚いてはいたが、すぐに冷静な顔つきに戻り、ヤタガラスに質問した。

「人の形をお取りになって、お話しになるのですね。恐れ入りますが、ヤタガラス様、質問に二、三お答えくださいますか？」

どうやら、ヤタガラスとつがいの出会い、そして急な別れについて尋ねたようだった。

「殿下御自身がヤタガラス様と胸飾りをしたチャスカ殿を伴われ、ミズホの海域からワルパ王国の故地を目指されれば、万事は古の言

い伝え通り、胸飾りに現れた絵文字の言葉通りに運びましょう」

ヤガー少年が言葉を終えた途端、モタ修道士は焦った感じで僕にこう、甲し入れた。

「その折は、私と、このヤガーもお連れ下さい！」

「わかりました。そのような事が実現するなら、御一緒にお連れしましょう」

僕はヨハンに二人を引き合わせてくれた礼を述べるとともに、十分保護するためにはどうするべきか相談した。とりあえず、ヨハンの所に皇室の一員としての警備の者を十分に遣わす事にした。そして二人の研究活動資金と、帝国内の幾人かの学者への紹介状をしたため渡した。

「皇太子殿下直筆の紹介状とは、有りがたい事です」

モタ修道士は非常に喜んでくれたようだった。

「恐れながら、殿下」

ヤガー少年は非常に言いにくそうに、次の言葉を選んでいるようだった。

「チャスカ殿と夫たる方との御縁は、まだ、結ばれておりません。殿下が……伝説の王たるためには、そのう……」

「わかった。近いうちに決着をつける」

僕がそう応じると、ヤガー少年は真っ赤な顔になって、沈黙した。

「ヤガー君って、堂々として貴公子って感じなのに、そういう方面はやっぱりうぶで可愛いな」

ヨハンが笑いを含んだ声で言うと、モタ修道士がこう応じた。

「元来が清らかな育ちのようですから、当然でしょうなあ」

ヤガー少年の国は、チャスカの先祖の国程虐げられてはいないが、つい最近、アイリュ帝国の属国になったそうだ。

「それでも過去のアイリュの皇帝や大神官と、テパネカの王族たちが姻戚関係に有りましたので、さほど民はひどい目には合っていませんが……神殿の秘宝を取り上げられてしまいました」
「どんなものかな？」
「黒曜石の刃に黄金づくりの柄の聖なるナイフです。生贄のナイフですから、本当は必要なかったのかもしれませんが……」
死の神の力を取り込み、王家の力を強める呪いに使ったのだと言う。人間を生贄とする時のための物で、めったなことでは使われず、普段は神殿の奥深くに秘蔵されていたそうな。
「あのナイフを百一回目に使った時、その国の王と民に災いが及ぶと言う秘伝を、我が国の大神官はわざと教えなかったようです」
「君の国に有った段階では、何回使用したとされているんだ？」
「五十五回でしたね。よほどの大災害なり深刻な内乱でもない限り、めったに使わないものですから」
「で、アイリュの皇帝はそのナイフをどう扱っているんだろうな？」
「軍を動かす前に毎回人間の生贄をささげ、そのたびにあのナイフを使っているようです。そのおかげかアイリュ帝国の領土は膨張を続けています。ですが、ミッケリの連中に攻め込まれ、私の様に船で運ばれ奴隷にされるものが出たと言う事は、ナイフの限界が近いのでしょう」
「なるほどなあ。ミッケリの連中は知っているだろうか、その話」
「知る筈はないかと。我がテパネカの王族の中で、限られた者だけが知る話ですから」
「ヤガー君は王族だったのか。気品ある立ち居振る舞いで、僕は感心していたんだが、事情を聞けばなるほどと思うよ」
「殿下、ヤガーがあの土地の学問に通じていることは存じておりましたが、王族である事は今初めて聞きました。故国の宗教や歴史の話をこれほどしっかりしてくれたのも、初めてでしたぞ」
「異教の話を修道院内で迂闊に致しますと先生に御迷惑が及ぶので、できませんでした。申し訳ありません」

学問の自由が保障されている帝国の方が、二人には居心地が良いようで、僕は安心した。

僕と未知の大陸・2（後書き）

未知の大陸関連の人物のまとめです。

チャスカ
かつて未知の大陸の西海岸地域に存在したワルパ王国の王族の末裔らしい。
アイリュ帝国の皇帝により、ワルパの王族は東海岸のやせ地に強制的に移住させられたという。
ワルパ王国の祖霊・碧の鳥ケツァールの祝福を受けた伝説の娘であるらしい。

ヤガー
アイリュ帝国の属国になったテパネカの王族の少年。テパネカの王族としての教育・教養を身に着け、語学・数学・天文学に優れた才能が有る模様。ミッケリの連中により奴隷にされ虐待されていた所をエガス・モタ修道士に保護される。

エガス・モタ
神聖教会の修道士。異端の学僧で僕の異父弟ヨハン・ベルワルドの友。ヤガーの保護者兼師匠。

僕と未知の大陸・3（前書き）

書き直しましたが、どうでしょうか？

僕と未知の大陸・3

「チャスカ、おいで」

当然と言えば当然なのだが、体がカチカチだ。僕は一晩でどうにかしてしまおうなんて、がっついた事は考えていない。先は長いはずだし、焦る必要は無い。ここ数日、僕は意識的にチャスカの側に体をよせたり、手を握ったり、時に額や髪に軽くキスを落としたりした。その反応を見る限りでは、僕を受け入れる気持は十分に育っていると見て良さそうだ。

「こんな事、やるんだけど、わかっているか？」

僕は書斎のデスクの椅子に掛け、膝にチャスカを乗せながら、一緒にいわゆる春画の類を見た。帝国の物もミッケリの物もミズホの物も有る。どれもその手の作品としては出来の良いものばかりだ。平成の日本なら未成年に見せられない画像ってやつだが、チャスカは息をひそめて見つめている。呼吸が荒くなって、顔が真っ赤だ。無理はさせないつもりだ。先ずは僕の体に慣れさせ、僕に触れられる事を受け入れさせようと思った。

「今から一緒に風呂に入るよ」
「おせなか、おながしいたします」

喉から胃袋が飛び出しそうな顔になっているくせに、健気にもそんな事を言う。春画の中には風呂で戯れる様子を描いた作品も幾つかあったから、僕がどんな事をするつもりか、見当はついているだろう。

「今夜は僕が全部脱がせるけれど、大丈夫かな？」
「はい」

小さいけれど、覚悟は決めていたと言う声だ。ドレスの上半身を緩め、スカート部分をたくし上げる。下着姿になると胸をはだけさせる。透けるように白い乳ぶさは、わずかな身悶えにも弾む。愛撫の手を誘うには十分すぎる愛らしさだ。

「感じやすい素敵な乳房だ」

僕が耳を舐りながら囁くと、ほんのり薄桃色であった顔が真っ赤になった。恥ずかしいらしい。

「可愛いな、チャスカ」
「ああ……で、でんか」

チャスカはまだ下着に包まれた腰をうねらせて、昂ぶった声を上げた。首すじに幾つもの軽いキスを落とすと、チャスカは自分から首を捩じるようにして口づけを求めてきた。そのいじらしさが、何とも好もしい。ほんのり額に汗が浮かび、甘い体臭が一枚一枚脱がせるにつれて濃くなって行く。

「手をどけて、僕に全部見せて」

羞じらいの色がチャスカのシミひとつない輝くばかりの体からゆらめきのぼった。チャスカは手で赤くなった顔を覆った。その体を抱え込むようにして浴室にはいると、互いに体を洗う事にしたが、それだけでチャスカには刺激が強すぎたのだろう。湯船で僕の膝をまたぐ格好で抱きしめられても、ぐったりと体重を預けている感じだ。

「恥ずかしいのか？」
「はい」
確かに恥ずかしい事の連続だろう。羞恥の所為も有るのか、体中が薄桃色に照り輝いている。
「こうして僕に抱きしめられるのは、嫌？」
「いいえ」

そう返事をすると、嫌ではないと言う意思表示のつもりか、感情の高ぶりの所為か、僕の口づけをせがむように自分から顔を近づけた。僕が唇を塞ぐと何の抵抗も見せず唇が開き歯が道を譲った。委ねられたちっちゃな舌を僕は思い切り舐めあげる。

風呂から上がって互いに全裸のままベッドに入り、水さしの水を口移しで飲ませた。それから、指と唇だけで感覚を煽り立てておいて、最後までは行かず、後ろから抱きしめ僕の物を押し当てた姿勢のまま、眠った。

それから三日、共に入浴し、ベッドで抱きしめ合って眠る事を続けた。本当の二十代の若者なら、こんな気の長い焦らしは出来ないだろうが、僕は見た目が二十代なだけで中身は中年、いや前世分をカウントすると初老のオヤジだから後の事も計算に入れて、冷静にチャスカの感覚が広がり育つのを待つ根気強さは持ち合わせている。男の手管に焦らされて甘く泣き悶える事も、深い悦びを得る事に繋がる道筋だと思うが、まずは順調と言えそうだ。幾度も愛撫とキスだけで達した体は、自然に次の段階を望むようになる。僕はチャスカ自身が、一線を越えたいと自発的に口にするように仕向けた。

「わたしをすっかり、ぜんぶ、でんかのものにしていただきたいの

です」
「十分気をつけはするが、最初は相当に痛むはずだ。構わないの？」
「はい。おしたいしていますから、へいきです」
「可愛い事を言う」

平気などと言うが、僕が服を脱がせると、まだどうしたって体中が緊張して来る。口づけてやりながら感じやすいポイントを刺激し続けてやると、鼻で甘くむずかるような歔き声をあげだした。

「気持ち、良いだろう？　感じているんだね。良い表情だ」
「ああ……」

チャスカは真っ赤に染めた首を、なよなよ揺さぶる。鼻にかかった甘え声を上げシクシク泣きつつ、僕の指がもぐり込んで来るのに身を任せている。だが、感じやすい体が本人の意図せぬ内に、熱い感覚のうねりに乗り始めていることに、ひどく狼狽している。

「恥ずかしがらなくて良い。感じやすいのは、素敵な事なんだから」

どうやら、死ぬほど恥ずかしいらしいが、構わず多少強引に感じやすい箇所を探り当て、丹念に刺激し続けてやる。

「あッ、あッ……へん、へんです……」

チャスカは可愛い戸惑いの声をあげつつ、首を振りたてる。幼い美貌が淫蕩な喜びに火照っている様は、僕の目を楽しませる。ついに鋭い快感に反応して体がピクンと跳ね、歔き声が噴き上がる。

「あ、だ、だめえ、へん、へんになっちゃう」

チャスカは衝き上がるものに逆らうように激しく顔を振りたて始めた。
僕は舌と指の動きを一層細やかにした。
「あ……あ……い、いや……う、うんッ……」
愛らしい呻きと共に体全体がのけぞり、腰がブルブルと震えながら僕の指をしっかり食い締めた。
「へん、へんに、なっちゃいます」
「思い切り、変になりなさい。そうした場合に言う言葉は、教えてあげただろう?」
呼吸が荒く、もうまともには受け答えできないだろうに、健気にも喘ぎながら「はい」と返事をする。本当に可愛い。沢山の軽いキスを落としながら、指の方は休む事なく高い水音を上げ続けさせる。やがて明確に達した事を知らせる言葉を口にした後、少女らしからぬ獣めいた呻き声を上げ、恍惚とした表情を浮かべたまま、チャスカは気を失った。そこから僕は一気に事を運び、そのまま意識が戻るのを待った。
「痛むか?」
無言で首を横に振る。初めてなのだ。痛まないはずは無い。
「ひとつに、ひとつになれましたか?」
「ああ。すっかり中に納まったよ」
僕はその状態でゆっくり待った。その間、僕は僕の力とチャスカの力が寄り添い融合し始めるのを感じた。並みの快感の次元とはま

るで違う何かが、はっきり感じられる。チャスカの内部がゆっくりと複雑玄妙な反応を示し始めた。

新鮮だった。新しい境地を感じた。これまでの妻たちとはまた違う、何か大切な絆が新たに結ばれたのだとはっきり確信できるのは、僕にとっても深い悦びに繋がったのだった。

「愛しているよ、チャスカ」

「おしたいしています、でんか」

瞬間、僕の脳裏に碧の光が煌めいた。そして、あの碧の霊鳥の高く鳴く声が聞こえたような気がした。事が果ててからもしばらく抱きしめ合い、身じろぎもしなかったが、互いの呼吸が整い鼓動も落ち着くと、チャスカがほんの少しだけ体を解き、淡い光を指さした。

「でんか、むねかざりが」

チャスカの言葉でベッドサイドに置いたあの翡翠の胸飾りを見ると、碧の煌めく光が見える。僕にはまるで意味の分からない謎めいた絵文字の数が増えたように思うのだが、どうなのだろう。

「絵文字の数が、増えたよね。チャスカはこの絵文字は読めないのだね？」

「はい。ちちはおそらくよめたはずですが、わたしは、まったくよめません」

ちょっとばかり残念そうだ。確かに自分の運命に大きく関わる内容であるらしいのに、さっぱり読み取れないのはもどかしく残念だろう。

「僕と一緒に、ヤガー君に絵文字の読み方を教えてもらうか？」
「はい。おねがいいたします」

近頃のチャスカは熱心に帝国の文字の読み書きなども習い、マナーや礼儀作法の習得にも熱心なようだ。僕と特別な関係になると言う事は、この黄金宮で特別な存在になる事を意味するのだから、自覚して努力してくれるのは良い傾向だと思う。

この夜から、チャスカは僕を名で呼ぶようになった。僕が望んだからだ。

するとその事実は、たちまちに黄金宮の中を駆け抜けたようだ。恥ずかしい事この上ないが、中には「おめでとうございます」などと言う者までがいて、驚いた。

「めでたいか？」

僕は、僕に向って祝いの言葉を述べた御前会議のメンバーでもある老貴族に尋ねた。

「ええ。帝国の慶事ですとも。聞けば不思議な神霊の加護が有る未知の大陸の娘だと言うではありませんか。これで御子でも授かれば、ミッケリの勢力など楽々排除できそうですな」
「さあ、そうなるかなあ」
「なりませんかな？　ミズホの場合のようには参りませんか？」
「ミズホよりはるかに広い土地で、多くの国々が存在する様なのだ。どうであろう」
「簡単ではないにせよ、大きな足ががりにはなるのでは有りますまいか？」

セルマにも「おめでとうございます」と言われてしまい、背中から久しぶりに冷や汗が流れた。明らかにセルマは不機嫌だった。眉ひとつ顰めてはいないのだが、僕にはわかる。セルマの月の物の間にチャスカとの事をすすめ、その後は従来通りセルマの所にも通うつもりでいた。が……

「ユリエ様は御褥すべりをなさいましたし、私もそろそろかねて申し上げておりますように、女子修道院に住まいを移そうかと……」
「まだ、早いじゃないか。せめてユリエと同じ年ぐらいまでは……」

僕なりに色々考えての慰留なのだった。セルマにだって、御前会議での正式な認証も与えられた側妃だと言う自負や、長年僕に仕え、子もなしたと言う意地が有るだろう。

「御正妃がおいでになりましたら、そろそろ私は失礼させて頂きますわ」

セルマの微笑みはホッとするより、なんだか怖いと僕はつい、思ってしまった。

「まさかとは思いますが、グスタフ様、御自身で未知の大陸においでになる事など、有るのでしょうか？」
「有るかもしれない」
「まあ……ならば、私はまた、留守番役を務めるのでしょうか？」
「ああ。おそらく。父上が御健在の内に、一度は未知の大陸を自分の足で踏むべきだと言う気がするのだ」

僕が本気だと悟ったのだろう。セルマは深いため息をついた。そして僕に抱きついてこういった。

「何処にお出かけになっても、必ず御無事でお戻りくださいね。私は御留守を守る以外、大したお役にも立てませんが、それでもいつも、グスタフ様がお元気でお幸せでいて頂きたいと願っております」

セルマとのキスは懐かしい感じがする。僕はこのセルマも傷つけたくはない。それははっきりしていた。

僕と未知の大陸・4

「美しき碧の鳥の認めしおのこ、世界の始原の秘密の扉を開かん。来たれ真の神に愛でられしおのこ、天の鏡の日月の島に来たれ……新たに出現したとおっしゃる絵文字の配列を素直に読むとこうなるのですが……」

ヤガー君は難しい顔をして、考え込んでいる。僕はチャスカを連れて、ヨハンの邸に寄宿しているモタ修道士とヤガー君の二人に新しく胸飾りに出現した絵文字を見せに来たのだ。

「以前、ヤガーが言っていたな。日月の島と言うのは太陽と月が出現したとされる聖地だと」

「ええ。そうです。『天の鏡』と言う名の湖の中央に、かつて天の父と大地の母が共に暮らした神殿が有り、そこで息子である太陽と娘である月が生まれたと言うのですが、その神殿を見た人間は誰も居ないと言われています。普通の人間が見た所では、その島は巨大な岩にしか見えません。小さな浜が一か所だけあり、そこには祠が有ります。そこにささげる供物は香が最も好ましく、人身御供や獣の犠牲は嫌われるとされています。他の神殿や聖地では人の生贄は最も貴重な物とされているので、大変珍しい話です」

「誰も見ていない神殿の話が伝わっているのは、なぜなんだ？」

僕はどうにもそこが不思議に思われた。

「神をその身に宿した者、神の眷属、そういった通常の人ではない、神に等しい存在ならば見る事が出来、中にも入る事が出来る、テパネカの神官の間ではそう言い伝えられています。初代のテパネカの王は中には入れませんでしたが、神殿の姿は見た、とされています」

「ヤガーは殿下なら中に入れると思うかい？」

モタ修道士は興味津々だ。

「そうですねえ……こんな文字が後から出てきちゃうのですから、関係がおありなのは確かなんでしょう。僕にはわかりませんが」

「ヤガー君はずっと難しい顔をしているけれど、何か気になる事でも有るの？」

「この文章は、まだ途中だと言う事ですね。続きが有るはずなのです。この最後の絵文字、息継ぎの印で、まだこれから文章は続くと言う意味なのです」

僕は一番気になる点について、この師弟二人の意見を聞いてみた。

「僕は、未知の大陸に直接赴くべきなのだろうと思うが、どうだろうか？　その時はこのチャスカを連れて行くべきなんだよな？」

「殿下ほどの高貴な御身分の方が直接遠方に赴かれるのは、現実問題として難しいのでしょうが、可能ならばお出かけになるべきかと思います。ですが……『天の鏡』と言う湖は、夏でも雪の残る大変高い山々に取り囲まれた場所に有るのが気がかりです。余りに高い場所にあるので、普通に歩くのも困難を覚えるでしょう。絶え間ない頭痛・吐き気・めまい・手足のむくみなどに悩まされる者が多いのだそうです。昔からそうした体の不調は山の神の怒りだと言われてきました」

ヤガー君が言うのは、おそらくは高山病だろう。

「恐らく神の怒りってわけじゃなくて、うんと高い場所は、空気が薄いからだろう」

「そうなのですか？」

「うむ。ま、僕もそう詳しい訳じゃないけどな。ただ、いきなり高地めがけて登るのではなく、少し低い所でゆったり二、三日過ごしてから登れば、若い健康な者は大丈夫だろう。後は水分を取るとか、甘いものを食べるとか、ゆっくり深呼吸するとか……そんな事が多少は効き目が有るようだ」

「ああ、殿下がおっしゃった事は以前、『天の鏡』のほとりで生まれ育ったと言う捕虜の老人に聞いた事が有ります」

「捕虜と言う事は、戦争をしたって事か？」

「アイリュの皇帝が日月の島を我がものにしようとして、テパネカにも出兵を命じた事が有りました。突然の激しい落雷で皇族でもあった軍の総司令官が死亡しましたので、すぐに軍を引きました。結局アイリュの皇帝は目的を果たせませんでした。それでも帰り際に通過した幾つかの村で、人や物を奪い火をかけたりしたわけですが……」

「僕がノコノコ出かけたら、危険かな？」

アイリュという国の皇帝は領土的な野心が強いようだ。

「そうですね。目的地に至る道筋は慎重に選ぶべきでしょう。アイリュの勢力圏に組み込まれていない場所を選ばれた方が無難でしょうねえ」

「今のアイリュの皇帝って、どんな人物か知ってるか？」

ヤガー君の話からは、好戦的で行政能力は低いと言う印象を僕は受けたが、どうなのだろう？

「名はシンチ・ワイナと言いまして、十五歳で即位しました。今は二十歳でしょう。先代皇帝の唯一の嫡出の皇子で、多くの庶子を殺害・排除したようです。あの国では大柄な方でして、と言っても恐らく殿下の御背丈より頭一つは低いかと思いますが、気性が激しく

勇猛だと言われています。テオレル帝国やミッケリの人には信じがたいかもしれませんが、皇帝の正妻はその妹である場合がほとんどです。シンチ・ワイナの両親は先代の皇帝と皇后であると同時に、兄と妹の間柄でもありました。シンチ・ワイナの皇后も同腹の妹です。こうした習慣は古くからのものですが、恐らく神聖教会は『姦淫』と言うでしょうね」

「神聖な血族として信じられている一族の中での結婚なら、昔はこちらの大陸でも有ったのだ。今は兄弟姉妹同士の結婚は認められないがね」

「そうなのですか」

「ヤガー君の国じゃどうだった？」

「テパネカでは同腹の兄弟姉妹同士の結婚は避けられます。ですが、腹違いなら……当たり前ですかね」

「ヤガー君の両親も？」

ヤガー君は答えにくそうにしている。

「ああ、言いにくいなら、聞かない。悪かった」

「ヤガー、私は別にお前の両親が兄弟姉妹同士でも、穢れているとか不道徳とか、思わないよ」

「先生……ありがとうございます。僕の両親は、大神官であった祖父の同格の二人の妻の産んだ兄と妹でした。身分が有る者は複数の妻が居るのが普通で、出自が高貴ならば正妻扱いで、身分が低ければ側室とか女奴隷とか言う扱いになります。祖父は真面目な人でしたので、二人の妻を公平に扱い、三人で仲睦まじく暮らしておりました」

「ほう、だからヤガーは殿下に親近感を覚えるのかな？」

「そうですね。そうかも知れません」

確かに僕も公平な扱いを心がけてはいる。ヤガー君のおじいさん

が健在なら、話をしてみたいものだ。

「ヤガー君のお父さんの奥さんは？」

「父は……妻は僕の母だけですが、常に十人ほどの若い女奴隷を侍らせていました。ですから、腹違いの弟や妹は沢山います。正確に何人いるのか見当もつきません。そう言う父が……私はどうも苦手です」

「女奴隷は、戦争捕虜なのかな？」

「戦争捕虜は稀ですね。アイリュの皇帝やテパネカの王からの褒美や下されものである場合も多いです。奴隷の価値で違いますが、若い女奴隷の価値は家畜五十頭から百頭と同じと見なされます。奴隷を貰うか家畜や金銀・その他の品物で受け取るかは、受け取る側の希望で選べることが多いのです。祖父は何時も家畜や金銀で褒美を受けとりましたが、父は……若い女奴隷を受け取るようでした」

「ミッケリのような奴隷の取引も有るの？」

「一般庶民の奴隷所持は認められません。貴族や王族同士で申し合わせて、奴隷を交換する場合がほとんどです。価値の低い奴隷には金銀などの財宝をつけて、交換会に出します。ですからミッケリの街中で手枷や足枷をされた奴隷が売られているのは、驚きました。ましてや自分自身が街中で売り渡される立場になるなんて、国にいる時は考えた事も有りませんでした」

ヤガー君もミッケリで奴隷として売られた経験が有るのだ。こんな賢い優秀な若者を売り買いするなんて、根本的に間違っている。改めて僕はそう思う。

ちなみにシンチ・ワイナというアイリュの皇帝の名前は『勇猛な若者』を意味するのだと言う。軍隊を頻繁に動かしているが、統治は上手くいってはいないとヤガー君は言う。軍を動かすために重税を課し、人員を狩り出すのだから、民衆にも恨まれているようだ。

その上、最近はその『勇猛』と言うイメージも大きく損なわれているらしい。

「アイリュの軍隊の主要な武器は投石器と青銅製の棍棒ですから、ミッケリの武装騎馬軍団や鉄砲隊にはひとたまりも有りませんでした。シンチ・ワイナは戦場から走って逃げたと言われています」

その後、大量の黄金と奴隷を送ってミッケリ側と和睦したらしい。そして更に、ミッケリが欲しがった東海岸の港とその周辺の領土を割譲したのだと言う。

「チャスカ殿の故郷の村は割譲された範囲の外でしたが、アイリュの軍勢にはミッケリの侵略行為を止める力は有りませんからね……」

「だが、ミッケリもまだ、広大な大陸を治める力を手に入れてはいない。そういう事だね」

「はい。ですから、その御前会議で殿下にお祝いの言葉を述べられた貴族の方のお考えも、わかる様な気がします。チャスカ殿と共に、日月の島で何かを手になされば、あの大陸の諸国は殿下を『真の神に祝福された指導者』として敬い、従うでしょう」

「何かって、何だろうな？」

「伝説の通りなら、三つ又の黄金の笏です」

「へえ、黄金宮内で僕の使っている印は摂政の象徴で、この帝国の軍事・司法・行政権を示す三個の宝石をつけた笏だが、こんな感じの格好かな？」

僕はチャスカの身分証を外して、二人に見せた。ヤガー君は師匠と一緒にしばらくじっと観察していたが、恭しい動作でそれをチャスカに返すと、こう言った。

「形も何も伝わっておりませんが、天と地上と地下を示す三個の聖

なる石がはめ込まれているとは言われています……単なる偶然だとは、私には思えません。殿下こそがこれまですべての人間が立ち入ることを拒絶されていた天の父と大地の母の神殿にお入りになり、聖なる黄金の笏を手にする方だと、そう考えております」

「ならばヤガー、是非殿下はその神殿においでになるべきだな」

「ですが、遠距離の航海に加え、高い山々の間の秘められた湖を目指されるのですから……大変な事ですよね。綿密な計画が必要でしょうし」

「じゃあモタ殿とヤガー君に、その計画を立てて頂こうか」

その時、ちょうどヨハンも所用を済ませて帰宅したようだ。僕に挨拶のためにこの部屋にやって来た。

「兄上、皆で御一緒に夕食でもいただきながら、相談と行きませんか？　皇帝陛下にはつい先ほどお会いしたので、勝手ながら、あちらでの御夕食はお断りしておきましたよ」

ヨハンは僕の言いそうな事が、あらかじめ見当がついていたらしい。

「分かった。今夜の内にある程度相談をまとめるか」

コルネリアの心づくしの食事は美味かった。両親との縁が薄かったコルネリアは自分で暖かな家庭を築きたいと言う思いが強いようだ。大貴族の夫人としては珍しい事に、夫であるヨハンの食事には、必ず自分の手作りの一品を添えるらしい。ヤガー君に聞いて用意していたのだろう。穀類を使った塩味ベースのスープと鶏肉料理はチャスカも好物だ。どうやらあちらの大陸の御馳走にかなり近い味わいらしい。

モタ修道士は酒豪で、僕もヨハンもいくら飲んでも酔わないたち

だ。ワインを酌み交わしながら、大洋を航行するための船の手配や探検隊のメンバーの選定についての話が弾んだ。

「いやあ、今夜のワインはことのほか美味いですなあ」

僕もまだ見ぬ大陸に思いをはせて、大いに気分が解放された。その気分の延長で黄金宮の住まいに戻って来て、風呂に入ろうとした。当然のようにチャスカを呼ぶと「こんやはセルマさまがおまちのはずです」と言う返事が返ってきた。

『一日おきルール』を自分で破るのも不味いだろう。正直言って、今から部屋の外へ出るのは面倒だが、セルマは律儀に僕を待っているんだろうから、行かない訳にもいかないなあ……

手早く髪と体を洗って、身支度を整える。チャスカは当然のようにして、手伝うのだが……

「じゃあな、行ってくるよ」

「いってらっしゃいませ」

恭しく頭を下げるチャスカからは、いかなる種類の負の感情も、僕には読み取れなかった。

僕と未知の大陸・４（後書き）

誤字訂正、結構ありました。見落としがまだまだありそうですね。
教えて頂けましたら、感謝感謝です。

僕と未知の大陸・5

セルマには未知の大陸に関する凡その話をしておく。だが、セルマと言うよりセルマの母グラーン侯爵夫人の周辺には、ミッケリの人間も多い。従ってセルマ自身が知らないうちに、情報が漏れる可能性は高い。ミッケリが恐らくすでに知っているであろう内容と、絵文字の示す内容が僕自身に関係が有り、僕以外の人間が行っても立ち入れない神域が存在するらしいと言う話を、具体的な地名を上げずに伝えた。

「グスタフ様しかお入りになれない場所ですか……ミズホの時も、そのような場所がございましたね」
「うん。あの国の霊山だな」
「そして今度も、どこぞの隠れた神殿ですか」
「ああ」
「ユリエ様のように武術の心得が有るでもなく、異国の言葉がわかるでもない私は……留守番役以外無いですわねえ」
「セルマだから留守を任せられるのだ。未知の大陸に関しては、ミッケリとの応対も必要になってくる。セルマが意識的に父方の実家や親戚筋との関係を強めるようにしてくれた事が、交渉でも色々生きてくるだろう。頼りにしてるよ」

ミッケリはその昔、帝国領から自治権を得て独立した商業都市が核になって出来た国だけに、言語は帝国の共通語と大差無い。多少のアクセントや語彙のずれは有るが、大半の内容はそのまま通じるのだ。

セルマの実父オーレ・トマソンはミッケリの名家の血を受けてはいるが、自分を捨てた生家との付き合いはまるでなかった。と言うよりは嫌っていたようだ。グラーン侯爵夫人がセルマの箔付と自己

の勢力拡大・維持のために、亡夫の血縁者との交流を盛んにしたおかげで、セルマはミッケリの支配者層に強力なコネを持つに至っている。

ミッケリの政治に参加する資格を持ち、納税の義務を負う国民は、大半が商人とその家族だ。支配者層は何代も続く豪商達で、特に豊かで勢力の大きい三つの家が三元老と呼ばれている。ミッケリを動かす最高機関は元老会議で、終身メンバーの三元老家の当主の他に、国民による選挙で選出された七名が加わり、総勢十名で大半のことは決められるようだ。

ミッケリの人口で国民は三割にも満たないようだ。残り七割は「滞在者」と「奴隷」が半々らしい。滞在者はおおむね神聖教会が文明国と認めた国家の出身者で「ミッケリにおける犯罪歴」さえ無ければ、特に難しい滞在条件も無い。国民の資格を持つ商家で、俸給を受け取って働く出稼ぎの使用人や、傭兵・船員、他国から流れてきて露店や行商を営む者、などが多いようだ。滞在者は「ミッケリに貢献した」と元老会議で認められるか、政府へ所定の金額以上の寄付をして三名以上の国民から推薦されるかすると、国民に昇格可能だ。

かつて僕の乳母であったドロテアとビョルンは悪事の数々がばれて、帝国を追放された後、ミッケリの国民になった。風の噂では、二人ともう死んだらしい。だが、今でも帝国で違法薬物を売りさばく連中は、ミッケリの者が多い。そもそも、ミッケリの法律には違法薬物と言う概念が存在しないのだ。

ミッケリで奴隷にされるのは、ほぼ例外無く神聖教会の信仰されていない、あるいは元老会議で「未開国」認定をされている地域の人間だ。勝手に拉致監禁して労働力なり玩弄物なりにしてしまっている場合が大半で、特に皮膚の色や髪の色がミッケリの国民とは違うと、奴隷身分から法的には解放されたとしても、差別はついて回

る。
　ミッケリから見て「格上」の国家である帝国の摂政である僕が、ミズホと特別な関係に有り、ユリエとの間に子を三人儲け、皇族であっても黒目黒髪の者が存在する事が広く知られるようになって以降、差別の一部は緩和されたが、まだまだミッケリの人種差別は酷い。

　今のミッケリでは黒目黒髪でもユリエのように完璧な共通語を話せば、奴隷扱いされずに済むようになったが、チャスカの様にたどたどしいと蛮族で、奴隷扱いして差し支えないと認識される様だ。
　セルマは……無自覚に、そうしたミッケリの支配者層の価値観の影響を受けてしまっている。チャスカのような『蛮族』を僕が自分のベッドに迎え入れたのが、どうにも気に入らないらしい。

「未開の地の『蛮族』で身分の無いものを御寵愛なさっても……」

　そんなことを言いかけた瞬間、思わず僕が睨んだので、驚いたのだろう。それからはそんな言葉は口にしないが、それでも、それがセルマのチャスカに対する評価なのだ。ユリエが居た時は、もう少し理解のありそうなことを言っていたくせに……。セルマとしては早くスコウホイのアンニカを正妃に迎えろ、と言いたい所なのかもしれない。

「もう少しあの言葉がどうにかなった方が宜しいですわね」
「外国語は誰だって、すぐに流暢に話せるってもんじゃ無いだろう？」
「は、はい」
（でも、殿下は外国の言葉にも堪能でいらっしゃるし……ユリエ様はミズホの言葉も良くお出来になるわ。殿下の閨に召されたのなら、貴婦人にふさわしい言葉遣いも出来ないと……やはり不体裁でみっ

ともないわ）

こんな事を考えているが、嫉妬の気持がそこに絡んでいるのは確かだろう。そんな事を考えるセルマ自身は外国語は話せないのだから、よけいに馬鹿げていると感じる。セルマが口にしない偏見については、見てみぬふりを僕は決め込むことにした。チャスカの言葉は急速な進歩を遂げていると僕は感じている。その結果を見聞きすれば、セルマの偏見も薄らぐだろう。

とは言え、偏見を完全に無くする事は、難しいかもしれない……考えてみれば、セルマの婿のラウル・ヤイレはユリエの息子ではあるが、髪が黒くない。灰色だ。

「ルイサのお産はもうすぐかな？」

「ええ、そうです。つきましては……」

お産の面倒をしっかり見てやりたいから、僕との同衾は三月ほど辞退したいと言う事だった。

「ユリエ様にとっても初孫ですが、ミズホをお離れにはなれないようで、私にすべてお任せ下さるそうです」

「ああ、当分ミズホを離れられないんだってな。ルイサの立場に立てば、実の母親の方が気兼ねが無くって良かろうよ」

「ユリエ様もそうお考えになって、私に譲って下さったのだと思います」

それが一番の理由ではないと思うが、僕はあえて反論しない事にした。

名のある貴族の家では、当主の母親が出産も仕切る場合が多いから、セルマも「譲って下さった」発言をするのだろう。そうして話

している時にちょうどヌーク子爵邸、つまりラウル・ヤイレの邸からルイサのお産が始まりそうだと知らせてきた。

「セルマ、気になって堪らないのだな？　僕も一緒に行こうか？」

「とんでもございません」

僕はお産の場所に居ても、役に立つわけでもないし、こういう場合、皇族や貴族の家では祖父さんはお産の当日には顔を出さないものだ、と言うような事をセルマに言われてしまう。

「お産が無事にすみましたら、急いでお知らせいたしますから」

お産が済んで二三日して落ち着いてから、見舞いに行ってほしいとも言われてしまった。

「三十歳でお祖父ちゃんか。何かピンと来ないが……お祖父ちゃんなんだよなあ」

「はい。私はお祖母ちゃんですわ」

僕はいそいそ準備してヌーク子爵邸に向かうセルマを見送って、結局自分の住いに戻った。

「おかえりなさいませ！」

深夜にこっそり戻った僕を、寝間着にガウン姿のチャスカが迎えた。

「セルマに追い出された」

チャスカはわけが分からないと言う顔をした。僕とセルマの娘であるルイサのお産が始まった事、セルマは当分お産の手伝いなどで落ち着かないので、僕は三月ほどセルマの所には行かないと言う説

明をすると、ほっとした顔つきになった。

「わたしのせいで、おいかりになったわけではないのですね。あんしんしました」

「僕はお祖父ちゃんになるらしい」

「きっと、げんきなかわいいおこさまがおうまれになりましょう」

「うん……チャスカは眠っていなかったのかい？」

「なんだか、ねつけませんでした」

「じゃあ、やっぱり僕と一緒に寝よう。ね」

「はい」

「素直な返事で、うれしいな。チャスカは、いい匂いがするなあ」

「おふろで、なたりえさまからいただいたあたらしいせっけんをつかいました」

「へえ、ナタリエから？」

「ぐすたふさまが、おすきだと、ゆりえさまがおっしゃったにおいだそうです」

「でも、これはチャスカだけの特別な良い匂いって感じだなあ」

同じ石鹸を使っても、ユリエとチャスカでは匂いが違う。共に良い香りだが、ユリエの場合は気分が安らぐような懐かしい感じで、チャスカの場合は気分が華やぐような感じがする。

「あん、ああっ……」

半ば無意識で僕自身の服は全部脱ぎ散らかして、チャスカの寝間着の前もすっかりはだけてしまった。

「もう、僕の裸を見ても怖がらなくなったね。初めての時は、体中コチコチだったからなあ……ああ、良い手触りだ。もっと胸を大きく育ててやらなくちゃな」

「おおきいほうが、おすき……で、すか……」

「敏感で綺麗な胸なら大きくても小さくても好きさ。こうやって、

可愛がってやると大きく育つはずなんだが、育てるのが一番楽しいかな」
「おすきな、おおきさに、なってほしいです」
「ふふふっ、可愛い事を言うねえ、チャスカ……うんと、気持ちよくしてあげるよ」
「ああん……へ、へんになっちゃうと、は、はずかしいです……」
「チャスカは可愛いから、恥ずかしい事をいっぱいするのが、楽しいんだ」
「たのしい、ですか？」
「うん」
「なら、いいです。へんに、なります」
「そうそう。うんと変になるんだよ」

深いキスを与えて思い切り感覚を煽ってから、若いと言うより、まだ稚なさをあちこちに留めた瑞々しい体を見つめる。僕の視線を意識するとチャスカは、本能的に脚を固く閉じ、両手で胸のふくらみと脚の付け根をかばう。

「その手をよけて」
僕が感じやすい耳たぶを舐めあげてから、囁いてやると、おずおずと言う感じで手が体の両脇に置かれた。
「恥ずかしいの？」
無言でうなずきながら、チャスカの体温は一気に跳ね上がったようだ。

「とてもきれいだよ。僕の宝物だ。隅々まで、ちゃんと見せて」

枕元のランプの明かりを強めると、桜色に色付いた体がよりはっきり見える。恥ずかしくても、僕の言葉に従順に従おうとしている様子が、何ともいじらしい。見られているだけで昂ぶってくるのだ

ろう。呼吸が次第に荒くなる。僕は蠱惑的な香りの中に思い切り鼻を埋めた。

「お、おかおが、よごれます」

「汚れるなんて思ってない」

刺激につれて、いかにも少女めいた細腰が揺らめく。あえぐ声に次第に甘さがこもり、すすり泣きが混じりだす。やがて腰のうごめきが僕の行為に応えるようにリズムを刻み始める。

「ああッ……そ、そこはッ……」

耳に心地よいソプラノの声をほとばしらせ、熱いものをドッと吐き出す。なおも吸い上げ、味わいを堪能すると、チャスカはすすり上げながら、時折、ヒーッと言う小さな悲鳴を上げ、白い腹を震わせる。その間合いが次第に短くなったと思うと、艶めいた声が上がり腰を突き上げつつブルブル痙攣した。シミひとつない肌は甘い香りの汗で濡れている。

「明日、僕は仕事を休む日だからね、悪いが付き合ってもらうよ」

そう宣言すると、あとは遠慮会釈なく、若いしなやかな体を貪った。

翌日は昼下がりまで人払いを命じ、朝食から昼食まで、かかりきりでチャスカの面倒を見た。夕方になって、ルイサが無事に男児を出産したと言う知らせがもたらされた。見舞いは明後日以降が良いらしい。

「孫と同じ年の子供を作ってしまったかな?」

チャスカは、真っ赤になって照れる。僕は丸二日以上避妊薬を飲んでいないのだから、有り得る話だ。その時、あの胸飾りに更に絵文字が加わった事に気が付いた。

「今夜は……大人しくしよう。明日はヨハンの邸で、ヤガー君の話を聞かなくちゃいけないものな」

「そうですね」

「でも、ちょっとぐらいなら、良いよね？」

僕が膝に抱え上げて、首筋にキスを落としながら尋ねると、小さな声ながら、チャスカははっきり「はい」と返事をしたのだった。

僕と未知の大陸・6

「確かに、また追加分が出現したのですね。前回までが『美しき碧の鳥の認めしおのこ、世界の始原の秘密の扉を開かん。来たれ真の神に愛でられしおのこ、天の鏡の日月の島に来たれ』でしたね。今回は『碧の鳥の護る娘と共に、秘められし神の住まいに至りて黄金の笏を得よ。されば輝く石の在り処を知り、あまたの国の王、王の王となる事を得ん』ですかね。これで、終わるのかどうか、私にははっきり分かりません。文のおしまいを示す絵文字は見受けられませんが、必ずしもその絵文字が入ると言う訳でも無いらしいので……」

「また、何かの条件が整えば、追加分が出るのかな？」

「そうですね」

ヤガー君の体に触れて意識を探っているわけではないが、彼が色々な絵文字の文章の実例を頭に浮かべて、考えをまとめているのは見て取れる。

「殿下とチャスカ殿の縁がしっかり結ばれた。そういう事なのだと思いますが、追加条件は、お子が生まれるとか、現地に赴かれるとか、でしょうか？」

「僕の姉が……」

僕はモナの話と、モナが鏡を通じて、チャスカは僕を連れて共に故郷に戻るべきだと伝えた件を、かい摘んでヤガー君とモタ修道士に話した。

「いやあ、驚きますな。ああ、スコウホイで布教活動をしていた修道士に、人に変じる不思議な狼の話を聞いた記憶は有りましたが……そのような方が、殿下の実の姉君、皇帝陛下の姫君であられるとは……帝国はうんと古い御国なだけに、神聖教会が出来る以前から

存在する神霊たちと、様々な関わりが有るのかもしれませんな。皇帝の御血筋は開祖様以来、脈々と続いておられるのも、そうした神霊たちの祝福も有るのでしょうか」

「モタ殿」

「先生」

僕もヤガー君も、モタ修道士が神聖教会の悪名高い『異端審問』の犠牲になりはしないかと、心配になったのだ。

「このお邸なら、教会の間者はいるとも思えませんが」

「だが、教会の信者は幾人かいる。あなたに危険が及ぶような発言は、よくよく気を付けた方が良い。僕の住まいには教会の熱心な信者は一人もいないが、それでも盗み聞きや覗き見されないように、万全の対策を取っている」

「あー、そうですね、この邸は警備が甘いかもしれません」

いきなりヨハンがそんな事を言って入ってきて、驚いた。

「驚いたな、ヨハン。気配が読めなかった」

「兄上の所のショウザブロウに、忍びの術というのを教えてもらっています。で、忍び込みにくい、盗み聞きや覗きが出来ない構造の部屋を準備したので、そこで大事な計画や相談はする事にしたらどうでしょう？」

僕とチャスカ・ヤガー君・モタ修道士はヨハンの案内で、入り口が石造りの小さなトンネルになっている円形の大きな部屋に出た。

「この邸はかつて、近衛連隊の詰所だったので、こうした見張り台、兼、軍馬の飼料置き場だった円形の石の塔が、東西南北に一つづつ配置されています」

以前からあった石造りの塔を再利用した部屋は、きちんとした書斎と言った体裁に整えられていて、もと飼料置き場だった名残は見た所わからない。窓は十メートル程も上の位置に、幾つか有り、風向きや外光量を調節する滑車を使った仕組みが出来ていた。中央には煙突を備え付けた薪ストーブが有る。考えたのはモタ修道士の友人の建築マニアでナウム・タトリンという人物らしい。元来は船大工の家の息子だが、新しいことを色々やってみたくて、帝国で遊学中だそうな。

「グラーン侯爵夫人のサロンに毎日、行くようです。まだ彼には建築の話以外は何もしていませんが、そのうち船の設計や選定で相談に乗ってもらうつもりです」

モタ修道士の話に呼応して、ヨハンはこの部屋の設計を依頼した経緯について話してくれた。秘密を保ちやすく、使い勝手の良い書斎兼研究室を求めているとナウム・タトリンに相談すると、この邸に幾度も通って熱心に仕事を仕上げてくれたと言う。

「ミッケリの人間ですが、自分を評価し、正当な報酬を与えてくれる人間と交わした約束は守るでしょう。アンホルト子爵は気前の良い方で、仕事も自由にさせて頂けたので、あれも大いに喜んでました」

で、その気前が良いと言われたヨハン本人は、上機嫌で僕らの座った円卓の上に、一枚の図面を広げた。

「鬼才ナウム　・タトリンの最新作です。モタ殿に紹介して頂いて以降、この部屋の依頼以外にも、幾度か話す機会が有ったのですが、今日は話が弾んだので、この図面を託されました。懇意の学者連中や船大工の意見が反映されているようですが、素敵な船だと思いま

せんか？」

精密に描き出された一隻の帆船の図面は「素敵」なのかどうか、僕には良くわからないが、完成予想図は確かに美しかった。モタ修道士は少なくとも、その図面の船が「素敵」だと感じているようだし。探検隊全体の統括はモタ修道士とヤガー君が担当するとして、船の建造については巨額な資金も必要ではあるし、ヨハンに任せて置く方が話が早いだろうと言う事になった。

「船の建造の費用は僕の方で手当てできると思う。ヨハンは対ミッケリ対策も、是非抜かりなく願うよ」

「ですが、はっきり敵対するのも上手くないですよね。兄上はせいぜい、セルマ様の御機嫌がうるわしいようにお心配りいただきませんと」

「ああ。まあ、セルマは昨夜生まれた孫に夢中だろうがな」

「兄上はいつ、ルイサを見舞いに出かけられますか？」

「明日にでも、どうかな」

「僕とコルネリアも、お供させてください」

「無論構わんよ」

「実はコルネリアが懐妊したので、後学のために色々教えていただきたいのです」

「そうか、ヨハン、お前も父親になるのか……コルネリアの父上には、僕から知らせておくか？」

「はい。それが無難でしょうね」

コルネリアの実父は隣国ワッデンの現・国王だ。何かそのうち口実を作って、父と娘の久しぶりの対面もさせてやりたいと思う。

翌日、僕はヨハンとコルネリアの夫婦を連れて、産後間もないルイサを見舞った。ルイサが大好きなオレンジのゼリーを手土産に持

って行った。ベッドの上のルイサは思いの外元気そうで、安心する。

「まあ、季節はずれですのに、うれしい！」

「シロップ漬けにしてあったオレンジで作らせたのだよ。どうかな」

元々はユリエと僕で考えたデザートだ。今回はチャスカに作り方を教えがてら、手伝わせた。無論そんな事を口にすると、母親のセルマの機嫌が悪くなりそうなので、口にはしなかったが。

「美味しいですわ、とってもおいしい！」

ルイサが喜んで立て続けに三個も食べるので、母親のセルマは「みっともない、おやめなさい」と言うが……僕がなだめると、黙った。

そこへ、ルイサの夫でユリエと亡きドランメン伯爵の嫡子であるラウル・ヤイレがやってきて、「やあ、美味しそうですね」と嬉しそうに言うので、食べさせる。「懐かしいですね」と言わずにいてくれたのは、ラウル・ヤイレらしい細やかな気配りと言うものらしい。幼いころから、常に微妙な立場に立たされ来たラウル・ヤイレは、自分の母ユリエと妻の母セルマの危うい均衡についても良く承知している。だが、ラウル・ヤイレにしてみれば懐かしい母の味なのだ。

ルイサの産んだ男の子は、スヴェン・ヤイレと名付けられた。そうだ。ユリエの夫と同じ名前だ。その先代のドランメン伯爵スヴェンとは一度も話をしたことは無いが、やはりどうしたって僕の中に複雑な感情を巻き起こす名前ではある。ドランメン伯爵家の場合、当主はラウルとスヴェンという名を一代ごとに交代で名乗ってきた。まあ、それが帝国の貴族の風習通りの名前の付け方なわけだ。

「陛下……スヴェン・ヤイレでございます」

乳母から受け取った新生児を、ラウル・ヤイレは僕に差し出した。僕は受け取って抱いたわけだが……僕の孫であり、あのスヴェンの孫なのだ。

「別の名も考えましたが……しきたりどおりにすべきだと言うセルマ義母上（ははうえ）のおっしゃることも、もっともですので」

「ほう、セルマがね」

そこに僕はつい、セルマの悪意を感じてしまった。気の所為では無かろう。僕はつい、セルマの顔を凝視してしまった。時間にしてわずかではあるが、ラウル・ヤイレが何事か感じるには十分すぎたかも知れない。

「ドランメン伯爵家は古い家柄だ。しきたりに従うのも大事な事だろ。なあ、スヴェン・ヤイレ」

僕の呼びかけに応えるかのように、濃い灰色の髪とグレーの瞳の新生児は目を見開いて、僕を見つめた。そして、微笑んでいるような表情をうかべた。一般的には生まれたての子が微笑むはずがないとされるが。

すると、その表情を見たルイサが「まあ、嬉しそうな顔。この子、きっと父上が大好きなんですわ」などと言う。

「生まれたての赤子にそのような事がわかるものですか」

セルマの言葉は微妙に刺々しい。

「でも、やっぱりニッコリしているように見えますわ」

「僕にも陛下のお顔を見つめて、微笑んだように見えます」

ラウル・ヤイレは妻の肩を持つ。

少なくとも生まれ立てのスヴェン・ヤイレは小さな手をゆっくり

と開いたり閉じたりしながら、僕の顔を凝視しているように見える。
そして、その口元はますます嬉しそうな感じにキュウっという感じに上がってゆくのだった。僕もこんな体験は初めてなので、不思議な感慨に囚われる。この子は確かに僕の孫だと。

そろそろ授乳の時間だとセルマに促されて、僕が遠慮がちなラウル・ヤイレの手にスヴェン・ヤイレを返すとぐずつき始め、乳母に抱かれたとたん大きな声で泣きはじめた。

「ほら母上。この子は父上が大好きなのですわ。恐れ入ります、もう一度抱いてやっては頂けませんか？」
「ルイサ！」
セルマの声が、より一層尖った感じになった。
「ああ、良いよ。おいで、スヴェン・ヤイレ」

僕の手におさまったとたん、新生児は静かになり、そのうちスヤスヤ眠り始めた。僕の手からそっと乳母に渡すと、静かに眠ったままの状態で、部屋を出て行った。
その後はもっぱら懐妊がはっきりしたコルネリアの話になった。医師の見立てでは夏には生まれるらしい。

「まあ、ではもう、つわりは始まっているんじゃないの？」
お産をすませたルイサは先輩ぶっているのがちょっと面白い。
「幸いただ眠かったり、いつもと違う物が食べたかったりする程度で、余り苦しい事は無いですわ」
「まあ、そうなの？　羨ましいわ」
ルイサのつわりはそれなりにしんどかったようだ。

「それにしても、これ、うまいなあ」
ヨハンもゼリーをしっかり食べた。コルネリアも美味いと思って

くれたらしい。
「本当に。作り方を教えて頂きたいですわ」
「じゃあ、あとで教えてあげるよ」
「まあ、ありがとうございます」

コルネリアが弾んだ声を上げると、一瞬セルマは険しい表情になった。

「セルマもお掛けよ。ね？　そう堅苦しい行儀だの格式だの、内輪の者しかいない所で気にしなくても良いじゃないか」
僕がベッドの脇の長椅子の座面の隣に手招きすると、一応従ってくれた。
「お産が始まってこの方、大変だったろう？　でも、おかげで母子ともに健康で何よりだった」
僕はセルマの膝の上の手に、手を重ねた。何を考えているのか、知るべきだと思ったからだ。
（私の苦労を少しはお分かり頂けているのかしら？　このゼリー、確かユリエ様がグスタフ様と御一緒にお作りになったって昔聞かされた物と同じよね……今日のは、誰がお手伝いしたのかしら？　あのチャスカ？　お仕えするようになって間もないと言うのに……お産の事が終わったら、スコウホイのアンニカ様をお迎え頂けるようにしなくては……）

アンニカ本人は僕にとって妻になる女性と言うより、亡き妻の養い子と言う感じが強いが、美しく賢く気立ても良い。それは間違いない。だが、その周りのスコウホイの者たちが、セルマとは上手くなじまない可能性は高いと思われる。

スコウホイは神聖教会に対する反感が強い土地柄だ。
教会主流派と常に融和的な政策を取って来たミッケリとは大違い

なわけで、アンニカが正妃として輿入れとなれば、それなりの人数の反神聖教会的な信条の人間が大挙してやってくる。しかも、スコウホイの人間は静かなミズホの人間とは違い「間違っている」あるいは「理不尽だ」と思うとすぐその意見を表明する。そして自分の間違いを納得しないと、そう簡単には謝らない。真面目で正直だが、理屈っぽい。頑固さは隣国ワッデンの人間と良い勝負だが、ワッデンの民は身分とか家柄に対する「遠慮」が多少あるのに対して、スコウホイの民は相手が貴族だろうが皇族だろうが容赦しない。そんな連中と、セルマが上手くやって行けるだろうか？

僕の心配をよそに、セルマはアンニカを迎え入れる事が、何らかの救いになるかのように思っているが……それだけ、チャスカが気に入らない、そう言う事なのだろう。いずれにしても、面倒な事だ。

僕は思わず、ため息をついた。

僕の大航海・1

チャスカが僕の三女キリャを産んだのは、ヨハンとコルネリアの息子・エリクが生まれた二月後だった。セルマは病で寝込んだ母のグラーン侯爵夫人の看病に専念したいと言って、女子修道院にこもった。

侯爵夫人のサロンに集っていた連中は、近頃ではイヴァル・ケニングかヨハンの邸で行われる勉強会に集まる事が多い。有閑マダムの暇つぶしと言う感じはぐっと薄れて、学者・研究者の情報交換会という色彩が強まった。僕は公費で新たに研究機関というか、シンクタンクともいうべきものを立ち上げて、様々な人材が比較的自由に集まって、研究活動ができるようにした。僕は意識的に設立メンバーには女性を十名投入した。黄金宮に勤務する全職員に『尊敬できる女性を三名上げよ』とアンケート調査を命じて、名前が挙がった中から、僕と個人的な関係の無い女性ばかりを選んだ。残り二十名は僕が信頼している、あるいは尊敬している男性だ。

仮に『帝国研究院』と名付けたこの機関の正式メンバーになるためには、現在の会員の三分の二以上の賛成が無ければいけない。それだけが唯一の資格で、人種も宗教も年齢・性別も問わない。

正式メンバーでなくても、研究用の図書類は閲覧できるし、セミナーや討論会・勉強会も自由参加なのだ。後に『帝国研究院』は、僕自身が期待したよりはるかに大きな役割を果たすようになる。

「恐らく、母上は御自分の感情が上手く整理できないのですわ」

セルマのひきこもった理由については、セルマの産んだ長女ルイサが言うように、セルマ自身、湧き起るあまり美しいとは言えない数々の感情を扱いかねているのは確かなようだった。何しろチャスカの懐妊がはっきりすると、すぐに黄金宮を出て行ったのだ。

セルマは怒っていたが、誰に何を言うべきか言わざるべきかで混乱もしており、そのくせ、心を読めない者なら気が付かない程、表面はとりつくろっていた。あれでは、余計にストレスが溜まっただろう。僕が不誠実で浮気者だと直球で文句を言ってくれれば、素直に謝ってもみせただろう。だが、何の落ち度もないチャスカを貶める様な言動を取りがちなので、僕としてはフォローも出来ないのだった。

一方でユリエは一度帝国に戻ってきて、僕のためにも色々仕事をしてくれたが、自分で言いだした「御褥すべり」状態は維持された。遠慮がちに、未練がましく僕が申し出ても、きっぱり拒絶された。そのくせ、かつての姉のような保護者のような優しさは強まったようで、チャスカが生んだ娘・キリャの養育と保護についても細やかに配慮してくれた。レーゼイ商会の力も使って、ミッケリでチャスカの故郷の人間を十人探し出し、奴隷となっていたものを救い出し、帝国に連れて来たのだ。彼らから得られた情報からしても、やはりチャスカは、かつてのワルパ王国の王族の末裔であるようだった。救い出された十人は、探検隊と共に船に乗り込み故郷を目指す予定だ。

小さなエリクが生まれると、入れ違いの様に大宰相エリク・ベルワルドは息を引き取った。聞く所によれば、大宰相は死の前日まで僕に依頼されていた回顧録を書きつづり、無事完成させた。そして上機嫌で気に入りのリキュールを飲み、代替わりして父親の仕事を受け継いだばかりの若い執事と四方山話をし、上機嫌で「おやすみ」と言ったらしい。その後あまりに大きないびきが聞こえるので、若い執事が様子を見に行った所、既にこと切れていたと言う。

僕とヨハンも急死の知らせを受けて駆けつけたが、その死に顔は満足げで口元は微笑んでいるようだった。

「色々有ったけれど、悪くない一生だった、そう思ったんでしょう」
「こうして見ると小さなエリクは、お祖父さん似のような気がしないか？　そのうち大宰相と呼ばれるようになったりしてな」
「さあ、どうでしょう。でも、兄上の御世を支える力になれるような男であって欲しいです。この人が今の陛下の御世を支えたようにね」

僕は若い執事から受け取った大量の原稿を、早速出版するための準備を始めた。

小さなキリャを連れて行くべきか、否かは難しい問題だった。以前のモナの話しぶりでは、キリャ自身も先祖の故地で神霊の加護を受けた方が良いようには思われたが、さして大きくも無い船で、数か月に及ぶであろう大航海に耐えられるかが心配だった。
悩んでいる時、僕が真っ先に相談したいと思うのは、今も変わらずユリエなのだ。そこで、相談を持ちかけると、こんな風な返事が返ってきた。

「普通なら、おやめなさいませ、と申し上げるところでしょうが、特別な神霊の関わる事情も有りそうですから、モナ様とヤタガラス様の御意見に従われてはいかがでしょうか？」

ユリエのその言葉は、もっともに思われたので、モナとヤタガラスの意見を聞くことにした。モナには鏡越しにまずは相談をする。するとモナにしては非常に珍しい事を言った。

「一度、直接その子の顔を見てやろうよ」
「僕がスコウホイ領内に、キリャを連れて行けば良いのかな？」
「真冬の間は、お前の所でも行けぬ事は無い。ただし、食事は狼らしくさせてもらいたいんだが」

「父上には……会ってくれないか？」
「んー、もうすぐ寿命か。だが、お前の娘に護りの呪いをかけるのが目的なのだからな。場所をグスタフの住まいにするなら会わんでも無い。手短にだぞ。どうも性の合わん波動があの男の周辺には多そうでな」

モナにかかると、実の父親も『あの男』なのだ。
ヤタガラスに言わせると、モナの護りの呪いを受けた後なら、大航海も乗り切れると言う。航海ルートを、ミッケリの連中が全く知らない西海岸に向けて定めろとも言った。

「ミズホで一度、一月ほどゆっくり休むのじゃ。グスタフに付き従う者すべて、船員にも探検隊の皆にも我の加護を十分に与えてやれるからのう。そこからはおよそ六十日の航海となろう」

ヤタガラスは未知の航路を確かなものにするために、キリャが生まれてから既に二度、ミズホとの間を往復していた。ミズホに渡ってくる各地の鳥たちから情報を集めてくれたのだ。そして僕は更に正三郎をミズホに遣わし、既にムサシの港に技術協力して出来上がっていた大型船の為のドッグを、探検隊のために十分使えるように準備させておいた。

その後、寒い日にモナが本当にやってきて、僕の住まいで父上に会った。

「父とも娘とも思えんのだが、出来の良いグスタフという弟をこしらえてくれた事は、感謝する。穢れの波動が多すぎて、これ以上は耐えられれん。失礼する」
父上との面会の時はそんな言葉を残して、モナは逃げたのだ。よほど不快な波動らしい。

「穢れているか。そうかも知れんなあ」
そうおっしゃって、父上は余りに素っ気無いモナの態度に、大いに落ち込んでおられたが、それでも会えてよかったとはお考えのようだった。

モナにとって、よほど父上との面会が気力を削がれる出来事であったようで、その後丸一日狼の姿に戻り、狼らしく新鮮な生肉を食べて気力を養った。キリャに呪いをかけるには必要な事であったらしい。その様子を見聞きしても、チャスカは騒ぎたて無いでいてくれたので助かった。他のメイドや侍従たちは怖がって寄りつかないのだ。モナの癇に障ると困るので、モナの滞在中は休みを取らせた。

白い狼の姿のモナは神秘的で美しい。真っ白い毛並みのモナと互いの体が密着していると、テレパシーでも言葉でも簡単に意思が通じ、互いに楽なのだった。

（お前の父親と言い、召使いと言い、つくづく鬱陶しい波動がまとわりついておるのう。それに引き替え、このチャスカは清々しい。悪くないのを見つけたな、グスタフ）
（スコウホイのアンニカはどうすべきかな？）
（戻ってきたら、さっさと娶れ。何、チャスカなら大丈夫だ。次のお産はアンニカと同じころが良いぞ）
そんな事を言うが、チャスカだって、セルマのような嫉妬の感情が生まれるのではないか？　僕は心配だったが、モナが大丈夫と言うからには、大丈夫なのかもしれない。
（そうか……わかった。それにしても、お前の父親って、モナの父親でもあるだろうに）
（父、などと言う存在ではないなあ。せいぜい種のもとだったもの、と言う所かの。あの男の寿命は持って再来年ぐらいかな。あの男に何か聞いておくべきこと、片付けておくべきことが有るなら、早い

方が良いぞ）

帝国の老貴族が聞けば目を回しそうな事を、平気で言っている。さすがの僕でも御自身の寿命に関する話をモナがしていた件は、父上に伝える事が出来なかった。

ともかくも気力を充実させたモナは白い狼の姿で、生まれて二月とたっていないキリャに、護りの呪いをかけた。僕とチャスカが体を寄せ会い、四本の手でキリャをモナの眼前に差し出すと、モナの狼の目から不思議な銀色のオーロラのような光が出て揺らめき、キリャを覆ったと思うと、やがて消えた。

それから人の姿にモナはなった。チャスカと直接話す為らしい。

「のう、チャスカ、キリャとは月か？」

「はい、つきのめがみさまです」

「良い名だ。その名のおかげで、我が護りは強まった。あちらでキリャの婿が見つかるぞ。婿はしばらくグスタフの手元であれやこれや仕込むべきだろうが、悪くない婿だ。キリャは婿の国の民の力になるが、帝国には強すぎる。無理に帝国に留めると、皆が不幸になる。チャスカに次の子が授かったら、婿の国にやる支度をはじめるのだ。婿が戻る時に、一緒にキリャを送り出せ。それまでは十分に慈しんでやるのだぞ、良いな？」

「はい、きっと、そのようにいたします」

チャスカの誓う言葉を聞くと、安心したらしい。

「キリャがどれほど愛らしくても、本来はかの土地の祖霊に愛されるべき魂なのだ。無理に帝国に留めるなよ、グスタフ。ではな」

念押ししたぐらいだから、よっぽど可愛い子になるらしい。言うべき事だけ僕らに伝えると、モナは狼の姿に戻り、冷たい冬の闇に溶けるようにして去って行った。

狼の遠吠えが聞こえた。モナだ。それに呼応する狼の声……兄弟たちだろう。僕も父上も黄金宮の庭園内部の森で狼を見かけても、絶対に騒ぎ立てずそっとしておくようにと、一兵卒に至るまで十分に伝えた筈だから、兄弟狼に危害は加えられなかっただろうと思う。

「おまえのおむこさんは、いんてぃなのでしょうかねえ、どうかしらねえ、たのしみねえ」

チャスカはニコニコしてキリャに語りかけている。

「インティというのは？　」

「つきのめがみである、きりゃのおっとの、たいようのかみです」

「チャスカはキリャの婿が、そのインティの名を持つか加護を受けた男だと思うの？」

「かご……？　ああ、たぶん、そうです。ゆめをみましたから」

「夢？　どんな夢？」

「うつくしいおとめにそだったきりゃが、そらをみあげると、おうごんのくもからひかりのつぶがふってきて、きりゃがみごもるのです。するとてんちのものが、おおよろこびする、そんなゆめです」

地球には雲雨の交わり、なんて言葉もあったっけ。黄金色の雨となって、美しい王女に降り注いだ浮気な神様の話も有ったなあ。モナには「キリャの婿を見たら、グスタフにはすぐにわかる」と言われた。複雑だ。僕が帝国に連れ帰って多少その婿を教育することは出来る様なんだが……やっぱり一夫多妻が前提の夫なんだろうなあ。自分の事は棚に上げて、気が進まない。だが、成るようになるのだろう。他人がどう思おうと、キリャ本人が幸せで居られるならば、それで良いのだが。

キリャも連れて行く事を前提に、探検隊の準備は着々と進められた。ともかくも父上が御健在の内に、やるべきことを終えて、帝国に戻らねばいけないのだ。無論父上の御寿命の話は誰にもしてはい

ないが、母上・大宰相は既に亡くなり、グラーン侯爵夫人が病床に就いた。次は父上だろうと考えているものも多い。

ともかく、残された時間はさほどないのだ。

ナウム・タトリン設計の新造船が無事に完成して、乗組員と探検隊のメンバーがしっかり決まった段階で僕は三十一歳になった。船の名前はモタ修道士の「ティクシ・イリャ号で決まりじゃないですか？」という発言で決まった。

ティクシ・イリャ号は木造の帆船としては小型だが、近海を試験航海した船員たちの感想では、技術的には最高水準で操作性に優れているらしい。僕が前世のうろ覚えの知識もあれこれ披露して、それを専門家たちが考えた末に出来た船だったが、出来上がった感じは進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの乗っていたビーグル号に似ている。

「縦帆と横帆の最適な複合は長年の課題でした。この船で一つの完成型を作り出せたように思います」

こう言ったナウム・タトリンは、未知の大陸までは乗って行かないが、ミズホまでは同行する。

探検隊は総勢六十人、探検隊に加わらない船員が十人、ナウム・タトリンのようにミズホまで行くものが五人、僕とチャスカと娘のキリャと乳母と侍女役の乳母の娘で五人、総勢七十人だ。探検隊隊長はモタ修道士で、ヤガー君は副隊長だ。全員武術の心得と複数の外国語がわかる事、自然科学的な興味が強い事、精神的にバランスが取れている事を重視した。いかに優れていても特定の人種・宗教に偏見の強いものは排除した結果、ミッケリの出身者は僅かに四名で、あとは帝国・ワッデン・ミズホの者がほぼ均等に採用される格好になった。正三郎はミズホから乗り込む予定だ。

僕の大航海・2

ティクシ・イリャ号は無事トリアを出航した。ミズホまで約五十日の航海に出た。そこから先はミズホで更なる情報収集をし、食料や水の補給、一部の人員の交代を行い、更なる先へ進む事になる。

ミズホまでは、順調すぎる程順調で、船酔いに適応できず途中の寄港地で下船した者が三人ほど出たが、特に困ったと言う程の事件も無かった。恐れられていた壊血病の防止のために、僕はモヤシの栽培を船内で行わせて乗り切ることにした。おかげで壊血病の患者は一人も出ていない。これまでは酢漬キャベツで乗り切ったものだが、それよりさらに効き目が高いようだ。

ジャガイモもサツマイモもトウモロコシもトマトも無いのだから、仕方がない。これから未知の大陸に行って、これらの作物を手に入れたいものだ。

ヤタガラスのすすめ通り、一か月間、全員ミズホで休養した。船も正三郎が準備をしておいてくれた造船所内の設備を使って、修理補修をする。

「未知の大陸の形は殿下が御記憶の異界の物を参考にさせていただいて、ヤタガラス様のお話をもとに、水鳥の飛ぶ速度と方向から凡その位置をあてはめてみました。鯨取りの連中が暴雨で漂着した島や岩礁などはかなりミズホの幕府も調べています」

正三郎がラフな地図を広げて見せた。僕の知る日本と南北アメリカ大陸の西海岸に挟まれた太平洋と言う感じだ。水深は何もわからない訳だし、僕の地球での知識がどの程度役に立つのか、土地の形だって正確なのかまるでわからない。でもまあ、何もないよりましだろう。

「最初に寄港できそうな場所は、大洋の中ほどにあるらしい島ですね。島と言うより、諸島・群島と言う感じのようです。僕の先祖がかつて漂着して、半年ほど過ごしたと言う『火を噴く山が見える島々』の可能性は大きいと思います。普段アイリュ帝国と交流するほど距離が近い訳では無いんだろうと思いますが」

ヤガー君の言う『火を噴く山』だが、伝えられたその噴火の様子は比較的静かで非爆発的な物のような印象を受けた。鳥たちの話からすると位置関係的にハワイに相当すると考えてよさそうだ。

「ヤガーの話からすると、その島の住人は文字を持たず、漁業と採集で暮らしているようです。村に毛が生えた程度の国が幾つか並立する状態で、一応身分制度も有り、それなりに厳しい決まりは有るようです」

モタ隊長も現地の住民とトラブルを起こさず、調査がしやすくなるように、色々考えているみたいだ。

ユリエは僕らとは別の船でミズホに戻ると、度々こちらにも顔を出してくれた。どうやら当分ミズホで暮らす事に決めてしまったようだ。

「もし殿下が即位なさいましたら、私もミズホに落ち着き、ドランメン伯爵夫人の称号はルイサ殿にお渡しいたします」

ヤタガラスから父上の寿命についての話を聞いているからだろう。僕の即位後をにらんで、もうそう決めてしまったようだ。

「後は……御正妃様のお輿入れに関して、私なりにできますことを色々お手伝いさせていただく所存です」

僕と男女の仲であることをキッパリ止めてしまったユリエは、見事な程清々しく美しい波動を帯びていて、いまだに恋々としている

僕としてはいっそ恨めしいほどだ。
「うん。ありがとう。ユリエは頼りになるし、何でも相談できる数少ない人だから、ミズホに定住しちゃうのは、困るよ。僕がちっとも会えなくなるじゃないか……ねえ、亮仁と碧子が結婚した後、子供が出来たら戻っておいでよ。黄金宮が嫌なら、外に邸を作るから。それとも、僕より宮様が大事？」
「そのような事はございません」
「宮様にお婿さんが来てくれたら、一番話がスッキリするんだろうが、良い人がいないんだよね」
「そうなのです」

宮様と身分がつり会う男性自体、ミズホには十人といない訳で、しかも妻が居ない人となると、皆無らしい。そんなわけで結婚は恐らく無理だ。久しぶりに会った宮様は、落ち着いていたが、やっぱり寂しそうだった。

「宮様の初恋の人って、誰なのかユリエは知ってる？」
「存じ上げております。従兄にあたる方ですね。物静かなお優しい方です」
「その人の奥さんとの夫婦仲は？」
「御正室とは仲睦まじくお暮しと伺っています……ですから、宮様はあまり都にお出かけにならないのでしょうね。お気持ちはわかります」
「ユリエも……帝国に戻るのは、嫌？」
「宮様と理由は違いますが、気は進みません。白髪だらけのシワシワになってグスタフ様にお会いするのがやはり、嫌なのですけど……そうですね、それでもお役に立てるなら……いつの日か戻りましょう。相談役なら白髪の老婆でも勤まりますから」
確かに白髪が以前より目立つが、老けたと言うよりシックに落ち着いたと言う感じで、ユリエはやっぱり大した美人だと思うのだが

……

「白髪になってもユリエは綺麗だよ。気にやまないでほしいなあ……」

「まあ、おやさしい」

「いや、優しいんじゃなくて、未練がましいんだろうなあ。僕はユリエを愛してるから」

僕はユリエの手を取ってキスをして、帝国式の貴婦人に対する礼をした。

「では、御出航の日には、必ず港にお見送りに参ります」

それ以上、僕が何かするすきを与えないうちに、ユリエは席を立ってしまう。

「あのね、邸を、トリアに邸を準備して、待つことにするからね、必ず戻るんだよ」

それに対する返事は無くて、ただ深く一礼を返しただけだった。

無事に手筈が整い、皆も十分な休養を取って、一路ハワイに相当すると思われる島を目指した。思いの外順調で、十日で島につく。ジェームス・クックのように僕らも勝手に神様扱いされた。言葉が通じないから、酋長というか御頭と言うか、そういう立場らしい老人の手を握って、テレパシーで意思の疎通をしたら、もう完全に僕は神様と判定されたらしい。

「我は本当に神だがな。お前も不老の神のようなものじゃ」

そうヤタガラスは言ったが、勝手に拝まれても困るし、打ち出の小槌みたいな存在と思われても困る。だが、タロイモやパンの実は魅力的だったので、種いもや種を譲り受けた。お礼はカラフルな布類を渡したのだが、我々の持ち物がよほど欲しくなったようで、夜中に村の男総出で小舟に乗り込み、ティクシ・イリャ号に盗みに入

ろうとしたのは、予想はしていたが……参った。
ヤタガラスの力を借りて、夜行性の鳥たちに大挙してもらい、ほとんど武器も使わず、無事に追い払った。

「我のおかげで、盗みは罰が当たると思ったようだ。もう大丈夫じゃろう」

確かに、それ以降は盗みは無くなったのだ。

「盗みに来ておいて、知らぬ顔とはけしからん」

そう言って怒る隊員も少なからずいたが、非常に素朴な生活を送ってきた人々にとって、このたいして大きくない帆船でも「山のような大きな船」に見えたようだし、食料や水と交換した布類も「見た事も無いきれいなもの」だったのだ。怒るのも大人げないと感じた。

「怒らず、穏やかに接し、測量や動植物の調査をした方が、よほど有益です」

モタ隊長の一言で、皆は気を取り直し、それから約十日間、測量や調査を続けた。新鮮な果物類や、素朴だがなかなかに美味い豚や魚の丸ごとの蒸し焼き、綺麗な水、温泉も十分楽しめたのは、うれしい誤算だった。

その島から、更に十日で、なんと大陸に到達できた。大陸で初めて遭遇した部族も文字を持たなかったが、最初の島の人たちより律儀というか、物堅い人たちで、盗難問題は起きなかった。ようやくカボチャ・トウモロコシ・タバコに遭遇した。

「おお、カボチャだ、こっちはトウモロコシだ」

僕が狂喜したのを見て、探検隊の連中は奇妙に感じたらしい。そこで僕がカボチャとトウモロコシを使って、ポタージュとポップコーンを作って見せたら、驚いてくれた。探検隊はそこでも測量し、色々記録やスケッチもしたのだが、そこの酋長に息子の一人を連れて行ってほしいと頼まれて、どうするべきか悩んだが、ヤガー君が言葉が多少わかるので、引き受けた。名前をワサハクと言う。年齢は十歳らしい。

酋長との意思疎通はテレパシーで行った。

（オヌンダガオノの中で一番星回りの良いこの子には、七度目の冬までには戻って欲しいが、無理だろうか？）

（大丈夫なはずだ。そうなるように努力する）

（あなたは神の気配を背負っているから、この子はあなたに仕えれば大きく運が開けるはずだ。そして多くの知恵をオヌンダガオノに持ち帰るはずだ）

（わかった。賢い子のようだから、ともかく色々学ばせてみよう）

（ありがたい。よこしまな白い者たちではなく、あなた達が最初に来た。やはりあの子は運が良い）

どうやら『よこしまな白い者』の噂は、このオヌンダガオノという部族の住む土地にも届いているらしい。王が君臨する南方の国の干渉を嫌って、北上し定着したらしいが、誇り高い民族のようだ。

ヤガー君の発案で、このオヌンダガオノの酋長の知っている『邪悪ではない白い家の男』を紹介してもらった。狼煙を上げて、三日後に到着した男は、とある王国の神官兼地方官らしかった。ヤガー君とは、普通に会話が出来る感じがした。僕もその神官兼地方官の手を取り、テレパシーで会話した。

（あなたはこのテパネカの若者によれば、アイリュ帝国よりはるかに強大な国の高貴な方だそうですね）
（アイリュ帝国を見ていないから何とも言えないが、僕の国はアイリュ帝国の東海岸で勝手な事をしている連中よりは何十倍も大きいのは確かだ）
（そうなのですか！　アイリュは戦いに負けた他国の民は、すぐに奴隷か生贄にする残酷な国ですが、あなたの国では人を生贄にしないそうですね）
（しない。人を生贄にすることなど有り得ない。戦って負けた事は無いが、我が国では奴隷を禁止している）
（大きな鉄の山が有って、沢山の鉄や鉄の道具を作る国だそうですが、あの大きな音がする鉄の武器も作るのですか？）
（これの事だろうか？）
僕は鉄砲を見せると、凄く欲しそうな顔になった。
（これ一つで、国も滅ぼせるほどの力が有ると聞きます。一つぐらい欲しいものです）
（そんな力は無い。使い方を間違えると危ない武器だ。この武器だけ持っていても、大したことは出来ない。弓より多少早く確実に獲物を殺せる程度だ。この武器は調子が悪くなったら、自分では直せない。専門の職人に頼むしかないのだ。だから、君に上げても良いが、あまり期待しない方が良い）
（東の方で、黄金と交換でこれを白い者から貰い受けた者が幾人かいますが、二、三度火を噴くと、そのあとは静かになってしまったそうです）
（雨や湿気に弱いし、壊れやすい。使い慣れないと上手く的にも当てられない。沢山の黄金と交換するほどの価値は無いかもしれない）

すると、その、神官兼地方官は、鉄砲の攻撃を防いで反撃する方法を教えてほしいと言う。聞けば、誰かミッケリの人間が早くもや

ってきたらしいのだ。

（君たちの国でも、人をいけにえにする？）

（しますが、生贄にする人は最大限丁寧に扱いますし、年に数えるほどです。大量に人間の生贄をささげるアイリュよりは、穏やかだと思いますよ。我が国の神官にも人間の生贄には反対と言う立場の者が居るのですが、今の大王の側近は残念ながら生贄が必要だと言う立場の者ばかりですね）

この『邪悪ではない白い家の男』の本当の名前はイシュカレと言うそうな。イシュカレは大王を中心とした神官と官僚からなる統治機構を備えたテツココ王国の地方官らしい。権力争いに巻き込まれて、西の果ての僻地に赴任させられたが一応名家の出らしいので、重要な用件が有れば大王に直接お目見えし、じかに話が出来るらしい。テレパシーの感じから、彼は知的好奇心が旺盛で物事を理性的に判断できるなかなかに優れた人物であるのははっきりしたから、相談もしてみる事にした。

僕がラフな地図を見せると、自分の国の大王が住むのはここで有ると思うと言って指したのが、メキシコシティーのあたりだった…と言う事は、アステカに相当する国家とみてよさそうだ。話は色々盛り上がって、僕が欲しいと思う有用植物であるリュウゼツランの仲間の色々やガムのもとのチクルの苗やなんかももらえる約束を取りつけた。お礼かたがた道案内と言う事で、船に乗せて、入り江にあると言うイシュカレの館まで送って行く事になった。

それにしても、僕とチャスカのなれ初めや関係、あの胸飾りの文字が出現した経緯について教えると、驚愕した顔になった。どうやら彼の知識、価値観では、僕は伝説上の西からやってくる『真の神』の代理で、この大陸のすべての人間は平伏し従うべき存在……と言

う事になるらしい。

イシュカレは僕の船内の居室で、いきなり僕に向かって五体投地の礼みたいな動きをはじめ、最後は物凄く恭しく土下座した。そして荘重な調子の祝詞みたいな言葉を唱え、また五体投地みたいな動きをして、床に座り込んだ。

ヤガー君曰く、天地を創造した神に感謝し、その恩恵を賜るようにこいねがう祝詞みたいなものらしい。

「僕はとりあえず、人間だし、イシュカレと友達になりたいと思うんで、どうか椅子に掛けてくれと言ってくれないだろうか」

ヤガー君がそれを通訳して伝えると、イシュカレは恐縮して椅子に掛けた。

翌朝、イシュカレの治める街が見えた。

「あの白い一番大きな建物が、私が今住んでおります神殿です、とイシュカレが申しております」

ヤガー君の言葉で、その方向を見ると、確かに他を圧倒して大きな建造物だった。

港は石でちゃんと埠頭らしきものが整備されているし、はしけも有る。荷下ろしの手配もできるみたいだ。何より港から見るとイシュカレの住んでる神殿が本当に白亜の殿堂って感じで凄い。イシュカレが供の一人を走らせたのは、僕らを迎えるためらしい。そのうち楽団らしきものに先導されて、十六人で担いだ輿らしきものが二つ、他に八人で担いだのが二つ、来た。そうか、この土地は車ってものが存在しないんだったなあ。

「殿下、あれなる一番大きな輿にお乗り頂けませんかとイシュカレが申しております」

ヤガー君が通訳してくれた。どうやら断るわけにも行かないみた

いだ。

イシュカレの住いは神殿に奉仕する人間の為の物と言う位置付けらしい。
テツココ王国に組み込まれる以前は、この地帯を治めていた王が住んでいた宮殿の一部でも有るようだ。

「もとの王族は都で神官として、大王の宮廷に仕えています。かなり大規模な建物でしたが、不要なものは取り壊し、石材を都に供出したり、港の整備に使ったりしました」

どこの世界でも、似たような事を考えるものらしい。
ヤガー君の言葉遣いは、十二分に上流階級と言うかこの地域の王侯貴族の雰囲気を漂わせているようで、それなりに社交的な会話を交わし、外交儀礼と言うようなやり取りをしていると感じる。おかげで僕らの一行はどうやら王族並みの扱いで、もてなされたようだ。

七面鳥らしき鳥のロースト、卵料理、魚介類のグリルやマリネ、トルティーヤの仲間みたいなトウモロコシのパン類、アボカドのペースト、サツマイモにカボチャにトマト、ナス、ピーマン、サボテン、インゲンなどの煮物やスープや和え物類、果物類、リュウゼツランから作ったどぶろくみたいな物、スパイスとカカオの入ったドリンクなどなど、すごい種類と量だった。昆虫類の料理も有ったし、トウモロコシのカビだか何だかのペーストも有ったが、僕はちょっと抵抗が有って食べなかった。だがチャスカやヤガー君の反応から見て、貴重な食材を出してくれたのだろうとは思う。

「凄い辛さですが、何ですか？」
「口の中が、痛いです」

探検隊の大半の連中にとって、唐辛子の辛さは衝撃だったようだ。
「防虫効果、殺菌効果なんかも有るし、健康効果も高い。上手に使えば料理の味付けの幅が広がる」

僕がやるやり方をまねて、タコスみたいにしてアボカドペーストと肉類・野菜を包み込んで唐辛子をほんのちょっと添えて食べると、皆美味いと感じたようだ。

「現在のテツココ王国とアイリュ帝国は、国境に大密林や山を挟んで、あまり交流が有りません。神への信仰のあり方が違っておりますし、どちらも自分こそが太陽の神と月の女神の祝福を受けた国だと主張してますので」

ヤガー君の解説では、アイリュ側に行けば、大型の家畜、恐らくはリャマやアルパカのような荷物運びに仕える家畜もいるが、テツココ側にはほとんどいない。何をするにも全部人力らしい。僕が是非帝国に持ち帰り大々的に栽培したいと思うジャガイモも、色々な品種を得るには南のアイリュ側に行く必要が有るようだ。

ヤガー君の通訳で色々イシュカレ側のメンバーたちとも話し合い、船を一度ミズホに返し、一隻はミズホの港にある僕個人の持ち船である武装した商船と、更にできれば二隻ほど幕府から有償で船を借りて、この港に来るように命じた手紙をつけた。正三郎に言わせれば「恐らく無償で借り出せます」とのことではあったが、ミズホの大商人に預けてある資金を使ってでも、まともな船が欲しいと命じる。資金の受けだしは、ユリエならできるようにしてある。

「ミズホまでヤタガラス様が御同行下されば、かなり早く往復が可能かと存じます」

正三郎は不完全な海図を補うヤタガラスの特殊能力が、正確な航行に不可欠だと感じていたようだ。

「馬と鉄砲をもっと持ち込むべきでしょう」
「ミッケリの武装した連中と遭遇したときの事も考えましょう」
「通貨の代わりになる様な交易品を積み込んで来るべきですね」

皆で色々意見を出し、それに従って積荷も人員も送ってもらう事にする。そうしてまとめた僕らの要望がどの程度反映して貰えるかは不明だが、最低でも二隻の船と多少の武器弾薬・馬ぐらいは期待できるだろう。正三郎とヤタガラスが居るのだ。何も心配はしていなかった。

船の不在中の僕らはこの、神殿というか邸というかの、一部の建物を宿舎に割り当てて貰った。毛皮と毛織物でふかふかのかなり寝心地の良いベッドは、悪くなかった。シーツに相当するものは無くて、寝具の洗濯なんて滅多にはしないらしいのが、ちょっと嫌だったが。

イシュカレには銃を一丁渡したが、試射させて、命中精度が案外低い事、装填に時間がかかる事、を納得させた。どうやら打つ時の衝撃の強さに驚き、慣れるまでにかなりの訓練が必要だと言う事は十分実感できたらしい。ちなみに東海岸で暴れているミッケリの連中の銃は、火縄銃と多少発火装置をいじった先込め式ばかりのはずだ。

僕は先込めの施条タイプを帝国の標準装備にしていたが、今はそれを改良して元込め式にする、地球で言う所のスナイドル銃レベルにまで引き上げようとしている最中だ。

ミッケリは銃弾の形だけを帝国の真似をして丸からいわゆる弾丸型にしただけだ。施条の必要性はどう言う訳か全然理解されていなかった。というか僕が意図的に腕利きの金属加工の職人を各国で引き抜き、高額の報酬を与え、自由に研究試作させたのも大きいのだ

ろう。それに工学的な知識を持つ研究者も帝国に結集している。しかも製鉄技術は帝国が一番とくれば、自ずとそうなるのかもしれないが。

あの用心深いイヴァルが細心の注意を払って、軍事機密を守っているせいもあるかもしれない。わざとデマを流して、ミッケリに正しい情報が伝わらないように工作したようだから。

僕が一丁だけ隠し持っているデリンジャータイプのピストルなんて、見られたら大いにまずいだろう。

ミッケリ側は近代的な戦術も何も知らないだろうから、僕はその攻撃からイシュカレの治めるエリアの住人を守るのに有効で、すぐできそうな対策を考えた。まずは塹壕や砦の強化や大型投石器の制作を指導する事にした。そして弓矢を採用するように言ったのだが、これは受け入れられなかった。神話に基づく言い伝えにより、忌避されてきた所為らしい。

「人の生贄を止めるようにと言う意見はすぐに採用されたのに、弓矢はダメなんですねえ」

モタ修道士もお手上げみたいだ。

「弓矢は蛮族の卑怯な武器と言うイメージのようだよ」

ちなみに皆、外国語習得の能力の高いメンバーぞろいで、ヤガー君の特訓も有って、探検隊員のほぼ全員が簡単な日常会話なら理解できるレベルにすぐに到達した。それだけ元から優秀な人材揃いなのだが。

測量などはどの隊員も行ったが、各自の研究課題に従って調査研究の資料を集め、調査する事も行った。

「ゴムを見つけた！」

僕は大喜びしたが、皆には不思議がられた。見つかったのは素朴な生ゴムのボールだった。神事で吉凶を占うのに使うらしい。森の蛮族にビーズや布類を与えれば、大量のゴムを手に入れられるとイシュカレが言うので、早速頼む。手に入れた天然ゴムにおっかなびっくり硫黄を加えて加熱した。まだらが出来たし、実用性にはまだまだだろうが、ともかくも加硫ゴムの板が出来た。

「これを馬車の車輪に使うと、これまでになく乗り心地が良くなるはずだ」

僕の喜びようが最初は不可解だと思った連中も、緩衝材としてのゴムの威力は理解したようだった。ゴムは他にもいろいろ有効に使える物質だが、こんな出先ではあまり大したことは出来ない。

イシュカレたちにタイヤというか車輪について教えると、これまた大いに感謝された。僕らは実験的にソリッドゴムタイヤの二輪車を作った。人力車と言う感じのものと、帝政ローマあたりのチャリオットという感じのものを試作する。

だが、一番役に立ちそうなのは簡単な荷車だ。

「奴隷一人で、これまでの四、五人分は荷物が運べます」

そう言われた。イシュカレはただ素直に喜んだだけなのだが……力仕事専門の奴隷は、顔面にはっきり刺青をされてしまっている。何も顔にしなくても、と僕はつい思ってしまった。密林の部族の中には成人に達した印に、顔に入れ墨する部族が多いらしいが、どうもこの辺は、そうした部族を奴隷にした場合が多いらしい。

「これらは男も女も顔に入れ墨し、丸裸に近い状態で暮らしています。彼らは毒の付いた矢を良く使いますから、彼らなら弓もうまく

使いこなせるでしょうが……」

毒矢を自分たちに向けられたら適わない、と言うのがイシュカレの本音らしい。つまり忠誠心の問題が大きいと言う事だ。異民族なのだし、文字通り奴隷狩りで、奴隷にされちゃったようだし。恨まれて当然か。

「ならば、これはどう？」

僕は試みに簡単なクロスボウを作った。この土地で手に入る素材で、一号機の弦はガットに類似の何かの動物の腸を加工したものを使った。ただ、弦が貴重品らしいので大量には作れないし、切れた時の替えも十分には用意できそうになかった。結局強度の割に手に入れやすい植物系の素材を採用する。

「弓矢に不慣れな者でも、これなら使える。連射は無理だけど、上手く運用すれば使えるだろう」

改良型を披露するとイシュカレが「これなら蛮族の弓とは違いますから、使わせてください」と言う。この簡単な構造のクロスボウはイシュカレの管理する本来は神殿の祭器類を主に作るらしい工房で、大々的に作ることになった。

僕らが手分けしてイシュカレの治める土地の防衛強化を指導し、カタパルトとクロスボウを作っている間、調査や測量にあたる者も着々と実績は上げていた。地味に忙しい約二か月の間、探検隊の隊員の中には母国に二度と戻れないかと不安に思う者もいたようだ。確かに、ただ戻るだけなら時間はかかりすぎだが、僕は遠方でもヤタガラスの気配をちゃんと探ることができたせいもあって、不安にならずに済んだ。僕が安定していると、大抵の隊員は動揺せずにい

てくれた。

やがて正三郎とヤタガラスが無事に三隻の船を引き連れて戻ってきた。聞けば東海岸に出て、ミッケリ近海を抜けるルートで帝国に無事に戻れるように手を打ったらしい。

「レーゼイ家の所有する帆船が三か月後に東海岸のミッケリが管理している港に入ります。払うものさえ払えば、港の役人にあれこれ詮索されずに済むはずです」

「じゃあ、三か月後には東に到着しないとまずいな」

「そうなりますが、この港から戻る事も出来るように手を打つべきでしょう」

イシュカレは都にのぼり、大神官を伴って戻ってきた。そして、僕と僕の所有する、あるいは使用する船が港を使い、ミズホとの間の交易をおこなう事を正式に許可して貰った。そもそもこの大神官は、このイシュカレの赴任地の王家の王子だったそうな。アイリュ帝国の属国である南方の隣国に責められ、親戚を頼ってテツココ王国に逃れ、そこで神官となったらしい。テツココの軍が敵勢力を追い返した後、大神官は自分が王として返り咲くより、テツココの大王の直轄領とする道を選択したらしい。

「あまり軍の事はわかりませんし、一つの国の王を務めるのは大変ですから」

そんな事を言って穏やかにほほ笑んだ大神官は、なかなかの人物に思われた。

「西の国の高貴なる方、ぜひ無事に天の鏡の日月の島で、黄金の笏を得られますように」

大神官はそう言って僕を祝福した。

僕は探検隊を改変するに当たり、不安がっていた連中は希望により返すことにした。多少の人員の入れ替えは有ったが、総勢六十五名で天の鏡の日月の島を目指すことになった。

心強いのはイシュカレの息子の一人チャノガがヤガー君の友人となり、最後まで僕について帝国に行くと決めて供をしてくれるようになったことだ。オヌンダガオノのワサハクに続いて二人目の現地採用組だ。

ヤガー君・ワサハク・チャノガの三人は、最初はぎくしゃくもしていたが、僕が探検隊の再編成を行っているうちに、馬に乗れるようになったのは驚いた。ヤガー君は当然乗れたのだが、他の二人に彼がちゃんと指導して、乗りこなせるようにしたのはえらい物だと思う。三人とも運動神経は非常に良い。帝国式の剣も与えて、こっちも色々な隊員を師匠役に、かなり使えるようになった。

更に驚いた事に、チャスカがちゃんと馬に乗れるようになった。乳母と侍女役の乳母の娘は、ユリエの仕込みで元から馬に乗れる。こっちも特訓だったらしいが。

「うまはすなおでしょうじきだから、きもちをこめてはなしかけると、ちゃんとわかってくれます」

そう、チャスカは言う。短期間で隊員たちも驚くほど達者に乗れるようになったのは、チャスカの特殊能力なのかもしれない。

馬も長い船旅の疲れを癒し、新しい土地になれた頃、僕らはこの大陸生まれの三人の若者を先頭に、一路、天の鏡の日月の島を目指した。先ずは登山口となる集落を探し出し、そこから中腹あたりにベースキャンプを作り、僕とチャスカとキリャ、ヤタガラス、そして体が丈夫で冷静沈着な者十五名を連れて、徒歩で目的地を目指すのだ。鳥の姿のヤタガラスは普段は僕の肩の上で、時折、飛んでもらって、最短ルートを探りながら登る事になった。

登山口の集落や、ベースキャンプで地元の人たちとのトラブルが起きなかったのは、モタ隊長の判断力と若手三人の力だ。イシュカレの威光も有る程度は関係ありそうだった。

モタ隊長は最終までついて行く組に入りたがったが、皆の束ね役として重要だし、健康ではあるがいささか呼吸器が弱い傾向なのが気になり、ベースキャンプに残ってもらった。若手三人の内、一番総合能力が高いヤガー君は僕についてきてもらう事にした。ワサハクとチャノガは高い山でかなりの人間が遭遇する高山病を、山の神の祟りと信じて恐れていたので、ほっとしたらしい。

「ヤガー君、本当は高い山は苦手なのに、済まないね」

僕が軽く肩を叩くと、ヤガー君は物静かにこう言った。

「殿下がおっしゃったように、祟りではないのですから、きっと何とかなるでしょう。それに僕の何種類かの絵文字を読み分ける力が、お役に立つかもしれませんし」

その言葉が終わらないうちに、ヤタガラスが僕の肩を離れ、飛んだ。

（おい、グスタフ、変な石碑のようなデカい石が立っているぞ）

そう僕に伝えると、一声高く鳴いて、先へ行った。僕らがゆっくり上っていくと、確かにドデカい石碑がドーンという感じで立っている。高さは軽く二階建ての家ぐらいある。大人五人で手を繋いでやっと囲めるような太い石柱だ。規則正しい円柱ではなく、そうとう凹凸が有る。幾段にも分かれて、浮彫がされている。

「これは……このような石碑は初めてみます」

ヤガー君は興奮気味だ。

「私の完璧に読みこなせる五種類の絵文字のほかに、読み方が今となってはわからなくなった絵文字が三種類刻まれています」

どうやら、五種類の絵文字は同じ内容だそうだ。

「真の神の祝福無き者、この先の天の鏡に至れど、金の笏を得る事かなわじ。真の神に祝福されし者、己が天命を知れ」

「あと、どのぐらいかかるかなあ」

「この石碑には、何とも……」

ヤガー君は、まだ熱心に石碑を見ている。拓本でも取ると良いのかもしれない。

「帰りにこの石碑の拓本を取ろうか？」

「罰が、当たらないでしょうか？」

「じゃあそれも、神様に聞くとしよう」

僕が言うと、ヤガー君は嬉しそうに頷いた。

ヤタガラスはいつの間にか人型に戻った。

「明日、丸一日歩いたら、湖につきそうじゃぞ。腹が減った、飯じゃ、飯」

促されて、一同野宿の態勢になった。湯も沸き方が不十分だから、御馳走は無理だが、それでもトウモロコシのパンをかじるヤタガラスの機嫌は良かった。

僕の大航海・4

ベースキャンプがほぼ富士山五合目と言う高さだったから、この高原地帯は海抜四千メートル前後だろう。地球で言えばアルティプラーノと呼ばれる、ペルー南部からボリビア・チリにかけて広がる高原地帯に相当するエリアなのだろうとは思う。寒くて乾燥してところどころ緑で大半は茶色っぽい草原が続いている。薪とかなり性能の高い寝袋を用意しておいて良かったと思う。

チャスカとキリャは大抵夜は、特製の大型寝袋に母娘で一緒に寝ている。むずかると乳母が温かいように包んで、抱っこして寝かしつけるが、あまりキリャは大人を困らせてはいない。授乳とおむつの替え時を知らせる時に泣くだけで、あとはスヤスヤ寝るか、移りゆく景色を一生懸命見ているかだ。昼間は僕が抱きかかえて馬に乗ることも有る。手で抱えるのではなく、幅広いしっかりした布を使った地球なら「ベビースリング」と呼ぶような一種の抱っこひもを使う。帝国ではそういえば見たことが無い。トリアの連中は僕が娘を抱っこして、こんな風に馬に乗るのを見たら驚くかもしれない。どうやらこのベビースリングも、この土地の土産の一つになりそうだ。

大抵はカンガルー抱きと言うのだろうか、キリャが僕と同じ前方を見やすい恰好にしている。キリャは真剣に外界の様子を見る。意識に流れ込む言葉や情報が、この子の中でどう根付いていくのかはっきり分かるのも父親としては興味深い。ともかくも、僕は頼れる庇護者であると認識されていて、「大好き」らしいから先ずは父親として合格だろうか。

探検隊の手前もあって、僕はチャスカに触れる事は滅多にしない。夜もこうして寝袋を並べ、互いの顔に手で触れたり、眠りにいる前

に額に軽くキスする程度だ。それでも僕もチャスカも気分は穏やかだ。高地の所為か体全体が何となく出力を押さえるモードに入っていて、昼間の歩き方も高山病を警戒してトボトボという感じのスピードなのだが、それが何か影響しているかもしれない。

「神域ですから身を慎んでおられる」とヤガー君は解釈しているし、他の大方の隊員は「自分たちに気を使っておいでだ」と感じているらしいが、そんな事でも無いと思う。

チャスカとキリャが僕の右側で、ヤタガラスが僕の左で寝ている場合がほとんどなのだが、このヤタガラス、この土地に来てから深く眠るらしい。夢も見ないでぐっすり寝るそうな。

「夢を見るのも、しばらく休んだ方が良いんじゃろう」

この言葉の意味が、この時点では僕には良くわからなかったが、あとで大いに理解した。

ともかくも、男全員が交代で火の番をしながら無事に夜が開けると、簡単な朝食を取ってまた道を進む。昼もごく簡単なものだったが、この日は特別に全員にドライフルーツとナッツ類が支給された。各人の体調に応じて、ゆっくり食べるように僕からも言っておく。日が暮れる直前、ヤタガラスが叫んだ。

「見ろ、あれだ。すぐそこだぞ」

なんとなく意識も体もゆっくりモードなのだが、ヤタガラスの興奮はすぐ僕にも伝わった。

「あれが、天空の鏡か！」

夕日に輝く水面は、確かに大きな湖だ。場所がこんな高地でなかったら海の入り江か何かと勘違いしそうだ。僕らを見て、慌てふためく地元の男と息子らしい少年にヤガー君が声をかけた。馬を見るのも、髪が黒くない人間を見るのも初めてで、化け物か神かわからないがともかく逃げようと思ったらしいが、ヤガー君の言葉は理解

できるらしく、落ち着いてはなしてくれた。驚かして気の毒だったので、布を一枚やると、今度は大喜びしてくれて、自分たちの村に来いと言う話だった。魚の網を持ち、取った魚は上手い具合に草を使ってまとめ、手に提げて持っている。かなり大きなマスを思わせる魚だった。

「魚を取って干し魚に加工し、それを持って麓で交易して必要なものを得るようです」

ヤガー君の言うように、村中の家で、干し魚を作っているらしく、村全体にその匂いが充満している。いわゆるトトラなのだろう。葦の仲間の植物が湖岸周辺に大量に群生している。村人はその葦を編んで船を作り、家の屋根を葺き、壁を覆っている。火をたくのも葦を使う。

「どうも、この匂いでは眠りにくいですな」

一般的には帝国やワッデン・ミッケリの人間にとって、干した魚の匂いは食欲をそそる匂いではないのだ。焼いた干し魚はそれでも食べるが、塩辛や馴れずしに近いタイプの発酵食品は全部『ひどい悪臭』としか感じないのだろう。僕は塩辛の方はどうにか茹でたジャガイモと一緒に食べたが、馴れずし的な保存食の方は無理だった。チャスカとヤガー君は平気で食べていた。

呪い師だと言う老人が、僕に触れたあと、大声を上げて、いきなりあの大げさな五体投地風の礼を始めたのは、ちょっと面食らった。それから荘重な調子で村人に演説している。

「殿下を『偉大な方だ。光に満ち溢れていて、人の理も越えた方だ。湖のあの島にお入りになる方だ』と皆に説明しております」

ヤガー君の言う通りなのだろう。村人全体が僕を崇め奉る感じで幾度も礼を繰り返すので、やめてもらう。

そして人間の客としての扱いを頼み、翌朝、湖の島に行くための船を出してほしいと頼んだ。

「無論、村で一番大きくて立派な船をお出しする、そう言っています」

結局僕らは野宿した。小さな村だから迷惑になると言うのが表向きの理由だが、皆が魚臭いので逃げたと言うのが本当のところだ。翌朝出してくれた葦船は、なるほど、なかなかにしっかりして、形も綺麗だ。

村で一番の漕ぎ手だと言う男と、僕とチャスカ・キリャ、そしてヤタガラスが乗り込んだ。皆は岸辺で待つことになる。僕のいない間に、意外な客人が来ることになるとはこのときは全く考えもつかなかったが。

湖面はまさに鏡のようだった。稀に魚の気配がしてさざ波が立つほかは、朝もやが立ち込めているばかりだ。今日は申し合わせて村人は漁を休んだらしい。キリャはスヤスヤとチャスカの腕の中で眠っている。静かに葦船は進み、やがて奇妙な形の巨大な岩が見えてきた。球を半分に切った形で真っ黒だ。周りに小さな白い砂浜が有り、船が付いた。

「船には離れてもらった方が良かろう」

ヤタガラスの考えでは普通の人間に見せるべきではない事が、これから起こると言う事らしい。

「一応、夕方に迎えに来るはずだがな」

食料と水を下ろしてもらい、僕が夕方にまた来てくれるように頼むと、男は理解してくれたようだった。

船影がもやのかなたに見えなくなってから、僕らは浜から大岩の

前に立った。すると、いきなり僕らは岩をすり抜けて、中に入ってしまった。内部は立方体の上下左右すべてが、乳白色の不思議な弱い光を発するパネルで覆われた部屋だった。真ん中に巨大な流線型のカプセルみたいな物が有る。

「何じゃろう、これは。中に人が寝るのか？　大きさからして、大人二人はきつそうじゃがのう」

ヤタガラスの言葉に反応するようにして、いきなり、ルンドの管理者を名乗る爺さんが現れて驚いた。

「驚いた。お久しぶり」

「久しぶりじゃのう。そのカプセルはチャスカとキリャが入るための物じゃ」

「入るとどうなるんだ？」

「超高速睡眠学習というところかの。グスタフが関わるすべての国の言語を自在に話せるようになるぞ。もっとも、キリャは話をしはじめるまでは効果は表には現れんが」

「じゃあ、僕は？」

「積もる話と言うのも有るしの。ああ、ヤタガラス、あんたはもう、外に出てくれて構わん。ここではやる事も無いしの。先に岸辺に戻ってくれた方が良いかもなあ」

「何じゃあ、その言い方は。わかった。言われた様にする」

ヤタガラスはふくれたが、爺さんの言葉に従い、岸に戻るように鳥の姿になった。

「客人がおるからの、もてなす手伝いをしてやれ」

「お客さん？どんな人かな？」

僕は不思議に思ったが、ヤタガラスに任せておけば良いとの事なので、話を切り上げた。

「さてチャスカ、あんたの娘と一緒にこの中で寝てくれんかの？」

爺さんはカプセルの蓋をあけて、チャスカを手招きした。
「はい」
チャスカが素直に、爺さんに言われたようにキリャと頭を並べて横になると、カプセルのふたが閉まり、二人の姿は確認できなくなった。

「なあ、二人は大丈夫なんだよな。まさか何かショックでおかしくなるとか、無いよな？」
「まあ、まず有り得んな。さあ、お前はこっちじゃ、グスタフ」
カプセルの脇も素通りできる壁で、抜けると天然の灰色の岩の洞窟と言った感じのスペースに出た。
「あの真っ白い部屋は、本当は壁も何も無いのか？」
「まあ、そんな所じゃ。この岩は本物じゃがのう。ほれ、こいつ、久しぶりじゃろう。次回はお前が出現させたい場所にこいつを出せるはずなんだがのう」
「じゃあ、次回は黄金宮の敷地内とかに願いたいもんだなあ」
「余人の目は避けねばいかんぞ。力の無いものが触れると、うっかり異世界トリップじゃからの」
「地球にか？」
「そうなら良いが、通常の人間が生き残れない様な成分の大気や重力の世界に放り出されれば、即死じゃ」
「そんな世界が有るのか」
「有るんじゃ。さて、色々有るじゃろう、知りたい事が」
「考えてみれば、今日は井沢亮太が亡くなってから満三十二年、つまり三十三回忌に当たる日じゃないか。前回の話だと、僕が皇帝に即位してから領内のどこかにこの石は出現するって話じゃ無かったか？」
「この石に触れて以降、伝説の金の笏をグスタフに渡すからのう、ここは嫌でもグスタフの領地になる。ここはまあ聖地じゃから、近

隣のどこの国が領有してもトラブルの元なんじゃよ。グスタフのおかげで、あの皇帝の寿命がちょっと延びたのも原因の一つじゃがな」

どうやら僕の行動次第で、多少は運命の予定コースがぶれるらしい。

「この運命のぶれ方は、好もしいのか、まずいのか」

「お前が優秀なんじゃよ、ここが領土になるのが、予定より早まった、そういう事じゃ」

「何をすると優秀で、何をするとアウトなのかわからんけどなあ」

「善悪の基準は、地球もここも大差無い。まあ、まじめに良心的に仕事に励んだのが高評価につながった、と言う所かのう」

「いちいち人のやったことを評価するなんて、鬱陶しい話だなあ。それにしても、どんな神様が出現するかと思えば、ガックリだよ。高評価だろうが何だろうが、やたら広い領土を持たされても面倒だし、最近は適当な所で死んでもいいような気もするんだ。僕も」

「なんじゃあ、ユリエの所為か？じゃが、美保の転生は確定事項じゃぞ。それまで待てんか？　息子にでも役目を譲るのか？」

「そうしたい気分だ」

確かに……ユリエの老化と僕の奇妙な不老の状態が噛みあわず、苦痛なのは確かだ。チャスカの将来の生活に関して、ある程度見通しが立てば、僕が先に死んじゃっても良い様な気がする時も有る。

「アンニカのほかに、後幾人か面倒を見るべき女子がおるのに、予定が狂うとこちらも困るんじゃ」

「御免こうむる、と言いたい気分だ」

「そう言うな。気立ての良い美人ばっかりなのに、贅沢な奴じゃのう。まだ、石にも触れておらんだろうが」

「はいはい」

僕は黒い石の台座の上のブリリアントカットを施したダイヤみたいな形の光る石を見た。

「前回より、パワーアップしてるのかな、これ」
「そうじゃ。帰国したらすぐ即位だろうしな」
「おい、それじゃあ、今の父上の……」
「死に目にはちゃーんと会えるようにしてやる。喪が明けたら、アンニカと結婚式じゃな」
「ハア……面倒臭い。美保が転生するまで、どっかでコールドスリープ状態にでもなるとか、出来ない？」
「それでは、お前が転生した意味が大いに損なわれて、美保ちゃんも気の毒な事になるぞ」
「どんな事さ」
「わしもよう知らんが、良いことは無いのだけは確かじゃよ」
「ケッ、いい加減な爺さんだ。わかったよ」

僕は半ばやけくそで、床に座り込んで光る石に触れた。
おや？　確かに僕の家だが……屋根がグレーのスレート瓦だったのがモスグリーンに、外壁が白から淡いクリーム色に変化している。ハゲのデブオヤジが門を開けた。ああ、弟じゃないか。しっかし……老けたな。考えたら、弟も五十歳を過ぎている。どうやら弟と妻は僕の母と一緒に暮らしているようだ。門を開けて迎えたのは、成人した甥と姪らしい。しかもそれぞれ結婚して、子もいるようだ。

「それにしても兄貴の二十七回忌を省略したら、当日親父が亡くなるなんて、あの時は驚いたよ」
「亮太が呼んだかもねえ」
「写真見ていつも思うけど、亮太伯父さんってハンサムね。兄弟な

のにお父さんとは大違い」
「兄貴は二十二歳だぞ、生きていたらやっぱり腹は出て禿げていたはずさ」

父は、やはり亡くなったようだ。母もめっきり老け込んでいる。もうあまり長くは無さそうだ。やってきた僧侶は僕の見覚えのない人だった。いつも来てくれていた和尚の跡取り息子らしい。話題も僕より甥や姪の暮らしに関することがほとんどで、美保の話は全く出なかった。法事自体、僕の三十三回忌より父が主体だ。完全に代替わりして、僕の地球での居場所はもう無くなったのだと、嫌でも実感させられた。

美保かあ。今更見ない方が良いだろうか？　だが、やはり僕は美保が気になったみたいだ。自覚は余りもう無かったが。あちらはあちらで、こちらはこちらと思いながら、やはり気になってしまうみたいだ。

「ああ、よしよし。今お祖母ちゃんがミルクを作るから、ちょっと待ちなさい」
おむつを替えた後、赤ん坊に声をかけて、台所に立つ美保。文字通りお祖母ちゃんなのだろう。どこかのマンションの一室と思しき所にベビーベッドが置いてあり、中で赤ん坊が泣いている。美保は急いでミルクを作り上げ、戻って来た。
「お母さんはお前を早く保育所に入れるって言うけどね、こうやってお祖母ちゃんが面倒も見ても良いと思わない？」
赤ん坊は何か意味不明の声を発して、美保の言葉に続けた。
「そうよねえ、お祖母ちゃんと一緒の方が、良いわよねえ」
美保の夫はどうなったのか気になった。ふと見ると小さな洋風のキャビネットみたいな仏壇にどこか見覚えのある男の写真が有り、位牌が有る。赤ん坊に向かって「仏様のお祖父ちゃん」などと言う

事を話しかけているから、夫は割合と早く亡くなったらしい。そこで画像は消えた。今の美保がどうやって生計を立てているのか、子供らは皆独立したのか、詳細まではわからなかった。

「父が亡くなっていたんだな。美保は、孫の世話をするお祖母ちゃんだった。姿を見たと言う事は……」

「縁は途切れておらんよ」

「そうか。苦労したみたいだったな。手が荒れていたし、服は質素でアクセサリーもしてなかった。表情は穏やかで明るかったけどね」

「魂の錬成には苦労も必要なんじゃよ」

「美保も、いい迷惑だろうなあ。生まれ変わったりしても……」

「それは違うと思うぞ」

どう違うのか、爺さんの言葉には説得力が無い。

「なあ、さっき、ヤタガラスに客がどうのって言ってたな。どんな客なんだ?」

「会えば分るさ」

全く、今度はどんな面倒事が降ってわいたのだか……僕は思わずため息をついた。

「ほれ、これを持って行け」

チャスカとキリャの入ったカプセルの前で、問題の金の笏を渡された。よくわかんないが、イギリス王室のアフリカの星って呼ばれるデカいダイヤを嵌めこんだ物と、サイズ的に似通っている。長さは1メートル弱で、嵌っている宝石類が呆れるほど超豪華だ。

「何だよ、これ、結構重い。軽く1キロは有るなあ。持って歩くのは面倒だな」

「うんと小さくも出来るから、こうやって首にかけておくのはどうじゃ？」

「アクセサリーの類は面倒で好かん」

「まあ、そう言うな」

それにしても、どこの技術なんだろうか？　1メートル弱の金ぴかの笏が、手のひらサイズになってチェーン付きのペンダントに化けたかと思えば、更に小さくなって、親指の頭ぐらいの大きさのイヤークリップ、さらにはリングに化けるのだ。だが、サイズダウンした割に重さは変化が少ないような気がする。一日中くっつけていたりしたら、肩が凝りそうだ。鬱陶しい。

「うっかり落としそうだな、硫黄の入った温泉とか落とすと変色するか壊れるかしそうだし」

「なになに、大丈夫さ。この笏の方で個体識別して、グスタフから離れないからな」

「何だよ、それ、気持ち悪いな」

「一種のタグなんじゃよ。つけておいてくれると、お前やお前の家

族の安全は保障されるんじゃから、な？」
「はいはい。どうせ僕は『神』と称する誰かの実験動物みたいなもんなんだろうよ」
「……神の加護とか、恩寵とか、思わんか」
「生憎、二十一世紀の日本人だったものでね、そう言う発想は馴染まないよ。で、爺さん自身も一種のホログラムとかアンドロイドだったりしたら、笑うけどな」
「わしはわし自身が何者かという疑問を、解明すること自体禁じられている」
「あんまり突っつくなって？」
「そうしておいて欲しいもんじゃ。次回はお前さんが即位後、必要に応じていつでも会えるぞ」
「ふーん。まあ、いいか。僕も思いの外たくさんの人間の運命を左右するような立場に立たされちゃったわけだし、責任を果たさないと、人として不味いとは思ってる。でもまあ、誰かに代わって欲しいよ。正直な話」
「不老不死の皇帝は、望みではないか」
「全く望まないな。適切な後任者が出現したら、喜んで交代するよ。ああ、でも、僕の子供らが酷い目にあわずに済むようには、手を打っておきたいけどね」

爺さんは困ったらしい。かなりの時間、無言で部屋をのろのろ歩き回っていた。もしかして予想外の僕の反応で、一時的にシステムに異常をきたしたのか？
このキリャとチャスカの入れられたカプセルは、何千年、何万年後の人類、あるいは地球外の極めて高度な知的生命体の高度な文明によって作り出されたものかもしれない。そんな気がする。

「神ねえ。ピンとこないや」
爺さんは僕のつぶやきには反応しないで、二人をカプセルから外

に出した。キリャは眠ってるし、チャスカは眠そうだ。
「なあ、変な副作用出ないだろうな？　精神崩壊とか」
「それは無い。大丈夫じゃ。眠気が取れたら、頭もスッキリするはずじゃよ」
「……わかった」
「その笏、身に付けておけ」
「はいはい。そうします」
僕は幾度か爺さんの前で、笏の形の変形と、装着の練習をさせられた。
「うっかり忘れると、どうなるんだ？」
「笏の強烈な波動で、うっかり触れた者が精神に異常をきたす場合も有る。大抵は軽い痛み程度だろうがな。この笏はグスタフ以外の物が触れることを、拒むんじゃ」
「ふーん。そういう風に個体識別の変なシステムが出来てるのか」
僕の言葉に対するリアクションは何も無かった。そしてまた、爺さんはスッと消えてしまった。

気が付くと、もう、船頭との約束の時間が近い。僕らは丸い岩の外に出て、持ってきた水を飲み、トウモロコシのパンや果物や干し魚を食べて船を待った。チャスカは眠いうえに舌がもつれる様な感じがするみたいで、上手く言葉が出ない状態らしい。

船が無事に迎えに来て、皆の待つ岸辺についた。僕が金の笏を出して見せると、皆一斉に拍手喝采と言う感じだった。ヤタガラスが面白半分に笏に触って、悲鳴を上げて転げまわった。
「ああ、これは僕専用の笏だから、誰か別の物が触ると、強烈な波動で痛みを感じたり、酷い場合は精神に異常をきたしたりするらしい。一種の危険物だから、くれぐれも触れないでくれよ」

「魂消たぞ。手が焼け焦げたかと、おもうた」

その様子を見れば、触ろうとする者は出ないだろうと思われた。

「笏はそれで良しとして、ヤタガラス、客って、誰だった?」

「この子じゃ。何やらとんでもない面倒な生まれの子の様じゃが」

ヤタガラスはじっとこちらを見つめている、一人の幼い男の子を指さした。

朝の内に岸辺に戻ったヤタガラスが、日当たりの良い葦の原っぱで葉をなぎ倒して、その上で寝転がるうち、奇妙な夢を見たそうだ。

「見た事も無い風変りな形の石の大きな建物から、幼子を抱きかかえた女が階段を駆け下りて来るんじゃ。その周りを幾人かの男が守っておるが、石つぶてでやられる者、重りの付いた縄のようなものに足を取られて倒れるもの等々あらかたやられてしまうのじゃ。それでも幼子と女はどうやら逃げ延びたようじゃ。じゃが、女はその子を抱きかかえたまま、息絶えたらしい。その子は震えて女のそばを離れると、とぼとぼ歩きはじめたが、力尽きた。夢はそこで終わったな。恐らくその子が客人なんじゃろうと思って、探したら、この子が岸辺の葦の中に倒れとった」

僕が手招きすると、五歳前後と思われるその子はトボトボとやってきて、素直に僕に抱かれた。

上質の象牙を思わせる様な肌の色で、その賢そうに光る黒い目が印象的だ。真っ直ぐな艶の良い黒髪を肩の少し下ぐらいまで伸ばして、三つ編みにして後ろに垂らしている。大きなピアスと言うのか耳飾りも金製だ。胸飾りも金と翡翠を使ったかなりでかいものだ。色々いわくありげな家庭環境の子だろう。

「僕はグスタフと言うのだが、君の名前は？」

頭の中に浮かんだ言葉は僕にとって未知の言語だったが、何のためらいもなく口から出た。爺さんの所為か笏の所為か、僕の能力が増強された所為だろう。子供はホッとした顔つきになり「ロカ」と答えた。恐らく寛大を意味する名前だろう。

「そうか、ロカか。良い名前だ。君は由緒ある家の子供だと思うが父上の名は？」

「シンチ・ワイナです」

その名前を聞いた探検隊員の間に、どよめきが起きた。アイリュ帝国の若き暴虐の皇帝の名前だからだ。

ロカはその反応にびっくりしたらしい。

「僕たちでもシンチ・ワイナの名前だけは知っている。有名だからな。だが、その皇子のロカが、なぜこんな所まで来たのかな？　誰かに狙われていたのかな？」

「パヤチャは私がコヤの子だから、悪者には邪魔なのだと言いました。そしてクイコチャに行けば黄金の髪のパカヤカシックに助けて頂けると言いました」

クイコチャは、どうやらこの湖を指すらしい。ヤガー君に聞くと、アイリュ帝国ではこの天の鏡の事をそう呼ぶとか。神の湖、と言う程の意味のようだ。パヤチャは途中で絶命した忠義な婆やらしい。

「コヤって……」

「帝国で言う、皇后陛下です」

チャスカの言葉が、急に明瞭になって、僕は魂消た。ああでも、

僕もアイリュの言葉が急にわかるようになったみたいだから、驚くことは無いのか。

ロカはアイリュの皇帝シンチ・ワイナの唯一の嫡出の男児、そう言う事らしい。他に庶兄やら庶弟やらウジャウジャいるらしいが、ロカが知っているのは五人ほどのようだ。

「ロカ皇子の母君は、御出産の折に亡くなられたと聞いています」

言葉自体は僕もチャスカも不自由は無くなったが、政治的な背景や知識となると、まだまだヤガー君の助けが必要だ。

ヤガー君の解説では、近親結婚が当たり前のアイリュでは、ロカの母親は当然のようにシンチ・ワイナの妹だった。ロカの母親の死後、すぐに別の妹がコヤ、つまり皇后になったが、子を産んでいないようだ。幾人もの子を産んだ寵愛されている側室などが、複数いるらしい。それぞれ出身地域の派閥を背負って、権力闘争に励んでいる模様だ。

「なんじゃ、そりゃ。遠征なんぞしている場合じゃないだろうが」

「そうですよね。殿下のような細やかな配慮をなさる方からすれば、信じられない行き当たりばったりな統治であり遠征でもあるわけでして、アイリュ帝国は崩壊が近いと見る向きも少なくありません」

「ミッケリの連中が来なくても、自滅していたかもなあ」

「でしょうねえ。ですが、僅かなミッケリの兵に大敗北したことで、弾みはついたでしょうねえ」

「そこでグスタフが、嫡出の皇子を擁して、ダメダメな皇帝に肩入れしてやれば、事は面白いように上手い方向に転がってゆく、そういう事じゃろう」

まあ、ヤタガラスの見方は能天気だと思うが、多少の影響は有るだろう。

「殿下は伝説の笏を手に入れられました。それを掲げれば、アイリュの皇帝も、テツココの大王も、真の神の代理として認め、平伏しましょう」

ヤガー君はそういうが、僕にはそこまで簡単に事が運ぶとは思えなかった。

「そう、上手くいくかなあ」

帝国の言葉で交わされた会話は、ロカ皇子にははっきりとはわからないまでも、自分や父親の事が話題になっているのだと察している。難しい顔つきになって考え込んでいる。賢い子だ。

「とりあえず、君の父上にお会いできるようにしようね。僕を信じて、待っていてくれ」

アイリュの言葉で語りかけると、健気にも「お願いいたします」と言った。それから疲れ切っていたらしく、僕に抱っこされたまま眠ってしまったのだった。

まずはベースキャンプに戻り、無事に金の笏を手に入れた事を待っていた連中にも報告する事になった。湖畔の村を出発する前に、村人に金の笏を示し、僕の署名を入れた証書を皮のケースに入れて渡した。証書はミッケリの商人や傭兵が見ても、明白に帝国の正式の公文書だとわかるような体裁になっている。帝国側と事を構えると様々な不都合が生じると、ミッケリ側は十分承知のはずだ。

「馬に乗った白い肌の連中が来たなら『ここはテオレル帝国の領地だ』と言うように。そうすれば、あまりひどい事はされずに済むだろう。それでも、まだ君たちの手に余ることが有れば、麓の海の畔のイシュカレの居る神殿に逃げ込みなさい。そこには大きな船と馬に乗り『雷の棒』で戦う事のできる者が沢山居る」

雷の棒とはこの土地の人たちが銃を指して言う言葉だ。

湖の畔を出発し、ベースキャンプで待っていた連中と合流した。そこで医療奉仕を続ける事を希望した十名を残し、イシュカレが治める街に戻った。天の鏡とは概ね片道五日程度の距離と考えて良さそうだ。ロカ皇子は、僕かヤガー君の馬にかわるがわる乗せて来た。

イシュカレは僕がアイリュの皇子を連れ帰ったと知ると、驚いた。僕はそんな事より、測量グループの割り出した事実に驚いていたが。

ルンドの北米大陸と南米大陸は地球の物より相当に南北が短く幅が太いみたいだ。特にパナマ地峡のあたりの長さが相当に短い。いずれにしても、東と西の海岸、つまり太平洋側と大西洋側の距離が一番狭い、パナマ地峡に相当するポイントは早めに正確に割り出しておいた方が良さそうだ。

僕が勝手にメキシコシティーあたりだろうと今まで思っていたテツココ王国の首都も、もっと南方のエリアを考えるべきみたいだ。グアテマラとかホンジュラスあたりのマヤ文化の栄えた地域の感じかも知れない。あるいはメキシコ湾やカリブ海の位置関係や大きさも多少違うのだろう。

イシュカレの話から分かった事も有った。

「アイリュ帝国の都は二つありますが、先代と当代の皇帝は北の都を好んでいるようです」

と言う事は、インカの場合エクアドルの首都になったキトが第二の都市だったはずだから、案外イシュカレの居るこの場所から遠くないのかも知れない。少なくとも、当初僕はクスコに相当するもっと南方のエリアに進まないとアイリュ帝国の皇帝に近い人間には接触できないと思っていたのだ。

「皇子を擁して、都に威儀を正して進軍なされば、たちまちのうち

にアイリュは殿下の膝に屈しましょう」
おやまあ、イシュカレまでそんな事を言う。

イシュカレが言うには、彼が自分の情報網を使って、南方のアイリュ側の廷臣の一人と連絡を取り、緊密に相談をして迎え入れる準備をさせると言うのだ。公式な国交が無い国の者をどうやって呼び寄せるのかと思えば、その廷臣はアイリュの皇帝周辺には内密に、イシュカレの管理する土地にやってきて、交易をしていると言う。交易で設けて、アイリュ国内での勢力拡大のための資金にあてているようなのだ。

なんとその廷臣は、亡くなったロカ皇子の生母の兄、つまりロカ皇子の伯父にあたるのだそうだ。

「その伯父・トルチャと言いますが、勇猛な戦士として若いころは鳴らしましたが、なかなかに細かな事にも気が回る男でして。私の見る所、皇室の嫡流を尊ぶ気持は強いのではないかと思います」

ロカ皇子の生母、つまり先の皇后は皇帝よりも格上の血統と見なされていたらしい。毛並みの良さはロカ皇子が一番だが、財政や軍事を握る有力な豪族や廷臣が別の皇子を次期皇帝に推しているという。

「ロカ皇子の庶兄にあたりますピニャ皇子の母は、シンチ・ワイナの最も寵愛する妃です。ピニャ皇子を頭に五人の子を産み、その権勢は正妃であるコヤを凌ぐと聞き及びます」

おーおー、嫌だね。どこの国も宮廷で後継者争いが絡むと、ドロドロだ。

「トルチャめをこの地に呼び寄せますので、どうぞ殿下はごゆるり

と御滞在下さい」

イシュカレはなるべく長く僕を留めて、既に始まったミズホとの交易を本格的に軌道に乗せたいのだ。最初に正三郎が持ち込んだミズホの織物や細工物・陶磁器はテツココの大王に献上され、その繊細な美しさがテツココの貴婦人たちに馬鹿受けだったらしい。イシュカレはその後、商品を黄金を使ってミズホで買い付けてもらい、都で売りさばいたようだ。もっと儲けるには、沢山の船を行き来させる必要が有るが、テツココには外洋に漕ぎ出せるような船自体存在しないし、操船方法もわからない。当然船主である僕が頼り、と言う事なのだろう。

「ミズホとの定期航路が軌道に乗るように力は貸そう。お前さんもアイリュ側との交渉を真剣に頼むよ」

僕がそう言うと、イシュカレは大いにやる気を出したようだ。

それにしてもイシュカレの意識の中では、僕は金儲けの神様かなんかの様に思われているのはどうにも閉口したが、可笑しいと言えば可笑しいのだった。

僕の大航海・6

ロカ皇子の伯父・トルチャがアイリュ側からやって来るまで、無駄に過ごすわけには行かない。港の周辺の海域を小型のボートで移動しながら僕と正三郎とモタ隊長は、連日、イシュカレの治める街の港のあたりを整備拡大するべく、詳しい測量をしている。

「なかなかに、有望な港になりそうですな」
「将来は商船学校の一つも作りたいもんだよ」
「初等教育の浸透が先でしょうかなあ」

僕は帝国から持ち込んだ望遠鏡で、湾の入り口から少し離れた位置にある、岩だらけの小島を覗き込んだ。

「あれは……使えるぞ」
「何ですか？」
「あそこの小島の岩場に、大量の海鳥が居るよな。その足元に、ああした鳥たちの糞やら魚の残骸やら卵の殻やら凄く長い時間の間に積もっているんだが、それが大いに使えるのさ」
「ひょっとして、火薬の材料になりましょうか？」
「おう、正三郎、大正解だ」
「ああ！そうか、硝石が取れますか。硫黄は南方の山に取れる場所が有りますし、炭も有る。この土地で火薬を作ることが十分に可能ですなあ」
隊長もすぐに事情を理解したようだ。
「うん、そうなんだが……」
「ですが……この土地の人間には、まだ火薬の運用は時期尚早でしょう」
「隊長もそう感じるか」

「肥料としては、いかがなのですか？」
「おう、正三郎、その通りだ。凄い効き目が有るらしい。だがなあ、雨の降り方が少ない場所の物は凄い悪臭がするはずだ」
「臭くない肥料は、有るんでしょうか？」

そう言えば正三郎は、ミズホで効果の高い肥料が求められていると話していた。
今のミズホでは綿花栽培には干鰯（ほしか）を使うが、原材料が近海産のイワシのため、近年は価格が高騰しているらしい。

「コウモリの糞がどっさりたまった洞窟なんかが有ると、最高なんだがな」
「そういう場所は、有るらしいですぞ」
「なら、探す価値は有るかもしれん。金ばっかり持ち出すのも不味いからなあ。ミズホで肥料が売れると良い商売になりそうだ。帝国でも売れるとは思うが、東海岸から出荷する方が恐らく効率的だろう。こっちは対ミズホ貿易を主眼にした方が良いんだろうなあ。ミズホの産品でこちらで人気の品物は、何かな」
「今現在の人気商品は鉄鍋、縫い針、陶磁器、反物です。鉄砲は引き合いが多いのですが、国禁だと言って、今は断ってます」
正三郎の答えは明快だ。
「火器類は、扱う側の意識や知識もいい加減だと大事故にもつながるし、今後どうするかだなあ。黒色火薬なら十分にこの地域の材料だけで出来ちゃうわけだが、製造法を教えるのはやはり、もっと初等教育が行き渡った段階にならないとためらいを覚える」
「殿下、やはり、学校を作りましょう」

モタ隊長はヤル気満々だ。教育は熱意が必要だから、隊長に任せた方が良いかもしれない。

この大陸に無い作物や果物類を育て、あるいは地元の産品と組み合わせて美味い物を作る事ができれば良いなあなんて思うが……ジャングルのエリアの開拓は、ほとんど裸で暮らす住民たちとそれなりに融和しつつ進めたい。パイナップル・ゴム・カカオなどの既にこの土地に有る物を大規模に生産してみるにしたって、余り搾取的な方法は僕はためらいを覚える。

プランテーション農業は、儲ける側には好都合だが「安価な労働力」扱いされちゃう側は、深刻な貧困状態に置かれるわけだし、環境破壊の問題も有る。あまりやりすぎないように気を付けたいが……そのうち誰かが大規模農園は始めるだろう。それなら、僕が適切なモデルケースを示す必要が有るのかも知れない。

「フェア・トレードもなあ……」

探検隊全体のミーティングでは、意見を出し合い、これからの行動方針を決める。プランテーション農業とフェア・トレードに関して説明を求められたので、僕なりに？い摘んで話すと、皆、大規模な農園を作り外貨を稼ぐ事の功罪について、概ね理解してもらえたようだ。

「やはり、鍵は食糧の確保と教育ですかねえ」

「珍しいものを売り出して大儲けする、と言うより、まずは基礎的な作物の拡充から計りましょう」

「何か皆の手本となる様な、働く者の暮らしも向上させる農園の運営法を考えておかねばいけませんな」

「そのうち、東海岸にも拠点が欲しいですなあ。ミッケリや神聖教会が横暴に振る舞い、略奪行為を繰り返すのを直接牽制できましょうし」

「そうだなあ。アイリュ帝国の人間と接触してからだな」

「ロカ皇子を連れてアイリュの都に行き、港を作る件について約束

を取りつけますか」
「トルチャと言いましたか、皇子の伯父さんは、いつここに来るのでしょうな」

みんなトルチャの訪問を待っているが、まだ、先触れの使いも来ない。イシュカレはトルチャ本人が必ず来ると信じているようだったから、僕はあまり心配はしていなかった。

イシュカレがどう工作したのか知らないが、ここの港は正式に僕の名前を付けたグスタフ港になってしまったようだ。イシュカレの住まう白い建物の前に、新たにこの港の名前を刻んだ石碑が建てられるという具合なのだから、テツココの大王は正式に認可したと言う事で良いらしい。どうせだから、帝国の文字とミズホの文字でも「グスタフ港」と刻みいれた。だが、さすがに港に自分の名前を付けようとは思わなかったなあ。

こうなったそもそもの言いだしっぺは、ヤガー君だ。

「この土地の治外法権を認めさせ、いわば殿下がお治めになる国際的な自由港とすれば宜しいかと思いまして、イシュカレとあれこれ工作してみました」
「ヤガー君、お手柄だよ」

自由港の構想に関しての話が出たのは、天の鏡から戻ってすぐの事だ。良いアイデアだと思ったので、好きにやらせてみたら、ほんの一月かそこらで、こんな具合に話がまとまってしまった。

僕は港と周辺の土地の租借料として、毎月黄金大桝一杯分相当のミズホや帝国の産品をテツココの大王に贈れば良いらしい。僕は大王に「上納」「献上」でも構わないと思ったのだが、ヤガー君が絶

対ダメだと言い、例の大神官が幾度も行き来して一応「友好の印として贈る」事になった。イシュカレの位置づけはこの土地を僕と共同統治する責任者って事に変質したみたいだ。外交官の役目も果たすらしい。まあ、かっちりした成文法が有る国じゃなし、万事は大王や有力な貴族の思惑次第気分次第、らしい。テツココの官僚は神官と兼任している者が多いので、ここぞと言う時は「神のお告げ」を持ち出しちゃうようだ。

探検隊員各位の連絡事項などを確認しあい、その日は解散したが、ヤガー君には残ってもらった。この国を完全な植民地にする気は全くないので、平和に保護国としての関係を作るには、どうしたら良いか、考えを聞こうと思ったのだ。

「殿下の場合は金の笏をお示しになり、『真の神の御意志である』とおっしゃればテツココの者は誰も逆らいませんよ。大王だとて、地に平伏しましょう」

急にヤガー君の言葉がこの地域の言葉に切り替わったと思ったら、イシュカレがやって来たのだった。僕らの話を妨げないようにとの配慮からか無言だったが、部屋に入る際は深々と礼をした。

「ヤガーの言うように、金の笏をお示しになり、馬で隊列をお作りになって都に押し登られたら、この国はすっかり殿下の物でございましょう。そもそもパカヤカシックであられる殿下は、御慈悲で我が大王の存続をお許しになっているのですから、何事も思うようになされれば良いのです」

そんな事を言うイシュカレ自身は、すっかり僕の家来のつもりらしい。いや、僕と言う金儲けの上手そうな神様に仕える神官のつもりでいる、と言う方が当たりかも知れない。もともと、今のテツコ

コの大王に対する忠誠心は薄めであったのも、大きな要因だろうが。

「それにしてもイシュカレ、贈り物の質と量があんまりにも大雑把過ぎて、価格設定も何も意味不明なんだが。どこのいつの価格で、どんな品目を用意しろって事なんだ？」

「供ぞろえを整え、初回程度の品物が有れば十分かと思います」

イシュカレがそう言うんだから、構わないのだろうが……正三郎に言わせると、都に送った初回は実を言えばせいぜいが大桝三分の一杯の黄金相当の品物だったそうな。それじゃあ、殆どサギみたいだと思うが、大王に贅沢品を送るくらいなら、地元のみんなに利益を還元しつつ、僕らも儲けるように資本投下する方が、はるかに有益だから、まあ、この際気にしない。

僕らがこれまでにない、大きな港を整備して外国との商売をやるという噂は、思いの外早く広範囲に伝わったようで、テツココ王国の各地から来た商人だけではなく、近隣の諸国からも人が集まりはじめている。

「イシュカレ、アイリュから何か知らせはその後、ないのか？」

「申し遅れました。そもそもここへ参りましたのは、その御報告のためで御座います。明日、トルチャ本人がこのグスタフ港に到着いたしますそうです」

アイリュの貴人が旅する場合、到着予定地に先触れの飛脚を遣わすものらしい。

「アイリュは文字を使いません。伝言を伝える飛脚は主人の言葉を、口頭でそのまま復唱するのです」

「乗り物は、輿なのかな？　それとも何か家畜にでも引かせた車でも使うか？」

「家畜の背に荷物を乗せますが、殿下にお教えいただいたような車をアイリュの者も知りません。やはり、ある程度身分の有る者はテツココ同様、輿に乗るものです」

翌日、八人舁きの輿に乗ってトルチャがゆるゆるとやってきたのは、もう夕方だった。恐らく、その日の内にちゃんとついたのだから、遅延でも何でもないと言う事なのだろうが、のんびりした話だ。護衛と思しき連中は青銅製の棍棒ぐらいしか、大した武器もなさそうだった。こんなんで護衛になるのかと、人ごとながら心配になる。

「ミッケリの連中が鉄砲の二、三発もぶっ放して切り込んで来たら、ひとたまりも無いな」

僕が装備がしょぼい、心もとないと言う話をしたのは、帝国の言葉がわからなくても護衛の責任者には通じてしまったらしい。気に入らないと言う視線を向けてきた。

「殿下が御存知のような組手や体術のような、体だけの護身術や武術もこちらには有りませんから、武器はあの棍棒きりですよ」

ヤガー君は何を思ったか、アイリュの言葉ではっきり言う。

「体術を教えても、悪くは無いかもしれないな。集団戦には向かないが。それにしても、不用心な事だ。あんな護衛では、頼りないよなあ」

僕もヤガー君の挑発行為に乗ってみるのも悪く無いような気がしたので、同じくアイリュの公用語で応じた。爺さんに再会して金の笏を手にして以来、僕もアイリュの言葉が自在に使えるようになったのだ。

一応、遠来の客をもてなす宴席が設けられ、帝国やミズホの食材や料理も出された。蜂蜜クッキーがバカ受けした。かりんとうも受けた。サクッとカリッという歯ごたえがトルチャ閣下の好みみたいだ。後は餃子とピザのようなものが喜ばれたみたいだ。最後は無礼講で、強い酒に不慣れな連中は、わずかの酒で乱痴気騒ぎだ。探検隊員の一人がリュートや笛を持ち出して奏でると、勝手な踊りが始まったりしている。

「先ほどのお話ですが、なぜ我らの護衛では頼りないのですか？」

棍棒を持ったオッサンが僕に向かって、膨れた顔で文句を言った。酒はあまり飲んでないと見える。

「実地で教えればわかるだろうけどね」

「お教え願いましょう」

「じゃあ、庭に出なさい」

皆こっちに注目している。僕は長柄の団扇を握った。偉いさんの行列の威儀を正すのに使うものだ。

「じゃあ、今から腕比べと行こう。使い慣れた棍棒で、思い切りかかっておいで」

オッサンが攻撃を開始しそうになると、相手の顔面を団扇ではたく。幾度かそれを繰り返して、オッサンがイラついて、満を持したって感じで猛烈に突っ込んでくる所をかわし、蹴りを一発入れ、棍棒を取り上げた。

「どうだい？」

「まだまだです」

僕は飽きれたが、棍棒を返してやり、また勝負再開となった。
オッサンは粘ったが、戦術がなってない。無駄な動きの連続で、そのたびに僕の足で転がされたり、自分でバランスを崩して倒れたり、都合三十回ほどもこけたりぶつかったりして、ようやく負けを認めた。

「私を殺してください」
アイリュ的には、それがルールらしいが、僕は断る。無論だ。
「ならば私を奴隷にして下さい」
「トルチャから奴隷を取り上げる訳に行かないよ」
「いえ、私は奴隷ではありません。戦士です」
「ああ、そうなのか」

オッサンは奴隷じゃなくて、自由民で、トルチャ閣下の部下なんだそうな。
僕らを遠巻きに見ていたトルチャは、僕に駆け寄ると這いつくばるようにして、礼をした。テツコ式の五体投地風じゃなくて三跪九叩頭の礼に近いものだったが、途中でやめさせた。

「部下の無礼は上官たる私の無礼も同然です。何卒、何卒お許しを」
「僕は怒ってないよ。粘り強い戦いぶりは、ちょっと感心したが、うまくない戦い方だなと思ったんだよ、これじゃ、ミッケリの連中に一発で負けちゃうよ」

それからは奴隷じゃなくて、弟子と言う事にして、修行させる事になった。トウモロコシのどぶろくで固めの杯の後は、僕は護衛の戦士たちの『師匠』になったというわけだ。どうもこの大陸は武術と言うものもさっぱり存在しないみたいだ。ただ力まかせに棍棒を

振るんじゃなあ。トレーニングさせてみると、動体視力は悪くないし、基礎体力は十分、動機づけも十分だった。

それ以降、二十日に渡りトルチャ一行はグスタフ港に滞在した。十日遅れで、トルチャの奥さんやら子供たちやらリャマやら家財道具やらまで来たのはびっくりだったが。どうやらピニャ皇子派に攻められそうなので、逃げて来たらしい。

滞在中は探検隊の皆で手分けして、一種の軍事教練を行った。ロカ皇子を守るためだと聞くと、皆一層まじめにやった。その間、幾度も飛脚が行き来して、伝言ゲームのような具合にロカ皇子につきそうな豪族連中に声をかけ、話をまとめたらしい。豪族たちの送ってきた飛脚がまた、元に戻って行くのだが、情報の伝達も文字が無いし、狼煙も使わないとか。何ともまあ、効率の悪い情報伝達だ。それでも、どうにかなったらしいが。

「この『馬』という生き物にまたがられて、威儀を正してお進みになり、金の笏をお示しください。きっと皇帝自身が黄金の髪のパカヤカシックに恭しく礼をするはずです」

そう、請け合うトルチャに先導される形で、ゆっくり僕らはアイリュ帝国の都をめざすことになった。

ミズホからの学者・技術者の応援部隊三十名が到着したのを確認した所で、ヤタガラスと正三郎とミズホ出身の隊員三名は、定期航路の件も有り、イシュカレの所に残した。肥料の件も商売になりそうなら、どんどん進めろと言っておく。ミズホに一隻、無事船を送り出した所でヤタガラスには追いかけて来るように言っておく。

ロカ皇子の身の安全を計る事と、ミッケリより好条件の東海岸の港を手に入れる事が目的だが、果たして、どうなるやら。

僕の大航海・6（後書き）

未知の大陸で出会った人たちのまとめです。

※ワサハク
オヌンダガオノの酋長の息子の中で「一番星回りの良い」子らしい。酋長は僕が「神の気配を背負っているから」託したらしい。多くの知恵をオヌンダガオノに持ち帰る事を期待されている。

※イシュカレ
オヌンダガオノの酋長は『邪悪ではない白い家の男』と呼ぶ。テツココ王国の地方官兼神官。外交官としても行政官としてもかなり有能な人物。僕の事を伝説上の西からやってくる『真の神』の代理、あるいは大儲けさせてくれる福の神かなんかだと考えている。未知の大陸における、僕のスポークスマンのような役割を担いつつある。

※チャノガ
イシュカレの息子。ヤガー君とは気が合う模様。最後まで僕について行く、つもりらしい。イシュカレの希望で帝国で教育を受けさせることになる予定。

※ロカ皇子
アイリュ帝国の若き皇帝の唯一の嫡出の男児。僕に庇護を求める。庶兄ピニャ皇子を擁する派閥により暗殺されそうになった所を、逃げて来たらしい。

※トルチャ
ロカ皇子の伯父。イシュカレとは密貿易を通じて付き合いが有る。

僕の大航海・7

アイリュの二つの都の内、北の方のリャンカに、トルチャの一行百人と僕らは馬で隊列を組んで入った。馬に乗った五十人は一応帝国の士官の服を着せ、僕はまあ一応、皇太子らしいマント付きの服、チャスカは貴婦人用の乗馬服に派手な羽根つきの帽子を被せた。キリャは馬術が達者で、子供の扱いになれた隊員五名ほどが交代で抱っこした。あのベビースリングを使うと楽だと言う事で、隊員たちは気軽に抱っこしてくれて助かった。僕が馬に乗せているロカ皇子はアイリュの皇族の標準的な服装、白いアルパカ製の貫頭衣と黄金製のピンで留めた赤いマントと言う格好だ。

トルチャの根回しが功を奏して、僕らはスムーズに大神殿でシンチ・ワイナと会見できた。マントが派手な柄で、やたらと黄金と翡翠で飾り立てていて動きにくそうな格好をした、僕より頭一つ背が低い男だった。当然黒目黒髪だ。顔立ちは眉が濃くまつ毛が長く鼻筋が通り、歯は真っ白だ。口元が意地が強そうな感じを与える。時折まぶたがピクピク動くのは神経質な性質で有ることを示しているんだろう。チョッと機嫌が悪いかもしれない。僕に対してどういうスタンスを取るべきか迷ってもいるのだ。多分。

迷った末に、まずは何というか対等な首長同士の会見て言う体裁を取ったみたいだ。僕は繋いでいたロカ皇子の手を放したが、一向に父親の所に行かない。

「どうした、ロカ、父上の所に行け」

「でも、父上の周りに悪者がいるようで、怖いのです」

「僕が見ていてやるから、無事に戻った御挨拶だけはしなさい」

「はい」

これじゃあ、どっちがオヤジか分かんないか。僕が滑らかにアイリュの言葉でやり取りするのに驚いていたらしいシンチ・ワイナは、ロカ皇子の言葉に心なしかしょげている。ロカ皇子は父親に型どおりの礼をしたが、くるりと振りかえると僕の所に駆け戻った。

「神のお告げでございます。皇太子は黄金の髪のパカヤカシックの庇護を受けるべきです」

トルチャ閣下の仲間の神官らしいデブオヤジが、突然もっともらしい事を言う。

「この方は、パカヤカシックであられるのか？」

シンチ・ワイナは仰天したと言う顔だ。

「さあ、ただ、僕はあなた方がクイコチャと呼ぶ湖の小島で、金の笏を授けられた」

僕が金の笏を孫悟空の如意棒よろしく指輪からオリジナルサイズに戻すと、その場のみんながどよめき、それから僕に平伏した。

それからは、なんだかよく分かんないが、目抜き通りをシンチ・ワイナの後について宮殿に向かう。ロカ皇子は輿を仕立てると言うのに嫌がって、僕の腕から離れようとしないのだ。確かにロカの暗殺を企んだ連中がシンチ・ワイナの周辺にかなりの人数いるようだ。

僕らの方がミッケリの連中より統率がとれ、装備も馬も衣類なども上だと感じた者がかなりいたようで、まあ当然そうなるように僕も気は使ったんだが、そういう連中が僕らの宿舎になったロカ皇子の住いに大量にやってきて、貢物をささげた。奴隷はいらないと言う事前情報は行きわたっていたようで、黄金と宝石が多い。その中に極上の巨大なエメラルドが有った。

翌日、シンチ・ワイナの方から僕を訪ねてきた。

そこで人払いをして、僕とロカとチャスカだけで話をした。チャスカがワルパ王国の王族の末裔で碧の鳥ケツァールの祝福を受けた伝説の娘であると伝え、東海岸で苦労している者たちを故地に戻すように話す。チャスカが外して、シンチ・ワイナに見せた胸飾りは、神宝として以前東海岸へ巡行の折、目にしていたそうだ。

「これは……このような文字が新たに浮き上がったのですか」

何気にシンチ・ワイナは敬語だった。僕の方が年上だからか、それ以外の理由か判然としないが。僕が文字を読み上げると、またまた、びっくりしたらしい。

「私はこの文字のほんの一部しか読めません。なのにあなたは、完全に読んでおられるようだ」

「うん。教えてもらったのだよ。僕は知恵のある人は、大切に扱うからねえ。金の笏をここに示された道しるべに従って受け取りに行くべきだ、と教えられたのさ」

「はああ……私は、その島の神域には立ち入ることが適いませんでした」

「うん。僕専用の場所だからな。僕とチャスカとキリャ以外は入る事が出来ないんだ」

「……お願いです、パカヤカシック！」

「その呼び方、くすぐったいから、グスタフで良いよ。親兄弟や友達はそう呼ぶし」

「ハイ！では、グスタフ様」

何だか必死な様子で、青年皇帝は僕の手を取った。その後幾度か訂正させたが、彼にとって僕はやっぱり伝説のパカヤカシックらしい。どうしてもそう呼びたいなら、こっちが諦めるしか無いみたいだった。

「どうか、どうか、道をお示し下さい」

勇猛なる皇帝だか何だか言われちゃっているようだが、目をウルウルさせて、本気で僕を神の代理人だと信じているらしい青年に対して、意地の悪い感情は湧かなかった。

「僕が東海岸の困った連中とは折り合いをつけて、都に攻め込んだりしないようにするから」

そうすると、僕の手を押し頂いて、額につけた。どうやら僕の脳裏に流れ込んできた青年皇帝の意識からすると、このゼスチャーは最大級の信頼を示すものらしい。一度で簡単に片付くとは思っていなかったチャスカの故郷の人々の帰還と待遇改善については、どうやら最大級の配慮をして貰えるらしい。

「このリャンカの都に戻ったらロカの怯えようがひどくなって、僕とはなれたがらない。宮廷の連中をちゃんと抑えるべきだね。遠征どころの話じゃないよ。他の子供たちに罪が有るわけじゃないんだろうから、余り犠牲者が出ない穏やかな方法でも構わないと思うが……」

「不甲斐無い話で、お恥ずかしいです」

「ロカはどうしたいんだ？　父上にちゃんと、自分の気持ちを話しなさい」

「山のように大きな船に乗って、パカヤカシックの御国に行きたいのです。そして、色々学びたいのです」

皇帝は個人的には賛成みたいだったが、後継者問題や廷臣の権力闘争や、色々頭が痛いようだ。

僕は後継者問題を明確にしておくべきだと言う意見を述べたのだ

が、話し込むうちに絶対君主的な存在に見えていたこの皇帝が、訳の分からない馬鹿げた迷信や妄言で悩まされている事に気が付いた。

「すると何か、朝起きてすぐ、歴代皇帝の御体が安置してある御殿を順にめぐって全員分お祈りするのか」
「はい。遠征で出ている場合は、しなくても良いのですが、都にいる間は必ずしなくてはいけないのです」
「やらないと、どうなる？」
「私の父の様に奇妙な死に方をするようです」
「それは、罰が当たった、そう言う事？」
「はい」

歴代皇帝のミイラは、冠をかぶり装身具をつけ、それぞれの御殿に安置されているそうだ。生前の家臣とその子孫が身近に仕え、彼らの領地も処遇もそのままらしい。

「何？　死んだ皇帝に奉仕する者がそんなに色々利権を握り込んでいるのか」
「はあ。それを取り上げようとした祖父は、内乱がおこり国中を飢饉と洪水が襲ったため、あきらめました」
「ふうむ。お祖父さんが出来なかった事を、僕がやってみようか？」

あの金の笏の波動が使えそうだと思った。上手く行く自信は無かったが。失敗した場合はかつてスペイン人がインカやアステカでやらかした方法をちょっとばかりマネして武力で半ば恫喝する格好になるが……

つまりこのアイリュ帝国では死んだ皇帝のミイラが『永遠に生きる』存在として扱われ、そのミイラに『奉仕する』連中は大きな利権を握り込んだままなのだ。豊かな農地や条件の良いリャマやアル

パカの放牧場、漁場、水利権に至るまで、あらゆる方面に及んでおり、正直言ってあきれた。死後皇帝の架空の食い扶持のために生きている皇帝の財産は空費され、外部に拡張して新たな利権を得ない限り、皇帝自身の権威権力もジリ貧状態になってしまう。遠征したがるのもそれなりの事情が有ったみたいだ。

「よし。全部の死後皇帝に仕える筆頭神官を集めてくれ」

「パカヤカシックが祝福を下さるかもしれない、と言う事で宜しいのでしょうか？」

「ああ。祝福するか消滅させるかはまだわからないけどね」

僕は嘘をついた訳だが、良心は痛まなかった。ミイラに奉仕して生きている人間が振り回されるなんて、国の仕組みとしておかしい。派手にぶっ壊すつもりだったが、まずは神官を集めさせたのは情報収集のためだ。

大神殿に集まった神官は全部で六人しかいなかった。本当にそれで全部だったらしいから、思いの外少ない。ヤガー君が言うように、確かにさほど歴史が無い国なのだろう。文字が無いのだから、六代前でも感覚的には十分に大昔になってしまうかもしれない。

「初代様がお持ちの領地と家臣団は？」

僕は神官の手を取り、穏やかな口調で問うた。

「ワヌコ・チララ・タクナの町と、それに付随するすべてのトウモロコシ畑とジャガイモ畑、リャマの放牧場とアルパカの牧場、カチナ・モケグア・ピウナの町とそれに付随するサツマイモ畑、トマト畑、カボチャ畑、豆畑、泉、伝来の財宝類です。お仕えする臣下は私以下全部で自由民は三千名余り、奴隷は五千名程です」

初代皇帝の条件はどうやら一番良いらしいが、二代目以降の各ミイラも、名目上豊かな土地と多数の人間を占有している。このほか

に、各方面からの献金だか御布施だか色々有るらしい。そしてその死んじゃったミイラの皇帝陛下を輿に乗せて地方巡回する場合も有るようだ。そこでまた、沢山の御布施をせしめるらしい。僕はテレパシー能力を十分に使って、それぞれの神官の隠し財産や不正蓄財の分も全部洗いだした。

これらの記録を僕はヤガー君たちに取らせ、その晩の隊員達とのミーティングの時に結果を発表した。探検隊員は皆、あきれていた。死人のために生きている皇帝が圧迫されているのだ。チャスカやヤガー君が言うには、ミイラを神聖視するのはもともとは、ごく一部の部族の習俗であったらしい。

「亡骸は丁寧に布で巻いて、地面に埋めれば十分じゃないでしょうかねえ」

ヤガー君が言うと、チャスカもこんな風に言った。

「ワルパ王国では亡骸は布で巻いて、墓に納めたらしいです」

どうやら布で亡骸を巻くのは、死者のより良い再生を促す母胎か繭のようなものと解釈されているようだ。

「ミイラを粉みじんにしちゃおうかと思ったが、ちょっと乱暴かな？」

そのあたりが、僕の迷ったポイントだった。

「徹底した方が良いかもしれません」

そう言う声が多数派だった。ミズホの人間なら火葬してしまう場合も多いのだ。ミイラに対する思い入れは生理的に理解不能だったりする。だが、この土地の人間の感覚は違うだろう。

「ヤガー君の御先祖だとしたら、どの程度までが許容範囲かな？」

「貴金属や宝石は無用ですが、布で巻くのは省かないで欲しいですね」

その言葉で、僕の方針は決定した。

翌日、宝石類で飾り立てた歴代皇帝のミイラが大神殿に集結した。はっきり言って気持ち良い物じゃ無い。

「ここに集まった亡骸にもし、偉大な魂がとどまっているなら、この笏で触れても崩れないだろう。だが、偉大な魂が既に生まれ変わっていて、ただの死骸となっていれば、崩れるはずだ。崩れた亡骸の装身具はすべて生ける皇帝のもとに運ぶように。そして魂が存在しない亡骸に仕えていた臣下も土地もすべて生ける皇帝に返納するように」

僕が金の笏をかざして宣言すると、一言も抗議の声が上がらなかった。

それから何とまあ、笏をかざしただけで、初代のミイラはカラカラと音を立てて崩れてしまった。

「初代皇帝は既に生まれ変わりを果たしている。亡骸は白い布に包んでおきなさい」

そういうと、どよめきの声が上がったが、素直に僕の指示通り事が運んだ。

以下すべての皇帝のミイラについて、同様の処置をした。そしてシンチ・ワイナにミイラのつけていた装身具類を全部渡し、ミイラどもの所有していた格好になる全部の土地と財産、家臣団と奴隷についての報告をした。更に悪質な不正行為を働いた神官と、シンチ・ワイナの父・先代皇帝を毒殺させた神官の報告をした。

「父は、毒殺だったのですか？」

「そうだ。晩年に身近に仕えていた女が、その神官に家族を皆殺しにすると脅されてやったようだ」

「パカヤカシックはどの様にして、それをお知りになったので？」
本当はテレパシーで読み取ったのだが、手を握る事を警戒されては困るので、嘘を言っておく。
「金の笏がありありと様子を見せてくれたのだ。処罰は皇帝自身が行うべきだろう。だが、連座はやめなさいよ。あくまで本人だけだ」
「ですが忌々しき一族は根絶やしにせねば」
「恨みを産むから、やめなさい。どうしても許せないなら、アイリュの国から追放する程度に留めなさい」
「ならば、すべてパカヤカシックの奴隷としましょう」

それは困ると僕は言ったのだが、よっぽど良い事を思いついたと思ったらしく、言う事を聞いてくれなかった。僕の奴隷になっちゃうのは何とまあ、一番寵愛していた側室の一族らしい。女に美人が多いことで知られた一族だから僕が気に入るとでも思ったようだ。母親の実家の所為でピニャ皇子は後継者レースから脱落する模様だ。

「わかった。東海岸の港を作る手伝いをさせるか、西海岸になるかわからないが、引き受けよう」

三日後には早速探検隊の半数と、トルチャの家臣から数名、割り当てられてしまった奴隷から百人、荷物運びのリャマ五十頭を東海岸に差し向けて、築港にあたらせる。五名の探検隊員が先に馬で到着し、測量をして、後から残りの隊員と奴隷とリャマが追いつく感じだ。トルチャの家臣は監視役だ。
奴隷と言っても鞭打ちその他の酷い扱いは禁じた。港さえできたら、近隣で自由民として暮らせばよいと僕は考えている。

その後、正三郎に聞いていた約束の期限が迫ったので、別の隊員を送り、ミッケリの管理する港にやってくるレーゼイ商会所属の船

と連絡を取らせた。港の管理者は金を掴ませれば、言う事を聞くような人種だったし、個人的に帝国と商売をしたい気持ちも有る様だったので、僕の署名入りの証文を渡し、新しく作る港の工事に協力してくれれば、帝国の都・トリアでの貿易商会の営業を許可し、税制面での優遇措置を取る事にした。ミッケリ本国の命令なんか無視で、自分の利益が第一と言うお粗末な男だったらしいから、逆に言えば僕らはラッキーだったのだろう。

レーゼイ商会の船が無事に工事中の東海岸の港に入ったのを確認すると、二人の探検隊員が馬を飛ばしてリャンカの都に戻ってきた。それとほぼ同時にヤタガラスが僕の所に戻ってきた。

「正三郎はイシュカレと上手くやっておるぞ。ただ、そろそろ正三郎は嫁が恋しいようじゃった」

僕は手紙を書いて、もう一度正三郎の所に使いに行ってもらった。肥料の商売さえ上手くいく目途が立ったら、後はミズホからの応援部隊に任せて西海岸からミズホ経由で戻るも良し、僕と一緒に戻るつもりなら、今月中に東海岸まで来るように、と伝えた。

シンチ・ワイナは財力と権力を手にできたのも僕のおかげと感謝しているみたいで、チャスカの村の人間を元の土地に戻すのに同意し、他にリャマやら種イモやら乾したトウモロコシやらもつけてくれたようだ。僕は一度、チャスカと一緒にその村を訪問した。何とまあトルチャの管理していた土地の一角で、グスタフ港にも近かった。騎馬の人間だけで移動すると、徒歩の人間のペースに合わせるより何倍も速い。

僕らは村で、熱狂的な歓迎を受けた。

「パカヤカシック！」
「イリャ！」
「ティクシ・イリャ！」

皆が口々にそんな言葉を叫んでいる。あの、夢の光景そのままだった。

僕の大航海・8

シンチ・ワイナは南方の都・ハトゥンカカの超保守派を完全に抑え込むまで、僕に居て欲しそうだったが、僕も父上の事が気がかりだ。来月にはどうしたって、懐かしいトリアに向けて出発したい。

ハトゥンカカとは大岩を指す言葉のようだが、何でも大昔、美しい月の女神が大岩に降り立ち、皇帝の妻になったという伝説が有るらしい。現王朝はその直系子孫を名乗っている事情もあって、そのハトゥンカカの月の大神殿を手厚く保護してきたらしい。

「皇帝と皇太子以外の男は内部に入ることを禁じられています」

「ふーん。大神官も女なの？」

「はい。大抵は皇帝の未婚の姫が務め、次代は未婚の皇族の姫から神力の強い者が選ばれてなります」

「今の大神官も、次の跡継ぎも親類とか、従姉妹とか姉妹とかだったりする？」

「今の大神官は私の大叔母で、跡継ぎは私の腹違いの姉です」

ここでシンチ・ワイナがげっそりした顔つきになった。

「何がそんなに厄介なんだ？」

「歴代のコヤの御体が、月の神殿に安置されておりまして……」

「皇帝同様、利権を握り込んでいる連中が居るって訳？」

「はい。実は……」

歴代皇后のミイラたちは個別に御殿を持っている訳じゃなく、ズラッとその月の大神殿に並んでいる状況らしい。一応建前上、この国じゃ皇帝は『生ける太陽の神』で、皇后は『生ける月の女神』らしい。従ってそのミイラも神聖、そういう事みたいだ。

聞いただけで鬱陶しいが、確かにシンチ・ワイナではミイラを放り出せないだろう。自分でやると、月の女神の祟りを受けそうで怖

いって事らしい。どうやら皇帝の御霊より怖いと認識されていたようなのだ。僕を男子禁制の聖域に連れて行くので、ミイラをぶっ壊せって事みたいだ。月の神殿の全部の利権を毟り取るのは無理にしても、歴代の皇后の分として握り込まれていた領地と人員は自分の所に欲しいらしい。

「母上も、祀られてるんじゃないの？」

「ちゃんと白い布にくるみ、神域の土に戻しますから、良いのです」

何でも生前のシンチ・ワイナの母親はそうするべきだと考えていたらしい。

「じゃあ、母上の生前の考え通りにするから、構わないと言う事なんだね」

月の大神殿の大神官が厄介な人物で、面と向かって対決すると呪いをかけられそうで怖いらしい。その影響力を弱める為にシンチ・ワイナは北の都・リャンカで暮らしている、と言う事情もあるようだ。呪われなくったって、ミイラをバックに無駄にオーラを振りまいている婆ちゃんに睨まれるのは気分が悪そうだ。

これも乗りかかった船か。結局全行程十日前後を裂いて、月の神殿の問題処理にあたった。猛烈に気の強そうな大神官の婆ちゃんが金の笏に触れて、もんどりうって悲鳴を上げた後、うんとおとなしくなっちゃったのは可笑しかったが、ミイラのカラカラ壊れる様子は、気分良くないもんだ。

お礼にと貰った大神殿の秘宝が、巨大なエメラルドを十個も乗っけた銀色の冠だった。てっきり銀だと思っていたが、帝国に戻って分析させたら、なんとプラチナだった。というおまけが有った。

「月の大神殿の巫女百人はお好きになさって下さい」

なんて、また言われちゃったが、確かに綺麗なお姉さんが五十人ほど。後は織物に関して特殊技能が有る年かさの女性だ。僕はチャスカとヤガー君を立ち会わせて、全員と個別に面接し、進路希望や家族の状況について聞き取り調査をした。

大神官の婆ちゃんに、終生仕えたいと言う希望者五人以外は、全員原則出身地や家族の所に戻るのが希望だったみたいだ。たまたま、東の新しい港の周辺の出身者に四十代のアルパカの織物の名人のオバサンが居たので、故郷で工房を作らせる事にする。

神殿に捧げるために磨いてきた技量を、これからは外貨獲得のために使ってもらおうと言う訳だ。オバサンが面白そうな事を始めると言うので、弟子分の女の子も三十人ほどついてくる事になった。このオバサンはなかなかに良い人材だったかもしれない。弟子の少女達は全員適齢期だから、築港にあたる男たちで自由民にする予定の連中と結婚したらどうか、なんて事も考える。まあ、そのあたりは本人同士に任せて、僕がそこまでお節介を焼くのは止めるが。

「誰も、閨には召しませんので？」

シンチ・ワイナはやっぱりそういう発想だったみたいだ。歴代皇帝は美人ぞろいの月の大神殿の巫女から、気に入った女を自分の侍女やら側室やらにしちゃう場合も珍しく無かったらしい。

「チャスカが居るし、他の探検隊員は奥さんや恋人と離れて仕事をしているんで、とてもそんな気持ちにならない」と僕が言うと、非常に不思議そうだった。

「船の都合も有るから、悪いが来月の頭に戻るんだが、ロカ皇子はどうしようか？」

「どうぞ、お連れ下さい。あれは父親の私よりパカヤカシックを慕っております。それに御国はあまたの知恵者が集う大国だそうです

から、あれの知恵も豊かになりましょうから」
　ロカ皇子の皇太子としての立場は確定らしい。ピニャ皇子本人は母親と大人しく暮らすことを条件に、他の庶子たちと同列の扱いに格下げみたいだ。

「そのピニャ皇子にも会っておきたいな」

　優れた皇子だと言う噂も聞こえてくるので、僕は気になっていた。まだ七歳だと言うが、会ってみると、なかなかにしっかりした少年だと感じた。チャスカとキリャも同席させたのだが、キリャが初対面のピニャ皇子に向ってしきりに何か訴えているので、僕が抱き上げてみると、ピニャ皇子が気に入ったみたいだ。

「この子は僕の娘なんだが、抱っこしてやってくれるか？」

　ピニャ皇子には同腹の弟や妹が四人居るせいだろうか、なかなか抱っこが様になっている。キリャの婿はこの子かな？

「大層可愛らしい姫ですね」
　ピニャ皇子の方も、まんざらでもなさそうだ。僕の機嫌を取ってるとか言うあざとさは全く感じられない。本当に可愛いと思っている様だ。確かにキリャは凄い可愛いが。
「ロカは僕らと一緒に、海を渡って、学問する気らしいが、君はどうしたい？」
「私は、罪人の孫ですので……」
「君のお祖父さんの件と、君自身の将来は、まったく切り離して考えてくれていいんだよ。希望が有るなら言ってごらん。君の父上に話は通すし、必要なら説得もする」
　本当は古臭い因習にまみれた土地から抜け出して、海の向こうで自分の力でやってみたい。そんな希望が強いようだった。

「私もロカのようにパカヤカシックの御国に、行ってみたいです。そして色々な事を見て聞いて、学びたい。でも、父上、いや皇帝陛下はそれを許して下さらないでしょう」

僕の行為の所為で、ピニャ皇子がとばっちりを食らったことでもあり、僕はシンチ・ワイナを説得した。シンチ・ワイナよりピニャのお袋さんの方が、実は厄介だったみたいだが、男の僕が皇帝の後宮にも行けないので、チャスカがキリャをつれて訪問し、説得にあたったようだ。

「キリャを連れて行って、助かりました。ピニャ皇子御本人が、グスタフ様のお供をして海を越えたいと言う希望なのだと納得して貰いました」

赤ん坊のキリャが居た事で、場が和み、ピニャの弟や妹とも話が出来たらしい。

「ともかくも、足元をしっかり固めなさいよ。内輪もめは厳禁だからね。財政的にもしばらくは税を免除して、民心を掌握するんだよ。まあがんばれ」

律儀にまだ建設途中の東の港まで見送りに来たシンチ・ワイナに、僕は忠告をした。

「それはそうと、この新しくできる大きな港は、どのような名がつくのですか？」

「そうだなあ。西の港がグスタフ港だから、こっちはフレゼリク港にしよう。僕の父の名であり跡取り息子の名だ」

そのフレゼリク港はその後、順調に国際貿易港として発展して行くが、この時はまだ、やっと桟橋が一つできたきりだった。僕ら家族三人とアイリュのロカとピニャ、正三郎以下第一次帰国分の探検

隊員十五名、オヌンダガオノのワサハクとイシュカレの息子のチャノガ、乳母やら二人の皇子の召使いやらが十五名、総勢三十七名でレーゼイ商会所属の船、ユリエ号に乗り込んだ。

複雑な気分になる名前だが、まだまだ元気な家康師匠は最新型の大型帆船に自分の娘の名前を付けているそうだ。ナタリエ号と言う船はユリエ号と同レベルの最新型らしい。知らなかった。

「お久しぶりでございます」

挨拶に来た船長以下四人の男は見知った人物だった。

「おお、ハルドル船長じゃないか」

随分と前の話になるが、ヨハンを連れ戻して神聖教会の大本山から逃げる途中で、僕に協力してくれたあの、ハルドル船長だ。家康師匠に頼み込んで大型の帆船に幾度も乗り込んで操縦を学び、北の小さな船の船長からめでたく大型船の船長に転身したらしい。

「どうも、その、商船学校なんていうのは苦手ですんで。実地で叩き込む方が性に合ってました。ですが、卒業生の連中は、若いのになかなか大したもんです」

トリアの商船学校の卒業生が三人、この船で働いているそうだ。たたき上げの老人と三人の若者はなかなかに良いチームのようで、安心して長い航海を任せられる。

モタ隊長はその後、人生の大半をアイリュ帝国とテツココ王国で過ごし、多くの学校を作ったのだったが、僕はそこまで彼が新しい大陸での仕事に夢中になるとは、まだこのころは思ってもみなかった。モタ修道士の人柄を慕って、多くの若い修道士が集まり、新しく大きな修道士会が出来た。国や民族の壁を越えて、全ての人間が尊重されるべき存在であり、その為に日夜活動するのが正しい神への道であると言うのは実にユニークな会則だった。そして僕などの思いもよらなかった事だが、死後モタ隊長は正式に神聖教会の聖者とされた。

ヤガー君は修道士にはならず、僕の元で大いに働いた。帝国の貴族となったが、モタ修道士との深い信頼関係は終生変わる事が無かった。

新しい大陸は僕が恐れていたような徹底的な文化の破壊も、民族の殲滅も免れたのだった。だがその為には僕自身の帝国での治世が多いに影響しているのだったが、それはまたおいおい話す事になるだろう。

ユリエ号の船室に入ってようやく、僕とチャスカの二人きりになれた。考えてみれば丸一年近く、男女の事が一切無いままに、僕らは忙しく過ごしていたのだった。僕は隊員たちと隣り合わせのスペースで寝ていたし、チャスカは女だけで固まった一角で寝ていた。船の中では未成年の男子達の部屋は一つだった。室長は一番年長で、一番しっかりしているヤガー君が務めた。さして広くも無い部屋でトリアに到着するまで共同生活を続けるうちに、ワサハク・チャノガ・ロカ皇子・ピニャ皇子は自然になじむことが出来たのだった。

「久しぶりだねえ」
「本当に、そうですね」
「チャスカの言葉が流暢になってから、初めてだね」

僕は、帰国したら待っているであろうあれこれを話題にするのはやめようと決めた。

「御帰国なさったら、また、お忙しいでしょうね」
「うん。そうだね。でも船に乗って居る間は、のんびり出来るよ。嵐なんかに出くわさなければ良いけどな」

約一か月の間、僕とチャスカは旅の若い貴族の夫婦のような暮らしぶりだった。波が荒く、丸一日船室からほとんど出ない様な日も幾日か有ったわけだが、そんな日は長い親密な昼寝で丸一日をつぶした。

「チャスカはとても優秀な生徒だね。いや、驚いた」

僕が豊かな黒髪を手に巻きつけ、口づけをあらゆる部分に降らせてやりながらそうささやくと、体中をピンク色に火照らせて照れる。僕の与える刺激に対する反応は旅に出る以前より複雑になり、鋭敏になり、深いものになった。時間の許す限り寄り添って眠り、互いの肌の匂いが一つになって、夢の中でも感じられるほどだった。

激しい波に揺られていても気にならなかった。船員たちの動きは統制がとれていたし、船長は落ち着き払っていたから、船が予定通りの航路をちゃんと進んでいるのは確かだった。

一度、アフリカに相当する謎の多い大陸が見える小島に寄港した。ここは神聖教会に常に忠実な立場を取って来たレイリア王国の商人たちが開いた港だ。

レイリア王国は温暖ではあるが土地は痩せていて食物自給を十分行える状態では無く、早くから漁業と交易で生計を立てる者が多かった。国土面積自体も帝国の十分の一程度も無い小国だが、従来は香辛料や塩の取引でかなりの利益を生みだしていた。

ただ近年は国民の識字率が低い所為もあるのかして、農業や軍の近代化が全く上手く行っていない。国全体の経済規模は交易の取引分を加えても、帝国内のスコウホイ公爵領を下回る程度だろう。レイリア商人の商売を傾かせたのは、トリアの市場だと言われている。ミズホや他の東方の諸国の商人が、レイリア商人の手を通さずに直接に帝国に商品を持ちこむようになったからだ。

トリアの港を整備した僕なんかは、この島のレイリア商人たちからすれば憎い商売敵だろうが、港の使用料金をちゃんと支払ったおかげだろうか。ユリエ号は難癖はつけられなかった。一応、レーゼイ商会ミッケリ支店所属の船だからだろうか。

丸一日、僕らも子供らも南の島でのんびりした休日を楽しんだ。名産のオレンジ類に新鮮な魚介類、島の牧場で飼われている美味い牛の肉、バナナ、マンゴー、そしてコーヒー。全部美味い。たらふく食うだけ食って、また、僕とチャスカはやりたい放題で自堕落な昼寝の時間を続けた。

「あと、十日ほどでトリアなのですね」
「そうだな」
「そろそろ、お輿入れなのでしょうか、アン二カ様の」
「うん。多分な。ゴメン」
「ずっと前から、お輿入れは決まっていたと色々な方から伺っています」
「それはそうなんだが、でも、ごめんよ」
「……子供が……また出来たような気がします」
「そうか。それは嬉しいな」
「喜んでくださいますか？」
「当たり前だ。帰国したらすぐに医者に見せないとな」

トリアについたら、きっと目の回るような忙しさだ。それだけはハッキリしている。

僕の微妙な感情・1

「殿下、一大事です。今朝ほど皇帝陛下が御倒れになりました」

トリアの港にユリエ号が入港すると、水先案内人と帝国の入国管理官・検疫官を乗せた小舟が近づいてきたのは想定内だったが、皆、見覚えのある男たちで、僕の顔を見ると一刻も早く小舟に乗り移り、桟橋で待つ近衛兵達と一緒に取り急ぎ父上のもとに向かうように促した。

「後の事はヨハン・ベルワルドに任せる。レーゼイ家にも船が到着した知らせを入れておいてくれ」

僕は気が重かった。死に目には会える、とは聞いていたがいきなりだものなあ。モナにも知らせないと、と思ったとたんに、モナの意識と繋がった感じがした。神の鏡で金の笏を手に入れた事と関係しているのか、鏡無しでコンタクトが取れるようになったらしい。

（モナ、父上が倒れた。会いに来るか？）

（寿命が尽きる寸前だからな。無事に帰ったか。早く、アンニカを迎えて子を作れよ）

（父上に万が一のことが有れば、それどころじゃないって）

（そうなのか？　じゃあ、嫁入りが済んでから、葬式なら構わんのか？）

（は？　良く意味が分からんのだが）

本当にその時は意味が分からなかったのだが、その後嫌と言う程理解させられた。

僕が父上の部屋に飛び込むと、父上はタイミングを合わせたように目を開けられた。

「おお、戻ったか、グスタフ……」
「はい。おかげさまで無事に戻りました」
「慌ただしい話だが……早くスコウホイのアンニカを正妃とするのだ……死ぬ前に……一目見ておきたい……イヴァル……急ぎ、婚礼の支度を」
イヴァル・ケニングは恭しく頭を下げ返事をした。
「承りました。今から、早速でございましょうか？」
「そうだ……急げ」
「父上！」

僕はゼイゼイ苦しげな息遣いの父上の手を握り締め、意識を探った。父上は僕が手を握れば意識を通わせてテレパシーで会話できることを御存知の、数少ない人間の一人だ。

（なぜ、さほど急がれますか？）
（モナの夢を見た。もう寿命が尽きる寸前だと知らされた。アンニカを迎えれば、お前の治世に大きな力となると、以前から知らされていたのでな。本人が身一つで来ても、すぐに式が挙げられる用意がしてあるはずだ。死ぬ前に一目、お前の正妃となったアンニカを見ておきたい。だから、急げ）
（披露は後日でも、式だけでも挙げる、そういう事でしょうか？）
（細かい事はイヴァルと決めろ。ともかくお前の妻となったアンニカを、早く見たい。それだけだ）

それだけ僕に伝え終わると、父上はすっと眠りに入った。呼吸は穏やかだった。僕も急ぎ部屋を出て、イヴァルがいると言う御前会議のメンバーが集まった部屋に入った。

皆、僕の無事の帰還を本気で喜んでくれたが、父上の強い御希望で急ぎ婚儀を執り行う件についての実務的な話をすぐに始めた。

「殿下は下船なさって馬で駆けつけられたのですね。お疲れでしょう。幾つかの決裁頂くべき事項だけに話を絞りますので……」

イヴァルはそう言うと、すでに出来上がっている招待客のリストを渡し、どうするか僕に最終決定してほしいと言った。特に神聖教会とミッケリの招待客が問題なのだ。

「細かい事実関係は明日にでも皆に報告するつもりだが、新大陸で様々な事が有った。幸い流血惨事も戦闘も発生しなかったが、新大陸における権益や、かの大陸で古い伝統を持つ国々といかに付き合っていくかについて、ある程度意見の交換、可能なら擦り合わせもしたい。従って神聖教会とミッケリに関しては、新大陸の権益をどう扱うかに関して決定しうる権限を持つ人物が望ましい。そのあたりを招待状には反映させてくれ」

僕は西海岸にテツココの高官とミズホの協力を得てグスタフ港を開いた事、金の笏を得た事、ロカとピニャをアイリュの皇帝から託された事、チャスカがワルパの王族であると認定され、強制移住させられていた親類たちも皆、故地に無事帰還した事、東海岸にフレゼリク港を作っている事、まだ残っている探検隊員は引き続き活動を続けている事、などを?い摘んで伝えた。

帝国での挙式に間に合う者だけが列席してくれれば十分だと言う内容の連絡が、各国大使に急ぎ届けられた。トリア駐在の帝国と付き合いのある三十五か国全ての大使が兎も角も出席する、と返事をした。大半の国が元首クラスの者が間に合うかどうかはわからないが、可能な限り本国と取り急ぎ連絡を取る、とも伝えて来た。神聖

教会は挙式を取り仕切るトリア大司教に加え、枢機卿の一人を列席させると返事を寄越し、ミッケリは三元老の一人を寄越すとの返事だった。

この御前会議のメンバーとの相談の時点で、アンニカは既にスコウホイ領を出発していたらしい。

上を下への大騒ぎと言う感じだったが、僕が帰国して僅か三日の内に準備がすべてが整った。恐るべき早業だが、アンニカの輿入れに関しては相当以前から各方面の人間が用意していたのだろう。

婚礼の前日に僕は三十三歳になった。外国の賓客も締切直前まで列席希望者が増え続け、そのリストアップと警備の目配りだけでも大仕事なので、誕生祝は無用と各方面の人間に言い渡してあったのだが……チャスカがひっそり祝ってくれた。心づくしの料理が並び、家庭的な雰囲気だった。二人きりの誕生祝も悪くは無いと感じる。

「まだ、医者には分からないと言われましたが、モナ様は間違いなく子が出来たと教えて下さいました」

僕は帰国してから、あの鏡をチャスカに渡した。僕はもう鏡の必要は無いし、僕以外で鏡を使えるのはチャスカだけだからだが、アンニカの輿入れが有れば、チャスカはどうしたって色々な影響をこうむる。チャスカを気に入っているらしいモナが何らかの力添えをしてくれると有りがたいとも考えたのだ。

（モナ、今度のチャスカの子は男か女か）
（おそらく男だ。嫁になる子も生まれるはずだし、楽しみだのう）
（アンニカも子を産んだ方が良いのか？）
（そうだ。同じ年の内が良い）

僕はヨハンとコルネリアに、チャスカの世話を頼む事にした。既に新大陸の未成年組の面倒見は依頼してある。チャスカにとっ

て、故郷の言葉で会話が出来る人間が身近に複数いた方が、気分が楽だろうと考えたからだ。費用は無論僕が持つにしても、探検隊の結成以来、いや、新大陸の渡航計画が話題に上ったころからずっと、ヨハン夫妻は計画立案にも関わっており、非常に頼りになる仲間だった。そしてヤタガラスは僕が頼まなくても自分の末裔であるチャスカを護る気は十分だし、力になってくれるだろう。

正三郎の所は、留守中に妻が初めての子を出産していた。息子だ。チャスカとの意思疎通は帝国の公用語だが、ヤタガラスが正三郎の妻に懐いているし、帝国以外の生まれで子を産んだ先輩でもあるから、正三郎には夫婦でヨハン夫妻を補佐してやってほしいと依頼してある。

「しばらく、お別れですが、子が無事に産まれたら……またここに戻って来て宜しいですか？」

「もちろんだ。待っているよ」

「アンニカ様への御挨拶は……どのようにすれば、宜しいでしょうか」

「事前に僕に連絡をしてくれ。モナとヤタガラスが会った方が良いと言えば、それでもかまわない気がするんだが……アンニカの周りの人間が、どう言うか」

「セルマ様へは、どういえば」

「僕から連絡はしておく。もしかしてセルマに会うなら、必ずルイサやコルネリアと一緒の時にしなさい。セルマも母親の侯爵夫人の看病が有って、あまり女子修道院から外に出ないとは思うんだけどな」

セルマは貴族だし側妃だ。挙式に列席する資格は有るが、介護を理由に欠席すると伝えて来た。セルマの産んだ子供らは無論成人して独立もしたのだから、母親とは関係無しに自分の判断で出席するだろう。だが、チャスカは、まだ、貴族の位を持っていない。だか

ら出席は最初から認められないのだ。チャスカの叙爵は僕が皇帝なら、思いついた時にいつでもすぐに行えるが、皇太子の場合はそうはいかない。恐らく、二人目の子を産んでから、と言う事になるのだろう。

「もっと早く、チャスカの身分を引き上げて置きたかったがなあ」

「皆さまが力を貸してくださいますから、私は大丈夫です」

探検隊員に加わった学者や貴族の子弟は、チャスカに親近感と仲間意識を持つようになっている。ほぼ一年間の共同生活の賜物だ。チャスカはグチもこぼさず、懸命に皆をサポートしたから、当然だろう。

「急ぎの用事はヤタガラスかモナ経由で僕に伝えてくれればよい。分からないことは、ヨハンでもコルネリアでも正三郎たちでも、聞いてみてごらん。後は……」

チャスカの目が、ちょっと潤んだ。僕に当分会えそうもないのが寂しいらしい。可愛そうに。アンニカに対する恨みがましい気持ちがかけらも無いだけに、僕の胸は痛んだ。

「ヨハンの邸に居る間も、月に一度は、絶対に会いに行くから。キリャを頼むよ。元気な子を産んで無事にこの部屋に戻っておいで……さあ、しばらく一緒の風呂は無理だから、ゆっくり入ろうか」

チャスカの洗い方はユリエの仕込みだが、細かな手順は多少違ったりする。それにユリエは僕が体を洗うのをめったに許さなかったが、チャスカは変に構えた所が無くて、自然体だ。可愛い喘ぎ声を聞くのがやっぱり僕としては、楽しかったりする。ユリエも僕ともっと年齢が近かったら、また違ったのだろう。ユリエは自ら僕との

こうした関係を断ち切ったが、チャスカはどうなるのだろう？　皺が出来ようが、白髪だらけになろうが、風呂ぐらい一緒に入ってもいいのにと僕は思っている。

「チャスカがお婆ちゃんになっても、時々風呂ぐらいは一緒に入りたいもんだ」

「シワシワの、よぼよぼでもですか？」

「それでも、チャスカはチャスカだからな」

「その方がグスタフ様は嬉しいのですか？」

「うん。お婆さんになっても、チャスカが僕を嫌じゃなければ、そうしてほしい」

僕は体を洗いながら、色々と悪戯もした。

「お婆さんだと、こういう事は……無しですよね」

「うん。さすがにやめる」

「……なら、たぶん、大丈夫です」

「ありがとう。でも、今のチャスカは若いから、こんな事をしても構わないだろ？　うむ。胸も段々育ってきたし、良い感じだ」

真っ赤になって悶え、歔くような喘ぎが口の端から噴きこぼれ、少女めいた愛らしい顔が悩ましげな女の顔に変貌する様子を、僕は目に焼き付けた。しばらく見納めだろうから。

ベッドでは手短かに事を終わらせ、互いの手を握って眠った。夜が明けて慌ただしく朝食が済むと、チャスカはヨハンの邸に向かった。僕は正午きっかりに執り行われる結婚式の支度で、慌ただしい時間を過ごした。

「花嫁の支度が完了しました」

イヴァルがそう伝えて来たので、僕は礼服姿でアンニカと両親に挨拶に行った。

「殿下！」

久しぶりのクヌートは、ハゲと肥満がかなり進行していた。それ

でも紫の目に浮かぶ人懐っこい表情は変わらないが。妻のウルリカも昔の妖精のような美少女から、ドッシリした奥方様になっていた。それでもやっぱり美人ではあったが。

「クヌート、ウルリカ、お久しぶり」

「殿下は、本当にお若いままですね」

花嫁の両親に驚かれたが、実年齢は僕だっていいオヤジなわけで、妙に気恥しい。アンニカは真っ白いベールで顔を隠している。

「いい加減、落ち着いてもよさそうだけど、いつまでも進歩が無いのかもな。あのちっちゃかったアンニカが花嫁なんだものなあ。感無量だよ」

「殿下、花婿と言うより、親戚の叔父さんみたいですな」

クヌートは苦笑している。

「まあ、実年齢がそんなもんだからなあ」

「でも、本当にお若いままで。羨ましいですわ」

ウルリカは自分が「おばあちゃん」になりつつあるのを、しきりに気にしていた。モナの言う通りなら名実ともに、今年中にウルリカにも孫が出来るはずだが……

「じゃあね。アンニカ。またあとで」

ベールのままアンニカは、深すぎず浅すぎない完璧な礼をした。

顔合わせの儀式が宮殿内の礼拝所で行われると、僕の手で花嫁のベールを上げた。これから二人で馬車に乗り、トリア大聖堂に向かうのだ。亡きアネッテと僕の婚礼は互いに十四歳の時だった。相手が違うと、同じ儀式も印象は随分と違う。考えてみれば、僕自身もオッサンだから、違って当然か。あの小さかったアンニカが僕の妻になるなんて、改めて感無量だ。

「よろしく、僕の奥さん」

「はい」

微笑んだ顔はかつてのウルリカに似ていなくもないが、もっと強い印象を与える。そうだな。目力の違い、だろうか。妖精を思わせる繊細な顔立ちなのに、どことなく偉大な祖父・エリク・ベルワルドと似た雰囲気が漂っている。そして、端正で堂々とした美しいオーラが感じられる。確かにこの子は皇后に相応しいのだろう。まだ十五歳なのに、大したものだ。

八頭立ての屋根無しの馬車に乗り人々の歓呼の声にこたえて辿り着いた大聖堂での最後の儀式が終わると、僕らは誓いのキスをした。そのキスが終わった瞬間、ドッと歓声が沸き起こり、皆が一斉に拍手した。こんな事は僕も初めてだ。僕らは皆に手を振り、熱狂的な祝福の声に応えた。

「初めての夫婦そろっての共同作業は、上手くいったみたいだね」
「ええ。ちょっとびっくりしました」
「僕も、おどろいたよ」

びっくりしたと言っても、全然動じていない。うむ。ますます皇后向きなんだなと、僕は納得した。

僕の微妙な感情・1（後書き）

誤字一部訂正しました。見落としがあると思います。お知らせ下さったら、大変ありがたいです。

僕の微妙な感情・2（前書き）

新婚初夜、です。

僕の微妙な感情・2

大聖堂での儀式とパレード終了後、すぐにそのまま父上の枕元に伺った。スコウホイ公爵夫妻も一緒だ。

父上はお休みだったようだが、僕らの気配で目を覚まされたらしい。

「ああ、ひとまず良かった。早く孫をこしらえろ」

僕の顔を見るなり、こうだ。

「はあ……」

「たとえ……明日……葬式でも何でも……構わん。早くしろ」

「はい」

何だろう。返事をした後で、めちゃくちゃ恥ずかしくなった。帝国では近隣のどっかの国みたいな、公開初夜なんてイベントは無いが、僕の感覚では殆どそれに近いものがある。事後のシーツの確認の儀式は祖父のころまで健在だったようだし。父上と母上の時だって、公開じゃないが、女官どもが検分したらしいから……

「万事、典礼を遵守し、皆でつつがなく事が運びますようにお仕えするもの一同、精一杯あい務めますので、どうぞ陛下はお休み下さい」

イヴァル・ケニングが良い具合に話を振ってくれて、僕らは皆御前を下がった。別室で僕とアンニカとクヌートとウルリカの四人はコーヒーを飲んだ。アンニカが住む事になる建物の、最終チェックがまもなく終了らしい。

「チャスカ殿との面会は、どうすべきでしょう？　モナ様がサルテ

ンの私の所においで下さった時に伺ったお話では、万事殿下にお任せせよとの事でしたが。大層魂の美しい方だと伺いましたし、ヨハンはかの地の古い王国の王女である方だと申しておりました。御子もおいでですし、礼を尽くして応対するよう、アンニカに仕える者たちには言い含めて有るのですが……」

ウルリカは率直だ。元からそうだったのだろうが、クヌートと言う馬鹿正直な男と結婚して、余計にその傾向が強まったのだろう。クヌートの方は慌てていた。僕の気を悪くするのでは無いかと、心配になったのだろう。初夜が済んでもいない内から、娘の配偶者の異性関係に対する質問なわけだから、普通に考えれば微妙すぎる。

「ヨハンの邸で会うのが良いのかも知れないなあ。あの邸に幼い二人の皇子と大酋長や大神官の息子が滞在している。四人とも帝国で学問を修め、いずれは国に戻って政に携わる者たちだ。国の言葉で話が出来る方が、何かと良いのではないかと思ってね。ヨハンには世話になりっぱなしだが、チャスカの面倒も頼んだ。どうやら二人目が出来たみたいだし。ヨハンの邸には一緒に探検した仲間も良く来るからねえ、何かと好都合だろうと思ったのさ」

二人目が出来た発言に、新婦の両親としては複雑な気分なんだろうが、あえて気がつかないふりを通す。

「なるほど、ヨハンは探検隊の皆さんと心安い仲だと聞いております。ならば……」

「ならばスコーネ侯爵に万事伺えば間違いない、そう言う事ですな」

クヌートはちょっと強引に、ウルリカの振った話を終了した格好にした。終了したかったのだろう。娘の気持ちが心配だったからだろうと思う。ヨハンは亡父の爵位と領土を継いだから、今は若いス

コーネ侯爵だ。名前ではなく称号で呼んだのは、僕やヨハンを信頼できる人間だとは思っているが、父親の自分ほどアンニカの事を案じてはいないだろうと言う、軽い不信の念の表明とも受け取れた。あるいはほっておけば微妙な話を長々と振りそうな妻に対する不快感かも知れなかった。

「ああ、そうだね」

「アンニカが住む御殿は大層見事な庭が有るんですな」

クヌートとウルリカは事前に建物を見ているらしい。

「僕から見て曾祖母にあたる方が、大層気に入っておられた場所だよ。僕の母上があそこに住みたがったが、どう言う訳か父上が承知なさらなかった」

「それは、またどうした御事情で？」

クヌートに不思議そうに尋ねられるまで、考えたことも無かった疑問だった。

「僕も知らないんだ。何か特別な思い出の場所なのかもしれないな」

そう言えば、父上はなぜあの建物に誰かが立ち入る事を嫌っておられたのか、そしてなぜ、アンニカの住まいとするように命じられたのか、僕は理由を知らない。伺っておいた方が良いだろうか……僕が考え込んでしまった所為もあって、会話は全く弾まなかった。弾む必要も無いと言えば無いが。

四人ともコーヒーを飲み終わり、ただ静かに座っていた所に、支度が整ったと伝える知らせが入った。新婦の両親はここでお別れとなる。

「どうか殿下、この子を……よろしくお願い致します」

深々と礼をして退出する二人の後ろ姿は、なんだか一回り小さくなったように見えた。

僕はアンニカの手を取って、一緒に支度の出来上がった住まいに向かう。すぐに新婦の方は着替えのために奥に引っ込んだ。長いトレーンを引いた純白のドレスは良く似合っていたが、重いし、食事には不向きだ。賓客たちは大宴会の最中のはずだが、僕らは今夜は二人きりで食事となる。従来のしきたりでは新郎新婦も大宴会に三日三晩参加だったのだが、僕がアネッテと結婚する際にそのしきたりを止めてしまったのだ。何しろアネッテは体も弱かったから。

アンニカが実家から連れてきたのは、乳母と小間使い、料理人、護衛他、三十名ほど。どうやら生前の大宰相に仕えていた者も数名いる模様だ。ヨハンが「量より質」でウルリカが中心になって選んだ面々だと言っていたが、期待できるかもしれない。

隣国の王女と言う身分以外なんの後ろ盾も無かった先の正妃アネッテとは違い、アンニカは頼りがいのある親類縁者に恵まれている。僕としても一から世話を焼かなくても大丈夫だと思える安心感は有る。ただ、下手をすると父上と母上のようなよそよそしい関係になりかねない危うさも含んでいるが……

料理は僕の好みを良く調査し反映していた。スープの塩加減も、肉の焼き加減も、魚のスモーク加減も、マリネも、サラダ類の味付けも、デザートも酒も僕の好みのものばかりだ。アンニカは好き嫌いしないで、何でも美味しそうに食べる。最後のデザートの一匙まで、綺麗に平らげた。若い健康な食欲を感じて、微笑ましかった。

「久しぶりに、懐かしい味を堪能させてもらった。料理長に礼を言いたいな」

やってきた黒目黒髪の料理長は、どことなく見覚えが有った。なんとアネッテに仕えていたが、ユリエの紹介でスコウホイ公爵家に移ったという経歴の持ち主らしい。見た目で分かるようにミズホの

血を濃く受け継いでいるので、ミズホ風の料理も得意だと言う。
どうやらここの使用人は、アネッテやユリエと縁の有る者が多いようで、アンニカ自身がどう感じているのか気になってくる。

「お風呂の御用意が整いました」

これまたどことなく見覚えのある老女だと思ったら、ユリエが亮太を産んだ頃に補佐役を務めていた者だった。縁あってスコウホイの男と所帯を持ったが、死に別れ、子も無いのでつてを頼ってスコウホイ公爵家に入ったらしい。
風呂の入り口に老女二名が控えていて「お流しいたしましょうか」と聞かれたが、断った。風呂は婚儀にあわせて、最新式に改装したものらしい。僕が出て寝室で待つ間に、アンニカも入り婆さんたちに磨き上げられていたみたいだ。

ベッドで先に横になったのだが、うっかり寝込んだらしい。それだけ寝心地の良いベッドだったわけだが、長旅の疲れが取れない内の儀式だったので不覚を取ったようだ。

「ごめん、アンニカ」

返事は無かった。プラチナブロンドの髪はゆるく三つ編みされて、白いリボンでまとめてある。穏やかな呼吸はアンニカが完全に眠っている事を示していた。僕は小さな手をそっと握って、アンニカの思念を探った。眠っている時の方が本人の嘘偽りない感情を読み取りやすかったりするものだ。

何だ、これは？　二十代になってからの僕とセルマか？　僕がセルマに何事かかき口説き、かなり粘っこいキスの応酬の後、下着を探り当て、外し……結構激しくヤッている。僕は後ろからセルマの

乳房を掴み出し、ドレスの裾を派手に捲り上げて、腰を打ちつけている。粘膜の立てる音がかなりしっかり聞こえる。

「こ、これでは、獣のようです」

「僕は獣だよ、だから、セルマも僕と番う獣になりなさい」

「いやあ……いやです……」

「ウソはいけない。こんなに体は喜んでいるじゃないか。熱く絡みついて、僕を銜え込んで離さないじゃないか。しかも、こんなに濡らしている」

「っ、いやあ、意地悪な方、おっしゃらないで、ああっ」

その内、セルマは首をひねって僕のキスをせがみ、僕も応じて、二人はかなり激しく上り詰めたみたいだ。

どうやらこの時アンニカは、生い茂る生垣の影に隠れていて、僕とセルマの思わぬ場面に出くわしたようだ。僕はどうも記憶に無いが……恐らくはユリエとの関係が間遠になっていた頃だろう。僕は殺気さえ感じられなければ、鹿とかキツネとか何か獣が居るんだろうぐらいにしか感じていなかったのだろう。まさか……アンニカに見られていたとは、思いもよらなかった。

幼いころのアンニカは父親か母親、どちらかの供をして黄金宮に来る事もしばしばだった。僕に会う時も有ったし、母上や大宰相に会うのが目的の事も有ったみたいだ。

当然ながら一時期養母であったアネッテの記憶は、余りに幼かったためにアンニカ本人には殆ど無いらしい。そのくせ、僕は強く意識されていたみたいだ。いきなりシーンが切り替わる。

僕が四歳ぐらいのアンニカを抱っこして庭を歩いているのだ。アンニカは、当時一番気に入っていたフリルで一杯の真っ白いドレスを着ている。僕は摂政の執務服姿だ。アンニカが余りに可愛いので、

僕が褒めると、抱っこをせがまれたのだ。

「おとうさま」

「僕はお父様じゃない。アンニカのお父様はスコウホイ公爵だ」

「おとうさまとよんでは、いけませんか？」

「いけない。あんなに良いお父様がいるのだからね」

「では、おにいさま」

「アンニカはアンニカのお父様とお母様の最初の子だから、それも違う」

「では……でんか」

「そうだね。それが正しい」

「お名前は、呼んではいけないのですか？」

「そうだなあ……アンニカが僕の奥さんになれば構わないけれど、それまではダメ」

僕はアンニカの可愛いほっぺにキスをしたみたいだ。

「わたしがおおきくなったら、おくさんにしていただけますか？」

「ああ。人にやさしくて、親切で、いっぱいお勉強をすれば考えてあげよう」

「はい。がんばります」

あれ？　こんな事を言ったのかな？　言ったのかも知れない。恐らく当時は軽い気持だったはずだが。

「アンニカは、僕の奥さんになりたかったのかい？」

僕が呟くと、朝焼けの光の中でアンニカの綺麗な紫の瞳がぱっちりと開いた。

「ええ、そうです……あ……おはようございます」

半ば寝ぼけていたのだろう。最後の方は気恥ずかしそうな声だった。

「おはよう」

僕は腰を引き寄せながら、寝間着の前をはだけさせ、乳房を探り当てた。
「これから、名実ともに、僕の奥さんになってもらおうと思うんだが、構わない？」
「……はい」
「じゃあ、体の力を抜いて……そうそう。まずは、キスから行こうか」

アンニカは幾度もこんなシーンを思い浮かべていたらしい。僕もそんな相手は初めてなので、興味深い。物を食べる時も舌と舌を絡ませるにはどうすれば良いのか、などと妄想する事も有る子のようだ。面白い。

「ん？　ここ、時々自分で可愛がっていたのかな？」

僕がささやかな翳りを手ですき上げ、柔らかな丘を手でくるみこむようにして愛撫しながら、疑問を口にすると、アンニカはヒッ、と言うような声を上げた。バレないと思っていたらしい。

「簡単に剥けるし、ちょっと大きめだからね」
「ごめんなさい、ああ、許して、許してください」
困ったと言う顔でベソをかきはじめる。そんな顔も可愛いが。
「別に構わないさ。いつも僕の事を思い浮かべていたんだね？」

コクコクとぎこちなく首を振った。
鋭敏に育ちあがったそこを技巧を駆使して刺激してやると、あっという間に上り詰めた。それからは、揺さぶられながら初めての痛みに泣く癖に、早くも快感をとらえ始めたえらく覚えの良い体にしんそこ驚いた。

「とってもお利口なのに、物凄く感じやすい体をしているんだねえ。フフフ」
「お願いです。おっしゃらないで」
「二人だけの秘密なら、良いだろう？」
「本当に、秘密にして下さいますか？」
「無論さ」

体が二十代前半の状態なだけに、回復はすぐで、起床時刻を告げる女官が来るまでに三回戦まで及んだのは我ながら呆れた。アンニカの脳裏に浮かぶ刺激的な情景に、僕がシンクロしたような気もする。

当然ながら、女官どものシーツの点検は無事クリアした。

「ねえ。いつからあそこを悪戯するようになったの、教えて」
朝食後、僕は耳にキスをしながら尋ねた。
「五歳……のころから……だとおもいます。最初はやみくもにシーツにこすり付けるだけでしたけれど……」
「何がきっかけだった？」
「あの……あのう……」
「ひょっとして、見ちゃったの？」

僕が二ヤッと笑うと、アンニカは青ざめた。

「ああ、ごめん。無理に言わなくて良いからね。嘘をつかなかったんだから、それで十分さ」

それから僕がアンニカの肩を抱き寄せると、皆、命じもしないのに部屋から出て行った。皇帝陛下が御孫様の御誕生を心待ちにしておいでだから……そんな意識も僕の中に飛び込んできた。

その日は一日、皆の期待に応えて早く子を作るべく、最善の努力をしたのは言うまでもない。

僕の微妙な感情・3

フレゼリク・レオポルドはアンニカと一歳しか違わない。三日三晩ぐらい新婚の妻と過ごすべきかもしれなかったが、どうもこの唯一の嫡男が非常に気がかりだった。

気がかりと言えば僕の最初の子供、ユリエが生んだ亮太も気がかりだったが、こっちは母親が同じラウル・ヤイレの所に厄介になっていて、それなりに気楽に暮らしているように思う。ラウル・ヤイレとセルマの娘ルイサの夫婦は、共に亮太にとって片親違いの兄と妹であり、身近な存在でもあったのだから、孤独感と言う面ではフレゼリク・レオポルドよりかなりましだろう。ルイサによれば、平民の女性と深い仲になりつつあるようだが……僕が即位すれば、その女性の人柄を見て貴族に列する事も亮太と結婚させる事も出来ない話ではない。ルイサとラウル・ヤイレが悪く言わないのだから、それなりに見どころが有る女性なのだろうから。

母親に似たのか、フレゼリク・レオポルドは人付き合いがうまい方ではなく、本音で打ち明け話を出来る人間が殆ど存在しないらしいのが気になる。セルマの産んだミゲルとは同じ年だが、交流は無い。一番気の合った亮仁は、今はミズホ暮らしだ。絵を描くことが一番好きで、その対象は野の草花が多い。好きな学問は植物学で、修道院の画僧のような暮らしぶりだ。学問同様、武術の鍛錬もまじめにやっているから、体はそれなりにたくましく健康にはなっているが、誰かとの浮いた噂も無く、生まれついての婚約者ワッデンのサスキア王女と文通をまめにしているのが、唯一の異性との交流らしい。

「昼食はフレゼリク・レオポルドと食べてくるよ。帰国後一度も話

をしていないしね」

アンニカは僕がずっと嫡男と朝食を共に食べて来た事は承知のはずだった。何しろ昨日は僕も励んだが、女の側はもっと負担が大きかったはずだ。アンニカも静かに休む時間が必要だろう。

僕が自分の執務室に行くと、ワッデン国王からの親書が届いていた。そろそろ後継者であるサスキアの結婚を進めたいと言う催促だった。

「サスキア王女が王位を継ぐ事になっても国の安定が揺らがないようにしたい、そうした御意向のようです」

僕がワッデンを訪問したころほどでは無いにせよ、今も王自身の健康状態は良いとは言えないらしい。

「僕の再婚の直後というのは、特別な意味が有るんだろうな」

「新しいお妃をお迎えになっても、帝国とワッデンの絆は確かだと言う再確認をなさりたいのでしょう。それに、王女もお年頃ですので、御父君としてはやはり御自分の目の黒いうちに王配殿下をお迎えしたいお気持ちが強いかもしれませんな」

サスキアは表向きは兄の先王と王妃の唯一の嫡子と言う事になっているが、その実、現国王と兄の正妃の不倫関係で生まれた子だ。僕は王に聞かされて事情を知っているが……サスキア本人は知らないかもしれない。イヴァルには事情を説明してあるが、他の者は知らないはずだ。

「急な話だが、ワッデンの国王陛下からこんな親書が来た」

僕は昼食時にフレゼリク・レオポルドに届いた親書を見せた。

「やはり……自分が必要とされている所に行くべきですよね」

僕がアンニカという新しい正妃を迎えた事で、自分のポジションが微妙になったと感じているらしい。ここはハッキリ言っておくべ

きだろう。
「アンニカに息子が生まれたって、僕の跡継ぎはお前だからね。そこは揺らがない」
「でも、出来の良い弟でしたら……」
「出自を無視すれば、出来の良い者は沢山いるかもしれない。だが、この国は特別な場合を除いて、最年長の嫡出の男子が皇帝の位を継承してきたのだ。だから、どうしたって跡継ぎはお前だよ」
「父上は……不老で不死でいらっしゃるようだから、子供たちの方が皆先に亡くなるのでしょうし……そもそも無駄な心配でしょうね」
「それは、嫌だなあ……ゾッとする話だ」
「……ごめんなさい」

帝国の一般の人間が望む不老不死がなぜ「ゾッとする話」に結びつくのか、余り理解はしていないようだ。

「なぜ、ゾッとするかわからないか？」
「……ええ。実を言えばそうです」
「何年たっても自分だけが生きていて、気が付くと親しい人、大切な人がドンドン死んでいなくなってしまう。そんな置いてきぼりの状態が延々続くなんて、うれしくないさ」
「ですが、父上は次々と新しい者たちと新しい関係をお作りになれる方ですから……今度お妃に迎えられた方は、かつて母上の養い子のような立場の方だったと伺っています。普通なら、それほどの年齢差が有るとちぐはぐな感じに見えると思うんですが……父上は、息子の僕から見ても新しくお迎えになった方と並ばれても、全然違和感がお有りになりません」

それはそうでも、恋人・妻・親・兄弟・子供、そんな人たちに置いてきぼりを食らい続けるのに耐えられる自信が無かったりする。

「ごめんなさい。良くわかりもせずに、勝手な事を言いました」
「わかれと言う方が、無理かもしれん……な」

フレゼリク・レオポルドは、ふわっとした笑みを浮かべた。ああ、アネッテの微笑み方にそっくりだ。

「やはり、ワッデンに行く事にします。サスキア殿にも会いたいし」
「……そうか。では、準備をさせよう。だが、無理はしなくていいんだぞ」
「多少なりとも、お役に立てる場所で生活すべきかもしれない、そう思います」
「お前は、僕にとって大切な息子なんだ。その事は忘れないでくれ」
「ええ。父上が僕に向けて下さったお気持ちの有りがたさは、わかっているつもりです。ありがとうございます。僕も、もう十四歳ですから、何とかやってみます」

事が動くときは、一度に動くものみたいだ。

フレゼリク・レオポルドの婚儀とワッデンへの移住の支度をはじめてすぐ、グラーン侯爵夫人が亡くなった。僕は父上が心配だった。
「そうか。カレンがな。皆、もういないのだから、そろそろ、かな」
父上はため息をつかれたが、その心中は思いの外静かだった。
「グスタフ」
「はい」
「アンニカの祖母だがな……あれに良く似ておったよ」
「スコウホイの王女であった方ですね？」
「マリオンだ。エリクに取られてしまったがな。それでウルリカが生まれた」

マリオンという人は元来は王女に生まれついたのに、国が亡び娼

婦に売り飛ばされてしまったのだ。細かな経緯は知らないが、大宰相に身請けされて妾になり、ウルリカを産んですぐ亡くなった。ついてない人だったと思うのだが、父上はそのマリオンという人を公式愛人に迎えようと考えたことが有ったらしい。

「そうですか。その、マリオンと言う方とお会いになるときは、あの建物を使われた、なるほど」

高級娼婦だったマリオンを何日か買い切り、あの建物で共に過ごした、そんな事が幾度か有ったようだ。だが、マリオンの素性を知った大宰相が身請けしてしまった。そういう事のようだ。父上も身請けをする準備をしておられたが、タッチの差で遅れを取ったようだ。

「大宰相とは、ずいぶんと色々因縁がお有りになったのですね」
「馬鹿な事も、色々やったがな」

大宰相が目を付けた女官やメイドを先に御自分がお抱きになったり、母上に対する大宰相の気持ちを十二分に承知の上で見せつけるように庭で事に及ばれたり……おやおや、まあ、確かに馬鹿げている。

「色事以外は、何でもエリクに負けっぱなしだったが、お前と言う息子を授かった事で、あれより優位に立てたな」
「大宰相は、僕には色々と良くしてくれました」
「エリクはお前に惚れ込んでいたからな。お前を自分の娘の婿にしたくてならなかったろうが、孫が皇后になれば、あの世で喜んでくれるだろう」

それからモナの母をはじめ、もう会えない御自分の子を産んだ女

性たちの想い出話をなさった。

「あの、以前お前を摂政にした時の勅書を入れた場所に、子を産んだ女どもについてまとめてある。産んだ可能性が有る女についても、最近書き足しておいた。随分とまあ、沢山の女と関わったが、恐らくもう大半は生きておらんだろう。どうするかは全部グスタフに任せよう」

そこまでおっしゃると、いきなり寝息を立てられた。お話なさりたかったのだろうが、御体が持たないのだ、恐らく。僕はあの秘密の薄い引出しを開けて、その書付を持ってきた。はっきり御子を産んだ者はモナの母や『大女亭』の主を含めて十五人、可能性が有るのは十人らしい。父上の手を取って意識を探ったが、浮かび上がる面影や思い出などで姿形は鮮明にわかったが、それがこの二十五名の女性の内、誰であるのかは探りきれなかった。

僕は一度自室に戻ると、セルマの所に使いを出した。相変わらず女子修道院に立てこもっている恰好なので、顔を見に立ち寄ることもできない。娘であるルイサは葬儀その他の手配を手伝っているらしい。

祖母の葬儀で忙しい妻に置いてきぼりを食らっているらしいラウル・ヤイレの所で、夕食を取る事にした。居候の形の亮太も同席するらしい。亮太は一応子爵だし邸も有るが、殆ど母・ユリエの実家レーゼイ家に管理を任せきりだ。あちこちの学術系のサロンや勉強会には小まめに参加する様だ。そこで知り合った平民の女性と意気投合したらしい。

「新大陸で何か新しい事がしてみたいものです」

「何かって、何が良いんだ？」

「身分とかしきたりとか関係ない所で、思い切り何かやりたいんで

す」
「あの大陸にだって、それなりに歴史もしきたりも有るんだ。それも相当なもんなんだぞ」
「そうなのですか？」

僕はあのアイリュ帝国の事情などを？い摘んで話した。

「何処でも身分にしきたりですか。でも、帝国とは事情が違いそうで、何か新しい事は出来そうですね」
「ならばヨハンの邸にいる連中に教えを乞うた方が良さそうだな。言葉も覚えた方が良いし」
「あのう……彼女を……マーシャを連れて行っても良いでしょうか」
「ああ。明日にでも、一緒に行こうか」

翌日、僕は午後丸々時間をヨハンの邸で過ごした。チャスカとキリャに会って話をしたし、マーシャ・レスコと言う、燃える様な赤毛で緑がかった灰色の目の、どこかちょっと風変りな女性と初めて会った。彼女は僕が皇太子だと知って驚いていたが、それよりも僕があの大陸の言葉を自由に話すので非常に驚いていた。

「殿下は全くご自由にあちらの言葉をお話しになるのですね」
「マーシャ、貴女は……別の世界の記憶が有るんじゃないんですか？」
「え、ええ。なぜ、そうお考えになりましたか？」
「身分制度から貴女の発想が完全に自由だからですが……さっき、僕らの測量した海岸線の図を見ながらサンフランシスコはどこ、って英語で呟かれたからです」
「エ、エエッ、英語がお分かりに？　って言うか異世界の言葉が？」
「僕は二十一世紀の日本から、ここへ生まれ変わったんですが、貴女は？」

「に、二十一世紀……の日本ですか？　私は１９４７年生まれで……二十世紀までしか知りません」
「マーシャル・プランが発表された年ですね」
「そう、そうなんです。父親がって言うか、あっちの父がマーシャル将軍を尊敬していたんで、私の名前を付けたのです」
「ほう。こちらの世界には、どんないきさつで？」

マーシャは大学三年生の十月のある晴れた日に地震に巻き込まれ、気が付いたらトリアのはずれの一軒の食堂の庭にいたらしい。体の状態その他に変化は無く、能力その他も特に変化は感じなかったと言う。帝国の言葉は食堂を手伝いながら、必死で学習したものらしい。

「大学では何を学ばれてました？」

どうやら僕でも名前を知っている名門大学で農学を専攻していたようだ。

「それにしても、殿下は赤ん坊からやり直しでいらっしゃるのに、なぜ私はそのままの身体条件でこちらにトリップしたのでしょう？」
「なぜなんでしょうね……」
「何処の生まれかは内緒だなんて言っていたのに、父上にはすぐ打ち明けたんだな」

マーシャの連れの亮太が拗ねてしまった。

あの金の笏の副作用らしいのだが、地球の英語まで流暢になったのは我ながら驚いた。マーシャは母国語が懐かしいのだろう。英語で色々しゃべりまくったから、言葉が皆目わからない亮太は完全に仲間外れになった恰好で、気分が良くなかった様だ。

「ごめんなさいね、リョウタ。生まれた国の言葉が懐かしくて、つい、しゃべり込んじゃった」
「いや、良いんだ。ちょっと仲間はずれみたいでさ……拗ねちゃっただけだから」

亮太はぞっこんみたいだし、マーシャは亮太を憎からず思ってくれているようだった。ともかくも僕は何の身元証明も保証も無い状態の彼女に、僕の権限で早急に帝国の国籍を与えた。マーシャは大いに感謝してくれたようだった。

マーシャと亮太が帰ってから、僕は離れがたい気分のままにチャスカの部屋で泊まろうとした。すると、チャスカに諭されてしまった。

「新婚の花嫁さんを、一人になさってはいけません」
「分かった。気をつかわせてゴメンよ」
「御正妃様のお気持ちが穏やかでないのは、キリャやお腹の子にも良く無いと思います」
「そうだな。それは確かにそうかも知れない。じやあね、また、昼でも一緒に食べような」
「マーシャさんは、亮太様の良い奥方様になられるでしょうね」
「チャスカもそう思うか」
「はい。賢くて優しい方のようですから」
「ありがとう。チャスカがそう言うんだから、確かだな」

名残惜しい気持ちはそのままに、僕はチャスカを抱きしめてキスすると、チャスカは綺麗な微笑みを浮かべた。今の状況で、こんな笑顔が出来るなんて……凄いと思った。

「妬いてくれないから嫌われているのかな、ってちょっと心配にな

っちゃったけれど……」
「そんな、私の一番大切な方はグスタフ様です」
「うん。ありがとう」
僕は離れがたい気持ちをねじ伏せて、アンニカの眠る部屋に戻った。

僕の微妙な感情・4

アンニカは黄金宮におけるしきたり通りベッドの中には入らずに、暖炉の前の革張りの椅子に腰かけて僕を待っていたようだ。でも、睡魔には勝てなかったらしい。寝息を立てて完全に眠り込んでいた。

僕は人払いを命じていたから、自分でアンニカのガウンを脱がせてベッドに入れ、ちゃんと暖かく包んでやった。それから一人でのんびり風呂に入り、軽くリキュールを飲んで大人しく寝ることにした。

体を寄り添わせると窺い知れるアンニカの夢は、少女にしては奔放で色鮮やかで興味深かったが、昨夜ほどの衝撃は無く、僕も冷静になって夢の中身を吟味していた。妄想のネタ元は官能描写のある読み物や、いわゆる春画の類らしいが、そもそもの始まりは僕とセルマの行為を覗き見た原体験なのだ。

「いやはや、艶っぽい夢を見ている割には、顔はまだ女の子そのものだよな」

僕が恥ずかしい空想や夢について承知していると知ったら、この子はどんな反応をするのかちょっとばかり興味がある。だが大胆な妄想をする一方で、妙に堅苦しい道徳やら慎みやらを表面上は纏っていなければならないと言う強迫観念も強いようだ。だから自分で自分を慰めていた事を指摘されると、慌てふためいたと言う訳だ。僕としてはちょっと恥ずかしい秘密について言及して、からかった程度の認識しか無かったのだが。自分の体を自分でどうしようが自分の勝手、そうした発想はそもそも無いらしい。

貴族社会の女と言うのは窮屈な決まりごとの中で生きているのだと、改めて思う。

亮太の友人、いや、そのうち恋人になりそうな、あのマーシャなら多分考える事は全然違うだろう。

平均的なアメリカの大学生らしく性的な経験は多少有るようだが、それを知った時の亮太の反応が心配と言えば心配だ。マーシャにとって大人への通過儀礼ほどの意味しか無い出来事だろうと思うのだが、その事に亮太がこだわるとおそらく二人の仲は壊れるだろう。僕としては、そこまで息子が馬鹿だと思いたくは無いが……

近代的な大国で生まれ育ったはっきりした自我を持った女性と、この世界しか知らない息子との関係は、僕の将来にとっても大きな意味を持つ事になる気がする。

それにしてもこのおチビさんは、僕をどこまで凄い性欲魔人と勘違いしているのやら。まあ、必要とあれば種馬役だって務めるが、丸一年近い禁欲だって出来なくもないと言うのに。

（モナ、アンニカの腹に子供は出来たかな）

答えが有るかどうかは分からなかったが、一応、そんな疑問を思い浮かべてモナに念を送ってみる。

（ん？　グスタフか。多分出来たが、ダメ押ししろ。お前の子を産むのだと強く意識させるべきだ）

（ダメ押しな。分かった。なあ、モナは父上が亡くなったら、葬式には出ないのか？）

（山のように人が来るのだろう？　遠慮する。穢れた波動の人間が多い場所は、やはり体に障る。気が向いたら、一度墓の様子ぐらいは見に行くかもしれん。眠いから寝るぞ。ではな）

父上の意識のあるうちに来てくれれば、その方がもっと良いだろ

うが、無理そうだ。

「リチャード・ニクソンが大統領となり、ベトナム戦争は終結しました。サイゴンはホーチミンと名前を変えましたよ」

「それって、南ベトナムが北に負けたんですか？」

「そうです。吸収されたって感じですか。その後ソビエトが崩壊し、中国とアメリカが外交関係を樹立したりして、事情は大きく変化します。二十一世紀になってから、ベトナム共産党とアメリカ政府はかなり友好的な関係に有りますよ」

「ソビエト、崩壊しちゃったんですか……驚きました」

ああ、そんな話をマーシャとしたんだな。マーシャは自動車事故で両親を失くし、育ててくれた祖母も亡くなった天涯孤独の身の上だから、向こうにどうしても帰りたいと言う程の動機が無いとも言っていた。

「ポテトチップスと、ポップコーンがテオレル帝国でも当たり前に食べられるようになると嬉しいですわ」

マーシャは、その二つが大好物だとも言った。

「あと数年の内には、きっとそうなります」

「まあ！　本当に？」

「ええ。楽しみにしてください」

するとマーシャが大喜びで僕の手をギュッと握り締めたので、亮太は怒ったのだ。多分。僕はどう見たって亮太のオヤジに見えないらしいし。

「殿下？　いつお戻りになりましたの？　申し訳ございません」

紫の瞳が大きく見開かれて、考え込んでいる僕の顔を見つめていた。

「ああ、帰りが遅くなってゴメンよ。風邪はひいてないよね？」
「はい。おかげさまで、大丈夫なようですが……何をじっとお考えでした？」
「父上の事と、亮太の事かな」
「リョウタ殿ですか」
「うん。アンニカとは一歳違いか……初めて亮太の友人である女性を紹介されたんだが、その女性は僕が前世で暮らしていた世界から来た女性だった。ただ、時間がずれているみたいで、生まれた年から換算すると彼女は僕の祖母に近い年頃って事になってしまうんだ」
「どこかの貴族の女性ですか？」
「皇帝も王も貴族も存在しない非常に大きい豊かな国の生まれで……立派な大学で学んでいた人だが、トリアでの身分は平民だな」
「皇帝も王も無しに国を治めるって……そんな事、本当にできますの？」
「君の父上が昔、スコウホイを帝国から独立させて、王も貴族も無い国を作ろうとして、ちょっと物騒な事を色々やったんだが……そのいきさつ、聞いているかな？」
「両親は全く話してくれませんでしたが……厩番や庭師の爺やたちからがこっそり、教えて貰った事が有ります。殿下が父の謀反の罪を特別にお許しになり、母と結婚させて下さったと聞きました」
「アンニカの父上は昔、ネードの鉄鉱山を爆破するために大量の火薬を買おうとした事があったんだが、その店が僕のよく知っている店でね、そのおかげですぐに計画がばれた。はかりごとには全く向いてないな、あの人は。ああ、この件は皇帝陛下と僕以外、黄金宮で知る者はいない極秘事項だから、そのつもりでね」
「なぜ、父をお許しになったのですか？」
「当時の帝国はスコウホイの人々に恨まれても仕方の無いような事を色々しでかしていた。重い税をかけたり、無理やり強制労働に狩り出したり……赴任した地方官が酷いのばかりだったのだよ。そこで、まともな役人を着任させて、滅ぼされた王家ゆかりの者にスコ

ウホイを治めさせたら、万事上手く行くのではないかと、僕は考えていたんだ。そんな時に、君の父上は世が世なら、スコウホイの王太子とも言うべき人だって判明してね、ちょっと学問のやり直しなんかをして貰ってから公爵にした、そういう訳だ」

「母は……もともと殿下の側妃候補だったと聞きました。自分が至らない、あるいは殿下が全く自分に魅力を感じておられないから、父との結婚をお膳立てなさった……母は今も時折そのように考えるようです」

「ウルリカは自分でクヌートと結婚するって、僕に宣言したって言うのに、娘にはそんな風に言うのか。はてさて、女心は難しいねえ」

ウルリカは自分を高く評価してくれる相手を求めていたと思う。当時非常な美少女で、庶子とは言え大宰相の愛娘であっただけに自信にあふれてもいた。だが、僕は確かにそうした幼稚な自尊心に対して冷淡だったのだろう。まだ十二歳かそこらの子供に、そこまで気を遣う必要性を感じなかったからだが。

やがてウルリカなりの半ば無意識の手練手管にあっという間に嵌ってゆくクヌートを見るに及んで、僕が敢て彼女を側妃にする必要性も感じなかった。そう言う事なのだ。当時の僕にとって、やはりユリエこそが一番の女性であったし、今でもセルマが「自分は二番手だ」と拗ねているが、確かに根拠の有る事なのだ。ウルリカは僕の側妃になったって、良くて二番手、下手すると三番手のポジションになりそうだと感じて、愉快ではなかっただろう。ウルリカから自発的にクヌートとの結婚を切り出したのは、幼いなりに悩んだ末の結論であった……そう言うことだろう。

で、そこまで特別に思ってきたユリエだが……遠く離れた今の状況は、やはり僕としては不本意だ。

ユリエには僕の個人的な資産の内、帝国の外の物はすべて管理を一任している。

「私が怪しからぬ考えを起こして、横領してしまうかもしれませんよ」

一度ユリエにそう言われた事が有るが、僕としては心外だった。

「ユリエに全部上げても構わないと思っているんだ。だから、好きなだけ使いなさい。それを横領なんて僕は思わないし、誰にも横領だなんて言わせない」

ユリエの高い能力と見識と僕に対する気持ち……そのすべてを今も信じているから、ユリエの生きている限り、ミズホやミッケリ、新大陸に投資され運用されている資産もすべて、ユリエに任せておくつもりだ。

ウルリカは可憐で優雅な自分を演出するための教育は十分に受けたが、国家の運営や財政・福祉といった方面の教育は一切受けないままにクヌートの妻となった。それからは彼女なりに随分と努力し、良き領主の妻となったのだが……それは、僕のユリエに対する深い信頼の有りようが何に由来するかを観察した成果も反映していたのかもしれない。

ウルリカは諸々の『反省』なり『学習成果』なりを反映させて、このアンニカの養育にあたったのだろう。この子は、自分が多くの人の運命に大きな影響力を及ぼしうる存在なのだと強く意識して育ってきたようだ。更には多くの人間の視線や感情を受け止めても、たじろがない強さも有る。

その夜、僕らはスコウホイの民と巨大な鉄鉱山について夜明け近くまで話をした。大体において僕が教師役だったが、スコウホイの人々の反応やモナを崇拝する極北の民とのふれあいや民話や言い伝えについては、なかなかにアンニカも雄弁だった。

「そうしたわけで……モナ様は、やはりスコウホイの神なのだと私も思います」
「君の両親はモナの言葉を信じて、君を僕に委ねたんだろう」
「皇帝陛下は、どうお考えだったのでしょうか？　殿下の御帰国間も無い内の挙式でしたから、ちょっと驚きましたが」
「父上はモナの言葉を信じているのだよ。実際、モナは嘘などつかないからね。そうそう、その『殿下』って呼ぶの、そろそろやめなさい」
「では、どうお呼びすればよろしいのでしょう？」
「名前を呼びなさい。夫婦の契りも交わしたのだから」
「はい……そのう……」
「まだ、実感が不足かな？」

アンニカは全く性的な事から意識が遠のいていたのだが、僕の『奇襲攻撃』を受けて、本人としては予想外に大きく反応したようだ。僕の手の動きに連れて上がるうわずった声と身悶えから、先夜より一段と強い新たな感覚にこの子が目覚めたのが見て取れた。意識的に焦らすような刺激を与えながら、この美少女が快楽に対して実に貪欲で正直であることを、改めて確認する。

アンニカの瞳は羞じらいと昂りに揺らめき、自分から僕の唇にむしゃぶりついて大きく舌をさし込んだ。熱っぽい喘ぎ声を噴きこぼしつつ、少し不器用ではあるが情熱的に舌をからませる。

僕はそれに応えながら、少女らしい堅さの尻を撫で回し、後ろから前にかけて秘められた部分に指をくぐらせる。さらに熱い滾りを吐き出し続ける肉のとじ目から、完全に上向きに尖ってしまっている突起を弄ってやりながら、からかってやると、アンニカは鼻を鳴らしながらべそをかいた。

「僕の事を考えながら、風呂でも暖炉の前でもここを弄っていただ

ろう？」
「いや、いやあ」
「でも、そうなんだろう？　昨日より、もっと感じやすくなっているみたいだね。さあ、こっち向きに僕をまたいで……そうそう、良い子だ」
「ああっ、は、はずかしい」
「もうれっきとした夫婦なんだから……全部、夫である僕に見せるんだ」
「……お笑いに、なっちゃ、いやです」

形の良い眉が戸惑いによじれ、上気しきったまぶたの奥に濡れた紫の瞳が揺れる。可愛い唇がしどけなく緩んだその顔はもはや少女のものでは無かった。やがて背筋を突っ張らせ腰を痙攣させながら僕の名を絶叫すると、アンニカは目を剥いて僕の腕の中で崩れた。

しかし一夜明けて身じまいを正し、僕と一緒の朝食の時間を迎えると、昨夜とは打って変わった幼いながらも貴婦人らしい優雅な挙措動作を見せるのだった。

「アンニカも『帝国研究院』にでも行ってみたらどうだろうな。本も揃っているし、興味が湧けば勉強会やセミナーに参加するのも良いかも知れない」
「そのような事、お許し下さいますの？」
「色々勉強してみたい事は有るのだろう？　なら、勉強すれば良いさ。ああ、ただし護衛はちゃんとつけておくのだよ。誘拐でもされたら大変だからね」
「はい。ありがとうございます」

『帝国研究院』に出入りする連中の中で、すでにその優れた知性と斬新な発想で一目置かれるようになっているらしいマーシャとの接

点も自然にできるだろう。

これからの帝国の運営を考えると、皇后が母上のような古いタイプの貴婦人では困る。アンニカには国の将来を見据えて自分の立ち位置を定められるような皇后になって欲しいものだ。僕には既に跡取り息子もいるのだから、子供についてあれこれ悩む必要は無いと思っている。縁が有れば、幾人か子に恵まれるだろうし、全く生まれなくてもそれはそれで構わないと、僕は思う。

まあ、でも、モナが「多分出来た」と言うからには、一人ぐらいは生まれるのだろう。

それにしても、モナはなぜ、チャスカとアンニカの懐妊を同じ年にするように僕に告げたのか。生まれてきた子供同士が密接にかかわりあって育つ方が良い結果になる、そういう事だろうか？

朝食後の茶を、新婚夫婦らしくゆっくり楽しんでいた所、急にあたりが騒がしくなった。

「殿下、お急ぎください。皇帝陛下が……」

侍従でもメイドでもなくイヴァル・ケニングが血相を変えて現れた所を見ると、今度こそ本当にいけないのかも知れない。僕は覚悟を決めた。

僕の即位・1

父上の死は、覚悟していたが予想以上に大きな喪失感をもたらした。実務的には摂政になってすぐから大半の皇帝の仕事は代行していたから、特に目新しい変化も無い。だが、私人としての父上の一生の後始末は……予想していたよりも大仕事になりそうだった。父上は僕に任せるとはおっしゃったが、僕の庶出の兄弟姉妹の処遇は頭の痛い問題だった。古い事情を知ったメイドは大半が亡くなっていたし、かつての愛人本人を突き止めても現在の夫やら家族やらの感情に配慮して、父上とのかかわりを秘密にして欲しいと願う場合も有った。

一年の喪が明けると、僕の戴冠式を執り行う事になった。僕としては省略でも良い位だが、どうもそうはいかないみたいだった。

「即位式は派手にやる必要は無い。父上の喪が明けたばかりだし、簡素に頼む」

その僕の希望は完全に無視されて、歴代で最多の招待客、最大の祝宴、最長のパレードという結果になる公算が大きい。ちなみに父上に正式に後継者としての御指名を頂いて久しいので何の混乱も無く、お亡くなりになった直後から法的には僕は既に皇帝になってしまっている。

「陛下は摂政であられた頃から、諸外国でも知らぬ者の無い方ですし、そのお名前はミズホやその周辺の東洋の国々、更には新大陸の国々にまで轟いており、御即位を寿ぎたいと願う者の使いが引きも切らないのです」

「ああ、まあ、祭り気分で戦争をやる気分が吹っ飛び、経済が活性

化し、他国との外交が順調に運ぶなら、これも必要経費、必要な手間って事で、あきらめるよ」

「陛下……」

イヴァルは僕の白けた気分に共感できないらしい。

「トリア大司教に冠を被せられるなんて……気に入らんな。大昔みたいに自分で被るか」

神聖教会の教えが導入される以前は、そうした形式であったはずだ。

「開祖様のなさったようにですか……」

イヴァルは戴冠式の式次第について、緊急に御前会議を開かせて欲しいと言った。

「大司教ごときが陛下に冠を被せるなど、確かに不快です」

「開祖様以来の不老不死の特別なお方ですから、開祖様の先例を踏襲なされば宜しいかと」

イヴァルはつい先ごろ即位した神聖教会のニコロ・ネスタ大聖からの親書を披露した。内容は僕が贈ったアイリュ産巨大エメラルド・ミズホ産超大粒真珠十個その他の贈り物に対する礼と、僕の即位式に冠を授ける役は自分がやりたいと言う事だった。僕はネスタの戴冠式には型どおりに大使を遣わしただけだ。

「ニコロ・ネスタは若いですなあ。やり手のようですし、長く教会の頂点に居座る可能性は高いと思われますから、余りすげない返事をするのも……いかがなものでしょう。申し出を受けても宜しいのでは？」

御前会議のメンバーの大半は、そうした意見らしい。

「僕は、嫌だな。別に教会のおかげでこの国が有るわけでも、僕が帝位につくわけでもない。そうだ、御前会議の中から一人、帝国研究院から一人誰か選び出して、二人がかりで冠を被せるとか。どうだ？　あるいは一般国民の希望者からくじ引きで二名選んで被せてもらうってのは？」

僕としては良い考えだと思うのだが、御前会議の皆は同意しなかった。ニコロ・ネスタの申し出を断るなら、開祖のやったようにするべきだと言うのが大勢だった。

「大聖の申し出は断るには魅力的でありすぎますけどなあ」

イヴァルはニコロ・ネスタの申し出を断るのは、やはり気が進まないようだ。

「僕がその申し出を引き受けたら諸国の戴冠式の典礼に影響が出るだろう。折角落ち目の教会の権威をわざわざ引き上げるのに協力する気は無いね。僕自身は全然教会に礼拝などに行かないし、新大陸やミズホの事を考えると、教会が悪魔とか異端とか呼ぶ存在とも良好な関係を保つ必要が有る。昨今の帝国の繁盛は、こうした教会とは無縁な国々との関わりによる部分が大きいし、これからそうした国々との付き合いはより一層大きくなると僕は考えている」

すると、反教会的な気分の強い長老たちから、こんな意見が出た。

「なるほど。ヤタガラス殿やモナ様は、確かに教会の教義になじまない方々ですなあ」

「新大陸の国々の者たちは、陛下御自身こそが真の神の代理人であると見ているそうですからな」

「宰相が魅力的だと言う意味合いはわかりますが、陛下は教会の力が及ばない場所においても大きなお力をお持ちなのですから、宗教色は排除した方が長い目でみて賢いのかもしれません」

教会派とみられていた連中も身内に帝国研究院や新大陸での活動に関わるようになった者が居り、更にはニコロ・ネスタ新大聖は帝国の出身では無いので「親書による申し出などどうでも良い」と言う白けた感じが漂っていた。

「そういう事だよ、イヴァル。開祖様にならって、僕が自分で冠を被ろう」

儀式は煩雑だったが、即位式にあわせてミズホの亮仁と碧子が、それぞれの配偶者と共に里帰りして参加したのは、うれしかった。ユリエもセルマも当日は顔を出してくれたし、息子・ヤチャイを産んだチャスカは側妃に準ずる扱いで出席できた。二人目の嫡出子となるネストルを無事出産したアンニカは、僕の戴冠式にあわせて正式に立后した。

アイリュとテツココもそれぞれ祝いの使節を送ってきた。モタ隊長はグスタフ港から、手紙と貴重な植物の押し花類五千点余りを送ってきた。現在は学校の設立のために頑張っているらしい。

テツココの正使は王族だったが、副使はイシュカレだった。アイリュも正使は皇族だったが副使は顔なじみのトルチャだった。僕は特に時間を設けて、遠来の賓客を自分でもてなした。両国とも我がテオレル帝国との関係を強調して、ミッケリや神聖教会の影響が強い諸国の人間の横暴を押さえているようだ。

「テツココのグスタフ港と、アイリュのフレゼリク港は共に、大変

活気が有ります」

幾度も帝国と故郷との行き来を重ねたヤガー君が言えば、ミズホ・新大陸・帝国のスムーズな通商関係のために働いている正三郎も「どちらの港も国際貿易港としての機能が整ってきましたので、将来が楽しみです」と報告した。

ミズホ式の美麗な行列と衣装も話題になったようだが、金と翡翠・エメラルド・アメジストでズッシリ重そうな装身具を纏ったテツココとアイリュの使節たちの装束も大いに話題になった。テツココが献上した巨大な黄金製の円盤型カレンダーとアイリュが献上した黄金で飾り立てた真っ白い十頭のリャマは、トリアの人々を驚かせた。おかげでニコロ・ネスタ猊下の『御訪問』が霞んだほどだ。

「あれが『氷の美貌』ですが、兄上を見慣れてしまっている所為か、特に何とも思いません」

異母弟コリング伯爵マウリがわざわざそんな事を言いに来たのは、自分は一般に言われているほど教会寄りでもミッケリ寄りでも無いと言いたかったからのようだ。亡くなった母親・グラーン侯爵夫人の影に隠れて地味な印象だったが、父上も僕の母上も亡くなってしまった今、これまでとは色々と違ってくるかも知れない。

ニコロ・ネスタとは本人の希望で、僕と二人きりの面談の時間を持った。そばで見ると小柄な男だった。大柄だった先のネス大聖とは対照的だ。見た目以外も色々と違うようだが、とりあえず僕とは正面切って対立する気は無いのだろう。

「モタ修道士の新しき地における様々の活動は、皇帝陛下のお導きが無ければ到底なしえなかったと聞いております。あまたの人に知

恵の光・文明の恩恵を施すことは、真の神のおぼしめしに適う聖なる責務でしょう」

「これまで異端とされて来た者も、お認めになると言う訳で？」

「神が存在を許しておいでの物を、狭き見方・浅き知恵で異端として何でも排除するのは止めた方が良いのではないかと個人的には、考えております」

僕よりも八歳だか年下の少年めいた美貌ながら、目つきは鋭い。

「個人的に……ですか」

「まあ、立場として公的には言及しがたい事情もございますので、御賢察のほどをお願いいたします」

それにしても、僕が贈ったウズラの卵より大きいエメラルドと親指の頭ほどの大粒真珠を全部ひとまとめに首飾りにして、懸けてきているのは、どう解釈したらよいのだろう？

「お贈りした宝石類はお気に召しましたか」

「はい。実に魅力的なのですぐにこのように細工させ、いつも首からかけております」

もっと欲しい、そういう催促らしい。貴金属宝石類が大好きとは聞いていたが、財宝として欲しいと言うより、美しいから心地良いと言った意味合いらしい。巨大な黄金のカレンダーが気に入ったらしいが、あれは僕のための言葉が刻まれているので、このチビ猊下にやるわけにも行かない。

「不思議な黄金の笏を手に入れられたと言う噂が耳に入りましたが、どの様な品なのですか？」

僕は目の前で指輪からノーマルサイズに戻して見せた。もっとも、そんな風にサイズと形状を瞬間的に変えたなんて思いもよらなかった様だが。

「その笏が認めた人間以外が触れると、激痛が走るのです。見た目はなかなかに綺麗なものですけどね」

「本当に……見事なものですね。何と大きなダイヤ、美しい……ギャッ！」

僕は思わず抱きかかえた。
「大丈夫ですか？」
「……ああ、驚きました。いきなり激しい痛みと……」
「痛みと？」
「ああ、いえ、宜しいのです……」

僕は手近な長椅子に腰掛けさせた。すると僕に体重を預けてしな垂れかかっている。しかも妙にハアハアしやがって。おいおい。まじかよ。ぴったりくっついちゃって。僕を……同性愛の世界に引きずり込めると踏んだようだが、とんでもない話だ。どうやら、彼はその方面では幾多の実績を上げた経験が有りそうだった。物騒極まりない。

「誰か、医者をお呼びするように。猊下はお疲れの御様子だから、宿舎に早く御案内してお休みいただけ」

小さな舌打ちは聞かなかった事にした。兎も角も僕は『朴念仁』のふりを通すことにする。ヨハンに以前、僕はニコロ・ネスタの好みのタイプだと聞かされていたから、用心もしていたのだ。

後日、ヨハンと酒を飲んでニコロ・ネスタの話をすると、思いがけない事を言われた。
「兄上の贈ったエメラルドと真珠の『宝石言葉』を勝手に深読みされたのかも知れないですね」
「宝石言葉？　花言葉のようなものか」
「ええ。たとえばエメラルドには『新たな始まり』、真珠には『愛』などと言う具合に言葉が割り当てられているようです。新たな愛が始まるとかなんとか、ニコロが敢て曲解したとか、有り得そうですがね」
ヨハンの見解では『お贈りした宝石類はお気に召しましたか』な

んて僕の言葉は、微妙なゴーサインと受け止められた可能性もあると言うのだ。
「いやあ、考え物だな、男に宝石を贈るのは」
「まあ、ニコロの気持も分からんでもないですが」
「分かるのか？」
「胸糞悪いオヤジは嫌だけど、兄上ならって、僕も思った事も無きにしも非ずですよ。あ、そんな気味悪そうな顔して見ないで下さいよ。何気に傷つくなあ」
「ちゃんとした嫁だっているじゃないか」
「男女どちらでも、と言う人種は居るんですよ確かに。僕もそうかな。ネスのおかげですがね」
「おいおい、何か、男の愛人とか恋人とかいる……ってわけじゃないよナ？」
「僕が魅力を感じる人は、皆、その気のまるで無い人ばっかりですからね。そんな話すると気味悪がられますから、出来ませんよ」
「ふうむ……」
「まあ、大聖の顔はつぶさないように気を配ってお帰りいただいたんですから、良いでしょう。愛人と言えばですね……」
「どうした」
「ラウル・ヤイレですが……どうも、よそに子供が出来たみたいですよ」
「ルイサは気が付いているのか？」
「知らないみたいです。どうしたもんでしょうね。夫婦の問題ですが、でも、兄上の御身内ですから、お知らせはしておくべきかと思いまして」

話を聞いて、早速ラウル・ヤイレが子供を儲けた女性について調べさせた。そして、ラウル・ヤイレ本人を呼んで事情を聞く。
「娘が生まれたようだな」
「はい」

「ルイサには知らせるのか、内緒にするのか」
「知らせるつもりは、有りません。娘を引き取ることは無いでしょうし。それなりの情は有って付き合った相手ですが……済まない事になったと思っています」

ラウル・ヤイレから見れば母方の従姉妹にあたるらしい。ユリエとナタリエは師匠の正妻の子だが、ミズホの方にいた愛人と言うか妾というかが生んだ妹が居たらしい。ラウル・ヤイレの相手シズエは、その娘なのだ。
「ユリエの姪だな。相談したか、ユリエに」
「まだです……でも、祖父が面倒を見てくれましたから、事情は伝わっているかも知れません」
「ふううむ。家康師匠にしてみれば、そのシズエと言う女性もお前も孫なのだな」

家康師匠の所で僕も密かに参加して話し合い、シズエは生まれたタマエという娘を連れてミズホにいるユリエの下に身を寄せることになった。シズエはやはりどことなく、若いころのユリエに似ているし、若いが未亡人なのだそうだ。僕は色々身に覚えが有りすぎて、とてもじゃないがラウル・ヤイレを責められなかった。

だが、そのタマエと僕自身のかかわりについては、全くこの時は考えもしなかった。

僕の即位・2

僕は即位する当事者だから忙しいのは当然として、ワッデンのサスキア王女との結婚の支度をはじめていたフレゼリク・レオポルドも大忙しだった。父上がお亡くなりになったが、結婚式は当初の予定がちょうど喪が明けてすぐの時期にあたるので、特に変更も無く粛々と準備は進んでいた。出来る限り前倒しで厄介な課題は手を付けたのだが、政治・外交での両国の擦り合わせはなかなかに厄介だった。

「国家規模でも歴史でも格式でも帝国の方が上だ、と言う居丈高な態度は取らないように。そんなことは内心あちらも認めているのだ。だが、今までワッデンはワッデンなりに独立を保ってきたのだから、その自尊心を傷つけないように最大限の配慮を必要とする」

僕が出来の良い官僚を集めて、こう厳命しただけに、迂闊な事をボロッと言って、誇り高いワッデン人たちを怒らせることは無かったようだが、それでも言わば超大国である帝国がその皇太子を送り込むのだから、ワッデンには警戒する人間も色々といるわけだ。

僕の即位式の翌日に行われた立太子の儀式には、当然ながらワッデン国王と未来の妻であるサスキア王女は身内扱いで列席してもらった。国王と世継の王女が同時に国を離れるのも稀な事なので、留守は帝国側からも兵を派遣してしっかり守らせる。その派兵要請自体、国王キルデリク十二世本人から出ているのだが、キルデリクは、その事実がワッデンの保守派の貴族に知られるのを恐れていたようだった。

「その、どうも連中は帝国との十五年戦争のころの事を基準に考え

るようでして……陛下が御英明で不老不死でいらっしゃると噂される事も、連中にしてみれば警戒すべき材料になってしまうのです」

自分としては平和裏にワッデンが連合王国の形から帝国に吸収されても一向に構わないと思うが、とも付け加えた。まあ、そう簡単にはいかないと思うが……

「あなたがそうお考えでも、ワッデンの貴族たちは承知しないでしょうし、あの戦役での記憶が完全には薄れていない以上、一般民衆の反発も強いでしょう」

帝国側で『ワッデン戦役』と呼ぶ戦いは、ワッデン側では『十五年戦争』と呼ぶ。帝国側も相当な死者を出したが、十五年の長きにわたり国土が戦場となったワッデン側の状況はより深刻で悲惨であっただろう。

あの大宰相が最初に名を上げたのは両者が膠着状態にある中で、華々しく戦闘で勝利し、帝国に有利な条件で戦闘を集結させるきっかけをもたらしたからなのだ。

あの大宰相も『愚劣な長い闘い』と呼んだ戦争は、最初は漁民の縄張り争いから始まった。それから国境の河の水利権をめぐる繰り返されてきた争いが再び火を噴き、ワッデン人はいきなりの武装蜂起をして、帝国側のドランメン伯爵領になだれこんできたのだ。武装蜂起と言っても、手近な鎌やせいぜいが旧式の火縄銃に松明を持ってではあったが、かなりの人数がなだれこみ、ドランメン領の集落を襲った。すぐに伯爵の手勢がワッデン人を撃退し、半数以上を銃殺したのではあったが、それがさらに大きな戦いを引き起こしたのだ。

ワッデンは土地がやせている。そして頑固で馬鹿正直で少々気が

短い人間が多いようで、貧しいのは『帝国の奴らがずるい事をしているせい』と言った感じの漠然とした反感は、ずっと大昔から存在したようだ。

「ワッデンに新しい産業を興し、暮らしが豊かになれば、おのずと争いの種は減ると思うのですよ」

「御提案頂いた窯業は、本気で取り組む価値が有りそうです」

「陶石の大きな鉱脈が見つかりましたし、炭鉱はどうにか順調に運営できると聞いておりますが」

「ええ。黒い石のようなものが炭の代わりになるとは思いもよらなかったのですが、火力が強いのですね」

ワッデン国内でも殆ど木の生えない地域では、石炭を使ってはいたようだが、貧しい人々の生活の知恵程度の扱いだった。ワッデン産の石炭は質も悪くない。

帝国から技師を派遣して鉱山の安全対策にあたらせているが、少なくともキルデリク王自身はこちらの配慮を感謝してくれているようだ。

「真っ白い地に繊細な絵付けを施したミズホの磁器は、ワッデンでももてはやされておりますが、あれほどのものが出来るためには、時間もかかりましょうなあ」

キルデリク王は白い美しい磁器に強いあこがれが有るようだ。今はミズホの磁器を研究しても、同水準の製品は全く作り出せずにいるらしい。ミズホの磁器にはワッデン人が見た事も聞いた事も無い花や鳥、景色の絵柄が多い。真似てみてもうまくいかないのも当然かもしれない。だがそのうち、ワッデン人の職人が技術を修得すれば、また事情も変わりそうだと僕は思う。

「そのうちワッデンの人らしい意匠・デザインも出来てくるのでは

ないでしょうか？」

僕と面談する前に、キルデリク王とサスキア王女は希望により帝国研究院を訪れたが、王はその時あの二十世紀のアメリカ人・マーシャ・レスコとたまたま話をして、強い印象を受けたらしい。

「ワッデンは痩せ地でしかも麦を作るには不向きな寒冷地が多いですが、新大陸の作物の中に、非常に有望なものが有ると言う事を教えてくれました。貴族ではないそうですが……学識のある女性ですね」

「第一子の亮太が彼女に夢中でして……彼女は異世界の大学で農業に関する学問を修めた人なのです」

「異世界、ですか」

「ええ。私が前世に生きていた世界です。マーシャの生まれた国は豊かな大国ですが、王も皇帝も貴族もいないのです。ですから平民でも、学問が有る者は多いのです」

「そうなのですか。あのように堂々と自分の意見を述べる女性は初めてでしたので……ですが、皇太子殿下の兄上がお付き合いなさっているのですね」

「別に亮太とは結婚の約束をしたわけじゃないですし、マーシャは自分の意志がはっきりした女性です。相手が王でも皇帝でも、正しいと思う事をまっすぐに言いますから、頭の固い貴族とは折り合いが悪いでしょうね」

「農業の事で、相談するぐらいはお許し頂けましょうか？」

「私が決める事では無いです。どうぞマーシャ本人にお尋ねください」

「それで……構いませんので？」

「マーシャの人生はマーシャ自身が決める、そういう国で生まれ育った人ですし、僕もそれが良いと思います」

フレゼリク・レオポルドは久しぶりに仲の良い亮仁に会って、ミズホの絵や陶磁器・漆器などを贈られたようだ。ワッデンでの技術指導が必要なら、誰か陶工を紹介しようとも言って貰えたらしい。

フレゼリク・レオポルドの結婚式は、せっかく遠方の身内も揃っている事でもあり、トリア大聖堂で簡素に行った。大体的な披露宴はワッデンに移ってから行う事になっている。それでもサスキアの純白のドレス姿にキルデリク王は目を潤ませていた。

「まだ、サスキアに……私が実父なのだと打ち明けられずにおります」

「それは、他の者には秘密のままでよろしいかと思いますが、王女にははっきりおっしゃるべきでしょう」

サスキアを産んだ先王の正妃は、亡くなって久しい。事実を僕が知っているのに、本人が知らないのはやはりおかしいだろう。

「妃をお迎えになるおつもりは、ないのでしょうか？」

「はあ、寂しくないと言えば嘘になりますが、子供のころ継母に受けた仕打ちを考えますと……ためらうのです。サスキアが酷い目にあわされるのは嫌ですから」

妃ではないが、身の回りの世話をする女官は二、三人居ると言う。庶子はコルネリアだけだそうだ。

「早く、サスキアが跡取りを産んでくれれば、それが一番です」

サスキアとフレゼリク・レオポルドは十日間を黄金宮で過ごし、キルデリク王についてワッデンに向かった。総勢千人を越える美々しい大行列は、通過する村々で歓呼の声で迎えられ、ワッデン領内に入るころには大変な騒ぎになったらしい。

その一月後、マーシャ・レスコはワッデンに農業指導に行く決心

を固めたようだった。マーシャのジャガイモ研究は、確かになかなかの優れものだった。どうやら幾度もキルデリク王と手紙のやり取りをしたらしい。亮太はあたふたしていた。

「結局、亮太はマーシャとどういう関係になりたいのだ?」
「友人で構わないと思っていましたが、やっぱり妻になってほしいです」
「その気持をマーシャに伝えたか?」
「……それが……」
「どうした」
「一度、その、夜を共に過ごしましたが、マーシャは翌日、丸で何も無かったかのように平静で……しかも、初めてでは無かったようですし……」
「初めでは無かったから、付き合うのを止めるのか」
「いえ、そんな風には思いませんが、でも、男女の事など……軽く考えているのかも知れません」

僕はともかくはっきり口に出して、結婚したいならプロポーズしろと伝えた。

それ以降は弾みがついたようで、ワッデンに向かうマーシャに亮太は同行する決意をしたようだった。

「なら、結婚した方が話が早いのかしら」

マーシャはあっさりしたもので、結婚も白いドレスを着て役所に届けたらおしまい、だった。

さすがにあんまりだと亮太の姉妹にあたるルイサと叔母にあたるナタリエが中心になって、帝国研究院のメンバーらが集う気楽なパーティーを開いた。気の張らない披露宴という訳だろう。

「私のお婆さんはアイルランドのど田舎の出身だったらしいのです

が、ワッデンと言う国は、昔のアイルランドみたいなところのようで、親近感がわきました」
「じゃあ、ジャガイモも大いに威力を発揮するでしょうかね」
「そうだと良いんですけれど。トウモロコシや、キヌアなんかも導入してみます」
「ワッデン行きは、長くなるかな？」
「そうですねえ。でも、そのうち帝国に戻るでしょう。やっぱり一番情報が集まるようですから」
「そのうち、この世界のカリフォルニアに行ってみますか？」
「ああ……行ってみたいです」
「貴女のお帰りを待っていますよ。帝国でもいろいろと手腕を発揮できる場所は有りますから。そうだなグレープ・フルーツとアボカドの導入なんか、頑張って欲しいかも」

僕はイーグルスの『ホテルカリフォルニア』をリュートをかき鳴らして、歌った。無論英語で。

「まあ、なんだか幻想的で素敵な歌ですね」

マーシャはイーグルスのデビューの前に向こうの世界からルンドにワープしたのだから、この名曲も知らない訳だ。

「グラミー賞を取った、世界的な大ヒット曲ですよ。歌ったのは１９７０年に結成されたイーグルスと言うロスで結成されたグループです」
「あーあ、陛下が御存知で私も歌えるヒット曲って無いのかしら」
「僕はそのころのアメリカのロックとかポップスは疎くて、プレスリーの『ラブミーテンダー』ぐらいかな」
「あ、そうだ。ビートルズは？　日本でも大人気だったって聞いた記憶が有ります」

「そうだなあ、初期のものだと……デビュー曲かな？　『ラヴ・ミー・ドゥ』ぐらいしか分かんないです」
「じゃあー、二曲続けて行っちゃいましょー」
マーシャはアルコールが入ると少々にぎやかになるようだ。

「あー、待って、亮太を呼びましょう」

僕は意味が分からなくても覚えろと言って、亮太にちょっと強引に『ラブミーテンダー』と『ラヴ・ミー・ドゥ』を口移しで覚えさせた。そして凡その意味を伝えた。

「マーシャの世界というか、僕が井沢亮太として生きていた世界で極めて名高い恋の歌だ。しっかり覚えろよ」
僕が背中を叩くと、亮太は必死になって覚えた。

「まあ、凄い、リョウタ、カッコいいわ！」

ほろ酔い加減のマーシャに褒められて、亮太はまんざらでもなさそうだった。

僕の即位・2（後書き）

暑さでグルグルした変な文を書いたようです。誤字脱字の御指摘、お待ちしています

僕の即位・3

「本当は女侯爵にしたかったんだけどねえ……そのうちどうにかする」
「今のままで十分です」

チャスカが本気でそう言っているのは、僕には分かっている。一応伯爵としての位と爵位はユリエと同格だが、ヤタガラスとかモナみたいな存在以外、人間ではちゃんとした後ろ盾と言える存在が宮中にいないのだから、色々心配と言えば心配だ。

即位後、なし崩しというか、きっかけを失った感じでセルマとはすっかりご無沙汰だ。女子修道院に籠ってしまって、出てくるのは奉仕活動の時だけという感じ。

「ミゲルも一応陛下の御子ですから、よろしくお願いします」

そんな言葉が有ったきりだ。考えてみれば僕の息子なのに、母親であるセルマの後にべったりで……気が付けば同じ年のフレゼリク・レオポルドは結婚したと言うのに、何とも子供っぽい。まあ、平成の日本で言えば中学二年生と言うような年頃だから個人差は仕方がないが、体の鍛え方が不足している感じなのが何ともいただけない。今まで僕が手をかけなかったのがいけなかったのだろうが、数年の内に何とかしたいものだ。

「新しい大陸に行ってみたいものですが……」

線の細い見かけだが、案外男の子らしい事も考えているみたいで安心した。

「いくら何でも、もう少し体を鍛えなくてはな。それと、本当に新大陸に興味が有るならあちらの言葉も覚えなさい。近くテツココの

王族を預かって学問をして貰う事になると思うので、お前に世話役を頼もうと思うのだが、どうする？　いやならヨハンなりチャスカなりに頼むが」

「頑張ってやってみます。やらせてください。あのう……御相談には乗っていただけますよね、チャスカ様にも叔父上にも」

「ああ。そうだ、年のころが近いヤガー君が相談しやすいかな？」

「えっと、マウレ子爵ですか？」

僕が即位してすぐ、ヤガー君はマウレ子爵、正三郎はタルカ伯爵に任じた。領地は新大陸の僕自身の直轄領から分ける格好になっており、少なくとも貴族社会で認知される身分には出来た。同時にイヴァルも侯爵にした。これで名実ともにかつての大宰相に相当するポジションと言う訳だ。

「ああ。今は大きな仕事が済んだばかりで、ちょっと落ち着いている所だから、いろいろ教えてもらうと良いよ。あちらの歴史や様々な文字の読み方も、ヤガー君なら良く知っているから。後は正三郎の話も良く聞いておきなさい。もっともあれは、いま忙しくてお前の師匠役は無理だろうが」

爵位と称号を与えても、僕はヤガー君の呼び方をずっと変えていない。

「なぜ彼をお呼びになるときは『君』なのでしょう？」

そうイヴァルに聞かれたが、あまり意識していなかった。

「息子の年頃なのに、ずいぶんと物知りで考え深くて、年下の頼りになる友人と言う感じだったからだろうかな。一度は奴隷の身に落とされたなんていう経験もしていたのに、挙措動作に高貴で優雅な雰囲気が漂っているからかな。僕が面倒な相談事をしても、いつも大いに参考になる有益な助言をくれるしね。それに、彼は物質的な

欲望が薄い。それも彼の美徳だな」
「確かに彼は贈収賄に関しては、しっかり対処しているようです。モタ修道士の影響でしょうか？」
「そうだろう。僕は教会の坊主はあんまり信用しないが、モタ隊長だけは別だ」
「もうすぐテツココ大王の王女二名がおいでになりますが、世話役はいかがいたしましょうか？」
「言葉の問題も有るだろうからチャスカに任せれば良いだろうが、ヤガー君に助けてもらって……ミゲルにも仕事を割り振ろうと思う」
「ひょっとして、王女の内どちらかとの御縁組をお考えに？」
「亮太に……と思っていたんだが、奥さんにくっついてワッデンに行っちゃったからな」
「マーシャ殿は、ワッデン国王から叙爵されたようですなあ」
「亮太は、ヤキモキしてるかな？」
「ワッデン国王は『御友人』で、子爵は御夫君ですから……」
「亮太には難しい相手だろうが、惚れたんだから仕方ないよな」
「陛下、面白がっておられますか？」
「まあね」

イヴァルは僕の事を、ちょっとばかり悪趣味だと思っているみたいだ。

やってきた二人の王女は、真っ白い極上のアルパカの貫頭衣に真っ赤なビロードのマントを羽織っていた。ビロードは交易で王族たちが手に入れて、近頃盛んに使われるようになった素材の一つらしい。重たい金の装身具で動きにくそうだったが、黒い目は好奇心でキラキラ輝いている感じだった。

帝国の言葉でつっかえつっかえ挨拶を述べ、荘重な礼をして僕の言葉を待つ二人に、僕はテツココの言葉で語りかけた。

「ワルパの王女で僕の子を二人生んだチャスカが、君たちの世話をすることになる。テパネカのヤガーと皇子の一人であるミゲルも君たちのために力になるだろう」

レンカ王女とユカテコ王女は共に十歳だそうな。二人とも側室腹で、互いの生母は双子の姉妹だと言う。そのせいか、腹違いと言ってもまるで双子のように顔立ちが似ていた。チャスカがすっかり帝国の貴婦人らしく装い完璧な言葉を話すのを、素直にあこがれのまなざしを持って見つめている。

「ティクシ・イリャの御配慮、まことにありがとうございます」

二人の王女が同時にハモッてテツココの言葉で礼を言った。微妙にレンカ王女の方が背が低く声が高いようだ。そうは言ってもユカテコ王女だって、明らかに身長百四十センチかそこらだから、ちっちゃくて可愛いもんだが。

聞けば、二人の王女は自分から希望して帝国に遊学に来たものらしい。ヤガー君によると、最初テツココの大王は王子二人を選んで送ろうとしたが、海を越えるのを怖がる者ばかりで、希望したのはあの二人の王女だったのだと言う。

「王女は普通なら王宮からほとんど外には出られないですから、広い世の中を見てくる絶好の機会と受け止めたようです」

「海を怖がる王子たちと、やる気満々の王女二人か。テツココは王女に出来の良い婿を迎えた方が将来明るいかもしれないな。まあ、前例が無いらしいからそう言う訳には行かんのだろうが」

「王女たちが帝国の貴族なり皇族なりと結婚しますと、帝国の力はかの国に深く食い込む事になりますね」

「大王もそれぐらいは、最初から考えているだろう。いや、それを

望んでいるのかな」

「諸国の横暴をはねのけるには、英明なる陛下との御縁を深くしておくに限ると考えたに相違ありません。ミッケリにしろレイリア・ベルガエ・キンブリ・タルソス・リーメスと言った列強にしろ、帝国以外の君主や貴族たちはテツココの言葉はおろか、国の事情も歴史も何も存じません。完璧にテツココの言葉を使いこなされ、あまたの知恵と力をお持ちの陛下におすがりしたいと思うのは、当然の事でしょう」

こういう時のヤガー君は、イヴァル・ケニング並みに雄弁だ。

レイリア・ベルガエ・キンブリ・タルソス・リーメスはそれぞれが一応独自の歴史を持つ王国だが、五大王国などと言っても各王室の起源が帝国の皇族の分家であるし、それぞれの国土面積はワッデンよりかなり狭く、帝国の十分の一かそこらの面積しか無いような国々だ。せいぜいスコウホイ公爵領の半分といった所か。ただ五大王国は気候は穏やかで、中には国土の大半がキンブリやタルソスのように穀倉地帯と言う国も有る。

どの国も神聖教会の力が強い。通商ではミッケリとの結びつきが強く、五大王国の王侯貴族は大なり小なりミッケリの銀行家に資産を握られているのだ。

「まあ、僕が一番金回りも良いけどな」

「愚劣なものが富を握っても、馬鹿げた浪費に走るのが落ちでしょうが、陛下なら賢明に富を運用なさり、国の産業をお育てになるので、テツココにも資本を投下して産業を興して頂きたいという考えのようです」

「ヤガー君が、持ちかけたのかい？　何か有望な投資先でも見つけたか」

「正三郎殿からも御報告が有るでしょうが、埋蔵量の豊富な金山と銀山が見つかりました。他に銅山や亜鉛の鉱脈もございました」

「アイリュの新しく見つかった鉄鉱山と銀山も有るからなあ。どちらをどういった順番で開発するべきかなあ。鉱毒対策なども万全の体制を取らないと、後で大きな問題になるし。まずは専門家の意見を聞き、新たに調査隊を結成してテツココ側と協議の上、具体的な開発計画の素案を作る方向で話をまとめよう」

僕はチャスカに命じて、二人の王女にスコウホイ領内のネードの鉄鉱山を見学させた。鉱山も奴隷の労働などでは無く、正当に賃金を払い、安全対策を十分に施し、鉱毒対策も行って運営できると言う事を実感させておきたかったのだ。

チャスカの産んだ娘・キリャと息子のヤチャイは、皇后となったアンニカに預けさせた。アンニカの産んだネストルは、どうやらキリャとヤチャイが好きらしい。アンニカの穏やかで明るい性格は子供らにも良い影響を与えていると思う。子供ら三人とアンニカと僕は夕食を共にした。

子等を寝かしつけた後は、僕とアンニカだけの時間となるわけだ。今はチャスカは旅に出ているわけだが、そうはでない時は、おおむねベッドを共にする回数は二人平等にしている。ただし、朝食は圧倒的に皇后であるアンニカと食べる場合が多いのだが……

「チャスカ殿は幾つもの言葉を完璧にお話しになるのですね。私など、どの言葉も挨拶程度で精一杯ですのに……アイリュとテツココでは随分言葉も違うと聞きますが、私の耳にはその違いもさっぱり判りません」

「キリャと一緒に勉強するか？」

「ああ、キリャちゃまったらお小さいのに、色々な国の言葉でかなりおしゃべりが出来るんですのね。この前テツココの王女様たちとお庭で楽しそうにしゃべっていましたし、その後はミズホから来た庭師とも楽しそうに話していました。凄いんですもの……」

「チャスカとキリャは金の笏に選ばれた者だから、特別なのだ」
「もしかして、触れても大丈夫なのですか？」
「ああ。そうだよ。金の笏を授けられた神域まで一緒に行ったしね」
「ヤタガラス様も大聖猊下も……金の笏に触れると痛みで転げられたなどと聞きますが……」
「試しに、触る？　ひょっとしたら、大丈夫かもしれないよ」
「側にお持ちですの？」
「この指輪がね……ほら、こんな具合に」
「ええっ？　小さな指輪がこの笏に変じたのですか……なんて不思議な……まあ、大きなダイヤモンド」

やっぱり巨大なダイヤが気になるらしい。アンニカの手は震えていたが、指先でちょっと触れた。別に悲鳴は上がらなかったが……

「あら？　まあ、不思議」
「ん？　何か見えた？」
「モナ様が狼の姿で寝そべっていらして……野の花が咲き乱れた中でこの三人の子供らが走り回り、チャスカ殿と私が肩を並べて子らを見ている……そんな光景が見えました」
「ふーん。モナはアンニカもチャスカも気に入っているからな」
「私……チャスカ殿となら、仲良くなれそうです」
「そうか。それは結構だ」
「母親同士仲良くすると子供らが皆、幸せになる、そういうお告げのように思いました」
「アンニカが皇后で、本当に良かった」
「本当に、そう思って下さいます？」
「うん。三日に一回ぐらいはチャスカと朝食を取るかもしれないが、他は全部アンニカと一緒にするから、怒らないでいてくれるよね？」
「今まで、私、そのような事でおこった事など御座いませんのに……」

「ああ、ごめん。一応奥様にお許しを頂いておこうと思っただけだよ」
「今夜は……グスタフ様を独り占めさせていただきますけど」
「ふふふ」
「御存知のように……私は欲張りですから」
「というか、欲望に正直、と言うべきかな？」
「……そ、そうです」
「チョッと、恥ずかしいの？」
「でも、頑張りますわ」
「ほう、頑張っちゃうのか」

まだ、ベッドサイドに立ったところなのに、アンニカはいきなりギュッと抱きついてきて僕のキスを求めるしぐさをした。僕が少し屈んでやると、情熱的に舌を自分から絡めてくる。

深いキスを立ったままで交わしながら、ほのかに汗ばみ始めた寝間着の上から胸のふくらみを揉み、更に手を滑らせて太腿の付け根のくぼみをまさぐった。アンニカは切なげな呻きを洩らしながら、顔を左右に捻じって更に唇をきつく押しつけ、もっと舌を深く差し込んで来る。僕は熱い舌をきつく吸ってもっとアンニカを呻かせながらアンニカの右手を僕の股間に導いて熱し切った物を握らせた。アンニカは喘ぎながら、しっかり指をからめて丹念にしごき始める。ふさがれた喉の呻きが更に悩ましく熱っぽくなってくる。

キスを続けながら、僕はアンニカを完全に裸にし、僕自身の寝間着も脱ぎ捨てた。

ベッドに倒れ込んでからもキスを続け、もっとも柔らかい部分に指で刺激を与えてやる。するとアンニカは手の動きを止め、キスを振り払って僕にしがみつき貫かれながら、啜り泣き、腰をうねらせ始めた。僕の腰にアンニカの真っ白い足が激しく絡みつき自ら腰をグイグイ突き上げたかと思うと、力尽きたかのようにほぐれると言

う事を繰り返す。確かになかなかに積極的だ。

「……ああっ、もう、もう」

アンニカは身悶えして泣き出す。

「もう、どうしたいの？」

「お願いです」

「何をお願いするの？」

「分かって、いらっしゃるのにっ……い、いじわる」

「僕は意地悪だよ」

「ああん……ごめんなさい」

「なら、ちゃんとお願いしなさい」

アンニカは小さな声であったが、恥ずかしい『お願い』を口にした。

「よしよし、良い子だ。こうかな？　どう？」

口調は静かだが、僕は動きを早め、激しくする。

「ああッ……好きっ！　好きなのっ、グスタフ様ッ……」

わめきたてながら、アンニカは僕の首にかじりつき、下肢をしっかり絡めた。僕をよりきつくより深く体内に感じ取ろうとして本能的にそんな恰好を取ったのだろう。

「さあ、ちゃんと受け止めなさいよ」

悦びを究めた後の満足げな顔は、美味いものを腹いっぱい食った幼い子供のような無邪気さで、僕はしみじみアンニカが可愛いと思ったのだった。

僕の五十年・1

即位して五十年の間に、帝国の富は膨れ上がり海外の領地や保護国も増えた。子供らは皆結婚し、孫が生まれた。だが、時の流れは無慈悲なものだ。この五十年、僕の外見はずっと二十代前半の状態のままだ。

ユリエが僕の即位後三十年経って、トリアのレーゼイ邸で亡くなった。と言うのも、その前年にラウル・ヤイレと亮太が相次いで亡くなったのだ。共に五十歳は過ぎていたから、ルンドでは特別に短命と言う程でもなかったが、母親としては衝撃に耐えられなかった様だ。葬儀を済ませてからずっと寝込んでいて、そのまま亡くなったのだから。八十歳の誕生日の前日だった。

何というか、もう、本当に小さくなっていて……幼いころの記憶と重ねると、随分長い時間が過ぎたのだと改めて思い返されて、切なくなった。

セルマは女子修道院で亡くなって、僕は葬儀に出ただけ、と言う素っ気無い別れになってしまった。死後、娘のルイサから手渡された日記帳には、僕との思い出や僕に対する気持ちが切々とつづられていて、涙なしにはとてもじゃないが読めなかった。そのルイサはラウル・ヤイレと死に別れ、嫡子スヴェン・ヤイレとその家族と共に暮らしている。もう見た目はすっかりお婆ちゃんだ。

その先は……親しい人たちとの別れが続いた。クヌートは九十まで生きたが、妻や娘・息子の方が先に亡くなったので晩年は寂しかっただろうと思う。アンニカの弟は独身で病死したから、アンニカの産んだネストルがスコウホイ大公として後を継いだ。ネストルは祖父のクヌートを大切にしていたのが、せめてもの慰めだろうか。

アンニカは健康そのものと見えていたのに、落馬したのがもとで亡くなった。まだ、二十五歳だった。僕が帝国中を巡行するには馬に乗れた方が良い、と言ったのがきっかけで熱心に乗馬の訓練を始めていたのだったが……こんな事は全く考えていなかったので、ショックだった。

「アンニカの心に醜い波動が宿るようになって、護りきれなくなった」

モナにはそんな風に言われてしまった。それならそうと教えてくれていれば、もっと用心深く過ごさせたものを……無邪気で正直なアンニカの中に醜い波動を宿らせたのは、僕自身だろう。乗馬の稽古の最中、ふっと醜い波動に心を持って行かれたのが命を落とした直接的な原因だそうな。配慮不足をモナは詫びたが、僕はしばらくモナとも会話をしなかった。人間ならば誰にだって、嫉妬も独占欲も有って当たり前だ。なのにセルマは長い事修道院に籠り、アンニカは命まで落とした。

どっちの原因も僕なのに……こんな罰の当て方は間違っている。僕は神とやらを恨んでいた。

最初の皇后アネッテも二人目のアンニカも若くして亡くしたため、もう、皇后を迎える気になれなかった。

チャスカはアンニカの残したネストルの養育を懸命に行い、黄金宮の女官のまとめ役も務めてくれたが、五十代になって無理が祟ったらしく、ある日突然に亡くなっていた。心筋梗塞とか脳梗塞とか、そんなものだったのかも知れない。

イヴァルの死後はヨハン、ヨハンの死後はヤガー君が宰相を務めている。ヤガー君はチャスカの産んだキリャを嫁に迎えたが、今の所この夫婦は元気だ。ヤチャイは請われて僕の弟・ロルフ大公の婿となった。ミゲルはテツココのレンカ王女と結婚し、トリアで学んだアイリュのロカ皇子はテツココのユカテコ王女と結婚し、帰国し

て父の死後即位した。今も夫婦ともに健在のはずだ。ピニャ皇子の方は帝国貴族となり、かつてヤガー君が務めていたあちらの大陸とミズホと帝国の通商に関する仕事を主に行っている。妻は亮太とマーシャの娘・シャルロッテだ。

あのマーシャは亮太とワッデンで離婚し、亮太が娘のシャルロッテを連れて帝国に戻ったのだったが、亮太は死ぬまで再婚しなかった。マーシャの消息は離婚後、ある日忽然と途絶えたと言う。もしかして元の世界に戻ったのかも知れないと噂されたが、何も本当の事は分からなかった。ただはっきりしているのは、マーシャのおかげでワッデンの食糧事情は大いに向上し、もうここ二十年ほど餓死者は出ていないと言う事実だ。奇妙な事にマーシャ失踪の直後、キルデリク十二世が急死した。生前の亮太は、この二つの事件が関係が有ると信じていたようだった。

一方でフレゼリク・レオポルドはサスキア王女と五十歳で死に別れて以降もワッデンに残り、まだ若く経験不足の王である一人息子キルデリク十三世を補佐している。

正三郎は六十を過ぎたら、爵位を返上して家族ともどもミズホに戻った。だがもう彼も亡くなっている。彼は亡くなる前に、ラウル・ヤイレの庶子・タマエを黄金宮の奥向きに仕えるように手配した。ユリエもナタリエもチャスカも亡きあと、女官のまとめ役はタマエが務めた。タマエは僕の即位の年に生まれたから、今年もう五十歳だ。タマエはヨハンの息子のエリクとの間に娘を二人儲けたが、結婚はしなかった。その二人の娘は
三十一歳と三十二歳で、幼いころからずっと僕に仕えている。

「はあ、何だよ。爺さんの話では即位後すぐにも話が出来るって聞かされていたのにさ、嘘ばっかり」

僕はアネッテとアンニカの墓参りの後、一人で空を見上げて毒づ

いた。
「二人の墓の後ろ側に回り込んでみろ。あの石があるぞい」
いきなり五十何年ぶりの爺さんの声が聞こえた。だが、供の近衛兵達には聞こえないらしい。

確かに……二人の皇后の墓の真後ろで、死角になりやすい所に、台座とあの巨大なダイヤを思わせる石が何とあった。爺さんもそこに立っているのだが、他の者には見えないようだ。僕は近衛兵を下がらせた。

「なあ、アンニカはあんまりじゃないか、あんな死に方」
「たまには、想定外と言う事も有るんじゃよ」
「マーシャはどうなっちゃったんだ？」
「二十一世紀の日本に生まれ変わった。亮太も一緒じゃ。キルデリク十二世も後を追ったぞ」
「三角関係なのか」
「マーシャと亮太は双子の姉と弟、キルデリクは一歳年下の弟じゃよ」
「それじゃあ、結婚なんて無いんだな」
「ともかくも、その石に触るんじゃ」
「僕はもう八十四歳だよ。あっちの世界の美保が生きているとも思えない」

鼻歌が聞こえる。イーグルスの『ホテルカリフォルニア』？

「美保ちゃんもこの曲、好き？　あなた、いずれはあの人の所に行っちゃう定めらしいけれど、お願いだから、あんまり早くいかないでね。頼むわ」
「七五三ぐらい、いいや、できれば成人式」
「二十歳過ぎでの結婚はあの世界では、遅いじゃないか」

畳の部屋に女ひとりに二人の男が気楽な格好で座っている。年のころは三人とも二十代の終わりか三十代に見える。三人は小さな布団の上の赤ん坊を見つめて会話しているのだ。

「それにしたって、精子バンクの精子を使うって、ドライすぎるな」

少し声が高い男が亮太の生まれ変わりらしい。

「だって、大事な弟たちとずっと一緒に暮らしたいけれど、女の子を一人、あの人の為に産んであげたいじゃない？　だから一番高価な精子を使ったの。皇后は優秀な方が良いものね」

「美保って名前は、あの人の前世の恋人の名前だよね。何だか複雑だな」

背の高い方の男がキルデリクの生まれ変わりらしい。

「三人とも結婚しないで、死ぬまで家族として暮らしたい。せっかくこうして姉弟に生まれたんだし。二人ともそう思うんでしょ？」

男二人は頷いた。

「父親役の男が二人いるから、シングルマザーでも、美保は大丈夫だって安心感が有るわ」

そこで映像が途切れた。僕のかつて暮らしていた街とも家族とも違う。二十一世紀の日本とは言うが、僕のいた世界とは違うのかもしれない。

「爺さん、あの三人はしっかり前世の記憶が有るみたいだが、赤ん坊……美保はどうなんだ？」

「前世など覚えていたいと強く願わぬ限り、大抵は薄れるもんじゃよ。美保がどうなるかは、まだきまっておらんが」

「僕次第って、言いたいんだな？」

この日の夜、僕はしょげて元気が無かったみたいだ。仕えている

マサエとトシエがひどく心配した。そこで僕が今日見た情景について語ると……

「ならば、きっと百歳にお成りの時に、その美保様がこの世界においでになるお支度が整うのですわ。御年三十四歳で御即位遊ばして、今年は五十年目の式典ですから……」

マサエがそんなことを言う。

「八十四歳なんだ。体だけ変に若いが。心は爺さんだから、昔が懐かしいし、時々寂しくてたまらなくなる」

「でしたら、百歳にお成り遊ばすまで後、十六年ですか。マサエも私もどうにかその日まで無事にお仕えして、後は美保様にお任せできるように準備いたしませんといけませんね」

マサエとトシエは殆ど黒に見える濃い茶褐色の髪と目をしており、記憶の中の優しいユリエとよく似た雰囲気を漂わせている。ずっと、結婚もしないで僕に仕えてくれている。おかげで今の僕は心身ともに落ち着いている。二人は一年違いでそれぞれ息子を一人づつ生んだ。ユキヒコ・ヤスヒコと名付けた二人の息子は、ヤガー君の所に預けてある。ヤガー君に言わせると「賢い」そうだが、まだまだ先は長いだろう。

「まあ、ずいぶんと凝っていらっしゃる」

「解してさしあげなくては」

姉妹二人がかりのマッサージはひどく心地良い。すべてが終わると自然と眠くなってくる。

「それでは、私どもはこれで」

「待って」

「御一緒が宜しゅうございますか?」

「うん。頼むよ」

僕がねだると、二人は左右から寄り添い、川の地になって一緒に眠る。ただひたすら人肌が恋しい気分だけだったので、後はぐっすりだった。

正直な話、もう結婚はコリゴリという気分だったのだが、レイリアの女王から一つ風変りな申し出が有って、それをどう処理するかでここ数日御前会議は紛糾していた。

大宰相のヤガー君、今じゃキリャの夫でれっきとした皇室の一員で侯爵だが、ヤガー君は申し出を受けろと言うのだ。

「レイリア王国は先王の馬鹿げた浪費癖により、ミッケリの幾つかの銀行から相当な借財を負っておりまして、いまだに全く返済のめどが立ちません。ですが陛下ならお手元金だけでこれらの借財を綺麗になさる財力をお持ちです。レイリアは小国ですが、航海術に優れた者を輩出しております。トリアの商船学校の教官に迎えた者の中でレイリア出身者は全体の三割を超しております。何より、非常に潮目に恵まれた漁場や、港を幾つか暗黒大陸の陸伝いに抱えておりますのと、未知の南方大陸の探検者が幾人かおりますのが魅力です」

「そういう条件が魅力的なのは、僕もわかる。だけど結婚するのは僕だ。正直その女王様がどんな人か全然知らないからさ、場合によっては資金提供だけ、って言うのはダメか？」

すると外交官としてレイリアに滞在していた経験の有る者達がこんな話を始める。

「先代のレイリア国王はひどく器量好みでして、愛人・妾は美女揃いでした。常時十名以上いたこうした女たちに好きなだけ贅沢させ

たのが、国が傾いた原因です」
「多くの女と付き合いましたのに、無事に成人した子供はわずかに娘五人でした。粗製乱造と言う奴でしょうな」
「さようさよう。一番まともで賢い娘が、今の女王です。しかも生母は正妃です。他の娘たちは、王族と名乗るのもおこがましいような者たちばかりと聞き及びます。器量は十人並みと言う所でしょうか」
「不出来な娘たちはミッケリ辺りで、派手に遊び、また借財を増やしているようです」
「なぜ、このトリアでは遊ばないのかねえ？」
遊ぶにしても、買い物にしても、トリアの方がバラエティー豊かじゃないかと思うが……
「帝国では誰も、破産しかけの小国の王女など敬意を払いませんからな。それに資金の調達も出来にくいのでしょう」
「ミッケリですと、帝国では禁じられている様々な事が、金さえ出せば可能らしいです」
「さようさよう、危険な薬物も人身売買も全く野放しですからな」

馬鹿な妹だが姉だかが、皆ろくでもない事をやって、女王は困っているのだろう。
御前会議の真っ最中にレイリアの女王からの親書が届いた。それだけ、あちらは必死と言う事か。早速その親書は皆の前で音読された。

「偉大なるテオレル帝国第百十一代皇帝グスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲラン陛下、レイリア女王ガブリエル・デ・エストレラの心からの敬意と御挨拶を御受け下さい」

そんな書き出しで始まる親書の内容は、概ね御前会議で出たものだった。遠回しな言い方だったが、先王の失策と浪費で国家財政が

破たん状態である事、このままではめぼしい港、鉱山、農地などはミッケリの銀行家に差し押さえられてしまう事、ここ数年国内は凶作続きで、民の怨嗟の声を聞きながら有効な手が打てずに居る事、などを述べていた。

更に女の自分から結婚の話を持ちかける厚かましさを詫びながらも、はっきりこう述べている。

「……どうぞ我が夫君として、我がレイリアの民に慈悲を賜りますように」

僕の即位四十周年記念のパーティーにそう言えばまだ、十歳の王女だったガブリエルは居たはずだが……特段の印象は残っていない。聞けば国内の貴族や外国の君主からの求婚は、これまではすべて断ってきたと言う。どの派閥からも距離を置くと言う姿勢の表れだろう。

「会うだけ、会うか。借金の肩代わりだけになるか、結婚になるかは分からんが」

会って見なくては、その女王の本音も何もわかりはしないのだから。

僕の五十年・1（後書き）

国号を間違えてました！　訂正しました

僕の五十年・2

僕は先ず、レイリアの国内情勢と資産の状況を調べさせた。

「何といいますか、いちいち勿体ない状況です。従来痩せ地と見られていた平原部も、調べてみれば肥えた土地なので、灌漑さえできれば麦の収量は現在の二倍は堅いかと。温暖な気候ですから裏作も可能です」

調査チームの農業の専門家が言えば、漁業の専門家も言う。

「豊富な種類の魚が居りますのに、レイリアの料理が単調な所為か、国民が食べるのはわずかに十種類程度のようです。食品加工の技術も稚拙で、せっかくの素材の良さを生かせておりません」

「銀鉱山は豊富な鉱脈が有りますが、現在は無秩序な狸掘り状態でして、構造自体危険な上に、些細な罪でとらえた民に強制労働をさせると言う具合で、能率も悪いです」

ミッケリでの調査にあたった者たちは、負債を帝国の皇帝が金銀で払ってくれるなら大歓迎だとどの銀行も返答したと報告した。鉱山や農地を運営するノウハウが十分に無いし、リスクの大きい新たな資本投下もしたくないと言う事らしい。

「ふうむ。良いものを持っているのに生かし切れていない、残念な国なのだな」

僕の呟きに対して、ヤガー君が更に追加した。

「後の問題としましては、識字率が低く、法令や規律の遵守は余り期待できそうにありません。のんびりした国柄のようでして、とりあえず食べて寝られるなら、あくせく働かず、夜は酒を飲んで歌でも歌う、そういう国民性らしいです。後は熱しやすく冷めやすいと言いましょうか、気が乗るとそれなりに働きますが、気が向かないとサッパリのようです」

「ほお。労働のためのノリの良い歌なんてあると、能率が上がりそうだな」
「そうした歌の効用は、考えてもみませんでした」

肝心な、少なくとも僕個人としては一番肝心なレイリア女王ガブリエル・デ・エストレラとのお見合いというか、会見と言うかデートというかをしなくてはならないのだが、僕は夏の休暇を兼ねて帝国とレイリアの国境地帯の小さな城で一月ほど過ごすことにした。二千メートル級の山が連なり、からっとした涼しい気候で夏は過ごしやすい。ここを起点に、僕についてきた連中はレイリアでも最貧の地域とされる山間部の状況を、細かく調査する。気候・土壌などの条件はほぼ同じなのに帝国側の集落は食糧供給も安定し、義務教育も軌道に乗り初め、建物も冬の寒さに耐えられるものとなっているが、レイリア側は飢餓状態のものも少なくないようだ。僕らは医療奉仕と炊き出しを行う。もともと無理やり作っている麦以外の作物の栽培方も知らないので、麦がダメだと、全滅なのだ。後は薬草を掘って、売る程度だろうか。

これに対し帝国側はトウモロコシやジャガイモ、豆類、ソバ、ベリー類、キノコなどもうまく取り入れ、ガチョウやウズラ・アヒル・ニワトリなどの家禽類や羊・ヤギも飼育され、食物加工品なども味付けの良さで評判を取っている村が幾つも有るのだ。普段は厳しく国境地帯を封鎖しているが、僕の滞在期間はそれを緩めた。レイリア側の薬草売りが帝国側まで下りてきて、売った金で帝国で品物を買い、またレイリアで帝国の品物を売りさばくと言う一種の担ぎ屋が、この所かなり活発に行き来している。

「滞在中の一か月の内で御都合のよろしい時に、おいでください」

そうレイリア側には声をかけておいたが、実際に女王が来たのは

月も半ばを過ぎてからだった。後から笑い話になったのだが、そもそも女王がどう言う装束で出かけるかで紛糾し、意見がまとまらなかったらしい。

女王は艶の良い黒い馬に乗っていた。達者な手綱さばきで傾斜地を登る様子は、城から双眼鏡越しに見ていて、なかなかの見ものだった。

「思ったより、美人じゃないか。笑うと可愛いし」

そんなのんきな話をしていた所、急に女王の一行が投石を受け、鎌や手槍を持ち怒号を上げる地元民たちに襲激されている。僕は大急ぎでヘルメットと軽めのプロテクターを纏い、近衛を引き連れ山を駆け下りた。城からは大砲をぶっ放させた。空砲だが。音の威力も有ってか、暴徒たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「お助けいただき、ありがとうございます。陛下が休暇にふさわしい、肩の凝らない物をお召しのようだと知りまして、そのようにしてまいりました」

僕の顔を見てニッコリ気丈にそんなことを言ったのは良いが、急にグラッと重心を崩したと思うと気を失ったので、僕が抱き抱えて馬に乗せ、城に戻った。医者に見せると額に小さなかすり傷を負った程度で夕食まで休めば大丈夫らしい。

しかし女王は、夕食をあまり食べる気になれないようだった。それでも最後のデザートに出したココアムースは気に入ったらしい。心なしが口元が嬉しそうにほころんだので、もてなす側としてはホッとした。

「民の心が離れているとは思いましたが……ここまで酷いとは……」

「僕も、もっと気を配るべきでしたね。申し訳ない事になりました」
「自国領内の民に嫌われているのですもの。陛下の所為ではありませんわ」
「だが、貴女の所為と言う訳でも無い。こう言っては何だが、亡くなられた父君がいけないのだ。娘さんにこれほどの重荷を残して行かれて……」

涙ぐむ女王は何というか、非常に庇護欲をそそった。だが、僕は、僕を刺すようなまなざしで見つめる一人の青年に気が付くと、自分がすべて引き受ける必要もないのではないかとも思う。僕は言葉を帝国の公用語からレイリア語に切り替えた。文章は大して違いないのだが、個々の単語の発音が相当に違う。

「僕としては、どちらでも構いません。借金の帳消しと財政の立て直しに御協力するだけでも……貴女のお申し入れの通りでも」
「勝手な事ばかり申しまして、まことに恐縮です」
「僕の見た目は年齢不詳でしょうが、本来なら八十をとうに越えたジジイです。若い貴女には、やはりお若い配偶者の方がふさわしいのかも知れない。例えば、そこの彼のようなね」

女王はハッとした顔つきになった。

「この者は、幼いころから私の警護にあたっている騎士です。フェデリコ、陛下に御挨拶は？」
「初めて御意を得ます。フェデリコ・デ・ピリスと申します」
「フェデリコ君の感情的な問題は、どうなのです？　貴女としては考慮する必要性がお有りなのでは？」
「いえ、一切そのような事はございません。この者は私の臣下ですから」

フェデリコ君には不本意な言葉であったらしい。

「ならば……女王の地位をお捨てになり、人としての幸福を手に入れられる、そうした選択肢をお考えになった事は有りませんか？貴女のお気楽な姉君や妹君は、貴女にばかり責任を押し付けておいでなのだから、貴女一人が重荷を背負いこまれる必要も無いでしょう。国家の経営と言う点で行けば、借財をきれいにした後、帝国に編入すると言う方法も無くは無いのですよ。ただ、これは一歩間違うと民族的な感情やら自尊心やらなかなかに厄介な問題も引き起こしかねませんが……」

「どうなのでしょう。今は自国の民に石つぶてを投げられる身であっても……この国の女王として力を尽くし、いつか民に認められる自分になりたい、やはり、そういう思いが強いです。頑ななのかもしれません」

ちゃんと自覚している、そういう事のようだ。だが、それぞれ独立した国家の現役の女王と皇帝となると、どこで寝てどこで飯を食うかだけでも政治問題になりうる。女王は僕が無言で考え込むのを、別の意味合いに取ったのだろう。いきなり床に這いつくばり、僕の靴にキスをしたのは驚いた。僕は急いで女王を抱え上げる。

「そんな事までなさる必要は無いのです」

「ですが……」

グレーの瞳から次から次へと涙があふれてくる。僕は何だか切ない気持ちになって抱きしめた。するとフェデリコ君含め、みんな自主的に部屋を出てしまった。お話はお二人でって事か？

「良く泣く人だな、貴女は。外交交渉には似合いませんよ」

外交交渉と言われて、はっとしたような顔つきになり、僕の顔を見つめた。

「泣きましたのは、母の葬儀以来です。なぜか陛下の前だと、すぐに泣いてしまいます」
「僕と結婚して、貴女は不幸になりませんか？　僕には多くの子供もいますし、色々ややこしいですよ」
「ずっと独身でいるか、陛下におすがりするか、二つに一つだと思っています」

レイリアと言う国は歴史が古い割にひたすら何というか下り坂の国で、かつては強国ともみなされていたが現状では国家財政は破たん状態だ。貴族階級の派閥闘争は酷いらしいし、農奴制の廃止は幾度も失敗してるし、頼りになるブレーンも居ないようだし、この女王も大変なのだ。

国内の貴族と結婚すると派閥闘争が火を噴くし、ミッケリの銀行家連中で負債を全部肩代わりできるものは居そうにない。僕以外の君主にはなおさら無理……女王の考えは、まあ、そんな所らしい。

ミッケリの銀行家に身売りするぐらいなら、確かに僕の方がマシか。少なくとも見た目は釣り合う。僕だって実年齢ではジイさんだが。

「……困ったなあ。思っていたより、貴女が可愛い方なので。僕も……体だけは若い男ですので」
「ありがとうございます。陛下ならきっと、あまたの美しい方、才能にあふれた魅力的な方とも色々お付き合いなさった御経験がお有りでしょうから……私などの申し入れを直接聞いていただけるだけでも有り難い、そう思っております」
「実はあなたを皇后とする訳には行かない事情が有るのです。十五年間限定なら可能ですが……」
「私は、お子を産ませていただければ……それで十分なのです。ですが、その、十五年とはどの様な御事情でしょうか？」

僕は転生前後の事情と、美保が既に異世界で再び生まれたらしい事。後十六年で、予定通りルンドにワープなり転生なりする可能性が高い事。そうした事情をかなり正直に話した。

「いきなり子供ですか。途中経過が省かれすぎで、正直戸惑いますが……たとえ庶子でも僕の子がいれば何かと安心ですか」

「本当に申し訳ありません。医師の診断では私の体でも妊娠出産は可能だとの事でした。お産で手が回らない状態の間の事も考えますと、陛下にお願いするしか無いと思うのです」

どうやら彼女なりに僕のワッデンやミズホ、新大陸の保護国に対する政策を分析して、導いた結論らしい。

他の君主と婚姻関係を結んでもレイリアは逆に荒れるだけだと踏んだのだろう。一方で僕とくっつけば、帝国の優秀な官僚機構と学術的な専門家が連携して、国を悲惨な状況から救い出して貰えるかも知れない……ぐらいは考えているのだろう。

「だからと言って、女王の貴女を側妃扱いには出来ないし……期間限定と言ってもなあ」

「でしたら……」

女王の提案は確かに実行可能なものであった。

「一種のペテンのようですし、貴女自身も本当にそれで構いませんか？」

「御事情が色々お有りな中で、厚かましいお願いをするのですから……あのう……今夜は」

そこまで言いさして、これまでの冷静に法律的な案件に関して話を詰めていた時とは打って変わった表情を見せた。まるでそう、初デートの中学生のような恥じらい方だ。

「顔を真っ赤になさって、震えておいでだ。異性とのキスの御経験は？」
「えっと、そのう」
軽いキス程度なら、された事があるかも知れない。例えばあの、騎士とか誰かに……
「答えにくければ、無理におっしゃらなくても良いのです」
明らかに、ほっとした表情になった。

「今夜は法的に有効な確認書を作成するにとどめましょう。一国の女王である方を頂戴するには、それなりの手順が必要ですからね。ですが、キスぐらいしませんと、僕としても今一つ現実味が湧きませんので」
「ああ、それは……確かにそうなのでしょうね」
落ち着いた言葉遣いなのに、声が震えた。抱きしめた体はしなやかで、髪からは甘い香りがする。少なくとも嫌われてはいない事がはっきり分かった。どうもディープキスの経験は無さそうだと踏んだので、額に軽くキスをするにとどめる。体を離した瞬間、物足りなさそうな表情を浮かべたので、これなら大丈夫だと確信できた。

僕は双方の官僚を部屋に呼び入れ、女王の目の前で婚姻関係に関する条件を定めた。

・テオレル帝国はレイリア王国の自主性・独立性を最大限尊重する。
・レイリア王国女王ガブリエル・デ・エストレラは、レイリア王国の元首である立場を一番に優先する。
・テオレル帝国皇帝グスタフ・ステファン・アナス・カール・アブ・ランゲランは個人的な信頼関係と友誼に基づき、レイリア女王に対するあらゆる援助を惜しまない。

・この婚姻関係により出生した子は、レイリア女王およびテオレル帝国皇帝の嫡出子であり、双方の国の法典に基づく王位、および皇位の継承権を有する。
・どちらかの重大な背任行為が明らかになった場合は、話し合いを早急に持たなければならない。
・レイリア女王とテオレル帝国皇帝の関係解消は、双方の立会人同席のもと話し合いにより行われるものとし、一方的な解消は無効とする。

「護衛をもっと増やさないと、お帰りが心配です。レイリアの側と僕の方との手配が整うのに一日はかかりそうですね。せっかくですから明日一日、休暇を御一緒に過ごしませんか？」
「ええ、是非、お願いいたします」

お休みを言う別れ際に、僕は小さな白い手を取って恭しく一国の君主に対するキスをした。

「貴女が御自分で御自分を守れるようになるまで、お手助け致しましょう」

彼女の礼を言う言葉は小さく震えていたが、真情にあふれていた。自分の誠意が彼女に伝わった、その事だけで僕は十分に満足だった。

僕の五十年・3

「久しぶりだね、ヤタガラス」
「お前が新しい嫁を迎えると聞いたんでな、様子を見に来たんじゃ」

ヤタガラスはチャスカが亡くなり、正三郎もミズホに戻って亡くなったので帝国での居心地が悪くなったらしい。

「美味い団子も牡丹餅も、餅も無いなんて、我慢できん」

そんな言葉を残して、この二十年ほどはミズホに戻っていた。ひたすら食べ物の所為にしていたが、それだけでは無かろう。それでも僕に関係する船はすべて沈没する事は無いし、僕の投資先が倒産したりする事も無いのは、ヤタガラスのおかげなんだろうと思っている。

僕は即位してすぐから帝国中に馬車鉄道を導入させていった。動力が馬であるだけで、各地の駅や交通局の制度は僕の知る鉄道の物をもとに整備している。おかげで物流と人の行き来はより活発化し、思いもよらぬほど経済・産業が活性化した。圧力鍋と蒸気機関で鉱山の排水をするポンプは既に実用化されている。まだ内陸部の河や内海のような風の少ない穏やかな場所限定だが蒸気船の航行もようやく始まった。地球の歴史と順番が多少違うが、蒸気機関車は放っておいても、その内登場するだろう。

更に僕は、十九世紀にフランスなどで盛んに用いられた腕木通信も導入した。おかげで千キロ程度の距離を、十五分程で情報の伝達が可能になった。先ずは帝国本土全体の通信網が整備され、更にワッデン、そして新大陸のアイリュ・テツココでも導入が開始された。

僕独自のアイデアで、通信所は軍の駐屯所に併設した。その駐屯所には近代の警察の機能を持たせ、更に各村落に交番や駐在所を配置した。その為、帝国での犯罪率、ことに凶悪犯罪は激減した。帝国国内を女性が一人で旅をする事も可能なぐらい、社会全体が平和で安定した状態になったのだ。

今年から郵便事業も開始したが、出だしはまずまずだ。これが可能になったのは、義務教育が行きわたり、国民の大半が文字の読み書きをするようになったからだと言える。

僕のこれまでの治世で、帝国の文化レベルは十七世紀から一挙に十九世紀のレベルに突入したと言って良いだろう。ここから先は…あまり積極的に介入するのは避けようと思うのだが、大量破壊兵器による大量殺戮は可能な限り避けたいと思っている。

先日民間の新聞社が出来たし、デパートがオープンした。これから加速度的に様々な変化が起こるのだろう。

だが、こうした変化はヤタガラスにとって、恐らくは居心地の悪いものだったのだろう。

「何やら近頃のトリアは賑やかすぎると言うか、落ち着かん」

久しぶりなのに、ずっとしかめっ面だ。

「牛丼を作るから、食うか？」

僕は御前会議が無い日は気晴らしを兼ねて、自分勝手に自分の昼食を作る。だが、今は妻たちが亡くなり子供らも手元にいない状態なので、せいぜいマサエとトシエに食べさせる程度だ。ユキヒコとヤスヒコは三日に一度ぐらいは顔を出すが、幼い二人は食べ物は帝国風と言うか洋食っぽいのが好きらしい。牛丼好きのヤタガラスが留守だと、自然、僕も牛丼は御無沙汰なのだった。

「おう！　食べるぞ。つゆだくで頼む」
「よしよし。葱は？」
「あー、多目に」
「卵も二つ乗せるか？」
「おー、そうじゃ。それが良い」

相変わらず七歳児の姿で、どんぶりを抱え込んで夢中な様子は、なんだか和む。デザートには黄な粉白玉を出してやった。ケーキ類より、こっちの方が好きなのだ。

「ほー、すると嫁はその、帝国には普段は住まんのか」
「そうだな。別居通い婚って感じかな。夏の休暇は一緒に過ごす。あと年末年始の儀式は帝国で一緒にこなし、春と秋に農業やら漁業の視察なんかを僕が役人や専門家を投入してテコ入れする。特に適正な課税と飢餓対策だな。産業振興はその先だろう」
「夫婦らしく共寝は？」
「夏の休暇と、冬の十日間ほどに限定だ」
「後は、別居か」
「ああ。あちらは小国とはいっても、それなりの歴史も有るし、女王をいきなりやめる訳にも行かんのだよ」
「お、そうじゃ。お前のずっと待ってる嫁は、あと十何年かそこらでこっちに来るのか？」
「そうなんだ。その件も有るから普通に皇后にして黄金宮に住んでもらうって訳に行かないよ」
「そのう、女王と言うか嫁には事情は言ってあるのか」
「うん。それで良いってさ」

ヤタガラスは気に入らないと言う顔になった。

「モナは何と言う取る？」

「最近話をしてない。スコウホイ大公のネストルの邸には、毎日顔を見せるらしいが」
「アンニカの件が、ひかっかっとるのか」
「そうなんだろうな。モナも……大した神じゃないから、僕ももっと気を付ければ良かったんだが」
「グスタフの力が大きくなりすぎたんじゃ。恐らく。モナも我も良くわからんものが増えてくるんじゃろうか、これからは……ワッデンから急に消えた亮太の嫁じゃった女も、良くわからん女じゃったしな。この世界とのなじみが良くなかったようじゃから、元の世界に早めに戻ったんじゃろうよ」

ヤタガラスはマーシャがあまり好きじゃなかったようだ。彼女の出現自体も予想外で、何か場違いな印象を受けたらしい。

「マーシャは元の世界にもどれたのかどうか、怪しいな。確かにテオレル帝国より高度な文明の国に生まれ変わりはしたようだが……亮太もキルデリク十二世もあのマーシャの弟として一緒に暮らしているようなんだ。しかも三人ともこのルンドでの記憶をはっきり持っている状態らしい」
「そうなのか。あの女子、そんなにええ女子なのか？　我は亮太の気持ちも先のワッデンの王の気持ちも、さっぱりわからん。しかも、弟か。ふーむ。面妖じゃなあ」
「美保は生まれ変わって、その三人に育てられるみたいだ」
「では、ますます、こっちに来るのは確定じゃろう。前世の記憶を持つ者に育てられるんじゃから……その方が今のグスタフの力に見合うと言う事じゃろうか？　力ある神の考えなど、我には分からんよ」

ヤタガラスにとって、美保がマーシャの娘として生まれ変わるのは訳の分からないことらしい。

「僕の力が無駄に大きくなりすぎて、ルンド全体の有り方が不味い方に歪んでいるのかな」
「んー、違うと思うがな。ただ、変化が早すぎる。モナにとっても我にとっても。ほれ、アイリュとテツココが思いがけぬほど、すんなりグスタフの力を受け入れて国の力が増し、民が飢えから解放されたじゃろう。あれがなあ、全くの予想外じゃった」
「そうか。また、何か大きな動きが有るかもしれんよ。何しろ今度結婚する女王の国は暗黒大陸と呼ばれている土地と、南方大陸と呼ばれている土地に縁が有るんだから」
「んー、我やモナの予想では、アンニカとチャスカがお前を支える両輪となって、もうちょっと長続きすると言う事じゃったんだがなあ。アンニカが予想外に早死にして、チャスカの力とキリャの力の有りようが変わったんじゃな。多分」

キリャもヤチャイも元々は向こうの土地で力を発揮するはずが、テツココとアイリュと言う二つの大陸の支配者が僕自身を信じ受け入れたために、事情が大いに変化したのだとヤタガラスは言う。キリャの夫・ヤガー君はあの土地の神の祝福を受ける男であるが、僕が彼に大宰相の役目を与えた事で、テオレル帝国の力が神霊的な面で見ても強大になったのではないかとも言われた。

「グスタフよ、今度の女王の国が縁を持っとると言う土地、広い広い土地なんじゃろう？　それもお前がどうにか面倒を見てやれと言う事じゃろう。暗黒大陸とはずいぶんな呼び方じゃが、それだけそこの民は貧しく希望に乏しい暮らしをしておるんじゃろう。そこに光をもたらすのが、お前の役目なんじゃよ、きっと」
「困ったなあ……僕の前世での知識が多少なりとも役立つとして考えてみると、どっちの大陸もアイリュやテツココのような核になると言うか、中心的な力になる様な大国が存在しないんだ。ミッケリ

では奴隷と香辛料の調達先程度にしか見られていないのは……国ってものがまだちゃんと成り立ってない段階だからだよ」
「なら、グスタフが良いと思う事を遠慮なくどんどんやれば良かろう」
「いや、それほど話は簡単じゃない。自然条件は厳しいはずだし」
「知恵を皆で絞れば、なんとかなろうよ」
「うーん、僕の知恵じゃなあ、確かに不足だ。工学とか土木とか農林水産業とか医学とかの専門家が来てくれないもんかなあ……」
「ほれ、お前が時折会うと言う爺さんにねだれば、なんとかならんかの？」
「じゃあ、今から一緒に行ってみるか？」
「我が会えるじゃろうか？」
「ともかく、一度行ってみよう」

一緒に、あの爺さんの姿が見えるはずの場所に行ってみた。

「なんじゃこりゃあ！」
ヤタガラスが叫んだ。僕もちょっとびっくりした。
『現在緊急メンテナンス中。復旧まで十日ほど待て』
日本語でこんな一文が空間に浮かんで見えた。
「ケッ、マジですか」
「ど、どういう意味じゃ、これは」
「あの爺さんは神でも何でもなくて、凄く文明の進んだ所の機械仕掛けのからくりみたいな物、って言えば良いかな。そのからくりが上手く働かなくなったから、待てってさ」

すると目の前でその一文の『十日ほど』が『三日』に変化した。
予定より早く復旧かよ。はいはい。

「日にちも経ったことじゃし、あの面妖なめんてなんすとやらが終

わったかのう」
「うん。見てこようか」

改めて見に行くと、爺さんの姿が無い。あの石だけが有る。掴むと一瞬ノイズのような画像が頭に浮かんだ。そして見た事も無い形状の建物の静止画像が出て、後はいきなり若い女性の音声だけが聞こえた。

「時空管理局の決定をお伝えします。貴方の現在の時空における適合度が我々の当初の予想よりはるかに高いため、貴方の自発的行動を認可します。質問は現段階で回答可能なもののみお答えします。ご了承ください」

は？　本当にそういう事なのか？　声の主は生身の生命体なのか違うのか、僕には判断がつかない。

「時空管理局とはいかなる組織なのかな？　設立時期とか理念とかメンバーとか、本部の所在地とか、差し支えない範囲で教えてほしい」
「時空管理局は、高度な知的能力を有する生命体の国家の連合体で運営する機関の一つです。設立時期は貴方の生まれた地球においては二十一世紀より、概ね五千年後となります。掲げる基本理念はすべての高度知的生命体の平和的共存です。最大多数の最大幸福を目指すと言えば理解しやすいでしょうか。所在地は地球の外ですが、まだ具体的には申し上げられません」
「僕の個人的な愛情問題その他は、どう決着がつくのかな？」
「貴方に最も適合すると思われる資質を有した生命体のそちらへの到着は、当初の予定通りです。現在はルンドにおける適正度を上げ、貴方とのチームワークにより適合した存在となるように、バージョンアップの最中です」

「今、結婚話が発生していて、それを進める予定だけど、ＯＫなの？」

「最終目標が当組織の理念に合致するもので有れば、自由行動は認められています」

「僕の適合度が高いって、どういう点で判断されたの？」

「貴方は『最大多数の最大幸福』を念頭に為政者として誠実な努力を払ってきました。更にこれから予想される大量破壊兵器に対する用心深さも、大いに評価されました。これから更に、二つの未開発段階の大陸の管理を行う立場に立つでしょうが、常に『最大多数の最大幸福』を念頭に貴方の内なる信義則に則った行動を取られるように、最大限の努力を払って下さい。他に質問が無ければ、来年まで定期通信は行われませんが、宜しいでしょうか？」

「新しい大陸二つの運営を行う上で、農林水産業、鉱工業、医学、教育などの方面のサポート人員が欲しいが、派遣願えるだろうか？」

「試験的に派遣した人物の運用成績が良好であったため、当組織内で適切な人員について検討中です。準備が整い次第派遣されますので、よろしく」

「派遣される本人たちは、時空管理局について認識してるわけ？」

「混乱を防ぐため、地球の十九世紀末期から二十世紀の人材を派遣しますから、当人たちは時空管理局の存在は全く知りません。中には特定の宗教教育による偏向も有るかもしれませんが、貴方の力量なら十分に矯正可能でしょう。ちなみに当時空管理局の存在はトップシークレットです。秘密事項の取り扱いはくれぐれも慎重に願います。では、また来年お会いしましょう。クリア・エーテル！」

「クリア・エーテル！」

僕もつい、応えてしまった。微かに笑い声が聞こえたように思ったのは、気の所為なんだろうか？

それにしたって……銀河パトロール隊員か？　いや、あの有名なＳＦが遥かな未来に古典として高く評価されているとか、そう言う

経緯かも知れない。
ヤタガラスは僕の質問しか聞きとれなかったらしい。ひどく不機嫌な顔つきになってブツブツ呟いている。
「時空管理局？　訳が分からん」
僕は、こんな状況をどこかで予想していたような気がした。

僕と女王と国家の問題・1

僕があの時空管理局について知ったその同じ年の冬、レイリアの都テージョの大聖堂でレイリア女王ガブリエル・デ・エストレラと僕は無事に結婚式を挙げた。

婚儀に先立ってレイリアが背負っていた負債は、僕名義の個人的な資産で全て肩代わりした。

「レイリアを女王ごと買い取ったも同然ですな」

結婚の日程が決まった段階で、御前会議に出席している者がそんな事を言ったので、僕はムッと来た。

「物には何によらず言いようと言う事が有るのだ。そんな言い方をされると、自分が女衒か奴隷商人にでもなった様な実に嫌な気分だ。レイリアの女王に対する侮辱でもある。僕を敵に回す覚悟が無いなら、そんな言い方は止せ」

不快な発言をした貴族は礼を失した点については陳謝したが、事態の認識そのものが間違っているとは思っていないようだった。

「民衆にさほど支持されているとも思えない無力な女王の利用価値など、知れているのでは？」

「絶世の美女、と言う訳でも無いようですしな」

僕がレイリアを保護国として暗黒大陸や南方大陸の利権を手に入れれば十分なのであって、女王との婚姻までは不要、ないしは無駄と考えているらしい連中はかなりの数に上るようだった。レイリア

王家の存在は厄介事の種でしか無いと言う立場なのだろう。

「それでも陛下御自身がお気に召したなら、臣下があれこれ言う立場ではないですが」

「お気に召したなら、原則的に御別居と言うのが、私などには理解できません」

「さようさよう。私なら寝ても覚めても好いた女とは一緒にいたいと思いますぞ」

確かに、寝ても覚めてもという熱っぽさは僕に無い。だが、あの不器用で正直で賢明な女王が気の毒だとも、可愛いとも思う。

「手助けをしてやりたい、そう感じた。物好きと言う者も居るかも知れんが。もっとも、ガブリエルが為政者として一人でやれるようになれば、関係も変わってくる可能性は有る」

「婚姻関係の解消、なども有り得る、そう言う事でございましょうか？」

年若いまだ未婚の貴族が、軽い感じで聞き返した。反射的に腹が立つと言う事は、僕はやはりガブリエルがかなり気に入っているのだと自分でも改めて自覚した。

「解消前提ではまとまる話がややこしくなる。どう転ぶにせよ、帝国にもレイリアにも有益な方法を模索し、最善を尽くすと言う事は約束する」

僕の才覚で稼いだ金を僕がどう使おうと、僕個人の自由、と見る者もいたにはいたが、新聞の『無駄な買い物？』というタイトルの風刺画を示されて、僕はムッとした。

そこにはレイリアと刻まれた腕輪をして透け透けの衣装で踊る女奴隷の後ろ姿と、寝そべった東洋の砂漠地帯の君主の格好の男が脂下がっている様子が漫画風のタッチで描かれていた。良く見ると男の服には皇太子時代の僕の紋章がついている。

「その絵に表されたような見方をする者は、やはり多いと申し上げねばなりません」

ガブリエルの値打ちについて新聞社の連中は疑問視している。そう言う事なんだろう。

トリアの新聞はまだ一紙で、瓦版に毛が生えた程度のゴシップ専門の絵入りで単色刷りだ。厄介な事にこの『トリア絵入り新聞』は大した人気で、各鉄道馬車の駅頭で販売されているのだが、売り上げは毎月右肩上がりらしい。

「無礼な新聞社に罰を加えますか？」

そんな質問もされたが、この新聞の記事を書いた連中は自分が正しいと信じているのだろうし、国家の機密を漏えいしたと言う訳でも無いので、無視することにした。

ともかくも最悪な気分の内に、御前会議は散会となった。

「全く、何て奴らだ」

僕が夜、ベッドサイドで『トリア絵入り新聞』を見て怒っていると、マサエとトシエが覗き込んできた。

「あらあ、陛下はもっとずっとずっとハンサムでいらっしゃるのに！ひどいわ」

「これじゃあ、まるで太鼓腹のおじさんじゃないの！」

「最近パレードなどなさいませんから、若い平民の中にはお姿を拝見した経験のない者が多いのかも知れませんねえ」

「一度でもお姿を拝見すれば、この絵が色々とおかしいのはすぐにわかりますわ」

「レイリアの女王様とは、このトリアでのパレードはなさいませんの？」
「すべきかな」
「民にお顔をお見せになるべきですわ。陛下がこんなに素敵な方だって、もっと皆に知らせましょうよ」
「マサエもトシエも、いやじゃないのか？」
「え？　なぜですか？」
「ええ、なぜですの？」
二人一緒にハモって聞き返す。
「だって、そのう……」
「ああ、陛下はお優しいから……そりゃあ、ちょっとばかり妬きますけど、でも、私は私なりに精一杯御奉公しておりますもの」
「陛下が、毎日お元気でいて下さるだけで、私幸せですから。陛下を独り占めできるのは、きっとその内おいでになる美保様だけですから、私もちょっとしか妬きませんわ」

焼き餅をちっとも焼かないのはどうかと思うが、程よく焼かないと自分も回りも不幸になる。それがこの姉妹の哲学らしい。幼女のころから馴染んできた所為か、僕に向ける愛情は時に父親に対して向けるものに似ているようだ。
二人は僕と男女の仲になったのもほぼ同時期であったせいか、何でも可能な限り二人平等に扱って欲しいと言う。そして彼女たちはずっと僕を『陛下』と呼び、過度に立ち入りすぎないように細心の注意を払っているようだ。

「陛下は素敵な方ですから……うっかりすると、大変ですもの」
「そうそう。寝ても覚めてもずっと御一緒にいたいなんて、思うと危ないです、自分が壊れてしまいます」

彼女たちの語る恋愛論やら生活哲学やらに頷きながら、僕は穏や

かな気分で眠った。そしてその翌日レイリアに向けて出発し、こうして無事に挙式も済ませた、と言う訳だ。

慣習により、僕は花嫁である女王を抱きかかえ、馬でテージョの目抜き通りを行進し、王宮に入った。

「女王陛下、皇帝陛下にうーんと可愛がってもらいましょうねー」
「お二人とも、今夜からガンガンお励み下さい！」
「皇帝陛下、お子さんはドッサリお作りなさいませよ」

なんだかその手の、下ネタががったヤジというか、声援が多数飛び交っている。殺気は感じない。首都テージョの市民は王家に対する親愛の情が伝統的に強いようだが、困窮する地方の民心は落ち着かないと聞く。

先日の襲撃事件も有ったので、僕もガブリエルもこっそり鋼鉄製のプロテクターはつけている。僕は帽子に偽装したヘルメットも被っているが、相当重たい。式典が夏なら耐えられなかっただろう。

帝国の情報将校や諜報活動の専門部隊を早めに潜入させたせいで、困った事態は回避出来ているようだ。だが、僕が信頼する将校たちがピリピリしまくっている。と言う事は、事態は楽観できないと言う事だろう。

僕の移動に伴い連れて行った軍勢はせいぜい一万人程度だが、最新型の軍艦を見せびらかしつつ、トリアから海路で直接テージョに入った。万が一を考え、両国の国境五か所にそれぞれ山岳戦の専門部隊を偽装して配置した。

ちなみにこのルンドで、山登りとスキーの特殊訓練を積んだ部隊は我が帝国にしか存在しない。一兵卒の末端に至るまで読み書きができるのも、帝国軍だけだから、実際の戦闘となれば相当な威力を発揮するだろう。

僕は自分に割り当てられた部屋で、将校たちの報告を聞いた。爆発物を投下しようとした者が居たらしいが、未然に捕えたと言う。その事をレイリア側にどう報告するかと言う件での相談が有った。

「この国の官僚機構は腐敗しきってますから、信頼できません」
「軍事・警察権を女王陛下が掌握できておられませんので、有力者の私兵が出しゃばり、すべての事柄が恣意的に情実に基づき処理されるのです」
「そうか。酷いとは聞いていたが、大変だな」

帝国の能率的で合理的な機構に慣れると、前近代的な組織ともいえない粗末な組織は全くあてにならないと思われるのだろう。しかも、組織の人員の士気もモラルも低いとなれば、当然の反応だ。

「皇帝陛下の御身辺も最大限の警戒態勢で臨みませんと」
「苦労を掛けるな」
「近頃、平和な事態が続きすぎ、兵たちもたるんでおりましたから、良い機会です」
「その意気で頼む」

僕は安全対策に関して、総てを任してもらう事になっているので、容疑者は早速秘密裏にこの城の地下牢に収容し、僕自身が取り調べにあたる事にした。ガブリエルと宰相他数名にだけ事態を知らせた。

「外国勢力を引き入れて困窮する民を食い物にする奴は、女王だろうが何だろうが死ぬべきだ」

何だろう、どっかで見たような人種だ。視野の狭い正義に囚われていて、周りがちゃんと見えない向う見ずな若者……そう、かつて

のクヌートに似ているのだ。

「僕は困窮する民を食い物にした事は、一度も無い。だから新大陸の国々は僕に従ってくれるのだし、スコウホイにもワッデンにも飢える民はもはや存在しない。皆これまでになく平和な暮らしを送っているはずなのだがな。従って、このレイリアからも飢える者を無くす事は大いに可能だ。そうは思わないのか？」

「ずるい銀行家どもも恐れる不老の悪魔の言う事なぞ、まるで信じられん。愚かな女王をたぶらかす事など、さぞ容易かったろうさ」

「良く知りもしないでガブリエルを愚かと決め込む君の方こそ、どうなのかねえ。君が命がけなのはわかるが、誰かを殺害しないと通せない正義など本当の正義かどうか、怪しいもんだ」

「抜け目ないやり手の皇帝陛下が、えらいきれい事をおっしゃる」

「きれい事を意地でも通すのが、僕のやり方だ。結局後から見れば、それが問題解決の一番の早道だったりするものだ。きれい事を通すには、我慢強さと慎重さが必要なのさ。君のように反対者らしきものは、とりあえず皆殺しなんて発想では、上手く行く物もぶち壊しになるだけだ。まあいい。君は再教育の必要が有る」

僕はその若者を、帝国に戻る商船に乗せトリアの黄金宮内の北の離宮の塔に放り込む事にした。他にも既に幾人かの不穏な破壊活動を企む連中をとらえさせ、同様に放り込んである。

全員、再教育を行う思想犯で、食事その他はクヌートの前例に倣っている。

「……ざっとご説明すると、そうした経緯です。皆、自分の家族や友人が飢え死にしたり、不当に強制労働に狩り出されて亡くなったりした者ですね」

「私は、そうした地方の厳しい実情を、全く存じませんでした。お恥ずかしい限りです」

「先の宰相以下、老臣たちが貴女に何も知らせていなかったのですね。これからは貴女の安全は僕が守るように努めますので、貴女も自国の実情を知り、改善策について色々考えてください。出来る事から、少しづつでも確実にやって行きましょう」

僕は王家の前例だとかいう、新婚初夜の検分役の女官のばあさん連中を排除した。まだそんな古めかしい悪習がこの宮廷では生きている。困ったものだ。

「帝国軍には騎士と言う者が存在しないそうですね。貴族では無いものまで皆、読み書きができるとか……あのすばらしい軍艦を操るのも、皆学校で教育を受けた将兵と聞いて驚きました」

「騎士と言う存在は、もうこれからは実戦では役に立たないでしょうね。もっとも戦争など無い方が良いのですが」

「でも、陛下御自身は剣の名手ともお聞きしますが」

「剣より、ミズホ風の組手の方が得意ですよ」

「組手、ですか？」

「自分の体一つで身を守る方法です。御婦人でも知っていると、つまらぬ暴力から身を守れるから、覚えて損は無いですね」

色々な話をしたが、一向に初夜の実効的な進展は無かった。僕は構わないのだが、女王はどうなのだろう？

「まあ、小鳥が鳴きはじめました。どうしましょう！」

夜明けが近いようだった。

「どうしますか？」

「あのう、やはり、その……お願い申し上げます。不束者でございますが」

「御経験は？」

「御座いません」

「では、慎重に、参りましょうね」

やはり最初は、キスから入った。そうでなくては、感情がやはり伴わないからだ。絶世の美女ではない、と人は言うが、やはり僕はこの女王が気に入ったようだ。支配者・為政者としては少々お人好しで、経験不足だが、僕を信じてくれるのだから、誠意を尽くして行こうと決めた。

「貴女はとても可愛い」

「本当に？　本当にそう思って下さいます？」

「ええ。本当ですよガブリエル」

それなりの状態になったシーツを検分した女官のばあさんどもは、女王が恙なく皇帝と初夜の儀を終えたと納得したはずだ。それから更に二日、僕らはかなり濃密な時間を過ごした。聞けば一番子の出来やすい周期だそうだから、ガブリエルの希望がかなったかもしれない。そんな気がした。

軍艦二隻をテージョに残し、年末年始はトリアで共に過ごす事を約して、僕は海路で帰国した。見送りに来たガブリエルは、数日の間にめっきり女ぶりが上がった、僕にはそんな風に見えたのだった。

僕と女王と国家の問題・2

「鉄道馬車、初めて見ましたけれど、沢山の人が街を行き来するのですね」
「ええ。今はああして馬が車を引いていますが、そのうち機械仕掛けで車を動かすように変わってゆくでしょう。もうかなり研究は進んでいますが、まだ、故障が多くて実用にまで至っていません」
「まあ、機械で動くのですか。その車が出来上がりましたら、私も乗ってみたいものです」
「無論、そうしますよ」

レイリア女王ガブリエル・デ・エストレラは生まれて初めて国外に出た。僕がテージョに置いておいた最新型の軍艦に乗って来ると言うルートを取ったが、当分はこれが一番安全確実な方法だろう。到着したその日のうちに、トリア見物に出たが、鉄道馬車とデパートは非常に気に入ったらしい。

「あの兵士は、何をしているのですか?」
交差点で交通整理を行っている様子を、非常に不思議そうに見ている。
「往来が混雑する場所ですと、ああやって交差点で行きかう人や車を整理する方が安全なのです」
手の上げ下げによって、車や人の停止と進行を指示しているのだと説明する。
「ずっとあのような行動をとっているのは辛いでしょう。食事などはどうなのですか?」
「一日八交代制を取っています。近所にあります詰所で、順に食事や仮眠・休憩を取りますし、交差点での勤務の後は休日です」
「すると、あの往来は必ず武装した兵士があの場所にいるのですね

？」

「そうです。夜はかなり明るい街灯をつけます。だから夜中の犯罪も減りましたね」

「素晴らしいですわ」

僕らは年末の買い物に出た貴族の若い夫婦のようななりで、街を歩いた。

「評判の店で、新しいデザートはいかがですか？」

トリアの女性たちに人気が有ると聞くカフェに入ってみる。ロールケーキが名物なのだが、彼女は初めてであった様だ。うっとりした顔つきになり、最後のひとかけらまで残さず食べた。

「本当に、なんておいしいんでしょう！」

「店のオーナーにこの菓子の作り方を教えたのは、僕なんです」

「ま、そうなんですの？　へい、あ、貴方にそんなご趣味がお有りとは」

陛下と言いかけたのを目で制すると、すぐ察した。そうした勘の良さも悪くないと思う。

「褒めて下さったから、図に乗って、夕食に手製のデザートをお出ししようかな」

「是非、是非、お願いいたします」

店を出て腕を差し出すと、体が自然に寄り添った。僕の見立てたコートが良く映える。こう言うふとした時の生き生きした表情がガブリエルの魅力だろうか。

「お贈りしたペンダント、つけて下さったんですね」

「ええ。何だかうれしくて、いつもつけていますの」

ダイヤとプラチナと真珠で作った雪の結晶型のデザインだ。レイリアでは山地以外では雪が降らないそうで、ガブリエルは本物の雪

を見た事が無いと言った。

皇室の紋章をつけていない馬車で、黄金宮まで戻ると、父上がお住まいだった建物に案内する。僕は普段皇太子時代からの住いで暮らしている。準備に関してはキリャに頼んだ。もうとうの昔に五十を過ぎたし、大宰相の奥方として貴族社会でも尊敬を受ける立場に居る。チャスカゆずりの生真面目で手抜きをしない性格が、ちょっと逆に時々心配であったりするが、夫婦仲は円満で、子供らも無事に育った。僕が庶子である幼いユキヒコ・ヤスヒコの養育を任せたのも、キリャとヤガー君なら大丈夫と言う信頼からだ。

ユキヒコとヤスヒコはキリャをママ姉様と呼ぶ。確かに二人にとってキリャは異母姉なのだ。

「父上、お帰りなさいませ。本日は幼い弟たちも御挨拶に連れてまいりました」
「ああ、色々ありがとう。ガブリエルの供たちは、向こう側だな？」
「はい。お祖母様がお使いあそばした側に御案内しました」
「ガブリエル、紹介しよう。僕の三女で宰相を務めるヤガー君、じゃない、えっとマウレ子爵じゃない」
「ただ今はテパネカ侯爵ですわ。父上」
「つまり、そのテパネカ侯爵夫人キリャ・ケツァールだよ。五男で僕の弟ロルフの婿養子になったフリジア侯爵ヤチャイの同腹の姉だ。六男が先の皇后の産んだスコウホイ大公ネストルで、こっちが七男のユキヒコ、そしてこっちが八男のヤスヒコだよ。今はこの幼い二人は姉のキリャが養育している。二人とも、僕の奥さんに挨拶なさい」
「ママ姉様、あのう……」
「なんてお呼びすれば……」

ユキヒコ・ヤスヒコは何だか戸惑っている。キリャに小声で「レイリア王国の女王陛下でいらっしゃるのですから、ちゃんと御挨拶を」と促されて、やっと挨拶する。

「女王陛下、ユキヒコでございます」
「女王陛下、ヤスヒコでございます」
「ガブリエル・デ・エストレラです。キリャ殿、ユキヒコ殿、ヤスヒコ殿、よろしくお願いします」
「チビ達は、若い貴女をどう呼ぶか戸惑ったのだな」
「でも、女王陛下では……堅苦しいですね」

ガブリエルは他人行儀な感じが、嫌なようだ。

「では、お可愛らしいから、ガブリエルちゃま！」
ヤスヒコの発案に皆が同意した。
「ユキヒコ、ヤスヒコ、父上は奥さんと話が有るから、また夕食の時にでもな」

二人はきちんとした国家元首に対する礼をしてから、キリャに手を引かれて部屋を出た。

「幼いお二人の母上は？」
「ユキヒコの母とヤスヒコの母は仲の良い姉妹で、幼いころからずっと僕に仕えてくれています」
それ以上の説明は、求められなかった。後は夕食に来るメンバーについての質問と、服装についての質問がなされただけだ。
「向こうの部屋を案内しますよ。貴女の侍女たちも待っているだろうから」

その後は夕食まで、互いに分かれて休憩と言う形を取った。

僕は外交官や情報将校達から、気になっているテージョの奴隷商人たちの動向に関する報告を受けた。

暗黒大陸などと呼ばれているのは、地形と他の大陸との位置関係から見てアフリカ大陸に近い状態の土地だと思ってよさそうだが、内陸部に関してはレイリアの人間も全く調査していない。それに南極大陸の海域まではレイリアの帆船では到達不可能な様だ。レイリアの冒険的な商人たちの記録にも「ひどく荒れた寒い海域がある」と有るのみだ。それでも暗黒大陸、いやこのルンドのアフリカとも言うべき大陸の南端を確認して、インド洋に該当する海域への航路は細々とではあるが、確立している模様だ。

マダガスカルらしき大きな島と、インド亜大陸の南端部、インドネシアらしき島々、そして南方大陸と呼ばれている恐らくはオーストラリアに該当する大陸のインド洋側、その辺までしかレイリアには記録が無い。

レイリアの商船はそもそも東の豊かな島国ミズホを目指して航海したらしいのだが、彼らの言う南方大陸をまっすぐ北上した位置にミズホが存在するとは全く認識されていないようだ。

それでも、興味深い情報は様々あった。

暗黒大陸の北部は東洋の砂漠の大君主国に軍事・宗教の面で強い影響を受けており、大君主の臣下と言う形を取った小規模な王国がわかっているだけで二十ほど有るようだ。そうした国家は敵対勢力の人間を奴隷として文字通り「狩り」出荷して鉄砲をはじめ武器類を主に調達している。と言っても黒色火薬を使用する旧式の火縄銃ばかりだが。

帝国で標準装備している銃剣を装着したライフルは、厳しい情報管理を行っているので、今の所コピー商品は出回っていないようだ。それでも火縄銃に銃剣を取りつけた物は、諸外国でも見かけるようになった。

自動小銃も開発済みだが、国家機密扱いで、見合ったプロテクターなり防具なりが開発されないと表には出せないと考えている。機雷・地雷の類は、あえて研究させていない。代わりに非致死性兵器の研究を積極的に行っている。現時点で催涙ガス、嘔吐剤、ゴム弾、放水砲、麻酔銃、などなどかなりの品目が揃っているが、こういった物は発想自体理解されていないようでコピー商品は見ない。

「奴隷市場は奴隷の労働力としての経済性を重視するミッケリの顧客であるこの大陸の諸国と、異民族・異教徒はそもそも奴隷的存在だと考える砂漠地帯の強国のおかげで成り立っているわけだなあ」

「陛下がアイリュ・テツココ両国におけるミッケリ商人らの残虐行為を厳しく禁じられた結果、奴隷の産出地は暗黒大陸に集中するようになりました。もっとも、砂漠の大君主国では暗黒大陸の奴隷より、周辺国家からの貢納奴隷や捕虜が多いようです。連中は白人奴隷も大量に買いますがね」

「帝国では黒い肌の人間自体全然見かけないが、黒い肌の人間はやはりこの西の大陸では、奴隷と見なされているのだな」

「まれにミッケリ辺りでは解放奴隷も存在しますが、貧しくて奴隷と大差ない生活の者ばかりです。黒人の宰相や将軍もいると言う大君主国の方が、連中には暮らしやすい国かも知れませんな」

「ヤガー君を宰相とした事、チャスカを妃とした事で、帝国での新大陸の住民に対する偏見は大いに薄れたと思うが……同様に黒い肌の人間を重く用いれば、偏見は薄れるかな」

「……それは、そうかも知れませんが」

「君らもまさか、肌が黒い人間は劣等人種だなんて思ってるのか？」

「はあ、どこかでそう感じているかもしれません」

「何分、知性的な会話が出来る黒い肌の人間を見た記憶が無いので……」

黒い肌の賢者なり勇者なり、認識を改めさせる様な存在はいない

ものだろうか？

「テージョの奴隷商人たちは、女王陛下の傀儡化を画策し、帝国勢力の排除を狙う老臣どもの資金源でもあるようです。奴らを締め上げれば、女王陛下の御悩みの種も減るのは間違いありません」

「そのテージョの奴隷商人どもの上前をはねているのが、ミッケリの銀行家連中でして……」

「ミッケリの奴らは僕からしっかり色々ふんだくったから、僕の機嫌を損ねる事はしないだろう」

「陛下が世界一の大富豪であられるのは、連中も良く承知しておりましょう。それに陛下が開発をお命じになった様々な分野の新技術は、ミッケリごときでは生み出せぬものですから、テージョの奴隷商人どもがミッケリに泣きついても、大した援助は望めますまい」

「ほう、そうか。それならば遠慮なくガンガン締め上げてやろう」

夕食会には生存している僕の子供がほぼ全員そろった。ただ、ワッデンの摂政であり国王の父であるフレゼリク・レオポルドが体調を崩して寝込んだらしいのは、気がかりだった。

「あれも六十を超えたのだから、体を労わらないとな」

「明日からでも早速、ワッデンに向かう事に致します」

亮仁と碧子は、僕が新たな妻を迎えると言うので数年ぶりに来てくれたのだ。特に亮仁はフレゼリク・レオポルドと絵画と言う共通の趣味も有って気が合い、子供時分から仲が良く、大人になってからはマメに文通してきたようだ。碧子は亮仁と共に、ワッデンの窯業の発展に色々と力を貸している。ミズホの磁器の技法や絵付け・デザインの情報を系統づけてもたらしたし、腕の良い職人の招聘にも力を貸した。

「考えてみれば、この瀟洒なディナーセットもお前達三人のおかげで誕生したようなものだな」

近頃ワッデンは、この西の大陸における陶磁器の一大産地として認知されている。

「このお皿も、本当に愛らしい花の柄ですね」

ガブリエルは感じ入ったと言う雰囲気の声を出した。単なる社交辞令ではなく、本当に気に入ったらしい。

「もとはミズホのサクラという花だが、近頃はワッデンでも色々な場所に植えられて、皆に愛されるようになっている。その花をデザイン化したシリーズで、ワッデン王国御用窯の人気商品だ。皆が苦労して生み出した製品が世界中の王侯貴族の食卓を飾るようになって、僕としても感無量だな」

幼いユキヒコ・ヤスヒコの存在も有り、食事会は暖かく家庭的な雰囲気で終わった。

互いに寝る前に入浴を済ませて、寝間着に真っ白いガウンを着たガブリエルと暖炉の前で、また話し込んだ。ユキヒコ・ヤスヒコ以外の僕の子供たちがかなりの高齢者ぞろいであることは、事前に聞いてはいても、やはり驚いたようだ。

「陛下は……本当にずっとお若いままなのですね。でも、お子様方が皆優しくして下さったので、ほっとしました」

「あれらも、貴女のお人柄が好ましいと感じたようだ。予想はしていたが、それでも無事に顔合わせが済んで本当に良かったと思いましたよ」

「私が御子を産んでも、皆さんお許し下さいますよね」

「結婚したのですから、何の遠慮も無用です」

奴隷商人達をとっちめる話をしようかと思ったのだが、予定は変更になった。夫の僕は超高齢者だが、肉体的には若いままだし、紛れもなく僕ら二人は新婚なのだ。その妻が僕に体を摺り寄せ、息を弾ませ、目を潤ませている。僕を欲しがっているのだ。

「……待ち遠しゅうございました」

僕は瞳の奥を覗き込むようにして顔を寄せる。

「僕もですよ」

安堵したような小さなため息が漏れ、花びらを思わせる愛らしい唇に笑みが浮かんだ。次の瞬間、急に顔が赤くなり、まぶたが閉じられた。長いまつ毛が揺れている。

「は、はしたないと、お笑いにならないで」

「今から、はしたない事を山ほどしてあげます」

唇を初めは軽く刷くように、次第に強く押しつけながら、舌先で唇を割りくつろげてゆく。いささか強引に僕がガブリエルの口の中を舐り上げると、ガブリエルも昂ぶった喘ぎを漏らしながら僕の舌を吸い上げて応える。やがてのけぞったのどが激しく喘ぎながら、僕の流し込む唾液を飲み込むまでになった。そこで口を離すと、一気に軽く汗ばみ始めた体を抱き上げベッドに入る。

「貴女は覚えが良い。すぐにお望み通り満足させて差し上げますよ」

そうした『はしたない』言葉を囁きつつさっさと剥き上げてしまい、自分も邪魔なものを取り払ってからは、互いにはばかりの無い獣めいた声を上げ体を激しく絡ませた。

先ほどまでの恥じらいと打って変わった妖しいまでに燃え上がる

グレーの瞳は、僕をとことん本気にさせたのだった。

僕と女王と国家の問題・2（後書き）

キリャとすべきところが、幾つか間違ってました。すみませんでしたー

僕と女王と国家の問題・3

言わば冬休みを終えたガブリエルを送りがてら、僕は備蓄していた小麦粉二千二百万ポルト、つまり地球で言う所の一万トン弱を、引き連れた武装商船に乗せてテージョの港に下ろした。

人気取りだと揶揄されるのを承知で、半量はテージョでの無料炊き出しに使い、半量は特殊部隊に持たせて、山岳地帯での食糧援助にあたらせる。例年レイリア王国の山岳地帯では、春先に大量の餓死者が出ることが分かっているからだ。すでに国境には山岳戦の専門部隊を偽装して配置してあるので、不測の事態が起きてもかなりの助けにはなると思われる。

特殊部隊の構成員は僅かに五百名程度だが、全員がレイリアの言葉を解し、心身ともに極めて健康で、高い射撃能力とこの世界での標準的な武具である剣・槍・弓、それに馬の扱いに優れ、基礎的な医療・気象・工学に関する知識と、法律・経済に関する常識を有するものばかりだ。全員が志願者で軍律違反を起こした事が無いのも大きな特徴だが、一番重視されるのは秘密の保持能力だ。

彼らには帝国で用意しうる最軽量で高機能のプロテクターとヘルメットを装着させ、スコープを取りつけられるライフルと短剣・ナイフ、そしてピストルを持たせている。全員が組手やボクシング・拳法などの心得が有り、万が一武器が使えなくても、生存し帝国軍に無事合流する事を最後まであきらめないよう心身の鍛錬を怠らない。

僕はこの部隊が、未開の土地での戦いに大きな威力を発揮すると考えている。

かつてなら神聖教会の坊主が荒くれ騎士を連れて布教を行いつつ、略奪や奴隷狩りを繰り返したような土地で、場合によっては現地の

人間を指導しながら味方に加え、地元で手に入る武器類も活用しつつ、奴隷根絶のための作戦を展開して行くのは、彼らのような有望な若者で構成された部隊だろう。

ともかくも僕は暗黒大陸を、それなりに希望の持てる土地にする任務を背負わされたようだ。どうせやらないわけにも行かないのだろう。ならば、あの時空管理局の連中の予想を裏切る様な好成績を上げたいものだ。脱実験動物、脱使い走り……まあ、僕の意識としては、そんなところだ。

未来の連中に僕が良いように使われちゃっている事に変わりはないが、『最大多数の最大幸福』のための苦闘なのだから、やっぱり頑張ろうと思う。

帝国自慢のエリート部隊を送りだし、テージョでの炊き出しの手配を整えると、僕はガブリエルの住む王宮に向かう。そこにはすでに、テージョの奴隷商人全員が集められている。

やはり王宮内の大広間の雰囲気はピリピリしていた。これ見よがしの宝石類をくっつけたオヤジ連中は、帝国の感覚からすると時代遅れのダサいファッションだ。良い仕立てのシンプルな服を着ると言う感覚が、ゼロらしい。ビロードにレースに金糸銀糸の縫い取り……皆例外なく肥満しており、使い物にならないクッションか何かのように見えなくもない身なりだ。

で、その不細工なクッションどもが、僕を睨んでいる。

「黒人奴隷の輸出入も、一切お認めになりませんので」

「無論だ」

僕はテージョ奴隷商人組合に最後通告を言い渡した。

組合員の中に、貧しい帝国国民の婦女子を騙して拉致して輸出し

ていた者がいて、その者は既に禁固刑に処し全財産は没収してある。被害者の女性らの救出も努力している最中だが、他国の後宮に納められてしまった場合は現実問題として奪還に苦慮している。

僕が帝国国民あるいはミズホ・ワッデン・アイリュ・テツココと言った友邦国の国民を奴隷として売り飛ばした者に厳しいのは、彼らも予想していたらしい。だが、黒人奴隷も一切認めないと言うのが彼らにとっては予想外であった様だ。

「なぜですか？」

「彼らも人だからだ。当然、先ずは拉致監禁した事に対する慰謝料を支払うべきだ。故郷に送り返すか、賃金を支払う使用人とするかすべきだが、無理な場合は帝国の入国管理官に申し出るように。これは一切の例外を認めないので、そのつもりで。申し渡した期限内にこれらの措置が適切に行われない場合は、強制的に全ての家財を没収し、お前たちをレイリア・帝国および友邦国から終生追放とする」

「ち、畜生！」

ナイフでいきなり切りかかった男に、僕は手刀を食らわせた。と同時に、護衛の者たちの剣が一斉に向けられた。床に伸びた肥満体を見ると、吐き気を催す。こいつはテージョの奴隷商人の中で、一番たくさん奴隷を抱えている男だ。

「すぐにこの者の家財を没収し、奴隷達に衣服を与え、全員城に連れてくるように。必ず医師を伴い、虐待により衰弱している者は、介護を出来るように手配を」

僕が静かな声で強烈に怒っているのを見た他の奴隷商人たちは、どうやら諦めがついたようだ。ため息をつきながら、一礼して退出しはじめる。

「あーあ、奴隷に医者、信じられん」
そうぼやいた者も、即座に厳重注意を言い渡した。

連れてこられた奴隷たちは、概ね健康状態は良好だったが、中には酷い虐待を受けた者もいる。手足が切断とか、骨が折れっぱなしとか、やけどのケロイドだらけとか……これらは、商品価値が無いとされた者たちだ。そして、全員体に焼き鏝を当てられている。
僕は金の笏を取り出してパワーを使った。彼らの言語を使えるようになるためだった。すると、各人の拉致監禁虐待の状況が僕の脳裏に次々鮮明に浮かび上がる。

「ううむ。酷い話だ」

暗黒大陸南部の黒人は、大半が小規模な部族社会で暮らしている。そうした共同体の有力者に白人が織物や金属製品・アクセサリー・酒類・銃などと交換するともちかけ、近隣の別の共同体の住民を拉致させる。こうして白人は効率良く奴隷を集められると言う訳だ。共同体の中で稀に王国の体裁をなしている物は、大半が白人の勢力の傀儡的存在で、奴隷貿易のための基地の役割を果たしている。そしてこれらの傀儡王はもれなく神聖教会に改宗している。神聖教会は、偏見と人種差別にお墨付きを与えている格好だ。
大陸北部の諸王国が東洋の大君主国に朝貢しているのと、似たような事情なわけだ。

拉致監禁、輸送、自殺防止など、相当な手間暇をかけてテージョに集められた奴隷は、殆どが高額商品だ。若く健康な者は概ね牛や馬五頭分前後の価値が有るとされる。平成の日本なら高級外車か中古のマンション程度の価値は有ると言えば分りやすいだろうか。複数の言葉が理解できるとか、容姿端麗とか言うように特別な条件が有ると、更に値段は跳ね上がる。

体を清潔にさせて衣類を与え、食事をさせてから、僕は順次大広間で面談する事にした。奴隷の話す言葉が理解できるのが僕一人なので、仕方がないのだ。奴隷だった連中には椅子で座るなり、用意した菓子・果物や茶を楽しむなりして気楽に待ってもらう。

「旦那なら奴隷にされても顔は良いし、姿形も立派だし、超高級品扱いで、東方の大君主の豪華な宮殿に売られる事請け合いです。そんなに色々な言葉がお出来になるんだし、白人奴隷の身分から解放されて、えらいお役人になるのも有りでしょうねえ」

僕が暗黒大陸中部のある部族の言葉を完璧に話すので、その事に驚いたらしい男が、僕の事をこんな変な風に褒めた。実際過去に大君主の宮廷には、白人の解放奴隷上がりの大宰相が居たそうな。そんな話をした男は、小さな王国の音楽師なのだと言う。

「各地から色々な部族の者が集められてますからねえ。私が聞き分けられるだけでも、五種類の言葉が奴隷部屋では行きかってました。でも、一人だけ、変な奴が居ましてねえ……あの、列の最後に立ってるがっしりした男ですが、どの言葉も自分の言葉じゃないそうで。一体どこの部族なんだって聞くと『ゆーえすえー』だって言うんでさ。そんな部族名は聞いた事有りませんや」

ＵＳＡ？　だよな。僕が一瞬見つめると、その視線を受け止めて返された眼差しは、静かだが強い感じがした。歴戦の勇者って感じだ。筋肉の鍛え方が半端無い。軍人かな？

僕はその男の視線を意識しながら、次々面接を進めて行く。故郷に戻れば肉親に再会できる可能性が高いものは、希望により送り返すが、そうしたケースはまれで、大抵は目の前で家族を殺されて拉

致されていた。

中でも自分の幼い二人の子供たちを別々に売り飛ばされ、拉致される際に抵抗した夫と舅を目の前で惨殺された女性の場合は悲惨だった。確かに美人だ。ハリウッドの女優でこんな顔の人が居たような気がする。どうやら彼女は「白・黒・黄色、すべての肌色の美女を後宮に集めたい」と言うとある砂漠の君主に売り渡される寸前だったらしい。その君主の宦官長の所に送られるための手筈は殆ど完了していたらしいのだ。

「でも、幼い息子と娘はミッケリに連れて行かれたようで、そこから先は……」

号泣する彼女に、僕らも最大限の手は尽くすと言う話をする。すると彼女はいきなり土下座を初めて、お願いいたします、お願いいたしますと幾度も繰り返すので、ちょっと参った。僕が手を取って彼女を立たせ、兎も角も宿舎の方に行ってもらった。

さて、最後はその謎の男だ。僕は一か八か英語で問いかけた。

「差支えなかったら、生年月日と名前、出身地を教えてください」

「１９６８年生まれ、ラルフ・ヤング、フロリダ州ジャクソンビル生まれ。当然ながらひいきチームはジャクソンビル・ジャガーズだよ」

「あー、ごめんなさい。ＮＦＬの有名なチームって事以外、僕には分かりません」

「フットボールに興味は無い？」

「ええ、前世が日本人なのでね。僕の肉体は今の物とまるで別物でしたよ」

「ええ？　そうなのか？　ミサワとイワクニにちょっとだけ居た事

は有るが、日本女性と深く付き合うチャンスも無かったんで、日本語と日本文化に対する理解はさっぱりなんだ」
「基地に居たと言う事は、やっぱり軍人ですか」
「ああ。１９９３年からＵＳＳＯＣＯＭ所属だ」
「すみません、それはどんな部署ですか？」
「Ｕｎｉｔｅｄ　Ｓｔａｔｅｓ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓ　ＣＯＭｍａｎｄ　だよ。知らないか？」
「日本では日本語に翻訳されて報道されるので……ああ、特殊作戦を行うエリート集団じゃないですか？」

アメリカ特殊作戦軍か！　まさに今一番欲しいタイプの人材が来てくれたみたいだ。
ケニアに指導に出かけていた帰りに、ソマリア沖の海賊対策の現地調査に入るために飛ばしたヘリがロケット砲か何かで襲撃されて、その後の記憶が無く、気が付いたら裸で奴隷商人につかまっていたらしい。

「親に金が有ったら、シェイクスピアの研究をしたかった」けれど、諦めて軍隊に入り、奨学金を支給されてウェストポイントに入ったそうだ。それだって、ある種のトップエリートの経歴だ。アメリカの実業界なら、非常に高く評価してもらえるだろう。

「へえぇ、凄いなあ。貴方のような優秀な人材を待っていましたよ。それにしてもなぜ、ＮＦＬの話題を最初に僕に振ったんですか？」
「あんた、いやあ、陛下って言わなきゃいけないか。陛下の話を聞いていると、どうも近代化された国家で育った人間の良識って言うか道徳って言うか、そんなものが強く感じられてねえ。その英語を聞いて、てっきり二十世紀のアメリカ人かと思ったんだが……二十一世紀の日本人ねえ。しかも肉体は別物」

僕はバラク・オバマの登場について話し、このむかつく差別の根源を根絶やしにしたいんだと話すと、大いに喜んでくれた。

「向こうに彼女や奥さんは？」

「恋人は……別れた。軍人は嫌だって言われてね。その彼女に瓜二つの女性が、さっき話していたスフバという人だよ。檻に閉じ込められていた時に、色々話を聞いて怒りが込み上げて来たよ。本当にひでえ話だ」

僕はひょっとしてと思って金の笏に触らせてみた。すると……

「な、何なんだ？」

「語学能力が飛躍的に向上したんじゃないでしょうか？　ためしに帝国の公用語で話してみてください」

「え？　ああ。それにしてもそれは、何？　巨大なダイヤが付いている恐ろしく豪華な笏だねえ」

「あー、完璧ですね」

試したら、このルンドの主要国家の言葉は全て出来るようになったみたいだ。

「恐ろしいものだな。超高速学習マシンかい？　しかもコンパクトに収納できるし」

「僕も良くわからないんですが、この世界で生まれ育った人間は触れると激痛を感じるようです」

「ふーん」

僕はラルフ・ヤングを早速帝国軍に迎えた。最初は難色を示した連中も、彼の並はずれた能力の高さを知って、納得してくれたようだ。

ラルフは帝国軍初代参謀総長として大いに活躍してくれるようになるのだが……彼にとっては、初恋の人にそっくりなスフバにプロ

ポーズして、めでたく結婚した事の方が大事件らしかった。

僕と女王と国家の問題・4

ラルフ・ヤングが大活躍するようになるまでは、ずいぶんと色々な軋轢も有ったが、僕の差別反対の基本姿勢が全くぶれなかったので皆の見方も、比較的短い期間に変わった。

結果から言うと、炊き出し作戦はそれなりに効力を発したが、僕の奴隷商人の取り扱いが寛大に過ぎたのが災いして、後にとんでもない厄介事も興ったのだった。

やがて僕とガブリエルとの間に、男子が生まれた。目はグレーで髪は褐色のレイリア王家の色合いだが、面差しは僕に良く似ている。僕にとっては九男だが、レイリア王家にとっては久しぶりの男子誕生と言う事になる。お産はたまたま僕がレイリアに行く事になっていた麦の収穫を行う時期だった。

ちなみにその年は大豊作で、トウモロコシやジャガイモ、キヌアなどの雑穀、豆類などを連作障害を防ぐようにきっちり割り振って導入させたのが良かったようだ。

「やはりレイリア風の名前が良いよね」

「では、セバスティアンとします」

「それって、何か特別な意味が有る名前じゃ無かった？」

過去の歴史で、不出来な王が三代以上続いた後に即位したセバスティアンの名がついた名君が四人居るそうだ。五人目のセバスティアンならきっと名君になってくれる、そんな期待を込めたらしい。父王のマヌエルの名はつけたくなかったようだ。

僕はあくまで王配としての姿勢を取ったが、政治・軍事の顧問として送り込んだメンバーが帝国を基準に「遅れている」「貧しい」

と言いがちなので、生粋のレイリア貴族には不愉快な存在であっただろう。それでも顧問は全員レイリアと縁が深く、自在にレイリアの言葉を話す者を選んではいるのだが……

ラルフ・ヤングには「中世の価値観真っただ中」で識字率も低い連中に近代的な理念は理解しがたいのだから、宗教の力を借りろと言われた。貴族でも読み書きが不自由なものが少なくない。更に四則演算すら怪しくて、足し算も三桁になると無理とか割り算が分からんとか、本当に中世レベルだ。

「今年になって聖人になったエガス・モタって人は、このレイリアの貴族の坊ちゃんで、デカい修道士会を創設した人らしいな。あっちこっちで一杯学校をこさえたって？　陛下と生前、そんなに仲が良かったんなら、出来の良さそうな修道士さんたちに来てもらって、学校教育を早めに充実させたらどうだい？　義務教育が行きわたると、加速度的に陛下のプランも実現しやすくなると思うよ」

そう。あの散々世話になったモタ隊長はグスタフ港に自分で作った病院で、多数の弟子や後輩にみとられて亡くなったんだが……あの人はそもそもレイリア貴族の庶子だったのだ。僕は、学問がしたくて外国に出たと言う話と還俗して結婚したと言う弟の話ぐらいしか、個人的な話は聞いていなかったが……

「そうか。レイリアではまだまだ神聖教会の威光が強いんだなあ。中には僕を『悪魔』と思っている連中もいるみたいだから……ラルフさんの言うようにしてみよう」

僕は二人きりの時は原則英語で話し、『ラルフさん』と呼ぶ。あっちの世界を基準にすればかなり年上だし、個人的な本来の能力なら確実にラルフさんが上だ。ちなみにラルフさんの「さん」は日本語だ。気分的にしっくりくるから。

「今の大聖猊下が陛下のファンで、後継者レースの先頭を走る枢機卿は帝国出身でこれまた陛下のファンらしいが、二位以下は陛下を『悪魔かもしれない』って言ってる連中らしい。ここは一番、次も親帝国派に即位してもらうべきじゃないか？　あんまり政治工作もしてないみたいだから、ちょっと気になってさ」

「ああ、弟のヨハンに死なれてから……手薄だったよ。わかった」

「金と宝石でも送ったらどうかなあ。金は政治資金で宝石はお近づきの印で」

「それが良いだろうか？」

「即効性が有ると、俺は踏んだがなあ」

「どうもあの名前からして、苦手でねえ。ニコロの寵童上がりって事は、多分変態だし。ラルフさんだって、無駄に印象的な名前だって思うよね」

「確かに、二十世紀以降の地球人なら病的な雰囲気を感じる名前だな」

それでも早速デカい宝石類を見つくろって黄金を添え、ニコロ・ネスタが自分の後釜に据えるつもりだと言うアドルフ・マゾッホ枢機卿に、修道士会の件やら学校の件やら依頼がてら贈った。

これほど気にしなきゃいけないエリアが広がったんだから、役人軍人の中で若手のチームを結成して、それぞれ担当地域を割り当てて仕事をさせろと言うラルフさんの意見は尤もで、すぐにその案に従って組織を改変した。

「黒人奴隷上がりの俺の案じゃなくて、陛下のアイデアって事にしといてくれ」

そんな気を遣わせるような実状が、僕としては非常に申し訳なか

ったが「気にするな」と肩を叩いてウィンクするラルフさんって、出来た人だと思う。一応貴族としては一番下っ端の準男爵にして、帝国軍での階級も将軍にはしたが、まだ実際の部下はゼロだし、今の実情は僕個人のスタッフだが、折を見て本格的に軍に加わってもらおうと様子見の最中だ。

「なあ、陛下、暗黒大陸ってさ、夢も希望もなさそうな、嫌な呼び名だよな」

「そうだねえ。でも、ローマ帝国が存在しなかった世界でアフリカってのもなあ」

「このルンドでの人類の起源は、どこなんだろうな？」

「タンザニアのオルドバイ遺跡みたいな場所が有るのかなあ。考古学的研究なんてさっぱりだからさ、僕もわからない。でも、可能性は有るかもね、暗黒大陸と呼ばれている土地がルンドの人類の生じた場所って言う」

「まあ、それが違っても俺個人は気にしないが、暗黒ってのが嫌でさ。せめて夜明けとか、あけぼのとか」

「ドーン、Ｄａｗｎでドーン大陸ってのはどう？」

僕はその時はアメリカの無人探査機を思い浮かべてそう言ったのだったが……

「おお、いいなあ。まんま英語で？」

「うん。音も短いし、覚えやすくないか？」

それで、ドーン大陸に決まったわけだが……随分後になって、黒いスパッツをはいた芸人の持ちネタで「どーん」て言うのが有ったなんて思い出した。でも、誰も気にするはずが無いので良しとした。ハハハ

一年でレイリア国内の正確な課税対象を把握できる測量その他の基礎調査は整ったし、テージョの奴隷商人から解放した人達の家族

の捜索もかなり進展した。レイリア王宮に来ても、僕は大忙しだった。

そんなある日、ガブリエルが僕の顔を見て、ため息をついた。

「陛下は、私やセバスティアンより、あの黒人の将軍とお話なさる方が楽しそうでいらっしゃるから、時折寂しくなります」

確かに否定は出来ない。

でも、別の女に入れ込んだりするよりよっぽど良いと思うんだが……ここは一番、大人なんだから我慢して聞き役に徹した。言葉と言う物は迂闊に口にすると、時折恐ろしい効果を発揮するから、せっかくの努力が水の泡になったりするのだ。

どうやらレイリアの貴族の男たちの感覚では妻の妊娠出産期には、他の女を抱いて当然らしい。あるいはその女の用意をするのが正妻の『裁量』だか『たしなみ』だったりするらしいが、僕はそんな事はイヤだ。

それにしたって……レイリアでは、ちゃんと禁欲してるのに……マサエとトシエも細かく気を使っているのに……そこに関してこの女王陛下は無視なのかと、ちょっと腹が立つ。だがそれを悟らせるのも不味かろうと思って顔を合わせないようにして、抱きよせて背中を撫でてやる。

「ラルフ・ヤングは軍事の専門家で高度な政治的判断も出来る人なので、相談を始めるとつい長くなる」

「私では……何のお役にも立たないのですね」

「そんな風に思った事は無いよ」

「いえ、良いのです。私は変に出しゃばらず、陛下の御子を出来る限り沢山産めば、それで十分だと爺や達には言われてしまいましたし」

爺やと言うのはレイリア王国の宰相に据えてあるこの国の貴族だ。善良で王家に対する忠誠心も強く、帝国の顧問団が取り仕切る方が効率的であるとさっさと認めてくれたのは良いが……男女の事に関する価値観は、この国の古い貴族階級のままだ。

「爺やの言うように女王は本来、血筋の繋ぎにすぎないのですし、セバスティアンを無事に王位に据える日まで、万事陛下にお任せすれば良いのですものねえ」

「僕は爺やの考えとは違うな。貴女も今は勉強中、修行中だが、立派に王としてやって行けると思うよ。それを言うなら、爺やたちだって……」

「爺やたちだって、陛下の遣わした役人たちがこの国に来るまで、各地の正確な麦やそのほかの作物の収穫量など知りませんでしたし、ちゃんと調べようともしませんでした。毎年飢え死にする人間がいて当たり前だと思っていたようですし……褒めたものではございませんでしたもの。その上、父王のように思いつきで勝手に無駄遣いをしていたら、そりゃあ国が破産して当然でしたわ。情けない話です」

「でも、爺やたちみたいな貴族は多いからねえ、怒らせないで、折り合いをつけないと」

さすがに連中は役立たずだが、邪魔だけは一人前にできる……などと言う本音は口に出せない。

僕がモタ隊長が設立した修道士会の助けを借りるつもりだと言うと、ガブリエルは大いに感心してくれた。

「私も含めてレイリアの人間は、神聖教会で聖職にある方々は、特別に神に近い方たちだと信じてますもの。皆きっと、修道士様の御

言葉に喜んで従うでしょう。ましてやエガス・モタ様はつい先ごろの神聖教会大本山の列聖式で、聖人のおひとりとなられました。三百年ぶりにレイリアから聖人様が出たと、民は大騒ぎして喜んでおりました」

「そうなんだってね。僕は帝国に居て、そこまでレイリアの皆が熱狂的に喜んでいるとは知らなかったよ」

「でも、御生前に陛下と聖人様が御友人であられた事は、あまりこの国では知られておりません。もっと皆に……宣伝なさったらいかがでしょうか？」

「ああ、分かった。良い事を教えてくれたな」

ガブリエルは、僕の目をじっと見た。

「本当に……少しはお役に立ちましたか？」

「ああ」

「でしたら……あのう」

「何だい？」

「医者に、そろそろ構わないと言われましたから……グスタフ様」

彼女が僕の名を呼ぶときは、そういう事だ。三人とか四人とか子供が産まれたら、僕はまた男用の避妊薬を飲むつもりだった。だが……今は飲んでいないのだ。

「年子が出来ちゃったら、大変じゃないか？　ガブリエルのお祖母様みたいに毎年のようにお産じゃあ、負担が大きすぎるだろう？」

レイリア王室の女性たちは、先代の王妃たちをのぞけば皆多産だ。ガブリエルの祖母にあたる先々代の正妃は十五人の子を産んで、あちこちの王や大貴族と結婚させている。その前の正妃も十二人とか十三人とか生んでいるのだ。滅茶苦茶な国家運営でも虫の息で続いた背景には、こうした網の目のように張り巡らされた多国間の姻戚関係のおかげもある。

「私は、適う限り沢山の御子が欲しいのです」
ガブリエルは多産は多幸なのだと信じているようだった。
「本気なら、僕はもちろん構わないが」
「だってお腹に御子がいる間は、お会いできない時間も一人ではないですもの。セバスティアンがお腹にいる間も、幾度も『父上が御留守でも頑張りましょうね』って語りかけていたのです。幾度も」
「トリアで一緒に、住むかい？」
「……黄金宮には……たくさんの方々との想い出がお有りでしょうし、今もお二方がおいででしょう？」
「うん」
「私は……弱いのです。そして我がままですから。最初の御約束通り、私はこの国で女王として暮らします。グスタフ様はきちんと御約束を守ってくださいますし、冬にはトリアにも伺えるのですから。マサエ殿とトシエ殿も……短い間なら、我慢してくださいますよね」
「あの二人の名前が出てくるとは思わなかったよ。そうだなあ。今の黄金宮の取り仕切りはあの二人の姉妹がやっているようなもんだし、落ち着かないか」
「いえ、そういう訳ではありませんが……お互いの気持に必要以上に波風が立たぬ方が良い、そう思うのです。その為にも最初の御約束を、ちゃんと守った方が良いのですわ。きっと」

心の平和の為に距離を置く……僕の中のガブリエルに対する感情が育ったせいか、賢明だと思う一方で、どこか寂しいとも感じてしまう。

「ガブリエルはこの王宮の主で、レイリアの女王だ。だから、改めて約束しよう。レイリアでは僕はガブリエルだけの夫でいよう」
「嬉しい……」

本当に嬉しかったのだろう。涙がぽろぽろとこぼれてくる。キスをして涙を拭いながら、昔セルマに随分残酷な事を言ったものだと、ふっと、思い返した。……マサエとトシエに直接会ったのか、姿を見た程度なのか知らないが、ガブリエルが一番気に病んでいるのは、僕が百歳になった時点の美保との事らしいと、ふと分かってしまった。

程よい嫉妬はスパイスだが、何だかそんな風にはとても思えなかった。ただ、僕を本気で愛してくれるようになったらしいこの人を、これ以上悲しませたくない。そんな気持ちで一杯になったのだった。それなのに実際にしたことと言えば……

抱きすくめた体が熱を持ちながら、甘い香りを放ち始める。僕は煽り立てられて花びらのような唇を存分になぶった。それから秘められた部分を撫で回し掻き回しながら、形の良い耳に僕が幾つもの『はしたない言葉』を囁くと「いや、いやあ」と羞じらいの声を放ちつつ、真っ赤な顔を振りたてて腰を右に左によじる。そして……瞬間悲鳴を上げたくせに、その悲鳴は明らかに満たされた歓びにうわずっていた。やがて間欠的に汗まみれの裸身を痙攣させ、僕の動きに応じて腰を使い始める。生々しい呻きが吹きこぼれる。

「僕がもっと欲しい？」

そう聞く僕も大概鬼畜だが、そうされる事でガブリエルが一層激しく昂ぶったのもまた事実だ。

「ヒィーッ……」

最後は深く突き上げひと抉りした。腰を慄わせ、ガブリエルは喉を絞り上げる様な悲鳴を上げ、ガクリと体中の力を失って首を垂れた。

愛情の結果か、肉欲の果てか、僕にも判然とはしなかったが……後から考えると、この夜の結果、ガブリエルが二人目を身籠ったの

は確実なようだった。

僕と黎明の大陸・1

レイリアの破綻した国家財政の再建の道筋が立った頃、ワッデンから緊急の通信が入った。フレゼリク・レオポルドが危篤状態になったと言う内容だった。僕は特別仕立ての鉄道馬車で真夜中の国境を走り抜けた。途中六回の馬の交換が為されたが、交換時間は毎回十分以内で完了し、寝台車仕立ての車両の中で僕は丸一昼夜と半日を過ごした。

あの可愛らしかったコルネリアを引き取って帰った折は、途中で宿泊しのんびり五日がかりで戻ったのだった。あのころは馬を乗りついで走り続けても黄金宮からは丸三日近くかからないと、ワッデン王宮にはたどり着けなかったのだ。即位してから五十一年で随分と交通事情も変化したが……考えてみれば、おしゃまだったコルネリアも、ちょっと生意気だが頼りになったコルネリアの夫で僕の弟のヨハンもすでに亡くなっている。

「また、僕は……こうして、残されてしまうのだな」

フレゼリク・レオポルドはもう六十もとうに過ぎているし、数年来の持病は有るし、一人息子のキルデリク十三世はどうやらまともに育ちあがったようだし……僕も覚悟はしていたのだが……いざとなると堪える。

病室に案内された時、ずっと昏睡状態にあったと言う彼が、一度だけ目を開け、僕に視線を向け微笑んで小さな声で「父上、おはようございます」と言った。ワッデンに移るまで、僕とフレゼリク・レオポルドはほぼ毎朝、一緒に朝食を食べていたのだ。だから、その事が強く彼の脳裏に有ったのだろう。

僕の一日後にルイサとキリャとユキヒコ・ヤスヒコ、二日後にネ

ストルとヤチャイ、ピニャ皇子と亮太の娘シャルロッテの夫婦、ミゲル夫妻、昨年からミズホに戻らず帝国に留まっていた亮仁と碧子などの血縁者がやってきた。だが、二度と目が開くことは無かった。静かな寝息を立てたまま三日の日が過ぎ、やがて静かに消え入るように呼吸と鼓動が停止したのだった。

臨終を伝える医師の声に、姉妹や姪たちが号泣した。泣きはしなかったが、一人息子でワッデン国王のキルデリク十三世の悲しみが、一番深いものに感じられた。

「お祖父様、父上は最後に何を言いましたか？　何か一言帝国の言葉で、小さくおっしゃったとか介護の者から聞いたのですが……」

「僕の顔を見てちょっと微笑んで『父上、おはようございます』そう帝国の言葉で言った。思えば幼いころからずっと黄金宮の僕の手元に居る間は、毎朝そういって一番に挨拶してくれたのだ。物心つかぬうちに母親と死に別れたから……一番最初に覚えた言葉は『父上』だったのだよ」

「そうでしたか。父上は私とも毎朝必ず朝食を食べてくれました。『お前のお祖父様の皇帝陛下が、毎朝御一緒に朝食を食べて下さったのが、子供心に嬉しかった』よくそうおっしゃって……」

僕は見た目が僕より年上の孫を抱きしめた。髭も生やした一人前の男をこう言うのは可笑しいが「この子は自分の孫だ」そう、しみじみ思った。そして、息子がこの孫を慈しんで育てたのだと、痛いほど理解できた。

以前ワッデンを訪れた時も葬儀だったが、今度も葬式になった。それも息子の葬式。

フレゼリク・レオポルドは帝国の皇太子でもあったが、人生の三分の二以上をワッデンで過ごした。葬儀には僕の妻になったガブリエルも参列して図らずも顔合わせとなったが、皆彼女を『身内』と

して受け入れた。

葬式なのに、こんな言い方は変かも知れないが、良い葬式だった。ワッデン内外の弔問客一人一人が、おざなりではない、真剣な深い気持ちを持って故人との別れを惜しんでいた。これもフレゼリク・レオポルドの生き様なり、人柄なりのおかげだろう。

棺の蓋が締められた瞬間、僕はそこにアネッテの姿を見た。そして、幼子の姿のフレゼリク・レオポルドに手を差し伸べしっかり抱き上げると，僕に向かって振り返りニッコリしたと思った瞬間、母と子の姿は消え失せた。

「お祖父様、どうなさいました？　今、アネッテとおっしゃいましたが」
「あ、ああ。何か見えたか？」
「何か、白い光のようなものが動いたように感じましたが……」
「アネッテが、息子を迎えに来たように僕には見えた」
「ならば、本当にお祖母様がおいでになったのでしょう。いつも父上はお祖母様の描かれた自画像を書斎に飾っていましたから」

葬儀の後、僕はそのアネッテが描いた自画像を見せて貰った。描きかけの時に見た記憶が有る絵だった。あの棺の傍らで見た姿そのままだ。

「今夜は夜ふかしにお付き合い願えますか？」
僕も眠れる気がしなかったので、王である孫息子の申し出を受けた。
「やはり、このドレス姿だったか」
「何か特別な意味が有るドレスなのですか？」
「アネッテが子を産む事に同意してすぐに、僕が送ったミズホの極

上のシルクで作らせたドレスだ。大層よく似合っていたので、はっきり覚えている」

生前のアネッテが心臓が弱く、お産を許可するまで僕が悩んだ話をした。

「お祖母様はきっと、お幸せだったのだと思います。そして父上をこれまでずっと、見守っていて下さったのでしょう」

僕もその意見に賛成だった。

「それにしても、お祖父様……お祖父様は、ずっとお若いままなのですね。父上や亮仁伯父上が描かれた昔のお祖父様のスケッチなどを幾枚か見た事が有りますが、そこに描かれているお姿のままと言うふうに見えます。私が幼い頃、一度だけ黄金宮に伺って御挨拶申し上げた時と、やはり同じお姿ですし」

「おかげで妻にも子供達にも先立たれてばかりだ」

「つい先ほど、帝国の役人が帝位の継承順位の変動についての確認書を持ってきましたが、お祖父様なら私よりも更に長生きなさり、また新たな御子も生まれましょうから、あまり意味が無いと思ったのですが、まあ、形式ですから署名しておきました」

「ワッデンの国内は、以前とは見違えるほど豊かに穏やかになったようだ。お前の父上は、それなりに良い仕事をしたのだと思ったよ」

孫息子は僕の言葉に頷いていた。

その夜はそんな具合に暖炉の傍らで、語り合って朝まで過ごしたのだった。

その後、僕はトリアからテージョに向かう新型軍艦にガブリエルを乗せるために、鉄道馬車の特別車に僕と同乗させた。亮仁・碧子もトリアのレーゼイ邸に一緒に送る事になった。その帰りの馬車の中で、宮様は亡くなる前に、初恋の人と半年ばかりであったが所帯を持てたと言う話などを聞かされた。

「フレゼリク・レオポルドがもういませんから、当分こちらには顔

を出さないかもしれません」
　亮仁はそんな風に言う。碧子も死別した夫の遺品の整理などが出来ていないと言った。
「私のお葬式は多分、ミズホで行う事になるでしょうね」
「碧子……」
　ユリエに良く似た娘にそんな風に言われたのがショックで……僕の胸に重い痛みが走った。さすがに。涙はこらえたが。
　三人をそれぞれ送り届けると、幾つかの懸案事項を片付けるべく黄金宮に戻り、御前会議に出席した。

「ドーン大陸の内陸部への立ち入りに制限を設けておられるのは、なぜですか？」
「あの大陸は、人間以外の様々な生き物たちの楽園なのだ。それを破壊して農園や鉱山を無理やり作る必要性を僕は認めないし、今の医療技術では治せない様々な風土病に遭遇もするだろう。それが帝国に持ち込まれたら大変だ。ともかく開発は破壊でもあるのだから、特別な必要性が無い限り、当然制限すべきだ」
「開発が破壊でもある、なるほどそういうものですか」
「森が一度消えたら、再生には恐ろしい程の長い時間がかかることは、君たちも少しは認識しているだろう。あの大陸の巨大な森は、この世界全体の気候や大気の状態を適切に保つのに重要な役目も果たしているのだよ」
「森にはそんな働きが有るのですか？」
「ああ。そうだ。あそこの森が失せたら、帝国でも雨の降り方や気温がおかしくなって、大変な天変地異が連続して起こるかも知れない」

　僕はちょっと大げさに脅かしておく。大げさでもないのか？　ともかく御前会議の連中に温暖化や気候変動の話をしても反応は薄かった。何より僕に説明能力が無いのが不味いのだろう。専門家の力

を借りて、何か皆の注意関心を喚起できないか、しばらく僕は頭を悩ませていたが、良い方法が見つかった。

現在、あの忌々しい『トリア絵入り新聞』の向こうを張って、僕は『帝国経済新聞』を発行させている。表立っての新聞社の設立者は無論別人だ。政界・財界の情報公開こそが、適切な社会運営と腐敗・汚職の防止に最も有効に働くと言う理念を発表した若い研究者のグループに僕が話を持ちかけたのだ。

海外の大ニュース、毎日の各商品の相場の速報、各役所・軍の最新の動き、御前会議の議案とその内容の簡単な紹介、新しい法令の紹介、有名企業の決算報告、各地の銀行の動向、金利の変動、などなど、一種の情報操作でもあるが、それでも今まで何の情報も出されていなかった物を継続的に出すのだから、それなりの意義も有る。記事自体はなるべく客観的な事実のみ速報する報道姿勢を貫かせた。それとは別に解説記事を幾つか連載させた。特に新しい法令とか、海外の事件と帝国とのかかわりとかに関する解説記事は人気だ。

中でも特に読者の投稿欄はその後、国会の開設請求にまで話が発展して行き、僕もそれを認めるのだが……それは随分と後の話ではある。

もう一つの人気記事は、天気予報だ。精度はそれほど高くは無かったが、それでも天気にその日の商売や作業が影響を受ける分野に従事する人は大変に熱心にチェックしたようだ。ともかくも天気・天候を科学的・分析的に見て、日々の活動と関連付けて考えるのが、帝国ではごく当たり前になって行くのに、大して時間はかからなかった。

気候変動や植物のもたらす効果と新大陸やドーン大陸の密林の働きについての啓蒙記事も、こうなってやっと効果が発揮されるようになった。

更には、父上の庶子の一人で世界規模での貧困の撲滅と、政治や経済との連携に熱心な活動家に『社会新報』を発行させている。

こちらは社会欄に大きな力を注いだつくりだ。綿密な取材と正確な報道を前面に押し出して、編集している。ドーン大陸における悲惨な歴史なども紹介するが、何より帝国内での貧しい家庭の子供の直面する厳しい実態について、大いに注意を喚起したのはこの新聞の大きな功績だろう。

後に保育園が整備され、幼児の労働を制限する法律が出来たのは、この『社会新報』のおかげだ。

それでも、御前会議のメンバーは僕が領土の拡大にあまり熱心ではないのが不満であるようだった。

連日の話題が、どうしても領土を拡張させたいと言う方向に向かいがちだった。帝国が今は拡大を控えているからこそ、他の国も様子見に回っていると言う事情もあるのだが。なかなか理解は得られない。

僕は未知の風土病や害虫・寄生虫の類の恐ろしさを大いに宣伝している。最も医療水準の高い帝国ですら治療法が確立していないのだと。

「あーあ、みんなわかっちゃいないから、困ったもんだ」

御前会議を終え、夕食の後、僕は自室で久しぶりに、マサエとトシエにマッサージして貰っていた。

「大抵の人間は陛下より頭が悪いのですから……御苦労なさいますね」

「これだけお仕事なさってますのに、まだまだお仕事がお有りになりますの？」

「まだ、仕事を割り振る人間の数が不足なんだな。前よりそれでもマシなんだが」

「あのドーン大陸で、また新しい金山が見つかったとか、噂になっておりますけど」
「うん。金も凄いし、ダイヤモンドもすごい。でも、気候は厳しいし、病気は怖い」
「ミッケリ辺りの奴隷商人は、陛下を恨んでいるそうですから、お気を付け下さいねえ」
「ああ、本当になあ」
「あの……陛下……」
「トシエとも相談したのですが……」

二人とも、何か僕に聞いて欲しい願いが有るようだった。

「今度は出来ましたら、娘を」
「そうなんです。私も娘が欲しいです」

マサエもトシエも、子供が欲しいと言う。今度は自分の手元で育てたいのだそうだ。

「生み分けか。できるかなあ。自信無いよ」
「あの、そろそろ陛下だけが触れる事の出来る石の所で、何かお告げが貰える頃でもないですか？」

確かにマサエの言うように時空管理局の話を聞いたのは、去年の冬の初めだった。そろそろ丸一年か。

「そういう事が教えてもらえるかどうか、全然分からないが、聞いてみよう」

その夜は大人しめに、添い寝して貰うだけにとどめた。

翌日、あの石の所に行ってみる。今年も同じ女性の声が聞こえるだけで、映像は無かった。

「近く、新たな人材を投下の予定ですが、着地点その他が未定です」
「男性か女性か、どっちだろうか？」
「男性です」
「人種的な特徴は？」
「地球で言う所のコーカソイドに属する形質ですが、それ以上は確定していません」
「僕の庶子を産んだ女性二人が、娘を欲しいと言うのだが、産み分けは可能だろうか」
「許容範囲です。希望するなら女子確定とする事も可能です」
「お願いします」
「では、そのように」
次の瞬間、ピッ！　と言うような音が響いた気がしたが、痛みも何も感じなかった。
「これで、これから一年間作る子供は、すべて女児になります」
「その後は？」
「ランダムです。二十一世紀の産み分けの技法はある程度の効果は有りますが、あくまである程度です」
「美保は、どうしている？」
「最終的な仕上げ段階です。投下後の寿命も、貴方に見合った物になる予定です」
どこでどうしていると言う具体的な情報は、与えられなかった。
「どこかルンドの家庭に赤ん坊として生まれる形を取るのだろうか？」
「まだ詳細については、お伝えできません」
「ともかく僕が百歳の段階で遭遇するのは、確定なんだな？」
「それは如何なる場合も、動かない条件です」
「ラルフ・ヤングや、今度来る人物の寿命は？」
「通常のルンドの人間より少し長め、と言う程度でしょう」
「不老不死的存在は、僕とやがて来る美保だけ？」
「そうです。それは確定です。他にご質問は？」

「新聞や、社会活動家や、国会の取り扱いは？　大陸の運営方針は、あれで良いかな？」
「貴方にお任せです。重ねて申しますが当時空管理局の存在はトップシークレットです。秘密事項の取り扱いはくれぐれも慎重に願います。では、また来年お会いしましょう。クリア・エーテル！」
相手は、やはり生身の人間なのではないか？僕にはそんな感じがした。
「クリア・エーテル！」

その夜から、早速、順にトシエとマサエの希望を適えるように努めたが、上手くいった自信は無かった。しかし……

「きっと、大丈夫ですわ」
「上手くいったと思います」

マサエとトシエは、そんな風に請け合った。

僕と黎明の大陸・1（後書き）

誤字、ボロボロありますね。すみません。
気が付くと直してますが、お知らせいただくと助かります

ドーン大陸内陸部への進出を、僕はあえて積極的には行わなかった。

それでも、金鉱山とダイヤモンド鉱山が有ると思われる南部エリアは丹念に調査をした。当座の費用に充てられるほどの産出が見込めればと思ったのだったが、非常に豊富な鉱脈が見つかり、助かった。極めて年間降水量も少ない土地であったのも幸いして、大々的に露天掘りで運営が出来て、費用が少ない割に非常に儲かる有り難い鉱山となっている。あまりに資源量が豊富なので、相場の管理に骨が折れる程だった。

ラルフ・ヤングがダイヤモンド鉱石の選別にグリースを使うべきだと提言して、ほとんど活用されていなかった帝国領内の油田に精製設備を作り、微々たる量ではあるがグリースを作り出してくれた。このグリースは次第に帝国で使うあらゆる機械類の潤滑剤として用いられるようになっていった。

更にはホワイトガソリンをランプに用いたり、防水材や道路舗装にアスファルトを用いることが一般化したほか、パラフィン紙やワセリンなども製品化されていった。

そうした方面の僕に欠けている様々な面を、ラルフさんは大いに補ってくれたのだった。

それにしたって、素朴な狩猟採集の暮らしをしてきた現地の人たちからすれば、露天掘りの様子を見ても、あの正体不明の巨大な穴は一体全体何事かとしか思えなかっただろう。

僕にはそうした素朴な暮らしをする人々を脅かし、本来自分の物では無い土地から富を収奪する事に対するためらい、あるいは恥じる感情が有ったが、御前会議の皆にそうした僕の、二十一世紀の先

進国で生きてきた人間の感覚など理解できようはずも無かった。

「なぜ、積極的に更なる鉱山の開発や領地獲得に動かれませんので？」

「長い目で見て極度の富の偏在は、好ましくない。それに特定の地域が極度に貧困ないし飢餓状態に陥るのも防いでおかないと、後々厄介な問題になるから、ダメなんだ」

「新しく開発を始められたダイヤモンド鉱山と金鉱山の含有量は素晴らしいものだと聞きますが、近隣のほかの地域は調査されませんので？」

「あの新鉱山は、ドーン大陸での活動資金を稼ぐのが目的だ。他にもいくつか有望な鉱山となる場所、未来に大いに必要とされる資源が眠る場所、色々あるが、元来、それらの富はあの土地の者たちのものだ。だが、今のあの土地の住民にはそれを活用する方法も知識も無い。将来的には土地の人間が自力で鉱山の運営が出来るようになるまで、気長にやっていきたい。それがこの世界全体にとって最良の道だからだ」

「壮大な慈善事業を始められましたので？」

「慈善でもないよ。新しい金鉱山とダイヤモンド鉱山で、すっかり出した分は回収できて、むしろ儲けた格好になる」

僕がドーン大陸における収支報告を提出して、一応御前会議のメンバーの『壮大な慈善事業』という批判はかわす事が出来た。僕は全ルンド的なバランスからみて、慈善事業の何がいけないんだと言う気持ちも有るが、やはり財政基盤が弱ければ活動を継続できないのも事実だ。

現地住民との争いは避けるようには務めたが、それでも小競り合いは発生した。発生はしたが、可能な限り非致死性兵器で応戦した

ので、戦闘による死傷者は双方出ていないはずだ。

一番良く使われたのは催涙剤と嘔吐剤だ。稀に麻酔銃が使われたが。

ともかくも「悪魔の使い」とか「異国の神」とか言われて恐れられるようになれば、それで十分なのだ。後は食糧などを与えて懐柔した。アルコールや麻薬類は与えない。与えるのはあくまで食料だ。希望者にはアイリュから持ち込んだキャッサバやトウモロコシ・ピーナツ・カボチャの栽培方法を教えた。地域の実情に応じて東洋の米・バナナ・サトウキビを導入する場合も有った。ヒエの在来種と油やしの品種改良にも取り組んでいる。

力を入れたのは医療活動と初等教育の普及だ。まあ、ドーン大陸の西海岸、概ね地球で言うモーリタニアより南の大西洋に面した地域だ。幸い対岸のテツココ王国とアイリュ帝国が友邦国家なので、何かと便利だ。

医療施設はモタ修道士が設立した『知の光修道士会』に資金提供をして運営を丸投げした格好だ。

小学校は各港周辺に最初は一校づつ開いた。教員は解放奴隷達を充て、赴任地は各々の出身地の側とした。

まず、子供を集めるのに、地球での過去の例で効果が有ったと言う給食を無償提供する方法を取った。

「お昼を出すから、話を聞きにおいで」と言う訳だ。出すのはその土地でなじみの有る物、あるいは少し珍しくて現地で好まれそうな物とした。それが無理な場合、菓子類を渡す事も有った。

最初は見事に食べ物だけを取りに来る者が殆どだが、そのうち好奇心が強く知的能力の高い子供が継続的に通うようになる。そうすればしめたものだ。

ただ、来るのは男の子ばかり。女の子は気持ちは有るみたいだが、

伝統的な性的差別というか、役割分担をさせられていて、子守やら家事やら、あるいは異民族の男が居る様な所は物騒だと親が思っているとか、諸々の事情で今の状況のままでは難しそうだ。

帝国本国でも女子教育はまだ未解決の課題だ。政治やビジネスの世界で活動する女性は男の三分の一にも満たないのが現状だ。女性の教員がもっと増えないと、こうした土地での教育支援も難しい。だが、女性に初等教育が行きわたると乳児死亡率が劇的に下がる事が示すように、大きな社会的な意義が有る。早急に何か有効な手が打てると、これからのあの大陸の未来も大きく変わるのだが……

ともかくも『飢餓大陸』などと呼ばれるような悲惨な状況に陥らないように、予防措置的に、これまでも実行可能な手段を色々とってきた。まずはレイリア商人らが開いていた二十箇所余りの西海岸沿いの各港の設備を拡充し、守備部隊と小学校・病院・食料を得る農園を配備した。

怖い怖い伝染病対策は、殺虫剤や蚊帳、蚊取り線香の使用のほか、東洋の雑草でヨモギの仲間が、荒れ地でも栽培しやすく煎じると恐ろしい風土病に大きな効果を発揮することが分かってきたので、各港周辺で栽培させている。

地球のアフリカが飢餓大陸になった、そもそもの原因から発生しないようにする。

これが基本方針だ。その意義がわかってるのはラルフさんだけ。おぼろげにヤガー君が分かってるけど。御前会議の連中は何もわかっていない。

「うーん」

僕が庭先でうろうろして唸っていると、ユキヒコ・ヤスヒコを連れたキリャがやってきた。

「まあ、どうなさました？」

「ドーン大陸の女の子たちへの教育なんだがなあ……」
「あ、その件につきまして、私、ちょうど申し上げることが御座いました。ルイサ姉様から伺ったのですが、女子修道院の若い修道女の方々で、ドーン大陸での医療奉仕や女子のための教育指導に積極的に参加したいという志のある方々の派遣に、父上が御協力下さらないかと言う話が出ているようなのです」

生前のセルマはチャスカともキリャとも関わりを持とうとしなかったが、セルマの娘ルイサは社交的で腹違いの妹キリャとも気が合うのだ。
ルイサはセルマから女子修道院と皇室の橋渡し役をうけついだ恰好になっている。

エガス・モタの列聖は、神聖教会の内部に強烈な刺激を与えたようだ。彼の生前の社会的な活動に影響された若い聖職者が、今や大量にいるらしい。そしてそれは女子修道院の修道女たちも例外では無かったのだ。

僕はルイサを呼んで女子修道院側との交渉の橋渡し役を頼んだ。
やがて、ドーン大陸に向う修道女たちのメンバーが決まり第一次の派遣隊がトリアから出航した。

「教会とやらの連中にも、グスタフの志を支える殊勝な者たちがおるんじゃなあ」
修道女たちを見送りながら、ヤタガラスがこんな事を言った。
「エガス・モタは修道士だったじゃないか。教会にはいろんな人間が居るのさ」
「ふーん。難しい事は良くわからんが、あの女子たちの志が天晴れなものだと言う事は我にも分かる」

修道女達の乗った船の出航後、僕も久しぶりに港から軍艦に乗りテージョに向った。ガブリエルは既に第二子を妊娠しているとの知らせを受けている。

「我は今度の嫁の所は遠慮しておこう」

「行かないのか？」

「ああ。何だか気が進まないなあ。嫁の気立ては悪くなさそうじゃが……我と土地との相性が悪そうじゃ。我はしばらくミズホに戻っておるよ。今のうちに碧子や亮仁ともゆっくり話をしておかねば、後悔しそうじゃしのう。何か、あの二人に伝言は無いか？」

「父として心から愛している。離れていてもいつも大切に思っている、そう伝えてくれ」

「分かった。では、また会おう」

ヤタガラスはミズホへ向かう船に鳥の姿になって飛び移った。ミズホの船はどの船もヤタガラスを鄭重に扱う。皆、ヤタガラスを海の安全と商売繁盛の神だと信じている。事実、ヤタガラスを乗せた船は沈まないのだった。そのヤタガラスが碧子と亮仁についてあんな風に言うからには、何かしらのはっきりした予感が働いているのだろう。

「陛下！　お戻りになるまでにはっきりいたしますわ」

「二人で頑張って、御留守をお守りしますー」

トシエとマサエは最新流行の帽子をかぶって、声を張り上げて僕に手を振っている。「はっきり」とは、妊娠しているか否かと言う事だろう。やれやれ、若いメイドや女官には大きな声を出すと「お行儀が悪い」とか「はしたない」とか小言を言うくせに。だが、二人ともますます昔のユリエに似てきた。いや、あの二人が意識的に似せているのだともいえる。その癖、ユリエよりずっと陽気で、意

識的に僕の感情に深く踏み込まないようにしているのも、ある種の賢さだと言える。

「愛してるよ」

そう言って、僕は二回投げキスをした。何だか受けたみたいだ女性たちに。トシエとマサエは自分たちに向けてだと自信を持っているみたいで、ニッコリ笑顔を返した後、二人で顔を見合わせクスクス笑っている。

船は岸壁を離れた。

とりあえず今は鐘で船の発着を知らせているが、何かもうちょっと音楽ぐらい有った方が良いのになとは思うが、まあ、絶対に必要と言う程でもないのでつい後回しになっている。このルンドで遅れているものと言えば、音楽もその一つだ。十九世紀レベルなら当然登場しているはずの楽器類が、全然まだ姿を見せていない。僕だって手すさびにリュートを引く程度だ。ギターもヴァイオリンも存在していないのだ。

そんな事を航海中考えていただけに、テージョ港に軍艦が接岸した途端、にぎやかな音楽が鳴りだしたのにはびっくりした。それも西洋風のマーチングバンドじゃなくて、オスマントルコのメフテルハーネと呼ばれた軍楽隊の曲目だ。ジェッディン・デデンと言ったか確か『祖父も父も』と日本語訳される有名な曲だ。薬のコマーシャルやドラマの主題歌に使われたから、僕でもこれならわかる。ただ、歌詞はトルコ語だから全然知らないんだが……

「偉大なる国よ、輝く祖国よ」
「我らの自由を勝ち取れ！」
「親愛なる陛下のために」

「我らは世界に名を轟かす」

解放奴隷の男性たちが、帝国軍のズボンを穿いて、碧色のビロードに金色の縁をつけたトルコのカフタンみたいな上衣を着こんで歌いながら練り歩く。楽器は打楽器と金属製・木製の管楽器が主な様だ。演奏されてみて、なるほどと思ったのだが、これまでこのルンドにはシンバルひとつ存在しなかったのだった。

それにしたって、楽器の準備からマーチングまで、まったく存在しなかったところから作り出したんだから大したもんだ。僕も拍手喝さいして、演奏した皆をたたえた。港は万雷の拍手と歓声で大変な騒ぎだ。

「この曲の題名は『親愛なる陛下のために』としました」

他の者が居ると、ラルフさんは僕に敬語を使う。帝国から早めにテージョに向ったと思っていたが、どうやらこのための準備の都合だったらしい。

「素晴らしかった。元の歌詞の意味なんかは全然僕は知らないが、メロディ・リズムと歌詞がちゃんといい感じに一体化してたね」

「帝国軍でもそろそろマーチングバンドが必要だろうと思ったんですけどね、モダンな金管楽器なんかはまだこっちには無いんで、揃えられそうなものでやるとなると、トルコ式が一番いいかなと思いまして。地球の軍楽隊のルーツですからね」

「音楽を聴くだけでも敵が逃げ出したって言うねえ」

「まあ、そんな戦争は起きないに越した事がないんですが、バンドは欲しいですよね」

「確かにルンドは楽器の種類が貧しすぎる。これじゃあバンドもろくに組めないよね。でも民族楽器の類を色々取り入れて、地球とはまた違う良い音楽が出来て行くかもね」

「オリジナル曲は、他の連中に任せます。俺としてはとりあえず、なじみのポップスやクラシックの名曲を、このルンドでも当たり前

に聞きたいって欲求が強いですよ」
「ピアノの開発なんか、大変だろうなあ」
「でも、俺もピアノは弾きたいし、聞きたいですから、頑張ってみます」

どうやら、ピアノの出現もそう遠い未来ではなさそうだ。

聞けばラルフさん、ハイスクール時代はブラスバンド部で活躍していたらしい。そのうちトランペットやその他の金管楽器類をこっちでも再生しそうだ。

王宮までは軍楽隊が練り歩く後を、のろのろ馬車でついて行ったのだが、テージョ市民の盛り上がりぶりは凄かった。軍楽隊の音楽に合わせて、手拍子を打って、一緒に歌ってるのだ。

王宮に到着すると、ガブリエルが満面の笑みを浮かべて僕を迎えた。腹に二人目が居るらしいが、まだ目立たない。

「お帰りなさいませ……こう申して、かまいません？」
「構わないよ。ただいま」

確かに、このテージョの王宮も今や僕の家になりつつあった。

僕と黎明の大陸・3

レイリア女王ガブリエルがセバスティアンの年子の弟にあたる二人目の息子アルフォンソを無事に生んだ同じ年のうちに、トシエとマサエはそれぞれ僅か十日違いで娘を産んだ。トシエの娘がヒサエ、マサエの娘がカナエと名付けられた。

即位して五十三年目、五十四年目は新しい命と出会った一方で別れが相次いだ。大聖ニコロ・ネスタが亡くなったと思ったら、ワッデンのキルデリク十三世に王子が生まれ、亮太とマーシャの娘・シャルロッテが娘を生んだ。二人のひ孫が生まれた事で、自然の流れとはいえ、僕もれっきとしたひい祖父さんだ。凄く年を取った気がする。

別れは……自分で予想していたように碧子との別れは辛く感じた。前もってヤタガラスが知らせてくれたので、遠いミズホでもどうにか死に目に会えたのではあったが……子に先立たれるのは、やはり悲しい。

葬儀を終えて気分が落ち込み、帰国してからも立ち直れずにいたのだが、亮仁もそうした気持であったものか、寒くなってから引いた風邪がこじれたのがきっかけで、思いの外あっけなく亡くなってしまった。そして亮仁の葬儀には間に合わない事がはっきりしたので、碧子の一周忌に合わせて墓参りをする格好になった。

ちょうど間の悪い事に、ドーン大陸で大陸の東海岸側、地球で言うタンザニア沿岸部の港を根城にしている東大陸の砂漠の大君主国の奴隷商人どもが帝国が調査管理しているエリアまで押し入ってきたのだ。住民の拉致監禁は概ね阻止できたが、それでも十数名が連れ去られた。麻酔銃で奴隷商人の親玉を捕獲したので、捕虜交換の形で最後は全員解放したが、その事件にかなりの時間と神経を費やしたのだった。

ともかくもその大陸東海岸の奴隷商人をめぐるゴタゴタが片付いた後に、僕はミズホに渡り、ミヤコで親類・血縁にあたる人々との旧交を温めた。帝国の国内は特別の不安要因も抱えていないので、皇帝である僕が半年近くトリアを空けて、友邦国を巡っても恐らくは大丈夫だと思われた。

碧子は夫との間に跡取り息子の康仁を儲けた他は、実子はいない。だが、その夫が結婚前に年上の乳母子で邸の奥向きを取り仕切っていた女性との間に娘を儲けていた。その娘は結婚し、沢山の子供を儲けたらしい。その末っ子だと言う少女を碧子は実の孫娘のようにかわいがったらしい。その芳子と言う少女は帝国で絵や彫刻の勉強をしたいと言うので、僕が預かることになった。

「芳子の顔はユリエおばあ様に、似ていませんか?」

孫の康仁の言うように、顔だけは似ている。芳子の母方はユリエの実家レーゼイ家と何世代にもわたる濃い血縁関係が有るようだ。僕が久しぶりに新大陸に向かいオヌンダガオノのワサハクに会い、テツココ領を通過して東海岸の新しい軍港に到達し、そこからトリアを目指す予定だと聞くと、芳子は早速同行を希望した。声の質もユリエに似ているのに、もっとサバサバあっさりした感じだ。だから不思議と印象がまるで違う。

「馬には乗れるのかな? 相当に荒れた道なき道も進まねばならんのだが」

「大丈夫です。馬の訓練だけはしっかりしています」

この会話を笑って聞いていた康仁によると、芳子は暴れ馬も乗りこなすお転婆らしい。そんなところも碧子は好きだったらしいが。

「大きな野牛の群れが地響きをたてて大草原を走る様も、すっかり舗装された街に沢山の人が行きかうトリアの様子も見てみたいので

す。色々な国から学びに来ている方たちとお話をして、自分の知らない絵の描き方も学びたいですし……」

「芳子、お祖父様はお忙しい、お客様もたくさんお待ちだ。そのぐらいにしなさい。ちゃんと連れて行って下さるから、安心して、急いで支度をしなさい」

確かに夢中になると、周りが見えなくなるタイプの女の子らしい。事実僕にはミズホで会っておきたい人間が沢山いた。正三郎の遺族の者たちとも面会し、孫の内から優秀なものをトリアに留学させると言う話や、生前の正三郎が関わったアイリュとミズホの貿易に関する現状の話なども色々とする必要が有った。

その中でエガス・モタの住んでいた診療所と兼用の邸が、今では一種の聖地になっており、神聖教会の信者もそうではない者も、多くの者が巡礼に来るのだと聞いても驚かなかったが、彼の遺体がかつてのアイリュの皇帝のミイラと同じような扱いを受けていると聞いて、その奇妙な巡り合わせにはびっくりした。

「アルパカの極上の白い布をきっちり巻きつけ、黄金のマスクと黄金の冠をかぶった御姿で安置されているのです」

正三郎の息子たちは実際にその様子を見て来たらしい。さすがにかつての皇帝のミイラみたいに輿に乗せて練り歩き、お布施を募ると言う事は無いが、金銀宝石で飾りたてた巨大なガラスケースの中に入っており、巡礼者たちはその前で額づき、病の平癒を祈るのだと言う。そして捧げられる供物の量は毎日大変なものらしい。

「少々奇妙と言えば奇妙なやり方ですが、最大級の敬意と尊敬をあの土地のやり方で示しているのは確かなのでしょう」

それが分かるだけに、修道士会も神聖教会も『異端』とか『異教的』とも言わずに認めているらしい。

ミヤコからムサシに出て、ミズホ国内で一番設備の整った港から僕が所有する武装商船に乗って、幾つかの島に寄港してから、地球で言うとカリフォルニアの最南端辺りに相当すると思われるオヌンダガオノを目指した。グスタフ港に比べればかなり小さいが、それでも北米にもいくつかの帝国の船が出入りする拠点が出来つつあった。オヌンダガオノ港もその一つだ。

久しぶりに会ったワサハクは、もうすっかり老人だ。初めて会った頃は十歳かそこらの子供であったのに。今や堂々とした大酋長と言う風格だ。

大酋長とは言っても「きっちりとした組織などは無くて、もっと緩やかなもの」らしいから、僕らが漠然と思っている部族を統率する者と言う感じより、もっと締め付けが緩いものらしい。ワサハクは十年ほど帝国で学んだが、それ以上の知識も情報も「不完全で誤りが多い。今のオヌンダガオノに必要は無い」と断言して、故郷に帰り、やがて多くの部族のまとめ役となった。教会の教えや人種差別的な観念に怒りを感じて……と言うだけではなさそうだった。

「商売とか、工場とか、そういった資本の投入は陛下の治世が五十年以上になってからにして下さい」

そんな事を言い置いて故郷に戻ったのは、不完全な稚拙な技術などで、清らかな大地を損ないたくない、そういう考えからのようだった。確かに環境保全とか、公害とか言った概念は当時はまるで確立していなかったし、全く読み書きができず、外の文化と自分たちとの違いなどについて考えたことも無いワサハクの故郷の素朴な人達にとって、「産業振興」などは時期尚早と言う事だったらしい。

彼がまとめる諸部族は、概ね地球のアメリカ合衆国にメキシコの太平洋側の北部沿岸部を加えた感じの広大な区域に点在している。皆、素朴な農耕民か、バッファローなどを狩る狩猟採集民だ。

ワサハクは皇太子時代の僕に、初等教育を行う書籍類の配布と、小学校を五年おきに一校づつ増やしてと願った。そして将来能力的に可能な子供が出現して希望すれば、中等・高等教育を受けさせてやってほしいと願い出ただけだった。それでもその制度を利用して高等教育を帝国に受けに来た人間は、五十五年の僕の治世の間に三百人は超えた。広大な地域を考えれば決して多くは無いが、皆優秀だった。彼らは農業・漁業・窯業・美術工芸・法律・外国語などを学んだが、皆故郷で先祖伝来の暮らしを守っているらしい。

「清らかな大地を傷つけず、皆で争わず平和に暮らすには、結局先祖伝来の暮らしぶりが一番間違いない」という事らしいのだ。

「ずるい外国人に騙されず、権利も正当性も無いのに『開発』だの『開拓』だのしたがる連中を追い出すのに必要な知恵と力が欲しい。今の所差し迫って必要なのは、それだけだ」

そんなこともワサハクは言っていたらしい。地球でなら既にずるい白人たちに様々なはかりごとで土地から追い出され、場合によっては殲滅され、悲惨な目に合わされていたであろう素朴な人たちは「帝国の庇護」をうまく盾として使い、ゆっくり自分たちのペースで平和に暮らしている。

「だが、そろそろ星の巡り方が変化して来ました。技術も、技術の使い方に関する考え方も随分変化したようですね。無理のない範囲で、我らの清らかな大地にも有益なものは取り入れても良いかもしれない。そう若い連中たちは思い始めています。これも時代の流れでしょう」

ある日ワサハクがそんな時代の変化について思いを巡らし、霊力が満ちた巨岩の上で星空を眺めていたら、隣に見慣れない男が倒れていたのだと言う。

「帝国の男のような赤い髪に灰色の目・白い肌のくせに、話す言葉はミズホの言葉で、名を聞くとオオタ・ショウヘイというのです」

今回僕が、ワサハクに会いに来た一番の目的は、その男と会って話し、身柄を引き受ける事だった。

僕は一対一でそのオオタ・ショウヘイさんと日本語で話をした。

「お生まれは西暦何年でしょうか？　日本の年号ではいつでしょうか」

「私は１８６２年、つまり文久二年生まれです」

「最後の記憶はいつ、どこのものですか？」

「１８９０年、明治二十三年七月、場所はドイツのベルリンです」

東京帝国大学理学部物理学科を首席で卒業、って聞くとそれだけで「スゲー」って思ってしまう。どうやら相当優秀な人らしい。森林太郎さん、つまりあの明治の文豪と一緒に文部省から派遣されて留学したという。音響と電磁気、鉄道なんかが研究対象だそうだ。

太田正平さんはベルリンの大学の研究室から外に出て、友人を見かけたので大通りを横切ろうとした時に、暴走してきた馬車にやられた。そこまでの記憶は有るが、その後がいきなり巨岩の上だったらしい。

「地図を見せられて、どう見てもアメリカ合衆国の西海岸だと思いましたが、一つも街らしいものが無い。それにあの大酋長だと言う

老人は見事な日本語を話すのに、英語もドイツ語も知らないらしい。それも驚きましたが、何より驚いたのは、自分の姿形が大きく変わっていたことです」

「確かに明らかに日本人の姿じゃないですね」

これまでの話からしても、太田さんが時空管理局の話に出た『新たな人材』であるのは確実だと思われたので、僕は金の笏に触れさせた。

「ひぃっ！」

「大丈夫、ですか？　どこか体が痛かったり、気分が悪かったりしませんか？」

僕は帝国の公用語で問いかけた。

「あ？　あれ？　何でしょう、奇妙ですよ。わかります。わかるんです。貴方の言葉が」

試してみると、このルンドで使用される言語が、ほぼどれも完ぺきに使いこなせるようになったようだ。

「耳の奥でザーッと言うような音が瞬間響いて、目の奥に光が煌めいたような気がしたんですよ。ですがなぜ、こうなるんでしょう？」

「僕もなぜそうなるのか、事情は分からないのです」

僕はこの世界に大日本帝国もアメリカ合衆国もロシア帝国もドイツ帝国も存在しない事を、地図を手に説明した。

「私が日本語と思っている言葉も、この世界ではミズホ語なのですな」

「そうです。地形は地球と似通ってはいますがスエズ運河に相当する部分は海峡ですし、シナイ半島にあたる部分は半島ではなく小島です。地名は色々と違います。ミズホ最大の街は、江戸でも東京でもなくムサシですし、京都と言わずただミヤコと呼んでますし、微

妙ですね」

僕はこれから共に旅をする一行と引きあわせた際、当然、芳子とも顔を合わせた訳だが……太田さんの様子がちょっと面白かった。赤くなってドギマギと言う感じなのだ。

「芳子は、可愛いでしょう？」

僕がわざわざ話を振ると、僕の顔を幾度かチラチラ見てから、言いにくそうにぽそっと一言こういった。

「素敵な方ですね」

「仲良くしてやって下さい。僕はあの子の祖父のようなものなので。貴方のような方なら安心ですから」

「祖父？　お年のころが、とてもそんな……」

「僕はこれでも当年とって八十八歳です」

「ええ！　てっきり私は」

僕は僕自身の肉体年齢が二十代前半の状態から、殆ど何の変化も無い事について説明した。

「すると、不老不死的な存在は貴方、いやその陛下御自身と、やがてこの世界にやってくる将来の皇后となる方だけなのですね？」

「どうやら、そうらしいのです」

「別の世界から、こちらに来た人の内、一人は既にこの世界を去ったのですか……向こうの世界で亡くなっているのなら、もう元の世界には戻れないのでしょうね」

「どうもそのようです」

太田さんは僕が生きていた平成の日本について、色々な事を聞きたがった。そして蒸気機関車からディーゼル車、そして電車に切り替わった経緯については特に詳しく知りたがったが、僕はど素人な

ので、明治の人とはいえ専門家の太田さんを納得させるような説明は出来なかった。

「今現在テオレル帝国は、鉄道馬車が走り、船はかなり汽船が増えた状態なのですね？」

「ええ。アルミニウム・ニッケル・石油・石炭などの資源はまだ十分に使いやすい状態ではありませんから、機関車ひとつ開発して頂くにしたって、色々御苦労がお有りだとは思いますが……」

「ですが、私に開発をお任せ下さるのですね」

「ええ。是非、お願いします」

太田さんは士族で、馬は大丈夫らしい。良かった。これからお転婆な芳子を連れてバッファローが走り回る大平原を抜け、東海岸に向かうのだが、楽しい旅になりそうだ。そんな予感がした。

僕と黎明の大陸・3（後書き）

即位後の年数、年齢の矛盾について訂正しました

僕と黎明の大陸・4

即位五十五年目にヤガー君が亡くなり、六十年目にキリャが亡くなった。二人とも僕の身近に最後までいてくれたし、僕も出来る限りの事はして見送ったから、悲しい事は悲しかったが、受け止めることが出来た。

気が付けば、どんどんと美保との再会の時期は迫っているのだった。僕の気持を知ってか知らずか、レイリア女王ガブリエルはほぼ毎年のように僕の子を産み、既に十人の子持ちになった。マサエとトシエは相変わらず黄金宮で元気に働いている。

太田さんは子爵となり芳子と結婚し、ラルフ・ヤングは帝国軍のトップとなり亡くなる直前のヤガー君自身の推薦も有り、宰相となった。

ラルフさんは帝国におけるドーン大陸全体の責任者でもあってドーン総督兼マンディンカ侯爵となった。マンディンカは地球でのラルフさんの御先祖の部族名だが、ドーン大陸の西海岸にその名をつけた都市を築き、そこに総督府を置いたのはラルフさんの功績だ。

南アフリカ・ケープタウンにあたる場所にマンデラ港、タンザニアのダルエスサラームにあたる場所にはニエレレ港が出来た。どっちも地球のアフリカで重要な役割を果たした人物の名であるのは言うまでもない。

ラルフ・ヤングと太田正平の名コンビは帝国をますます豊かにしてくれた。おかげで蒸気機関車は出来るは、ピアノもギターも主な金管楽器に木管楽器は出来るは、無線通信が普通になるわ、電話が実用化し主要都市間で電話回線が通るわ、船舶用灯台も交通信号も普通になって、技術革新が恐ろしいほど進んだ。実はこれから大型

の発電所をどうするか、で悩んでいる段階だ。これまでは比較的小規模な水力に、ほぼ限定していたので。それから……兵器は全部十九世紀の製品程度の段階に留めている。作ろうと思えば、もっと先に進めるわけだが……航空機と戦車は、構想だけだ。

それでも、送電網が帝国内で一応完成した意義は大きかった。電灯の明るさ、電話の便利さにショックを受けた外国人も多くて、トリアはますます学問の都としても栄えている。

太田さんは実現可能な新技術を全部をさっさと実用化したいようだったが、地球温暖化なんてものを知っている僕や、テクノロジーの導入は全世界的なバランスを見てと言うラルフさんの意見を無視はできなかったのだろう。その発明家魂は直接的には軍事に転用されにくい方面に注がれる事になった。

ビール工場の近代化とか、清涼飲料水の発明とか、立ち遅れていた医療機器の改良とか、写真とか、電気冷蔵庫に洗濯機、掃除機、アイロン、ジューサー、ミキサー、コーヒーメーカーと言った家電製品の開発等々……小物だけどヘアドライヤーとか電気シェーバーとか、僕個人としては非常に嬉しい。

僕の即位六十年目になって、ミズホのムツ地方で一度に三十人の二十世紀の日本人が保護された。全員が１９５４年というか昭和二十九年に起きた台風による大規模な海難事故の犠牲者だった。男性が二十人、女性が十人で全員が未婚の若者だった。男性十人はミズホに残る事を希望したが、男女各十人はトリアにやってきて、ラルフさんと太田さんの手伝いをしている。全員有能な人物ぞろいだ。彼ら彼女らのおかげで、帝国の産業・学問はまた、飛躍的に発展した。

産業でも学術でも軍事でも、いわば帝国の一人勝ち状態であったので、逆に他の国家を刺激することは注意深く避けてきたが、我が

テオレル帝国がドーン大陸で厳しく奴隷貿易を禁じた影響で、ドーン大陸北部の奴隷貿易を行ってきた大君主国の属国の幾つかが内乱状態になったようだ。

「各国の奴隷たちが集団で脱走を図り、武力行動から戦闘状態に入るケースが頻発しています。西の帝国の総督で宰相で有る俺の肌は黒いと言う事が広く知られるに至って、肌色による差別が不当だと言う声が高まっているようです」

ラルフさんと相談して、僕は帝国領への逃亡民はすべて保護させた。大君主国側の奴隷商人たちの装備など、時代遅れの火縄銃に弓矢程度だったから、彼らの商品である奴隷を取り返しに来たって、鉄筋コンクリートでしっかり防護した近代的な要塞を攻め落とせるはずもなく、果ては『入るな危険』表示を無視して地雷原に踏み込み、散々な目に遭うと言う始末だ。

敵の都市の攻略も接近戦は避け、化学迫撃砲を使って非致死性の薬剤を投入した。死者は非常に少なかったはずなのだが、原因不明の突然の激しいくしゃみ・吐き気・目の痒みなどはよほど気持ち悪かったらしい。マーチングバンドが奏でる軍楽と合わせて、帝国軍は『悪魔の軍』として恐れられている模様だ。

そんなこんなで東大陸の西部、地球で言うとアラビア半島からインド以西の一帯を治める大君主国、正式の国号は『正しき神の代理人たる大君主が統治する神聖国』、面倒なので一般には大君主国とか、首都アルラトの名を取ってアルラト君主国などと呼ばれる事が多いが、その君主国の権威は大いに揺らぎ、大君主直属の騎馬軍団も近代的な化学兵器の前には何の効果も無く、ついにはドーン大陸から大君主国の勢力は一掃された。とは言っても、奴隷以外の商品を公正な手続きを経て取引するのは認めたので、元は大君主国に従属していた国々の商人の大半は、帝国での法を順守して貿易を続け

る道を選んだのだった。

最初に解放された奴隷たちが教員となり、その後女子修道会やモタ修道士の後輩やら弟子やらの活躍も有って、帝国直轄領の大陸沿岸部二十都市における識字率はおおむね七割に到達した。地方の小さな部族や国同士の争いには帝国は積極的には関与しないが、求められれば仲裁にあたると言う事を幾度も繰り返し、自発的に帝国領への帰順・繰り入れを望むと言うケースが相次いだ。中には先祖伝来の生き方を貫く部族も有るが、そうした場合も帝国の技術で深い井戸を掘って提供する、災害や飢饉の時は緊急援助物資を提供すると言った程度の『近所づきあい』は欠かしていない。

そうした部族は十年二十年では無理でも、次の世代になると帝国領への編入を望むケースが非常に増えて、大君主国の勢力を駆逐した頃には、ドーン大陸をほとんど丸ごと、帝国の勢力下に収める事に成功した。といっても直轄ではなく、自治権を持った共同体の連合と言う感じだが。

ともかく各部族出身の有望な若者はトリアに集め、部族間抗争をするような偏狭なナショナリズムに走らないように慎重に教育を施している。

金やダイヤモンドのほかにアルミニウムの原料であるボーキサイトをドーン大陸から大量に産出するようになって、大いに助かっている。しかも電気を使う精錬法は今の所、帝国と友邦国限定の技術だ。目下、飛行機をどうするか、悩んでいるが、まだ奴隷が存在するのが前提条件のような後れた意識の国家と背中合わせである以上、まだ早いだろうと言うのが僕の考えだが。

「アルラト君主国の大君主が陛下を呪うとか、呪ってるとか言いますが、何をしてるんでしょうかね」

「僕そっくりの人形に釘を打ちつけたり、針を刺したり、燃やした

りしてるらしいよ。ストレスの解消にはなるのかねえ」
僕が気のない返事をすると、ラルフさんは笑った。
「確かにそんな胸糞悪いだけの馬鹿げた呪いは効き目が無いでしょうが……気になる情報が有るのです」
「ひょっとして、陛下の御身内の誰かを奴隷にするとかしてやるとか、そんなふうに息巻いたと言う話でしょうか？」
「太田さんも聞いたか。あれ、どう思う？」
「んー、帝国本国とワッデン・レイリアにお住まいの皆さまは大丈夫でしょうが、他は危ないかもしれませんな。海上で海賊船にやられるとか、列車強盗に誘拐されるとか、そうしたやり方なら有り得ますから」
帝国内部での列車強盗はほとんどないが、一旦帝国領から外に出ると、珍しくないのが実情だ。
「そうだなあ。太田さんの言うように、きっちり警備体制を整えないといけないだろう」

もう、御前会議はやらない。一院制の国会が開かれるようになったのだ。ラルフさんと二人で考えをまとめた後、太田さんも加えて話を詰める場合が多い。太田さんは三度の飯より実験が好きなのだ。今は僕とラルフさんが話をした、テープレコーダーの作成に夢中だ。
議員の構成は貴族同士の互選で選ばれた者が三分の一、帝国本土の各地方の選挙で選びだされた者が三分の一、各自治州・友邦国で代表を出したいと希望した地域から選挙で選ばれた者が三分の一、僕自身の勅任がそれらとは別枠で十名となっている。
選挙管理組合やら選挙の不正行為の監視やら、資金の透明性やら最初から僕もラルフさんもうるさく求めたので、概ね良好な状態で選挙が行われた。

ドーン大陸風の彫刻や絵画、力強い民族音楽は西の大陸の芸術文化にも大きな影響を与えた。

「最近、トリアでも気の利いた音楽が聞けるようになって、実に嬉しいですよ」
そのラルフさんの感想に、僕も賛成だ。それに最近はレコードに蓄音機も出来たし、それも嬉しい。
「そろそろラジオ放送なんかも始めちゃいますか？」
「ラルフさんの中ではボイス・オブ・アメリカみたいな感じを、思い描いてるの？」
「各自治州、友邦国にも陛下の声が届くのは悪くないでしょう。ニュースもやれるし、奴隷解放のためのプロパガンダにも使える。ご機嫌な音楽も流せるしね」
まだ、技術的な課題がいくつかあるらしいが、皆の協力で数年の内に可能だろうと言うのがラルフさんの見解だった。
「どうもアルラトの大君主の動きがキナ臭いんで、ラジオ放送であの国を骨抜きにできたら、良いなあと思うんですよ。今のままだと戦争になりかねないと俺は思います」
「向こうは帝国側に領土を拡大出来ると、本気で考えているのかな？」
「大君主が命じれば、無理が通る国ですからねえ。軍人は皆無茶だと思っているんでしょうが、それを口に出しては言えないんでしょうよ」
ラルフさんがそう言うと、太田さんも頷いてこう言った。
「ああした国の常で、佞臣と言うのでしょうな、おべんちゃらを並べて私腹を肥やす事ばかり考えている連中が大君主の周りを固めていると言いますよ。世継の王子の方は、父親よりましらしいですけどね」
「西の『不老の悪魔』の所為で、ハレムに色々な人種の女奴隷を揃

える事が出来なくなったのが腹立たしい」
そんな言葉が本当なら、大君主もとんだ馬鹿だと思う。アヘン中毒で頭がやられたのではないかと言う見方をする者もいるそうだから、本当かも知れない。

そんな話をしていた所、緊急の無線が入った。

「スエズ海峡付近でスコーネ侯爵家のアティア姫のお乗りになった客船が海賊の襲撃を受けたそうです」

アティアはかつて宰相を務めた亡き弟ヨハンの孫娘だ。美貌ぞろいの皇族の中でも、一・二を争う美少女だと言って良いだろう。それが第一報だったが……第二報を聞いて愕然とした。

「海賊ではなく、アルラト大君主国の軍艦多数の襲撃を受け、無線の遭難信号を受けて出動した帝国海軍の軍艦が到着した時点で、船長以下船員の男性は全員殺害されておりました。残っていたのは老人と子供が大半で、少年少女と若い女性は網袋をかけられてから、縛られ、アルラトの軍艦に乗せられた模様です」

生き残った老女でアルラトの言葉を解するものが、アルラトの連中が『トリアの皇帝の身内』『テオレル帝国の姫君』を探していたと証言したらしい。

トリアの各新聞はこの事件を大々的に報じた。
翌日、僕は緊急に国会を召集した。

「アルラト大君主国との間の外交交渉が決裂した場合、戦闘に突入する可能性が高いが、皆の意見を聞かせてもらいたい」
国会は罪なき船員たちをむごたらしく殺害し、若い男女を拉致し

たアルラト側を殲滅する事も視野に入れると言う過激な意見が多数を占めたが、僕はなだめ役に回った。

「生存している者は全員無事に帝国に帰還させるために、皇帝として最大限の誠実なる努力を払う。しかしあちらが、我が方の正当な申し入れを聞き入れないときには、必ずや断固たる処置に出よう」

僕の宣言に国会議員は全員起立し、拍手で賛意を示した。

外交交渉はやはり、決裂した。

「自国の領海に紛れ込んできた外国船をどう処理しようが、こちらの勝手」

そういう言い草だった。明らかに船はドーン大陸寄りを航行していたのに、言いがかりも良い所だ。一応アルラト側の見解では、ドーン大陸の領土をテオレル帝国に不法占拠されていると言う解釈らしいが。

それにしても、上質の白人奴隷が欲しいと言う大君主の馬鹿げた個人的欲求が一番の理由なのかどうなのか分からないが、ずいぶんと馬鹿な事をやってくれたと思う。だが少なくとも拉致された彼らの命が無事であることは確かなようだった。連日我が国は艦砲射撃を行い、ドーン大陸に面したアルラトの港の設備をほぼすべて破壊した。また軍艦と言わず漁船商船と言わず、アルラト側に停泊・係留中の船舶はすべて焼夷弾で炎上させた。無論それだけで済ますつもりも無かった。

「まずはこの八十年余りアルラトが実効支配している西大陸側の領土を、本来の持ち主であるタルソスに返還させよう」

地球で言うとバルカンの南部を占めるタルソスは帝国より古いと言われる国家で有ったが、狭い海峡を隔てて隣接する大国・アルラ

ト君主国に度々侵攻され、僕が即位するまではハッキリ言ってやられっぱなしだった。

僕は即位後タルソス国王の要請により軍事顧問を派遣し、百年間の無料の租借権と引き換えに軍港を整備して、それ以上の領土の蚕食を防いだが、積極的に取られた領土を取り返すまでは踏み込んではいなかった。

今回の騒ぎをタルソス国王は一種のチャンスととらえたのだろう。帝国に全面的に協力するので、領土の奪還に力を貸してほしいと申し出てきたのだ。

早速タルソスの領海を無断で航行する大君主国の軍艦を軒並み沈没させた。相変わらず木造で可燃部分が多い大君主国の軍船めがけて、焼夷弾を数発打ち込めば十分だった。

更には君主国と東部の間の地上の補給経路を完全に遮断し、兵糧攻めに出た。　無論大君主国側も幾度も反撃を試みたが、帝国軍の指導でタルソスは短期間のうちに海岸線を要塞化してはねのけた。

当時鉄筋コンクリートの技術は帝国にしか存在しなかったため、わずか半月かそこらで頑丈なコンクリートの壁が出現し、大君主国の装備する旧式な大砲の攻撃ではびくともしないのを見て、大君主国側は「不老の悪魔のペテン」とか「幻術」とか言っていたらしいが、それだけ魂消たのだろう。

僕ら帝国軍が参戦して僅か三か月で、八十年以上に渡ってアルラト君主国が実効支配していた東部タルソスを奪還した。それでも捕虜たちは返還されない。聞けば白人奴隷は大君主のハレムにおさめられたと言う。

それと同時に、僕はナイチンゲールに代わる様な活躍をしそうな女子修道会のメンバーに野戦病院を作らせ、そこで敵方の捕虜も治療させた。更には思想教育も行い、アルラト側に送り返した。白人

奴隷の帰還に貢献してくれれば、帝国から高額の褒賞を与えるとも言い含めてある。

それとは別に、僕は密かにミズホ経由で中立的な立場のもう一つの東の大陸の大国・アイシン帝国経由で特殊工作員を送り込んだ。幾人かは大君主のハレムに下働きとして入り込んだり、王宮の衛兵に入り込んだりできたらしい。

大君主の世継の第一王子がアティアを『成人の祝い』に賜りたいと願い出て、認められたが、寝所に召しだされる事が無いように工作をしている……そうした状況らしい。僕は密かに大君主国の宦官長に高額な賄賂と宝石を贈らせていた。今の所は星めぐりが悪いとかなんとか言って、アティアを守っているようだが、いつまでもそれでまかり通るとは思えない。だが、世継の王子の気に入りだけあって、アティアの脱出は難しそうだった。

「他の白人奴隷はどうにか抜け出せる目途が立ちましたが、アティア様だけが警備が厳重で、外にお連れできません」

複数の工作員の報告は一致していたが、その後の意外な展開は、僕の予想を超えた物だった。

僕と碧い鳥と大地の臍・1

「困ったなあ。アティアだけが……戻ってこられないんだろうか」

僕はそんな独り言を言ってぼやいた。チャスカの墓の前で。特に命日と言う訳でも、記念日と言う訳でも無いが墓参りだ。何か頭の中身を整理したい時、チャスカの墓に行くと妙案が浮かぶと言う事が幾度かあって、以来頭の中がごちゃついたりヒートアップしたりすると出かけている。生きている時のチャスカは癒し系のキャラだったが、亡くなってからも、そうした傾向は残るものなんだろうか？

周りには季節ごとに緑系の色合いの花が咲く。そんな風にしたのは娘のキリャらしいが、緑色ががった白の待雪草の仲間からエメラルドグリーンのとげなしサボテンの仲間まで、四季を通じて何かの緑色系統の花が傍で咲いているようになっているのだ。今咲いているのは香りの良いとげ無しのバラの仲間らしい。シャーベットグリーンと言うのか、この色のドレスがチャスカは良く似合ったな……などと思いだした。きっとキリャもそう思っていたからここに植えさせたのだろう。

バラの香りを思い切り吸い込んでから、墓の前で目をつぶっていると、碧色系統の不思議な色の鳥が鉄さび色をした大地を飛翔し、その向こうに黄金色に見えたと思うと赤く変化する平らな山？　いや、岩だ。あれ、どこだっけ……ああ、大地の臍なんていわれる聖地だ。その周りを、何だあれは、蛇かな？　巨大な虹色に煌めく蛇が、平らな岩山の周りを取り囲んでいるのだ。

久しぶりに見たが、アティアとあの霊鳥ケツァールがどう結び付くのか？　しかもそれがあの大地の臍とどう関連するのだ？　デカい蛇は一体何なのだ？

バサッツと羽音がして、黒いカラスもといヤタガラスが降り立った。すぐにあの七歳児スタイルになったが。そういえば長らく頑固にミズホの宮家の子供みたいな恰好だったのが、気が付けば最近は帝国風というか完全な洋装だ。国会のメンバーが皆申し合わせたように着る様になって、一挙に帝国の昼の礼服として定着した黒いフロックコートとぴったりした黒いズボン、貴族的なカラスで良いじゃないかと僕は思う。まあ、以前の指貫なんていうのも悪くなかったんだが。

「やあ、久しぶりだね」
「我のつがいの護りを背負ったはずの娘が災難に遭ったと聞いたのでなあ」
「護りを背負った？　アティアが？」
「何じゃ、キリャから聞いておらなんだのか」
「ヨハンの孫なのに、なんでまた？」
「あれは真はラウル・ヤイレの孫じゃ」
「と言う事は、ユリエのひ孫か！」
「そうとも言うな。ラウル・ヤイレは、タマエの他にチャスカの従姉妹との間にも娘をこさえた。そのラウル・ヤイレの娘がヨハンの腹違いの兄の息子とくっついて生まれたのがアティアなんじゃ」
アティアの母方の祖母はチャスカの従姉妹だから当然だが、父方の祖母もワルパの王族の血筋だそうだ。ヨハンの庶兄の一人がアイリュとミズホの交易に関わる仕事を正三郎の下でしていて、その縁でワルパの女性との間に息子が生まれた。それがアティアの実父なのだと言う。アティアの両親はワルパで知り合い「一旗揚げる」ためにドーン大陸に行って、風土病で死んだらしい。幼いアティアはワルパの祖母の所に預けられていたので無事だったようだ。
「最初はワルパとの縁が強いキリャが育てるという話も有ったんじゃが、ユキヒコとヤスヒコを預る事になったじゃろう？　それで縁続きのヨハンの邸に引き取られたんじゃが、ヨハン夫婦も息子のエ

リク夫婦も気に入って養女になったんじゃ。ヨハンにしてみれば実の兄の血も、仲の良かったラウル・ヤイレの血も受け継いだ愛らしい娘じゃからなあ。思い入れも有ったんじゃろうよ」

ヤタガラスによればあのチャスカの御先祖ゆかりの胸飾りは、あの一族の霊力の強い女性に代々受け継がれるものらしい。母から娘と言うパターンが一番多いが、娘じゃなくて姪とか孫とかに引き継ぐ場合も有るそうだ。ともかくも受け継いだ女性が次代のもっとも霊鳥の加護にふさわしいと言うか、馴染むと言うか、そういう女の子を後継者として選び、死後すぐに後継者にはあの胸飾りが渡される。本来はそうしたものらしい。かつてはそうした女性は神殿に入ったものであったようだが……アイリュの介入や何やかやで、形式は変化したんだろう。それでも霊力と加護の部分は動かせないようで、キリャの娘よりあのアティアが霊的にはふさわしいと言う事だったらしい。

「それにしても、何で……ウルルなんだ？　蛇も訳が分からんしな」

墓でのヤタガラスの話を思い返してみたが、あの脳裏に浮かんだ情景の説明は全く無かった。延々とアティアが生まれるまでの経緯について教えられただけだ。アティアが両親双方からワルパの血を受けている事と、僕との間には直接的な血縁関係が無いと言う事は理解した。だが、具体的な救助の話もしなかったし、ウルルの話も出なかった。例によって僕に言いたい事だけ言うと、ふっといなくなってしまったのだから。

「何ですの？　ウルルって」

マサエに不思議そうに聞き返された。トシエは無言でマッサージを続けている。

「レイリアの船乗りたちが南方大陸と呼ぶ場所にあるはずの、その土地の聖地だ。ものすごく大きな一枚岩なんだ。と言ったって無論僕は本物を見た訳じゃないが」
「で、そのウルルがどうしましたの？」

チャスカの御先祖ゆかりの霊鳥・ケツァールらしき鳥が飛んでいたのだと話すと、トシエもマサエも声を揃えてこういった。

「まあ、陛下、ではそこにお出かけになりませんと！」

そして蛇の様子を僕から聞いた二人は、それは土地の祖霊で、別の土地の祖霊であるケツァールとの関係が悪くは無いという事なのでは無いかと言う意見を述べた。この二人は勘が鋭い。確かに二人の言う通りなのかもしれない。

「もうそろそろ、今年も不思議な石の所で、何かお告げが貰える頃ではありません？」
「アティア様の件も含めて、御相談なさったらいかがでしょうか？」

確かにそうすべきなのかも知れなかった。僕は翌日、あの石の所で時空管理局の決定だか命令だか指示だか聞いてみることにした。

「僕は九十七歳になった。即位して六十三年経つ。美保はどうなんだろうか？」
「以前からの予定通りの期日に間に合わせます」
「赤ん坊なの？　すでに大人なの？」
「新たに生じる個体に美保としての知識・能力・記憶を投入します。貴方と肉体的・精神的な条件は似ています。寿命も老化も貴方の条件に合わせます」
「今の課題は、アティアの奪還だが」

「あー、他の捕虜は奪還できますが、彼女だけはスペシャルケースです」
「取り返せない、そういう事か？」
「今はお答えできません。現在戦闘状態にある国家とは双方の死傷者を可能な限り抑え、平和条約が締結できるようにしてください。奴隷制度の廃止は、恐らく可能でしょう」
「美保が出現したとして、現在の正妻であるガブリエルは、どうなる？」
「実現可能なプランで、適切なものが見つかります」
即位後六十六年、僕が百歳でもガブリエルはまだ、三十六歳のはずだ。
「アティアは諦めて、他の捕虜を取り返した方が良いんだな？」
「万事お任せします。常に最大多数の最大幸福を志向して、活動に励んで下さい。では、また来年お会いしましょう。クリア・エーテル！」

話は強制終了だ。南方大陸の件も聞きそびれた。何がクリア・エーテルだ、と思ったが、僕に任せると言うんだから、僕なりにやるしか無い訳だ。

「……ともかく、取り返せる人間だけでも手堅く取り返しておこう」
「承知いたしました。アティア様の方も、可能な限り脱出の可能性を探りますが……」
時空管理局との定期交信のすぐ後、僕は大君主国との国境にいる情報将校と直通電話で話していた。
「宮殿の宦官連中にも根気良く接触を試みてくれ」
「……あっ？　すみません。ただいま無線が入りました。ああっ！」
「どうした？」
「アティア様は、昨夜既に大君主の世子と一夜を過ごされたそうです」

「な、なんだって？」
「……ええっと、宦官長からの弁明ですが、最大限の敬意を払い、並みの女奴隷ではなく、あくまで妃としての待遇なので、悪く思わないで頂きたい。御子が出来た場合は、御子の御身分も尊い御出自に見合った物となるように最大限の力を尽くす事を誓う。以上ですが、そのう、どういたしましょうか？」
「……分かった。アティアをそれなりに鄭重に扱う、そういう意味だろう。だが、アティアの意志は恐らく無視されているはずだ。当初の計画通り、取り返せる人間は全て取り返し、アティアが妊娠していようが何だろうが、帝国に戻るように、引き続き活動を続けてくれ。そのうち、きっちり落とし前はつけねばな。頼んだぞ」
「ははっ！」

その三日後、アティア以外の拉致された若い帝国国民は奪還された。どうやら宦官長が意図的に警備を緩めたらしい。代わりに……アティアを世子のハレムに残すことを認めろ、と言う事か。

「アティア姫の行方は如何に？」
「世子の妃に？」

何処から漏れるのか新聞の紙面にはそんな文字が躍っている。

「極めてデリケートな段階なので、報道も差し控えてもらいたい」

僕は各新聞社にこのルンド始まって以来と思われる報道管制を敷いた。だが、これが一つの問題提起となり、これ以降「報道される事によって被害者の生命に危険が及ぶおそれがある」誘拐事件などは自主的な報道規制が行われるようになった。

僕は引き続き情報収集にあたらせた。どうやらそれなりに鄭重に

扱うと言う宦官長の言葉には嘘は無さそうだが、僕としては女性を閉じ込めっぱなしと言うハレムの制度自体が、人権無視もいい所で不愉快だ。しかもアティアは拉致されてそこに収容されているのだし。

「どうやら御懐妊だと言う話が伝わって参りました」

そう、情報将校との定期的な電話の報告で告げられた時は、覚悟はしていたが不愉快極まりなかった。

「アティアの精神的な状態が非常に心配だ。万が一の事が有れば、ただではおかんと宦官長に言っておけ！」　将校に怒鳴っても仕方がないのだが、イライラする。

アティアが拉致されて二百日経ったが、事態は動かない。僕はいい加減イライラしてきた。だが、短気を起こして総攻撃をかけて、肝心のアティアの身の上に危険が及ぶようなら、元も子もない。連日我が海軍は君主国の沿岸部に艦砲射撃を加え、貿易ルートを封鎖し海外の資産を差し押さえている。

「食料不足は相当深刻らしく、大君主国側からの難民が押し寄せていますが」

「可能な限り食料の配給を行うように」

各国境の担当者には、難民の人道的な取り扱いを徹底するように命じている。

大君主国内部の農村は働き手を失い、相当な面積の畑は荒れ放題らしい。それがどの程度大君主個人に響いているのかは疑問だが、兵の士気が下がりっぱなしというのは事実だろう。その内、国の乱れと衰えを招いたのは大君主の失策の所為だと言う機運が、有力な廷臣を中心に持ち上がり始めたようだ。

僕はそうした連中を側面から支援するように、情報将校に命じておいた。

「大君主を幽閉し、世継を即位させる動きが本格的になってきました」

「良い傾向だ。色ボケ、アヘンボケの暴君はさっさと駆逐しないとな」

やがて、年を越え僕の即位六十四年目に入った。

「大変です！」

情報将校の緊急連絡は声が切迫している。

「アティア様が大君主の宮殿から逃亡された模様です」

「何処へ逃げたのか、見当はつかないのか？」

「宮中の船着場から、運河に出て、更に海に出た模様ですが……そこから先が、どうにも」

「誰か手引きした者が居るのだろう？　帝国の者か？」

「どうやら違うようです。身近でお仕えしていた者らしいですな」

「アティアが寵愛されるから邪魔だと感じた別の女が、手引きしたと言う線は？」

「その線を世子は疑っているようでして、厳しい取調べが始まってはいるようですが……」

「だが、アティアの行方は知れん……そういう事か」

「はあ」

アティアの身を案じる者はトリアにもミズホにも新大陸にも多いが、誰にもアティアがどこへ向かったのか見当はつかなかった。

「ヤタガラス、お前のつがいの護りを背負っているにしてはアティアは災難続きじゃないか」

「災い転じて福……となるはずなんじゃがなあ……」

「おいおい、そんなのんきな事を言っている場合か？」
「鳥たちが言うには、碧の鳥の力は虹色の大蛇の助けで蘇ると言うんじゃが、どこの祖霊なのかのう、虹色の大蛇とは」
「そうだよ、ウルルだよ！」
「うるる？　なんじゃそら？」
「南方大陸にあるはずの聖なる場所だ」

一縷の望みを持って、僕が帝国海軍の部隊を南方大陸に向けて派遣したのは、その翌日の事だった。

僕と碧い鳥と大地の臍・2

「お話なさっていたような巨大な岩が内陸部に見つかりました」

南方大陸に派遣した海軍の調査隊から報告が有ったのは、派遣してから既に半年が過ぎた頃だった。

「西よりの方に一番大きな岩が有るだろうが、それではないぞ。聖地はその大陸のほぼ中央部にある二番目の大きさのより形の整ったものだが、どっちだろうか？」

一番でかいマウント・オーガスタスがこの世界にも存在したとしても、二番目のウルルじゃないとあの虹色の大蛇には会えないと僕は考えているのだが、どうなんだろう？

「我々が見たのは土地の人間が『大地の臍』と呼ぶ聖地です。西よりのもっと大きな岩と言うのは、確認しておりません」

「土地の人間と言葉が通じたか？」

「帝国の言葉を、アイシン帝国の言葉に訳し、そこから南洋諸島の北の部族の言葉に訳し、さらに南の部族の言葉に訳し、最後に南方大陸の住民と言う具合に通訳していきました」

つまり質問は帝国海軍の軍人から、南洋諸島で稼いでいるアイシン帝国の貿易商人、南洋諸島の北部の人間、更に南部の人間、その次にやっと南方大陸の人間に言葉が届く。答えを聞き取る場合はその逆だ。地名ひとつ聞き取るだけで大騒ぎと言う訳なのだ。それじゃあ、なかなか話も進まないなあ。途中に誤訳やら勘違いやらも当然挟まるだろうし。

金の笏の力発動で、僕が直接聞く方が間違い無いし、大君主国は

現在の膠着状態を自分の方から破るとは思いにくい状況だし、たとえそうでもどうにかなるのは間違いないし、現在国内的には、特に不安要因は無いはずだから、国会に諮らず僕の独断で現地に向かう事にした。国会は有るが憲法は無い。僕が帝国の現制度の大半を作らせたと言う認識を皆がしているので、そうそう文句も言えないだろう。

「軍事機密に属する事なので細かい事は言えない。来年になったら細かい報告をする」と国内的には発表して、僕は最新型軍艦三隻を連れて、発見されたウルルらしき場所をめざした。アルラトの大宦官長にはアティアが見つかる可能性が高い土地に出向くとだけ伝えた。軍艦を使ったのは多分それが一番早いからだ。ヤタガラスも一緒だ。僕が見た虹の蛇のヴィジョンが気になるようだ。

「我のつがいに会う事が出来ようかな？」
「ケツァールって人型を取った事は無いんだよね」
「ずっと鳥の姿じゃったなあ。人型を取ってもきっと美しかろうが」
「別れてから、ずいぶん会ってないんだよね。向こうが忘れてるとか記憶喪失とか、無いのか？」
「たとえそうでも、思い出させてみせるぞい」
「ヤタガラスの愛の力か、ハハッ」
「笑うな、グスタフ」
「虹色の大蛇と仲良くなって、ヤタガラスはお邪魔、とか言う事は有り得ないのか？」
ちょっと意地が悪いかと思うが、気になる。
「そんなことは、わからぬわ。ともかく当たって砕けろじゃよ」
「砕けるなよ。帝国にもミズホにもヤタガラス信者は多いんだからさ」
「その時は、グスタフが代わりに面倒を見てやってくれ」

むくれているので、御機嫌取りにせんべいをやる。醤油系の厚焼きだ。盛大にバリバリ食った後は、御機嫌が良くなった。わかりやすい奴だ、相変わらず。

先ずはドーン大陸の西海岸経由で南端のマンデラ港に入る。東海岸はやはり大君主国との和平交渉がまだ始まっていない以上、思わぬ不都合が生じる恐れもある。

漏れ聞こえる大君主国の内情は、宮廷内クーデターだか内紛だか、外部にははっきり伝わってこないが、世子派が邪魔な爺さん連中を叩きだそうと色々やらかしている最中なのは確実らしい。ならば大君主国軍の指揮系統にも乱れが生じていると見るべきで、外国人である我々は高みの見物を決め込む方が無難だろう。無論、各地の国境線はしっかり固め、日課だった艦砲射撃も含め、今はこちらからの攻撃は全て停止している。

二か月かからないで僕は目的地に到達できた。まあ、上出来じゃないだろうか？

途中で海軍の探検隊とは合流できた。小さな島、恐らく地球ならインドネシアのどこかになりそうな島の港で海軍の探検隊は待っていたのだ。港を仕切っているアイシン帝国の大商人はこのあたりの珊瑚と真珠で儲けているようだが、乱獲は感心しないのではっきり忠告した。儲けにどん欲な男のようで、忠告だけでは効果が無いのは目に見えているので、こんな条件を持ち出した。

「僕の言うように、海を汚さないように節度を持って採取してくれるなら、ドーン大陸のダイヤを東洋に売り込む代理店の一つにしても良い」

するとアイシン帝国の辮髪ヒゲオヤジは、揉み手をしてニヤニヤしてから僕に三跪九叩頭の礼を始めたのには驚いたが、ダイヤビジネスに参加できるなら提示された条件を守る。そういう事だろう。ヒゲオヤジの出してくれた料理は本格中華って感じで、僕は美味い

と思った。それから僕一人だけが「味の分かる方にしかお出ししない」とか言うお茶を振る舞われた。

「陛下は外国の方ですのに、お話しぶりといい、食事の召し上がり方といい、アイシン本国の皇族の方のように優雅で気品がお有りだ。まことに感じ入りました。御用の節はいつでも、我がイップ一族の治める港はどこでも自由にお使いください」

海軍のメンバーに後から聞いた話では、ヒゲオヤジはニコニコニヤニヤしている割に、抜け目の無い油断ならない人物で、めったに人を信用しないらしい。

「初対面で秘蔵の茶を振る舞うのは、イップ大人が『終生付き合いたい』と願う相手にだけと言うのは南洋の島々で商売をする者の間では知られた話です。やはり、陛下は大人の目から見ても特別な方なのですなあ」

「あたりまえじゃ。グスタフは、あの業突く張りのイップ何某とかいうヒゲ男と格が違うわ」

ヤタガラスに決めつけられると、話をしていた士官は、頭をかいて退出した。単にヤタガラスが眠たくて不機嫌だったせいなんじゃないかとも僕には思われたが、ともかくその夜は早めに寝た。

その翌日は、もう目指す大陸に到着出来た訳だが、やはり、南方大陸の住人は元の世界で言うアボリジニの人たちと同様、素朴な狩猟採集の暮らしぶりだった。小さな部族ごとに言葉がかなり違うので、金の笏でも無い限り、短期間に神話やら祖霊やらの話は聞きだせなかっただろう。

「光の輪を背負った人が海から来ると、友達の精霊が今朝、蝶にな

って教えに来たので迎えに来た」

僕をいきなり迎えてくれた沿岸部の部族の長老は、そう語った。彼にとっては精霊はすぐ傍にいるもので、敵の精霊も味方の精霊も色々いるらしいが、見方になってくれる精霊と良好な関係に有れば、かなりの災難は逃れられると信じているらしい。

「碧色の鳥の精霊の加護を受けている、外国の若い女を見なかったか？」

「そんな精霊も女も見た事が無いが、その走る鳥に聞こう」

長老が口に指を突っ込んで、ポンとかボボンとか聞こえる不思議な音を立てると、ダチョウより一回り小さい鳥が同じようなボボンと聞こえる奇妙な鳴き声を立てて、走ってきた。動物の図鑑か何かで昔見た飛べない鳥エミューなんじゃないかと思う。ともかくも彼らは『走る鳥』の精霊から色々恩恵を被っているらしい。

「ボ、ボボン」

奇妙な鳴き声を上げ、ギョロっとした目を、僕とヤタガラスに向けている。

「ン？　ああ、我となら話がしやすいのか。グスタフ、お前ならこの鳥に意識を集中すれば意志の相通は可能じゃろう」

「女の子なんだな」

「ボ、ボボボボボッ」

自分はここらでは一番の器量よしで、オスにモテモテだ、そう言いたいみたいだ。

「よろしく頼むぞ。碧の鳥の加護を背負った人間を探しているんじゃが、知らんか？」

「ボン、ボン、ボンボッ」

自分は知らない。夜になると木の実を食べにやってくる大コウモ

リがいるから、それに聞けと言うことのようだった。僕の一言が、癇に障ったのかも知れない。鳥はすごいスピードで走り去ってしまった。

僕は迎えに来てくれた長老の許しをもらって、その大コウモリが熟れた実を食べに来ると言う樹のそばに、野営の準備をさせた。海軍士官も、辮髪のアイシン帝国の大商人の番頭も、僕が特殊な言語も話し、鳥とも意思相通が出来るのを見て、驚いたらしい。

大コウモリが来ると言う樹の下の闇で、僕とヤタガラスだけが待っていると、そのコウモリらしきものはカリカリカリカリ音を立てて実を食べ始めた。

（なんだ、お前らは？　何の用だ？　何処から来た？）

実を食べながらテレパシーを使う。僕とヤタガラスが碧の鳥と大きな岩の事を聞くと、すぐに答えた。

（夜明けになったら巣に戻る。その方角に向けて真っ直ぐ進め。やがて朝日の中、黄金色に輝く『大地の臍』が見えるはずだ。虹色の大蛇のお婆とは、この頃話していないので碧の鳥の事は知らない。後はお婆に聞け）

大コウモリが食事を済ませるまで、僕らは我慢強く待った。いや、そういう感覚自体、ある種文明に毒された時間感覚かもしれない。ここの部族の人たちなら、何とも思わずのーんびり待つのかも知れなかった。それにしても夜明けが迫ると、昼間の焼け付く暑さが嘘のように寒い。毛布を持ってきていて正解だった。包まってもまだ寒いのだ。ヤタガラスと体を寄せ合ったら、温かくなった。するとヤタガラスは眠ってしまったので、僕が起きている他無い訳だ。

エサを腹いっぱい食ったらしい大コウモリは、凄く大きな羽音を立てて飛び去った。

（ほれ、見えるか？　本当に黄金色だろう）

僕はヤタガラスを揺り起こす。

「ほら、『大地の臍』が金色に光っているよ」
「ん？　なんじゃ？　へそがきんいろ？」
ヤタガラスはしばらく寝ぼけていたが、目が覚めると「まずは腹ごしらえじゃな！」と仁王立ちになった。
チョッとあほくさいが、可愛げのある神様だと思う。

イップ大人の所で葉っぱに米を入れて蒸した粽みたいなものを仕入れたので、それを炙って、ミズホの佃煮を添えてやった。
「うんまい！　やはり、いざと言うときは米じゃのう」
他の人間は僕も含めて、軽い塩味のオートミールにドライフルーツだ。皆、腹ごしらえして体が暖まった所で、目標の『大地の臍』に向かう。連れてきた馬の分も含め、水が乏しくなってきたが、大コウモリが言うには「尽きせぬ泉が有る」そうだから、大丈夫だろうか？
「水が心配だなあ」
「おう、そこの枯れたように見える大木の根元を掘れ。すぐに水が出るぞ。泥交じりで人は厳しいかも知らんが、馬には十分じゃろう」
ヤタガラスの言うように皆でしばらく掘ると、水がにじみ出てきた。頑張って掘ると、連れてきた馬たちの飲む分には十分間に合うようだった。

空になったタンクには布で越して水を詰めると、皆で一斉に目的地に向かう。

「それにしても、明け方は凍りそうに冷え込むのに、昼が近くなると焼け付くようじゃ。大変な土地じゃな」
「本当にアティアはいるんだろうか？」
「何やら我がつがいの気配が強まっているようじゃぞ」

ほれ！　とヤタガラスが指し示す方を見ると、確かに碧色の鳥が

上空を舞っているではないか。
「先に行くぞ」
僕らと一緒にちんたら地表を進むのがまどろっこしくなったのだろう。カラスの姿になると、あっという間に碧の鳥のいる方に飛んで行った。しばらく二羽が上になり下になり、アクロバティックな飛行を繰り返していたが、やがて人型に戻ったヤタガラスがもう一人、子供を連れてきた。碧の髪の毛かあ。初めてみるが綺麗なものだ。

「グスタフ、我がつがいぞ」
「初めまして」
僕が一礼すると、その少女はぺこりと頭を下げた。真っ白いアイリュやテパネカの物と同じような貫頭衣にあちら風の赤いマントをしている。
「人型を取ったのは初めてなんじゃ。言葉を話すことはまだなれんが、聞き取りは出来るからの」
「それにしても、そっくりだ」
思ったことが口をついて出る経験なんて、最近はめったに無いのだが……やはり僕は驚いていたんだと思う。だって、髪と眼の色は違うけれど、出会ってしばらくしてからのチャスカにそっくりなのだから。
「名前は……まんま、ケツァールで良いのかな？」
「はい」
はっきり返事をしたその声も、チャスカそっくりだ。

途中までヤタガラスが乗ってきた馬に、ケツァールも相乗りする。
そこからは、もう大した道のりではなかった。

「それにしても、確かにでかい岩ですなあ」
「土地の連中が『大地の臍』と呼ぶのもわかる様な気がします」

皆、元気が出て来たようだ。

「あれ？　あれは虹ですか？」
「ややっ、動いている！」

僕は『大地の臍』が聖地である事は話してあったが、虹色の大蛇の話は皆にはしていなかったのだ。まじかで見ると本当に大きい。

（来たかえ、お前のさがしていた子は、一番涼しい洞窟にいる。お前たちも泉の水を飲んでいいよ。ああ、そのウマとかいう生き物もね。ここからお入り）
（ありがとう。それでは、おじゃまします）
（良い子だねえ。お前にはあたしからの祝福をあげるよ）

百歳までカウントダウンの年頃になって、良い子ってちょっと照れるが、大蛇さんは恐らく僕よりずっと年上なのだ。

ここから、と言われた大きな岩の裂け目から入ると、中は涼しい天然の回廊になっていた。そして、どこかから水音が聞こえる。赤ん坊が機嫌の良い時に上げる高い声が聞こえたような……

「アティア！　アティア、いるかい？」
「はい！」

元気な声だ。ピタピタという足音がして僕の前で止まった。ああ、アティアだ。良かった。

「みなさん、ありがとうございます」

さすがに、声が震えている。泣いているのだ。嬉し涙なのは間違いなさそうだ。

大君主国風の白いダブッとした服を着て腕には赤ん坊がいる。黒い目黒い髪の元気な子だ。

「その子は？」

「私の息子です」

さて、その子の父親は……どうするかな。

僕と碧い鳥と大地の臍・2（後書き）

「昼間の焼け付く寒さ」訂正しました。脱力します。すみません

僕と碧い鳥と大地の臍・3

『大地の臍』の内部には幾つか涼しい洞窟が有った。うんと奥の方にはこの地域の部族にとっての神殿のような場所も有るらしい。
天然の中庭には食べられる木の実や野草の類が生えているし、泉から始まった小川の先の方にはエビの仲間やワカサギぐらいの大きさの銀色の魚や、ブラックバスに感じの似た十五センチぐらいの魚が泳いでいる。他にもかなり大きなスズキの仲間かなと思うような魚もいる。

「魚と木の実で、どうにかこれまで過ごせました」
火のおこし方は、地元の人が身振り手振りで教えてくれたらしい。虹色の大蛇さんのおかげで、皆に親切にして貰えたのだと言う。時には鳥の卵や芋の仲間かと思うようなもの、何かの動物の肉を恵んでくれたりもしたようだ。
「それにしたって、どうやって海岸からこの大変な場所まで辿り着いたんだい？　そもそも、なぜこの大陸にたどり着けたのかも謎だが」
「アルラトで、声を聴いたのです。大蛇ばば様の声だと思うのですが」
幾度も『大地の臍』に来いと夢の中で、呼び掛けられたのだと言う。いきなり夢で『大地の臍』と言われてもアティアに分かるはずも無い。そのうちに……
「碧の卵を孵してやれ。護りの力を少しだけ返してやれ」
そんな言い方に変わったそうだ。
「碧の卵を孵す力が私に有るとしても、どこへ行けばよいのか分からないし、分かったとしても、こんな閉じ込められている身の上で一体何をどうしろと言うのかと、夢で訴えました」
すると、ある日、アルラトのハレムの庭の池に小船が浮かんでい

たのだと言う。
「それに乗ればどこかに行ける。上手く行けば海に出られるかもしれない、瞬間そう思ったのです」
　不思議な事に、いつも影のように付き従っている腕っ節の強そうな宦官も侍女達も、その時はいなかったのだそうだ。
「望まない子を身籠って、何となくぼんやりとですが、死んでしまっても構わないと思っていたせいも、有ったかもしれません」
　小船に乗った途端、凄まじい勢いで池から水路、運河を抜け、海に出た。更に凄まじい速さでその小船が進み、気が付くと僕らの船も入った入り江に到着していたらしい。
「腰みのだけのお爺さんが、丁寧にあいさつをして、私を舟から降ろしてくれたのですが……」
　そこから先は虹色の大蛇さんの言葉が頭に響いて、意識を失い、気が付くと『大地の臍』の内側の泉に面した洞窟の中だったらしい。

（大蛇さん、一体全体なぜアティアをここに連れて来たんだい？）
（輝く碧の卵が『大地の臍』の中に有ったのだ。理由など知らんが。孵すには力が必要だが、つがいの黒い鳥の力では護る事は出来ても、孵す事は出来ん。必要な力を持ち合わせているのがこの世界でアティアだけだった。だから呼び寄せた。この世界にアティアの子もその次の子も必要だが、アティアとつがいの男との縁はよじれている。あまたの穢れで損なわれている。アティアもつがいも浄める必要が有るのう）
（つがい、ってあの大君主国の世子を？　どうやって浄めるんですか？）
（そうよな。ちょっとばかり無理をして、連れ出すしか無いのう）
（そんな簡単に連れ出せるもんですか？）
（あの土地を揺らせば簡単だが、その際に多くの人が死ねば死の穢れを帯びる故、良い方法では無いのう）
　アティアはケツァールとヤタガラスの護りが有るので、舟が使え

たが、世子には無いので地の力しか使えないそうだ。
（地震を起こしちゃうんですか？）
（ここから地の中をそのまま進んであの土地に出れば、どうしてもそうなる）
（地震を起こさず世子を連れ出すのは、無理なんですか？）
（揺らすのが一番楽なのだ。だがのう、死の穢れは厄介じゃ。いっそ飲みこむ事にするか。不味そうだが）
（世子を飲み込んでしまうんですか？　それで死なないのかな？）
笑う蛇の顔を、僕は初めて見た。だが、本当に大蛇さんは笑ったのだ。ニヤリと。それから急に体が細くなった。それまで単線が通るトンネルぐらい有りそうだった太さだったのに、ただの水道管ぐらいの太さになっちゃったのだ。
（チョッと、行ってくる）

ズッ、ズッ、ズッ、ズッという規則正しい音と共に、長いホース状の体が真っ直ぐ突き刺さるようにして地に潜って行くようだ。
チョッと、と言うには時間はかなり過ぎた。
僕らは僕らの宿泊用に割り当てられた洞窟で勝手に煮炊きして、持参した食料で昼も夜も食べた。アティア専用スペースよりちょっと下流のきれいな小川で皆、体を清めたり、涼しい洞窟内部で昼寝したり、付いて来た海軍の連中も皆、のんびりして過ごした。

「食べられると伺った木の実を二種類ほど試食しましたが、結構いけますねえ」
「これなどはオレンジのような味で、こちらはナッツのような味で、毎日食っても悪くなさそうです」
「そこで取れた魚は、塩焼きしてみました」
更に缶詰やらクラッカーの類や野草類のサラダやら、なかなかの御馳走になった。ヤタガラスはケツァールとイチャイチャするのに忙しくて食事なんてどうでも良いのかと思ったが、そうでもなかっ

た。
「美味い。こりゃあ美味い。おう、これも美味い」
何だかいつも以上にはしゃいで、にぎやかだった。
「アティア、大蛇さんは大君主国の世子をここに連れてくる気みたいだが、君の気持としてはこれからどうしたい？」
「そうですねえ。あの、ハレムには戻りたくないです。食べ物は美味しかったし、あの国では恐らくああいうやり方が女の人を大切にするって事なのかもしれませんが、何か根本的に間違っている気がします」
「世子本人は？　どう？」
「例えば、帝国で誰かに紹介されて……と言うのであれば、友達にならなれただろうと思いますが、今はとてもそんな気持ちにはなりません」
「顔を見るのも嫌か？」
「会いたいと思った事は一度も無いです。でも、この子の父親ですから……」
「人さらいの親玉と、被害者って感じか？」
「そう言い切るのは、何だか可哀想ですけど」
「可哀想？　ふうん」
「あの人の父方のお祖母様もお母様も帝国の人で、さらわれて売られてきた人らしいんです。だからでしょうね。帝国の言葉が流暢に話せるんです。何と言うか歪んだ環境で育ったから……」
「多少変でも仕方が無いような気がするのか？」
「ええ。本人にもどうにもならないのに。可哀想だと言う気は……するんです」
相手を可哀想と思うのは、明らかに好意を持ち始めた証拠だとは思うが……拉致監禁されている内に生じたストックホルム症候群的な心情に過ぎないのかも知れないし、僕にはどう判断すべきか良くわからない。

まあ、政略結婚なんかだと、そういうのもザラ、いや、ましな方なんだろうが。だが僕は僕なりに頑張って成果も上がったから、好きでもない相手と政略結婚でくっつけなんて、身内に強制する必要性も無いのだ。だから、息子まで生まれたのに「好意を持ち始めた」なんて程度なのは、やっぱり間違っているとつい思う。

「じゃあ、アティアは帝国に一緒に戻るって事で、良いかな？」
「はい。懐かしい皆様にお会いしたいですから。お願いいたします」

夜はケツァールとアティアは『女の場所』と定められたエリアで眠る。するとヤタガラスがすねた。七歳児のくせに色事はヤル気まんまんだったのかと可笑しかったが、どうも、そこまで考えてはいなかったようだった。

「好いた女なら、隣におるだけでも嬉しいだろうが」
「そりゃあ、そうだな」
「長い長い間、生き別れとったのじゃぞ」
「じゃあ、アティアが帝国に戻ったら、好きなだけケツァールとイチャイチャしたら良いさ」
「出来るかのう？」

洞窟に柔らかい草を敷いただけの寝床はヒンヤリして、心地良かった。ヤタガラスは体を丸めてスヤスヤ寝ている。どう見ても七歳児にしか見えないのが、やっぱり不思議と言えば不思議だ。遠くで虫の声、カエルらしき声、後は正体不明だが、何か生き物の声がする。だが、空気がヒンヤリしていて、平和だ。そんな事を思いながら僕も深い眠りに入ったようだった。

「どうぞ、このあたりの木の実ですが、滋養に富んでいます」
「ありがとう、頂くよ」

そんな会話が耳に飛び込んできたとき、洞窟の中は差し込む朝日で明るかった。明け方は一番空気が冷たい時間だ。僕は毛布をひっかぶった。

アティアが木の実を勧めているのは……ひょっとして？　僕が耳を澄まして考え込んでいると、赤子の声がした。機嫌の良い声だ。喃語と言うのか、気分が良いと「あっあっ」とか「くー」とか「ばあ」とか意味のない音声を発するのだ。言葉を話す準備なのだと聞いた記憶が有る。赤ん坊は気配や人の気分に敏感だから、機嫌が良いと言う事は、大人同士の纏う気配が尖っていない、穏やかなものである事を示していると言えるだろう。

「ん？　なんじゃ？　グスタフ」

ヤタガラスがのびをして目をさまし、僕が聞き耳を立てているのを奇妙に思ったのだろう。

「しっ、静かに」

僕はアティアと男の会話が途切れさせたくなかった。

（ありゃあ、アティアの産んだ赤ん坊の父親じゃな？）

（多分ね）

最初からテレパシーにすれば良かったのだ。

「お口に合います？」

「見た事も無い変わった形だから、少し身構えてしまったけれど、とてもおいしいよ。それにしても、ここはどこなのかな？」

「ドーン大陸の南端より更に南の、南方大陸と言う場所のようです」

「本当か！」

「ええ。ここはその南方大陸の聖地なのです」

「テオレル帝国の皇帝、いや、皇帝陛下はアティアを探しに出かけられたらしいが、今頃いったい……」

「昨日の内に、海軍の皆さんと御一緒にここにおいでになりました。

まだ、お休みなのだと思います」
「先ほど、馬のいななきが聞こえたような気がしたが」
「海軍の船でこの大陸までおいでになり、そこから先は馬のようですよ」
「そうか。馬を連れてくるぐらい、きちんと支度をなさって来たのだな。我が国の者にはどこにアティアがいるか、見当もつかなかったのに……」

（なあ、グスタフ、やはり間違い無くあの男が大君主国の世子じゃな）
（そうだろう。大蛇さんが、連れてきたのがいつだったのか全然気が付かなかったけれど）

二人の話の声は穏やかだ。会話は完全に帝国の公用語で、男の話しぶりは帝国の人間と変わらない。

「この子にまだ、名をつけていません」
「そうなのか。生まれてどれほどたつのだ？」
「五か月ほどではないかと思うのですけど、はっきりしません。ここは暦も有りませんから」
「アルラトの王宮ならば、星占い師の言葉で生まれた子の名前は決まるのだがな」
「生まれた日がはっきりしませんもの、どういたしましょう。大伯父様に付けて頂こうかしら」
「まて、先例は有る。初代様、二代目様は父君がお付けになったのだ。だからその先例に習えば良い……我が嫡男なのだから『導く者』を意味するムルシドと付けよう。我が息子だからムルシド・ビン・ザファルとなるな」
「世子様のお名前のザファルとはどういう意味なのですか？」
「勝利と言う意味だ。だが、私では国を勝利には導けないようだ。

なあ、戻って来ては貰えまいか？　テオレル帝国の皇帝陛下には改めてお前を我が妃として迎える事を認めていただくように、お願いする。今や、妃はお前だけなのだが、どうだろうか？　その子を父無し子にはしたくないのだ」

「私だけが、妃とは……どう言う訳で？」

「ハレムは空っぽだ。元から私自身のハレムは、空だったがな。父上は戦が始まってすぐから病の床で、もう回復はなさるまい」

ガヤガヤと向こうから、士官たちが話す声が聞こえてきた。朝食の支度を始めるらしい。

僕とヤタガラスは、いかにも今起きましたと言う感じでのびをして、アティアとザファル君に朝の挨拶をする。ザファル君は白い肌に銀色の髪、灰色の瞳のなかなかの美丈夫で、背丈は僕ぐらい有る。まあ、この世界では大男の部類だ。絹地にきらびやかな縫い取りを施した大君主国風の寝間着が、なんだかこの場所には似合わない様な気もするが、彼には似合っている。

「おはよう、お二人さん。いつここについたの？」

僕の砕けた物言いに、ザファル君はちょっと驚いたようだった。だが、友好的な雰囲気をぶち壊すような大人げない言葉は吐かず、年長者に対する君主国式の丁寧な礼をした。アティアと並ぶとなかなかいい感じなのだがな。だが、初めの出会いが良くなかったと言うのは確かなのだ。

普通に外国からの留学生で、アティアと交際するうち結婚したいと思うようになった……なんて経緯なら、僕だって何の反対もしないが……よじれているんだよな。夫婦の縁が。子が出来たから結びなおすにしても、ちょっとした仕掛けは必要だろう。そんな風に僕は考える。

ザファル君の話と大蛇さんの話を総合すると、アルラトの宮殿内の自室の寝台で眠っていたザファル君は、虹色の大蛇に飲みこまれる夢を見たと思ったけれど、それは夢でも何でもない現実で、明け方にはアティアと息子の眠る部屋の前に倒れていた。と言う事になるらしい。ケツァールが気がついてアティアが名前を呼んで体を揺すったらザファル君は目覚めた。そういう事らしい。

大蛇さんに言わせると、ザファル君を飲み込む時は、ちょっと不味い味と香りがしたけれど、体を覆っていた薄い穢れの気配が無くなったので、今はすっかり浄められたらしい。長距離を体を細めて動くのは、ちっと疲れたそうで、これから丸一日寝るんだそうだ。帝国に戻るのは大蛇さんが目をさましてからにした方が、安全らしい。僕らは一日、この聖域の中でのんびりすることにした。水にも食料にも不自由しないから、気楽だ。まだ帝国と大君主国は外交上は交戦状態なのに、僕とザファル君は涼しい泉の前で、のんびり話している。

「大蛇さんの中から、吐きだされたって事か。凄い経験をしたねえ」
「全部が奇妙な夢だと思っていたのですが、現実だったのですね」
「今ごろアルラトは上を下への大騒ぎじゃないか？」
「はあ。帝国側が休戦して下さっているので……さほどひどい事にはならないでしょうが、父が亡くなれば、宰相が何か小細工をするかも知れません」
「ああ、今の宰相は君の父上の腹違いの弟だったね」
「はあ。ですがあの叔父に、うまく国内をまとめる力量が有るとも思えませんから……」

僕はその日丸一日をかけて、我が帝国の平和的介入と、アティアとの縁の結び直しについてザファル君と率直な意見交換をしたのだった。

僕と碧い鳥と大地の臍・3（後書き）

誤字、気が付いた範囲で直してますが……お知らせいただければ幸いです。

僕の気がかり・1

僕の百歳の誕生日が迫っている。現在の僕の正妻でもあるレイリア女王ガブリエルは子供らを連れて、黄金宮に滞在している。十人の子を連れたガブリエルは堂々とした母親ぶりだ。近頃は僕の直接の助けが無くても、危なげなく女王としての職務を果たせているようだし、母親としても自信に満ちているように見えるのだが、今度のトリアの滞在ばかりはちょっと雰囲気が違うかもしれない。雰囲気が違うと言えばマサエとトシエもそうだ。近頃は、ふと僕の顔を黙って見つめる回数が増えたような気がする。

ガブリエルもマサエもトシエも表向きは誕生祝の話をしながら、ルンドにやってくると言う美保の生まれ変わりの事をひどく気にしているのだろう。だが、その日が近づくにつれ、かえって美保に関する話題を避けるようになっている。

『祝・御生誕百年祭』なる文字が新聞紙面や、デパートの広告、商店の看板、食べ物屋のメニューで目立つ。ラジオ放送が昨年から試験的に始まったが、まだ、放送時間は朝昼晩三回の限られた時間だ。内容は天気予報・ニュース・歌・ラジオドラマといった所だが、音質もまだまだだ。それでも、僕は昨年初めて誕生日の日に帝国国民各位への感謝のメッセージを放送してもらった。

「普段なら電波が上手く届かない所でも、陛下のスピーチだけやけにはっきり聞こえた」とラルフさんに言われた。電波が大好きな太田さんは、それがなぜなのか解明したいと考えているらしいが、僕を実験動物扱いにもできないんで、ちょっと悩んでいるらしい。

電波は人外の存在に色々予想外の作用を及ぼすようだ。ラジオや電話網が発達してくるにつれモナとの会話が減った。ヤタガラスも

自分一人だと体調の不良を感じるらしいが、ケツァールと一緒だと帝国の都市部でも平気だと言う。ケツァールもヤタガラスと一緒なら平気だそうだ。

「なんかこう、トリアは空気がビリビリゾワゾワして心地悪い。グスタフに話すべき事が有っても、ふと忘れてしまう。近頃そのような間抜けた事が増えた気がするのじゃ」

モナは電磁波・電波の類がよほど合わないらしい。

昨年末、僕はわざわざスコウホイ大公になっているネストル、あのアンニカの産んだ息子だが、その息子が作ったラナの小さな別荘に出かけて三日ほど滞在した。その別荘には電話も無いし、ラジオも無い。急ぎの知らせは伝書鳩か狼煙だが、どちらも極北に近い土地の真冬のブリザードが吹き荒れる日にはお手上げだ。そこで晴れた時しか使えないが、それでも厳冬期にも正確な情報が送り出せる古風な腕木通信を復活させた。スコウホイの北部地域に限った現象だが、腕木通信も十分現役なのだ。

そうでもしないと、電波や電磁波が嫌いなモナとは会話を交わしにくいし、下手をするとスコウホイ北部の守り神的な存在であるモナがどこかに移住してしまうかもしれないのだ。

モナは冗談抜きでアイスランドやグリーンランドに相当する場所も移住を視野に入れて探検している。だが、その辺は空気や水の感じは気に入ったが余りにも人が少なすぎでちょっと面白みに欠けるそうだ。活火山の側の天然温泉は少し興味が有りそうではあったが。

「お前が言う所の新大陸とやらの北の方は気分の良い所であったぞ。民もおかしな文明とやらに染まっておらん者ばかりのようでな、気が合いそうじゃ」

ルンドの北米大陸に相当する辺りは、意識的に手を入れていない。そもそも現在もアメリカ合衆国やカナダに相当する国家が存在せず、スポット的に沿岸部の幾つかの港を帝国が管理しているだけだ。

幾つも存在する少数民族の文化を最大限に尊重し、温存する方向で行こうと僕は思うのだが、それでも知的好奇心の旺盛な若者はどこにでもいるものだ。中には大変な才能の持ち主もいる訳で、そうした人物には世に出るきっかけは与えるべきだと思い、希望する者には無償で教育を施す、と言う事を徹底している。

そういう訳で各帝国の港には、小学校から高校相当の学校が有る。その先は帝国本土の大学に進学するのだが、寄宿舎代、学費・給食費を全額僕名義の資金で負担し、別途公務員初任給の半額程度の奨学金を毎月支給している。優れた研究にはまた更に別の支援金も与える。基本的にドーン大陸での制度と同様のものだ。おかげで地熱や氷雪、植物、動物に関する研究も進んだし、民族学あるいは芸術に関する成果も出ている。

資金はドーン大陸のダイヤモンドビジネスで相当に稼いでいるから全く困らない。だから少数民族から税を取る必要も無い。

あの南方大陸の老人にも以前言われたが僕の事は『光を背負った男』と呼ぶ部族が多い。まあ、嫌われてはいないし、信用もしてくれているのだと思う。

皆義理堅い人々で、金が出る鉱脈や油田の在り処をこっそり僕に教えてくれたりするのだが、開発すると大規模な自然破壊にもつながりそうなケースばかりで、地域の皆の伝統的なのんびりした暮らしぶりとの調和を考えると、悩む。結局開発はしていないが、予備調査の結果では、どこも大変有望だ。

面白いのは母系制の部族が多く、お婆さんやおばさんの発言権が大きい。多くの部族同士で集まって行う大規模な祭りも有ったりす

る。その意味では、女性差別の酷い部族が多く、気を抜くとすぐ部族間抗争が火を噴くドーン大陸よりは平和だ。そうした人々の気風も、モナは気に入ってしまったのだ。

「スコウホイからあっちの大陸に移住するのも悪くないのう」

聞いた話では『あっちの大陸』北部の夏祭りのイベントで、多くの若い男女が集まって、セイウチやトナカイの皮で出来た敷物を皆でピンと引っ張り、その上を交代でピョンピョン飛ぶ遊びが有るそうな。そう、地球で言うトランポリンだ。モナはその遊びがひどく気に入ったようだ。

色鮮やかなさまざまな民族衣装を着て、皆精一杯おしゃれをし、トランポリンで飛び、歌を歌い、皆で御馳走を囲み、大変なにぎわいらしい。どの民族グループも真冬は外界と遮断されるような超過疎地に住んでいるので、この夏祭りはお見合いパーティーか集団デートのような意味合いもあるそうな。盛り上がった一夜の結果、子を身籠る女もいるそうだが、それを「ふしだら」とは誰も言わないらしい。子は独り立ちするまでは原則的に母親の物で、父親は特段の義務も責任も負わない。代わりに成人した男は母親と母を同じくする姉や妹、その子供らに対する扶養義務を背負っている。

まれに男女のカップルが幼い子を協力して育てる事も有るらしいが、それは男の肉親が死に絶えた場合の例外的なケースらしい。本当に仲睦まじくて二人でいたいからというのも、皆無ではないそうだが……「本当に珍しい」事であるらしい。

「楽しい夏祭りじゃったから、また行きたいもんじゃ」

「スコウホイの民の悩み事は聞いてやらないのか？」

従来モナは夏の間は、スコウホイ北部の人々の悩み事相談に応じていたのだ。それを放り出す気らしい。

「グスタフがおれば十分じゃ。ネストルの住んでおる城から困り事の相談のための電話が出来るんじゃろ？皆それを使えば良いのではないか？」

確かに……帝国国民なら誰でも使用を許されている『黄金宮直通電話』をかければよいのだ。僕は一種のコールセンターというか行政全般に対する苦情申し立てや、自力では解決できない厄介な問題の相談に乗る部署を立ち上げている。ラジオや鉄道の駅、乗合馬車の停留所でも宣伝しているから、かなり浸透してきているようだ。公衆電話は役所や交番で帝国国民である事を証明するパスポートや配給証明書・在学証明書などを提示し、住所氏名を記載すれば、誰でも使用できる。

これまで相談が殺到したのは不作の年の納税時期と、伝染病の流行期だった。いずれも別途対策本部を立ち上げて応対にあたったが。不作の時期の農家の納税に関しては、原則免除だ。こんな国は他には存在しないせいもあって、帝国への編入を望む地域や自治州になる事を希望する国が、近頃多い。特にドーン大陸の小国では、王や貴族の身分や資産をある程度保証されれば、後の領地運営は帝国に丸投げするのがはやりのようになっていて、昨年だけで二十以上の小さな王国が帝国の自治州に組み込まれた。

「帝国の国民になれば食いはぐれずに済むというのが、知れ渡ったせいでしょうかね、すごい勢いですよ」

ラルフさんは苦笑していた。

「税が払えるのに払わない者には厳しいのは、知られていないのかな？」

「でしょうね。だから不正蓄財で資産を膨らませた連中まで帝国国民を目指すみたいです」

だからだろう。トリアでも肌の黒い人間の数が大いに増えた気がする。

一方でモナを信じて大切にしてきたスコウホイ北部の人たちは真面目で素朴で、ドーン大陸の奴隷貿易で富を蓄えた連中のような強欲さとも無縁な人が大半だ。黄金宮に直通電話を懸けるにしても、皆丁寧でよその土地の人間より恭しい口調だと言うのは、スタッフの間では常識だと聞いた記憶が有る。

「あの電波やら言う物も色々便利に使えるんじゃろう？」

「ああ。まあなあ」

「帝国は開け過ぎたのじゃな。どうも居心地が良うない」

「モナは……本気で移住を考えているのか？」

「ああ。あちらの大陸でならまだまだ人の役にも立てそうだし、森はデカいし、大地も空気も清らかじゃ。人々の魂もな……おお、そうじゃ。言うのを忘れるところじゃったぞ。お前のつがい、生じてもお前の目の前に現れるにはしばらく時がかかるやもしれん。あの電波とやらが鬱陶しいのう。他にも何か有ったんじゃが、忘れてしもうた。世の中、このように疎ましい事が増えてくると、早めに子供でも作っておかねばならんかのう」

「モナ！」

「ああ、まだ、大丈夫じゃ。あの清らかな土地に行けば、寿命も延びようぞ」

そうしたいきさつもあって、モナは当然僕の誕生日には顔を出さない。だが、どこからか祝福の遠吠えは上げてくれるそうだ。

誕生日の前夜、僕は妻であるガブリエルと共に、かつて父上がお使いだった部屋で休んでいた。幾ら見た目が二十代でも、三十代の終わりに近い妻に合わせるぐらいの事はするので、近頃は本当に隣で寝るだけの夜が多い。

「どうなさいました？　いま、モナ！　と叫ばれましたが……姉上

様に何か？」
　ガブリエルに揺り起こされるまで、僕は自分が叫んだと言う意識は無かったのだが。
「そうか。モナを呼んでいたのかな……」
　夢だったのだろう。狼の姿のモナが何かを言いたそうにした、そんな情景を見た記憶は有る。
「何だったかな……」
　お前のつがいだが……モナはそう言った。言ったと思う。

　誕生日当日は朝から大騒ぎで、僕は座っているだけだが皆が色々忙しくしている気配は十二分に伝わってくる。各友好国、自治国・自治州からも使者やら贈り物やら、大変だ。つい最近まで交戦状態だったアルラト大君主国まで使いを送ってくるのだから、もうこのルンドで帝国と戦争をする国など無いのではないかと思う。

「偉大なる皇帝陛下、御生誕百年、まことにおめでとうございます。我が主君の心からの敬意とお慕いする気持ちをお受け取りください」

　アルラトの使いが持ってきたのは、特産の青緑色の宝石の極上品の玉を幾つかと、大蛇・ケツァール・ヤタガラス・大地の臍を織り出した見事な絨毯だった。

「御祝辞は改めて今晩のお電話で直接、主の口から申し上げたいとの事です」

　そう。今や帝国は大君主国とは極めて友好的な関係になったのだ。つまり結論から言うと、アルラト大君主国と我が帝国は無事に平和条約を締結した。
　それに基づいて現在、我が帝国は君主国の近代化に惜しみない援助の手を差し伸べている。

と言うのも、アヘン中毒で色ぼけな大君主が死亡したのだが、死後に分かった新事実に帝国の皆は驚いていた。何と大君主の母親は、亡き父上の行方知れずの末の庶妹だったのだ。妹とは言っても親子ほど年が違うし、父上とは殆ど接点も無かったが仮にも帝国の皇族が行方知れずである事が、お亡くなりになる間際まで気がかりであったのは確かだ。

その父上の庶妹は四歳ごろミッケリの実母の住まいから拉致され、アルラトの豊かな奴隷商人の所である種の英才教育を受けて育てられたと言う。それだけ大変な美少女だったのだろう。その後、後宮に送り込まれてすぐに産んだ子が亡き大君主と言う事になるようだ。

あの色ぼけ大君主と僕が従兄弟同士って言うのはびっくりだ。こうした記録は宦官どもが握っていて、後宮を廃止するまでザファル君も知らなかったのだそうな。

それだけでもびっくりなのに、ザファル君を産んだ母親が、どうやらイヴァル・ケニングが生涯一度だけ浮気した相手に産ませた庶子かも知れないと分かって、更に驚いた。

「母親のおかげで、御国と我が国は二重に深い縁を背負っていたのですね」

今やザファル君は自国の近代化の牽引役だ。ルンドのケマル・アタチュルク？　調子が良かった頃のパーレビ国王？　そんな勢いだが……国民の間の経済格差と農地改革にはよくよく気を付ける様に、それに秘密警察の類をあんまりのさばらせない様に、と言う事は僕としては念を入れて伝えている。

後宮の廃止と軍政の近代化と奴隷制度の廃止だけでもアルラト中大騒ぎだったが、不完全ながら今年から四年制の義務教育が始まり、農地改革が進行中だ。

「下手すると暗殺されかねません」

毎晩話す直通電話でさっきもザファル君は笑っていたが、確かにまだまだその危険は大きいのだった。

「御報告が一つ有ります」

ちょっと照れたような感じの口調だから何かと思ったら、何と、息子のムルシドの次の子供がアティアのお腹に出来たそうだ。

「そういえば、大蛇さんがこの世界に必要な子だと言っていたなあ。どんな子なのだろうね」

その後は多少の雑談をして、電話を切ったが、切った後でふと思った。

「出産予定日が……いや、まさかな」

僕の気がかり・2

僕が百歳になってから初めての時空管理局との定期交信で、聞いておきたい事は山積みだった。

「モナが移住してしまうらしいんだが、どんな影響を考えておかねばならないかな」

「先ずは地域住民の心情的な喪失感に配慮すべきでしょう。率直に言いますと、ああした自然発生的な特殊な精神生命体については、我々も多少接触した事は有りますが、詳細は把握出来ていません。むしろ貴方がそうした存在と非常に親和性が高いのも我々の予想外でしたので、対策もむしろ自分で考えられた方が良いかもしれません」

「僕は既に百歳になったが、美保の転生は無事に済んだのか？」

「貴方に最も適合すると思われる資質を有した生命体は、既に無事にそちらに到着しています。その際、貴方のデーターから新たに得られた有益と思われた能力その他を強化したので、自発行動の率も当初の予定より高くなりますね。貴方の長期にわたるパートナーとして想定し派遣しましたが、具体的な彼女の行動については彼女自身の裁量の範囲なので、我々は関知しません」

「せめてどこで出生したのかぐらいは、情報をくれ」

「彼女はその情報の公開は拒否しています」

「じゃあ肉体的な外見はどうなんだ？　あるいは会った時、美保の転生した存在だとわかるものなのか？」

「それらの情報も公開拒否です」

「なぜ？」

「彼女の希望に添う方が本来的な目的の遂行に、より好ましい結果を期待できると当局が認定したと言う事です。貴方の現状に対する配慮と言う側面も有るのだと御理解下さい」

「妻子持ちでややこしいのは御免だと、そんな感じ？」
「そのあたりは何とも。ですが、肉体の条件、特に老化に関する条件は貴方同様極めて特殊ですから、いずれは遭遇はすると我々は予想しています。では、来年またお会いしましょう。クリア・エーテル」

ふん、何が「いずれは遭遇すると我々は予想しています」だよ。こっちは百年待ったって言うのに。最初と話が違うじゃないか。途中ではしごを外されたような、何とも不快な気分だ。どこでどうなったのかぐらい、教えたって減るもんじゃなかろうに。僕は例によって交信を強制終了した時空管理局に悪態をついたが、彼女自身が「情報の公開を拒否」しているなら仕方が無いのか……

僕が二人の皇后の墓の脇でむくれていると、ヤタガラスとケツァールが手を繋いでやってきた。

「お手々繋いで仲良しこよし、結構な事だ」
僕はちょっとばかりイラついているのが、自分でもわかる。
「グスタフも誰ぞと手を繋いで、散歩すればよかろうが。マサエとトシエと三人なら両手に花じゃろう。ああ、近頃では花と言うより婆かのう。まあ良いではないか。可愛い婆二人と手を繋げば」

両手に婆……二人が聞けば目を白黒させるだろう。五十前でまだ孫もいないのに婆呼ばわりは、可哀想な気もする。何より二人とも、同年代の女性たちよりまだまだ美しいのだから。

ああ、そうか。美保が今零歳児の状態だとして、十八歳まで待てば、あるいは二十二、三歳まで待てば、事情は嫌でも移り変わってくるのだ。ガブリエルもまだ今は三十代の後半だから……今遭遇するのは、波風が大きすぎる、そう考えているのか。

（美保、美保、僕の想いが感じられるなら返事ぐらいくれ。僕が身ぎれいになったら許せるのか？　どうすれば会ってくれる？）

僕はごろりと草の上に寝転がって、目をつぶり、最大級の思念の波動を放出した。……これだ！　どうにか見つかった。美保の、紛れもない美保の波動を感じた。

（亮太、私たちが初めて二人きりでデートした時の事を思い出して）

（十八歳の夏休み、忘れるはずが無いよ）

（では十八歳の夏に、必ずどこかで会いましょう。今はそれ以外の約束はできないけれど）

（僕たち、また、一からやり直せるだろうか？）

（きっと大丈夫。では、再会を楽しみにしているわ）

百歳の誕生祝いに関するあれやこれやが終了すると、ガブリエルはレイリアの都・テージョに戻った。九男と言うか、ガブリエルにとっては最初の子であるセバスティアンだけは黄金宮に残った。将来のレイリア王としての修行と言うか、学問・武芸その他もろもろを仕込むためだ。確かに平成の日本なら高校入学の年頃なのだから、母親の手元を離れるのに良い時期かもしれない。

「アルフォンソも一緒にと言う話は出たのですが、甘ったれですから、もう一年様子を見るようです」

トシエの娘・ヒサエとマサエの娘・カナエはその甘ったれのアルフォンソと同じ年で、セバスティアンからすれば一歳年下の異母妹と言う事になる。ガブリエルの滞在中は遠慮させているのだが、それ以外の日は僕はヒサエ・カナエと朝食を共に食べている。それに新たにセバスティアンが加わった朝食の席は、明るくにぎやかだった。

ヒサエもカナエも社交的な性格で陽気だ。そしてしゃべり出すとなかなか止まらない。従来の皇族の姫君たちは宮中に招いた家庭教師の下で学んだものだが、この二人はトリア市内の中学に通っている。制服は紺色が基調で日本の中学・高校のブレザーとジャンパースカートのタイプに似ているが、もっとスカート丈が長い。飾りのない革製の黒い靴を穿き、学用品を入れるランドセルよりも軍隊の背嚢に近い感じの黒いリュックというかバックパックというか、そんな鞄を背負う。

「姫様たちはやはり供の物に荷物をお持たせになるべきでは」

そうした意見も有ったが、僕は一般の生徒と全く同じ身なりで登校させている。その代り通学路の要所要所に護衛を配し、尾行が得意な軍人十名を前後左右にそれとなく張りつかせてある。

ヒサエとカナエは異母姉妹では有るが、生まれたのもわずか一日違い、顔もそっくりなので、殆ど双子のように見える。実際宮中でも間違えるものは多いのだが、セバスティアンはただの一度も間違えなかったので、二人は嬉しかったようだ。髪は褐色で目はグレーだが、容貌は僕に良く似ている兄の事を「やっぱりお顔が父上にそっくりでいらっしゃるから賢くていらっしゃる」などと言うのだ。

「あーあ。私達ってついてないわ」

「そうよねえ、理解されにくいとは思うけど、確かについてないわ」

「素敵な方が結婚できないような方ばっかりなんですもの」

「ほんとほんと。父上でしょ、兄上でしょ、叔父上方も素敵だけれど御年だし、結婚なさっているし……」

「生徒や先生方に素敵な人も居るだろう?」

「居ませんよ、兄上。無駄に美形の父上を見て育って、それが基準になっちゃってますから、どの男子学生も残念な顔の人ばかりだっ

て、つい思っちゃいます」
「そんな男子学生たちに『一緒にお昼を食べましょう』とか、『学校の帰りにカフェに寄りましょう』とか誘われてもねえ」
「鬱陶しいだけよねー」
「追い掛け回されて困った事なんかは無いかい？」
僕は心配になった。
「今の所、そんなに困った事は無いけれど、一人変なのがいるわ。どっかの公爵の息子」
「ああ、性格悪いよね、あいつ。今どきこの御時世で、何かと言うとすぐ身分を持ちだすし。勉強も出来ないのよね。男の子の友達もいないみたい。お祖父様の弟の一人の孫かなんか、なのかな？」
父上の庶弟の一人で、廃絶しかけの公爵家の婿養子になった人物の孫らしい。性格が悪く、不細工と言う噂の公爵令嬢の所に婿に行かされて、その叔父が幸せだったとも思えない。それでも娘が生まれ、その娘がまた婿を取ってようやく生まれた男子が二人が言う所の『変なの』らしい。

二人は皇族である事を伏せて通学している。学校側は無論僕の娘たちだと承知しているが。一般向けには警備の責任者である近衛軍の大佐の家から通っているように体裁を作っている。黄金宮内を抜けて、将校が家族と居住する官舎のエリアに行き、そこから徒歩五分程度か。　その大佐はレーゼイ家の分家筋の者でヒサエ・カナエの父親だと言っても十分通りそうな容姿・年代だ。実子は既に結婚した息子一人なので、娘が欲しかったと言う夫人は親身になってヒサエ・カナエの母親代わりを務めてくれている。無論大佐夫人と二人の実母トシエ・マサエとの関係も良好だ。

「レーゼイ大佐夫妻の意見を聞いておかねばいかんな。その『変なの』も含めてどうすべきか」
「でも父上、私達、皇族だってやっぱり内緒にしておきたいです」

「せっかくお友達もいっぱいできたのに、警戒されちゃうと、嫌だもの」
「……そうか。だが、本当の友達ならお前たちが皇族だと明かしても、友達でいてくれるとは思うけどな」
「かもしれませんが……」
「まだ、覚悟が出来ていません」
「ともかく、行ってまいります、父上」
「行ってまいります、父上」

いっぱいしゃべっていたのに、ちゃんと時間内に食事を済ませ、パタパタと部屋を出て行った妹たちをセバスティアンはあっけにとられて見送っていた。

「にぎやかだろう？」
「ええ。でも、何だか可愛いですね。あんなにおしゃべりをしながら、ちゃんと学校に間に合うように食べ終わるのがすごいなと、ちょっと感心しました」
「お前もそのコーヒーがすんだら、身支度をしておきなさい。希望していた高校に編入してもらえるように話はつけたから、挨拶に出向かなくてはね」
「どなたと御一緒に伺えば……あ、私は一人で伺うべきかもしれませんね」
一人で行く気になったセバスティアンを、ちょっと褒めてやりたい気分になった。
「明日からは一人で通学するわけだが、密かに護衛はつける。何しろお前はレイリアの次期王位継承者なのだから。だが、今日は僕と一緒だ。父親としては当然の役割だと思うしね」

僕は世話になる高校にセバスティアンと一緒に出向き、挨拶をしてから、警護と表向きの親の役目をするフェデリコ・デ・ピリス中

佐の所にも寄った。そう、あの昔僕を睨んだ、ガブリエルの幼いころからずっと警護の騎士を務めてきた人物だ。近代化されて行く軍を見て、騎士と言う存在の限界を思い知った彼は一念発起して学校に入り、正式に帝国の軍人となったのだ。出だしは遅めだったが、志望動機もしっかりしていたし勇敢だし勤勉だった彼は、各地で軍事だけでなく民生方面でも業績を上げ、このほど近衛に配属された。

「君の国家に対する忠誠心と、レイリアに対する愛情がセバスティアンを守るのに必要だ。よろしく頼む」

「はっ、命に代えましてもお守り致します」

ピリス中佐はガブリエルが世話した女性と結婚し、現在大学に通う息子が二人いる。何と二人とも飛び級で入学しているのだ。その息子たちがいずれも優秀な人物なのも、彼を表向きの親に選んだ理由の一つだ。セバスティアンが良い刺激を受ける事を、僕としては期待している。

僕はその夜、久しぶりにトシエ・マサエと一緒に風呂に入ってから、全身マッサージされていた。その日一日の出来事を思いつくままに話せる相手なんて、二人以外に無いのだが、時折そのせいで要らざる事まで口走ることが有る。まあ、僕が二人の愛情に甘えているからではあるのだが……

「十八年か……長いなあ」

「何ですの、十八年て……今年から十八年経つと、私達六十代の半ばになっちゃいますね」

「今でもヤタガラス様に婆呼ばわりされていますのに、あーあ」

「ひょっとして、ひょっとしますの？」

「何が」

「美保様」

「まあな」
「美保様、もう、お生まれになったのですよね」
「らしいよ。でも当分生まれた場所も明かさないつもりらしい」
「つもりらしいって、美保様御自身がですか？」
「ああ」
「それで、十八におなりになったら陛下とお会いになりますの？」
「多分ね」
「そこまで伸びてしまいましたのは……私たちと女王様の事をお考えになってでしょうか？」
「それ以外考えられないわねえ」
「ごめん。いらん事を言ったな」
「女王様には、内緒にしておかれた方が宜しいですわ」
「私もそう思います」
「うん。気を付ける」
「でも、私達の前では、うんとお気持ちを楽になさって下さい」
「そうそう。独り言でも愚痴でもぼやきでも、何でもおっしゃって下さい」
「美保様にお渡しする前に、ピカピカの若々しい陛下になって頂かなくてはいけませんもの」
「そうそう。私達の所為で御面倒と御迷惑をおかけするのは嫌なんですもの」

いつも感心するのだが、こうした場合もこの二人の心の中に醜い波動は微塵も見いだせない。亡きチャスカの波動が一番似ているが、この二人の波動はどこまでも陽気で軽やかだ。そのくせ僕に対する真実の気持にあふれている。

「ごめんよ」
「陛下は何も悪くないですわ」
「百年もお待ちになったのに、更に十八年の待ちぼうけなんて、何

とも申し訳ございません」

その夜のマッサージは二人が腕によりをかけてくれたみたいで、特に気持ち良く感じた。

「ありがとう」

寝所を出て行こうとする二人を僕は引きとめて、三人で久しぶりに寄り添って寝た。無駄にでかい皇帝用のベッドは三人で寝てもまだ余裕なのだ。

「可愛いねえ、二人とも。お前たちのおかげで、僕はいつも元気で幸せでいられるんだよ」

もう眠っている二人は、僕の言葉に無意識に反応するように体をすり寄せ、安らかな寝息を立てている。

ヤタガラスが言う所の可愛い婆二人は、本当に可愛い。考えてみれば、この二人と僕との関係は随分と変則的で、見方によってはふしだらで、でも不思議と安定している。彼女たちの気持ちを傷つけ無いためには、十八年の追加でも、まだ不足なのだろうか？

美保の判断は、正しいのだろう。そう思った所で、僕の思考も途切れ、深い眠りに入ったようだった。

僕の夏の休暇・1

僕にとってルンドで迎える百十八回目の夏が来た。帝国は地球で言う所のヨーロッパの中部以北の気候に近いので、セミは鳴かないし、スイカも一般的じゃない。海水浴はレイリアの南端にでも行かないと無理だ。

無論、あの美保の伝えて来た「では十八歳の夏に、必ずどこかで会いましょう」というメッセージを僕は片時も忘れた事は無い。つい先日、ヤタガラスがいきなりやってきて、モナが「夏祭りにグスタフの真のつがいを呼んだ」と言っていたと伝えたのだ。

ヤタガラスとケツァールは昨年の祭りに遊びに行って、非常に楽しかったらしい。

「今年は美保の生まれ変わりが来るはずじゃ。ケツァールがモナに頼まれて呼びに行ったのじゃから間違いなかろうよ」

「どこまで行ったんだ？　アイリュのどこかか？　ミズホか？　それとも大君主国か？」

「ネタバレはせんようにと、モナに釘を刺されておる。いや、実際我は知らんしの。知っているのはモナとケツァールだけなんじゃ。我はグスタフには嘘をつけんから、あえて聞かなんだ」

確かに、ヤタガラスは僕に嘘をついたことは一度も無い。どうやら嘘などつけないらしいのだ。

結婚以来、毎年夏を一緒に過ごしてきたガブリエルには悪いが、この夏は「モナに呼ばれたので」と言う以外特に説明もせず、僕はモナの移住先へ出かけることにした。そのガブリエルも五十代になってきて、自分の老化と僕の肉体的条件とのちぐはぐさが近頃は非

常に気になり始めているようだった。自分の息のかかったと言うかレイリア王家に縁の深い家からそこそこきれいな女性を選んで、僕に宛がおうなんてした事も有ったが、やめてもらった。

「たとえ限られた時間しか付き合えないにしても、僕は僕なりに納得の行く付き合いがしたいんだ」

「ですが私は五十を越えましたし、トリアのお二人は六十を超えておられますよね、でも陛下はお若いままですから何やら申し訳なくて」

「結婚を決めた最初から分かっていた事だし、美保はもう転生している。会ってはいないけどね」

「まあ……そうなのですか？」

「子供たち、特に娘たちの手前も有る。テージョでガブリエル以外の女性とベッドを共にする気は無いよ」

それ以降、女性を世話する話も美保の話もしていないのだが……薄々察しているようだ。と言うより美保の事は考えないようにしているようだ。だから僕もテージョでは良き王配として、父としての役目に徹している。幸い子供たちが成長してきて、母親を支えようとしてくれているのが有り難い。

「父上、母上の事は御心配無く。ヤタガラス様やモナ様と夏を過ごされるのですね。百年以上も誰かを待つことなど、僕には出来そうもないですが、それだけ特別な、大切な方なのですね。今すぐとはいきませんが、いずれは僕もお会いしたいです。どうぞよろしくお伝えください」

出かける前にセバスティアンと電話で話した時の会話は穏やかなものだった。近頃では次期王位継承者としての自覚を持って、危なげなく母親の補佐役が務められる様になっている。

モナは先ごろ、本当にスコウホイを離れ、新大陸の北部に移り住んだ。スコウホイには厳冬期にちょっと顔を出す程度だ。どう言うルートを辿るのか知らないが、流氷を操るには寒い時期の方が都合が良いらしい。

「大きな森と凍りつかん港と、穢れていない空気と大地、真っ直ぐな気風の人々、良い所じゃ」

幾度かそんな感想を夢で伝えて来た。そうした夢は電話が使えないモナとの定期連絡のようなものだ。一時期途絶えていたモナとの話が以前に近い状態に戻ったと言う事は、モナの気分なり体調なりが良い状態になった事の表れだろう。

モナの今度の住まいは、地球で言う所のアラスカの南部かカナダのブリティッシュ・コロンビア州の沿岸部に相当するだろう。新大陸の太平洋側で最北の不凍港から半日ほど歩くと到達できる場所らしい。真夏の最高気温は摂氏十八度程度という涼しさというか、寒さだ。夜明け方は夏でも普通に氷点下十度以下になるらしい。ちなみに温度の単位として我が帝国ではセルシウス度、つまり摂氏を最初から採用させている。そもそも他の国に温度を測る単位など存在しないので、ルンド全体で摂氏を用いていると言うべきか。

今回は行きは大西洋岸に海路をたどり、そこから陸路を取る。途中にホテルが有るわけじゃなし、当然テント生活なのだ。そうした訳で夏の休暇を過ごしに行くのに、まるで探検隊の装備を用意している感じなのだった。

「陛下、本当にもう私どもにはお気遣いなさらなくても十分ですのに」

「二人とも六十代も後半に差し掛かりましたのに、黄金宮にどっさり居ります年若い美人に浮気もなさらないでいて下さいましたもの」

「でも、陛下はお若いままなのですから」
「ましてや美保様はずっとお若いままの方なのですから」
「やっぱりこの夏はお出かけになりませんと」
「モナ様が呼んだとおっしゃるなら、きっとほんとにお会いになれるでしょうから、是非」

美人のトシエ・マサエでも、近頃はどうしたってお姉さんには見えなくなってしまった。それでも健気な可愛い婆二人は、僕を気持ち良く送り出そうとして、細やかに配慮して荷造りなど手伝ってくれている。

「美保様が私達に十八年の猶予を与えて下さった事、本当に有り難く思っております」

以前、チラッとそんなことも言っていた。多分二人とも本気でそう考えているのだ。

それにしても、手土産類が大変な量だ。モナが好きなのではないが、モナと仲良くなったあちらの部族の連中が甘い物を好きなので、キャンディーの類を手土産として多めに持って行く。ドライフルーツやナッツ類も欲しがるものが多いらしいので詰め込む。新大陸でも大人気だと言うTシャツ、僕とラルフさんが熱望してようやくできた物だが、発売されるや否や大ヒット商品となったものだ。そのTシャツも色々な色やサイズを取り揃えて持って行く。後は実用的な医薬品、電気が通ってない所が大半なので明るいロウソクも喜ばれる。学校の子供たちへのノートや筆記具、幼い子供たちへの絵本類、どうだろう、一昔前の交易船一隻分の荷物にはなってしまったが、専用の軍艦で新大陸の東海岸までは行くのだし、その後は人手も有るから、どうにかなるだろう。

僕と一緒にトリアから最新型の軍艦で出かけるのは新大陸北部出身の軍人たちだ。夏の長期休暇も兼ねて、故郷に戻る者を募って一団を編成した。僕を入れて総勢百五十名ほどなので、まさに中隊一個分と言う感じになっている。メンバーの大半は二十代前半の若者だ。後は新大陸での学術的調査を希望する生物・植物・地質などの専門家たちだ。こちらも三十代前半までの人が多い。

「親兄弟に負担をかけず」「広い世界を見られる」ので軍人になった者が多いようだ。一般大学に進学しても少数民族出身者には奨学金が支給されるが、兵士になればもらえる給料は確かにその倍は有る。更に帝国独自の制度で、各自の出身地とは全く状況の違う土地に新兵は赴任させトレーニングを積むので、きついと言えばきついが、見た事も無い土地で暮らし、外国語も勉強できると言うか無理にでもさせるのだが、それが冒険心に富む彼らには良いらしい。

「ドーン大陸の暑さにはたまげました。よく自分の体が茹であがらないなと、不思議でした」
「色鮮やかな花には感動しました。妹の土産に押し花を作りました」
「バナナって美味いですね。生は無理でも乾したのは持つので、土産に買いました」

若い彼らのこれまでの苦労話や家族への想い、これからの希望などを聞きながら、彼らと一緒に給食形式の食事を食べた。朝は雑穀のパンケーキかシリアル、チーズかヨーグルト、果物か野菜、卵か肉・魚という感じだが、昼は一皿と決まっている。パスタ類、パエリア・ピラフなどの場合が多いが、日本風のカレーライスと牛丼・親子丼は僕の提案で軍のメニューに採用された。カレーライスは大好評らしい。この船でもカレーライスは一杯だけ許されているおかわりを希望する者が多い。僕も大好きだ。欲を言えば、もうちょっと辛い方が好きだが。

「え？　陛下も我々と同じ物を召し上がるんですか？」
「うん。我が帝国軍の給食はなかなかの物だろう？」
「それはそうですが、驚きました」
「食器以外は、普段僕が食べている物と大差無いよ。ああ、外交的な晩さん会などは御体裁も必要なんだがね、煮込み物なんかは大人数分をまとめて作る方が美味かったりすると思うな」
「ああ、確かに軍に入って初めてシチューを食べた時、美味くて驚きました」
「そっか、俺たち陛下と同じような飯を食わせて頂いているんですね。こりゃあ、もっと働かなきゃ」
「俺は元から懸命に働いているから、お前みたいには考えないよ」
「ウソ言えええ」
「ハハハ」

　一方で夜は学術系のグループに加わって食事をする事にしている。船医もいるのでついでに健康チェックもして貰うのだ。
「これは……元はミズホの料理なのですか？　味付けに醤油を使っているようですが、いけますね」
　まだ醤油系が苦手という人は、多いみたいだ。僕としては残念だが。
「肉じゃが、と呼ぶ料理だが、本来はコンニャクが入る。トリアではコンニャクを仕入れても割高だし不人気だとか聞くよ。だから、これにも入ってないね」
「コンニャク、って甘くないゼリーのような食品ですね」
「ゼリーと言うよりゴムを連想してしまって、何が美味いのかわかりません」
「ミズホの料理ですと焼き鳥なんかは好きですが、コンニャクは苦手でした。納豆ほどではないですが」
「この肉じゃがに、コンニャクですか。本来は入るのでしょうが、

やはり無い方が食べやすいです」

コンニャクは本当に不人気だった。トリアで玉こんが食べられる日なんて、永遠に来ないかもしれない。それでもまあ、コンニャク抜きの肉じゃがは好評だった。メインのトンカツほど受けていなかったが。

研究者の連中は外国語も話し、海外に一時的に住んだりした経験も有る者たちばかりだが、異文化の理解と言うのは、それほどに難しいと言う事だろう。

無論食べ物談義ばかりしていた訳では無い。新大陸の北部をこれからどうするかについて、真剣に話をしていたのだ。随分と色々な分野に関して話したが、自然の宝庫で少数民族が平和的に共存する現状を、可能な限り温存すべきだと言う事で大方の話はまとまったように思う。中には金鉱や油田の開発を本腰を入れて行うべきだと言う意見も有ったのだが、この船の中では少数派だった。だが……トリアではそれが多数派だろう。

「開発するとして、土地所有に対する概念が異なる現地の人たちに納得して貰えるとは思えないし、彼らの霊地・聖域と言った場所に入り込むのは、やめておきたい」

「たかが蛮族の迷信ではないですか。開発すれば大変有望な事が明らかな鉱脈を、放置するんですか？」

僕よりはるかに若い地質学の学者だが、人間の事はちっとも見ていないようだ。

「自分と異質な存在をすぐ蛮族だと言って片付けるのは、いい加減止めてほしいと僕は思う。まあ、良い。今夜はこれでやめておこう」

僕が本気で怒ったのだけは、伝わったのだろう。

「僕はね、君の言う蛮族の夏の大祭に参加するのが目的で、この船に乗ったのだと言う事は、承知しておいてくれ」

内心『蛮族』という言葉に対する僕の反応が過剰だと感じていたらしい連中が、息を飲んだ。

気まずい事が有ってから、僕は夜も兵士たちと一緒の大食堂で食べるようになり、やがて船は大西洋岸の港に到着した。そこからモナの住むあたりが故郷の二十人余りの兵士と、同行を希望していた研究者五名でグループを作り、キャンプしながら西海岸を目指すのだ。

「陛下、お願いがございます。私もその中にお加え下さい」

何とあの蛮族発言で、僕を怒らせた男が一緒に行くと言うのだ。

「僕は如何なる部族も蛮族とは呼ばないし、呼びたくない。君が蛮族と呼ぶ民族出身の者たちとその故郷に向かうのだ。君が加わる事で、楽しい祭りがブチ壊しなどと言う事は無いかな？」

「そのような無神経な行動、発言は厳に慎みます」

「研究課題の方は、良いの？」

「はい。一度見た場所を再び確かめるのも大切ですが、初めての場所を観察できる良い機会ですから」

二十一世紀でも横断鉄道で四泊五日とかかかる距離だ。二か月かそこらはかかると覚悟している。馬を疾走させればもっと短くて済むが、荷物も多いし、方々の部族との接触も有るだろう。

「確かに、カヌーを使える場所では使い、馬でかけられるだけかけても、四十五日かかるでしょうね」と言うのが地元出身者の意見なのだから、まあ、そんなものだ。

すると初日の湖の畔でのキャンプにひょっこり客人が現れた。現地の大酋長的な立場に居るお婆様らしい。

「北の果てから来た白い狼の弟じゃな？」
「ええそうです。今夜一晩だけ、この場所をお借りします」
「それは構わんが、あまり呑気にしておると肝心の客人とすれ違うぞよ」
「ええ？　そうなんですか？」
「何なら、カヌーであの大きな山のふもとまで送ってやろうか」
「ああ、でも馬はどうしましょう」
「馬は、人を乗せん状態の方が当然ながら早く走るぞい。カヌーを降りて待っておれば、馬も荷物も日暮れまでには届けてやれる」
「じゃあ、お願いします」
「子分どもは、どうかの？　ワシの申し入れを信じるかの？」
「僕は信じます」

結局、僕と現地出身の若い兵士たちは『お婆様』の提案を受け入れ、学術関係者らは信じなかった。お婆様の言葉が若い兵士たちにはおぼろげながらも真実だと感じ取れたからだろう。逆に学者たちは、そうしたセンサーは働かないようだった。結局学者六人は独自行動をとる事になった。

夜が明けてから、お婆様がカヌーの漕ぎ手として連れてきた屈強な若者たちも、馬を誘導してくれる若者たちも、皆僕の背景に光が見えると驚き、約束は必ず果たすと請け合った。

「貴方の物を盗んで取ったら、皆生涯悪運に苦しむだろう。逆に貴方を助ければ、我が部族は当分安泰だ」

お婆様の孫だと言う、いかにも戦士風の男性はそう言い切った。

「さあ行くぞ、光を背負った男の船出だ～」

どこか日本の大漁節を思わせる節回しの即興の歌を一人が歌いだすと、他の皆がホウ、ホウ、ホウという合いの手を入れる。巨大な湖を大型カヌーは滑るように進み、明るい内に『大きな山』のふもとに無事についた。そして、馬も荷物だけを積んで夕方にはちゃんと到着した。

漕ぎ手の若者たち、馬を連れてきた者たちも加えて、皆でその夜は賑やかにアルコール抜きで歌って踊った。そして翌朝、湖で別れる時に、僕は喜んで貰えそうな土産を渡した。華やかなプリント生地とか刺繍糸、縫い針、色とりどりのキャンデーなどだ。どうやら女が家長と言う部族らしいので、お土産もどちらかというと女性向けなのだ。良い土産を持ち帰れば、男たちの面目が立つらしい。

「この山の裾野を越えた所にいる、大クマの加護を受ける部族に聞けば、早い抜け道が分かるはずだ」

そんな情報を僕らにもたらして、お婆様の所の男たちは歌を歌いながらカヌーを漕いで去って行った。

僕の夏の休暇・2

山の裾野に入ると大きなクマがいきなり迎えに来てくれたので、僕はびっくりした。

最初暴れグマが襲ってきたと勘違いした兵士がライフルで打つ寸前に、テレパシーで話しかけて来たので、どうにか無事にやめさせたが。大クマの加護を受けた部族も親切で、簡単に大森林地帯を突っ切る道筋を教えてくれた。

最初とは全く別の大きな湖に来ると、今度はデカい亀が居てびっくりした。すると亀がわざわざ湖から出て僕らを迎えたと言って、地元の人たちが一斉に出てきて、これまたカヌーを使って歌を歌い、馬は別ルートで走らせて、僕らを湖のもう一方の端まで送ってくれた。

さらにまた、白い大フクロウの加護を受けた人たちは確実に海岸線に出る最短ルートを教えてくれた。

天体から割り出す現在位置からすると、確実に西海岸に近づいている。それも予定より随分と早い。大フクロウの加護を受けた人たちの村で教えられたのだが、あの初日に遭遇したお婆様は『祖霊達と夢で話す女』として知られたシャーマンと言うか、巫女さんと言うか、そうした特殊能力で知られたこの大陸の有名人の一人だったらしい。

「その人の話なら聞いた事が有ります」

若い兵士たちの大半が自分のお爺さん・お婆さんから話を聞いた事が有ると言うのだ。

「本当に祖霊たちと話が出来るって、この目で陛下と大クマや大亀の様子を見ないと、信じられなかったんですが……これからもっと年寄りの話を真面目に聞く事にします」

彼らは軍隊に入って、悪い意味で文明の洗礼を受けてしまったの

だろう。先祖伝来の能力があまり衰退しない事を僕としては願っているが、なかなかに難しいかもしれない。

　こんな具合で世話になった方々の部族にお礼のお土産を渡していたら、持ってきた荷物は半分ほどになっていた。代わりに不思議な波動を帯びた翡翠や石のネックレスや、温かそうな毛皮、デカい干し鮭、薬草なんかを貰った。

「驚きました。この分なら明日には海岸に出るのではないでしょうか？」

　毎日六分儀を覗き込む係の兵士が、びっくりしたような声を上げた。

　二か月かかってもおかしくないと思っていたのに、何と一か月で大陸を横断できそうだ。カヌーに二度乗せて貰ったのが大きいようだ。このあたりの湖は氷河湖らしく、皆非常に長い。その中でも特に無駄のないポイントポイントを皆さんのおかげで繋いだため、一度も迷わずショートカットで横断できたらしい。

　大フクロウの加護を受けた部族に別れを告げて、教えられた道筋を丸一日馬を走らせた結果、陽の高いうちに海岸線に出た。早速海岸で食べられそうな貝を拾う。そして火を焚いて焼いて食べようとしていた所、バサッと羽音がして、聞きなれたヤタガラスの声がした。

「おう、グスタフ、ようやく来たか。別の遠来の客人は既に祭りを行う村に着いたぞ」

　聞けば美保の生まれ変わりは船で直接太平洋側の村に一番近い港に入り、港からまっすぐ会場に来たらしいのだ。祭りの開始は明日の夜からだそうな。

「それまでに村に入りたいもんじゃのう。海が荒れん限り、大丈夫じゃろうが」

後は海岸線に沿って、北上するだけだ。同行の兵士たちも皆、故郷の夏祭りが楽しみらしい。ちょうどころあいに焼けた貝をつつき、貰った鮭を焼き、兵士たちが目ざとく見つけて集めたベリー類を食べた。後は前祝だと言ってワインを何本か開けた。好まれるのはアルコール度数の高いスピリッツの類だそうなので、ウィスキーやウォッカの仲間を土産に残した。

兵士の一人が夏祭りの時の歌だと言う歌を歌いだすと、皆がほろ酔い加減で声を合わせて歌う。ヤタガラスも相当適当な身振り手振りで踊る。するとそれを真似て、また何人かが躍り出す。

突然、夕日で赤い海面に大きな水音が響いた。そして何かが跳ねた。汽笛のような何かの管楽器のような奇妙な音が長く響く。

「鯨だ、鯨が歌っている！」
「鯨が嫁を見つけたんだ！」
夏祭りの前に鯨の歌を聞くのは縁起が良いらしい。意中の異性と思いが通じるそうだ。
「あやかりたい、あやかりたい」
「明日は祭りだ、祭りだ！」

北国は白夜で夕暮れのような状態のまま夜が過ぎ、また朝になる。どんちゃん騒ぎの後、翌日はのんびり馬を進めて、僕らは無事に目指す村に昼の内に入った。

客のための建物は男用と女用がそれぞれ別棟で用意されていた。木造の、ちょっとした学校の体育館ぐらいの大きさの建物で、建物

の外には図案化された祖霊たちの姿が描き出されている。どうやら黒、赤、白、青、緑、黄色の六色が基本で、鯨やフクロウや狼がちょっとかわいい感じの表情で壁いっぱいに描かれているのだ。この部族は狼の部族らしい。だからモナが最初から受け入れてもらえたのだろう。

「この建物は、お前とお前のつがいだけが使って良い建物じゃ。他の者は入れるなよ」

「美保は？　どこかな？」

「焦るなグスタフ。ちゃんとその、お前が言う所のトランポリンをやってからじゃ。一番高く、綺麗に飛ぶんじゃぞ。高く綺麗に飛んだ者同士がつがいになれば、この地の祖霊達の護りが十分に得られるからのう」

僕はモナの後について、モナのために立てられた建物の中を見せてもらった。シャワーは無いが清潔なタオルを沢山と水瓶にいっぱい水を用意したから体は拭けるようになっている、とか、炉にくべる薪は十分あるとか、温かい毛皮を敷いた上で寝れば夜明け方でも暖かいとか、朝食用の食べ物は用意しておいたとか、色々説明してくれた。それから二人で軽く腹ごしらえをした。祭りには色々な食べ物が出るらしいが「グスタフは食えんかもしれんから」と言われた。海獣の肉の刺身とか内臓とか、この地域特有の発酵食品とか食うのは、確かに無理かもしれなかった。

「とりあえず、今体を拭きたい時は？」

「そうそう。そろそろ身支度じゃのう。薬湯を作っておるトプサナの所へ行こう」

モナが言うにはそのトプサナと言うおばちゃんは、薬草の取り扱いが上手く、一種の医者みたいな役割を果たしているらしい。特製のお湯と言うのが有って、凄く効くのだそうだ。

「別に薬湯は飲む必要無いと思うけどな」
「まーまー、入れ」
ちっちゃな丸太小屋と言う雰囲気の建物の中はヒンヤリ乾いた外気とは全然違う。蒸し暑い感じだ。
「モナか。今、呼びに行こうと思うておった」
金の笏のおかげで理解できるが、このあたりの部族の言葉はあのお婆様の所とは全然違っている。薄暗い部屋の中央に炉が有り、大人が入れそうな大きな瓶が火にかかっていて、様々な薬草の匂いがする。一心にかき混ぜているおばちゃんはがっしりした体つきで、白髪交じりの黒髪を三つ編み一本にまとめて後ろに垂らしている。
「何か出来たのか？」
「祭りの前にあんたの大事な弟を入れてやれば良かろうと思ったんじゃ。効くぞ」
「おお、そうか。ならばあの服も持ってこようかの」
「そうしなされ」
モナはいきなり外に出た。
「おじゃまします」
僕の声に反射的に、ものすごくいい笑顔をおばちゃんは返してくれた。
「おお、おいでなさった。この薬湯を行水に使って下され。下着とかタオルとかお気に入りの物がお有りなら、持ってきて下されよ」
「はい。着替えは下着類だけで十分でしょうか。折角の祭りだから……」
「上に着る皮の服は、モナがずいぶん前から用意してましたのじゃ。暖かでしなやかな良い服ですぞ」
僕は下着類と体を拭くタオルを男用の宿舎に取りに戻ってから、

再びトプサナおばちゃんの所に行った。
「湯に入って、この薬草の束で体を擦りなされ。その人に一番似合いの香りがしますからのう」
皮の垂れ幕で仕切った場所に、巨大瓶から移したらしい薬湯が大人一人がしゃがんで入れる円筒形の木おけに半分ほど入っている。おばちゃんが渡してくれた薬草の束はきっちり草で結わえられている。湯に入ったらその束で体を擦れと言う事なのだった。湯に入る前に顔と頭をざっと洗う。爽やかなハーブティーみたいな香りがして悪くない。それから全身を浸して薬草の束で体を擦った。体を拭いて、下着を着ると、体が芯から温まっているのが分かる。
「下着を着たら、これを着ろ」
そう、モナが声をかけてきた。モナが渡してくれたのは真っ白い革製の上下だった。革製のズボンは穿いてから柔らかい皮ひもを編んだ腰ひもで結わえて固定する。上衣はダッフルコートという感じだ。がっしりしたフードに、留め木の形がまさにダッフルで、真っ白な何かの動物の角を使っているらしい。対になるループは黒だ。ズボンにはサイドにフリンジが入り、上衣の背中にはヤタガラスらしき黒い鳥の大きな縫い取りが入っている。何と言うか、ある種の特攻服に見えなくもないが、強烈な護りの力を感じる。
「おお、ようにあう」
背中のヤタガラスの縫い取りはモナがしたのだそうな。皮を裁断して縫ったのはトプサナさんらしい。
「大きさも体に合っておるな。いやあ、モナが弟が綺麗じゃと言う意味がようわかった。黄金を紡いだような髪と言うのは初めてみたが、その髪よりも背負った光の清らかさに皆、魅かれるじゃろう。昨日来た娘も銀色の綺麗な光じゃったが、こちらの金色の光はもっと強いな」
どうやらその娘の方も白い皮の服を着ているはずで、背中にはケツァールの縫い取りをしてあるらしい。

「今年は皆高く飛ぶじゃろう。楽しみじゃなあ」

おばさんが呟いたちょうどその時、急に太鼓の音が響いた。一つじゃなくて幾つもの太鼓だと思う。

「いよいよ始まりじゃあ」

モナの声は弾んでいる。白夜の中で人々が集まり始める。皆が大きな輪を作って踊っているのだが、そのうち、輪が二重になる。適齢期の男女を輪の内側に入れ、その若い男女だけでまた輪を作る。太鼓の節回しに一定の規則性が有るようで、それに従いごく自然に二重の人の輪が出来た。僕は……実年齢はともかく、見た目で内側相当だと判断されたようだ。それから、非常に大きな皮の丸いシートと言うのか敷物と言うのか、それを内側の皆でピンと張るようにして持つ。

ここから太鼓が変わった。今まで沢山の太鼓で一斉に規則的なリズムを刻んでいたのに対して、シャーマンと言うのか呪い師と言うのか、そんな感じのオジサンが朗々とした調子で歌いながら丸い木枠に皮を張った太鼓を緩やかなリズムをつけてバチで打つのだ。オジサンは非常に派手な色彩のフリンジだらけの皮の服を着て、頭には鳥の羽で飾った帽子をかぶり、首から丸い金属製の鏡らしきものを下げている。全身でリズムを取りながら、目は半眼状態にして神霊たちとの交霊に入ると言う雰囲気だ。

歌の言葉は即興で有るようだ。どうも飛ぶべき若者を歌で呼び出しているらしい。ざっと見ると内側に呼びこまれた二百人以上の中からランダムに選んで飛ばせている。

「テクムセよー、テクムセ、高く飛べ、高く飛べ、うんとうんと高く飛べ、皆で皮を引っ張れ、ピンとピンと張りつめろー」

僕も含め皆で皮を張っている間に、テクムセ君は思い切り高く飛んでいる。三度に一度ほどは空中一回転ぐらいは入れるものらしい。更に歌は続く。

「テクムセと高く飛ぶ乙女は誰だ、乙女は誰だ、共に高く飛ぶ乙女は誰だ～」

そこで、合いの手のように「カテリ！」と言う声が何人かから上がる。

「カテリよー、カテリ、テクムセと飛ぶか？　共に高く飛ぶか？」

すると当事者らしい少女が「飛びます！」と応じ、テクムセ君と一緒に飛び始める。弾みをつけて高く飛び、テクムセ君とハイタッチのような感じで手を合わせて高く音を立てる。すると外側の輪にいる年配者や子供連れがやんややんや拍手するのだ。

そうやってペアで高く飛びハイタッチすることを三度ほど繰り返すと、次の男女が呼びこまれる。何というか皮を引っぱっている皆との間に、ある程度決まったカップルが想定されている感じだ。ペアを組む相手が居ないフリーの男女はどうなるのか、どうもよくわからないが。

気が付くと僕の名が呼ばれていた。

「遠来の客よ、金の髪のグスタフよ、高く飛べ、高く高く飛べ、うんとうんと高く飛べー」

僕も太鼓の拍子に合わせて飛ぶ。最初は無理だったが、六度目には空中一回転を入れることが出来た。すると拍手が起こる。

「遠来の客よ、銀の髪のエミナよー、グスタフと飛ぶか？　共に高く飛ぶか？」

飛びます、と声がして、一人の女の子が僕と共に飛び始めた。ああ、美保じゃないか。銀色の髪だけど美保だ。間違いない。エミナ

って、大君主国の女の子の名前だな。誠実を意味する名前か。良い名前だ。

僕と美保、いやエミナが上空で無事にハイタッチすると、ドッと言う歓声が興って、僕はびっくりした。

一応、決まりらしいので三回ハイタッチして地面に降りると、僕らはどちらともなく手を差し伸べ繋いだ。その途端、太鼓の調子が変わった。

「金の光、銀の光、大地に降り注ぐあまたの恵み、祖霊たちの寿ぎ、めでたいかな、めでたいかな」

シャーマンのオジサンの歌がアップテンポになると、外の輪の皆は無論、若者たちも皮のシートを下に置いて両手をかざし、オジサンに合わせ歌を口ずさみながら、熱っぽい調子で踊る。僕もエミナも一緒になって踊った。

ふと見ると、空には沈まない白夜の太陽が柔らかな光を放ち続けていたのだった。

僕の夏の休暇・2（後書き）

白夜は陽が沈まないですよね。おかしい所、訂正します

僕の夏の休暇・3

この社会は決まった食事の時間と言う概念が無い。腹が減った者が食べたい時に食べたいだけ食べればいいみたいな感覚なのだ。祭りのときは各自の家から『御馳走』だと思うものを持ち寄って、集会所に置いておくのだ。僕も持ってきた酒類やドライフルーツや瓶詰、缶詰、加工食肉の類をあらかた放出した。

腹が減ったら、好きな時に好きなように飲み食いすれば良いだけ。ルールはたった二つ。食べ残し厳禁。皆で食べられそうな物が自分の手元に有れば、なるべく持ってくる。以上だ。

階級社会と言うのとは違うと思うが、大きな祖霊の力を背負っている、あるいは霊力が強い、霊格が高いなどと長老連中に認定されると、特別扱いされるらしい。祭りの時も特別な宿泊場所を割り当ててもらったり、食料や水に関して特別扱いされたりするのだ。

ちなみにモナは遠来の霊格の高い魂で力が強いと認定されて、いつまでも部族の間に留まるようにとの願いを込めてこの地域の人が家を自発的に作ってくれたらしい。内部はがっしりした木組みで、天井も壁も床も木肌の温かみと清潔感が有り、何とも気持ちの良い部屋になっている。

「やっと二人きりになれたね」

「ええ」

乱痴気騒ぎがひと段落して、集会所で食べたいものを食べてから、僕とエミナはモナの家に入った。

祭りの間中、モナはこの家には戻らないと僕に宣言していた。二人の邪魔をしたくないそうだ。それだけ僕たち二人の縁がしっかり強く結ばれることを、本気で願ってくれているのだろう。

「美保だった時の記憶は、有るの？」
「前世はミホ・レスコで、前々世は田中美保だけど、井沢亮太が知っているのは田中美保よね。どちらの記憶も有るわよ」
「そうか。僕より一回転生の回数が多いんだ」
「と言うより、同じ回数になったんじゃないかなと思うの」

僕の前回、美保いやエミナの前々回の日本での出会いは転生の回数が噛みあわないから、相性が良くても繋がりが強くならなかった可能性が有るらしい。エミナはルンドに転生する際、時空管理局からそんな説明を受けたようなのだ。

前世の家族は日本在住のアメリカ人の母親マーシャと二人の叔父が同居していて、父親が居ない変則的な状態だったのは僕も承知している。家族全員が娘が僕の所に転生する存在だって、産まれた時から承知していたのだから、相当変則的な家族だったと思うが、それなりに良い関係だったらしい。マーシャは母親と言うより親友みたいな存在だったようだ。マーシャの娘としてのミホは、アメリカンスクールから飛び級でアメリカの大学に入学したと言う。そして二十二歳のある日、時空管理局の呼びかけに応じたら、転生していたらしい。

「少なくとも学業に関しては、ミホ・レスコの方が田中美保よりずっと優秀よ。一応専門はバイオテクノロジーで、特に環境科学って言うのか、そう言う方面を研究していたの」
「そりゃあ、心強いな」
「お役に立てると嬉しいわ」
「大いに期待してるよ。ねえ、それはそうといきなりの転生で、残された家族三人はどうなんだろうな？　時空管理局も予定が分かっているなら、手紙なりメッセージなり送る事ぐらい認めたらいいのに」

「私は『今からルンドに向かいます』って言う短いメッセージを家族全員の携帯に送ったわ。三人とも貴方を知っているから、あまり心配はしていないと思うけれどね」

本当にそうなのかどうかは僕にはわからないが……マーシャという人の感情はどこかドライで吹っ切れた所が有ったから、あるいはエミナの言う通りなのかもしれない。

「メッセージを送れたって、僕の時より進化してるな、時空管理局も……んーと、エミナって呼べば良い？」

「そうねえ。私もグスタフって呼ぶ方が良いわよね」

互いにそう言ってから、笑ってしまった。

「今は、アルラトの人？」

「そう。ザファルとアティアの娘よ」

「おい、そうなのか！　今までどこの誰か知らせるなって……ちょっと冷たくない？」

「でも、現実問題どうなの？　奥さんたちの事が有るじゃない。十八年だって時間が有った方が、良かったでしょう？」

「まあ、それはそうなのかもしれないが……」

「知っているのに家族に嘘をつくの、嫌でしょう？」

「うんまあ」

「だからね、良いのこれで」

ちょっとふくれたようなその言い方が、僕の記憶の中の美保そのものだ。だから、なんだかうれしくなってくる。

「あのう、エミナ姫としては御両親にはどのようにお話なさっているので？」

「ええ？　母にはずっと前から全部の事情を話してあるけれど、父には今年になって事情を打ち明けたの。お見合いとか持ってこられ

たら困るから。グスタフ様としか結婚できませんって。それにケツァールがここのお祭りに誘いに来たから『これは運命ですから』って言って諦めてもらったの。と言う事情でございますから、私の両親も事情を承知しておりますわ、陛下」
「クックック、陛下って言われるの、すっごい違和感が有る」
「もういい加減慣れたんじゃないの？」
「君に言われると、何でも新鮮に聞こえる」
「私は……懐かしく感じるわ」
「そう？　じゃあ、キスぐらい、ＯＫ？」
「ええ」
「誰かと、した？」
「まさか。有り得ないわ」
「なんか無茶苦茶嬉しいかも」
「かも？」
「フフフッ、言い直す。無茶苦茶嬉しい」
「良かった。黄金宮には美人が一杯だって聞くから、私なんてもう、どうでもいいのかなって、つい思う事も有るもの」
「僕を信じなさい」
「はい」
「キスの先は、有り？」
「お任せで」
「真面目に避妊薬飲んでるから、一応対策済み」
「昔と変わらないわね。最初の時、ドラッグストアに一緒に行ったから恥ずかしかったけれど、サイズって太さが大事って初めて知ったわね、あの時」
「うん。Ｓ，Ｍ，Ｌ，念を入れてＬＬまで買ったら」
「何とＬＬだったのよね」
「そうそう。あの製品の外箱に『ビッグな貴男に、ゆとりの新型』ってロゴが入っていて爆笑したね」

そうだった。生まれて初めてラブホテルに入る前にちゃんと用意したくて、大きなドラッグストアでうろうろした挙句、親切そうな薬剤師のお兄さんに相談したのだった。事前に自宅でサイズを計っておくべきだったなんて、思いもよらなかった。

「じゃあ、あの日よりは大分マシだと思うから、お任せで、構わない？」

「ええ」

エミナは銀色の髪に銀色の瞳だが、顔を真っ赤にして頷いた様子は、やはりあの日の美保を思わせる。

「ここで会ったが百年目、じゃあ敵討ちか。でも、これからは理不尽な別れを強いられた運命に対する敵討ちみたいなもんだって思ってる」

「それは……わかる様な気もするけれど……」

「ああ、わかった。焦らないよ。僕の奥さんたちの感情に波風を立てて角が立つのが、嫌なんだろう？」

「そうなの。これから私達が一緒に過ごす時間は、とてつもなく長くなる可能性が高いみたいだから、無理せずゆっくり事を運べば、それで十分よ」

「でも最低、婚約、という事にはさせて欲しい。帰りにザファル君とアティアに会って、正式に申し入れさせてもらう」

「ありがとう」

本当はガブリエルは一応正妻の地位に居るが、法的にも慣習から見ても、帝国の皇后では無い。結婚する時から美保の事を打ち明けてあるから、約束通り美保が転生した存在であるエミナを、すぐに皇后に据える事も可能と言えば可能なのだ。だが、確かにあの頃と事情が変化してしまった。ガブリエルは美保が転生したと聞いただ

けでひどく動揺した。昔の申し合わせが有るからと言って、それを盾に迫れば、恨みは残るだろう。

「あのさ、デコチューからベロチュー、本番でOKだよねえ」
「そ、そういう事、言う？　普通？」
「言っても通じない人しか周りに居なかったから、そうやって膨れられると、それだけでうれしい」
「ねえ……シャワーは無理にしても、汗くささを拭うぐらい、ダメ？」
「この服着る前に、行水、使わなかった？」
「それは一応、そうだけど、飛んで跳ねたら、なんか汗っぽいような」
「どれどれ」
「いきなり、いやだあ」
「だめ？」
「じゃないけどビックリ」
下着のブラに相当するらしい部分が、白い絹地に赤いバラ・柘榴の実・オレンジの実がきれいに刺繍されている。
「何というか、そそる良い匂いだよ……て言うか、僕臭い？」
「全然そんな風に思わない。私好きよ、この匂い」

僕はトプサナおばちゃんの『その人に一番似合いの香りがします』って言う薬草の束の話をした。エミナは僕とおそろいの白い革製の服は昨日受け取ったけれど、薬草を使った行水は未体験らしい。祭りが始まる少し前に、アルラトの宮殿で調合した特製アロマオイルをお湯に入れて体を洗ったそうだ。

「この下着って、この紐を外せば良いんだよね？」
「そ、そうだけど……えっち」
「ええ？　今から初エッチだろ？　それにしても、何て言うかイス

ラム圏のお姫様って感じの下着だねえ」

胸元も下もなじみの無いタイプだったけれど、さほど手間取らず、すっかり取り去った。炉に火をしっかり起こしてあるから、部屋は暖かい。モナが衣類や布類をおさめた長持ち以外家具らしい家具も無い部屋の、木の床の上に、毛皮と良い香りの干し草をかわるがわる何重にも重ねた所が寝床なのだった。一番上に地厚の生成り色のリネンを敷いたのは、モナの格別な心遣いかも知れない。

「何なら、持って帰るか？」

そんな風に言われたから。帝国ではシーツを確かめる儀式も無いが……エミナの話からすると、アルラトでは契りを交わした男女それぞれの家の長老格の女が、初夜のシーツを検分する習慣がまだ残っているらしい。どうやらこの村まで付いて来たと言う婆やに後で渡した方が、無難であるようだ。ちなみに、その婆やは女用の宿舎で待っているのだと言う。

「じゃあ、婆やの期待に応えるか」

「フフフ、何か、それ、変」

「言ってから、僕もそう思った」

互いにじゃれあうような言葉のやり取りから、自然にキスをはじめ……慎重に手順を踏んで、悩ましげな甘い声が漏れるようになってから事に及んだが、さすがにキツイ。だが、それだけではない。微妙な兆すものが感じられる。

「ほら、僕の物が本来の鞘に納まった。わかるだろ？」

アルラトでは女性のその部分を剣の鞘に例える。『良い剣には相応しい鞘が必要だ』なんて言う慣用表現も有るほどだ。僕なりに誠意を尽くして、苦しみを忘れさせるべく努める。大体、初めてだか

らって、苦しいだけなんていうのは男の沽券に係わる。そう言うと、あぶら汗を浮かべて苦悶しているくせに、エミナは一瞬苦笑した。昔も僕は似たような事を言ったらしい。

「笑う元気が有るから、まだ大丈夫かな?」

強烈な締め付けに逆らって少し動くだけで、呻き声が漏れ、痙攣する。痛みで意識が朦朧として来ているのは間違いなさそうだった。眉のゆがめ方一つも愛らしく感じるその顔にキスの雨を降らせながら、少しきつめに乳房を握り締め揉んでやると、喉の奥から悩ましげな喘ぎ声が漏れ始める。どうかすると内部が複雑に蠢き引き攣るような収縮を見せる。僕は将来これがどんな風に成熟していくのか、考えただけでさらに興奮した。すると、その状態を敏感に感じ取ったらしい。つぶらな瞳が見開かれ、僕の視線と出会うと、たちまちに恥じらいの色が顔に現れた。薄桃色の花びらみたいだと僕は思った。

「もう大丈夫かな? ずっと、入ったままだよ」

僕がわざと少し揺さぶると、エミナの眉間に可愛らしい縦じわが刻まれて体がのけ反った。それから、見た目が二十代なだけの僕は、山ほど「恥ずかしい事」を言いながら様々に手を尽くして感覚を燃え上がらせた。

「ああっ、ど、どうなるの、こ、こわいっ」

そのうぶな反応が僕の体を熱くする。

「行くよ」

敏感な体は自ら僕の動きに合わせる様に腰を動かし始め、キリキリと食い締める。僕も焼ける様な感覚に全身を貫かれながら、思いの外まともな言葉を口走った。多分紛れもない本音だからだろうが。

「エミナっ、愛してるっ」
「わ、私も愛してるっ」

その後は獣の雄たけびのような声を二人で上げ、したたかに爆ぜたのだった。それからそのまま、一緒に深い眠りにおちいったのだったが、また目覚めると体を解く事なく、互いを貪った。これほど自分が貪欲であるのが僕自身驚きだったが、つい先ごろまで正真正銘の乙女であった身で僕と互角に渡り合うエミナの強さも大したものだ。幾度か水を飲み、少し食べ物をつまむ程度で、僕らは肉の悦びに耽った。それでも毎朝ちゃんと避妊薬を忘れない僕の律義さを、エミナは「あいかわらずだわ」と言って面白がった。近頃は薬湯から錠剤タイプが作られて、なかなかに便利になったのだ。外ではずっと、祭りの賑わいが続いていた。

「やっぱり、身も心も相性抜群だな」
「う、うれしいっ」

美しい女が悦びに溺れきって曝け出すその表情は、男の方にもしびれる様な恍惚感をもたらすのだ。エミナの様々な媚態や乱れる姿は、いくら見ても見飽きない。結局七日間昼夜ぶっ通しで行われる祭りの間、僕らは一度も外に出なかった。

七日目の昼に、外からモナに声をかけられて、ようやく互いの体を拭き清めたのだった。
「いやはや、すごいのう」
モナにそう言われても、僕は平然としていたが、エミナは赤く熟したベリーのような顔色になってしまった。後から思い返しても稀有な体験だった。

祭りが終わると、僕らは一緒に一番近い港町に向かった。帝国の最新艦とアルラトの軍艦が待っているのだ。僕は港から無線でアルラト大君主国に連絡を入れた。

僕と彼女のこれから・1

大陸の西海岸から出港した二隻の船はミズホに入った。
どうも軍関係の船だと人前でのイチャイチャは自粛する事になる。
それでも同じ船室で過ごすと、身も心もなじむわけで……ミズホに寄港するころには、何というか彼女より僕の方が別れがたい気持ちになった。

「ねえ、スールの港についたら、本当に一旦お別れするんだよね」

スールはミズホから最短距離、帝国からは一番遠い方のアルラト領の軍港だ。そこにアティア、可能ならザファル君にも迎えに来てもらう事になっていた。ミズホを出てから届いた知らせでは、ザファル君も僕と話を詰めるためにスールに来る事にしたと言う。両親に迎えに来られちゃ、僕としてはエミナを返さないわけには行かない。

「だって……それしか仕方がないでしょ？」

エミナの変に理性的な所が、ちょっと恨めしかったりする。

「あーあ。わかっているさ。君の方は色々後始末やら準備やら、有るし、僕は……僕の方が面倒だな」

「これからは毎日、テレパシーを使ってくれれば簡単に話は出来るわよ」

「僕の金の笏に相当するものって、何かもらってる？」

「翡翠の胸飾りをバージョンアップして貰ったみたい。私が母から受け継いだ後にサイズと形を変換できるようになったの。ほら」

エミナは右の人差し指に嵌めていた緑色の玉製の指輪を外すと、一度振った。すると、かつてチャスカがしていたあの大きな翡翠の胸飾りになった。

「今は、特に文字なんかは出てこないね」
「時空管理局も貴方に名乗っちゃってからは、やり方を変えたのね。私には直接にメッセージを送りつける形に変更したみたいなの」
僕が管理者を名乗る爺さんがホログラムみたいな存在と見破ってしまってから、どうも方針が変わったらしい。バージョンアップした胸飾りは語学習得機能と、危険回避のためのアラームが付いている。
「ここを見て」
示されたペンダントの裏側の箇所に青・黄色・赤の色の異なる光の点が明滅している。
「何だ、これ、何かの警報なのかな？」
「危険な状態、状況を予報するものなの。危険度が増すと光が大きくなるのね。詳細が知りたいときは光のポイントをタッチすればいいの。ルンドでは貴方と私以外の存在には触れる事が出来ないそうだけど。そうね。触ってみて、三つとも。認識しておいてもらった方が良いわ。貴方にもたらされる情報と私にもたらされる情報が同じじゃない可能性が高いと、私は思っているの」

青は一番光が小さい。ドーン大陸の各部族間の抗争が内乱状態を引き起こす可能性を常に含んでいることを示しているようだった。
「タタ族の奴ら帝国に胡麻を擦りやがって、汚いぞ。あの井戸の有る場所は元々我々ンゴカ族の物なのに」
「あの馬鹿なゾゾ族と我がダダ族の子供を同じ学校で学ばせると言うのか、有り得ん。だが拒めば帝国に用水路を閉じられるかもしれんし、支援物資も来なくなる。悔しいが……耐えるしかないのか」
「この川の上流に汚らしいパペ族どもが住んでいるから悪いんだ。帝国の見張りさえなければ連中を追い出すぐらい簡単な事なんだが。悔しい」
全然見た事も聞いたことも無い人間の断片的な思念だが、どれも隣接する別の部族グループに対する憎しみと差別に塗れている。吐

き気を催すほどだ。

「ドーン大陸の部族間の問題は厄介なんだなあ。解決法なんて有るのか？」

「解決法が知りたいと念じてもう一度同じ青い光に触れてみて」

子供たちの声だ。幾つかの民族グループの子供だが、皆同級生として仲良く一緒に授業を受け、給食を食べている。そして次は女性たちの想いが浮かび上がった。

「ともかく、争いが無いのが一番だわ。隣の部族だって化け物ってわけじゃないんだし。だけど、男たちはすぐに喧嘩したがるから、困るわねえ」

「うちの人が言うように、あの村に火をかける必要なんてあるのかしら？　あの村の連中にも小さな子供もいるみたいだし……でも、もっと良い方法は無いのって言うと、生意気言うなって叩かれるから……」

「口ごたえするとゾゾ族の村に捨てるぞ、ってお父さんは言うけど、あんな気味悪い爺様に牛五十頭と引き換えに売られるくらいなら、その方がいっそマシなんじゃないかしら？　昨日川で見たゾゾ族の男の子、結構かっこよかったもん」

ドーン大陸での女性の地位の低さ、差別を解消することが、一つのカギと言う事かも知れない。

「家畜と引き換えに女の子を売るなって、法令は出した事が有るけど、実効は上がって無いのかな」

「アルラトでも多いの。家畜と引き換えに親に売られてしまう子は。しかも対外的には家畜は結納品で、女の子は親の配慮のもとにしかるべき相手と結婚したと言う事にされちゃうでしょ……難しいわね。女の子本人の意思が、もっと尊重されるような社会になると、ドー

ンもアルラトも変わるんだと思うわ」
「学校教育は、一定の成果を上げつつあるんだろうな」
「ええ。でも、まだようやく芽を吹いた程度ね。うっかりするとすぐに元に戻っちゃうかも」

一番小さい青がドーン大陸の部族間抗争の問題だとすると、中くらいの緑は？　大きく光る赤は？

「緑と赤に触れるのが、なんか怖いな」
「でも、そっちの方が問題は深刻よ」

緑に触れると、いきなり今乗っている船の艦長の顔が浮かんで……こんな言葉が聞こえてきた。
「アルラトの異教徒の娘？　そんなものを陛下はいずれは皇后に据えられるおつもりなのか？　信じられん。肌の黒い大宰相やら、新大陸の蛮族の妃もいたが……どうなっていくのかなあ、この国は」
艦長を有能な軍人としてしか意識していなかったが、愕然とした。明日からもっと、この男の心理を読むことにしよう。
「色の黒い奴らは近頃いい気になりすぎだ。陛下がお決めになった事だから、逆らえんが。ともかく我が家の人間が肌の黒い奴と結婚しなければ、どうにか耐えられる」
こんな事を思っているのは門閥貴族でも皇帝でもない。国会の議長だ。
「陛下は優れた方だが、皇族の血統に異民族を混ぜられたのは、やはり誤りだったと思う。異民族の宰相が立て続けに二人続いたから、その内、肌の黒いお妃や、罰当たりなアルラトの異教徒のお妃などと言う者が出てきてしまうのだろうか？　ともかくも黄色がかっていたり黒かったりする連中が、黄金宮の中の国宝級の家具や備品を弄り回すのは不愉快極まりない。そう申し上げたら、陛下は激怒なさるだろうが……」

宮内卿を務める老貴族の脳内にはこんな言葉が溢れているらしい。
黄金宮のメイドにも黄色人種系や黒色人種系の者が増えているのに……何と言うズレた感覚なのか。

「帝国の連中の内なる差別意識は、深刻なんだな……解決法は、何だろう？」

事有るごとに、人種差別は禁じる様に宣伝・啓蒙・教育に努め、法律も定めたが……差別の意識は実にしぶとい。

「即効で効く方法は無さそうね」

続いて一組の男女の姿が浮かんだ。たがいに寄り添って腕を組んで歩いている。女性が従来からの帝国の民族グループで、男性がドーン大陸の血を継いでいるようだ。

「父の方が間違ってる。ああ言うのを人種差別というのよまさしく。全くもう、娘として情けないわ」

「ともかくも『黄金宮直通電話』で教えてもらった所で就職は出来たし、二人で住む部屋も借りられるし、どうにかなるよ」

「そうね。あんな分からず屋の親とは縁切りでいいわ。私たちが間違っているとは絶対思えないもの」

「でも、いつか受け入れてくれるといいね」

僕は去年、婚姻に関する法律を作ったのだが「十八歳以上の男女は当事者同士の意志だけで自由に婚姻を定める事が出来る」という条項のおかげで、親に望まない結婚を強いられる女性は激減したようだ。これらの条項に関しては帝国中の小中学校で授業として取り上げさせたはずなのだ。器量良しの娘を資産家に売りつけようともくろんでいた連中の恨みを買ったようだが、気にしていない。

ドーン大陸の学校でもその授業は行うように通達は出されたのだが……浸透していないようだ。学校の所為か、義務教育の普及度の所為か、親の偏見や因習の所為か……家畜と引き換えに売られる花

嫁の問題も含めて、探る必要が有りそうだ。

「帝国では貴方に対する信頼度が絶対的に高い状態だから、公平公正に法令順守で我慢強く待つしかないのかもね。多分、世代が交代しないと本質的な問題の解決にはならないと思うわ」

「皆、偏見を持っていても、僕の手前黙っているのだろうな」

いよいよ赤だ。一番深刻なのか……

が、ガブリエル！　物凄く不機嫌な顔で、王宮のテラスから港を見下ろしている。扇を握り締めていたが、それを……ベキッと折ってしまった。その瞬間「あっ」と言う顔つきになる。無意識にネガティブな感情に突き動かされてしまった、そういう事なのか？

「母上？」

今はレイリアの摂政を務めるセバスティアンが妻デジレを連れてやって来たようだ。デジレは帝国の大学で知り合った聡明な女性だ。デジレが平民でも僕もセバスティアンも全然気にならなかったが、ガブリエルは気に入らなかったようだ。だが、僕はガブリエルの見ている前で、即座に二人の結婚に大賛成したので、そう言い出せなかったらしい。

既にセバスティアンとデジレが結婚して五年以上になり、息子二人と娘一人も生まれている。孫が生まれてやっとデジレを王族の一人と認めるようになったようだったが……。セバスティアンもデジレも折れた扇を見なかったような顔をする。何をどういったって、かえってガブリエルの機嫌が悪くなるからだろう。

「皆、母上のおいでを食堂で待っております」

息子夫婦が自分を困ったものだと見ている視線はガブリエルも敏感に感じているようだ。息子たちが三十を越えるころから、明らかに僕の方が若く見えてしまうようになってきた事を未だに受け止められないみたいだ。それに夏なのに今年は僕が居ない。見捨てられ

たと感じているのだ。
（息子よりも若々しいあの方に、こんな老婆は不似合よね。わかっているわ。わかっていても……）
そんな思考のループにはまり込んでしまうと、ガブリエルは抜け出せなくなってしまうようだった。おそらく、かつてのセルマがこんな状態になったのではなかろうかと、僕はふと思った。セルマは単に側妃だから修道院に閉じこもるのも勝手だったが、ガブリエルは女王だ。簡単には引きこもれない。かつてセルマを痛ましいと思ったものだったが、ある意味そのセルマより痛ましいのかも知れない。

「貴方の課題と私の課題は別物でしょうが、見当はついたわ。ね？しばらくお別れするしか無さそうでしょ？」
エミナはみんな御見通しなのだ。確かに……仕方ないみたいだ。
「君の課題は、何なの？」
「アルラト国内の貴族の派閥抗争、そして帝国やドーン大陸も関係している宗教問題、そして一番の緊急課題は迷惑な求婚者たちの問題かしら」
「お見合いは断ったんだよね」
「でもいるのよ五人ほど、ストーカーというか精神のバランスの変な付きまとい行動を取りがちな人が。皆従兄ってところが大笑いなんだけど」
「おい、大丈夫か？」
「このアラームに従っていれば、危険人物の現在地がわかるから、避けることが出来るの。父は牢にブチ込んでやると言うけれど、本当にやったら有力者連中が騒ぎ立てて、ややこしい事になるわ。ああ、ミホ・レスコの時に空手と柔道と合気道、黒帯だったから、多少の心得は有るわ。今も鍛練はしているし」
「それでも男が卑怯な手を使うとなあ……僕と婚約したと言うと、どうなんだろうか？」

「おかしくなっている人ばかりだから、たぶん関係無いでしょう。それにまわり回って、婚約した事をレイリアの方に知られたら、厄介かもよ」
「摂政をやっている息子はしっかりしているから、変な事はさせないよ」
「実害って言うより、女王様が壊れちゃうかもしれない、って事を心配するべきでしょうね……だから、やっぱり私は貴方と一旦お別れするわ。その代り、何でもテレパシーで話しましょう。寝る前とか、朝とか」
「抱きしめられないの、嫌だ」
「そんな……そりゃあ、そうだけど」
「こっそり帝国に留学、なんてダメなんだろうか？」
「トリアの学校だとバレバレじゃない？　地方都市で、どこか良い所が有るかしら？」
「幾つもの大学が集中するトリアの方が、バレない様な気もするけどなあ」
「でも、ここ数年は黄金宮には近づかない事にしておくわ」
数年！　僕は悲鳴を上げそうになった。
「観光客とか、どこかの大学生の新入生の見学会とか、建築とか美術専攻の学生も良く出入りするよ」

結局、ストーカー対策の決定打も、僕らは「ここ数年」なんて期間、ずっと離れ離れなのかも含めて、具体的な話は何も詰める事が出来なかった。それでも船は進む。順調に。

アルラトの軍港・スールは砂漠地帯の端っこにある。昼間はモナならとても耐えられないだろう灼熱の暑さだ。ちゃんとザファル君はアティアと一緒に娘を迎えに来た。
港の迎賓館の一番上等の部屋で、僕ら四人は会った。

「何れは、エミナ姫を帝国の皇后として迎えたいのです。どうぞ御理解下さい」
僕は最大級の丁寧な礼をした。
「親が反対したって、その気になればこの子は出て行ってしまうでしょうし、前世、いや前々世からの縁なのですから、反対など出来ません」
「色々ごたついたままなのに、済まない」
「いや、良いんです。エミナ自身が希望して納得しているのですし」
ザファル君がそう言うと、アティアは涙ぐんで言った。
「この子は陛下にとって特別な存在なのでしょう？　ずっと……百年以上もお待ちになっていたのだと聞いています。一日も早く、円満な形で婚儀があげられる日が来る事を願っていますわ」

僕は二人の見ている前でエミナの左の薬指に婚約指輪を嵌めた。
美保だった時のサイズだったから、合うかどうかちょっとドキドキだったが、ぴったりだ。

「やっと君に婚約指輪を渡せた」
だって、井沢亮太は指輪を渡す予定の前日にはねられて死んだのだから……
「ありがとう！　嬉しい！」
エミナは両親の前なのに、僕にかじりついた。ザファル君がせきばらいをした。するとエミナは急に離れたが、そこで皆、一斉に噴き出してしまったのだった。

僕と彼女のこれから・2

婚約指輪は渡せたけれど、表だって儀式などを行ったわけではない。だから帝国の者にはエミナとの婚約は秘密だ。祭りの後はさっさと最新型の軍艦でトリアに戻って来たから、まだ夏は終わっていない。

トシエとマサエは、本当は何が有ったのか知りたい気持ちと、知りたくない気持ちで揺れていた。

「美保様の生まれ変わりの方とは……首尾良く……その、事が運びまして？」

「お綺麗な方でいらしたのでしょう？」

僕が生返事でほとんど何も語ろうとしないので、話題にするのをあきらめたようだった。

二人にマッサージを頼むのも、三人一緒にベッドで並んで眠るのも意識したわけでは無かったが、帰国後は目に見えて減った。僕は早く一人になって、テレパシーでエミナと語り合う事に集中したかったのだ。

そんな、ある夜……

（まずいわ！）

（え？何、なにが？）

（貴方の方の問題が深刻化してる。今まで女王様だけだったのが……）

（トシエとマサエが？）

（女王様は、怒りと言うか抑えた憤怒って感じだけど、黄金宮の二人は深く悲しんでいるわ。ダメよ、こんなの。強いネガティブな感

情を発生させること自体、ものすごいリスクなのに）
（そ、そうなの？）
（そうよ。お風呂でもベッドでもご飯でも、無理せずできるものからでいいから、接触回数を増やして、ともかく会話に真面目に参加してね。もう。真面目にあの二人をスキャンしたらわかりそうなものなのに）
（いや、その、のぞくのが怖いと言うか、見たくないと言うか）
（そんな真黒なものは無いわよ、きっと。だから悲しませちゃダメよ、そうそう、息子さんと娘さんお孫さんを集めて、食事会でもしたら？　黄金宮じゃない所で。サプライズパーティーなんかどうなの？）
（有効かな？）
（少なくとも何もしないより、絶対良いわ。ともかく明日から、もっとあの二人を観察しなさい。わかった？）
（はい）
（よろしい。じゃあね～）
その後はテレパシーの交信を、エミナの方が意識的に遮断してしまったようだった。

「あーあ」

僕がため息をつくと、モナの言葉が飛び込んできた。狼の姿で森にいるようだった。

（幸せになるのは構わんが、代わりにだれかを不幸にせんように、もっと気を配るべきじゃな、グスタフ）
（はい。その節は大変お世話になりました。姉上）
（なかなかに驚いたが、それはそれ。今足元を見定めねば、将来に禍根を残すぞ。言いたい事はこれだけじゃ。ではな）

僕はその翌日から、三人で朝食と夕食を食べることにした。

「まあ、サーブするのが私たちの仕事ですのに」

「同席させていただいて、朝食なんて、気が引けます」

確かに黄金宮の古いしきたりでは皇帝は子供か妃かそれに準ずる者としか、朝食を一緒に取らない。でも、ユリエやチャスカの身分が定まっていなかった頃でも、こっそり一緒に朝食は食べていたし、皆に知られていないだけで考えてみれば、それほど特別でも何でも無いのだ。

「いいんだよ。二人とも妃同然、いや、一昔前なら十分に皇帝の側妃になっていたはずだから、問題無い」

時代の移り変わりとともに、貴族でも平民でも自由な意思で結婚する者が増えた。一夫一婦制が強化された形になり、有力な貴族でも妻以外の女性をやたらに囲い込むのは不道徳と見なされるようになっている。

かつてなら御前会議で側妃の承認などと言う事もしたわけだが、今は国会で皇帝の個人生活に関して議決するなど有り得ない状況になっている。有るとすれば国家財政と皇室費の関係で、審議されるぐらいだ。

「今は、側妃を皆に承認させる儀式を行う時代の雰囲気じゃなくなってしまって……これまでずっと僕に誠実に尽くしてくれたのに、二人には申し訳ない状況だなって、そう思うよ」

(陛下にこんな風に御気を遣わせてしまうって、私達まだまだ未熟だったのね)

(私達もいよいよ老い先短いって事かな、最後まで気持ち良くお仕え出来る様に、気を配って下さったのね)

三人で朝食を取ると、思いの外、楽しい気分になれた。天気や黄金宮の庭園や、街での流行の話などをしていたが、僕は意識的に二人がどんな食事を食べてみたいと思っているのか、探ることにした。言葉に出すと、勘の良い二人にはすぐに悟られる可能性があるので、話題をそちらに誘導する感じだ。

「この頃ラジオで『ブタまん』っていうものの宣伝をしてますでしょ、気になってなりません」

「あ、私、それがデパートで売っているって言う案内板を見て、貴女にも買おうと思って食品売り場に行ってみたの。そうしたら……」

「そうしたら？」

「物凄い行列ができていたの。『並んでお待ち下さっても、お客様の番になるまで商品が残っているという保証は出来かねます』なんて店の人が言うから、あきらめたわ」

「黄金宮御用達係を通したら、持ってきてもらえるだろう、たぶん」

「ええ、確かにそうなのでしょうが……」

「なんだかちょっと、気が引けましたので」

「まとめて注文して、若い子たちの休憩時間に出してやれば、良いじゃないか？」

「でも、ラジオの投稿では、良く、あの独特な丸い大きな蒸し器から出たばっかりの、アツアツが美味しいって聞きますから」

「そうそう、私もそのアツアツが美味しいって聞いた記憶が有るわ」

「でしょ？」

「じゃあ、調理人ごと来てもらっちゃおうか」

「でも、そうすると、街の皆さんはその日一日、どなたもブタまんを食べられなくなるんですわ、きっと」

「ラジオの番組によりますと、毎日並ぶのが生きがいみたいな方もおいでのようですし、なんだか、申し訳ないような」

トシエ・マサエは聴取者参加型の午後の人気番組が気に入っているらしい。様々な職業・年齢層の人達が決められたお題に対して、投稿ハガキを送ってくるのだ。昨日のお題は「あなたが今一番食べたいもの」だったそうだ。

「北の森の木こりさんとか、南の海の漁師さんとか、御夫婦で農業なさっている方とか」

「鉄道のお仕事をなさっている方とか、電話交換手をなさっている若い女の方とか、大学生とか」

「色々な方たちが、皆さんそれぞれ」

「一生懸命、頑張っておいでなのですわ」

「トリアの街の頑張っている人たちが、楽しみにしている豚まんを独り占めしたら、申し訳ないって、そういう事かな？」

「そうそう、そうです」

「おっしゃる通りです」

（……というわけなんだ）

僕は昼食後、青い草の生えた辺りでゴロンと横になって、お昼寝タイムのエミナとテレパシーで会話だ。

（じゃあ、本格中華というか、ルンド的に言うとアイシン帝国風料理のお店でも始めたら、人気出そうね）

（ああ、そうだな、その手が有ったか）

（そんなお店が出来たら、私もいろんな点心を摘みながら、冷え冷えのビールが飲みたいな）

（そっちじゃ、アルコールは飲みにくいんだろ？　宮殿でもやっぱり飲まないの？）

（フラッペとか、冷たいハーブティーが主流。アルコール類は全部違法薬物扱いね。宗教上の禁止事項も有るけど、実際問題アルコールをひっかけて炎天下の中に出たら、死にそうになるらしいもの）

（そっちの焼け焦げそうな炎天下じゃ、そうなるか。トリアは夏で

も二十度から大して上がらない）
（こっちは今、外は四十七度らしいわ。宮殿は三十度台だけど）
（うひゃあ、すごいね）
（慣れちゃったけどね。カラッとしてるから、かつての日本の夏より過ごしやすかったりするわよ。でも、蝉がいないわ）
（こっちもいない）
（なんかさみしいわね）

もうすぐ夏も完全に終わる。蝉の声が夏に聞けないのは寂しすぎると言って、晩年に帝国を去った正三郎の気持が、僕にもちょっとわかる気がする。帝国内でセミの声が聞こえる場所と言えば、ユリエと昔一緒に行った、南部の海岸寄りの場所ぐらいのものだ。

（テージョには一種類ぐらい蝉、いるでしょ？）
（ああ。いるにはいる。みんなに無視されているけれど）
（スイカのかわりにメロンでも食べて、蝉の声を聞いてきたら？）
（ガブリエル……か）
（ひと夏ずっと貴方がいなかったって、恨みがましく思われるより良いわよ。孫も揃ってるんでしょ？）
（ああ、ガブリエルの孫だけだけどね……あと十日かそこらで暦の上では、秋か）
（国会もまだ夏休みなら、行ってこれば？）
（どう言って？）
（そんなの……用事が思いの外早くすんだって、それだけで良いじゃない）
（誰かが、御注進に及んでそうで、気が重いや）
（それは、ブロックできたと思うわ）
（ほんとか？）
（無線を妨害したり、電話の調子を変にしたりしたの。多分ＯＫ。何ならあの女王様の心を覗いてみたら？　私と出会った事で、力が

増幅されたはずだから、出来るわよ。じゃあ、頑張ってね）

エミナとの交信は切れた。言われた様にガブリエルの心を覗く…僕が新大陸に行った事、すでにトリアに戻った事以外の確実な情報はもたらされていないのは事実らしかった。

用事が終わったのにテージョに来ない。夫の気持が自分から完全に離れた。そんな風にガブリエルは思い始めている。

「やっぱり行かないと、話が余計ややこしくなるか」

翌朝、トシエ・マサエには「ガブリエルの御機嫌取りに行ってくる。月が変わらない内に戻るからね」とだけ伝えて、昼には定期航路の客船に乗ってしまった。海運会社のオーナー特権で、貴賓室は何時でもすぐに使える状態なのだ。護衛は腕利きを十人伴った。出発直前にガブリエルに電話を入れる。

「明日の昼食は一緒に食べられるだろうと思うよ」

「まあ、そうですの？　今は孫たちも皆居りますのよ。にぎやかになりそうですわ」

電話一本で、ガブリエルの気分は確実に上向きになったようだ。

翌日には無事にテージョの王宮に入った。皆が一堂に会した初日の夕食は庭でバーベキューにした。ガブリエルの産んだ十人の子供たちも、孫たちも皆バーベキューが好きだ。大食堂で食べる晩餐はどうしても堅苦しいものになるが、こういう形だと礼儀作法に厳しいガブリエルも何も言わないから、孫たちも伸び伸びしている。食後に一人一人に新大陸の土産物を手渡した。動物の牙と石を加工したペンダントだ。

「わあ、これはクマかしら？」

「面白い魚の格好だよ、これは」

皆にねだられて、大きなクマや巨大な亀、まっ白い大フクロウの話をした。男の子たちは大人になったら、冒険に出かけたいと思ったようだったし、女の子たちは沈まない太陽を見てみたいと思ったようだった。

その夜は久しぶりにガブリエルと同じベッドで眠り、気分が穏やかにおさまるのを確認できてほっとした。

「モナ様の御用は、案外早く澄みましたの？」
「ああ。大陸の色々な人たちの導きが有ってね、広大な土地を一度も迷わず、目的地にたどり着けたんだよ」
「今年は、夏にはお会いできないと思ってました。でも、来て下さって、良かった」
「遅くなって、ごめんよ」
「ありがとうございます」

やはり、気が張っていたのか、若いころより疲れやすくなっているからなのか、気が付くとガブリエルは深い眠りに入っていた。

昼間は孫たちと取りとめのないおしゃべりをしたり、夏休みの宿題を見てやったりした。一番暑さの厳しい時間帯は涼しい木陰にハンモックを張って、横になり、蝉の声を聴いていた。孫たちは僕が蝉の声を嬉しそうに聞いているのを、不思議そうに見た。

「その蝉と言う虫の声、そんなに素敵ですか？」
「うん。夏にしか聞くことが出来ないからね。蝉が居ると言う事は、緑が豊かだって証拠だし、それに、蝉の声には、楽しかった子供のころを思い出させる力が有るみたいだ」

「ふーん……」

そんなやり取りの後、孫たちも僕の真似をして、ハンモックで涼風に吹かれながら蝉の声を聴くのだった。

それからおやつとして、スイカではないが冷えたメロンを一緒に食べた。そんな事をするのは、僕と孫たちだけだが。

ガブリエルや大人になった子供たちは籐製というかラタンというか、そんな植物を編んだ素材の寝椅子を室内の風通しの良い場所において、軽く昼寝をする。地球でいう所のシェスタと同様の習慣だ。新婚さんはイチャイチャやっている最中だったりするので、部屋には近づかないのが無難だ。

「寝椅子より、ハンモックの方が何だか楽しいです」

「蝉の声を聴きながら、冷えたメロンを食べるのは、美味しいですね」

孫たちは僕と一緒に庭で昼寝をした。

一度は孫たちと海にも出た。近頃はレイリアでは海水浴のための浜が整備されたりして、観光客が増えつつあるが、僕が行くのは宮殿下のいわばプライベートビーチだ。近衛の中で泳ぎの達者な兵士たちにライフセーバー役を受け持ってもらって、気を付けて泳ぐのだが、毒クラゲが出たりしたので、泳ぐのは一日で諦めた。それでも貝殻を拾ったり、浜の生き物観察をするのは、孫たちも楽しいようだった。

ガブリエル本人と話すより、孫たちと遊ぶのが主になったが、それでもテージョに来て良かったと思う。トリアに戻る僕を港まで見送りに来たガブリエルの顔は、穏やかで優しいものだった。

帰りの船の貴賓室に入ると、僕は思わずベッドで大の字に寝転んでしまった。

（ねえ、そっちのアラームの状態は今どうなの？）

いきなりエミナの意識に語りかける。するといきなりだったのに、すぐに反応が有った。

（ちょっと今、確認するわね。危険度はかなり下がったみたいよ。まだ多少危険だけど）

（ほとんど孫達と遊んでただけなんだが、それでも効果は有ったんだな）

（黄金宮のお二人さんも、ちゃんと接してあげてね）

（うん。出来るだけ一緒に食事する事にした。もう、一緒に寝る事は多分しないけどね）

（私に変な義理立ては、しなくてもいいのよ）

（僕自身が、メンタル的にしんどいんだ。だから食事で乗り切る事にする）

エミナとそんなやり取りをしていた矢先、客船の船長が急ぎの相談事を持って来たらしい。さて、一体全体何だろうか？

「陛下、申し訳ございません。実はアイシン帝国のお客様でいらっしゃるようなのですが『金に糸目はつけないから最高の部屋をと言ったのに、なぜただの特等室なのだ。追加料金を払っても構わんから貴賓室に入れろ』と大層な剣幕でして」

「で、実際払いは良さそうなの？」

「何といいますか、成金趣味なのは確かで。あの国の服装の決まりなどわかりませんが、指にはやけにたくさんの宝石の指輪を嵌めていますし、重そうな翡翠やら黄金やらの首飾りをジャラジャラしています。先ほどは分厚い札束をテーブルに出して見せましたから、払いは良いでしょう。一応当社の案内に記されている特例条項の部分をお示しして『特別な事情が有るので御希望には添えません』と申し上げると、あちらは帝国の言葉は日常会話がどうにかなる程度でして、ちょっと面倒な約款とか規則などは文字が読めず、こちらの説明も明確には理解して頂けないようでして……」

つまり、船のスタッフにはアイシン帝国の言葉が理解できる者が居ないので、上手く説明出来ず、困っているようなのだ。

「あー、じゃあ、そのアイシンの成金さんを呼んでおいで、僕が話そう」

やってきたのは辮髪に帽子をちょこんと乗っけた小柄な老人だった。って、なんだ。南方大陸に行く途中で世話になった……

「イップ大人じゃないか。久しぶり」

「アイヤ！　皇帝陛下でいらっしゃいましたか！　これは大層御無礼いたしました」

三跪九叩頭の礼をいきなりすごい勢いで始めた。いかついボディーガード二人は主人の様子に驚き、土下座の姿勢だ。

「このイップ・ダッワーめの事を御記憶なさってお出でとは、感涙

の極みでございます」
　僕は長たらしくなりそうな儀礼的な挨拶はやめさせ、船長が説明できなかったこの海運会社の約款などを説明する。イップ大人は南海から住いをアイシン帝国南部の港に移したらしい。僕が厄介になった邸は、現在、南海の真珠取引専用の支店と言うか支社と言うか、そう言う状態らしい。

「ははあ、なるほど。貴賓室は皇族・王族など国家元首級の方の応接、ないしは国防上に重要な場合、ないしは緊急性を要する重大事案の発生時を除き、通常は乗客の使用を認めないのですか」
「そうなんだ。船中に急に流行病の患者が出た場合の隔離とか、ひどい怪我人の治療とか収容とか、と言う場合も有る。その場合はここが臨時の病院になるわけだ」
「あの気の効かん船長め、貴賓室の方が幾度どこのどなたか聞いても『他のお客様の個人情報は一切お伝えできません』とかなんとか抜かしおって、何も教えんのです」
「すまんが会社を設立する時にそういう規則を作って、船長はきちんとそれを守っているだけの事だ」
「すると、この会社も陛下が運営しておられるので？」
「筆頭株主だが、運営は信頼している者たちに任せている。それはそうと、どうしてこの船に？」

　聞けば十七番目の息子がミズホの大学を卒業後、帝国に来て商売で一山当てつつあると言うので、様子を見に来たのだそうだ。ついでに観光業で賑わう、夏のレイリア王国を見ておこうと考えたそうだ。

「そうか、十七番目の息子さんはトリアで大評判の『豚まん』の店のオーナーか。しかし、衛生管理その他もろもろ条件の厳しいデパートによく出店できたね」

「ミズホで一山当てましたので、親元に戻ると思っていましたら、帝国に行くと言いまして……勝手に結婚して国籍まで取ったと知らせて来ましたので、魂消てこちらに来た次第です。幸い、息子の嫁はまともな女で、国籍を取ったおかげで、デパートへもスンナリ出店出来たようですが……」

帝国国民になるには原則的に言って、母国での犯罪歴が無い事、帝国の新聞・ラジオを理解できる程度の語学力がある事、帝国に貢献できる技能・能力を有する事が求められる。母国での犯罪は政治宗教がらみなら、事情は考慮されるし、技能・能力は帝国で目新しい事なら何でもOKな感じだ。ただ、言葉が不十分では帝国の法令をキチンと理解して守れるとは思えないので、この点は最も厳しい。

「ミズホは友邦国だから、帰化する者も多いけど、アイシンの人は珍しいと思うな」

「何でもアイシンからの帰化人、第一号だそうです。あの子は南方においでになった時の陛下のお姿を拝見して、大人になったら帝国に住むと言っておりました。子供の言う事だからと、当時は軽く考えておりましたが……本気だったのですなあ」

そんなことが有った翌日、僕は黄金宮に戻る前にイップ大人と共に、あの『豚まん』の店のオーナー、イップ・フーシン、苗字がイップなので帝国式ならフーシン・イップだが、ともかくもその若者に会いに行った。

キンキラキンの親父さんとは違って、シンプルな仕立ての良い服を着て、結婚指輪以外は何も宝飾品をつけていない。滑らかに帝国の言葉を話し、身のこなしも洗練されている。自分の力で未来を拓いて行こうと言う気概も感じられる。僕は一目で彼が気に入った。帝国で知り合った奥さんはミズホ系の女性だそうだ。

「妻の実家がレストランの経営でそこそこ成功していますので、出

店に関しては色々助言も貰いました」
フーシン君に言わせると、アイシンの食べ物屋は美味い所は多いがゴミの対策がなっておらず、店舗の掃除や食器の清潔さに問題が多いのだと言う。
「確かに、デパートにはコバエがおらんかったな」
「この清潔さに慣れてしまうと、コバエがいて当たり前の食べ物屋は勘弁してほしくなるよ」

僕はイップ親子に或る提案をして、その案に賛成してもらった。

秋になって温かいものが恋しくなると、あの『豚まん』屋はますます大繁盛で、大学街に新たに出店した二号店も好調らしかった。トシエとマサエは、二号店で始めた電話予約制度を利用して、度々買っている。よっぽど気に入っているようで「いくら食べても食べ飽きない」そうだ。
そんなある日、僕は二人を街中へ誘った。
「まあ、素敵！デートですの？」
「陛下が街に誘って下さるなんて、何十年ぶりかしら」

三人で仲良く馬車に乗って、着いたのは、とあるレストランだ。

「まあ、何だか貴族の小さな別邸みたいな」
「隠れ家みたいで、素敵ですね」

真っ白く塗られたドアを開けると、いきなり拍手喝さいだ。トシエとマサエはびっくりしたらしい。
「勤続五十周年、おめでとうございますー」
子や孫、職場の仲良しらが一堂に集まったのだ。
ヒサエの長女・カホとカナエの長女サホが花束をそれぞれの祖母に手渡す。二人とも小学一年生だ。

ユキヒコ・ヤスヒコも、ヒサエ・カナエも　皆、自分が望んだ相手と結婚し、子供にも恵まれた。まずまず幸せに暮らしているのだろう。

「ああ、そうですわね……今日は五十年前、初めて黄金宮でお仕事を始めた日ですわ」

「そして六十年前の今日は、亡き母に連れられて初めて陛下にお目にかかった日です」

「そうね。それ以来、黄金宮でお仕事をしたいって、二人とも思ったのだものね」

「そうそう。絶対陛下のお傍でお仕え出来るような人になりたいって、思ったのよね」

そう言えば、僕の即位二十四年目、五十八歳の時にラウル・ヤイレの庶子・タマエがまだ五歳と六歳の二人の娘を連れて来たのだった。つまりトシエとマサエはユリエのひ孫だ……その子達が孫のいるお祖母ちゃんになったのだ。僕の過ごしてきた歳月の長さが、改めて強く意識される。

地球の飲茶レストランみたいなワゴンが来た。皆は初めてなので、興味津々だ。回転テーブルの設置は僕の提案なのだが、イップ大人にもバカ受けして、どうやらアイシンやミズホで回転テーブルを売り出すらしい。

この店はイップ親子と僕の共同経営で始めた、トリア初のアイシン帝国風料理のレストランなのだ。サーブするのは複数の言葉を理解できる留学生を中心に、吟味して雇い入れたウェイトレスだ。

マオカラー風の七分袖で地模様入りの黒の長い上着に黒いズボン。全体的に地球のベトナムのアオザイに形が似ている。スリットから脚が覗くチャイナドレスも僕は好きだが、未婚女性が公共の場で膝より上を晒すのは、挑発的と思われてしまうだろうから、この程度

に抑えた。髪はきちんと束ねるか結う事になっている。

「うわあ、美味しそう！」

先ず最初が評判を呼んだ豚まんの小型のものだが、次々シュウマイや餃子、湯葉巻き、などの蒸し物が続く。小さなせいろの蓋が開くたび、皆が歓声を上げる。どれも小ぶりで色合いに気を使ってある。ウェイトレスが小皿に手際よく盛り付け、回転テーブルにどんどん乗せて行く。

チャーシュー入り粽や魚の蒸し物レタス包みは、大人に受けた。子供たちはプリンなどのデザート類が気に入った子が多いようだった。

「どれも彩りが綺麗で、熱いものは熱く、冷たいものは冷たく、素晴らしいです」

「初めてみるものばかりでしたが、豚まんのほかも美味しいものが一杯でした」

最後に薫り高いお茶がサーブされるが、あれ？　あの子は？　エミナ？　おいおい……

（人が悪いなあ。いつトリアに来たの？）

（貴方がテージョに発った日かな。この秋から大学院生よ。試験に合格するかどうかちょっと自信がなかったものだから、決まったらその内教えようと思ってたんだけど）

（住まいは？）

（大使館付き武官で、百人以上いる父方の叔父の一人の家が、帝国大学の正門のすぐそばなの）

（このバイトの件は叔父さんには報告済み？）

（してあるわ。と言うか社会勉強したいと言ったら、叔父さんとオ

ーナーのフーシン・イップさんが友達だからここを紹介してくれたの）

（フーシンさんは君の素性や僕との関係も承知？）

（ラガリ叔父の姪だとしか知らないの。叔父は父との関係も聞かれた事が無いから、話して無いって）

（聞かれてないのに、話す事も無いか）

僕はつい、苦笑してしまう。表情の変化をカナエに気付かれたので、すぐ元の表情に戻ったが。

（そうそう。嘘はついてないでしょ？）

（ラガリ叔父さんは、僕の事は？）

（込み入った事情その他も全部、打ち明けてあるわ）

（会いたかったら、どこに行けばいいかな？）

（監視者探知システムを発動させるから、それまで待ってね）

（いつ、そのシステムは発動するの？）

（多分明日の時空管理局との交信が出来たら、大丈夫なはずよ）

そこで一旦、交信は途絶えた。皆が茶を飲み終わって、店を出るタイミングになったからだ。帰りも三人で仲良く馬車に乗って黄金宮に戻ったわけだが、夕食は「食べ過ぎてしまいました」というトシエ・マサエのために、僕があっさりしたリゾットを作った。手料理を振る舞う事も、近頃は稀だったのだ。

「あれ以上は何も食べられないと思っていましたのに、これなら入りました」

「あっさりして、良いお味ですね。また作り方をお教えください」

その後は安眠を誘うカクテルを出す。

ブランデーにレイリア産のオレンジのリキュール、アルラト産のザクロのシロップ、卵黄……強めにシェイクする。このシェイカーも、僕がこの世界に持ちこんだ物だ。黄色い甘口の薫り高いカクテ

ルが三人分……作ってから、このカクテルの名前を思い出して、一人で勝手に悶えた。

「まあ、滑らかなのど越しで」
「良い香りで、甘くておいしい」
「良かった」
「このお酒には、名前が有りますの？」
「有ったけどね……思い出せない」
僕は嘘をついた。
二人は風呂に入って寝ることにしたらしい。無駄に酒に強くて寝つけない僕は、一人で庭に出ていた。エミナと話がしたかったのだ。

（カクテルを作ったけれど、名前が恥ずかしくて、聞かれても『思い出せない』って、嘘をついた）
（どんな恥ずかしい名前？）
（Ｂｏｓｏｍ　Ｃａｒｅｓｓｅｒ）
（ちょっ、それって）
（胸を愛撫する人だの、密やかな抱擁だの、訳すだろ？　つい、君の顔を思い浮かべた）
（もう、なんて人なの。でも、美味しいなら、今度飲ませてね）
（ああ、無論ね。Ｂｅｔｗｅｅｎ　ｔｈｅ　Ｓｈｅｅｔｓだの Ｋｉｓｓ　ｏｆ　Ｆｉｒｅだの、こっぱずかしい名前のナイトキャップを作ってあげるよ。味も美味いよ……本当はいける口だよね？）
（さあ、どうかしら？　田中美保は飲める口だったけれど、今の私は分からない。酔ったら介抱してね）
（無論だよ。ああ、もう決めた）
（何を？）
（君の叔父さんち、大使館のすぐ隣だな？）
（そうよ。官舎だから）
（その裏手、空き地になっているだろう？）

（ええ）

（そこに僕の隠れ家を立ててしまう事にする。そうしたら、君が住む官舎と、塀越しに行き来できそうじゃないか。うん、そうしよう）

（すごいアイデアね）

（皆に秘密の隠れ家デートを、しよう。うん、それが良い）

ものすごく上手い事を考え付いたと、僕は大いに満足だった。風呂に入るときもずっと鼻歌を歌いっぱなしの僕を、ひょっとしたら見習い侍従や護衛の兵士はいつもと様子が違うと、いぶかしくは思ったようだったが、その理由を知るはずもない。

その夜は明かりをつけてベッドで建築関係の本を何冊か開いたまま、僕は眠りに入っていたのだった。

僕と彼女のこれから・4

即位後八十五年、ルンドに転生して百十九年目に入った。エミナと会う為に作った隠れ家が無事に完成して以降は、殆どの週末を一緒に過ごしている。

十八歳で飛び級の形でいきなり大学院に入ったエミナは、美貌の才媛としてすぐに有名になったが「宗教的な理由により」人前では頭に黒いベールをかぶり肌を露出しないアルラトの伝統衣装を着る姿勢を通した。無論完全なカモフラージュだ。アルバイト先のレストランではプラチナブロンドの髪を見せているのだから。

「君をデートに誘いたくても、大学と叔父さんの家の往復じゃ、男子学生にはチャンスも無いな」

「アルコールは飲めませんとか、お祈りしなくちゃとか……」

「ウソばっかり」

「あら、でもアルラトの一世代前の宮中の女性は、ほんとにそうだったのよ。私は御免だけど」

バーコーナーには色々な酒を置いてある。エミナは砂糖抜きのＫｉｓｓ　ｏｆ　Ｆｉｒｅが好きみたいだった。

「Ｋｉｓｓ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｄａｒｋっていうの？　あれも好きよ」

「じゃあ作る」

ジンとサクランボのブランデーと苦いハーブ入りのワインを同量入れて、混ぜる。それだけだ。僕はもう少し辛口が好きだが、エミナと愛し合う為の前振りとしては悪くない。

「キスして良い？」
「ええ、構いませんわ」

プっ、とお互い噴き出してから、軽いキスからはじめる。ひとしきり終わると……一緒にシャワーを浴びたり風呂に入ったりするが、またと言う事も珍しくは無い。それこそ、甘い週末と言うか、爛れた休日と言うか、そんな時間を過ごすのだ。

「毎週末、黄金宮の人たちに、どこに泊まるって言ってるの？」
「市内の隠れ家って言ってある。僕の行先を問いただせる人なんていやしないさ」
「そりゃあ皇帝陛下だものね」

トシエ・マサエは週末には息子らの住む邸に帰らせる。だって、普通の職場ならとうの昔に現役引退、楽隠居という年なのだし、実際若いころと違って体も疲れやすいみたいだ。

ユキヒコ・ヤスヒコの邸は隣り合わせで、美しい庭は一続きになっている。どうやら二つの家族は、週末になると一緒に食事をしているらしい。僕は「週末を一緒に過ごす人はいるよ」って、それだけを二人に伝えたが、どう受け止めたか、何も聞かれなかった。

「情報自体は遮断できているけれど、女の勘はどうにもならないわよ」
「だね。二人とも何か感じてるのは確かだ。でも、感情を覗き込むのが……怖い」
「平日はご飯一緒に食べているんでしょう？」
「そうしてるよ。お婆ちゃん孝行する孫の気分だけどね、何か変だよな」

年を取ると怒るのも疲れるんですよ。笑っているのが一番です。

そんな言葉を時折トシエやマサエが口にするが、僕に対して怒っている……訳では無い。だが、あきらめている。そう言う事なのだろう。ユリエは僕の初めての女で初めての子を産んだ。その自負心も強かったのだと思う。僕に対する怒りの感情が、ひ孫たちより恐らくもっと強くて、だからある時期から、僕との関係を断つ事を選んだのだろう。トシエとマサエは二人で一緒にバランスを取って来たから、もっと理性的になれるのだろうか？

「幼いころから陛下にお仕えする素敵な方たちを見てきましたから、あの世だか来世だかでどなたかと御一緒になっても、恥ずかしくない自分でいたいのです」

「陛下の一番は曾祖母なのか美保様の生まれ変わりの方か存じませんが、私達ではない事は確かなんですもの、でも、陛下はずっと私達と付き合って下さいました。とてもありがたいと思っています」

昨夜の夕食時にも、そんな事を言っていたっけ。

二人で一人分のその他大勢ですから……そんな言葉も出たが……そりゃ違うな。

「ちゃんと、違うって言ってあげるのよ。最後まで、ちゃんとお付き合いしないと」

「最後って、あの二人の寿命は……幾つまでなのかな？」

「百、ぐらいまでよね、普通は長くても」

「僕らは、いつまでかな」

「さあ、貴方の気持ち次第、たぶん。はっきり聞いていないけれど、最初の百年が過ぎたら、百年ごとに更新するか終了するか、選べるらしいわよ」

「終了って、文字通り死んじゃうのか」

「違うらしいんだけど、貴方や私はまだ、十分に条件を果たしていないらしくて、その条件については細かい事は何も教えてもらえて

いないの。ただ、今まで知らされた事の断片から考えると……時空管理局本部への採用、なんていう事ぐらいじゃないのかな？　まあ、時空を超えたエリート集団って事なんでしょうけど」

「なら……皇帝やってた方が良いか。あれかな、人類とはかけ離れた生物の文明を育成するとか？」

「ああ、そうねえ。多分そんな所じゃないかと私も思う。きっとそうだわ。後は事務スタッフ？」

「そんなもんか。じゃあ、やっぱりここに居るか」

「千年、二千年経っても、私達、新鮮で居られるかしらねえ……」

「難しそうだけど、それならそれで絶対的な信頼関係が出来そうではあるね」

僕らは通常の人類の枠を超越した長いスパンで考えるべき間柄なのだから、最初の十年や二十年、大っぴらに会えなくても気にしない、そう言いたいようだ。ネガティブな強い感情が関係者の間に発生して、本来の計画が阻害されたりする方が困る……そう、エミナは言うのだが……

「でも、僕は付き合った女性全員に言ってきたんだよ、美保が転生した存在こそが僕の真の意味でのつがいなんだと」

「女王様も理屈は分かっているのよ。皇后にしなかったのも、転生が迫った時期だったからなんでしょう？　貴方は約束を破ったわけでは無いけれど、私が現実に表に出たら、ますます不安になるでしょうよ」

「わかった。だから当分、週末隠密デートか」

「ドキドキして良いじゃない」

「塀越しに会話してから、こっちに来るって、確かにちょっと面白いけどね」

そう、ガブリエルは相変わらず僕にとっての、最大の問題であり

続けた。誰かから、僕が最近はどこかに毎週末泊まりに行くと聞かされて……要らん事をすると思うが……それ以降、胃の調子が変になって、胃潰瘍を起こしたらしい。医師は手術を勧めたが、本人が拒んでいるようだ。

「お見舞いぐらい行ってらっしゃいよ。確かに結婚の時の約束は夏と年末年始でしょうけれど、行った方が良いわ。子供さんたちの手前も有るし。来週は私、論文まとめるから、会わない事にしましょう。貴方はテージョに行ってらっしゃい」

「姫の仰せのままに」

前日昼過ぎにトリアの港を出ると、翌日の昼食には間に合う時間にテージョに到着する。僕は船の貴賓室でゴロンと寝そべって、エミナにテレパシーで愚痴る。

（ねえ、週末の夜だけでも一緒になれない？　唯一の楽しみ、心の安らぎなのに、辛いなあ）

（ちゃんとお見舞いしてからね）

（ああ、それはそうする）

（傷ついた女心は、敏感なんだから、言葉の端々にも気を配ってあげて）

（そんな、僕、無神経な事は言って無いはずだけどね）

（気を遣われすぎているって言うのも傷つく原因だったりするから、難しいわねえ）

（微妙すぎて、なんか怖いな）

（良さそうな事を、ともかくやるしかないんじゃないの？）

だが、根本的な原因は、ガブリエルの肉体は普通に老化しているのに、僕の方が相変わらず二十代の状態のままである事なのだから、どうにもできやしない。僕は年齢の話は可能な限り避けるが、その

こと自体がガブリエルを傷つけている側面も有る。だが、肉体の老化を自覚し恐れている彼女に、僕が何を言っても逆効果な気もする。

悩みつつ、テージョのガブリエルの寝室に意識を合わせる。すると、アルフォンソが様子を見にやってきたようだ。このアルフォンソも結婚したら、まともな大人になったので、見直しているのだが……

「母上？　胃はかなり痛みますか？」

「薬のおかげで激しい痛みとむかつきは無くなったようよ」

「明日、父上が来て下さるのでしょう？」

「ええ。何だか申し訳ないわ。そもそも、この国を立て直すために、強引におすがりしたのはこちらなのよね。御約束下さった事も、全部、誠実に、いいえ、それ以上にやって下さった……」

「レイリアの女王としては、それが正しいお考えでしょうが……母上にとって、父上はもっと別な意味で、特別な方なのでしょう？　怨み事の一つや二つ、おっしゃりたい事も、全部飲みこんで来られたではないですか？　めちゃめちゃでも感情的でも、時には泣いてもわめいても、良いではありませんか。御夫婦ですから」

「でも、私は……あの方の皇后ではないのよ」

「それは、母上が女王であられるからでは？」

「いいえ、いいえ違うの……あの方には、前世から定まった『真のつがい』と言うべき方がおられて、以前伺ったお話では、あの方が百歳になられてから、その女の方が別の世界から転生なさると、そしてその女の方は不老不死だと……だから、その方を皇后とするから、私は皇后には出来ない。かりそめに正室扱いになら出来るが、どうするかと……出会って最初のころにおっしゃったの。私は……それでも十分だと思ったわ。私の女王としての、レイリアの国としての体面は立てて下さると御約束下さったから。その事は、正式な覚え書きとして、取り交わしたの」

「そ、そんな事が、あったのですか」
「ええ。私は『暫定的に』正室扱いとする、そういう存在なの。皇后には……して頂けないのよ」
「では、その転生する、あるいはした女性と父上は……」
「以前伺った時は『転生したが、まだ会っていない』とおっしゃった。でも今は……恐らく」
「その女性と、会っておいでなのですか？」
「探らせた事が有ったけれど、うまくいかなかった。でも、先日、あの方が近頃毎週末を、黄金宮以外の『隠れ家』で過ごしておいでだと言う話は聞いたわ……とうとう、その時期が来たのだと……」
「でも、母上、その女性と御一緒とは限らないではないですか」
「いえ、そうに違いないわ。女の勘は鋭いのよ。私は……あの方に恋をしてしまった。冷静な女王でいなければいけないのに。それが、そもそもの間違いなのね、きっと」
「……母上」
「昨年の夏に来て下さった時に、イヤと言うほど思い知ったけれど、あの方は本当にお若いの。なのにごらんなさい、私は醜い老婆だわ」
「そんな事はございません、母上はお綺麗です」
「ふふふ、そんな優しい事を本気で言ってくれるのは、もう、お前ぐらいのものね。夏に集まった時、孫たちが……お祖母様はお年寄りだから海水浴は無理。なんて囁きあっているのを聞いて、やっぱり私は老人なんだと思い知ったわ。なのに、あの方は若い兵士たちと変わらない、いやもっと、若々しくていらっしゃるのだもの。老婆がのさばって、いつまでも御迷惑をおかけしたら……申し訳ないわ」
「そんな、そこまで御自分を貶めてお考えにならなくても……」
アルフォンソは母親の手を握り締め、絶句した。
「恋愛は、先に恋してしまった方が負けだわ。だから、私はあの方には永遠に頭が上がらないの。かりそめでも形だけでも、あの方が差し伸べて下さった手に縋り付いて生きて来たのだし、感謝こそす

れ、お怨み申し上げるなんて、筋違い。理屈はそうなの。でも、悲しくて、さびしくて、辛いわ」

僕はそこで意識を戻した。ひどい疲れを覚えた。嫌な夢を見た後に似てはいるが、あれは夢ではない。紛れもない現実なのだ。

（疲れた。会いに行く前から、くたくたな気分だ）

僕は弱音を吐いた。すぐにエミナが応えた。

（くたくたでも、お見舞いは必須よ。絶対よ。でも、貴方がずっとテージョに居る訳では無いから、後は子供さんたちに、打ち明け話をして、対策を相談したら？）

（わかった。努力してみる）

何食わぬ顔をしてガブリエルを見舞うのは、心情的に重苦しいものが有る。だが、僕の誠意まで疑われるよりは良いのだろう。手術を改めて僕からも勧めたが、絶対嫌だと言う。

「王家の者の体に刃物を当てること自体、古い家臣たちが猛反対いたしますし、手術したからと言って、絶対治ると言うものでもないらしいですから」

「トリアの病院に入らないか？　手術のための整った設備も有るし、医師の技量も優れている。胃穿孔つまり胃に穴が開いてしまった状態でも、うまく手術できる医師が一人いるのだよ。任せてみないか？」

「その医師は……セバスティアンの話では親がドーン大陸の者だとか……気が進みません」

「あのねえ、ガブリエル」

「人種差別、そうでしょう。確かにそうなのです。でも、私は絶対嫌ですわ」

そうだった。ガブリエルはレイリアの大半の貴族同様、人種差別主義者なのだった。僕はその人種差別も含めて、どうすべきか子供らと話し合った。

「確かに、人種差別はいけないのでしょう。でも、今さら母上の価値観が変わるとも思えません」

「病院で名医に手術して頂けたにしても、必ず助かると言う保証が有るわけでもないでしょう。若く体力が有る者ほど、手術の後の回復が早いそうですが、母上の御年なら、どうなのですか？　微妙では？」

「いっその事、母上のお好きなようにさせて差し上げる方が親孝行ではないかと、私などは思います」

結局、子供らの総意は、今までと大差ない扱いをする事で落ち着いた。政務は既に摂政の第一王子セバスティアンと補佐役の第二王子アルフォンソが、完全に代行している状態だ。そのままガブリエルは静養に専念する事になった。

そしてガブリエルの神経を苛立たせる事が、一番病状を悪化させるので、一番何でも話をしやすいアルフォンソと、一番かわいがっている孫のエンリケが毎日話し相手として顔を出すように決めた。エンリケの母親は平民出身のデジレで、セバスティアンの妻にふさわしくないと未だにガブリエルは思っているらしいが、エンリケの聡明さと整った容貌は「王家の跡継ぎに相応しい」らしい。

お気に入りの孫息子の考え深さと穏やかな雰囲気は、明らかに「平民の嫁」に由来するものだと僕は思うのだが、ガブリエルにその点を指摘した事は無い。そんな話をしても、お互い不愉快になるだけだからだ。

「お祖母様は寂しがり屋でいらっしゃるのです。そしてずっとお祖父様を慕っていらっしゃるのでしょう。だから、色々とつい心配な

さってしまうのです、きっと」

帰り際、港まで送りに来てくれたエンリケは、なかなかに頼もしい。レイリア王国の将来はきっと明るいだろうと、僕は確信できた。

「頼りにならん夫だと思っているかもしれんがな……まあ、何はともあれ、お祖母様を頼む。何か有ったらいつでも電話をくれ。出来る限りの事はするよ。お前のお母様には色々厄介をかけるが、よろしく伝えてくれ」

「はい。母もわかっていると思います」

出港した船に向って手を振る孫息子を見ながら、僕はガブリエルと過ごした時間の重みを、今さらながらずっしりと感じたのだった。

僕と彼女のこれから・5

「幾らなんでも、そろそろ本当に結婚式を挙げて頂けませんか？国内的に、言い訳し辛くなって来ましたし、エミナも二十四歳です。せっかく人並みの年頃に婚約させて頂きましたのに……それとも、別の方と御結婚なさるとか……」

言葉は丁寧だが、ザファル君の声は機嫌が悪かった。エミナと週末を過ごすようになってから、毎日のように電話を貰う事は無くなったが、隠れ家の方に交換手を通さない直通電話をかけて来るようになったのだ。

「無い無い、絶対無い。僕はエミナにゾッコンなんだから、それは有り得ない。いや、その、平日はエミナも学問やら研究やら忙しいんだよ。週末は大抵一緒なんだけどな」

既に即位して九十年、ルンドに転生して百二十四年目になった。僕とエミナはちょうど百歳差なのだが、全然そうは見えない不自然な状況で、その不自然さも僕らは当たり前に受け入れつつあった。かつての僕がそうであったように、エミナ自身の老化も完全に停止したようだった。

僕らだけの極めて特殊な条件の所為も有って、エミナ自身は全然結婚をあせっていない。僕と会う時以外は本腰を入れて、このルンド全体に有用な食料増産に関する研究を行っている。特に砂漠の緑化の研究は、既に多方面の専門家に高く評価されつつあった。

エミナに言わせると、今年の結婚なんて有り得ないのだ。

「結婚？　まだ、そんな時期じゃないわ」

確かに、僕の方はそんな時期ではなさそうだった。

この五年でガブリエルの病状は一進一退を繰り返したが、確実に病状は悪化していた。つい先ごろの恒例の年末年始の時期も、トリアに来る事が出来なかった。年末にひどく吐血したのだ。僕や子供たちは再び手術を勧めたが、やはり拒否された。

「痛みや出血を一時的に点滴や薬で抑える事は出来ても、やはり開腹手術しか根本的な解決になりません」

ガブリエルが診察を拒まない出自の者の中で、可能な限り腕の良い医師を探して治療にあたらせたが、どの医師も言う事は同じだった。二十一世紀の地球なら腹腔鏡を使うような治療法も有るが、まだ、ルンドの医療はそこまで発達していない。

トシエとマサエも近頃は年齢の所為か疲れやすくなって、夜更かしが出来ない。

昨年の大みそかから今年の元旦にかけてのカウントダウンはガブリエルやレイリアの子供らの不参加が有って、盛り上がりそうにないので、黄金宮では職員達の立食パーティー以外の行事は行われなかった。

年越しの瞬間も今年はエミナと一緒にすごした。

黄金宮や役所の新年の休暇は三が日だけだが、二日目の朝に、エミナに言われた。

「貴方、テージョに今すぐにでも、行くべきだわ」

「そう?」

「自分で見てごらんなさい、かなり今の症状はいけないんじゃないかしら?」

テージョのガブリエルの寝室に意識を合わせる。ガブリエル本人に合わせると、ネガティブな感情に意識を奪われそうになるのが、実は怖い。そうした恐怖感は同じ能力を持つ人間であるエミナ以外

には、理解してもらえないのだと思う。ヤタガラスやモナは穢れた想念ならば覗いたり接触したりする事自体拒否する。ケツァールだと穢れた想念に囚われた人間だと、側にも寄れなくなるらしい。

穢れを内包した人そのままでありながら、他者の想念を覗く事の恐ろしさは、自分がその穢れに大いに毒されるからであり、それが親しい人間ならば感情の暴走に巻き込まれそうになるからだ。

「貴方は半ば意識的に覗き込まないようにしてきたのね。正しい判断じゃないかしら」

以前エミナに言われた通りだったのだろう。ガブリエルの感情を覗き込むのが怖いのなら、定点観測のように病室を毎日一定時間観察するべきだとアドバイスしたのも、エミナだ。

僕は毎日、数分程度覗くだけだが、エミナはあの胸飾りのアラームの効果だろう、緊急事態が発生すると僕よりも早く反応するのだ。ガブリエルの強い感情を落ち着かせ、子供らに強い負の感情を起こす事のないように気を付ける必要が有る。僕やエミナのこれからの活動に有形無形の悪影響が及ばないようにするためにも、細心の注意が必要なのだろう。

「かなりの吐血だな……分かった」

「定期航路の客船が正午に出港よ。急いで支度しなきゃ。貴方は黄金宮に電話連絡をしなくちゃね」

エミナはテキパキと荷造りし、ブランチの支度を始める。僕は各方面に電話で連絡を入れる。黄金宮の侍従や宰相のラルフさん、それにユキヒコの邸にも電話を入れて、トシエとマサエにも僕がテージョに向う事を伝えておいて貰う。

エミナは『これぞ日本の朝ごはん』って感じのものを出してくれた。若布と豆腐の味噌汁、焼き海苔にアジの干物、卵焼き、青菜の

お浸し、芋の煮ころがし、そして梅干しと炊き立てのご飯。
梅干しなんてこの世界には存在しなかったのだが、梅と性質の似たプラムを探し出し、紫蘇と風味の変わらないハーブを使って、ちゃんとエミナは梅干しを作り上げた。そしてそれをイップ商会の販売網を使ってミズホにも輸出している。そんな商売にまで絡むようになってきているくせに、エミナはイップ親子に自分がアルラトの大君主の姫である事も、僕と特別な関係でいずれ結婚する事も打ち明けていない。

「だって、イップさんに何も聞かれないもの」

そう言って平然と笑っている。こう言う良くも悪くも度胸が有ると言うか肝の太いと言うか、そういうところは田中美保には見られなかった性質だ。エミナに言わせると、僕もクソまじめで小心だった井沢亮太とはかなり違っていると言う。
「良くも悪くも曲者で、複雑になったわ。あ、でも、魅力的だとも思うわよ」
僕がエミナを見て感じる事と似ている。元の人格を強烈に感じさせるのに、そこからパワーアップして複雑になった感じ……というと良いのかも知れない。

「頑張ってね。子供さんたち全員が納得するような、立派なお父さんで居なくちゃいけないから大変でしょうけれど、でも大事な事よ」
「やっぱり……」
葬式になるだろう、と口に出して僕は言う事が出来なかった。
「貴方の良心と良識に照らして、最良だと思う方法を取って。きっと……一月や二月かかるでしょう。私、以前から約束も有るからオヌンダガオノの食料の増産と農地の開拓に関して、やっておきたい事を片づけてくるわ。何か有ったら、いつでも話しかけてね。私は、貴方のパートナーなのだから」

「ありがとう」
エミナは僕をギュッと抱きしめてから、肩をポンと叩いた。気分が嘘のように落ち着いた。
「さあ、行ってらっしゃい」

僕はそのまま、エミナが荷造りした荷物を積み込ませ、馬車に乗って港に向った。
船では余り、眠ることが出来なかった。僕が転生する直前の事故の夢で眼が覚めて、その後も短い夢を幾つも幾つも見た。ガブリエルの血を吐く姿、ユリエの息を引き取った瞬間の姿、アネッテの死に顔、アンニカの死に顔、チャスカの死に顔、セルマの死に顔、母上の、大宰相の、ヨハンの、父上の、ヤガー君の、ルイサの、キリヤの、フレゼリク・レオポルドの、碧子の、死に顔、死に顔、死に顔……

（大丈夫？）
エミナの温かい力強い波動に、僕は救われた気分になった。
（死に別れた人たちの顔が次々、浮かぶんだ）
（貴方のこれまでを支えてくれた、大切な人たちだもの。忘れられるはずもないし、忘れてはいけないのよ、きっと）
（うん、そうだな）

その後は穏やかな眠りに入る事が出来たようだったが……テージョに船が入港する直前に覗き見たガブリエルの病室の様子は慌ただしかった。息子たち、娘たちが既に病室に詰めかけている。

「そ、そうですか。皇帝陛下は、父上は、こちらに向けて既に出港されたのですね。はいはい。はい」
「もう、手の施しようが有りません」
「せめて、最後までお苦しみにならないように、手を尽くしてくれ」

「ははっ、最善を尽くします」
「父上のお乗りになった船が入港したぞ」
「急ぎお迎えに上がれ」

船が着岸するや否や、僕はレイリア王家の馬車で急ぎガブリエルのもとに急いだが、僕が部屋に入ったのは最後の大吐血の直後だったようだ。

「おお、お気付かれました」
医師が奇跡だと驚くぐらいだから、本当に稀な事なのだろうが、ガブリエルはしっかり僕の姿を認めて、うれしそうに微笑んだ。僕は枕辺に子供らを集めた。
酷く苦しいはずだったが、ガブリエルの顔はどこまでも晴れやかだった。
最後まで自分の希望を貫き、僕と産んだすべての子、孫に見守られる中で落ち着いて別れの言葉を述べながら息を引き取ったのだから……人々が言うように、まずは大往生と言えたのかも知れない。

荘厳な葬儀が行われ、レイリア中が喪に服し、全ての学校・役所・商店が半旗を掲げた。半旗について提案したのは、自分ももう老境にさしかかっているラルフ・ヤングだった。

帝国のラジオは葬儀の当日は一日中特集番組を放送し、全ての友邦国、自治州、自治国でも聴取された。ガブリエルの真っ直ぐさ、勤勉さ、暖かさを示す様々のエピソードが一般の人たちから大量に寄せられ、それらが一つ一つ紹介されていたのだった。
働きはじめたばかりのころ、優しい労いの言葉を貰って感激したと言う郵便局員や、兵士、デパートの店員と言った一般の人たちの想い出は、僕の知らない物ばかりだったが、それでも「ああ、あのガブリエルらしい」と思わせる様な内容だった。

「女王様がレイシズムを克服できていたら、もっと長生きできたろうに。惜しい事をしたなあ」

電話で話した時のラルフさんの言葉は正しいだけに、僕には反論の余地は無かった。一般の人に悟られないように努力はしたが、だが確かに、彼女はその偏見を訂正しようとは全くしなかったのだ。それが命取りになるとは、何とも皮肉だ。

葬儀の参列者は予想をはるかに超えた膨大な人数となった。そして、それは歴代レイリアの君主の中でガブリエルが『最も民に愛された君主』であった証拠だとされた。

全ての儀式が終了し、ガブリエルの亡骸はレイリア王家の霊廟の一角に設けられた、美しい薔薇色の大理石製の石の棺に収められた。彼女自身が気に入って生前に制作を依頼した彫刻家の傑作だ。その彫刻の表情がまるで出会ったばかりの愛らしい乙女だったころの様子そのもので、僕にしては珍しく、ひどく感傷的な気分になって、墓の中に佇んでいた。

母の死に伴って王となったセバスティアン一人だけが、僕の隣に寄り添うように、立っている。

霊廟の内部への立ち入りは、被葬者の配偶者と王自身、そして祭祀を取り仕切る大司教しか入れないと言うのが、このレイリアのしきたりらしい。他の子供らは霊廟の外から祈りをささげ花を手向けるしか無いのだ。

「父上が心から悲しんで下さって、母上は満足なさっているでしょう」

「だが、苦しかったろうな。最後まで手術を嫌がって……ガブリエルは本当に頑固だ」

「父上が愛された他の方たちとどこかでお会いした時に、刃物が入

った醜い体では嫌だ、などとおっしゃってましたよ。負けず嫌いな方ですから」
「僕なんて前世の事故でグシャグシャになったのに、この体に生まれ変わったんだ。関係無い。そんなの」
「そういえば、前も父上はそうおっしゃいましたね。それでも母上は、手術は嫌だと仰ってましたっけ」
「ああ」
「本当に、頑固な方ですね」
「ああ、本当に。困ったものだ。だが、可愛い人だ」
「何も自慢は出来ないけれど、他の方たちより沢山の父上の子を生んだ事だけは誇らしく思っている、そうおっしゃってましたね。一番最後に父上に何をおっしゃったのですか？　私には聞き取れなかったのですが」
「最後の言葉か……『どうか私を忘れないで下さい』だったよ」
「忘れないですよね、父上」
「ああ。忘れないさ」

トリアに戻っても、どこか抜け殻になった様な奇妙な脱力感が有った。

（親しい人との別れは、いつだって特別で、つらい。何だか泣きたい気分だ）
（泣いていいのよ。声を出して泣いたって、良いと思うわ）
エミナの言葉は、僕を解放した。

エミナはどうやら新大陸北側の西海岸、地球で言うとカリフォルニア辺りの土地を調査するためにオヌンダガオノ港から無事に上陸したようだった。
（前世の母、マーシャ・レスコの思い描いていた開発される以前のカリフォルニアってこんな感じだったのだろうなと、しみじみ感じ

入っている所）

地元の人たちは、山地の松やナラなどの落葉樹が生える山地と乾燥低木林、そして砂漠と言う多彩な状況の中から自分たちに有用な植物を丁寧に選り分け、賢く使っているらしい。

（ドーッとグレープフルーツの生い茂る巨大な果樹園、なんていう具合にするのが正しいとは思わないけれど、美味しいかんきつ類がチョッとくらい有っても良いかもね。野生種は香りや薬効成分は強そうなんだけど、果肉はあまり無いのよ）

地球のグレープフルーツはカリブの島で発見された物が品種改良されたのだそうだ。

（ルンドはルンドなりの品種改良で、また良いものが育成できそうでしょう？）

現地の人々と話し合って、農業試験場を作るらしい。新大陸の自然に適した有用な植物を積極的に育てようと言う事だろう。ワサハク本人はすでに故人だが、子や孫たちの中で帝国で学んだものが五人ほど、事業に賛同してくれたらしい。

（ケツァールがずっと一緒にいてくれたから、皆すぐに信用してくれて、交渉もスムーズだった）そうな。

灌漑設備さえ整えば、非常に作物を作りやすい場所が広がっているそうなので、周囲の守備隊や港の駐屯部隊にもエミナのプロジェクトに協力するように、僕自身が直接に無線を使った電報で指示した。

ちなみに、新大陸の電話はモナのような電波が苦手な存在の事も考えて、導入されていない。通信と言っても各港の無線程度だ。

（この土地で何か、とても重要な出会いが有る様な気がするの）

エミナのその言葉が、一体どんな事を指しているのか、この時の僕には、全く見当がつかなかった。

僕と彼女のこれから・5（後書き）

王位を継いだのはセバスティアンです。すみません

僕と彼女のこれから・6

（今の貴方にそっくりだけど、全然違う人を見つけたわ）
（何、それ？　いや、誰だって言うべきかな？）
（初代の皇帝陛下よ）
（フレゼリク一世が転生していたのか？）
（精神体、と言うか、霊体、と言うか、多分そんな状態だと思うの。時空管理局に問い合わせたわ。回答が貰えるかどうかは不明だったけれど、ダメもとで）
（で、回答は貰えた？）
（ええ。本当に初代の皇帝陛下だったらしいわ。その前はカリフォルニアのアメリカ人だったんだって）
なるほど、ルンドの度量衡がヤード・ポンド法を基にしているのは、その人物の所為だろう。
（何世紀の人なの？）
（十九世紀の人ね。有色人種と異教徒に対する偏見がすごいと言うか。どうやら、ルンドで転生したのは帝国発生以前の素朴な部族社会の段階の西大陸の北部ね。地球の歴史で言うとキリスト教を受け入れる以前のヴァイキングが一番雰囲気が近いみたい）

彼、フレッド、いやフレデリック・トリアーは東部で破産し、一旗上げにやってきた両親に連れられ、ゴールドラッシュで騒然としているカリフォルニアに来たと言う。そこで砂金を取る両親の手伝いをしていたが、ある日河でおぼれたそうだ。そして気が付くとルンド北方の部族の長の息子に生まれ変わっていたらしい。

（でね、貴方の所に彼を送るわ。時空管理局によれば、貴方の金の笏と、私の胸飾りを最大サイズにして同時に力を合わせると、フレッドみたいな精神体なら『転送』出来るって。ここで耳元で人種差

別的発言を喚かれると仕事をやりにくいの。初代皇帝の霊廟で時が来るまで寝て貰う事に話をつけたから、頼むわ）

僕らは互いに掛け声をかけて、金の笏と胸飾りの出力を最大にして、彼を『転送』した。

「おやまあ！なんてイカス部屋だ」

見れば僕と同じ色の金髪、碧の瞳の少年がベッドの上に腰掛けていた。顔もそっくりだ。というか、僕の現在の肉体は彼を雛形にして作られたのかもしれない。

「初めまして、初代陛下」

僕が握手しようとしても、肉体が存在しないので、出来なかった。

「なあ、あんた、前世がジャップだったって、ホントか？」

「ホントですよ」

「プラチナブロンドの、気の強いイカス彼女も元ジャップだって？」

「ええ、そうです。そのジャップって言葉、二十世紀あたりから、非常に失礼な言葉とされるようになったので、使わない方が良いですよ」

「ああ、悪気はないんだ。そんでもって、今帝国の宰相はニガーだって？」

「ニガーは厳禁です。アフリカ系アメリカ人と言うんですよ。ルンドだとドーン系って言うんですけどね」

「何か知んないけど、めんどくさいねえ」

彼が気ままに話した中身から、これまでの状況をまとめるとざっとこんな感じらしい。

十九世紀のアメリカ合衆国カリフォルニア州のサクラメント河でおぼれた十五歳の少年フレッドは、ルンドの北の海賊の親玉の長男に転生した。クットソンと呼ばれていたが、気にいらず、前世の名

前フレデリックを名乗ったが、こちら風にフレゼリクと呼ばれるようになったものらしい。

「何でクット族長の息子クットソンでは嫌だったのですか？」

「クットは顔が変だった。おとぎ話の魔物みたいな面でさ。元のアメリカのオヤジさんはハンサムだった。俺と違ってちゃんとボストンの大学を出ててさ、何と言うか、品も有った。金儲けは下手だったけれど」

小学校も三年しか通っていないフレッドの教養の元と言えば、両親が気が向くと音読してくれる聖書と中世の騎士の物語の子供向け絵本だけだった。後はたまに出る街で、新聞を拾って読むぐらいだったらしい。新聞を拾うのは、求人広告を見るのが目的だったそうだ。

「求人広告の給料の額と住所ぐらいはどうにか読めたが、長い文章になると、からきしダメだったぜ」

どうやら読み書きは、かなり不完全と言う事のようだ。

十二歳を過ぎるころから、街で給金を貰える仕事なら犯罪以外は何でもやったと言う。農園の下働き、子守り、食堂の皿洗い、新聞の売り子、パン屋の手伝い、大工の弟子、鍛冶屋の見習いなどなど、色々だった。しかし測量技師の見習いは数学的な素養が無くて、印刷工の見習いは文字の読み書きが不十分で無理だったそうだ。手先は器用だったが飽きっぽい所が有り、大工と鍛冶屋は、根気が続かず「ものにならない」と親方に言われてしまったらしい。

「それでも、ルンドに来てから見習い程度の大工仕事でも鍛冶でも、役には立った」そうだ。

「早くカッコいい騎士を見てみたかった」一心で騎士団を作り上げ、領土を拡大し、交通の要衝を押さえて通行税を取り立て、力を延ばしたらしい。五十年も経つと、今のテオレル帝国の原型ともいうべき国家が出来上がっていたようだ。

「戦争ごっこと騎士ごっこが、本当に通用するなんて、驚きだったよ」

話を聞いた僕も、驚きだ。それでも、ともかくも転生して百五十年はルンドに居て、最後の方は皇帝として君臨したが「自分だけ年を取らないのに嫌気がさして、ともかくもサクラメント河のほとりに帰りたくなった」フレッドは置手紙を残して単身小型の帆船に乗り込み、アメリカ大陸を探し出そうとしたようだ。

「おかしな渦に巻き込まれて、もうダメだと思ったら、すげえデッカイ港に出た。魂消たぜ」

どうやら二十一世紀のサンフランシスコの港に入り込んでいたらしい。こっそり上陸して様子を見ようとしていた所を、パトロールの警官に職務質問をかけられ、不審人物扱いで掴まってしまったようだ。

「わけのわかんない乗り物に乗せられて、手錠をかけられ」警察署に連行されたらしいが、建物に入る直前に振り切って逃げようとした所を、発砲され、身をかわした瞬間に「デカい変な乗り物というか車にぶつかって、死んじまったらしい」

「で、気が付くと、サクラメント河に良く似た河のほとりに立っていた」のだそうだ。そして、エミナと話をした、そういう事のようだ。

「エミナって子が言うには、あんたは奴隷を禁止したって？」

「そうですよ」
「で、あんたも、あのエミナって子も、インディアンは野放しにして、黒ん坊は奴隷にしない、それが正しいって言うんだな？　ああ、あんたもあの子も学が有るのは分かる。それで、このルンドは上手く行くって、本当か？」
「ええ。本当です」
「何でも時空管理局って所のおねーちゃんが言うには、あんたらの子供かなんかに生まれ変わって、一からやり直せってんだけどさ。そうすれば、俺もまだどっかで使い物になるって言うし、ずっと幽霊も嫌だしさ」
「なるほど」
「あんまり驚かねえの？」
「魂の波動の調和と言うか、親和性と言うか、そうしたものが貴方と僕の間には有るようです。貴方は人種差別もひどいし、学識も無いし、特定の宗教の影響を受け過ぎていますが、カリスマ性というか、僕なんかには無いスケールの大きい所が感じられます。それに各地に伝えられる貴方の事績を細かく調べた事が有るのですが、自分の誤りは素直に認めておられるところは、素晴らしいと思いますよ」
　何というか、可愛げのある幽霊だ。
「けっ、仮にも俺の子孫の立場なのに、態度デカいな。でもま、いいや。親父になってくれるか？」
「時空管理局がそう言うなら、必要な処置なんでしょうし、エミナが承知なら、僕は構いませんよ」
「じゃあ、あのおねえちゃん、というか将来の母上の仰せ通り、自分の霊廟で寝て待つな」
「霊廟の場所、わかります？　多分出来てから、一度も動かしてはいませんが」
「大丈夫だろうよ」
「そうそう、質問です」

「何だい？」
「トリアって都の名前は、貴方のアメリカでの苗字からとったんですね？」
「そうさ。おう、霊廟ってあれか。空の棺の置き場にしちゃあ、なかなか豪勢だ。前には花やら色々植えてあって、良い感じじゃねえか。じゃあ、後はよろしく」

至って気軽な様子でフレッドは小さな光の玉になると、初代皇帝の霊廟に入ってしまったようだった。

その年いっぱいは、僕は一応ガブリエルの喪に服した格好だったし、エミナは新大陸の西海岸の農地に関する仕事で忙しかった。夏はガブリエルが居なくても、七日間はテージョの子や孫たちと過ごした。無論皆で墓参りもした。

大君主国側には、喪が明けたら必ず結婚式を挙げると伝えて、待ってもらっている。

僕は久しぶりにアネッテとアンニカの墓の側で、時空管理局との定期交信を行った。

「フレデリック・トリアーの転生した存在の養育に関して、当局からの注意事項その他、何か無いの？」
「そうですね。彼は世界の調整者、育成者としての適性は有るんですが、その価値観に問題が有るので、特に人種差別は本当にいけないと彼が理解できるように育てていただきたいです。彼は十代の内に、どこかに送りますので」
「死ぬわけ？」
「いや、恐らくは肉体も精神もそのままの状態で、適応可能な世界に送ることになるでしょう」
「じゃあ、彼を送り出す時は、励ましの言葉の一つも贈れる様にし

てほしい」
「了解しました。そのように取り計らいます」
「彼以外の子供をエミナが産むと、通常の寿命で亡くなるだけ？何か特別な状況は発生しないのかな？」
「このルンドでの肉体の寿命は、平均の範囲に収まるでしょうが、貴方達のケースは、時空管理局にとっても初めての経験でして、特に精神体とか霊体と呼ぶものに関しては予想がつきません。精神体に特別な力が有る可能性は否定しきれません」
「例えば……どっかに勝手に転生しちゃったり、するかもしれない？」
「無いとは言い切れませんね。実際、フレデリック・トリアーの転生は偶発的な事故でした。ですが転生先で思いもかけない大きな実績を上げたので、その後、密かに保護してきたのですが、勝手に生まれ故郷に帰還しようとすると言う事を当時は予測できず、彼はかなり長い期間時空をさまよっていたのです」
「僕の転生は地球側のミスって、以前聞いたけど」
「はい。貴方は美保さんと円満な結婚生活を営み、子を男女二人づつ儲け、天寿を全うするはずでした。もっと良くも悪くも神経が太いタイプの人物、貴方にぶつかったトラックの運転手ですが、その彼が本来はルンドに来るはずでした。独身で、結婚の予定も無い人物を選んだのです。電柱と信号機を破壊する自損事故で、頭部を負傷し病院で死亡するはずでした」

僕の意欲というか、モチベーションを維持させ、僕の能力を高めるために百年の歳月をフル活用させようとは方針が決まったものの具体的にどう対処するかは、全くの白紙だったらしい。
「貴方の良識・良心が期待以上に強固なものであったので、こちらの方針も、貴方をサポートすると言う方に変更されました。時空管理局にとって未知の存在である土着の霊的存在との相性の良さは、日本と言う国家の近代化されたアミニズムとでもいうべき独自性の

おかげではないかと、今の所我々は判断しています」

それで、フレッド君のキリスト教圏の人物にありがちな偏見、他宗教に対する非寛容を修正する役目を僕らが負うらしい。

「他にエミナとの間に子供を儲けた場合、予想外の霊的な存在が転生する可能性も考えるべきだろうか」

「その可能性は、今御指摘を頂くまで当方では全く考慮していませんでした。……これは個人的な意見ですが、可能性は高そうです」

「悪霊って事は無いよなあ……」

「悪霊とされた者が、外界との融和を求めて転生する可能性も有りますね」

「何が生まれてきても、子供として大切に扱い、愛情を傾ければ、悪い結果にはならないだろうって所か？」

「そうだと、思います。これも個人的な考えですが」

「なあ、僕らはいつまでもルンドの統治に関わった方が良いのだろうか？　それとも、時空管理局に引き取って貰ったりするのは可能だろうか？」

「良くわかりませんが、貴方がた二十一世紀の大半の地球人にとって、地球星系の時空管理局の局員の一般的な生活は愛情に乏しく、潤いが無いと感じられるかもしれません。こちらの人間は生殖行動と愛情の有無が直結する形態を捨てて久しいです。生殖と愛情は無関係で、人工授精と人工子宮の使用が圧倒的に多数派ですから」

「そんなやり方で愛情について教える事が可能だろうか？　人類としての本能は満たされるのかな？」

「それは……専門家の間でもまだ結論が出ていないデリケートな問題です」

「人工授精・人工子宮で生まれた人間と、自然な結びつきで生まれた人間の間に差別とか対立は？」

「つい百年ほど前まで、その差別と対立は深刻でした。テロと殺戮

行為が収まるまで二百年近い年月を要しました。その和解がもたらしたのは、立場の異なる一組の若い男女の間に強い恋愛感情が生まれた事でした。それ以来、自然交配が見直されてきています」

そうした未来の事情が有って、僕らの「自然交配」も推奨されるらしい。

「差別って、古くて新しい問題だって、良く分かったよ」

「おっしゃる通りです。子供たちの養育に関しては、常に貴方自身がおっしゃったように大切に扱い愛情を傾けてやって下さい。貴方たちの場合、十中八九、霊的に非凡な存在が転生する可能性が高いので、猶更細やかに配慮して頂きたいです。では、時間となりました。来年また、お会いしましょう。クリア・エーテル」

それにしても……個人的な意見が聞けるとは……僕も一人前になってきたのかな？

新大陸での調査と仕事を終えたエミナとゆっくり愛し合う事が出来たのは、ガブリエルの丸一年の喪が明けてからの事だった。

「ねえ『自然交配』はいつにする？」

「いつでもいいようなものだけど、アルラトの両親の事を考えると、式が終わってからにして欲しいかな」

「分かった。結婚式の十日前まで、避妊薬は真面目に飲むよ」

「どうぞ、よろしく」

「いえいえ、当然の事ですから」

そう言った後で、二人ほぼ同時に吹き出した。それからごく軽い触れ合うようなキスが始まり、次第に二人は濃密な行為に没入して行くのだった。

最終話　不確実な、どこまでも不確実な

「ふうむ。白玉団子はグスタフのが一番美味いな」
白玉団子をしっかり冷やして、きな粉をたっぷりかけた物はヤタガラスの大好物だ。
「一番て、二番と三番はどこの誰のなんだ？」
「僅差で二番はエミナじゃな。三番はトシエ・マサエの所じゃな。黄金宮の若い連中は、まだまだじゃ」
団子の次は、厚焼きの醤油味の煎餅をボリボリかじる。
「これはトシエ・マサエのところと同じ店の物かの」
「多分そうだよ。ユリエの腹違いの弟の孫がはじめた店だ」
「ふーむ。ユリエが亡くなって、もうずいぶん経つんじゃなあ……曾孫のトシエとマサエが婆になってしまったのじゃから。人の命は短いのう……のう、グスタフ、何をモタモタやっとるのか我にはよう分からんのだが、そろそろエミナを正式に嫁にすれば良かろうが」
「んー、ガブリエルの喪が明けたばかりだし、トシエ・マサエと子供たち、孫たちの感情を思うと、もう少し引き延ばすべきなのかどうか迷うんだ」
「レイリアには義理は立ったと思うがのう。最初のいきさつも有るじゃろう？」
「ガブリエルを皇后にしなかったいきさつか……王位を継いだセバスティアンは理解しているが、母親に一番べったりだったアルフォンソ辺りは……認めたくないって感じの反応だったからなあ」
「トシエ・マサエは遠慮する必要は無いように思うがのう。考えすぎではないか？　その証拠にこれっぽちも嫌な波動を感じないぞ」
その後ヤタガラスはどうやら、トシエ・マサエにエミナと僕の事を話したらしい。午後のおやつの時間に二人の出してくれる煎餅や饅頭をパクつきながら、バラバラと思いつくまま要らん事までしゃ

べってしまったようだ。いや、結果を見たら要らん事では無かったのかも知れないが。

ともかくもヤタガラスのおしゃべりがきっかけになって、トシエとマサエの方からエミナに接触して来たそうだ。エミナにその話を聞かされた時は、予想外の展開で驚いた。

「私たちがボケたり寝込んだりしない内に、どうか皇后陛下となられて、皇帝陛下と御二人並ばれた喜ばしい御様子をお示し下さい」

「陛下がお生まれになった時から定まっていた本来の皇后陛下と、御無事に御一緒になられたためでたい御様子を、どうかお示し下さい。老い先短い私たちにとって、冥土への良い土産となります」

エミナはアルバイト先、つまりあのイップさんたちと僕が共同経営しているレストランだが、ランチタイムに客としてやって来た二人に、そんな風に話を切り出されたそうだ。

エミナは田中美保だった頃、正確に言えばその後結婚して主婦で母親であった……浜川美保としての時期に修得した調理のスキルを持っているため、ヤタガラスが食べたがるものはほとんど全部作ってやれる。

「トシエとマサエは美味い饅頭や煎餅は出してくれるんじゃが、ミズホ風の美味い飯までは無理なんじゃ。エミナが作る物は牡丹餅でも煮物でも汁物でも魚の煮つけでも握り飯でも、実に良い味わいじゃ。あとはアイシン風らしいがギョウザとかシュウマイとかチャーハンとかも美味い」

そう言やあカラスって、油っぽい残飯が好きだったな……

「グスタフ、お前何気に失礼な事を思い浮かべたな」

「ハハハ、だって、並みのカラスも一応眷族なんだろう?」

「そりゃあ、そうだが、異世界のカラスまでは知らんぞ」

ヤタガラスとしてはトシエ・マサエ以外に、確実に自分の好きな食べ物や菓子でもてなしてくれそうな人間が身近に住み着いて欲しい訳なのだ。

「食いたいものを食うために、結婚話を進めようとしたんだな？」

「いや、それは……」

「違わないだろう？」

「じゃが、我もグスタフもエミナもその方が良いし、トシエ・マサエも祝福しておる。不都合はなかろう」

ヤタガラスの「不都合はなかろう」に続き、ケツァールやモナも「そろそろ、良いのでは」と言うし、アルラトのエミナの両親は待ちわびている。

そんなこんなで、色々有ったような無いような微妙な感じがしたが、いざ結婚に向けて事が動き出すと、全てが拍子抜けするほどすんなりまとまった。

結局トシエとマサエは退職した。それは固い決意で……随分前からそうするつもりでいたらしい。

「陛下、どうかいつまでもエミナ様と仲睦まじく、お幸せにお過ごしくださいね」

「年末年始と、お誕生日ぐらいは黄金宮に伺わせてくださいね」

そう言う二人は明るい穏やかな雰囲気のままで、本気で僕達の結婚を喜んでいるみたいだった。

ヤタガラスは毎日のようにトシエ・マサエとお茶を飲む予定らし

いので、僕もエミナも何か美味い物が手に入ったら、二人が住むユキヒコ・ヤスヒコの邸に届けるように心がけている。

こうしてルンドに転生して百二十五年目、僕とエミナは結婚した。以前の二人の皇后との結婚式もそれなりに大掛かりでは有ったが、今度の結婚の場合は各新聞が号外やら特別号やらを出し、ルンド中から祝電やメッセージ、プレゼントが黄金宮に届けられ、特別なラジオ番組も一週間にわたって放送された。何というか大盛況というか、大騒ぎと言うか、にぎやかだった。

太田さんの力作のテープレコーダーで、ラジオ番組は録音された。デカいオープンリールだが、ここまでこれば小型化までそう年月はかからないかもしれない。

更には僕らの結婚を境に、いっぺんに写真がルンド中に普及する、などと言う効果も有った。後何年かしたら、僕らはパパラッチに追い掛け回されるようになるんだろうか？　そう考えると気が重いが……ともかくもバッチリカメラ目線の僕らは「素敵な両陛下」と言う事にはなったようだ。

実際、ウェディングドレス姿のエミナはうっとりするほど綺麗だった。おかげでエミナが着用したタイプのドレスが、ルンドにおける世界標準の婚礼衣装になったほどだ。

本当はハネムーンに行きたい所ではあったが、それは夏の休暇の楽しみと言う事にした。客船に乗って、全ての大陸を回り、それぞれの土地のゆかりの深い人たちに挨拶もしておこうと思ったのだ。エミナは未知の土地を訪ねる事を楽しみにしているらしい。地図を広げてあれこれプランを練っているようだ。

ともかくも結婚に伴う初日の儀式を終えて、僕らがベッドに入ったのは深夜になってからだった。まだ七日ほど宴会やらパーティーやら茶会やら、色々有る。そのどれにも僕らはにこやかに参加しな

くてはいけない。そういう訳で、初夜なのにセーブしなくてはいけないなんて……僕はちょっぴり憂鬱だった。

「まだパーティーがどっさりだけど、頑張りましょうね」

エミナにそんな風に言われて、ちょっと気分が上向いた。気兼ねなしに、これからは夫婦として堂々としていられるのは、悪くないかと思い返す。

「初夜の儀、なんてやめさせて良かった」

「あー、だって、私達、とっくの昔にその辺は終わってるじゃない」

「昔ならギャイギャイ女官の婆さんたちに言われただろうな。時代が多少は移り変わって、良かったよ」

「アルラトはまだ有るのよ。本人同士が納得なら、いらないお世話よね」

「人工受精に人工子宮なんて時代になると、結婚する意味も愛情も、色々変質しそうだね」

「前世の私は人工授精で生まれたの、知ってるでしょ？　母マーシャの割り切り方って、ちょっとついていけない気がする。遠い未来の人はもっとドライなのかしら」

「そうだなあ」

「生殖活動って言うと、なんだか味もそっけもない感じ。実験動物みたいよねえ」

「僕らはやっぱり基本的には実験動物扱いだろうと思うけど、前回の定期交信はちょっと様子が違った」

「閉じ込めて餌やっている訳じゃなさそうだけど、家畜の種付けに近いものは有るのかしらね」

「人工授精や人工子宮の問題点を探る実験には使われているって気が、僕にはする」

「あー、多分それはそうよ。人間の考え付く取り合わせで人工的に

作り出した次世代に未来を委ねていたんじゃあ、世代が進むごとに第一世代の見落としや切り捨てで生じた歪みやら欠乏やらが深刻になって行きそうだもの」

「全人類の劣化コピー化か。悲惨な未来予想だなあ。何か笑えない。今のこの奇妙な肉体は誰かさんの劣化コピーなのか何なのか知らんが、精神というか霊というか、そのあたりは君も僕もオリジナルって事かな？」

「でも、井沢亮太も田中美保もこの肉体に大いに影響されて、相当変化したわよね」

「容貌とか知能とかかなり人工的に弄繰り回されたけれど、それでもまあ、折り合いつけてどうにかやってこられたとは思っているよ。図太くも強くもなるよな」

僕は久しぶりに井沢亮太だったころの家の辺りを探ってみた。力が強くなったせいで、金の笏に触れて軽く念じればそんな事が出来るのだ。隣に寝転んでいるエミナは胸飾りを変形させた指輪の力だけで前世の母マーシャ・レスコと会話が出来たようだ。

「そうなの。チョッともたついたけれど、先は長いから私達。心配しないで」

マーシャが言った言葉までは、僕には聞こえてこない。

僕自身の住んでいた家は取り壊されていて、空き地になっており、どこかの不動産屋の看板が立っていた。墓の方を見てみると既に老人となった弟の孫達が墓参りをしていたようだったが、曾祖父母である両親はともかく、早死にした大伯父である井沢亮太は、もはや名前すらも誰の意識にものぼらない状態であった。

「井沢亮太の故郷を見ていたの？」

「ああ。誰ももう、覚えていないみたいだ。家も無くなっていた」

「でも、ルンドの人は皆、貴方を知っているわ」
「僕って、いつの間にかグスタフになり切っていたんだなあ」
「そりゃあ、年季が違うでしょう」
「ねえ、君は亮太とグスタフ、どっちの僕が好き？」
「田中美保は井沢亮太が大好きで、浜川さんと結婚しても一日も忘れた事が無かったわ。忘れられなかったのね。でも、今の私は……今の貴方が好き。それで良いんじゃない？」
「そうか。それもそうだな」

過ぎ去った過去を思って感傷に耽るほど、僕らはヒマでも無いのだった。

「ルンドで皇帝なんてものの必要性が無くなるまで、働いた方が良いんだろうなあ」
「そうかも知れないわね……貴方が皇帝を辞めるときは、私も一緒に連れて行ってよ」
「ああ、無論そのつもりだ」
「多少の事が有っても、追いかけていくけどね」
「へええ、君が追いかけてくれるの？」
「ええ。貴方に何か有ったら、無論そうするわ」
「僕も君に何か有ったら、無論追いかける」
「信じてるわ」
「信じてくれて、うれしいよ。さて、大事な共同作業に移ろうか」
「ああ、約束が有るものね」
「そうだよ。開祖陛下だからぞんざいには出来ないだろ？」
「私、今朝がた、変わった夢を見たの」
「へ？　どんな？」
「開祖陛下の次は、私もお願いしますって……神聖教会の聖職者の人みたいだったんだけど」
「名乗った？」

「ううん。でも変な事を言ったの。皆を眺めているのも、そろそろ飽きましたし、まだまだ働けるはずですから、陛下によろしくお伝え下さい、ですって」
「はああ、それなら……エガス・モタさんじゃないかな」
「へええ、聖人に列せられたって人ね。ねえ、私達、本来なら四人の子持ちだったみたいじゃない？　ルンドに転生しても変わらないのかしら？」
「さあ、なあ。モタさん、僕らの息子にでも生まれ変わって、何か思い切り働く気なんだろうかな？」

と言う事は……

「早い所、子供を二人作らなくちゃ」
「そんなうまい具合に行くかしらね？」
「行くんじゃないか？　ねえ」
「なあに？」
「明日差し支えない程度に、どう？」
「そうよねえ。せっかくの初夜だもの、良いんじゃない？」

初夜の成果か、それ以降の所為か不明だったが、すぐに子どもが出来た。おかげでハネムーンの予定もかなり短縮されてしまったが。色々あったものの、まずは順調にエミナは男の子を生んだ。かつての僕そっくり、いや、開祖みたいな元気な子だ。

「お帰り、ミスタートリアー。フレゼリク・グスタフソンと言う名前は、どうかな？」

僕が生まれたての『彼』にそう語りかけると、まだよく動かない手で親指を立てた。
（いいぜ、イカス名前で気に入った）

それだけを僕に伝えると、新生児らしく、すぐに眠ってしまったが……

その後、相変わらず僕らの肉体は全く老化していない。

一度、僕が将来的には皇帝なんて廃止して完全な共和制に移行するプランを提案したが、国会で全会一致で否決された所を見ると、まだ当分働く必要が有るらしい。

「僕はどっかで呑気に、夫婦二人きりで暮らしたいんだけどなあ」

僕がぼやくと、エミナは甘ったれた息子をなだめる母親みたいに抱きしめてくれる。

「まだまだ無理みたいね。人口の増加と飢餓対策について、国家の枠を超えて考える立場になっちゃったみたいだもの」

やる事が無いより、人にあてにされて働く方が幸せだとは思うが……いつまでヤル気が持つのかは、誰にもわからない。ともかくも、僕とエミナはやれる事をやって、頑張る。今のところはそれだけだ。

（完）

最終話　不確実な、どこまでも不確実な（後書き）

これまで、お読みいただきましてありがとうございます。
本編は一応終了です。
九月に番外編ぐらい、書けたら、などと思っています。

【更に先の話】白い石・1

僕とエミナとケツァールは、チャスカの墓の手入れをしていた。と言うより、チャスカの産んだ娘のキリャが作った花壇に新しい植物を追加したのだ。墓の周りを年中緑色の花で取り囲むように生前のキリャが工夫していたのだが、従来のままでは真夏と真冬がやはりちょっとさびしかったからだ。

「いい匂いのする綺麗な碧のハーブとか、緑色の綺麗な実が生るかんきつ類とか、植えてみたけどどうかしら？　ケツァールが、生前のチャスカさんの雰囲気に似合ってるって言うんだけど」

「なるほどね。確かにいい感じだと思うよ」

この黄金宮には庭師もいるし、ちゃんと手入れはしている。だが、別の大陸から持ち込んだなじみのない植物だと、専門家でもあるエミナに任せた方が間違いなかったりするのだ。

「これは、こちらに植えれば良いですか？」

「そうね。握りこぶし二つ分程度は、互いに離して植えて頂戴よ」

「はい。あのう、この苗を一本か二本、トシエさん、マサエさんの所に持って行ってあげて良いですか？」

「ああ、良いわよ。今から出かける？　残りは私一人でやれるから。ついでにヤタガラスたちとお茶でも楽しんでらっしゃいよ。そうそう、行く前に大膳職の方に声をかけて、お土産用のクッキーを下さいって申し出て、貰って行きなさいよ」

「あちらのお茶菓子用ですか？」

「そうそう。トシエさんとマサエさんの大好物だから」

エミナとケツァールの会話は、聞いているだけでなんだか和む。

ケツァールはヤタガラスと同様に見た目の年齢を七歳児程度に、ずっと保っている。言葉使いはおっとりして、姿形は生前のチャスカに似ている。

トシエとマサエはラウル・ヤイレの孫だから、つまりはユリエの曾孫で、性格はかなり違うが容姿はユリエにそっくりだ。生前のユリエはチャスカと僕の関係が出来た頃から、僕を避けるようにしてほとんどミズホに行ったきりの状態になり、その後御褥すべり宣言をしたのだった。

「セルマ様が御自分は若くないから気が引けるなどとおっしゃいます。私はそのセルマ様より十歳年上なのですから、こうして臥所を御一緒させていただくのもそろそろ切り上げ時かも知れません」

「御不自由をおかけしないためにも、若い女子が必要だと思いますが、グスタフ様の御心に適いそうな者が居らず苦慮しておりました。その、セルマ様やヤタガラス様とも相談したのですが、チャスカをそのうち閨にお召しになったらいかがでしょう？」

そんなユリエの言葉を思い出した。

その言葉を聞いた時の、僕自身の悲しみと怒りに似た感情も思い出した。だが、僕なんかより、あの時のユリエはどれほど辛かったのだろうか？　そのつらさを僕は理解できていただろうか？　正直な話、ユリエと別れると言う恐怖にも似た感情に引きずられないようにするのが精一杯で、ユリエの痛みが当時の僕に理解できていたとは、到底思えない。そう言えば、ほぼ同じころにセルマも女子修道院に引きこもるようになってしまったのだが、やっぱり真っ先に浮かぶのは臥所でのユリエの顔であり声なのだ。

セルマがいつも自分は二番手だと言って、僻んでいたのも無理はない。僕が悪いのだ。だがセルマは僕の詫びも聞いてはくれないまま、この世を去った。

ユリエの、そしてセルマの感触と香りを生々しく思い出してしま

って、僕はひどくきまり悪く感じた。

それにしたって、チャスカの墓の前でそんな事を思うなんて……何とも皮肉だ。

チャスカは何時だって過剰な程、僕に献身的で、究極の癒し系のキャラクターではあったが、こんな風に僕が別の女の閨での姿形をありありと思い返しているなんて、嫌なんじゃなかろうか？　確かにチャスカが誰かに嫉妬すると言う情景を思い浮かべるのは、非常に難しいのだが……

「チャスカさんは、何だって受け入れてくれるわよ。何というか、清らかな祈りの波動で精神が出来上がっていたような人だったんじゃないかしら？　だからケツァールが人型を取るときに、チャスカさんに似たのだと私は理解しているわよ」

そう、そうなのだ。このエミナには意識的にブロックでもしない限り、僕が何を思い、何をきまり悪く感じているか全部わかってしまうのだ。それでも僕を受け入れ、穏やかな気配を保ったままでいるのは、やはり懐の深さだろうか？　転生回数の差だろうか？

「そうか。そうなんだろうな。あのさ、何というかここ数日、何かが頭の奥の方に引っ掛かっているような感覚が消えないんだ」

「チャスカさんの力で、すっきりするかもよ」

エミナに以前説明された事によると、生前ケツァールの加護を受け霊的にも近い存在であったチャスカと、転生するにあたって母親のアティアを通じて、ケツァールの力の影響を受けたエミナは「霊的な因縁が有る」らしい。

「考えてみれば、頭の中身を整理したい時、なぜかチャスカの墓に

行くと妙案が浮かぶって具合だったんだが、今回は特に重大な懸案事項は抱えていないと思うんだ」
「でも、ドーン大陸の部族間抗争とか、神聖教会の一部の会派とミッケリをはじめとした諸国の連中が結託して新大陸で不穏な動きを見せているとか、大君主国の近代化と宗教問題とか、火種は何時も存在するわ」
「それはそうだけど、早急にどうこうという状況ではないと思うんだけどね。僕の認識が甘いのかな？」
「ケツァールは、何か感じているんじゃないかしら？」
「なるほどね」

エミナは、ケツァールに改めて尋ねる。

「ねえ、何か……近く問題の起きそうな予感が、有るの？」

ケツァールは一度目をつぶって、どこか遠くに意識を合わせた後、ゆっくりした口調で答えた。

「アイリュもテツココも問題は山積みらしいです。早く会いに来て欲しいって、休んでいる魂が言ってます。迎えに来て貰えれば、生まれ変わりが早まるそうです」
「エガス・モタさんか。僕も今朝夢に見た」
「ああ、そう言えば私も修道士さんに深々と礼をされる夢を見たわ」

エミナは当然ながら生前のモタさんとの面識は無い。しかも神聖教会とは縁もゆかりも無いアルラトの王宮で、僕と出会うまでの日々の大半を過ごして育ったのだ。そんなエミナに礼をするなんて修道士が生きているにせよ故人にせよ、そうそう居ないだろう。やっぱりモタさんしか、有り得ない。

モタさんは皮肉な事に、列聖されアイリュの皇帝と同じように金銀珠玉で亡骸を飾り立てられ、連日多くの人々に礼拝される存在となってしまった事で、霊的な存在として、その亡骸の置かれた場所に固定されてしまったらしい。霊的に高度な人間が死んだ場合、普通ならもっと好き勝手に移動したり、場合によっては転生先を選択したり出来るものであるらしいのに、今のモタさんの魂は、恐らく皆の祈りの力で大きく自由を制限されているのだ。かろうじてモタさんのＳＯＳを感じ取れるのが、人間では僕とエミナの二人きりなのだろう。

ケツァールはモタさんのＳＯＳは感じ取れても、転生には関与できないらしい。それにしても、神聖教会では悪魔かなんかに近い存在として扱われるはずのケツァールが、モタさんの霊的なメッセージを感じ取る事が出来るのに、弟子や修道士仲間には感じ取れないらしいのは、何とも皮肉だ。

ケツァールと、モタさんがとどまっている土地との因縁も関係しているのだろうか？

ケツァールの声までが生前のチャスカに似ているのは、霊的な関わりの所為だろう。

そのケツァールとエミナの波動はなじみが良い。二人の側にいるだけで僕の気分は和む。生前のチャスカも人をホッと和ませる雰囲気の持ち主だった。そんな事を思った瞬間、僕の頭の奥に激痛が走った。

「どうしたの？　大丈夫？」

エミナが僕の頭に触れると、痛みがすっと引いた。

「あ！」

ケツァールが指差す方を見ると、白い小さなジャガイモみたいな歪な格好の石が大小二個転がっている。一個は幼児の握りこぶし程の大きさで、乳白色を帯びた半透明で中央部分にかけて微妙な濁りが有る。もう一個はもっとずっと小さくて、真っ白で、少しひび割れている。

「あれ？　やっぱり、貴方の頭から出てきた？」
「ええ？　そうなのか？　ケツァールも見たか？」
「はい」
「僕の頭から、本当にこんなものが出たのか？」
「はい」

ケツァールはコクコクという感じに首を振って、肯定した。ケツァールが嘘を言うはずもない。

「こりゃあ、一体何なのかな？」
「貴方の中に取り込み切れなかった、何かの思念？」
「何かの思念？」

僕は訳が分からなくて、エミナの顔をまじまじと見てしまう。エミナはちょっと難しい顔をしたが、この石の正体について、何がしかの推理なり推論なりは出来たらしい。

「何かの、って言うより、誰かのでしょうね。穢れではないけれど、貴方と……少なくとも現在の貴方と一体化しにくい思念だと、思うわ。だって、相当痛かったみたいなのに、出血も傷も無いから。通常の物体とはちょっと性質が違う物よね。でも……握っても誰かの波動は感じられないの。私に読み取られるのを拒んで……バリアが張られているのかも知れないけれど」

エミナは地面から拾い上げて二個の石を掌に乗せていたが、それを僕に手渡した。

「うっ！」

「どうしたの？」

「誰かに、睨まれた。いや、恨みがましい目を向けられたような、そんな気配を一瞬感じた」

「悪霊かな？　ケツァール、何か禍々しい気配を感じた？」

「いえ、何も。でも、私とはあまり相性が良くない波動を、微妙に感じました」

「穢れかな？　あるいは亡くなった誰かの思念の残り？　エミナは平気みたいだけど、ケツァールは触れる事が出来るかい？」

「触れたくありません。恐らく……触れると痛いはずです」

「それって、やっぱり誰かの穢れた思念と言う事じゃないのか？」

そう僕は口にした途端、二人の女の後姿を見たような気がした。誰だ？

「貴方が誰かの影を感じるなら、たぶん、その感じは正しいのだろうと私は思うの。ケツァールが触れたがらないと言う事は……穢れてはいないまでも、清らかとも言い難い思念の固まりなんじゃない？　それ」

僕は結局その夜、謎の白い二個の石をベッドサイドに置いた。

近頃は開祖皇帝の生まれ変わりであるフレゼリク・グスタフソンの夜中の授乳も必要無くなって、エミナも楽になった。エミナは自分の母乳で息子を育てているので、定まった乳母はいない。その代りにベビーシッターと言うか、育児経験が豊富でしっかりした女性を世話係に任命した。

エミナが公務などでついて居てやれない時は、その女性の判断で良い母乳を出せる人に授乳を依頼したり、離乳食を与えたりしている。ちょっとばかり、帝国皇室も変化しつつあるのだ。

エミナは穏やかに眠っているし、僕も特段の体調不良を感じた訳では無い。だが、うまく眠りに入り込めないのだ。何か変だ。やっぱりこの石の所為か？

「どうしたの？　眠れない？」

「何か、こう、違和感が有るんだ。やるべきことが有るのに、やり忘れているような……エミナは、何で急に目が覚めた？　夢でも見たのか？」

「ええ。チョッと、このヴィジョンを見てくれる？　貴方の良く知っている人なんじゃないかと言う気がするのだけど」

僕は額をエミナの額に付けた。こうすると互いの夢や急に思い浮かんだ情景などの映像なり画像なりが、そのまま読み取れるのだ。

「こ、これは！」

まだ若いころのユリエとセルマの寝顔だ。すると……

「私のあくまでも推測だけどね、この、大きい方の石がユリエさん、小さい方の石がセルマさんの残留思念に由来するものだと思うの。二人とも生前の貴方に対する大きすぎる気持ちを、うまく処理しきれないまま苦しんで亡くなったみたいね。でも、悪霊とか穢れとかには絶対になりたくないと言う、すごく強い意志も同時に存在した。だから、この石は白いの、きっと。残留思念のかけらにも、貴方に対する想いが充ちているのね」

「だが、ケツァールは触れらたがらなかったし、僕の中から出てく

る瞬間だろうが、酷く頭が痛かった。やっぱり、悪いものなんだよな。霊障……とでも言うべきなのかな？」
「そうねえ。貴方には霊障だなんて、思われたくなかったでしょうよ、おそらく」

亡くなってずいぶん経つ人間の残留思念が、なぜ今のタイミングで、こんな形で出てくるのか？　僕にはまるで訳が分からない。

「自分は貴方との時間に限りがあったのに、私には無いって事が腹立たしい、あるいは悔しいのね」
「なら、完全な悪霊じゃないか」
「いいえ、そうじゃないの。そうであっても、貴方に迷惑をかけたくない。絶対にかけない、そう、強烈に思い定めて亡くなったのよ。ユリエさんもセルマさんも。だから、完全に浄化してあげれば良いんだと思うわ」
「なぜ、チャスカの墓の前でこの石が飛び出したのかな？」
「チャスカさんの浄化の力が大きいせいかも知れないけど、それだけではないと感じるの。チャスカさん、ケツァール、私が共有する、ある種の霊的なパワーとの融合に失敗した……そう言う事かもね」

ユリエもセルマもまだ見ぬ「不死の皇后」を羨み、恨む気持ちをどうにもできなかったのだ。それでもなお、悪霊だの穢れだのにはならないと、強く自分を戒めてもいた。そう言う事ではないかと、エミナは言う。

「ユリエさんもセルマさんも、不死の皇后と共に、霊的にも貴方を支える存在になりたかったのよ、きっと。だけど、生前のチャスカさんに抱いた穢れた気持ちを整理したら、それで精一杯で、あとはパワー切れって事なんじゃないの？　だから、この二つの白い石にパワーをチャージしてやったら、貴方の強烈な守りになりそうよ」

「どうやってパワーをチャージ出来るんだい？」
「この石を持って、パワーポイントで　祈りましょう」
「一体、それは、どこにあるのかな？」
「きっと、ケツァールが知っているわ。だからね、心配しないで。おやすみなさい」

エミナに抱きしめられたとたん、ごく自然に僕は穏やかな眠りに入ったようだった。

【更に先の話】白い石・1（後書き）

誤字脱字、気付いた範囲で直しました。すみません

白い石・2

「昼と夜が同じ長さの日に、ヤナオルコのてっぺんのインティプンクに行って白い石に朝一番の光を当てればいいんです」

ケツァールはのんびりした口調で答えたが、実行するとなるとなかなかに大変だ。

ヤナオルコ、直訳すると黒い山って言う事になるだろうが、大地の女神パチャママの聖地とされるアイリュ領内の霊峰だ。正確な測量結果はまだ出ていないが、頂上は確実に五千メートルを軽く越える。

インティプンクと言うのは太陽の門を意味する。

ヤナオルコの頂上の一角に巨大な石柱が二本立っていて、そこは大地の女神が、夫である太陽の神インティと夫婦喧嘩を止めて仲直りをした場所なんだそうだ。パチャママの夫は別の神だとも聞くが、ヤナオルコ周辺ではインティ説が有力らしい。ともかくもその一対の石柱は、何時のころからか太陽の神の力を示す物とされるようになった。妻や夫とのイザコザの解決なり和解なり、あるいは亡くなった配偶者の来世での幸せを願う者は、石を一人当たり一個づつ二本の石柱の間に供えると、その願いがかなうそうな。

特に亡くなった妻の魂の良き転生を願い、過去のわだかまりを浄化するには、インティプンクに白い石を供え、春分か秋分の日の夜明けの太陽の光を当てて祈ると良いんだそうな。生きている妻との和解を願う場合は夏至の日の朝日が、　まだ見ぬ将来の妻との良き縁を願うなら冬至の朝日が良いそうだ。

「夏がもうすぐ終わりますから、急いだ方が良いですね」

急いだ方が良いと言うくせに、ケツァールの話し方はどこまでものんびりと長閑だ。

地球で言うとアンデスの峰のどれかに相当するんだろう。

ペルーのワスカランが六千七百メートル以上だが、それに近い状態ならば氷山を越えて絶壁を上る事になるし、黒い山だとするとエクアドルのチンボラソの様に安山岩が主体の火山と言う事も有り得る。アイリュ領内の最高峰らしいから、生易しい山ではないはずだ。それこそ酸素ボンベが必要ではなかろうか？　でも、地元の連中は、ボンベ無しで聖地インティプンクまでたどり付くのだ。高山病なんて何のその、って事か。

とにもかくにも、急がないと秋分の日に目的地にたどり着けない。まずは、可能な限り事前に現地の情報を集める必要が有りそうだ。

「誰か代理を立てる事は出来るかしら？」

エミナも僕と同じように考えたのだろう。

「んー、そう言う例は聞いた事が有りません。アイリュの皇帝だって、自分の足でヤナオルコの聖地まで登って祈ったのですから。パチャママの恵みは豊かですし、怒りは強烈ですから」

「パチャママって、ケツァールは見た事が有るの？」

「見ると言うか、感じるんです」

ふーん、感じるのか。ケツァールの表現は一種独特な部分が有って、人間の感覚からするとチョッとわかりにくかったりするが……絵空事ではなく、存在はする、そう言いたいみたいだ。

「恵みはともかく、怒りが強烈って困るよな」
「ともかくも白い石が出たのです。行かなければなりません」

ケツァールにしては珍しい、断固たる口調だ。
どうやら、代理人はＮＧらしい。古のアイリュの皇帝に倣って、自分の足で聖地に行くしか無さそうだ。

時間に限りは有りそうだが、先ずはこちらで出来る限りの情報は集めさせた。
エミナも言うようにアイリュもテツココも、色々な問題が吹きだしつつ有るようだ。

帝国の直轄領扱いの新大陸西海岸のグスタフ港と東海岸のフレゼリク港は大いに繁盛しているが、その周辺はそれぞれの港に仕事を求めに来た各地の人々が無秩序に住み付き、それぞれ巨大なスラムが形成されつつある。それぞれのスラムは帝国の領土ではないから、帝国自らが管理に乗り出した事は一度も無いが、それでもモタさんが生きていたころは修道士会が医療や教育方面の活動を活発に行っていて、さほど住民の暮らしも荒んではいなかったらしい。
それがここ数年で、ミッケリの犯罪的な組織が勢力を伸ばして来ており、様々な犯罪の温床となりつつあるのだと言う。そうした組織は神聖教会や貴族や地方領主にも抜かりなく献金をしているようだ。

「麻薬取引と売春が主要な活動か？」

軍人や外交官、商人たちの報告や記録を、集められるだけ集めて目を通したが、なかなか厄介だ。

「モタさんが、焦るわけよねえ。それにしても神聖教会はどうなっちゃったの？　上層部に犯罪組織の資金が回って、風向きが変わったって事？」

「上層部の収賄は確かにあるようだが、一番の原因はモタさんの後継者の弟子が、路線の違いで二大派閥に割れちゃった事のようなんだ。片方の派閥は活動の舞台をドーン大陸の方に移しちゃったんだな」

「あらら……ドーン大陸の医療活動が近頃華々しいとは思っていたけれど、アイリュとテツココは事態が悪化していたのね」

「死んで聖人になったって、こんな状況じゃあモタさんの魂も安らげないよな。生まれ変わって、この状況をどうにかしたいって思って、当然のような気もする」

アイリュもテツココも近代化ははかばかしくない。皇帝や大王の宮殿が近代化しただけと言っても良い様な状態で、政治体制も旧態依然としている。それだけならまだ良い。

特にアイリュの方だが、更に悪い事に、政治の中枢まで外国の勢力に振り回されているらしい。

アイリュの皇帝も当然ながら代替わりして、今はロカとテツココのユカテコ王女の孫のアマルの代になっている。どうもこの若い皇帝アマルに色々と問題が有るようだ。アマルが悪いと言うより、ミッケリなどの外国の商人と結託して利権を囲い込もうと言う大貴族の幾つかの派閥が内輪もめを起こしていて、アイリュの国民が疲弊しているなどと言う話も聞こえてくる。

「今も昔もアイリュの都ハトゥンカカは、魑魅魍魎の巣って所か」

ちなみにチャスカの故郷であるワルパは、アイリュに組み込まれはしたが、我がテオレル帝国との縁とグスタフ港やテツココ領に隣

接する地の利をフル活用して徐々に自治権を勝ち得て、ほぼ独立状態となり繁栄しているという。最近は疲弊するアイリュの他の地域から、ワルパへ逃亡する者が激増中らしい。

「ヤナオルコはワルパから入った方が早そうだな」
「ホントね、地図で見る限りでは、ワルパからまっすぐ行けそうね」
「チャスカや赤ん坊のキリャと出かけた天空の鏡と言う湖に、割合と近いんだな」

取り寄せた最新の地図で見る限り、あの軽く二階建ての家ぐらいある太い石柱がドーンと立っていた地点で、道が二つに別れるようだ。以前通った時は道は一本だったと思う。古代の道を復活させたのか、良くわからないが、そこから天空の鏡方向とは別の道を進めば、ヤナオルコの中腹に比較的容易に到達出来そうだ。

かつてならグスタフ港に到達するだけでトリアから六十日がかりだったが、今は大君主国にまで鉄道が伸び、汽船のスピードもアップしている。

「大君主国領・スールの軍港に帝国軍の最新艦を停泊させよう」

つい最近、スールまで鉄道の線路が伸びたのを、早速利用させてもらう。大君主の姫であるエミナが一緒だから、様々な便宜も図ってもらえて、トリアの駅から御用列車を仕立ててスールまで一挙に向かう事になった。このルンドでは鉄道の規格は帝国で採用している一種類しかないので、国境の検閲さえクリアできれば、線路がつながった所はどんどん進めるわけだ。

今回は大急ぎなのでエミナの両親には悪いが、都の宮殿にもよらずに一路スールへ急いだ。孫息子も今回は連れていないし、勘弁して貰った。ちなみにフレゼリク・グスタフソンはトリアで留守番だ。

赤ん坊だが何せ中身は開祖の生まれ変わりだし、余り心配はしていない。でも、エミナはあれこれ心配していた。やっぱり母親は生まれ変わりであっても『お腹を痛めた我が子』って思うのかも知れない。

「それにしても、暑いわ。焼けてしまいそう。フレゼリクは留守番で正解だったようね」

「今度スールに来る時は、絶対船にしような」

砂漠の鉄道は大変だった。幾度かヒートアップして、止まったり、レールが熱で歪んだり。ようやく船に乗った時は生き返る様な気がした程だ。でもまあ概ね順調だった、と言うべきなんだろな。スール周辺では普段は昼は列車を日陰に置いておき、夜間に貨物専用の列車を走らせるだけ、と言う運用実績らしいのも納得できた。

「私、テツココは北の端しか知らないし、アイリュは初めてだから、楽しみだわ」

「あの地域の人たちの暮らしを向上させる良い案が浮かんだら、ぜひ教えてくれ。出来れば実際に試してみたいし」

エミナは農業の研究者でもあって、既に新大陸の北部の農業に関しては実績を上げている。船に乗り込むと、エミナとの話が数少ない楽しみだ。

「まずは、アイリュの困った連中をちょっとばかり掃除する方が先かしら？」

「石が出たのも、その石を持ってケツァールがヤナオルコに登れって言うのも、モタさんの転生させろって言う呼びかけも、恐らくリンクしてるよな」

「きっとケツァールなら『パチャママの導き』とか言うのかしらね

？」
「ケツァールにとって、あの大陸全体が大切な場所なんだろう」
「良くわからないけれど、パチャママって、あの大陸の大地そのものを神格化したものなんでしょうね」
「ふーん、ケツァールと仲良しのエミナがそう言うんだから、そうなんだろうな」
「そのケツァールは、ヤタガラスと一緒に、先回りしてグスタフ港で待ってるって言うけど、大丈夫よね？　一応あれでも神様の仲間らしいから、ちゃんと約束の場所にたどり着くわよね？」
「ヤタガラスは、幾度も行き来した経験が有る。正三郎って人が死んでからは、あんまり行き来しなくなっちゃったけどさ」
「タルカ伯爵だったけれど、その爵位を返上してミズホに戻ったって人？」
「そうそう。ミズホに近代的な造船業を根付かせて、ミズホ起点の太平洋航路を確立した人だよ。有能で、働き者だった。あんな人材が今のアイリュやテツココにいれば、ずいぶん事情も変わるんだろうな」
「前の大宰相でチャスカさんが産んだキリャさんの夫のヤガーさん、あの方の業績も大きいんでしょう？」
「ヤガー君は……帝国全体にとっての宝みたいな存在だったさ」
「マサエさんとトシエさんが産んだ、ユキヒコさんとヤスヒコさんの育ての親でもあるんでしょ？」
「ああ。彼に任せれば、間違いないって僕も思ったしね」
「ユキヒコさんもヤスヒコさんも、穏やかだけど頼りがいのある紳士って感じよね」
「ほう？　そうかい？」
「そりゃあ、貴方ほどは頼りにならないけれど」
「当たり前だろう？」
「あらまあ、気を悪くしたの？」
「いや……」

息子でも、エミナが褒めると妙にあせった気分になる。年甲斐もないと言おうか、子供っぽいと言うか、ちょっと気恥ずかしい。が、気にしていない顔をする。エミナには口でどう言おうとバレバレなのだが……

「ヤガーさんて、レイリアの女王様との縁結び役でもあったの？」

「うん。帝国の国益にもかなうし、人助けにもなる、っていうような感じで話を持ってきた。今にして思えば、どう言うと僕が乗り気になるのか、十二分に計算していたのかも知れないな。当時ヤガー君が僕に示した調査結果なり資料なりに、嘘やごまかしは一切無かったがね」

「ヤガーって、地球で言うところの肉食獣のジャガーよねえ」

「ああ！　そうか、そうだったんだ」

「あれまあ、知らなかったの？　ジャガーはテツココ辺りじゃ、雨をもたらす神獣でしょ。密林の優雅な王者って感じ。大木で昼寝していると可愛いし。でも、泳ぐし、木登りするし、ワニでも捕まえちゃうのよね」

「ふーん、優雅で気品があって、賢かったけれど、獰猛な感じは無かったな。ああ、でも、攻略すると決めた相手は一撃必殺だったな」

「私がびっくりしたのは、そのヤガーさんてモタさんの弟子だったって事だわ」

「そうかい？　奴隷として売られていたヤガー君を、モタさんが助けたって言う経緯だったんだが、賢い子だったんで、学問をさせた。そうしたら非常に有能な人材に育ちあがったって訳さ」

「じゃあ、神聖教会の信者って言うより、モタさんに救われて育てて貰った感じ？」

「うん。モタさんの作った修道士会が布教活動よりも教育に力を入れるようになった原点が、ヤガー君なんだろうな。それにモタさんはレイリアの貧乏貴族の庶子で、そもそも学問がしたいから修道士

になったんだし」
「あー、だからヤガーさんとしては、恩人の祖国を助けたかったのかしら？」

エミナと話していると、過去の自分の行動の意味を新しい視点で見直す事が出来る。

そうなのだ。レイリアはモタさんの故郷だ。そしてアイリュとテツココはモタさんが生前熱心に活動した地域だ。僕はモタさんが好きだったし、深い友情を感じていた。その魂が僕を呼んでいる。そして僕自身の未解決な霊的な障害を浄化するのも、その土地の霊山らしい。

「これからは、新大陸の事ももっと気を入れて配慮しろって、パチャママは僕に言いたいのかな？」
「そうね。きっとそうよ。貴方が真面目にパチャママの子供らの事を考えるなら、白い石の件も、きっと良い形で決着がつくと思うわ」

あの大陸の人々は「パチャママの子供」と自称する事が有る。大地母神の祝福を受けるか、怒りを被るかは僕次第なんだろうが……エミナに軽蔑されるのは嫌だ。だから、どうしたって僕は頑張るしか無い。

白い石・2（後書き）

正三郎は、伊藤姓でした。すみません

白い石・3

よりきめ細かな現地情報収拾と最終的な登山のための物資や人員の調達のために、ミズホで五日間船を停泊させた。船の整備はかつて伊藤正三郎が作ったドックで行う事にした。

「この港の名前は井沢港と言うのね」
「僕が伊藤港としようと言ったら、正三郎が『陛下の前世のお名前を頂きたい』なんていって、こうなった」
「地球の日本だと、横浜あたりかしら？」
「日本列島とミズホはちょっと形が違うから、ぴったり一緒とはいかないが、富士と御山を起点に見ると、そんな感じかな」
「で、鉄道に乗って、ミヤコに急ぐんでしょう？　時間的にはギリギリかな？」
「ああ。何しろ新幹線が無いからね」

ミズホにもムサシとミヤコを結ぶ鉄道が通っており、日本の東海道線に相当する幹線だ。年々鉄道網が整備されつつあるが、蒸気機関車なのでどうしたって新幹線のようなスピードは期待できない。

「ムサシ・ミヤコ間は十時間だった？」
「うん。そうだ。今回は途中下車も有るしね」

最新型機関車で整備されたレールを走っても、それだけかかるのだ。港からムサシの駅までは、ミズホ政府が手配してくれた馬車で一時間ほどだ。迎えに来てくれた宮内庁の伊藤侍従は、正三郎の孫にあたる。顔も声も正三郎の若い頃に似ているので、初めて会った気がしない。

ミズホも急激な近代化の最中で、ちょんまげ姿の人間はもうどこ

にも見当たらないみたいだ。伊藤侍従も帝国ではやりの、ピシッとしたフロックコート姿だ。

ミカドはミヤコの御所で、のんびり御暮らしだと言う。国会も憲法も無かった頃なら、ミカドのお気持ち一つで簡単に譲位出来たが、今はそうもいかない事情が有るのだろう。御子息に譲位なさって故郷のミヤコで静かに生活する事を希望されたが、国会では認められなかったそうだ。

「するとミカドは今はミヤコにおいでなのか」
「はい。ムサシの新宮殿には摂政宮様御夫妻がお住いです」

伊藤侍従は摂政宮付きの筆頭侍従らしい。新宮殿は地球の日本なら、赤坂離宮とでも言いたいようななかなかに美しい建物らしい。今回は大急ぎなので、摂政宮夫妻との会食もパスだが、そのうち機会が有ったら国賓として宿泊させて貰うのも悪くなさそうだ。

「ふーん。ミカドの御希望に配慮してと言う事なんだろうな」
「御高齢ですがお健やかであられるので、御譲位は時期尚早だと言う事でしょう」
「御高齢ねえ。僕よりはずっとお若いが」
「確かに、仰せのとおりです。祖父は陛下の御写真を自室にいつも飾っておりました。そのせいか初めてお目にかかる気がいたしません。あのお写真のお姿のままの若々しさであられるのですから」

どうやら僕の即位十周年かそのぐらいの時の、記念写真らしい。銀板写真が登場したばかりの頃だったし、今からすると色々と装飾過多の気恥ずかしい皇帝スタイルだったはずだ。正三郎はその写真を額に入れ、自分が毎日使う書斎の机の正面の壁に掛けていたと言う。伊藤家の墓は、御山の姿を朝夕望む台地の上にあった。僕が

初めてミズホに滞在したときに世話になった、あの、伊藤総衛門さんの墓の側のようだ。総衛門さんと正三郎は従兄弟同士だったから、墓が側でも不思議は無い。

「正三郎と奥さんはトリアにいた頃も御山を懐かしんでいたよ。良い場所だね」

「さようでございます。お忙しい中、このようにお心配り頂きまして、祖父も祖母も感激しているでしょう」

「もっと早く来るべきだったんだがねえ……すっかり遅くなってしまった」

ミヤコに到着後、翌日早速に亮仁と碧子の墓に参った。そして、墓が有る寺で縁の人たちと旧交を温めた。まあ、それぞれの家も代替わりしていて、僕と会うのは初めてという人の方が多かったが……それでも、初めて会うような気が互いにしなかったのも事実だ。

エミナは周囲の雰囲気にしっくり溶け込んで、皆に早くも「身内」として認定されていた。

「こうしたミズホ式の法事など、苦手でいらっしゃるでしょうに、きちんとお坐りになって……」

「お若いのに御立派ですわ」

「素晴らしい皇后陛下がおいでになって、亡くなった方たちも皆、安堵したことでしょう」

教訓たらしい事を言う爺さん婆さんと見える親戚連中も、考えてみれば僕よりみんなずっと年下なのだ。亮仁の孫も碧子の孫も、こう言っちゃなんだが、足元が既にヨボヨボだ。僕は皆に、亮仁と碧子が最後に帝国に寄ってくれた時に撮影した写真を配った。そうするように提案したのはそもそもエミナだったが。それらの写真と一緒に僕とエミナの結婚した際の記念写真も渡した。帝国の有名写真

家が撮影したものだ。

「まあああ、素敵！」

その場の若い女性たちの反応は、大きかった。エミナのウェディングドレス姿は確かに凄く綺麗だから。

老人たちは、既に老いた自分の祖父母と共に居る僕の姿と、今の僕の姿をかわるがわる確認して、僕がいつまでたっても年を食わない特異体質なのだと、改めて実感していたようだ。

その翌日は御隠居状態のミカドにお会いして、お茶を振る舞って頂いた。後は夜行列車でムサシに戻り、さっさと港に馬車で駆けつけると、ギリギリと言う強行軍だった。夜行ではあっても特別仕立ての寝台車だったし、ミズホ側に色々気を配ってもらったが、それでも何だか疲れたのは事実だった。

船が出港して、二人きりで船室に籠ると、ほっとする。

「肉体的にと言うより、気分的にくたびれたみたいだ。それでも……」

「やっぱり、良かったでしょ？」

「ああ。亮仁は、死に目にも会えなかったからなあ。碧子も一周忌以来だ」

考えてみれば、碧子の息子・康仁も既に故人だ。随分長い間、ミズホに来ていなかった事になる。考えてみれば、あの頃出会ったラルフさんも、碧子の養女芳子も、芳子の夫の太田さんも、すっかり老人だ。

「ドーンやレイリアの事で色々あったのよね？」

「それは、そうなんだが……」

もう少し、ミズホの親戚ともマメに付き合っておくべきであったかもしれない。

「みんなに気配りするって、難しいわよね。まあ、ミズホの方たちは貴方の事を今も大切に、特別に思ってくれているようじゃない」
「うん」
「良かったわね」
「うん」

そう言って、僕は気が付くと涙をこぼしていたみたいだ。

「よしよし、泣きたい気分の時は、泣いても良いと思うの」
「うん」

僕は……格好としてはエミナを抱きしめていたが、心情的にはエミナにしがみついていたのだと思う。

「井沢亮太は子供のころから、そうだったわよね。ぎりぎりまで何でも自分で背負いこんじゃって、身動き取れなくなっちゃって、苦しいのに誰にも言えなくて……」
「そうだっけ」
「そうだったわよ」
「ああ、思い出した……小学校の文化祭の劇をどうするかって揉めた時だっけ」

学級委員だった僕は、教師と同級生たちの意見の食い違いをうまくまとめられなくて、困り切っていたことが有った。あれはどっちにも良い顔をしたいという、僕の八方美人的で小心な気性が災いしたんだろう。

「真面目なのよね、貴方は。皆に公平で公正で、教師も生徒も納得できてなんて演目は、そうそう有るはずもないのに、一人で悩みまくっていたものね」
「今は結構アバウトで、いい加減だけどね」
「それでいいのよ。そうじゃないと、貴方が壊れちゃう」
「僕が壊れるって、本気で心配してくれた人って、殆どいないんだ」
「でも、ユリエさんは心配してくれたんでしょう？」
「うん」
「他の人だって、真剣に心配はしたのよ。でも、貴方の弱さなり脆さを直視する事を避けたのね」

考えてみれば、ユリエだけが赤ん坊の僕の庇護者だった。でも、エミナはもっと強い。メンタルも肉体も。

「頼りにしてるよ、エミナ」
「私は貴方の相方を務める能力を身に着ける為に、余分に転生してるんだもの、掟破りと言うかインチキと言うか……そんな私と他の女性を同じ土俵において比較・評価したら、彼女たちに悪いわ」
「うん。それはそうなんだろうな。でも、余分に転生までして僕のパートナーになってくれたって、感謝してる。ありがとう」

だが、きっとユリエだって、それにセルマだって、精いっぱい僕の事を大切に考えてくれて、そして僕の所為で苦しんだのだ。その所為で亡くなった後も苦しんでいるとしたら、何とかしなくちゃいけない。

「そうね。貴方の事が大切だから、その石も出てきたんだろうし。貴方も出来る事をしなきゃ、男がすたる、ってもんじゃない？」
「男がすたる、ねえ。僕、そういう、男前な精神構造してないな」

エミナの側だと、自分を偽らない、いや、偽るなんて出来っこないから、余計に本来の僕が剥き出しになる。本来の僕は相当にウジウジぐずぐずしている。

「高い山にヒーヒー言いながら登れば、要らないことは考えないで済むわよ。きっと」

「酷いなあ。自己反省の最中だったのに、瞬殺か」

「考えてもあまり前向きな解決策が出そうもない方向に意識を持って行くぐらいなら、寝た方が良いわ」

「眠れないよ。あ、でも……」

僕の頭に浮かんだイメージに、エミナは顔を真っ赤にする。

「男の人って、急にそっち方面に意識が飛ぶから、正直言って戸惑うわ」

「人肌が恋しいって感じからなんだろうけれど、何しろ美人な奥さんとぴったりくっついているんだから、そっち方面に意識が向くのは当り前さ」

僕はエミナが嫌がっても、怒ってもいないのを十二分に承知しているので、服を脱がせて、キスしまくる。ああ、なんて良い匂いがするんだろう……

「エミナは僕の最高のトランキライザー」

「トランキライザーなら興奮しないでしょうに」

「これは美人に対する条件反射。もう、結構おなじみだろう?」

エミナはすっぽんぽんの体を真っ赤にさせて、荒い息を漏らしている。

「ねえ、これでは、私の方が眠りに付けないじゃないの。酷いわ」
「じゃあ、お互いの妥協点を探ろう。ね？」

結果は我が愛する奥様にもご納得頂けた。「チョッとやり過ぎ」と言われてしまったが。おかげで二人ともぐっすり眠れたのは、確かだった。

グスタフ港までの船の旅の間、昼間は……地図を前に登山ルートに関する相談をする事が多かった。

ミズホから新たに、一緒に登山する予定のアイリュ出身の帝国軍の兵士らに乗り込んでもらったのだが、参考になる話が色々聞けた。

ミズホには帝国海軍の施設が二か所存在する。かつては近代化していなかったミズホから場所を無償で借り受け、基地を設営したが、今はミズホ軍との共同使用だ。軍事的指導や災害時の救助活動も、行っている。ミズホの軍需産業は正三郎が産みの親と言って良いし、これまでの経緯もあって、我が帝国とミズホの同盟関係は強固だと言えるだろう。

インティプンクは正確には頂上ではなく、その先に氷河と万年雪を頂く岩場が続くらしい。一対の石柱の先は「パチャママの聖域」として、通常の人間は足を踏み入れないそうだ。

しかし、僕らがインティプンクで白い石を供えた後、何がおこるかは誰にもわからない。従って登山用の装備は、やはり必要だと言う結論になった。帝国軍では登山の訓練も頻繁に行っているが、アイリュの軍隊には基本装備も揃っていないらしい。

「アイリュ国内にはザイルやピッケルもろくに存在しません」と言われた時は、ちょっとびっくりした。

「パチャママに招き入れられたら、氷河を越えて頂上に向かうことになるのかしら？」
「ケツァールとヤタガラスなら、そのあたりの事情の見当はつくかな？」
「どうかしらねえ」
「神様にしては、ちょっとばかり頼りないかな」
「それはそうかも知れないけれど、ヤタガラスもケツァールも一生懸命みたいだから、きっと役に立ってくれると期待しているわ」
「グスタフ港で落ち合う事にしたのは、何か事情が有っての事だろうが、どんな事情だろうね？」
「二人で現地調査を早めにしているから、かも知れないわね」

エミナは、その程度の事ならあの二人でも可能だと見ている。本当に期待できるのか僕は疑問だが……

「そこまで考えてくれているかなあ……特にヤタガラスの方だけど。普段から緻密さが足りないから、行き当たりばったりで、大した効果も期待できない気がする」

ヤタガラスが聞いたら怒りそうな言い方だが、僕の正直な考えだ。

やがて、船は無事にグスタフ港に入港した。波は静かで、空は青い。

「あら、ヤタガラスとケツァールじゃない、あれ？」

エミナの指さす方向に、二羽の鳥がこっちに向けて飛んで来るのが見えた。

「煎餅でも用意してやろうか」

「そうね。この辺じゃ、醤油味の固焼きせんべいも貴重でしょうからね」

僕らは食い意地の張った友のために、お茶の用意をする事にした。ミズホの名店でわざわざ買いいれたものだから、きっと気に入ってくれる事だろう。

白い石・3（後書き）

×ドッグ
○ドック
ですよね。すみません

白い石・4

「おお、これは美味い煎餅じゃ」

ヤタガラスは熱い煎茶片手に、盛大にボリボリ音を立てて固焼き煎餅を貪り食っている。赤ん坊が一人ぐらい入りそうな大きな缶に入った分を、全部一度に平らげそうな勢いだ。ケツァールはニコニコしながら、隣で煎茶を飲んでいる。見た目は七歳児だが、雰囲気は金婚式を越えた夫婦みたいだ。

「あー美味かった」

やはり見事に缶がすっからかんになった。

「で、何か僕らに伝える事が有るんじゃないのかい？」

「そーじゃのう、エガス・モタの魂を一緒にヤナオルコに連れて行け。その方が良さそうじゃ。明日にでも皆で迎えに行こう」

ヤタガラスが言うには、聖地になっちゃっているモタさんの遺骸が安置されている場所に、僕とエミナが行けば、それで大丈夫らしい。

港に作られた商工会館は、僕らの当分の宿舎になっている。帝国の大都市のホテル程度の室内の設備は整っていて、清潔で悪くない感じだ。地球で言えばクラシックホテルの雰囲気に近いかな。

場所はかつてモタさん以下の探検隊の面々や、チャスカ・キリャ・ヤガー君と一緒に滞在したあの、イシュカレの館兼神殿の敷地内にあたる。

もともとの神殿部分は残して、イシュカレの孫やら曾孫やらは港に隣接する自身の領地に、隣国アイリュに対するにらみを利かせる

と言った意味合いもあるのかも知れないが、テツココ王国でも最大級だと言う要塞のような邸を構えている。僕が仲立ち役となって、アイリュの皇帝とテツココの大王は今や幾重もの姻戚関係で繋がる親戚同士だが、防衛だの国境だのと言った事柄はどこまで行っても微妙な問題なのだ。

しかし、イシュカレの孫は外交顧問だかの名目で一年の大半を帝国で暮らしているらしいし、曾孫は帝国に帰化したものも幾人かいるらしい。不在地主というか不在領主と言うか、そんな状態なのだ。そのあたりノーチェックだったのは、手抜かりだった。だが、帝国の常識が通用しやすい訳で、逆に言えば話は早いか。

「イシュカレの孫か？　あれは今、帝国でテツココの物産を商う商売をやっとるな。花作りが趣味で、時々トシエとマサエの所に来て茶を飲んでいくぞ。手土産は大抵トウモロコシや豆を使った菓子じゃ。どれも美味いぞ。さっきの煎餅ほどではないがな」

ヤタガラスは事態の重大性を十分に認識しているとは言い難い、呑気な調子でそんな話をした。トシエとマサエの御近所さんで園芸仲間なおかつ茶飲み仲間なら、本国の不手際やら不祥事について僕が干渉したとしても事後報告でどうにかなるか。あー、でも……

「電話ぐらい、入れたら？」

エミナに言われて、それもそうだと思い、番号を調べさせて電話をかけたら、出てきた孫だと言うタヤウツィンという男の声が、記憶にあるイシュカレの声そのものだった。

「私の末息子コヨトルは、我が子の中では一番まともな男ですが、今回の登山隊に加えて頂いております」と聞かされて、自分のノーチェックぶりにガックリきたが、当然の様に「テツココでの不都合・

不手際の処理も、万事陛下の御心のままになさるべき」と言い切られて、これまた驚いた。

タヤウツィンに言わせれば、僕がテツココ大王からかつて『反省とお詫び』の文書を受け取り認証した時点で、そもそもの国家主権自体が『真の支配者』である僕からテツココの大王に『暫定的に預けられている』に過ぎないと皆が承知しているから、僕の命令には全テツココの民が従うべきだし、従わねばならないそうだ。

電話を切って、僕は軽く虚脱していた。僕はあの『反省とお詫び』を神話を踏まえた儀礼としてとらえていたし、僕自身にテツココという国家の主権が存在するなんて、一度も考えた事が無かった……彼らには主権在民って概念も、あんまりなじみが無いんだろうな……

「ね？　電話かけて良かったでしょう？」
「エミナ、知ってたのか？　タヤウツィンとコヨトルの事」
「まあ、凡そわね。ケツァールが『良い人』って言うから、あんまり厳しくチェックはしてないわ」

そのケツァールとヤタガラスは煎餅を片づけた後は、自分たちの部屋で昼寝らしい。

ともかくもテツココ側の事は、かなり僕の自由裁量でやれそうだと言う見通しが立っただけでも気が楽だ。

早速僕は管理官や登山に加わるメンバーに、集まってもらった。当然コヨトル君にも。コヨトル君自身はイシュカレなんてひい祖父さんの事はノーチェックで、意識もしてなかったみたいだ。まあ、それが当然か。山登りが三度の飯より好きな山オタクみたいで、これはこれで使えそうな男だと感じる。イシュカレは金儲けに熱心だったが、曾孫のコヨトルは全然興味が無さそうだ。だが、それでも、スラムの広がりには驚いていた。その驚きは、皆の共通した感想の

ようだった。

「ここに来たのは三年ぶりですが、スラムの広がりがすごいですね」

「港は以前にもまして、活気は有りますが、何かそのバランスがいけないと言うか」

「以前は無かった殺伐とした雰囲気を、外から通ってくる人々の視線からは感じます」

グスタフ港と周辺の帝国直轄領と外部の間は、かつてのベルリンの壁みたいなコンクリートの壁で仕切られている。そして外部の人も物資も、その壁に設けられた二か所のゲートの検閲を通過してから、グスタフ港に入る。問題のスラムはその壁のすぐ外から相当な広がりを見せているようだ。

壁の設営はかなり以前に要請があって、僕は深く考えずに許可を与えたが……壁で仕切られた二つの世界の断絶の深さを改めて実感すると、胸が痛む。いや、そんな感慨に浸っている場合じゃないのだろう。

タヤウツィンの言う通りなら、この酷い断絶状態に対して、僕には直接的な責任が有るのだ。

「原則は主権在民でいいんじゃないの？　自分たちの土地は住む人自身で改良しようって思わないと、やっぱりいけないと思うわ。何でも人任せ、神様任せじゃね」

エミナは僕が参っているのを見て、余計にそう言うんだろうが、この土地の初等教育も満足に受けられない大半の貧しい人々に、僕はやっぱり重い責任を背負っているのだ。モタさんに生まれ変わってもらわないと、どうにもならないかもしれない。

かつてはアイリュとテツココの間に広がっていた大きなジャングルは、伝統的に両国共、自国領土だと認識して来なかった。漠然と「蛮族の土地」と認識していたに過ぎず、天然の緩衝地帯として機能していた。それが近年は天然資源の問題なども有って、互いに領有権を激しく主張する場所も有るようで、厄介な問題だ。

スラムは双方の国が放置してきた所属の曖昧な密林を焼き払い、掘立小屋を建てて各地から流れ着いた人々が住み付いて出来上がったもので、今やすごい勢いで広がりつつある。

「人道的配慮や公衆衛生的な理由も有って、帝国としては法で定められた範囲の食料や衣料の支援を行いますから、それを目当てに各地から流入する人間の数が余計に膨れ上がって来ている、と言う事情も有ります」

管理官は手をこまねいていた訳では無く、それなりに基礎的な調査を真面目に行ってはいたのだ。だが、ここ数年のスラムの膨張は予想をはるかに超えるスピードらしい。

アイリュやテツココで食い詰めた連中が勝手に住みついて、元来の住民である素朴な暮らしぶりの少数民族を虐待したり、小競り合いの末虐殺したりという問題は、モタさんの死後、特に目立つようになったと聞く。特に昨年あたりからは、ミッケリ方面の犯罪組織の暗躍が目立ち、問題は急速に深刻化しているそうだ。

「はっきり言って、アイリュもテツココも政治は腐敗しきっています。両国とも義務教育も普及しておりませんし、少数民族にも人権が存在するとか、人種差別は犯罪であるとか言う概念自体存在しませんから、密林の中で素朴に暮らしてきた幾つもの小さな民族グループが絶滅させられた可能性が高いです」

このグスタフ港一帯の土地は、僕を『ティクシ・イリャ』つまり

始原の光であるとされる創造神の化身、と認定した両国から管理を委ねられ献上された形になっており、帝国の直轄領だ。だが、その小さな点のような整備され適切に管理された場所を外れると、気の遠くなるような広さで無法地帯が広がっている。

帝国国民ではない人たちの不幸をよそに、このグスタフ港の貨物の取引量は増え続け、帝国が管理する市街地に限って言えば大いに繁栄しているのだ。何だかこう考えてきて、僕は自分が吸血鬼の親玉かなんかになったような、嫌な気分になってきた。事実、この土地の人々にとって、僕はそのような存在になってしまっているのかも知れないのだ。

込み入った問題を完全に解消しようとしたら、アイリュ・テツコ両国に対する強烈な内政干渉が必要になってくるが、どこまで踏み込むべきか、このグスタフ港の管理官達にも判断がつかないのだろう。僕だって、正直どうすべきか分からない。ただ、はっきりしているのは、従来修道士会が果たしていた役割は非常に大きかったと言う事だ。

「修道士会の活動が盛んであった頃は、命がけで密林に入り込み、弱き立場の人々を救うと言う情熱を持った修道士が大量にいて、活発に活動していましたからねえ」

「修道士会の主な活動の舞台が、ドーン大陸に移った格好になってから、こちらの方は問題百出です」

僕としても、風土病がはびこり衛生環境も劣悪で犯罪者が跋扈するような場所に、帝国軍の精鋭や有能な官吏をやたら踏み込ませる訳に行かない。少なくとも彼らは本来の任務の範囲内で、最善を尽くしているのだから……

ミッケリ人は犯罪者でも神聖教会に対しては遠慮するものらしい

が、聖人エガス・モタが亡くなり、この土地での修道士会の活動がほぼ停止した事で、遠慮なく悪事を働くようになったと言う事情も無視できない。

「ミッケリの犯罪組織の連中は、自分達が悪事を働いていると言う自覚は十分に有って、死後地獄に落とされる事を非常に恐れるとも聞きます。ですから修道士は彼らに妨害される事は稀だったのですが……」

それどころか修道士に要請されると、土木作業や物資の運搬などを手伝う事も珍しくなかったらしい。そうする事で功徳を積み、罪業から逃れられると信じていたのだろう。

「不老の悪魔の手先には、非協力的か」

まだ僕をそう呼ぶ連中は神聖教会の中で、結構な勢力を保っている。

「はあ……」

「ミッケリ系の犯罪組織の親玉は、どの辺に住んで居るのかな？」

「一人は、この港のすぐ外に、瀟洒な白亜の豪邸を建てて住んでおります」

親玉クラスになると帝国領内では全く悪事を働かず、適切に税も支払うので、追及は難しいそうだ。全部で五人の親玉は業態や活動地域・ジャンルで分業が成立している各グループのトップという事らしい。白亜の大豪邸の主は、港湾労働者の取り仕切りと薬物の取引が主な事業内容らしいが、一番古株で一番資金が有るらしい。

「一度その、白亜の豪邸を訪ねてみるか」

「陛下御自身がですか？　まさか、そんな。こちらが呼びつける事に致します。ですが……」

帳簿の不備などで管理官が呼びつける事は有るようだが、親玉本人が来る事は、やはり稀みたいだ。

「財務に詳しい子分が来るだけで、本人が来るかどうかは、怪しいんだろう？」

「はあ」

「いっその事、強制的に捉えますか。罪状など後付けで、どうにでもなりましょうから」

年若い管理官の一人がそんな事を言いだしたが、それは、感心しない。仮にもビジネス上の取引に関して、クリアでフェアなのが我が帝国のやり方で、だからこそ帝国の通貨も世界中で信頼されているのだ。すぐに結論が出る話でもないし、親玉の所在を掴むだけでも一仕事だ。

続きはともかくもモタさんの魂を迎えに行ってから、と言う事で、初日の話し合いは解散した。

「対ミッケリと言う事で考えると、皇后の私がアルラト出身の異教徒だっていうのも、不利な条件ね」

「だけどモタさんは、生まれ変わるにあたってエミナに母親になって欲しいんだろう？　そのあたりの事情を親玉たちに納得させる事が出来たら、ずいぶん仕事がやりやすいだろうにな」

ミッケリの犯罪者の親玉たちが、これからエミナの産む子がモタさんの生まれ変わりなのだと信じてくれたら、エミナを「けしからん異教徒」として見る事も無くなるだろうが、それは難しいだろう。

「モタさんもさ、僕らの子供に生まれ変わりたいなら、もっと協力して欲しいもんだ」

僕がそうぼやき、エミナが自分の宗教的背景に関する心配について話している内に、二人とも疲れて深い眠りに入ったのだった。その夜の夢にモタさんが現れたかどうか、それすらも分からない程深く。

事態が急転したのは、翌朝だった。二人で朝食を取って、モタさんの所へ出かける準備を始めていた所、筆頭の管理官が血相を変えて駆け込んできたのだ。

「陛下、陛下、連中が……親玉連中が五人揃って、お供すると申し出てまいりました」

「ゴメン、五人って……めったに所在がつかめないって言いう、親分たち、五人全部か？」

「はい。さようです。五人が一堂に揃った所など、見たのは私も初めてでして……」

ともかくも僕は、その五人の大親分達に面会する事にした。

白い石・5

「五人が、五人とも同じ夢を見るなんて、これはただ事ではないと思い至りまして」

ピカピカの禿げ頭に浮かんだ汗を拭き拭き、僕に向かって不慣れな敬語を使って話すのは、一番の長老株のベネデッド・キアだ。五人が同じ夢を見た事に気が付いて、急遽話をまとめたらしい。何でも昨夜はキアの誕生日で、管理官の話にも出た白亜の大豪邸で「罪深い宴席を開いて」いたんだそうな。問題の豪邸は小さな半島の先にあり、親分たちはそれぞれ贅を尽くしたヨットに乗って集合したらしい。そんな事は全然帝国の管理官サイドは掴んでいなかった。帝国側の諜報能力は、まだまだという事みたいだ。

「皇帝陛下に御挨拶に赴くべきではないかと言う者もおりましたが、私どものようなその、下賤な者がノコノコとどの面晒してと思っておったもんですからねえ……」

それにしたって、キアはフロックコートが似合わない。いや、自分の禿げと肥満体を目立たせようと言う魂胆ならそれなりに成功しているのか？　真っ白の上下、ショッキングピンクに金の縫い取り模様のベスト、金色のタイというケバイと言うか、凄い組み合わせだ。かと思うと、シャツから小物まで光沢のある黒で揃えた奴やら、全身真っ赤、全身真っ青、全身紫と言うのもいる。まるで地球の戦隊ヒーローものみたいだ。と言っても、五人ともあまり可愛げのない爺さんだが。

濃紺の上下にグレーのベストとタイ・白いシャツの僕が一番地味だ。一番まともだとも思うが。

キアの話をまとめると、こう言う事らしい。
昨夜の罪深いどんちゃん騒ぎの後、皆引き払って眠ったが、一斉にモタさんの夢を見た。モタさんは夢の中で「皇帝陛下のお供をしなさい」と命じたそうだ。ちなみに五人ともモタさんに自分自身、あるいは親兄弟や家族が命を救われている。キアに至っては「おふくろの腹から出る時に、取り上げていただきました」と言うんだから、半分親父さんみたいなものか。それにしては大層な不良に育ったもんだが。

「私の母親はミッケリから流れてきまして、その、罪深い身過ぎをしておりました。私をおろそうとしたんですが、うまくいかず、死ぬ寸前と言う所だったのを聖人様に御救い頂いたんでして。ベネデッドという名も聖人様につけて頂きました」
「ベネデッドという名にこめた願いを、十分に果たせとでも言われたかい？」
「ええ？　どうしてお分かりになったんで！」
「モタさんが言いそうな事だからね」

きっとモタさんは、惨めな貧しい娼婦の息子にも神の祝福が有るべきだと思って「祝福された者」を意味するベネデッドという名を選んだのだろう。

「学問を仕込もうとして下さいましたが、私の我慢が足りませんで」
「おふくろさんをともかく、すぐに楽にさせてあげたかったんだな？」

キアの脳裏に浮かぶそのおふくろさんは、小柄で褐色の髪と目をした愛らしい女性だ。キアの残念な見てくれは、実の父親に似てしまったんだろう。キア自身、どこの誰やら分からない母を不幸にし

た男に似ているらしい自分の見た目が、非常に気に入らないらしい。実際、母親は酒に酔うと「吐き気を催すほど嫌いな男に瓜二つ」と言ってひっぱたいたらしい。時には「お前なんて死ねばよかった」とまで言ったようだ。それでも、この男は自分を虐待する母を憎めなかったのだろう。

「は、はい、そうです」

「だが、おふくろさんは悪い男にだまされて命を落とした。君は親孝行ができなかったんだね」

「は、はい……」

このベネデッドにとって、惨めな死を遂げた母の事は大きな心の傷になっているのだ。柄にもなく涙を浮かべていて、恐らくそんな顔は他の四人も見た事が無かったのだろう。しーんとした感じで、僕とのやり取りを聞いている。

「君は……折角の能力を、同じような子供を救う方に使わず、増やす方に使ってしまったようだなあ。それで、モタさんに叱られたか」

「は、はい。今からでも、陛下の御手伝いをして、罪滅ぼしに努めろと、おっしゃいました。そして、近いうちに陛下の次の皇子様として生まれ変われる事になったので、お供をしてそれが本当かどうか確かめて納得しろともおっしゃいました」

「で、君たちは、それを信じているか？」

「突拍子もない話ですが、嘘とも思いません」

全身真っ赤なやせっぽちの爺さんがそう答えると、青づくめの爺さんも頷いて、こう言った。

「一度に五人が同じお知らせを夢で見るというのは、やはり聖人様の奇跡でしょうな」

五人とも年の所為だろう。「地獄行き確定」が恐ろしいらしい。

僕とエミナは馬車に乗ると、イカさない爺さん戦隊を引き連れて道を急ぎ、モタさんの亡骸が収められた巨大なガラスケースの前に立った。

普段は巡礼者でごった返している場所だが、ちょっとばかり人払いをして貰った。ガラスケースの前には僕ら夫婦と親分五人の他は、モタさんの弟子の修道士が二人、居るだけだ。

モタさんの霊は、すぐに話しかけてきた。

（皇帝陛下、皇后陛下、私の願いをお聞き入れいただきまして、ありがとうございます。無事、お二人のもとに生まれ変わる事が適いましたら、この大陸における諸問題の解決に精一杯務めさせて頂けましょうか？）

（エミナも僕も、出来る限り応援するよ）

（やっぱり男の子として、生まれるてくるのよね？）

（女の子では、ちょっと辛いものが有るかなとも思うのですが、皇后陛下は姫君が御希望でしたか？）

（男女どちらでも、大事な子供ですから、精いっぱい育てさせて貰います。よろしくね）

（ありがとうございます。美しい聡明な母上に育てて頂けるなんて、何と幸せでしょうか。今から楽しみにしております）

普段なら、こんなやり取りは僕らのような特殊能力の持ち主しか分からないはずだが……どう言う訳か五人には会話が感じ取れたようだ。

（皆、辛い中で精一杯生きてきたのですが、そのやり方が色々と間違っておりました。今からでも両陛下の御導きにより、この哀れな罪深い五人を御救い下さい）

（モタさんは聖人で、僕は不老の悪魔なんて言われる男だが）

（私は異教徒だけど）
（そのような事は、どうでも良い事なのだとこの五人にも納得して貰いましょう）

モタさんの亡骸から、生前と同じ姿の影が揺らめいて、立ち上がった。

（ベネデッド）
まずは一番の長老に呼びかけた。白いフロックコートの爺さんは震え上がって「はい！」と返事をした。
（エンツォ、ヤコポ、ニーノ、グリエルモ）
皆、自分の名を呼ばれるたびに返事をして、姿勢を正し、モタさんの霊体を凝視した。
（両陛下を実の親とも思い、真心を尽くしてお仕えするのだ。そうすれば、きっとお前たちの数々の罪も許されるだろう。生まれ変わったら、また会おう）

パキッ！

そんな大きな音がして、真っ白い布でグルグル巻きにされたいた筈のガラスケースの中の亡骸は、布と飾り類を残して粉々に崩れ去ってしまった。修道士二人は一瞬大いに慌てたようだが、モタさんの晴れやかな笑みを浮かべたヴィジョンはハッキリ見えたようだ。

「ああっ！　モタ先生！」

二人の修道士は床に額づいて、祈りをささげた。

それから、外で待っていた巡礼者、参拝者に呼びかけて、特別な説教が始まり、祈りがささげられた。

「偉大なる聖人エガス・モタ様は、再びこの地を救うために、生まれ変わられるとの事です。生まれ変わられるにあたり、テオレル帝国の皇帝陛下・皇后陛下を御両親となさると言う霊示が、先ほど御座いました。御亡骸は崩れましたが、新たに若々しいお姿でお出で下さる日を信じて、皆で祈りましょう」

皆で聖歌を歌い、その後は「聖人様のお生まれ変わりを祝して」熱狂的な踊りやら、即興の歌やらが続いた。新たに親になる事が披露された僕らも、熱狂的にもみくちゃにされそうだったが、どうにか抜け出して、五人の親分たちと宿舎に戻った。

五人の親分たちから心のこもった挨拶を受けた。彼らも悪事からスッパリ足を洗うとはいかないのかも知れないが、可能な限りモタさんの霊示に従いたい様子だった。

「君たちの組織を平和に解散させるためには、子分たちの暮らし向きを保証する事が不可欠なんだろうな」

僕の言葉に、皆頷いた。確かに十分に食い扶持を稼ぐ事は、大変なのだ。元来の住民だけでなく、多くの外部からの流入者をどう受け入れるか、頭の痛い問題だ。

「こんな身すぎはやめたいと思っても、今さら抜けられないと諦めていた部分が有りました。聖人様のお告げを受けて、私達もやれる限りの事はやらねばいかんと思います」

「道をお示しいただいたら、私達はそれに従います」

僕も取り急ぎ、出来る事からしなくてはいけないだろう。

そこで先ずは、親分たちにアイリュとテツココの「おえら方」に支払っている裏金を引き揚げ、代わりにモタさんが設立した貧しい

子供らを支援する学校と、診療所の活動を強化する方に回すように依頼した。これらの設備は元来修道士会が活動を支えて来たが、今は帝国が管理運営を引き継いだ格好になっており、往年の勢いを完全に失っている。

「そんな事で、宜しいので？」
「まずは、出来る事から確実にしたい」

後は努力目標として、覚せい剤や風俗関係から得ている収入を、健全な産業から得られるように努める事を皆にも頼んだが、帝国としても大いに努力する事を約束した。

「麻薬の栽培より儲かって、体に良くて、なんて作物が有ると良いんだがなあ」
「幾つか候補やプランは有るけれど、まだ実用化までは漕ぎ着けていないの。でも、大いに努力する価値は有るわよね」

親分たちはエミナの話に、引き付けられたみたいだ。土地に適した単価の高い作物と、収穫の容易な作物、肉を取る動物の育成を有機的に連動させるモデルを産み出せれば、計画は成功するらしいが……後は無秩序に行われている砂金採りや勝手に掘り散らかした各種の鉱山の管理や運営を適切に行う必要が有りそうだ。

「帝国から専門の調査団を派遣するから、君らにも協力を願おう」

砂金採りの上前をはねて来ただけなので、ちゃんとした鉱山運営のノウハウなど全く無い。鉱毒などと言う言葉自体認識していなかった。

「学が無いもんですから、儲かりそうだとなると後先考えず、ただ

食らいつくだけでして」
「ですから子供らには学問を仕込もうと思いますが……」
大きな事業を破綻なく運営するには「学問が必要」だとは皆思っているのだ。
「モタ様のお作りになった学校なら、皆、喜んで通うでしょう」
僕がドーン大陸で効果を上げた給食サービスと初等教育のモデルケースについて説明して、スラム地帯でモタさんの作った学校を根城に、同様の活動を行おうと言う案を述べると、彼らはそう言って賛成した。この土地の人々にとって、聖者エガス・モタの縁に繋がる事は、きっと良い事、正しい事だと言う強烈なプラスのイメージが存在するのは大きい。
後は僕らの登山隊の話に話題が移った。ニーノという青づくめの爺さんがこんな話をした。
「私どもの牧場に、姿が良く非常に粘り強い馬と高地に強いロバがおります。両陛下に献上させて下さい」
ニーノ爺さんは牛馬の繁殖やら、相当強引な牧場の運営やら、更にどう言う訳か売春やら女衒やらで儲けている。そうした人物から提供された馬やロバを皇帝が使うと言うのは、トリアの新聞社辺りに知られると、あれこれ言われてしまいそうだが、高地に強い特殊体質の馬やロバは確かに貴重で有り難いので、登山するに際して提供してもらう事にした。
「言いにくいがニーノ、自分の娘や孫に説明しにくい様な仕事は、おいおい止める様にして貰いたい。僕の個人的な口座から一時金を

支払うから、今現在、五つの店で働いている女性たちの借金は綺麗にしてやり、通常の飲食店として営業してくれ」

僕が金の支払いについて管理官を呼んだので、ニーノも帳簿を仕切っている子分を呼んで、実務的な事は詰めさせた。言い値で払うのだから、さほど話に時間はかからなかったようだ。ともかくも飲み屋を装った潜りの売春宿が、本当に普通の飲み屋になるのかどうかは、これからの経過観察も必要だろうが……

「おい、ジャコモ、俺の顔に泥を塗ったら承知しねえぞ。お前がいい加減な事をすれば、組織の皆が聖人様と皇帝陛下の御怒りを被るんだからな、わかったな」

そんな風にドスを効かせていたから、ある程度期待して良いんだろうと思う。帳簿係のジャコモって男は、色々と予想外の成り行きにびっくりしていたが、親分の命令は絶対らしかった。

こういう時、他人の心理が読み取れるのは確かに便利だ。少なくとも親分五人は本気で僕に従うつもりなのは、はっきりと分かった。モタさんのおかげだ。

後は山に登るための装備と人員を最終的に固めて、数日中に出発しないと、秋分の日に間に合わなくなる。

「さあ、荷造り、荷造り」

パッキングが得意なエミナは張り切っている。モタさんの魂は、一旦エミナの持つ胸飾りに同化して休むらしい。これでヤタガラスの言うようにモタさんの魂をヤナオルコに連れて行く事になった訳だが、一体どんな効果が期待できるのかは、僕も全然知らされていない。

「多分、色々善い事が有るじゃろう」

ヤタガラスは能天気な調子で、さっきからポップコーンをパクついているが、何も考えて無さそうだ。

白い石・6

ヒンハン！

まただ。なんてロバだ。それにしても、鳴き声がデカくて良く響くのには驚いた。エミナの跨った銀色の綿毛で黒い瞳のロバは、綺麗で愛らしい見た目のくせに、僕の言葉には異議を申し立てているつもりらしい。

青い服が大好きなニーノ爺さんはロバ五十頭と馬十頭を提供してくれたんだが、「頑固ではあるが特別に賢い」というのが、このロバだ。一目でエミナはこのロバが気に入り、頑固だと言うロバの方もエミナが気に入ったらしい。

ともかくも僕らは提供された馬やロバを見て、ヤナオルコまでどの様に人と荷物を配分して行くか決めようとしていた。細かい点は更に詰めるとして、僕とエミナが主にどの馬なりロバなりに乗るかは、僕らが先に決めてくれって言う話になった。そこで、こうして有力候補の馬とロバを三頭づつ連れてきて、宿舎の庭で最終チェックなのだ。

「ほら、プラテーロが、馬じゃ高山地帯は無理だって言ってるわ」

そうかな。単に馬が気に入らないだけの様にも見えるがな。僕は人間以外の生き物の気持ちを読む能力は、エミナほどは高くない。と言ったって、どこの馬にもラクダにも乗るのを拒否された記憶も馬鹿にされた事も全く無いが。

「この馬は納得してないけどな」

僕が跨っている美しい葦毛の馬は、ブルルと鼻を鳴らした。ロバがうるさいと思っているみたいだ。

「でも、足場が悪い所で転んだら、貴方まで危ないわよ」

ヒンハン！

エミナの言う通りにしろってか？全くもう、なんてロバだ。聞けばこのあたりでは結構有名なロバらしい。うんと賢いが気難しい所が有って、気に入らないとさっさと命令を放棄して逃げ出すことも有るそうだが、気に入った相手にはとことん尽くすと言うことだった。

これまでは「あの有名な銀色の五番」という具合で呼ばれていたロバに、エミナが名前をつけた。

ともかくもエミナがロバを非常に気に入ったのは確かだ。「お月さまの銀の色をしている」ロバのプラテーロの魅力についてエミナが熱く語っても、ノーベル文学賞を受賞したって言うヒメネスって人のことは、僕は全然知らないから、ノリについては行けないが。ともかく、ロバのプラテーロが出てくるヒメネスの詩は「とっても素敵」なんだそうな。

「で、その馬の名前はどうするの？」

馬の方は今は「葦毛の五百五番」と呼ばれている。馬の番号は五百番台以降に決まっているらしい。

「んー、マレンゴ」

「何？　ナポレオンの馬の名前？　有名な肖像画で跨っている？」

「そうそう」

「あー、でもその馬、アルプス越えでは乗らなかったんでしょ？本当はロバに乗ってたって」

「何か、そうみたいだな」
「ほら、やっぱり馬は岩場の多い高地は向かないわよ」
「でも、ニーノのお勧めだから」
「せいぜい海抜四千メートルの平原ぐらいまでじゃない？　ニーノさんは全く高地に行った経験が無いんでしょう？　高山の岩場は無理じゃない？　やっぱり」
「わかった、わかった。そのヒンハン鳴きに負けた。岩場はロバにする」

　すると黒っぽい色のロバが、馬を下りた僕に鼻づらを摩り付けてきた。自分の出番だって主張しているらしい。鞍を置いて僕が跨っても、実に大人しい。プラテーロと生まれた時から一緒に飼われていたと言う濃い黒褐色のロバ「黒の六番」は、非常に物静かだ。

「この子にも名前を付けましょう」
「エミナに任せるよ」

　いっそ黒の六番のままとか？　割り切っても良い気がしたが、エミナにはつけたい名前が有るようなので、任せる。

「賢いロバと言えばカディションよねー、やっぱり」
「モトネタは何？」
「十九世紀の子供向けの話」

　聞けば火事場で子供を助けたり、泥棒を逮捕するのに協力したりする賢いロバだけど、気に入らない相手にはかなりイジワルという設定らしい。「ちょっとばっかり勧善懲悪の度が過ぎている」が面白い話らしい。筆者がロシア生まれでフランスの伯爵夫人になった人なんだそうで、教訓たらしいのも時代の所為なんだろう。

「そういえばさ、何とかのマレンゴ風って料理なかったか？」

今度は馬のマレンゴが、ロバから降りた僕に鼻づらをすりよせた。やっぱり綺麗な馬だと思う。

「鶏とか、卵とか？　馬とおんなじ北イタリアの地名でしょう？」

「ヤタガラスが美味そうな名前、っていうからさ」

昨日、届いたばかりの馬を見ていた時に、そんな話をしたのだ。鶏肉やら卵やらじゃあなあ、ヤタガラスには不向きだ。

「どうせマンゴーかなんかの、勘違いじゃない？」

「あ、そうか。そうだな」

帝国本土ではマンゴーは高級品だ。ヤタガラスもそう、何度もは食べていないだろう。

「今、泊まっている場所の庭に、マンゴーが生っていたわよ。まだ酸っぱいかな」

エミナによれば、誰かがこの土地に持ち込んで意図的に植えた感じだと言う。地球だとアジア原産らしい。

「何が、まだ、酸っぱいんじゃ？」

ヤタガラスは日陰で涼んでいたくせに、食い物の話になるとすぐに首を突っ込んでくる。

「マンゴーの実がね、どうかなと思って」

「エミナが熟れると美味いと言っていたので、さっき五個ほどため

しに食ったぞ。ウジ虫も一緒に食ったが、美味かった」

ウジ虫？　僕はさすがにヤタガラスみたいに虫までは食えない。無害だとしても。それにしてもためしに食うのが五個かよ。呆れた。

「マンゴーは受粉をハエの仲間に頼ってるのよ。処理をしなかったら実の中にウジ虫がいても、当然ね。そうねえ、マンゴーも品種改良したら、有望ね」

ヒンハン！

まただよ。また文句が有るみたいだ。無駄話はいいから、早く決める事を決めろってか？

「ハイハイ。決める事はこれで決めたから、鞍を外してあげるわね」

すると銀入りの綿毛のロバは、エミナに鼻づらを摺り寄せる。

「何か、すっごくかわいく見えるな」

「見えるんじゃなくて、本当に可愛いのよ」

可愛いと褒められたのが分かったかのように、いや分かったんだろう。ピョンと嬉しそうに跳ねた。それからロバ二頭は連れだってトコトコと木陰に入った。ふと見ると二頭とも、館の庭のイチジクの実を夢中で食べて居る。ロバは果物が大好物だなんて知らなかった。

「イチジク、好きなんだな」

「オレンジでもブドウでも、人間が食べる果物類は全部好きね」

アルラトではロバが色々な所で使われていたらしくて、エミナは

ロバになじみが有るんだそうな。二頭は瞬く間にイチジクを食べてしまい、今度は草やら白い小さな花やらを食べている。

「毒の草でも食べて、お腹壊さないでよ」

エミナが言うと、二頭とも食べるのを止めてエミナの顔をじっと見た。それから右耳と左耳を順にピクピク動かして、また、草を食べて居る。

「ヤタガラスとケツァールは鳥の格好で行くのか？」

木陰のベンチで二人は、ぴったりくっついて並んでいる。人間の成人男女ならヤジの一つも飛ばしたくなるのに、どっちも七歳児の姿のせいか、ひたすら微笑ましい。

「その方が場所も食い扶持も、うんと節約になって良かろう」

それは確かにそうなのだ。何しろ人型のヤタガラスは、凄まじい大ぐらいなのだから。鳥の姿なら食い扶持の現地調達も簡単だし、量も人型の時よりうんと少なくて済むようだ。ケツァールは人型でも非常に少食なのだが。その違いはどこから来るのか、研究すべき課題かもしれない。

年月がたち、このルンドなりに色々と技術が進歩したおかげもあって、装備も色々と様変わりしている。前回なら撮影機材なんて、有り得なかったしな。

「前回では恐らくさほど問題にならなかったんでしょうが、ヤナオルコに向かう途中の村々では、吸血性のカメムシの仲間が恐ろしい病気をうつす事がわかっております。ひび割れた土壁を好んで住み

つく虫ですので、可能な限り、前もって土壁は補修させておりますが、用心のためにもお休みなさる場合は必ずお持ちになった寝袋をお使いになる事をお勧めいたします」

ミーティングの際にそんな話が出て、びっくりする。エミナは承知していたみたいだが。

「ひび割れた土壁に悪霊が住みついて、乳幼児や老人をとり殺すのだと思われておりましたが、医学的な専門教育を受けた修道士たちが原因を突き止めたのです。日干し煉瓦を使い、煮溶かしたある種のサボテンの煮汁を塗り込むと虫の繁殖が防げるようです」

乾燥が不十分な虫の卵入りの土を積み上げた壁が、特に危険と言う事らしい。

「ロバや馬を休ませる際にも、気をつけなくてはいけません。ともかくも、この土地は帝国本土では考えられない様な未知の風土病も御座いますので、くれぐれも御用心なさって下さい」

メンバーに軍医としての経歴を持つ者を数名加えておいたのは、正解だった。植物学や農業に詳しい者もいるので害虫よけに有効な地元の薬草の話や、雑穀類に有望な品種が有る話も出た。この辺りでタンパク質のもととしてテンジクネズミの一種が好まれている話は、僕も全く知らない訳では無い。この土地の子供の死亡率の高さの原因の一つは、慢性的な栄養不足があげられる。特に高地になるとタンパク質が絶望的に乏しいのだ。

あの「ヒマワリの種」が好きなアニメキャラみたいなのが地球のアンデス山脈一帯では祭りの御馳走だったりして、丸焼きだったり、フライになっていたりする。それはこの辺りも事情は地球と同じらしい。あの小動物は貴重なタンパク源なのだ。

「あれか、かまどの影のあたりでクイクイって鳴いている、小さなモコモコした生き物だね？」
「ええ。排泄物の処理を考えると、かまどの側で飼うのは好ましくないと思われますが、寒冷地ではそうも言ってはおれないのかも知れませんな」

確かに高地の朝晩の冷え込みは厳しい。祭りにもならない内に御馳走に寒さで死なれては困るだろう。道中世話になる家々には、リャマ一頭と穀物を渡すことにする。ロバや馬ほどの積載能力は無いが、この辺りでは一番馴染みの家畜ではあるし、性格も穏やかで扱いやすい。

「ともかくも人員も定まったし、機材の手配は出来たわね」
「ルートはほぼ確定できたし、行く先の情報も集まった」

出発前夜はちょっとばかり、落ち着かない気分だった。秋分の日に間に合うかどうかが、一番の心配だったが、地元の事情を知る者たちが「これならば大丈夫です」と言うのだから、まあ、良いのだろう。

「そうそう。もう、良いのよ、やるだけの用意は出来た筈だし」
「でもさ、酸素が薄いとか言う話より、吸血カメムシの方が怖いや」
「サボテンの煮出し液とか消石灰で、きっと大丈夫。かなりの家は費用をこっち持ちで、壁に漆喰を塗って直してもらったはずだし」

壁の補修に使う漆喰も、そういえば生石灰が主成分で、排泄物を媒介とする色んな伝染病の予防には大きな効果が有るのだ。なら、たぶん大丈夫かな。

「モタさんは、大人しいみたいだね」
「寝ているんじゃない？　ヤナオルコの聖地に着いたら、一時的に目を覚ますのかしら？」
「モタさんは大人だし、色々わかっている人だから、開祖さんより細やかに配慮するんじゃないか？」
「実は意識が有るけれど、強いて寝ているとか」
「確かに、そこに寝てるのかなって思うと、ちょっと奇妙な気分にはなるが、彼にデバガメ趣味は無いさ。無いと信じてる」
「貴方がそんな風に言うから、逆に気になっちゃった」
「エミナに気にされちゃうと、モタさんは困るだろうな」
「そうよね。生まれてくる肉体が無いと困るもの」
「だよな」
「あれよね、石の件が片付いてからでいいわよね」
「え？　何が？」
「そのう……」
「ああ、モタさんが生まれ変わる体の件？」

エミナは、コクコクと首を振った。確かに、石の件は大きい。インティプンクで何がどうなるかは分からないが、地元の人たちは「肩の荷が下りたような、胸のつかえが取れたような」気分になれると言っている。それにしても、エミナ？

「どうしたの、真っ赤じゃないか？」
「あのね、ぎゅぅぅうと抱きしめて、おでこにキスして」
「それだけでいいの？　僕は相手がエミナなら、いつでもＯＫだよ」
「それだけでいいの。って言うか、それだけにして」
「そうなの？」
「そうなの。乙女な気分に浸りたいだけなの」

確かに、エミナの脳裏には少女マンガみたいな情景が浮かんでい

る。

「ああ、僕ら、いきなりすぎたのかねえ」
「チョッと、黙ってて」

確かに、今の僕じゃ、こんな焦れ焦れでもどかしくて初々しい展開は無理だな。言葉を発すると、どうしたってオッサン臭くなる。それにしても、こんな雰囲気がエミナは好きだったのか。

「そんな気分の日も有るって事なの」

ああ、さようですか。僕は今更そんな中学生みたいなやり取りは、したいと思わないけどなあ。
あ？あれ？

「グスタフ君、一緒に頑張ろうね」
「ああ、よろしくね、エミナ」

僕が今の格好で中学の制服？　エミナがセーラー服って……ああ、そうか。これはエミナの内面世界の一部なんだな。それにしてもセーラー服のエミナって、月に向かってお仕置きしそうな雰囲気の美少女だな。もう僕もアニメのキャラかなんかになりきっちゃうか、どうせ夢だし。

「僕の心はいつも君の傍にいる」

あれ？　何だっけ、このセリフ、元ネタを忘れた。
学生服でセーラー服姿のエミナを抱きしめる……すごい。ヴァーチャルコスプレ？　脳内コスプレ？

脳内コスプレのおかげで、どこかの緊張がほぐれたのか、欲求が満たされたのか分からないが、気が付くともう朝になっていて、目覚めの気分は爽快だった。

さあ、いよいよ、出発だ。

白い石・7

「ほらさ、僕ってば足が長いから、全行程ロバはしんどいや」
実際そうだから、エミナも突っ込まない。日本人やっていたころより確実に２０センチは長いのだ。
「そうね、私が途中まではプラテーロとカディションに代わりばんこに乗るわ」

港からアイリュ領内に入って、四千メートルちょうどぐらいの高原地帯までは、僕らも馬を使ったが、そろそろしんどくはなってくる。
結局は登山直前のキャンプ地となるスィカスィカ村の人に手紙を言づけて、馬を返しがてら、港で帰りの分の食料をスィカスィカ村に持ってきてもらうように依頼した。無論手紙には報酬としての金銭と、穀物類・リャマ・ロバをちゃんと渡すように伝えたが。僕が担当管理官の意識に集中してのぞき込めば、彼が不正を働くかどうかは一発でわかる。まあ、そんな事はしない清廉な人柄だから信頼もしているのだが。

それにしても、想像以上に高地は冷える。うっかり無防備な姿で外へ出て行くと、たちまち風邪を引きそうだ。吸血カメムシはどうやら新しい漆喰壁のおかげで、お目にかからずに済んでいる。
五千メートル近いこの村で、一日半過ごして、体を慣らしてから登ることにする。

「この寝袋は出来がいいわよね。火の気がなくても、平気で眠れるもの」
エミナは機能的で無駄のない最新型寝袋がお気に入りだが、僕はやっぱり、ちょっと不満だ。

「何が不満？」
「だってさ……」
「あ、わかった。言わなくていいわ」

だって、寝袋は一人用しか無い。当然ミノムシのような恰好で、一人一人別々にベッドに転がって寝るわけで、やっぱり寂しい。寝袋なら普通は床だと思うが、ベッドの方がより寒くないからと村人に勧められて、その村の一番上等なベッドを使わせてもらっている。そもそもが来客用で、村人たちは寝藁の中で寝るらしい。

「新しい毛布を頂いたおかげで、子供たちが凍えずに済みます」

村長の息子の奥さんは、嬉しそうにそう言って、アツアツのトウモロコシのおやきを食べさせてくれた。普段はフリーズドライジャガイモみたいなものと塩だけの汁物以外、何も無いらしい。トウモロコシは特別な時の御馳走なのだ。小麦のパンなんて、見たことも無い村人も多いらしい。

「やっぱりものすごくタンパク質が足りないわ。チーズ、もっと持って来れれば良かったわね」
「干し魚と缶詰が、あまり受けなかったな。珍しがってくれたが」

味に関して頑固な人はどこでもいるが、この地域の人は特に保守的で、なじみの食材以外興味を示さない。自分には関係無いものとして最初から視野に入れないようにしているのかも知れない。それでも時代は変わってきていて、学問さえあれば、この土地から外に出て行く事も可能になってきたと言う意識は多少は有るらしく、賢い子どもだけでも学校にやってみようか、ぐらいの事は考えるようにはなっているようだ。

「隣村に帝国に帰化して、豊かになった人がいる」そうだ。
アイリュ・テツココ両国の心身ともに健康な男子の場合、帝国の直轄領で申請して試験に合格すれば、犯罪歴が無ければ比較的容易に帝国軍に採用される。採用にあたり、帝国は一人当たり所定の金額を両国の政府に支払っている。
「国家ぐるみの人買いだ」と言う反対意見も最近の新聞には出たが、そもそも現地の人間の自発的な行為なので、その論調も下火になっている。
だが、その採用試験を受けるためには、どうしてもある程度読み書きができなくてはならない。

「その隣村の人は十年帝国軍で務めた後、帝国の国籍を取って商売を始めたんです。どうやら上手くいって、村に仕送りしてくれるようなんです。十年は大変でしょうが、かなりの御給金は出るし、服も食べ物も心配要らないと言うじゃないですか。遠い村には大学まで行った人も居るそうで、うちの息子も読み書きを覚えさせて帝国にやりたいものです。そうすれば、村もちょっとは豊かになるでしょうか」

帝国以外の地域の出身者の場合、十年の兵役を勤め上げると希望すれば国籍を取得できる。更に軍隊勤めを継続することは無論可能だが、退職金を受け取って一般社会に出る者や、非常に認定条件が厳しいが奨学金を受けて大学に進学する者もいる。大学を出て再び軍隊と言う事も有るが、それ以外の道に進む者も多い。
大学進学率はまだまだ低いので、大卒者はどの分野に進んでもエリートとして扱われる。
やはり、というか、そうした経歴の者がこのアイリュ領内の村に戻る事は、まず考えられない。

この奥さんも本当は息子を遠くにやりたくないのだ。一度村を出た者は、送金したり援助したりはしてくれても、村には戻らないから。

「村の生活そのものがもっと便利で楽になると、一番いいよね」

「それはそうですが、これだけ平地から離れていますし、土地は痩せていますし、水汲みも一苦労です」

どうやら、この村の人たちは、二十年ほど前までは泉の側に住んでいたのに牧場を作ろうとした領主と、領主と組んだ裏組織の人間によって、条件の悪い高地に追い出された恰好のようだ。この奥さんはこの村生まれで、従兄弟と結婚したらしい。小さな村の人は皆、親戚同士なのだ。物静かで我慢強くて小柄な人たちで、顔つきも皆、互いの血縁の近さを感じさせる。

「子供のころ住んでいた泉の側に戻れたら、それが一番うれしいだろうか？」

「とても綺麗な泉ですが、今は牧場の家畜たちの水飲み場になってしまいました。あの水を自由に使う事が出来たら、本当に助かります」

若奥さんがそう言うと、村長も息子さんも皆頷く。今、水汲みは急な崖を小さな谷川まで下りるか氷河のある所まで登るしか無いらしい。水の確保だけで重労働なのだ。その貴重な水を多少の代価を払っているとはいえ、よそ者の僕らに優先的に振り分けてもらっているのだ。

「高い山に行く前は、ちゃんと水分を取らなくては」

そう言って、特に高山病に効き目が有ると言うコカの茶を勧めて

くれる。高山では脱水症状がおこりやすいものらしい。コカは確かに麻薬であるコカインのもとだが、アイリュやテツココの人々にとっては、なじみの薬草と言う感じの位置づけだ。コカの葉っぱもこの貧しい村ではそれなりに貴重品で、彼らの心づくしだ。

どうやら牧場の設営自体、相当強引で不当だと思われるので、下山したら必ず善処する事を約束して、僕らはまだ暗い中、村を出た。

予想はしていたが、傾斜はかなりきつい坂が続く。ろくに草も生えていない砂礫の斜面だ。やはり溶岩ぽいので、ヤナオルコは火山なのだと実感する。地元の住民は噴火などは全く知らないみたいだから、かなり長く休んでいるのだろうか？

それにしても、方々から巡礼の人が集まってきているのは驚く。皆、それぞれの願いなり事情なり抱えて、聖地インティプンクの朝一番の陽の光を求めて、路を急いでいるのだ。一般の巡礼者の大半は歩きで、ごくまれにロバを見ると、乗っているのは老人一人か、幼児と相乗りした老人だ。いい若い者は歩くべきらしい。

夜明け前の高山における刺すような寒さもなかなかのものだが、やっぱり息苦しさが辛い。

僕もエミナも普通のスピードではとても歩けないので、ロバにしがみついている。登山になれた隊員たちは黙々と歩くのだが、ロバじゃなければペースが合わせられない。皆、タフだ。鳥型のヤタガラスは僕、ケツァールはエミナの、それぞれ肩にとまっている。さすがに空を飛ぶのはしんどい様なのだ。

「陛下、目的地はすぐそこです」

そう、幾人かに励まされる。歩いて荷物を背負っている彼らより、

僕とエミナの方がへばっているのだ。ロバ達は、チビのくせに実にタフだ。特に高地に強いロバとは聞いていたが、改めて大したもんだと思った。

「それにしても夜明けが近いんですな、冷え込みが厳しいですから」

僕は頷くが、声を出して話すのもしんどい。すると一人の男が僕らに声をかけてきた。途中の村々で話に聞いてきた聖地の番人らしい。ロバを降りて後をついて行くと、既に到着していた巡礼たちの座って並んでいるのを通り越して、インティプンクの巨大な石柱二本の前に出た。

「お持ちになった石を、この、一番陽の光があたる場所に置いていただけますか？」

石の柱は思ったよりも大きくも高くもない。日本の神社で大鳥居と言えばどこも二十メートルは越えているかと思うけれど、小さな神社クラスの高さだ。せいぜい高さは五メートルぐらいで、柱の太さは一抱えって感じか？　大型の植木鉢が直径六十センチ程度だから、まあ、そんな感じかな。ほんと、灰色の愛想も何も無いちょっと歪な円柱形の柱だ。もっと浮彫とか模様とか彫り込まれているかと思ったんだが、綺麗さっぱり何もない。二本の柱の間には、てっぺん近くで注連縄みたいに縄が渡されている。

この石の柱を見て、すぐ鳥居を連想したのは、この縄の所為だ。

ともかくも、ここから先は神の領域と言う、結界を示しているのは確かなんだろう。

「なんか、日本の山岳信仰ぽくないか？」

「その注連縄越しに見える部分が、本当の頂上よね」

「そうだな。やっぱり、ヒマラヤ辺りとせってる高さだよな、たぶ

ん」

「あ、ほら、岩場の色が……」

微妙に色が変わり始めた。黒々とした巨大な影と言う感じだったのが、微妙に赤みを帯び、輪郭がはっきり見えてきたのだ。日が昇り始める証拠だろう。

巡礼者たちが、声を上げ始めた。僕の持ってきた石は石の柱の間に作られた階段状の場所の一番上の位置に置かれ、他の皆は僕らに声をかけたあの番人らしい男の指示に従って、二段下がった場所に石を置いて行く。総勢百名ほどが置き終ると、皆行儀よく並んで夜明けの瞬間を待つ。

「おおっ！」

そんなどよめきが上がった。赤褐色に見えていた巨大な岩場が金色に変化した。この場所が聖地とされたのも納得できるような、不思議な美しさだ。

「ティクシ・イリャ！」
「ティクシ・イリャ！」
「パチャママ！」

皆、この土地の伝説を思い浮かべたのだろう。

金色の輝く固まりが急に、真っ黒い岩山に戻り、明るい日差しが射しはじめた。そして供えられた石から、煙のようなものが立ち上るのを見た。

「あっ！」

注連縄の向こうに、人影を見た。真っ白い。だが、それは瞬時に消えた。

ヤタガラスとケツァールは、僕らの肩から飛び出して注連縄の間を通り抜け、高い岩場へと飛んで行った。

「あれを見ろ！」

誰かが上空を指さすので見ると、四羽の鳥が上空を舞っている。

「ヤタガラスとケツァールと、あと二羽は何かしらね」

「コンドルじゃないか？」

「それにしては、ヤタガラスたちと大きさが変わらないように見えるけれど」

朝日の中でくるくると舞い踊る四羽の姿は綺麗だった。

「綺麗だな」

僕が心からそう思って、言葉を口にした瞬間、光る何かが僕の目の前にポトリと落ちた。色の無い透き通った玉だ。大きさはちょうどビー玉ぐらい。

「まあ、なあに、その透き通った石は」

「何だろうね」

「貴方に持って帰ってほしいものみたいだけど、何かしら」

僕が石を手にした瞬間に、鳥たちの舞いは終了した。ヤタガラスもケツァールも戻ってきたのだ。

「その注連縄の向こうに、僕らは進むべきだろうか？」

ヤタガラスに聞くと、否定するように首を振った。かなりエネルギーを使った感じだ。言葉で話せない様なので、テレパシーで話してみる。

（一緒に上空で飛んでた二羽の鳥は、なんだ？）

（我にも分からんが、浄められた想いそのものかもしれんな。あるいはこの地の精霊か。どちらにせよ、グスタフはその透き通った玉を持ちかえるんじゃ。護りの力となり、しばらくはエガス・モタの魂の依り代ともなろう）

（わかりました。私はこちらに移って、しばらく休みます）

（モタさん！）

僕とエミナが見ている前で、エミナの胸飾りから小さな光が飛び出して、その玉に移った。

（エガス・モタが移ったのなら、グスタフが持ち歩き、寝るときは寝所以外の場所に置くんじゃな）

それだけを僕に伝えると、ヤタガラスは鳥の格好のまま意識を失った。力尽きたという感じだ。仲良くケツァールも意識を失ってエミナの肩からずり落ちそうになったので、エミナが自分の上衣の内側に入れて抱きかかえた。僕も見習って、鳥型のヤタガラスを抱きかかえる。鳥の親にでもなったような不思議な気分だ。

人々は注連縄越しに山に向かって拝んだりしていたが、ひとしきり終わったらしい。人の流れは、下界を目指す方に動き始めていた。

「この子達、超高地の上空で目いっぱい動いたから、疲れちゃったのよね、きっと」

「そうだな」

僕らより年かさかもしれない、人では無い存在に「この子達」と言うのは少々変だが、エミナのそう言いたい気分も十分理解できたので、僕は素直に頷いた。

「でも、あれね」

「何？」

「私、モタさんに気を遣わせちゃったのかしら」

「それはそうなんだろうが、モタさんがエミナを母親に選んだんだ

から、当然と言えば当然の配慮だ」

さあ、これで遠慮なく……と思ったら、エミナに睨まれた。それから、声を立てて笑われてしまった。

エミナがなぜ笑ったのか事情がわかるのは僕らだけだから、他の皆はあっけにとられて、笑うエミナとちょっと憮然とした僕の顔を互いに見比べて、首をひねるしか無いのだった。

白い石・8

山道を降りて、再びスィカスィカ村に戻ったら、ぐったりした。若奥さんは病人用に取っておいたらしいアヤラという穀物で僕とエミナに粥を作ってくれた。恐らく日本でも健康食材として注目されていたキヌアと全く同じものだと思う。

キヌアはＮＡＳＡが注目して研究するぐらいアミノ酸バランスが良く、ビタミン・ミネラルも豊富な穀物だが、収穫期は上半期で、秋は品薄のはずだ。こんな所からも、気温や土壌の条件が地球のアンデス山脈の高原地帯に似ているのが伺える。

「この辺りでは、疲れた時はこの粥が一番だと言います」

お産の前後の女の人にも食べさせると言う。癖のない穏やかな味で、何にでも合いそうだ。エミナが言うには、これで植物としてはホウレンソウに近いそうだ。美味いが一粒一粒が直径二ミリかそこらで、脱穀なんかも面倒そうだ。村の人達は僕らのために下界の方で果物を仕入れてくれたようだった。ビタミンの補給になるんだろうと思う。彼らにとって大変な貴重品なのに懸命に勧めてくれる。

「港からうちの村へのお使いの人は、途中の村まで来てくれているそうで、沢山ご褒美を頂けると伺いました。ありがとうございます」

本当に素朴で善良な人達だ。だから悪い奴らにやられっぱなしだった所も有るわけだが……僕はこの村の人たちに、もうちょっと希望を持って生活してもらえるように、ちょっとぐらいは手を貸したい。本当はかつての牧場になってしまった場所を買い戻す計画を考えているが、このスィカスィカ村の人がすんなり元の土地に戻れるかどうかは、まだ、はっきりしていない話なのでそれは伏せてある。

彼らは僕が皇帝をやっている国の国民では無いけれど、今までの経緯からすると、僕にも多少の責任はあるのだと思う。

熱心に勧められたので、ともかくも僕もエミナも見慣れない果物の数々を食べてみた。甘いトマトとか、果肉がふかしたカボチャみたいな実とか、トケイソウの仲間とか、食用ほおずきとか、小さなかんきつ類とか、僕が知らない果物が実に様々揃っている。

「お？　柿か」

「ミズホから持って来られた苗木が育って、最近ようやく美味い実が取れるようになったそうです。知り合いから貰ってきました。ミズホの物なら、きっとお口に合うと聞きまして」

「ありがとう」

まだ、市場などで売るほどの収穫量は無いらしい。柿を食べたこの土地の人たちは美味いと感じたようだから、将来は有望かも知れない。そういえば、以前柿はミツケリでも人気が出てきたと聞いたし、ドーンでも栽培が始まったと言う話を聞いた。地球でも柿は世界的に人気が出てきていたが、ルンドではもっと人気が出るかもしれない。

「この、種が一杯の果物、良い感じの甘さで凄くおいしいのね」

トケイソウと言うかパッションフルーツの仲間なのは分かったが、橙色の皮を割ると、出てくる緑色の小さな種が一塊になった様子がどう見てもカエルの卵みたいで、僕は手を出しそびれていた。エミナが半分僕の口に放り込んだので、食べたが……予想外に美味い。

「爽やかな味で、ちょっと癖になるな」

エミナが言うには種ごと食べられるものなら、ミネラル補給に向いていると言うので、もう一つ食べた。

子供たちが一番喜んでいたのは、果肉がふかした甘いカボチャかサツマイモみたいな味わいの果物だ。外側は緑のミカンみたいな感じだ。チョッと香りに癖が有るが「病み付きになる」美味しさらしい。アイリュの皇帝にも献上されていた高級品のようだ。そっちは主に子供たちに食べてもらった。おかみさんたちはおしゃべりしながら食用ほおずきを食べて、皮をかまどの所で飼っているチビな家畜にやっている。おかみさんたちによれば、新鮮な野菜か草か果物をやると、この小さな生き物たちの調子は良いらしい。

「無駄がないのねえ、エコねえ」

確かに、全く無駄がない。

僕らは村の人に不人気らしい干し魚と、魚の缶詰を食べ、彼らの小さな家畜の丸焼きは遠慮した。

「子供たちも年末の御馳走を、楽しみにしているんだろう？　僕らはこっちの方がなれているから」と伝えると、申し訳なさそうにしたが、断って正解だろう。僕は……あの丸のまんまの焼いたのがデーンと出ても、ニコニコ嬉しそうには食べられないだろう。それはやっぱり、貴重な食料の御馳走に対しても、飼育した人にも調理した人にも色々と申し訳ない事だし……

子供らは「月に一度は肉が食べたい」らしい。そして「学校に行って読み書きを覚えたい」そうだ。モタさんの仕事はどっさり有る。有りすぎる程だ。

村を出て、翌日は問題の牧場の番人頭の家に泊めてもらった。そ

して、そこで近隣ではココだけだと言う電話を借りて、持ち主とも最終的な条件を詰めて牧場を僕が買い取ることにした。こんなことが出来るのは管理官から前もってグスタフ港の側に住む領主に、話を通したからだ。

僕は領主の強引なやり方を責めたり、今牧場に住み込んで働く連中のもとの住民に対する態度を咎めたりはしなかった。領主には望む分の代価を支払った。管理官は値切るべきだと言ったが、僕は値切るより、元領主が決してもうスィカスィカ村の人たちに干渉しないと言う確約を、速やかに取り付けることに力点を置いた。

領主たちの身分意識や偏見を再教育するのは難しい。ましてや彼らは僕の直接の国民では無いのだし。僕は僕やエミナに心を開いて温かくもてなしてくれた善良な人たちに、少しでも明るい未来が開ければ良いと願って、少しばかり力添えをするに過ぎないのだから。エミナもそんな僕の考えを支持してくれた。

「貴方は世界一のお金持ちなんだから、牧場ぐらい軽いわよね」

「まあな。ドーンのダイヤモンド鉱山は毎年、僕個人じゃ使い切れない程に富を吐き出すから」

考えてみたら僕は、幾つもの鉱山や企業体の創業者でオーナーでもあるのだった。今や寝転がっていてもそこらの国家予算より多い資金が毎年僕の個人的な口座に入ってくる。それに、たとえそれらの資金を使いきったって、僕は皇帝だから今の所は衣食住には困らない。

「そうなりますと、私達はクビですか？」

番人頭はあわてていた。

「皆、引き続き仕事をしたければしてくれて構わない。近く、監督の役人がここに着任するが、その者の指示には、きちんと従って欲

しい」

僕が出した条件を聞いて、皆、ほっとしたようだ。

「得手勝手な事を気まぐれにおっしゃる御領主より、歴とした帝国のお役人様のおっしゃる事を聞く方が、あっしらとしてもありがたいぐらいでさ」

「もとの村の連中に泉の水ぐらい、使わせてやりたかったんですが、今までは禁じられてましたんですよ」

そんな感想を述べる牧童もいる。人より領主のための利益を産む家畜が優先と言う状況を、牧童たちも常々理不尽だと感じていたようだ。

ともかくも近隣住民の飲み水・生活用水の確保が最重要課題なのだから、その点を徹底させる事にする。

そもそも水が貴重な環境で牛や馬を飼う事自体、かなり無理が有る。気候に適したリャマやアルパカを導入し、もっと多くの人たちに利益の分配がしやすいように……というのは先の話で、ともかくも近隣住民を含めた人間の、飲み水の確保が最優先だ。

それにしたって、課題は山積みなのだ。

僕は正直な話、アイリュとテツココの支配層をどうするかに関しては関与を避けてきた。丸投げだった。だって僕の国では無いし、そこまで責任をしょい込めないと思ってきた。はっきり言って逃げ腰だった。モタさんと言う偉大な社会運動家もいたから、僕がしゃしゃり出る幕でもないと思っていたのは確かだ。

だが、僕のそんな戸惑いとは全く別の認識がなされていたのだ。

イシュカレの孫のタヤウツィンという男が指摘したように、僕がテツココの真の主権者で、それを暫定的に大王に委ねていると言う

受け止め方をされていたのだ。テツココだけではない。アイリュ帝国もどうやら同様の認識だった。エミナの助けも借りて、アイリュの現在の皇帝とテツココの大王、更にそれぞれの周辺人物の意識を、遠隔操作的に覗き込んで確かめたのだから、間違い無い。

何とまあ両国とも、まずい事が起こっても僕にすがれば解決すると認識していて、自分たち自身でどうにかしようと言う意識も意欲も、まるで無かったのにはあきれたが。考えてみれば、僕は両国がミッケリを中心とした勢力に侵略され、民族文化が破壊されるのを防いだ事で、安心してしまった部分が有ったのだと思う。

「そう言えば、生前のイシュカレは元来テツココ大王の臣下であったはずなのに、いつの間にか僕の部下になりきってしまったからなあ。そのイシュカレは僕が真の統治者だと皆に認めさせる為に、恐らくはかなり強引にえげつなく政治工作を重ねたのだと思うよ。彼の中では、そうする事が善であり正義だったみたいだ」

「本当に貴方を神様だと思っていたからじゃないの？」

「そうなんだろうな。まあ、イシュカレが僕を神様だと思い込んだのは、仕方がないとして、いつの間にやら神様規模で責任をしょい込まされたのが、釈然としない」

僕個人としては「統治」には抵抗がある。「管理・運営」程度におさめたいのが正直なところだ。

「釈然としないと言えば、こちらの世界に生まれ変わったこと自体、釈然としないでしょう？」

「それは、そうだが……」

好き好んでこっちに生まれ変わった訳じゃない。このルンドは、そもそもが手違いで来てしまった異世界のはずだった。だが、今は

……

「今は、この世界の事が大切なんでしょう？」
「うん」
「モタさんが来てくれる事になって、良かったわね」
「ああ」

今回の登山はアイリュとテツココの人々の幸せについても、僕は深く責任を感じなくてはいけない立場なのだと再認識する良い機会となったのだった。

「一足飛びにとは行かないけれど、この大地の人々が徐々に豊かになれるように、私達も知恵をしぼらないといけないわね」
「ああ。少なくとも飢える事が無くて、将来に希望が持てる状態にしたいな」

政治的な課題をどの程度、どう弄るか。難しい問題だ。

「貴方が本当に神様だって事になっているなら、神様の命令で色々受け入れさせちゃったら良いじゃない」
「だが、多少は近代化しているから、自分の国の主権を、僕が握っているのはおかしいと思う知識人や、既得権益を損ないたくない連中も多いだろうからさ、悩むんだよ」
「悩んでいたって先には進まないでしょう？　ともかくも皆がご飯を十分食べられて、全部の子供が学校に通えるようにしなくちゃ。その為の措置だって、皆が納得できれば良いと思うのよ」

エミナは僕の神様としての権威と、モタさんの名声を思い切りアピールして利用しろと言う。その上で……

「国連の信託統治か、第二次大戦後のアメリカによる日本占領みたいな手法を取りましょうよ。今回の登山隊のメンバーを見る限りでは、それなりにこの地域に縁もゆかりも愛着も有る人材を、貴方は抱えているんだし、十分活用するべきだわ」

確かに、良い考えだと思われる。近代的な武力と経済力を背景に、速やかに旧態依然とした非効率的な政治機構を一挙に改めるのは、実現可能な案だ。だが、占領軍か……

アイリュとテツココに駐留軍を配置し、その武力を背景に腐りきった支配構造を改変し、社会的な基盤を整備して行くのは大変な事業だ。それに、他国に大量の軍を配備する事に僕としては道義的に違和感を覚えてしまうのだが……

「貴方は『黄金の髪のパカヤカシック』として信託を受けたのだから、法的・道義的根拠は有るわ」

「なるほどね」

確かに、そういう解釈は出来るのだ。何よりエミナのその言葉は、僕の気持ちをうんと楽にしてくれた。

「国会を開いて、憲法を作るぐらい出来そうじゃない？」

「そうだな。国会が必要だな」

国会が機能し始めたら、占領軍の引き上げ時、なるほどそれは良い考えだ。ものすごく大変そうだが、実現不可能では無いだろう。小さな民族グループが乱立するドーン大陸と違い、アイリュ・テツココと言う曲がりなりにも国家としてのまとまりを保ってきた地域だからこそ、行政区分も明確に出来るし、国会も開きやすい。

「まずはインフラ整備で、分かりやすくて目に見える形で成果を示

しつつ、スピーディーに行きたいわね」
「分かりやすいと言うと、道路とか水道あたりか」
「そうね。でも資金の問題が出てくるかしら」
「この土地の鉱山をしっかり管理経営すれば、かなりの資金は出そうだけどな」
「ドーンでの実績が、生かせそうじゃない？」
「ああ。確かにそうだな」
「帰ったら、良くラルフさんとも相談しないといけないわね」

それから僕たちが無事に帰国したのは言うまでも無い事だが、本当に大変なのはそれからだった。

結局、僕らが帝国に戻って半年後、あの牧場の番人頭はスィカスィカ村の人達に対する威圧的、差別的な態度が改まらないので、牧場を出て行かせることにはなったが、他の者達は帝国の管理官の監督下で、村人を迎え入れて平和に共存して暮らしたのだった。そして子供たちは皆、学校で読み書きを学べるようになったし、月に幾度か肉を食べられるようにはなった。僕らは子供らの為に学習に必要な用品を贈った。特にパステルと色鉛筆は喜んで貰えたらしい。

子供たちは僕たち夫婦に手紙と絵を送ってくれた。どの絵も明るい希望を感じさせるもので、僕としては少しホッとした。まだまだ先行きは厳しいが、子供たちは明るい未来を信じてくれているのだ。

「ま、プラテーロはみんなに花輪を作ってもらったのね」

あの土地特有の民族的な衣装を着た子供たちと、野の花の冠を頭に乗せたロバのプラテーロの絵は、エミナをひどく喜ばせた。そこには霊峰ヤナオルコに見守られながら、家族や身近な人たちと暮ら

す平和な生活の楽しさと喜びがあふれていた。

白い石・9

僕らは帰国してすぐから進駐軍の編成に取り掛かり、各方面の専門家を召集して統治に関する基本的な政策と理念を作り上げた。それからの具体的な行動は実にスムーズだった。これも僕が一種の神話的な存在と言うか神として、あの土地の人々に認識されているからだろう。僕が神話的・伝統的な権威を持たないドーン大陸で同じ事を行なおうとしても、恐らくなかなか難しいのではないかと思われる。

もともとアイリュやテツココには、あまり闘争的ではない穏やかな人が多いせいか、テオレル帝国軍を駐留させて国会開設を視野に入れての信託統治も、あまり大きなトラブルにならなかった。最高司令官以下、軍の要所要所に現地と関わりの深い出自の者を配したのも、功を奏したんだろう。

「最高司令官様はもともとアイリュの皇家とテツココの王家の御血筋でいらっしゃるから」とか「あの連隊長様はウチの村の人の孫にあたる人だ」とか言う具合で、伝統的な権威や地縁・血縁の強さを利用して、よそ者だと思われないように配慮したのが良かったのだと思う。軍の全体構成ではアイリュにもテツココにも縁がない出自の者の方が多いが、皆日常会話程度の現地の言葉は修得している。

一番大変だったのは熱帯雨林での金鉱堀りの連中を中心とした争議だ。

僕が専門家を入れて調査させる以前から、ジャングルの奥に大量の金が眠っていると言う噂は有り、砂金の形でその一部は市場にも出てきていたが、人間一人分の重さは有ろうかと言う巨大な天然の金塊が発見されて以降は無法者が大量にジャングルの奥に潜り込み、

勝手にジャングルを掘り崩して、相当な面積が月面クレーターのような状態にされてしまった。以前はミッケリ系の犯罪組織と結びつき、そうした組織の下請けとして一応それなりに秩序だった動きをしていたが、僕がそうした組織の骨抜きと弱体化を図ったおかげで、密林のならず者連中はかえって凶暴化したともいえる。

ジャングルは破壊されると復旧に時間も手間もかかるのも大きな問題だが、一番の問題は密林の奥で静かに暮らしてきた少数民族グループに対する日常的な残虐行為の方だ。幾つかの少数民族の首長たちは、僕に助けを求めてきたのだから、僕としてもその声に応えないわけには行かなかった。

それにしても、実にやり口がえげつなくて、潜りの金鉱堀りの連中のやり方は強盗と変わりない。先住民族の集落には問答無用で火をつけ銃を連射し、はなはだしい時は闇で仕入れたダイナマイトなどの爆発物を仕掛けて強制排除するのだ。

「人の土地を荒し森を破壊するだけでも怪しからんのに、人を人とも思わない態度は許せない。如何なる民族、いかなる肌の色、いかなる宗教であろうと、人を殺害したものは当然ながら殺人犯だ」

この僕の主張は、大半の帝国国民には受け入れられたと思う。僕はテオレル帝国本国、ドーン大陸、ミズホなどのラジオでも新聞でもスポンサーとなって、人種差別撲滅キャンペーンを大々的に行わせた。

先住民グループの先導で近代的な装備を整えた軍隊は、凶悪化した金鉱堀りの連中をどんどん捕獲した。かれらと共に行動させられていた女性や未成年者たちは本人の希望により、出身地なり新大陸なりで職業教育を受けさせた。大量虐殺を率先して行ったようなものは、法に基づき死刑となった。犯罪が軽微なものにとどまる場合

は、やはり職業教育を受けさせた。それにしても……

「噂には聞いていたが、凄い埋蔵量だな」

ラルフ・ヤングが密林地帯から発見されたしっかり六十キロを超える天然の金塊を見て、あきれたような、いや呆れた声を出した。相変わらず頭脳明晰で矍鑠としているが、やはり歳月はそれ相応の作用を彼の上に及ぼしていて、髪はすっかり白髪だ。そして、もう曾孫がいる。

「地球と同様の状況みたいだよ」

「なら、恐らく凄い埋蔵量でしょう。きちんと管理しないと厄介な事になりそうですなあ」

「今、平和に少数民族が住んでいる熱帯樹林で覆われた丘も、金の大鉱脈の真上だと分かったが、当分秘密にしておこうと思う。彼らには希望に近い代替地を用意して、移住して貰う事にした」

「問題個所は帝国軍ががっちりガードするんですね？」

「そうしようと思う」

「先住民のグループは、その条件を受け入れそうですか？」

「ああ。彼らに好まれる場所をちゃんと用意できたから、大丈夫だよ。部族の代表者は僕の提供する土地を気に入ってくれたようだった」

深い井戸を掘って生活用水は確保し、僕が購入して密林状態のままに保って有る土地に囲まれた高台の土地を提供する予定だ。雨期でも水没しない高さは十分に確保できているはずだし、彼らの主食であるマンジョーカと蛋白源である淡水魚を手に入れる条件も整っている。

僕は僕の特殊能力をフルに動員して、部族の代表者と電話越しに

ではあったが、直接彼らの言語で会話をして諸条件についても説明した。超遠距離の場合、電話越しだと僕の波動は上手い具合に相手に作用を及ぼせる。正直言って大陸間の海底ケーブルの敷設は大変だったし、多くの費用もかかったが、やっただけの事は有ったと言う訳だ。無線通信の方も増強されてきており、密林地帯の情報網も、この数年で大きく状態が変化した。

「代替地はそれで良いとして、金鉱に対する権利関係をどうするかですね。無視すると言うのも有りでしょうが、それは陛下の主義に反するんじゃないですか？」

「ああ。一応説明したよ。そして今の村の連中の孫の代になったら、きちんとした形で権利関係を話し合おうと言う事になった。孫たちの世代は恐らく学校教育をちゃんと受けるだろうからね」

アマゾンに該当するエリアの豊富な地下資源をどの程度掘り出すか、あるいは温存するかは、なかなかにデリケートな問題だ。かつてスペインが新大陸の金銀を大量にヨーロッパに持ちこんで、経済を混乱させた時のような馬鹿げた事をするつもりは全く無い。開発が必要であるとしても自然破壊や鉱毒、労働環境についても万全を期して開発したい。

「既に禿山にされた場所は、鉱山としてちゃんと管理運営して行こうと思うが、他は温存しようと思う」

「それで十分でしょう。こんなとてつもない金塊が出るんだから、当分資金は足りますよ」

ラルフさんに見せた六十キロ級の天然の金塊の金含有量は五十キロを余裕で超えると言う凄さだ。一旗あげたい食い詰めた男たちが眼の色を変えるのも、無理からぬ部分は有ったのだ。ただ、血みどろの殺戮行為の末に見つかったものなので、素直に喜べないが。

僕の知らない内に、ずいぶん多くの少数民族が滅亡したり，滅亡一歩手前まで追い込まれたりしたのだ。

「傷つけられた人々と森を癒すのも、僕の仕事なんだろうな」

「陛下がいくらすごい人だからって、一人で背負いこんじゃいかんですよ。進駐した軍の連中や各港の管理官たちだって、それぞれ立派に仕事は出来ますから。背負い込むんじゃなくて、うまく割り振って乗り切って下さいよ。今度生まれた皇子様が大人になったら、きっと大いに働いてくれるでしょうね。でも……そのころになると、俺は土の下かな」

僕は、ラルフさんの言葉を否定出来なかった。こうして歳月も、人も、僕の側を通り過ぎていくのだ。でも、僕は随分ラルフさんに助けてもらったし、ラルフさんの事は忘れない、ずっと。それだけは確かだ。

エミナが二人目の息子・マテウス・フェリクスを無事に産んだ頃には、もう進駐軍はそれぞれの土地で任務を遂行しつつあった。テオレル帝国風というよりは、レイリアの貴族のような名前は彼の前世を考慮してつけられたものだ。僕とエミナの息子なのに殆ど黒に見える濃い褐色の目と髪と言うのもちょっと驚いたが。

「あの白い石が作用したのかも知れんな」

ヤタガラスにはそんな事を言われた。出産祝いに珍しく駆けつけてきてくれたモナも同じような事を言う。モナは珍しい事に人型を取って、生まれたてのマテウスを抱き、うれしげに笑った。

「ユリエもセルマも黒い山の霊力を借りて全ての穢れを浄化できた事を喜んでいるのだきっと。この子がこれから為そうとする大変な

仕事にも力を貸す事になるんだろう」

モナがそういうと、マテウスは確かに頷いたのだ。よちよち歩きを始めていた開祖の生まれ変わりのフレゼリク・グスタフソンの方は、ちょっとしかめっ面をして弟を見たが、小さな手を差し出して赤ん坊の弟と握手した。

「ねえ、フレッド、何で顔を顰めたの？」

英語でのエミナの問いに対するフレゼリク・グスタフソンの答えが笑った。周囲の人間に聞かれると不都合な事は、僕ら家族は英語で話す。それにフレッドはルンド以外のどこかに行く可能性が高いのだから、色々な言語に慣れておいた方が良い。英語は時空管理局の存在する時空でも、どうやら影響力の強い言語で有り続けるらしいから、と言う理由も有る。

「こいつ、チビなのに、中身はオッサンだ。仲良くはするけどさ、ちょっと嫌だな」

幼いころの僕とうり二つの顔で、また顔を顰める。そんな表情をしても可愛いが。

「そうだな。前世のフレッドはお世辞にも大人とは言えない状態だったみたいだものな。マテウスは聖人様の生まれ変わりだから、そりゃあ魂が大人びていて当然だ。あんまり眉間に皺を寄せると、変な跡がつくぞ」

僕はチビな元開祖様を抱っこして、眉間の皺を指でそっと伸ばしてやった。

「でも、フレッドにはフレッドの良い所が有るんだから、あんまり気にしないでいいのよ」

エミナの言葉に、フレッドは頷いていたが、僕の顔を見てこんな事を言った。

「おやじさん、あんまり昔の女の事は気にしなくていいよ」

するっと僕の腕から降りると、またトコトコと勝手に庭の方へ出た。エミナもヤタガラスもモナも、あっけにとられたような顔になり、それから爆笑した。

「よかったのう、グスタフ。開祖のお墨付きが有って」

モナはそう言うとまた笑う。僕はどういう顔をすればよいのか困ったが、マテウスを抱っこして笑いたい奴には笑わせておくことにした。するとマテウスがぐずり始めた。

「あら、おっぱいね。待っていて頂戴」

エミナは慣れたものだ。エミナが産んだ二人の息子には、乳母の乳を飲ませるよりエミナ自身の乳を飲ませるべきだとヤタガラスもモナも言うので、そうしている。僕はあの乳母だったドロテアに酷い目に遭わされたので、エミナの方針に任せている。皇后が初乳以外の乳を与えるなど前例が無いとか、見苦しいなどと言う輩も死に絶えたし、母乳を与える医学的な意義も研究が進んだ。その一方で、まだ人工乳の研究が不十分であるので、トリアでは母親自身による母乳育児が上流階級でも一般的になりつつあった。

「フレッドはおっぱい、どうする？　飲む？」

マテウスがしっかり飲み終わった後、エミナは後ろで様子を見ていたフレゼリク・グスタフソンに声をかけると、中身は元開祖の彼はまた眉間に皺を寄せて、一瞬考え込んだ。

「ありがとう。もういいよ。今日からおっぱいは卒業する」

「一歳児が自分で断乳宣言しなくたって良いのに。良いの？　本当に」

「やっぱり、男には引き際ってものがあるだろ？」

エミナは爆笑し、それにつられて皆も笑った。

「おやじさん、俺の言うこと、可笑しいか？」

「いや、立派だと思うぞ。だが、一歳児が言うと確かに奇妙ではあるな」

笑いをこらえた僕を、じっと見ていたが、ため息をついた。

「おやじさんも、本当は笑いたいんだろう？　なら、笑えばいいさ」

「すまん。僕だってフレッドと同様に変な一歳児だったんだ。でもさ、そんなに流暢にはしゃべれなかった」

「おふくろさんのおかげだよ、きっと」

何というかまだ、柄の悪いあんちゃんのような言葉遣いだが、前世の言語能力をフルに活用できるのはエミナから受け継いだ力なのかもしれない。

「あー、それもあるけどな、おっぱいが特別なんだ、たぶん」

どうやら他の女性の母乳の味はエミナの物ほど良くないのだそうだ。そして、エミナのものは飲んだ後、非常に満足感が有るらしい。

「留守中何が嫌だって、おっぱいが不味いのを我慢しなきゃいかんのが、嫌だったぜ」

僕は大真面目に、一歳児が眉間に皺を寄せて語る言葉を聞いている。

「まあ、そうなの？　なら、弟に無理して全部譲らなくても良いじゃない。ね？　時々は飲みにいらっしゃいよ。まだ、二歳ぐらいまでだったら飲んでたって、普通だと思うわよ」

エミナの言葉に、一歳児は真剣に悩んでいる。

「そうかな？」

「そうよ。御食事も色々食べられるようになるけれど、一日に一回ぐらい、飲んだって良いんじゃない？」

「じゃあ、時々、お願いしようかな」

「では、そうしましょうね」

僕の手からエミナに渡されたフレッドは、一歳児らしい愛らしい表情に戻って笑った。

エミナは夜中の授乳のために起きて、隣室のマテウスの部屋に行く。それではエミナが大変だからと思って、僕一人が別室に寝ると言う事も考えたが「夫婦は運命共同体だっていう実感が欲しい」というエミナの言葉ももっともだと思ったので、この形に落ち着いた。エミナは静かにベッドを抜けるから、僕は熟睡して目覚めない事も有る。

「あれ？　僕、今何かしゃべったかな？」

授乳を終えたらしいエミナがベッドに潜り込むと、僕ははっきり

目が覚めた。
「何か、夢でも見ていたみたい。『わかった』『ありがとう』『よろしく』……そんな事を言っていたわ」
「そうか。そんな事を言っていたのか」
「ええ」

エミナは僕の顔をじっと見つめた。それから優しい顔つきになってフワリとした笑みを浮かべると「お休みなさい」と言って眠りに入ったようだった。僕もそれに合わせて眠りに入ったようだったが……

「グスタフ様」
「グスタフ様」

あ……ユリエ、セルマ、いや他にもいるな……アネッテ、アンニカ、ガブリエル？！

「皆でお手伝い致します」

あ、チャスカ！　まるで巫女の様な姿だ。
何か白い光が大きく広がって、弾けた。

「綺麗だ」

気が付くと、僕はエミナに抱きしめられてた。

「おはよう」

僕の挨拶に対して、エミナは柔らかな笑みを返した。
エミナの顔はあの白い光と同じ、綺麗な光に輝いているように見

えた。

僕は新鮮な、そして厳かな気持ちでエミナにキスをした。

（終）

白い石・9（後書き）

今回の話は、これにて終了です。

初めてのハロウィン

「おやじさん、ルンドでもハロウィンぐらいやったって良いと思わね？」

この世界、ルンドの暦で明日は十月の最終日になるという日の夕食後、フレッドがそんな事を言い出した。

「ハロウィン？」

「開祖の時代には出来なかったんだけどさ、今じゃカボチャだってカブだって良いのが有るし、キャンディーだってクッキーにチョコレートだって有るじゃねえか」

どうやら開祖皇帝陛下はハロウィンの御馳走とお菓子が欲しかったのに、ずっと諦めていたらしい。今度、僕の息子として転生したら、かなり状況が変化しているので……確かに、１９世紀のカリフォルニアより美味い食べ物が簡単に手に入るのだから、そんなにやりたいなら、真似事でもやってやろうかという話になった。日本人にとって先祖の霊と交流するイベントはお盆だろうが、ハロウィンを楽しむ人も若い世代を中心に次第に増加傾向にはあったと思う。前世の僕は、コンビニにカボチャを使った食べ物が出回る時期ぐらいの認識しかしていなかったし、思い入れも無かったが。

「前世の母ちゃんは『まともなキリスト教徒がやるもんじゃない』って言って、仮装もさせてくれなかった」

どうやら彼の前世の記憶では「お菓子をくれなきゃ、悪戯するぞ」って言うのは聞いた記憶がないらしい。

エミナは前世でハロウィンの仮装の経験はあるようだ。仮装して、お菓子を貰い歩くイベントの話を聞いて、フレッドは、酷く羨ましがった。

母親の考えも有り、フレッド自身が仮装した経験は皆無だが、近所にカボチャのお化けを楽しそうに作るアイルランド系の移民らしい一家が住んでいて、そこの家のおふくろさんがハロウィンの日に「すっごく美味い」カボチャのパイを焼いて、振る舞ってくれたらしい。お化けや妖精の扮装を楽しんでいたそこの家の子供たちが、羨ましかったとフレッドは言う。

「アイルランド人は妖精と仲良しな人が多いらしいんだ。でも真面目なキリスト教徒の母ちゃんは『異教徒みたいで』嫌だっていうんだ。母ちゃん頑固だったし」

「カボチャのパイも色々有るよ。どんなのが食べたいんだ？」

「え、ホント？　いいの？」

「僕でもエミナでも、作ってやれるよ。何なら今から準備するか？」

「うん！」

こういう所は可愛いもんだ。僕とエミナがプライベートに朝食や夜食を作るのに使う小さなキッチンでパイを作る準備をしようとすると、エミナものぞきに来て、こんな風に言った。

「フレッドの体は一歳児なんだから、脂分とかチョコレートなんかは控えめにね。そうねえ、一歳児でも大丈夫な、お腹にやさしい御馳走を私も考えましょう」

どうやらメニューにはお化けの格好の真っ白い蒸しパンと、カボチャのスープを入れるらしい。

「魔女の指型のクッキー、無理かな……一回だけ貰ってすげえ美味かったんだけど。血塗れ色のポンチは赤いだけであんまりうまいもんじゃなかった」

僕もエミナも日本人であった時の記憶と影響が強いから、余りそういうスプラッタな感じのデザインは考え付かない。そう言えば昔、アメリカ人の家庭で「トマトケチャップまみれの心臓型ハンバーグ」を食べた記憶が蘇った。正直、あまり美味しくはなかったが、アイデアは面白いと思った。悪趣味と言えばそうだが、ユーモラスでもあった。魔女の指型クッキーも、そういう発想のお菓子なんだろう。

「指っぽくフィンガークッキーで形を作って、爪の部分をアーモンドにするか？」

「あ、それ、おいしそう！　それ作りましょうよ」

ハロウィンのランタンも元来はカブだったらしいが、アメリカでカボチャに進化したわけで、フレッドにはそのお化けカボチャのランタンと、カボチャのパイのイメージが強いらしいのだ。

翌日はフレッドに「妖精さん」の扮装をさせてやった。真っ白い上下に、背中に羽代わりの大きなチュールレースのリボン飾りをつけ、頭に昆虫の触角みたいなものをくっつけたヘアバンドというか、そんなものを被せてやった。エミナがデザイン画と言う程でもないが、絵をかき、それをもとに針仕事の上手で早いメイドに作らせたのだ。

「きゃっ、フレッド、可愛い！」

エミナはフレッド本人より大喜びした。せっかくだから写真も撮った。

ルンド初の、幼児のお腹にも優しいハロウィンディナーはこんなメニューだ。執務が休みでもあったので、僕とエミナが全部を気晴らしを兼ねて楽しんで手作りした。

・クリーミーなカボチャのポタージュ
・魚のすり身で作ったコウモリ。色はサーモンピンクだ。
・お化けカボチャ型の柔らかい肉団子
・カボチャと色とりどりの柔らかく煮た豆が入ったサラダ
・真っ白いふわふわのお化け型の蒸しパン。一歳児が手で持って楽しく食べられる。
・真っ赤なベリーのジュースをベースにしたフルーツポンチ。血塗れって感じじゃないが、美味い。
・かなり伝統的なものに近いパンプキンパイ。一歳児のために脂分は控えた。
・魔女の指型のクッキー。軽ーいクッキーだが、リアルな指の形。成型は僕がした。

一歳児はどれも、ほんの少々しか食べられないが、形も色もハロウィンらしいメニューで喜んでくれた。

「折り紙のカボチャお化け、可愛いでしょう」

エミナが日本人であった頃の記憶をもとに、カボチャや魔女の箒、お化けを折ってみせると、フレッドは非常に喜び、エミナと一緒になって、自分も幾つか折ったのだった。だが、一歳児にしてはいささか負担が大きすぎたのだろう。五個目か六個目の折り紙で、うとうと眠り始めたのだ。

「ほら、ねんねして良いけれど、歯だけは磨きなさいよ」

エミナはそういう所は厳しい。かなり苦労して歯磨きが終わると、もう完全にフレッドは爆睡状態だった。

「本当は行列組んで、お菓子を貰い集めたかったのかな」

「まあ、何か、寝言を言っているわ」

寝かせる部屋の準備がきちんと整うまで、ソファーで寝転がっている状態なのだが、確かにフレッドが口を動かして、何かムニャムニャ言っている。

「……と……りっく……おあ……とりー……と……」

僕とエミナは思わず顔を見合わせた。ちょうどそこへ、マテウスのお乳を催促する泣き声がしたので、エミナは行ってしまったのだが。

「お前、そんなに仮装行列がやってみたかったのか……」

僕がフレッドの隣に座って、様子を見ていると、また、何か寝言を言っている・

「……御菓子……を……」

ものすごく幸せそうな顔で眠る一歳児を見ると、来年か再来年辺りから、何か仮装のイベントをやっても良いなあ。そんな風に僕は思ったのだった。

初めてのハロウィン（後書き）

リアルでは無理なので、せめてお話でハロウィンのディナーを楽しみたいと思いまして書きました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2918s/

僕の年代記

2011年10月31日11時56分発行